鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　30

平成25年度発掘調査報告

（第１分冊）

瑞泉寺周辺遺跡

大倉幕府周辺遺跡群

名越ヶ谷遺跡

大倉幕府周辺遺跡群

大慶寺旧境内遺跡

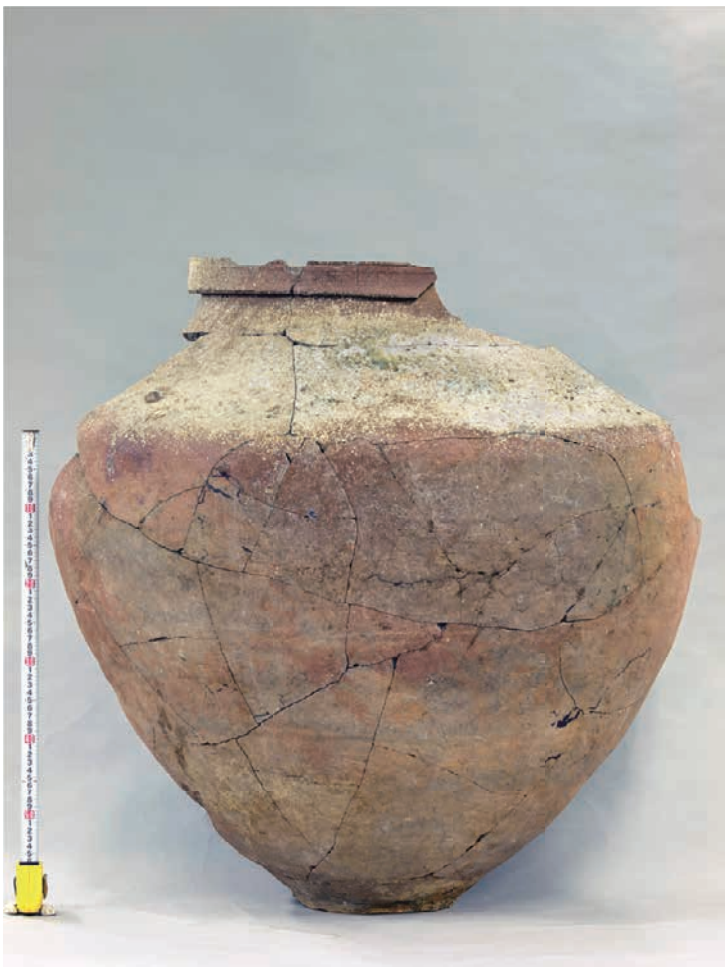
福泉やぐら群

坂ノ下遺跡

平成26年３月

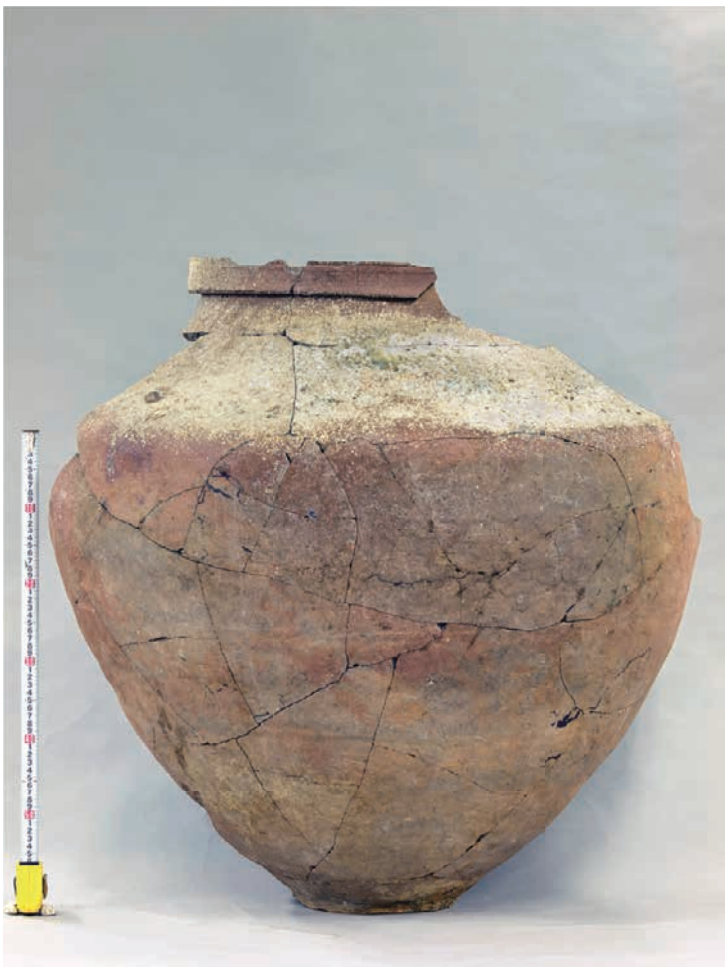
鎌倉市教育委員会

瑞泉寺周辺遺跡（二階堂字紅葉ヶ谷674番１）　第２面全景（南から）



名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1858番４）　第３面イコウ49出土常滑産甕

瑞泉寺周辺遺跡（二階堂字紅葉ヶ谷674番１）　第２面全景（南から）



名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1858番４）　第３面イコウ49出土常滑産甕

ご あ い さ つ

近年､鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます｡その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成17、18、20、21、24年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査の記録として13ヶ所の調査成果を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成26年3月31日

鎌倉市教育委員会

例　　言

1　本書は平成25年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。
2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・別図のとおりである。
3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

（第１分冊）

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ⅰ
例言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ⅱ
目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ⅲ
本誌掲載の平成17・18・20・21・24年度発掘調査地点一覧・・・・・・・・・・・・ Ⅵ
平成25年度調査の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ⅶ
調査地点位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ⅹ

１　瑞泉寺周辺遺跡（No.338）二階堂字紅葉ヶ谷674番１地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

２　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）二階堂字荏柄76番８地点
第一章　遺跡の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第二章　発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第三章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108

３　名越ヶ谷遺跡（No.231）大町四丁目1858番 - ４
第一章　調査地点の位置と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145
第二章　検出した遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 151
第三章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 165

４　大倉幕府周辺遺跡群（No.49）雪ノ下四丁目570番１地点
第一章　調査地点概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
第二章　調査の概略・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第三章　調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
第四章　まとめ―調査地点における滑川右岸の変遷について・・・・・・・・・・・・ 203

5　大慶寺旧境内遺跡（No.361）寺分一丁目943番2外地点
第一章　遺跡と調査地点の概観 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228
第二章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 234
第三章　調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第四章　まとめと考察 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 252

6　福泉やぐら群（No.447）今泉三丁目292番他地点
第一章　遺跡と調査地点の概観 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 273
第二章　調査概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 278
第三章　調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 280
第四章　変遷と年代―まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 298

7　坂ノ下遺跡（No.217）坂ノ下50番3外地点
第一章　本調査地点の位置と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 317
第二章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 321
第三章　発見された遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 325
第四章　発見された遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 334
第五章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 351

（第2分冊）

例言・・・ Ⅱ
目次・・・ Ⅲ

8　玉縄城跡（No.63）植木字植谷戸192番4外地点
第一章　調査地点の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第二章　調査の経過と土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第三章　検出された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

9　上杉定正邸跡（No.188）扇ガ谷二丁目195番2
第一章　遺跡概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第二章　調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第三章　検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第四章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74

10　新善光寺跡（No.279）材木座四丁目579番４地点
第一章　遺跡の概観 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第二章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
第三章　検出遺構と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
第四章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 130

11　若宮大路周辺遺跡群（No.242）小町二丁目364番17
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第二章　調査の方法と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第三章　基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第四章　発見された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154
第五章　調査成果のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172

12　米町遺跡（No.245）大町二丁目2311番５
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第二章　調査の方法と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
第三章　基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
第四章　発見された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第五章　調査成果のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 213

13　田楽辻子周辺遺跡（No.33）浄明寺二丁目５６９番10
第一章　調査地点の概観 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 267
第二章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 276
第三章　検出された遺構と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 281
第四章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 339

本誌掲載の平成17・18・20・21・24年度発掘調査地点一覧

第1分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ▲	瑞泉寺周辺遺跡 (N0.338)	二階堂字紅葉ヶ谷674番1	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	56.00	平成17年11月8日 ～平成18年1月18日
2 ▲	大倉幕府周辺遺跡群 (N0. 49)	二階堂字荏柄76番7外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	33.00	平成18年2月23日 ～平成18年4月25日
3 □	名越ヶ谷遺跡 (N0.231)	大町四丁目1858番4	個人専用住宅 (杭基礎構造)	都市	9.75	平成18年5月1日 ～平成18年6月7日
4 □	大倉幕府周辺遺跡群 (N0. 49)	雪ノ下四丁目570番1	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	32.00	平成18年7月12日 ～平成18年8月24日
5 □	大慶寺旧境内遺跡 (N0.361)	寺分一丁目943番2外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	社寺	56.10	平成18年9月19日 ～平成18年11月2日
6 □	福泉やぐら群 (N0.447)	今泉三丁目292番外	個人専用住宅 (杭基礎構造)	やぐら	63.90	平成18年11月15日 ～平成19年1月5日
7 ●	坂ノ下遺跡 (N0.217)	坂ノ下50番3外	個人専用住宅 (地盤の表層改良)	都市	48.00	平成20年8月13日 ～平成20年9月19日

第2分冊

	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
8 ●	玉縄城跡 (N0.63)	植木字植谷戸192番4外	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	97.50	平成20年4月15日 ～平成20年5月22日
9 ●	上杉定正邸跡 (N0.188)	扇ガ谷二丁目195番2	店舗併用住宅 (地盤の柱状改良)	城館	25.00	平成21年2月16日 ～平成21年4月10日
10 △	新善光寺跡 (N0.284)	材木座四丁目579番4	個人専用住宅 (地盤の柱状改良)	都市	50.00	平成21年4月14日 ～平成21年6月10日
11 △	若宮大路周辺遺跡群 (N0.242)	小町二丁目364番17	個人専用住宅 (鋼管杭構造)	都市	30.00	平成21年4月17日 ～平成21年6月1日
12 △	米町遺跡 (N0.245)	大町二丁目2311番5	個人専用住宅 (深基礎)	都市	55.00	平成21年6月22日 ～平成21年8月31日
13 ■	田楽辻子周辺遺跡 (N0.33)	浄明寺二丁目569番10	個人専用住宅 (基礎工事)	屋敷跡	58.50	平成24年6月14日 ～平成24年7月23日

▲印は平成１７年度実施の発掘調査
□印は平成１８年度実施の発掘調査
●印は平成２０年度実施の発掘調査
△印は平成２１年度実施の発掘調査
■印は平成２４年度実施の発掘調査

平成２５年度調査の概観

平成25年度の緊急調査実施件数は、前年度からの継続調査１件を含む７件であり、調査面積は499.8㎡であった。これを前年度の９件、669㎡と比較してみると件数は２件の減少となり、調査面積は169.2㎡の減少となった。１件の調査面積は平均で71.4㎡（前年度は83.63㎡）であり、１件あたりの面積は前年度よりも減少している。

調査原因は個人専用住宅の建設が６件、店舗等併用住宅の建設が１件である。これらの工種別内訳は、鋼管杭打ち工事が２件（29％）、地盤改良工事が５件（71％）となっている。今年度も鋼管杭打ち工事や地盤改良工事が発掘調査の主体的な原因になっている傾向が顕著にみられた。以下、各地点の調査成果の概要を紹介する。(調査面積及び調査期間等については「平成25年度調査地点一覧」を参照。)

１　公方屋敷跡（No.268）

浄明寺四丁目に位置する。地盤の柱状改良工事を内容とする個人専用住宅の建築に伴い、発掘調査を実施した。調査の結果、14 ～ 15世紀にかけての、かわらけ廃棄遺構、土坑、柱穴、溝を確認した。出土した遺物の大半は、廃棄遺構内出土のかわらけであった。

２　名越ヶ谷遺跡（No.231）

大町六丁目に位置する。地盤の柱状改良工事をともなう個人専用住宅の建築に先立ち発掘調査を実施した。調査の結果、調査区南側の大部分は現代に丘陵裾部を埋め立てた造成土であることが判明した。北側には13世紀後半～ 14世紀代の整地層が複数枚確認でき、面上では浅い溝や小穴などの遺構が検出された。中世の基盤層となる黒色粘土層からは古墳時代前期の土器片が少量出土したが、明確な遺構の発見には至らなかった。

３　若宮大路周辺遺跡群（No.242）

御成町に所在し、鎌倉駅西側を南北に通る御成通りに東面する。地盤の柱状改良工事を内容とする店舗併用住宅の建築にともない、発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀後半から14世紀代にかけての3時期に亘る生活面が確認でき、板壁建物や南北軸に掘られた溝などを発見した。また、内部に腐植した土が多く残る土坑が数基確認され、トイレもしくは肥溜めと思われる遺構も発見された。残存していた板壁建物は、今後の中世鎌倉での建築構造を検討する上で重要な発見であった。

４　小町大路東遺跡（No.233）

大町一丁目に位置する。小町大路の東側、妙本寺の西南に所在する。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。基礎工事の掘削深度は２ｍであり、調査の深度もそこまでにとどめた。それより下には遺跡が保存されている。

調査の結果、13世紀から14世紀にかけての土地利用の痕跡を確認することができた。井戸と方形竪穴建物、多くの柱穴や礎石が出土し、当該地の土地利用の在り方について貴重な成果を得られた。

5　北条小町邸跡（No.282）

雪ノ下一丁目に位置する。鋼管杭工事をともなう個人専用住宅の建築に先立ち発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀前半～14世紀代の整地面が3枚ほど確認でき、13世紀前半には東西溝やこれに並行する柱穴列が検出され、屋敷地を分割する区画施設と考えられる。14世紀代では長方形の土坑が重複して掘られていた。各時期とも、出土遺物はかわらけが大半を占めている。

6　長谷小路周辺遺跡（No.194）

由比ヶ浜三丁目に位置する。地盤改良を内容とする個人専用住宅の建築に伴い発掘調査を実施した。調査の結果、14世紀代の土坑、9世紀代の住居址を確認した。鎌倉における古代集落の広がりを明らかにする上でも重要な調査成果である。

7　今小路西遺跡（No.201）

由比ヶ浜一丁目に位置する。鎌倉市中央図書館の西南にあたる。個人専用住宅の建築にともない発掘調査を実施した。調査の結果、13世紀から14世紀にかけての整地層と、柱穴や土坑が出土した。また中世以前の遺物も少数出土している。

平成２５年度発掘調査地点一覧

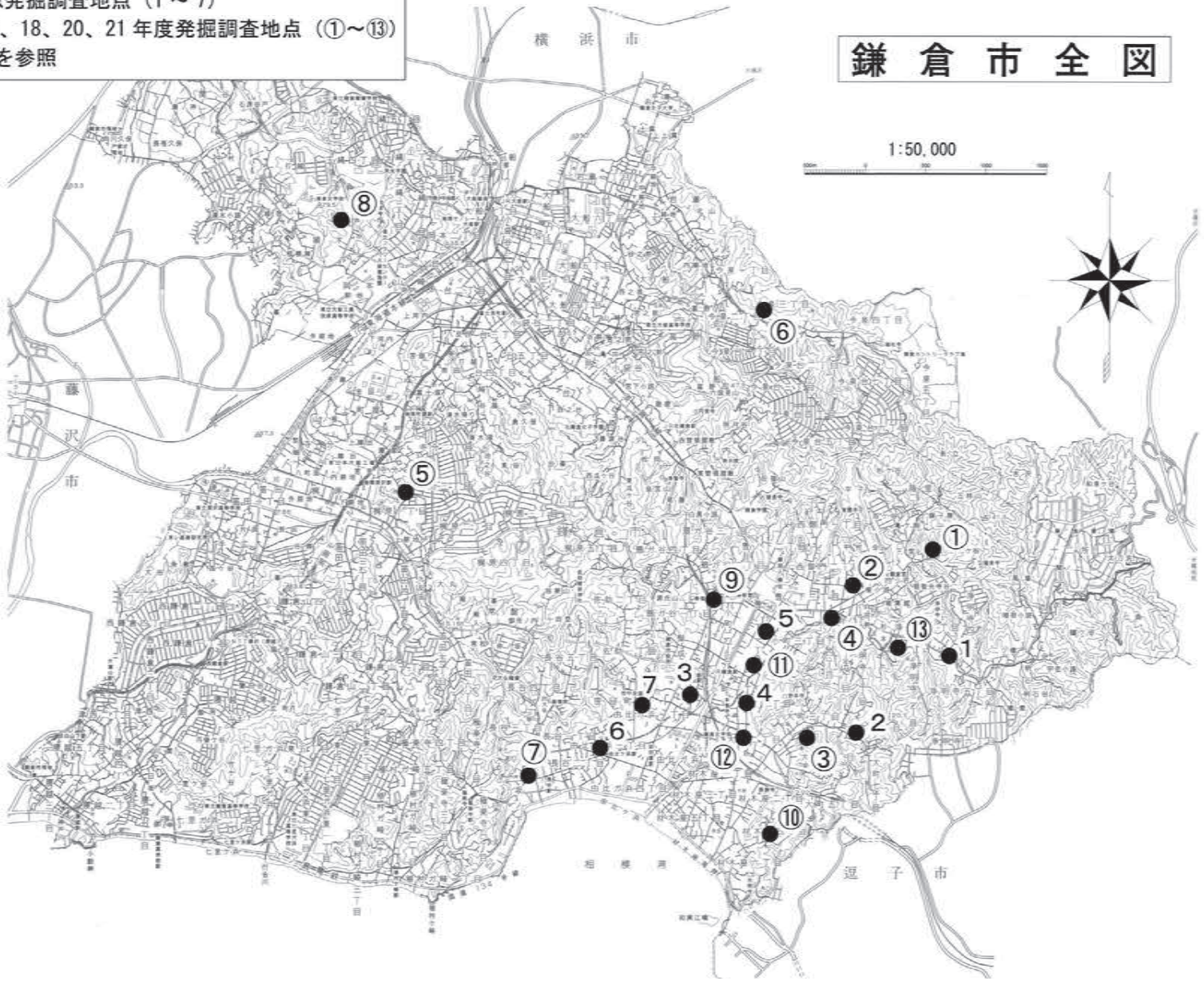
	遺跡名	所在地	調査原因	遺跡種別	調査面積	調査期間
1 ★	公方屋敷跡 （№268）	浄明寺四丁目 292 番 1	個人専用住宅 （鋼管杭工事）	屋敷跡	86.00	平成 25 年 3 月 1 日 ～平成 25 年 5 月 24 日
2	名越ヶ谷遺跡 （№231）	大町六丁目 1506 番 11 の一部	個人専用住宅 （柱状改良工事）	屋敷跡	55.00	平成 25 年 4 月 15 日 ～平成 25 年 7 月 2 日
3	若宮大路周辺遺跡群 （№242）	御成町 773 番 2	店舗併用住宅 （柱状改良工事）	都　市	65.00	平成 25 年 5 月 16 日 ～平成 25 年 7 月 24 日
4	小町大路東遺跡 （№233）	大町一丁目 1147 番	個人専用住宅 （表層改良工事）	都　市	72.00	平成 25 年 5 月 23 日 ～平成 25 年 9 月 6 日
5	北条小町邸跡 （№282）	雪ノ下一丁目 403 番 14	個人専用住宅 （鋼管杭工事）	屋敷跡	41.80	平成 25 年 10 月 10 日 ～平成 25 年 12 月 27 日
6	長谷小路周辺遺跡 （№194）	由比ガ浜三丁目 194 番 71	個人専用住宅 （柱状改良工事）	都　市	140.00	平成 25 年 11 月 1 日 ～平成 26 年 3 月 7 日
7 ◎	今小路西遺跡	由比ガ浜一丁目 160 番 17	個人住宅 （柱状改良工事）	城館跡	40.00	平成 26 年 1 月 14 日 ～平成 26 年 3 月 31 日

★印は平成 24 年度からの継続調査を示す。

◎印は平成 26 年度への継続調査を示す。

平成 25 年度の緊急発掘調査地点（1 ～ 7）
本書掲載の平成 17、18、20、21 年度発掘調査地点（①～⑬）
※遺跡名は一覧表を参照

鎌 倉 市 全 図



瑞泉寺周辺遺跡（No.338）

二階堂字紅葉ヶ谷 674 番 1 地点

例　　言

1．本報は「瑞泉寺周辺遺跡（No.338）」内の一部、二階堂字紅葉ヶ谷674番1地点（略称ZSS0521）おける個人住宅の建築（鋼管杭の基礎構造）にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．調査期間：平成17（2004）年11月8日～平成18（2005）年1月18日　調査面積：56.00㎡

3．現地調査・整理作業の体制は以下の通りである。

調査担当者：原 廣志

調　査　員：須佐直子・太田美智子・赤堀祐子・栂岡渓音・須佐仁和・小野夏菜・中川建二
平山千絵・橋本和之・野崎美帆・山口正紀

協力機関名：鎌倉考古学研究所　㈱齋藤建設

4．整理作業及び本報の作成は以下の分担で行った。

遺物 実測　：須佐（直）・栂岡・原

挿図 作成　：須佐（直）・小野・原

遺物観察表：平山

遺構　写真：須佐（仁）・原

遺物　写真：平山

原稿　執筆：第1章「遺跡の位置と歴史的環境」については松吉大樹氏の原稿を掲載した。
第2・3章は原が執筆し、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。

5．出土遺物、図面・写真などの発掘調査資料は、報告書刊行後に鎌倉市教育委員会が保管している。

6．本報の凡例は、以下の通りである。

挿図 縮尺　：全側図：1/80　遺構図：1/40　1/50　1/60　遺物図：1/3

使用 名称　：本書で使用する用語のうち、「土丹（どたん）」は逗子シルト岩の砂泥岩、「鎌倉石」は逗子市池子層に顕著な粗粒凝灰岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する安山岩で礎石に利用可能な扁平な円礫を指し、表記を簡略化した。

遺　構　図：遺構の標高は海抜高の数値を示している。

遺　物　図：－・－・－は釉薬の範囲を示し、黒塗りは灯明皿に付着した油煙煤を表現している。

7．本遺跡の現地調査から本報作成に至るまで、以下の方々からご助言とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい（敬称略、五十音順）。

秋山哲雄・伊丹まどか・宇都洋平・押木弘己・小野正敏・金丸義一・河野眞知郎・菊川　泉・菊川英政・後藤　健・古田戸俊一・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木庸一郎・玉林美男・塚本和宏・中田　英・中野晴久・根本志保・藤澤良祐・本澤慎輔・松尾宣方・松葉　崇・馬淵和雄・森　孝子

目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5
1．遺跡の位置
2．遺跡の歴史的環境
第二章　調査の概要 …… 9
1．調査の経過
2．測量軸の設定
3．層序
第三章　検出遺構と出土遺物 …… 14
1．第１面の遺構と遺物
2．第２面の遺構と遺物
3．第３面の遺構と遺物
4．第３面下の調査区南東トレンチ
第四章　まとめ …… 35

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡 ……6
図２　国土座標とグリット設定図 ……10
図３　調査区西壁・東壁土層断面図 ……12
図４　第１面遺構全測図 ……14
図５　第１面土坑・ピット ……15
図６　第１面ピット ……16
図７　第１面遺構・遺構外出土遺物 ……18
図８　第２面遺構全測図 ……19
図９　第２面建物１・２、溝１ ……20
図10 第２面建物３ ……21
図11 第２面建物・溝 ……22
図12 第２面建物１・２内、遺構外出土遺物 …23
図13 第２面建物３内出土遺物 ……24
図14 第３面全測図 ……24
図15 第３面建物４・溝２ ……25
図16 第３面土坑・ピット ……26
図17 第３面遺構・遺構外出土遺物 ……27
図18 第３面下調査区南東トレンチ ……29
図19 近隣調査地点対応図 ……36

表　目　次

表１　遺物観察表（１）……30
表２　遺物観察表（２）……31
表３　遺物観察表（３）……32
表４　遺物観察表（４）……33
表５　遺物観察表（５）……34
表６　遺物分類別出土数量・比率表 ……37

図　版　目　次

図版１ ……39
ａ．第１面全景（南から）
ｂ．第１面全景（東から）
ｃ．第１面土坑１（北から）
図版２ ……40
ａ．土坑３（北から）
ｂ．土坑４（南から）
ｃ．土坑５（西から）
ｄ．Ｐ 18（北から）
ｅ．Ｐ ８、Ｐ 26（西から）
ｆ．骨製品出土状況
図版３ ……41
ａ．第２面全景（東から）
ｂ．第２面全景（南から）
ｃ．第２面建物１・２、溝１（南から）
ｄ．建物３（東から）
図版４ ……42
ａ．建物１・２（北から）
ｂ．建物１－１・２－１柱穴
ｃ．建物１－２・２－２柱穴
ｄ．建物１－３・２－３柱穴
ｅ．建物３検出状況（北から）
ｆ．建物３検出状況（南から）
図版５ ……43
ａ．建物３－イ１（東から）
ｂ．建物３－イ２（東から）
ｃ．建物３－ロ１（東から）
ｄ．建物３－ロ２（東から）
ｅ．建物３　中央礎板列（西から）
ｆ．建物３　北側礎板列（西から）
図版６ ……44
ａ．溝１完掘状況（南から）
ｂ．溝１完掘状況（北から）
ｃ．溝１炭化物層検出状況（南から）
ｄ．溝１石組検出状況（西から）
ｅ．銅製品出土状況
ｆ．銅製品出土状況
ｇ．骨製品出土状況
図版７ ……45
ａ．第３面全景（東から）
ｂ．第３面全景（南から）
ｃ．調査区西側遺構群（西から）
図版８ ……46
ａ．調査区北西域遺構群（西から）
ｂ．建物１、溝１（北から）
ｃ．建物１イー１（南から）
ｄ．建物１イー２（西から）
ｅ．建物１イー３、柱穴（西から）
ｆ．建物１イー４（西から）
ｇ．土坑１（東から）
ｈ．土坑４（南から）
図版９ ……47
ａ．調査区南東隅トレンチ（南から）
ｂ．同左東部分
ｃ．西壁土層堆積
ｄ．西壁北側土層堆積
ｅ．西壁中央土層堆積
ｆ．西壁南側土層堆積
ｇ．東壁土層堆積
ｈ．北壁溝１土層堆積
図版10 ……48
第１面・第２面遺構出土遺物（１）
図版11 ……49
第２面遺構出土遺物（２）
図版12 ……50
第２面遺構出土遺物（３）
図版13 ……51
第２面・第３面遺構出土遺物（４）

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置

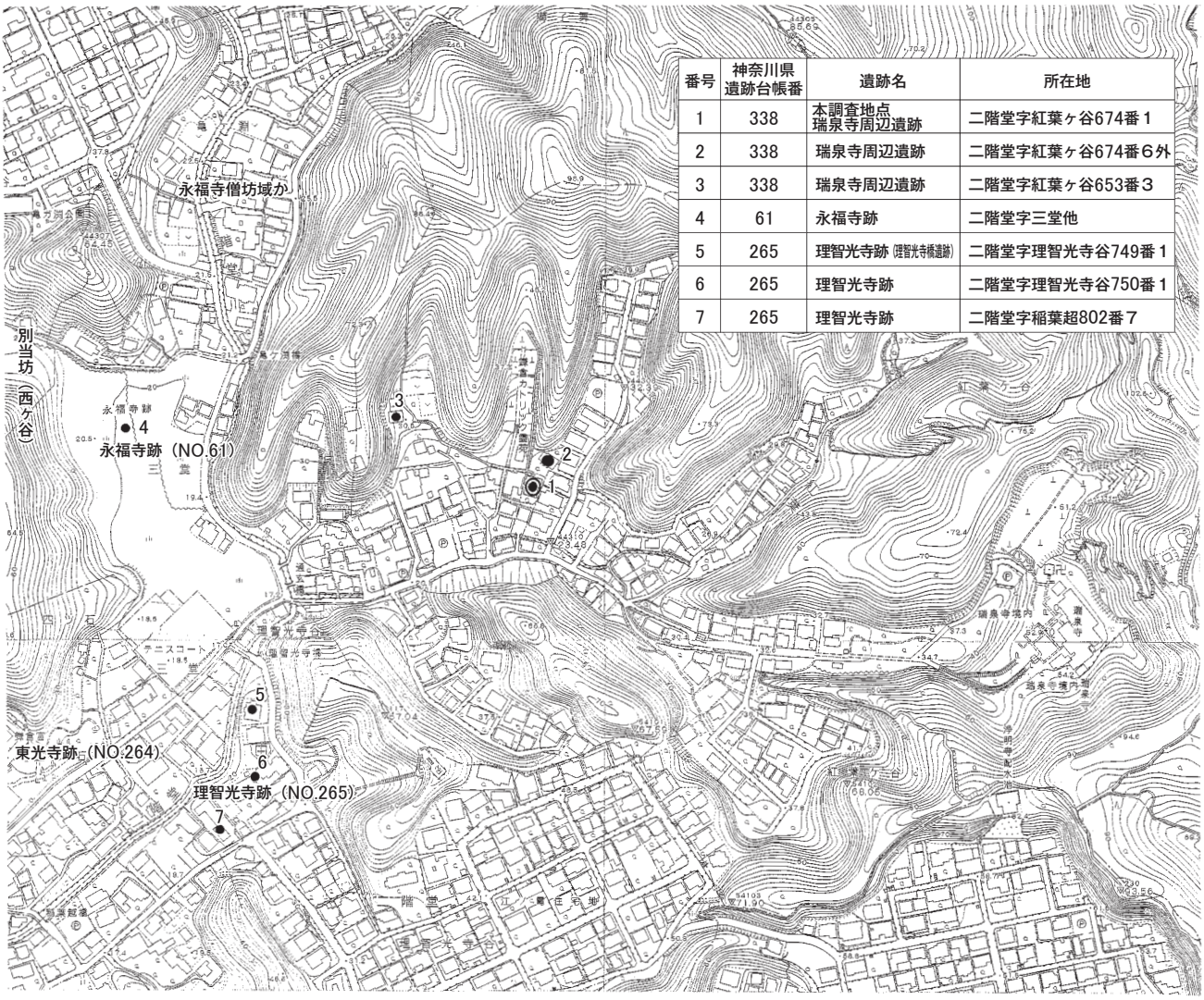
調査地点のある瑞泉寺周辺遺跡は、鎌倉市街地の北東域にあたり、ＪＲ横須賀線鎌倉駅の東北方向へ直線距離にして約2.1ｋｍの位置にあり、鎌倉市二階堂紅葉ヶ谷674番１に所在している（第１図）。この周辺は二階堂川を中心にして谷戸が多方向に形成され、尾根筋も複雑に入り組んでいる。調査地点の谷戸は二階堂川の左岸、紅葉ヶ谷と呼称される一支谷に位置しており、谷戸の開口部は二階堂川に架かる通玄橋から始まっている。谷戸は単一ではなく樹木の枝状に入り組んだいくつかの小支谷を構成した地形を呈しており、谷奥に現在もひっそりとした佇まいをみせる国指定史跡の錦屏山瑞泉寺までの間、東西方向に伸びた谷筋を形成している。この辺の丘陵基盤は第三紀後期中新生～前期鮮新世にかけての堆積層であり、三浦層群に属する逗子シルト岩層と呼ばれている。

ところで、二階堂川右岸には明治２年（1869）創建の鎌倉宮（大塔宮）と、その東側に近接した尾根上には護良親王の墓と伝える石塔が存在している。また周辺には既に廃寺となっているが、鎌倉宮の地は東光寺の旧跡と伝えられる。その西側に残る小字名の「四つ石」は永福寺惣門（四脚門か）が予想され、さらに二階堂川上流の亀ヶ淵・杉ヶ谷までの広い平坦地には「二階堂」（字名三堂や光堂）の地名に由来する源頼朝御願寺の永福寺が、南西方の支谷（理智光寺ヶ谷）には理智光寺がそれぞれ存在していた。

２．遺跡の歴史的環境

瑞泉寺のある紅葉ヶ谷に関する史料は少ない。元徳２年（1330）三月四日付に推定される金沢貞顕書状に「一太閤禅閤去廿五日、石長老の二階堂紅葉谷の庵へにハかに入御」とあり（註１）、北条高時が紅葉谷にあった夢窓疎石の庵を訪れているが、「椙谷を当時紅葉谷申候也」と注されていることから椙谷（杉ヶ谷）との関連性も無視できない。永仁２年（1294）六月十五日付定聖願文に「於南閻浮提大□□国相模国鎌倉二階堂椙谷勝福寺書写畢、東寺流持金剛権律師定聖（花押）」とあり（註２）、二階堂杉ヶ谷に勝福寺なる寺が存在していたことが知られる。しかし年代未詳（元弘２年ヵ）六月廿三日付理覚書状（註３）に「御礼承候了、自杉谷未承候、蒙仰事候ハ、不可有疎略之儀候」と元徳二年三月以降の史料にまだ「杉谷」の地名が使用されていることが見てとれるので、一概に紅葉ヶ谷と杉ヶ谷を結びつけることはできない。また現在の杉ヶ谷は永福寺中心伽藍奥の亀ヶ淵よりもっと北に入って行ったところであり、紅葉ヶ谷とはかなり距離がある。現在の二階堂杉ヶ谷、紅葉ヶ谷を史料の地に当たるかどうかは未詳とせざるを得ない。

瑞泉寺は、錦屏山と号し、臨済宗円覚寺派の浄刹である。『和漢禅刹次第』によれば、五山に次ぐ官寺としての寺格を定めた関東十刹に列したとされる。嘉暦２年（1327）、二階堂南芳庵に住していた夢窓疎石を開山、二階堂道蘊（貞藤）を開基として現在の寺地に瑞泉院が創建され、翌年には観音殿が建てられている。以下『新編相模国風土記稿』所載の寺伝によると、中興開基は初代鎌倉公方の足利基氏で、当寺号にちなみ瑞泉寺殿玉厳道希との法名を持つ。境内は往昔より景勝の地として知られ、鎌倉公方家をはじめとして武士の尊崇をあつめていた。旧境内の塔頭には南芳庵、果証院（尊氏の母、上杉氏塔所）、勝光院（満兼塔所）、長春院（持氏塔所）、祥雲庵、羅漢院、三聖院、妙智院、証悟院、吉祥院、西芳院、東禅院の12院が伝えられるとされ、後に保寿院（基氏の母、清江禅尼塔所）と永安寺（氏満塔所）が塔頭となったとされている。また、これ以外にも永亨５年（1433）に示寂した朴中梵



番号	神奈川県遺跡台帳番	遺跡名	所在地
1	338	本調査地点 瑞泉寺周辺遺跡	二階堂字紅葉ヶ谷674番１
2	338	瑞泉寺周辺遺跡	二階堂字紅葉ヶ谷674番６外
3	338	瑞泉寺周辺遺跡	二階堂字紅葉ヶ谷653番３
4	61	永福寺跡	二階堂字三堂他
5	265	理智光寺跡（理智光寺橋遺跡）	二階堂字理智光寺谷749番１
6	265	理智光寺跡	二階堂字理智光寺谷750番１
7	265	理智光寺跡	二階堂字稲葉超802番７

図１　調査地点と周辺の遺跡

淳の塔所として「瑞泉景福庵」の名が見える。貞治元年（1367）二代将軍足利義詮が住侍通叟和尚と当寺で詩作している。基氏の子氏満もしばしば参詣して観花の詩会を開いている。康暦元年（1379）氏満謀反の噂が広がるが、住職の古天周誓が将軍足利義満の帰依をうけていたため、反心なき旨を記した告文を持たせて京都に送り事なきを得られている（註４）。康暦元年に五山準十刹となり（註５）、次いで至徳三年（1386）には関東十刹の首位に列せられたとされる（註６）。これは、夢窓の法嗣である義堂周信が永享十一年（1439）二月十一日、永享の乱で敗北した足利持氏は瑞泉寺塔頭の氏満墓所永安寺において自害する（註７）。この時、住僧であった昌在西堂は持氏の子永寿丸を連れ甲斐国に逃げかくまった。のちに永寿丸が成氏と称して古河公方となると、その恩に報い毎年２月に当寺参詣を行い（註８）、古河公方の例格の一つに定めた（註９）。最盛期の室町時代前期には永安寺以下の塔頭を持ち興隆するが、戦国期に入ると主な外護者の没落により荒廃を招いた。慶長八年（1603）八月、円覚寺西堂の雲如梵意（佛日庵主）が住侍として入寺以降、円覚寺の末寺となる。境内は国史跡に指定され、本堂裏手の夢窓築造と伝える庭園は国名勝となっている。背後の錦屏山頂に建てられた一宇（遍界一覧亭）は嘉暦三年（1328）に夢窓が建立して以来、屡々名僧を会して詩会が催され、池庭園についてもおそらくこの時期に築造されたと考えられる。

元禄２年（1689）には、徳川光圀が『新編鎌倉志』を編むにあたり、瑞泉寺に上山している。光圀は荒廃していた一覧亭を復興再建して千手観世音菩薩像（市指定有形文化財）を安置したとされる。ま

た永亨年間（1429 ～ 40）建立とされる惣門は、江戸時代建立の本堂（仏殿）や庫裡とともに、大正12年（1923）の関東大震災により全潰している。本堂の背後にある池庭は、昭和44・45年（1969・70）に復元を目的として発掘調査が実施され、夢窓疎石が作庭したと推定される地形と岩盤の美しさをよく活かした庭姿を残している。また裏山には「お塔やぐら」「瑞泉寺やぐら群」がある。

なお本遺跡周辺の武家屋敷としては、『吾妻鏡』に二階堂行政・行村親子が二階堂に邸宅を構えていたとある（註10）が場所については未詳で二階堂氏以外の史料は管見の限り確認できない。

次に発掘調査事例についてみると、本調査地点から西へ一つ谷を挟んだ永福寺側の谷戸になる地点3で発掘調査が行われている（註11）。報告書によると14世紀前葉頃の土地利用で、山裾を削った土・岩塊で前面の傾斜地を埋め立てして平坦地を造成した谷戸開発の形態はみられたが、建物遺構などの痕跡は発見されていない。地点2から13世紀後葉～ 15世紀前半にかけての様相を示した遺物に伴って3時期の生活面（地形面）から礎石建物・土坑・ピットなど共に検出された。遺物は多量のかわらけの他、青磁算木文香炉、瀬戸天目茶碗、瓦質香炉、瓦質土風呂、木製品（箸・折敷等）などの遺物組成がみられたことから寺社塔頭や武家屋敷などの一部の可能性も考えられる（註13）。

先述したが鎌倉幕府滅亡以後も、瑞泉寺は鎌倉公方家などの外護により大いに隆盛した。同じ紅葉ヶ谷に立地する本調査地点も含めた事例は何らかの関わりを持った地域だったかもしれない（例えば瑞泉寺の塔頭）。また浄妙寺周辺に鎌倉公方や上杉氏の屋敷が置かれていたと考えられることから（註12）、それに勤仕する御家人連中の家々も浄妙寺周辺に多く建てられていたであろう。浄妙寺と瑞泉寺は裏山を超えればそう遠くなく（註14）、瑞泉寺周辺の谷戸内でもその影響が及んでいた可能性は否定できないと考えられる。

【註】

1. （元徳二年）三月四日金沢貞顕書状（金沢文庫文書『神奈川県史』資料編2古代・中世2844文書）
2. 永仁二年六月十五日定聖願文（相模寶金剛寺文書『神奈川県史』資料編2古代・中世1157文書）
3. 年未詳六月廿三日理覚書状（『鎌倉遺文』41、3042号文書）
4. 「鎌倉大草紙」（『群書類従』第二十輯　合戦部）
5. 玉村竹二校「扶桑五山記」（『鎌倉市文化財資料』第2集）
6. 「鎌倉五山記」（続『群書類従』第二十七輯下　釈家部）
7. 「鎌倉大草紙」（『群書類従』第二十輯　合戦部）
8. 『新編相模国風土記稿』（鎌倉郡二二　瑞泉寺項）
9. 「殿中以下年中行事」（『群書類従』第二十二輯　武家部）
10. 『吾妻鏡』建久三年八月廿四日条、同建久三年九月十一日条、同元仁元年正月四日条、等。
11. 神山晶子・福田 誠「瑞泉寺周辺遺跡（No.338）二階堂字紅葉ヶ谷 653番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告15』（鎌倉市教育委員会1999）
12. 山田邦明「室町時代の鎌倉」五味文彦編『都市の中世』（吉川弘文館 1992）
13. 松吉大樹・原 廣志「瑞泉寺周辺遺跡（No.338）二階堂字紅葉ヶ谷 647番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告25（第2分冊）』（鎌倉市教育委員会 2009）
14. 浄妙寺東側の胡桃ヶ谷にあったと考えられている大楽寺（廃寺）は、永享元年（1429）二月十一日の永安寺炎上に際し類焼している（「鎌倉大日記」『増補続史料大成』51）。瑞泉寺塔頭永安寺の裏山を超えたところが胡桃ヶ谷であったことからしても、瑞泉寺と浄妙寺の位置関係の近さが窺われる。

【参考文献】

秋山哲雄　2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
秋山哲雄　2013『鎌倉幕府滅亡と北条氏一族』(敗者の日本史7) 吉川弘文館
上本進二　2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『池子桟敷戸遺跡（逗子市No.100)』東国歴史考古学研究所
鎌倉国宝館　1995「鎌倉の古絵図Ⅲ」『鎌倉国宝館図録』第十五集（再販）鎌倉市教育委員会
白井永二編　1986『鎌倉事典』東京堂出版
宗臺秀明・宗臺富貴子　1996『横小路周辺遺跡発掘調査報告書　二階堂字横小路110－3地点　―永福寺関連遺跡の調査―』同遺跡発掘調査団
貫　達人・川副武胤　1979『鎌倉市史　社寺編』鎌倉市史編纂委員会　吉川弘文館
馬淵和雄　1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』第69号 鎌倉文化研究会

第二章　調査の概要

１．調査の経過

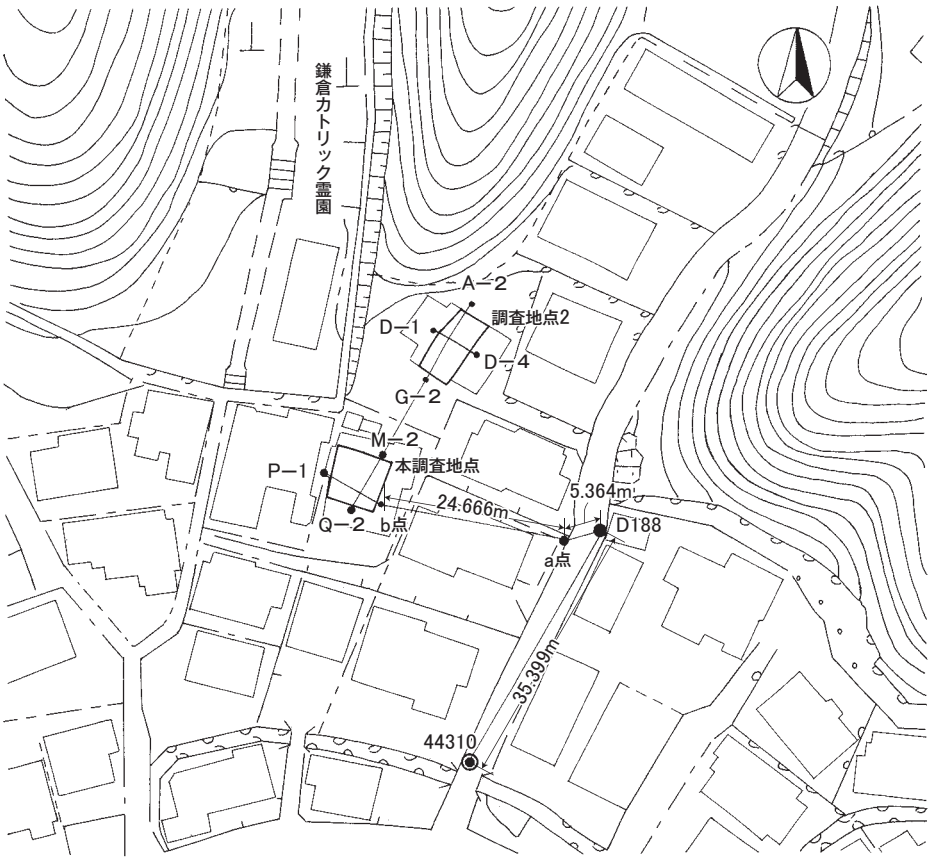
本遺跡は鎌倉市街地北東部、県道金沢鎌倉線（金沢街道）の「分れ路」から鎌倉宮方面へ約800ｍ入った紅葉ヶ谷に位置し、谷戸奥には夢窓疎石作庭の禅宗寺院庭園で有名な国史跡瑞泉寺がある。調査地点は谷戸開口部に近い鎌倉市二階堂字紅葉ヶ谷674番１に所在している。

今回の発掘調査は、鋼管杭の設置による基礎工事を内容とする個人専用住宅建設の計画があったため、工事の実施により掘削深度の関係から埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れのある事が予想された。 このために鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が行われた。その結果、現地下40cm前後まで現代の客土や水田耕土が確認され、その直下から中世遺物包含層を挟んで深さ約１ｍの間に少なくとも３時期の遺構面（生活面）と、それに伴う遺物が出土して具体的な埋蔵文化財の存在することが判明した。これにより当該建築工事の実施による埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。このため事業者との協議を行ったところ、当初の計画に基づき建築工事を実施したいとの意向が示された。そこで文化財保護法に基づく届け出手続きを行い、施工者と調査方法・工程の協議を重ねた結果、平成17年11月８日から約２ヶ月半の予定で発掘調査を実施する運びとなった。

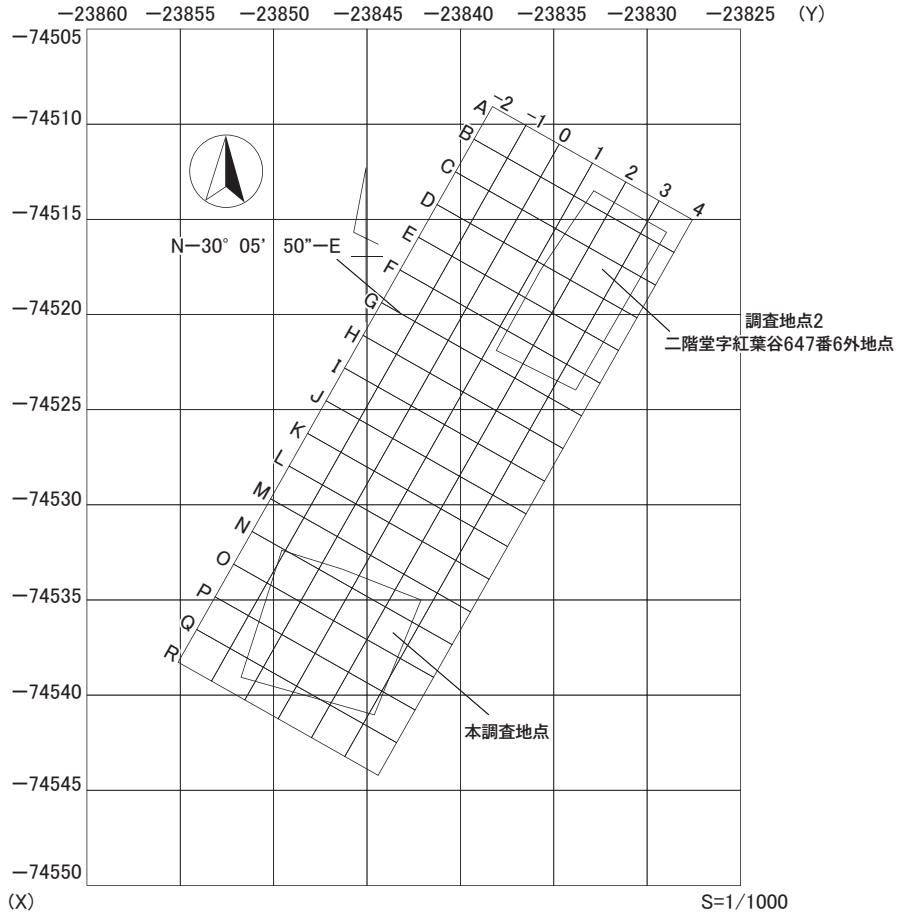
現地調査は11月８日に機材搬入し、試掘確認の結果に基づいて遺構面を傷つけないように地表40cm程までを重機で除去した後、それ以下を人力により掘り下げて遺構の確認・検出を行なった。調査面積は56.00㎡が対象である。調査の結果、礎石・掘立柱建物、土坑、溝、ピットなどにより構成された遺構群が検出された。出土遺物は多量のかわらけを始め、陶磁器類、金属・骨角製品など13世紀後葉～15世紀前半頃の所産である。平成18年１月18日までの間に必要な記録作業を行い、同日に機材撤収して現地調査を終了した。調査の経過については、以下に主な作業内容を日誌抜粋で記しておく。

日誌抄

11月８日（火）　現地調査を開始。調査区を設定して地表下60cmまで重機により表土掘削を実施。機材搬入とテント設営を行う。
９日（水）　市４級基準点を基に測量軸方眼の設定を行い、測量用の海抜高は鎌倉市が設置した３級水準点から敷地内に原点レベルを移動。
10日（木）　第１面の遺構検出作業を開始し、調査区壁直下に排水溝の開削作業を行う。
21日（月）　第１面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影及び平面図の作成。
12月12日（月）　荒掘り作業を終了した後、第２面の地形面出し精査と遺構確認の作業を開始。
14日（水）　第２面の遺構確認の作業を継続。面上検出の銅製品・溝１上層の写真撮影を行う。
21日（水）　掘立柱建物の新旧２軒を検出、溝１の掘り下げ作業を実施。
22日（木）　溝１東側で建物３を確認、柱穴掘り方や床束礎板の検出を行う。
１月　５日（木）　第２面の調査終了。全景及び建物・溝などの個別遺構の写真撮影。第３面検出に向けての掘り下げと遺構確認を開始。
13日（金）　第３面の調査終了。全景及び建物・溝などの個別遺構の写真撮影。
16日（月）　第３面下トレンチの調査。調査区西壁・東壁一部土層堆積の断面図を作成。
18日（水）　現地調査終了。調査関係各方面に発掘調査終了の旨を連絡して機材撤収。



▲国土座標上の位置・グリッド配置図
▼調査地点周辺地図



国土座標値

44310 （市３級基準点）	X−74571.3905 Y−23832.5502
D188 （市４級基準点）	X−74545.7953 Y−23816.7884
a点	X−74549.3150 Y−23820.6583
b点	X−74541.1082 Y−23843.8314
M−２杭	X−74534.1626 Y−23843.3915
Q−２杭	X−74541.1160 Y−23847.3985
P−１杭	X−74536.3892 Y−23851.6001
D−１杭	X−74517.5797 Y−23836.0434

図２　国土座標とグリット設定図

２．測量軸の設定

調査にあたって使用した測量方眼軸の設定には、図2で示したのように国土座標の数値（世界測地系第Ⅳ系）を用いている。また本調査地点の北側で平成15年度に発掘調査を実施した地点２（松吉・原　2008）とは近接した位置であり、同じ敷地内で関連した遺構も予想されたので測量方眼を統一して設定することにした。したがって調査区の軸方位と、方眼軸が振れているのはそのためである。鎌倉市道路管理課が設置した市３級基準点44310と、市４級基準点D188を採用している。この基準点の２点（日本測地系第Ⅳ座標系）の関係から開放トラバース側量によって算出した仮原点ａ・ｂ点を設けた。さらに測量方眼軸の基準点にあたるＭ－２杭と、Ｑ－２杭をそれぞれ設置した。さらに側量軸は東西軸と南北軸を２ｍ方眼による軸線を配し、南北軸はＭ～Ｒのアルファベットの名称、東西軸に－２～４の算用数字をそれぞれ付して設定を行った。

現地調査で使用した国土座標は、日本測地系（座標AREA9）の国土座標数値であったため、報告書の整理作業段階で、国土地理院が公開する座標変換ソフト『webTKY2JGD』によって世界測地系第Ⅸ系の座標数値に訂正したのが下記の数値である。

44310：〔Ｘ－74571.3905　Ｙ－23832.5502〕　Ｍ－２杭：〔Ｘ－74534.1626　Ｙ－23843.3915〕

Ｄ188：〔Ｘ－74545.7953　Ｙ－23832.7884〕　Ｑ－２杭：〔Ｘ－74541.1160　Ｙ－23847.3985〕

従って、調査地点は世界測地系第Ⅳ系のＸ－74530.00～74545.00　Ｙ－23855.00～23840.00の国土座標区画内に位置している。挿図中の方位は、すべて真北を採用した。測量方眼の南北軸線は遺構の方位を意識して調査区の南北軸にほぼ平行した主軸としたので真北より東に触れている。また調査地点の経緯度は以下のとおりである。

南北軸線：〔Ｎ　－　30°05′50″－　Ｅ〕

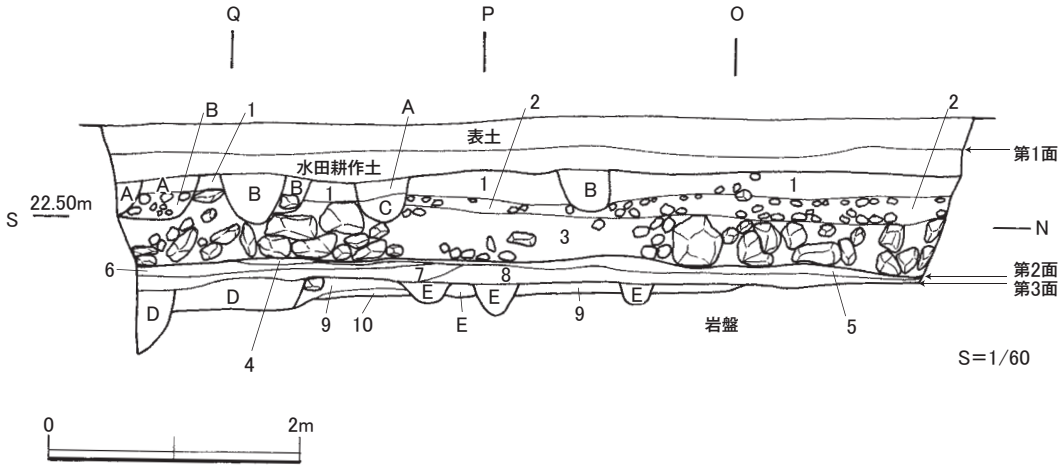
調査地点：〔東経　139°34′29″〕〔北緯　35°19′28″〕

調査中に使用した海抜高は、調査地点から西方200m程に位置する国史跡永福寺跡の測量基準点を採用した。昭和63年に史跡地内に設置された基準点No.3（Ｘ－74604.081　Ｙ－24031.090　Ｌ＝18.227ｍ）から海抜標高原点として調査地内のＭ－２杭上（Ｌ=23.420m）と、Ｄ－３杭上（Ｌ=23.305m）へ仮水準点を移設した。本報の文章中または挿図に記載されたレベル数値は、すべてこれを基準にした海抜標高を示している。

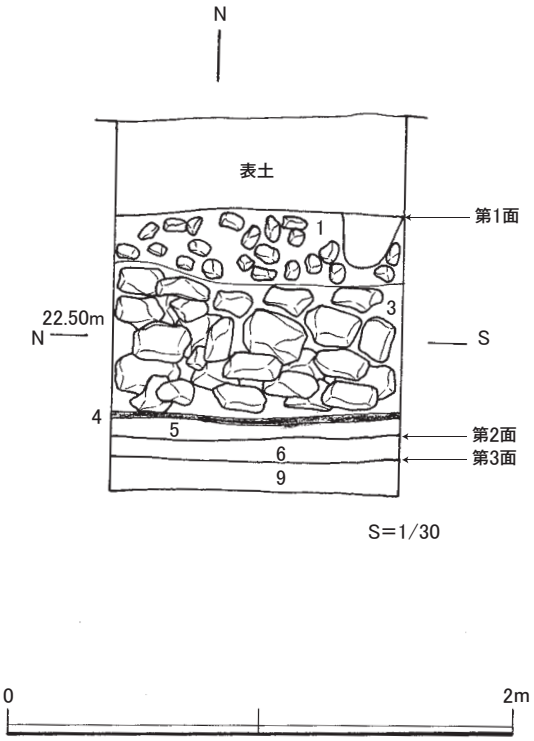
３．層序

本遺跡の所在する紅葉ヶ谷は西端が二階堂川に架かる通玄橋から始まり、谷戸地形は単一ではなく樹枝状に入り組んだいくつかの支谷を構成した地形を呈している。調査地点は紅葉ヶ谷中央部の瑞泉寺へ向かう道筋の北側で、南北に伸びた小支谷の開口部に位置しており、現地表の海抜高23.40m前後を計り、ほぼ平坦な宅地を形成している。鎌倉市教育委員会が実施した試掘調査の結果を基に、現地表下約30cmまで堆積していた近･現代の客土や耕作土を重機で除去した後､中世遺構の確認を実施した。

調査区各壁面の土層堆積は遺構覆土を除くと、表土・耕作土以下が１層の遺物包含層から中世地山上面（中世基盤層＝北から削平岩盤、青灰色粘質土、黒褐色粘質土により構成土）まで概ね10層に区分され、少なくとも3時期の生活面が確認された。調査区西壁土層堆積と、東壁一部の土層堆積は図3に示したとおりである。表土や耕作土の堆積土を除去すると、締りのある暗茶褐色弱粘質土の１層が観察された。この層は概ね5cm～拳大の土丹小塊を破砕したものを混入した地形層で、これを第１面として調査を行った。この面は海抜高22.75～22.90ｍであり、遺構は土坑12基、ピット98口などを検出した。



▲調査区西壁土層堆積



▲調査区東壁土層堆積

調査区西壁・東壁土層注記

1.	暗茶褐色弱粘質土	土丹粒、片多量に含む、かわらけ片少量含む しまり有り　粘性弱い
2.	暗茶褐色弱粘質土	土丹粒、片多量に含む、かわらけ片、炭化物少量含む しまり有り　粘性弱い
3.	茶褐色弱粘質土	挙大～人頭大土丹多量に含む しまり無し　粘性弱い
4.	炭化物層	
5.	暗茶褐色粘質土	混入物ほとんど見られない粘土層 ややしまり有り　粘性強い
6.	青灰色粘質土	土丹粒多量に含む、　しまり有り　粘性強い
7.	暗茶褐色粘質土	土丹粒少量含む、　ややしまり有り　粘性強い
8.	青灰色弱粘質土	土丹粒多量に含む、　しまり有り　粘性弱い
9.	青灰色粘質土	黒褐色粘質土を一部含む しまり有り、粘性強い　中世地山
10.	黒褐色粘質土	土丹粒少量含むが混入物ほとんど見られない しまり有り、粘性強い
A.	暗茶褐色弱粘質土	土丹粒少量含む　しまり無し
B.	暗茶褐色粘質土	土丹粒・塊多量に含む、かわらけ片・炭化物少量含む ややしまり有り
C.	茶褐色粘質土	土丹粒・かわらけ片・炭化物少量含む ややしまり有り
D.	黒褐色弱粘質土	土丹粒多量、土丹塊少量含む、砂っぽい、しまり無し
E.	黒灰色弱粘質土	土丹粒多量に含む、ややしまり有り

図３　調査区西壁・東壁土層断面図

第1面を構成する地形層と、第2層の厚さ20～30cmの暗茶褐色弱粘質土を除去すると、その下の堆積土は40～60cmほどの厚さで拳大から頭大の大小土丹塊を多量に混入した締りのない茶褐色土（3層）の大造成による整地層が顔を覗かせ、その海抜高22.70m前後であった。この厚い整地層は北隣に位置した地点2（二階堂字紅葉谷647番6外地点）の調査において第1面の構築に伴う造成層と類似するもので、海抜高23.20m前後で確認された。両地点の整地層上面は比高差が50cm程で現況の北から南へと傾斜する谷戸地形からみても同じ時期の造成によるものと考えられる。

第2面は4層の炭化物層や5層の暗茶褐色粘質土の堆積土を挟んで海抜高22.10m前後である。この面は概ね3～5cm角の小土丹粒を混入した粘性の強いしまりのある暗青灰色土による地形層である。この面に伴う遺構は南北溝（溝1）を挟んだ東西域に建物跡3軒（西が建物1・2、東が建物3）を検出している。薄い地形層の第2面構成土を除去すると、7層の粘性が強い暗茶褐色粘質土と土丹粒を多量に混入した青灰色弱粘質土の薄い堆積が認められ、その下は中世基盤層であった。中世基盤層を構成しているのは調査区の北端域が岩盤削平面、南側が黒褐色粘質土ブロックを含む暗青灰色粘質土の中世地山で第3面として調査を実施した。遺構は礎石建物1軒、土坑4基、溝6条、ピット15口などが検出され、面の海抜高は22.10m前後である。

さらに第3面の調査終了後に掘り残し遺構や岩盤削平面の様相を把握する目的で調査区南東隅にトレンチを設定して確認調査を実施した。その結果、岩盤の海抜高は南端約21.85m、北端約21.60mと緩やかに南へ傾斜しており、遺構は岩盤を掘り込んだ土坑、溝状遺構、ピットなどを検出することができた。

第三章　検出遺構と出土遺物

１．第１面の遺構と遺物

第1面を構成する地形層と、第2層の厚さ20 ～ 30cmの暗茶褐色弱粘質土を除去すると、その下の堆積土は40 ～ 60cmほどの厚さで拳大から頭大の大小土丹塊を多量に混じえた締りのない茶褐色土（3層）の大造成による整地層が顔を覗かせ、その海抜高22.70m前後であった。この厚い整地層は、先年報告した北隣に位置した地点２（二階堂字紅葉谷647番6外地点）の調査において第1面の構築に伴う造成土と類似するもので、その海抜高は23.20m前後で確認された。両地点の整地層上面の比高差を比較すると、本調査地点より50cm程高い地形を呈しているが、現況で観察した北から南へと傾斜する地形からみても同じ時期の造成と考えられる。検出遺構は土坑10基、ピット約80口などがあり、それに伴う遺物には図７に示したかわらけ大小皿、青磁・白磁の貿易陶磁器、国産陶器は瀬戸・常滑窯製品などが出土した。

a. 土坑（図４・５・７）

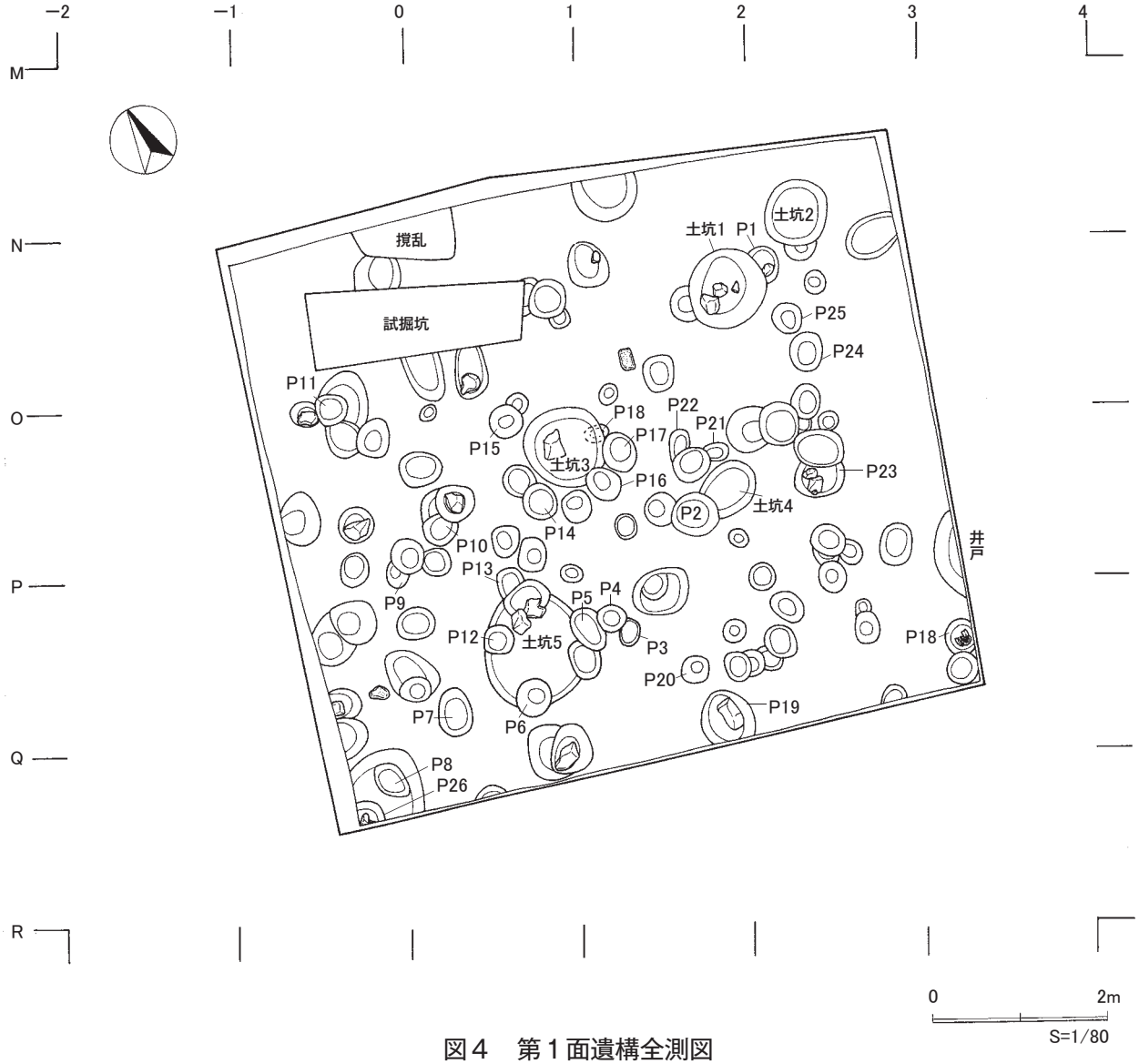
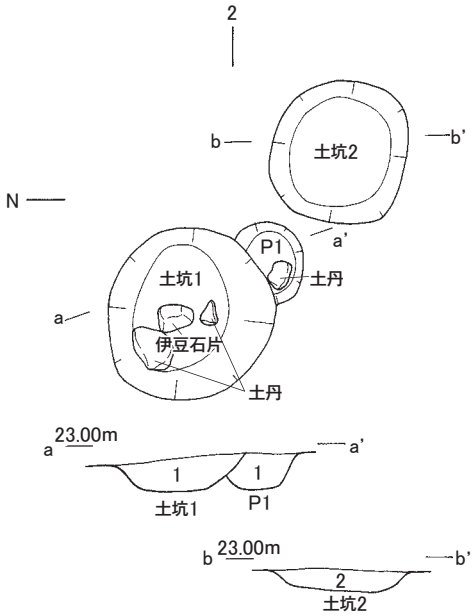
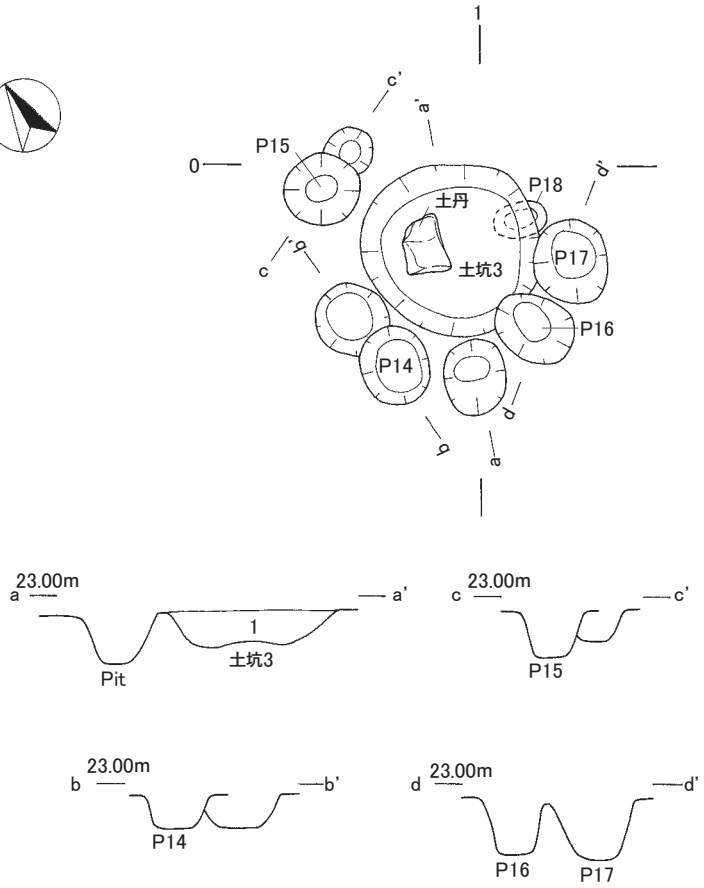


図４　第１面遺構全測図



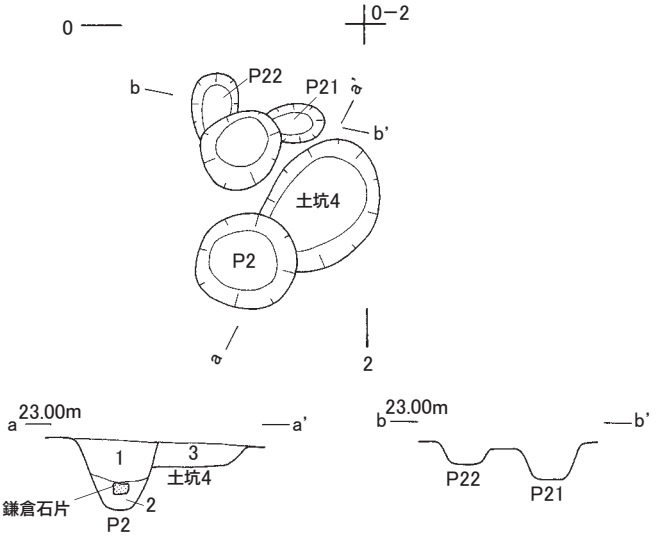
土坑1・2　P1土層注記
1. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物・1㎝角土丹
2. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物・1㎝角土丹
やや多し　しまり無し

▲土坑1・2　P1



土坑3　土層注記
1. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物・1㎝角土丹やや多し
しまり無し

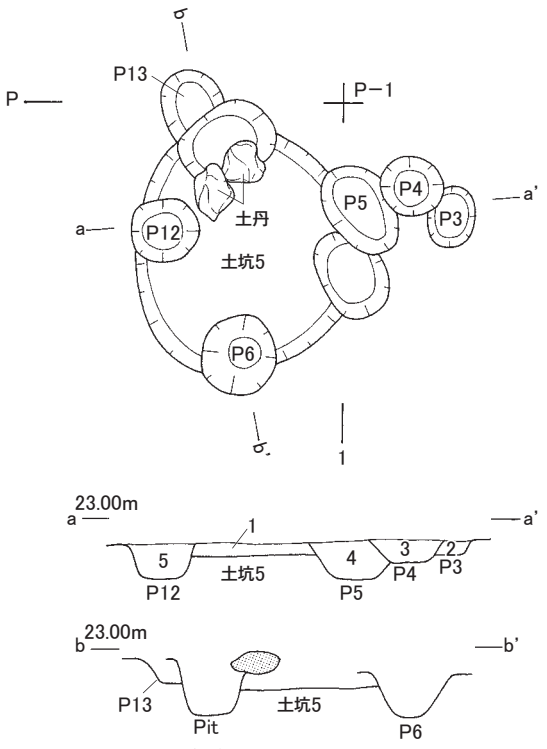
▲土坑3　P14～18



土坑4・P2　土層注記
1. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物・1㎝角土丹やや多し　しまり無し
2. 茶褐色粘質土　　土丹角・炭化物少量　粘性強い
3. 茶褐色粘質土　　炭化物・かわらけ片少量　3cm角土丹まばら　粘性やや強い

土坑5・P3～5・12土層注記
1. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物多し　上層に大型土丹塊あり
2. 茶褐色粘質土　　かわらけ片・炭化物少量　土丹粒やや多し
3. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物・土丹粒多し
4. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物やや多し・5cm角土丹まばら
5. 暗茶褐色粘質土　かわらけ片・炭化物・土丹粒多し

▲土坑4、P2・21・22



▲土坑5、P3～6・12・13

S=1/40

図5　第1面土坑・ピット

土坑１：調査区北東隅で検出され、P1と重複関係にあり本土坑が新しい。検出面の海抜高約22.90ｍである。平面形状は楕円形を呈し、大きさは長径95cm、短径85cm、確認面からの深さ20cmで掘り方は浅く底面が皿状の断面形を呈する。覆土は土丹粒やかわらけ小片を多量に含み、粘性を有した暗茶褐色土単一層の堆積が認められた。底面近くからは15～25cm大の土丹塊と伊豆石が合わせて３個検出した。遺物は図７－１～３のロクロ成形のかわらけ小皿、高めの器形で開き気味に立ち上がる器壁を有している。

土坑２：N－２杭の東隣に位置し、検出面の海抜高22.94ｍである。掘り方の形状は隅丸方形を呈し、径75cm前後、深さ15cm、断面が浅い皿状を呈している。覆土は締まりのない暗茶褐色粘質土でかわらけ片・炭化物・土丹粒をやや多く含むが、良好な遺物の出土はみられなかった。

土坑３：調査区中央、O－１杭に近接した位置でP16・17に一部削平を受けて検出された。検出面の海抜高22.96mである。掘り方の形状は円形を呈し、規模は径95cm前後、深さ20cm、底面は中央部がやや浅くなった形状の掘り方である。覆土はかわらけ片・土丹粒・炭化物をやや多く含む締まりのない暗茶褐色粘質土、出土遺物は４がロ径6.4cmと小径のロクロかわらけ、５が瀬戸天目茶碗が出土した。

土坑４：O～P－２ラインに近接した位置で検出、P2に西端を掘削されていた。検出面の海抜高29.90m前後である。平面形状は楕円形を呈し、大きさは長径75cm以上、短径56cm、深さ15cmと浅く平坦な底面である。出土遺物はかわらけ細片が少量たけであり、図示できる資料はない。

土坑5：P－1杭近接した位置で、P5・6・12などに掘削され検出した。検出面の海抜高29.95m前後である。

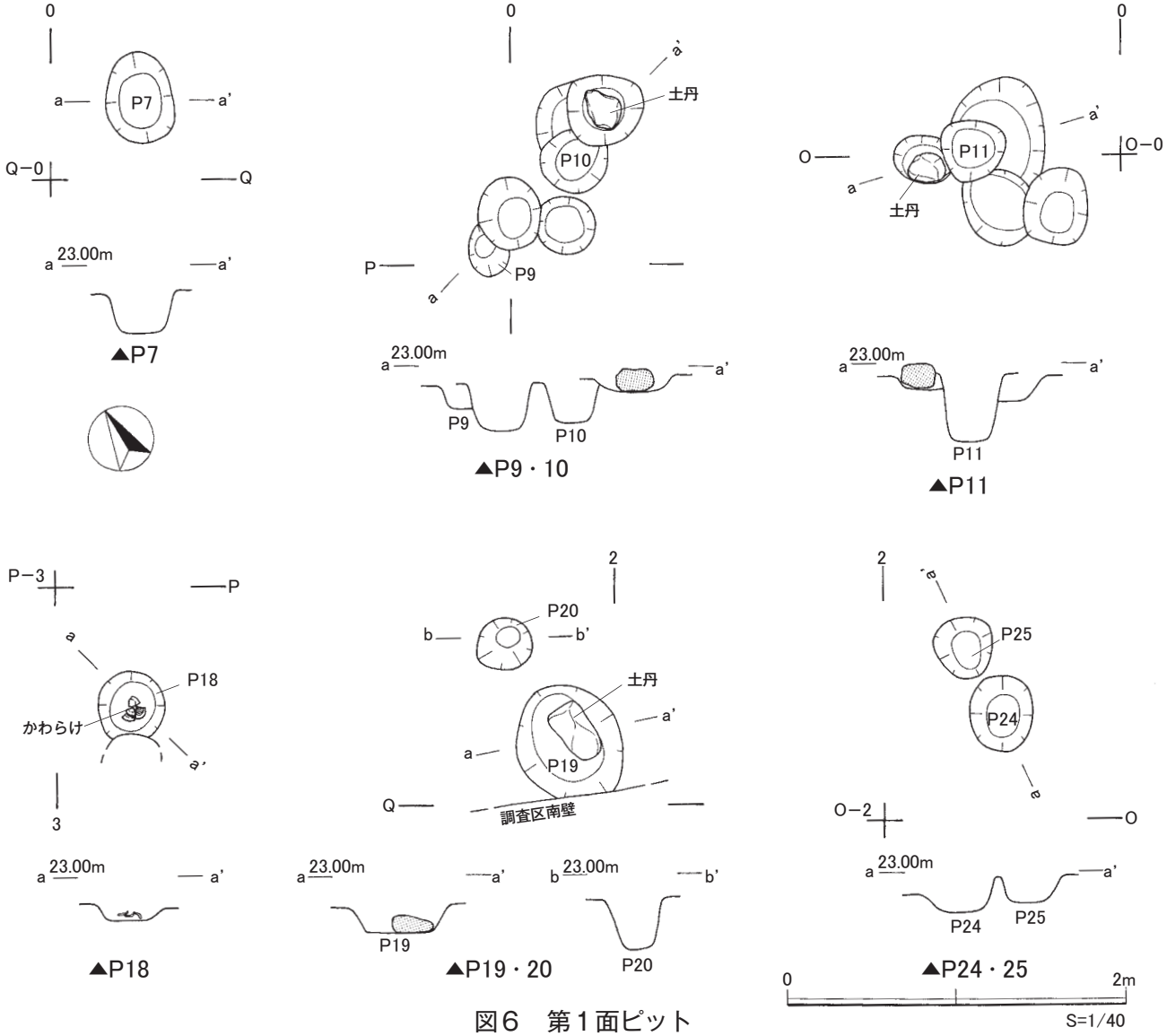


図６　第１面ピット

平面形状は楕円形を呈し、大きさは長径135cm以上、短径120cm、深さ15cmと浅く平坦な底面である。出土遺物はかわらけ細片が出土しているのみで、図示できる資料はなかった。

b. ピット（図4～7）

P2：Q－2杭に南隣した位置、土坑4を壊して掘り込んでいる。掘り方は円形状を呈し、径55cm、深さ40cmを測り、覆土は2層からなり上層が締りのない暗茶褐色粘質土、下層が粘性の強い茶褐色土であるが、遺物は図示可能なものはない。P7：Q－0杭の北側に位置し、掘り方は楕円形を呈し、長径55cm、短径38cm、深さ25cmで平らな底面の海抜高22.50mを測る。P９：P－0杭に近接した位置である。平面形は楕円形を呈し、長径38cm、短径26cm、深さ16cmと浅い。遺物は図7－6のロクロ成形かわらけ、口縁部内外に煤の付着した灯明皿である。P10：Ｐ９北隣に位置する。平面形は不整円形を呈し、径42cm前後、深さ30cmである。覆土は炭化物・土丹粒を多く含む締まりのない茶褐色粘質土、7の瀬戸折縁皿が出土した。P11：O－0杭の西側に位置する。平面形は不整円形を呈し、径38cm前後、深さ50cmの掘り方で底面の海抜高22.54mを測る。覆土は土丹粒を多く含む弱粘質土でかわらけ細片を多く含む。遺物は8の瀬戸水注の口縁部片である。

P14～17：これらのピットは土坑3の周囲に位置で検出した。P14は楕円形を呈し、長径45cm、短径36cm、深さ20cmを測り、浅く底面の平らな掘り方である。覆土は炭化物を含む暗茶褐色土、出土した遺物は9のロクロ成形のかわらけでやや厚手器壁で直線的に開く器形である。P15は円形を呈し、径40cm程、深さ26cmの掘り方で茶褐色粘質土の覆土である。P16は楕円形を呈し、長径45cm、短径36cm、深さ32cmを測り、底面の平らな掘り方である。P17は楕円形を呈し、長径47cm、短径40cm、深さ33cmを測り、底面の海抜高22.54mを測る。P18：調査区南東隅付近で検出した。平面形状は円形で径40cm､深さ12cmを測り、浅い掘り方の底面からはかわらけ小皿2点が出土した。覆土は土丹粒・かわらけ粒を多量に含む締まりのない茶褐色土である。11・12のかわらけ小皿は薄手器壁で器高の高い資料である。

P20～22：P20はＰ－１グリットに位置する。平面形は不整円形を呈し、径33cm前後、深さ30cmで小さな底面径である。覆土は締まりのない茶褐色粘質土、遺物は12の薄手器壁で直線的に開いた器形の極小かわらけである。P21・22は調査区中央のO－2杭付近で検出した。平面形はそれぞれ楕円形を呈し、長径30cm以上、短径25cm、浅い掘り方である。遺物はロクロ成形のかわらけ皿であるが、P21の資料は13が薄手器壁で高めの器形、14が厚い底部器壁から直線的に開く器形であり、P22から出土した15は厚手器壁で体部中位に稜をもつ極小かわらけであった。

P24：O－2杭の北隣で検出した。掘り方は長径46cm、短径35cm、深さ20cmの楕円形を呈する。16の瀬戸瓶子が出土した。P26：調査区南東隅で調査区外に架かる位置で検出した。掘り方は径35cm以上、深さ35cmを測り、底面に鎌倉石片と土丹塊が据えられていた。覆土はかわらけ片・炭化物・土丹粒を多めに含む暗茶褐色粘質土である。

c. 第１面遺構外出土遺物（図7）

図7－18～23はロクロ成形のかわらけ皿である。小皿は口径7cm以下の小型なもので、薄手の器壁で背高気味の器形である。大皿は22が背高気味で内湾した器形であるのに対し、21・23は底部から開き気味で直線的に立ち上がる器壁をもち、口縁が外反傾向の器形である。24は瀬戸灰釉碗で体部から口縁部にかけて緩やかな立て上がりをもつ器形である。25は瀬戸入子で精良均質な胎土の硬い焼き、外底面に糸切痕をとどめる。26は瓦質火鉢の口縁部片である。

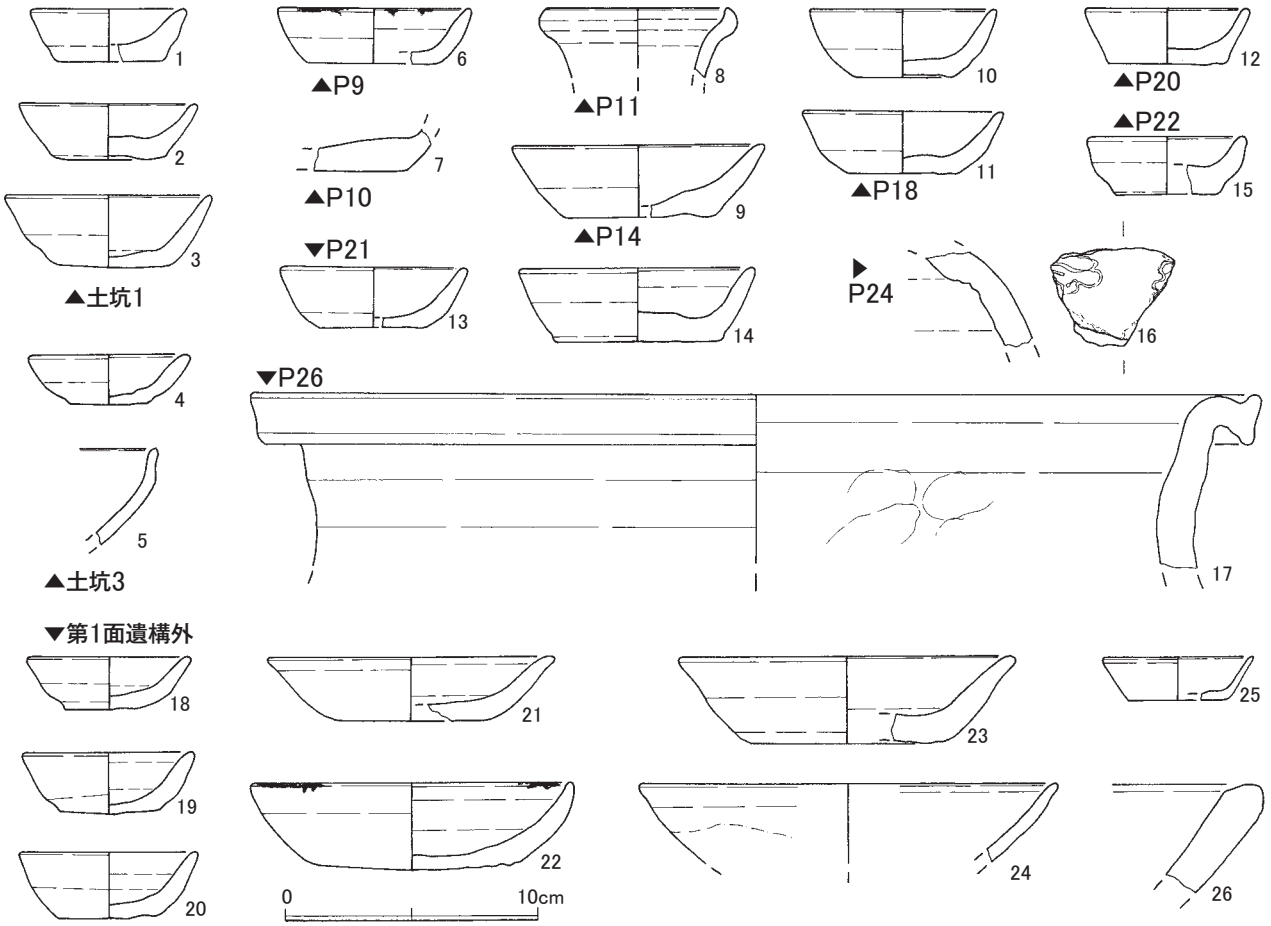


図７　第１面遺構・遺構外出土遺物

２．第２面の遺構と遺物

第2面は１～３層からなる厚い造成土を除去して表出した4層の炭化物層や5層の暗茶褐色粘質土の堆積層を挟んで海抜高22.10m前後で確認された。この面は概ね3～5cm角の破砕した土丹塊を混入した粘性の強いしまりのある青灰色土による地形層である。この面に伴う遺構は南北溝（溝1）を挟んだ東西域に建物跡3軒（西が建物１・2、東が建物3）を検出している。出土した遺物は図9のようにかわらけをはじめ、青磁・白磁の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯の国産陶器、火鉢・瓦類の瓦質品、笄・装飾具の骨角製品、銭や飾金具の金属製品、箸や曲物の木製品などがみられた。

a. 掘立柱建物・礎石建物（図８～13）

建物１・２：調査区西壁にほぼ沿って重複関係をもつ二時期の柱穴列が検出されたので建物１・２と呼称した。これは各柱穴掘り方の大きさや柱間寸法から考えて、調査区外に拡がりをみせる掘立柱建物（建物１・2）として捉えたものであり、新旧は建物２を壊して掘り込み建物１が新しい遺構である。

建物１は、調査区内で確認した規模が南北三間（約5.20m）、東西方向は溝１の東側域においては対応する柱穴は発見されないので調査区西壁・北壁外に延びる掘立柱建物であろう。南北方向の柱間寸法は、各柱穴の芯々距離で北端にあたる柱穴（建物１－１）から南端の柱穴（建物１－４）までが136cm、186cm、198cmの柱間間隔である。検出面の海抜高22.10m前後を測り、軸方位はＮ－ 23° 10′ －Ｅである。各柱穴の掘り方は、平面形が不整円形を呈し、規模は径40～60cm、深さ25cm前後と浅く、底面の平らな断面形を呈し、底面の海抜高21.90m前後である。遺物は図11で示したように１～６はかわらけ小皿、舶載品は青磁蓮弁文碗の７・8、白磁口兀の９が皿・10が碗である。

建物2は調査区内の規模が南北三間（約5.30m）、溝1東側域で対応する柱穴は発見されていない。南北方向の柱間寸法は、各柱穴の芯々距離で北端にあたる柱穴（建物2－1）から南端の柱穴（建物2－4）までが128cm、210cm、192cmを測る。検出面の海抜高22.10m前後、軸方位はN－23°－Eである。各柱穴掘り方は平面形が不整円形を呈し、規模は径40～60cm、深さ50cm前後と深めの掘り込みである。柱穴2-－3には一辺15cm角になる柱が遺存していた。各柱穴底面の海抜高22.65m前後である。遺物はかわらけが11～14のロクロ成形の小皿、舶載陶磁器は14の青磁蓮弁文碗と15の泉州窯系の盤である。

建物3：調査区東半部で検出した建物で、掘り方は全体に浅く1口に伊豆石礎石を伴っていたので礎石建物と考えられる。溝1東側の掘り方列（イ列）は建物3の建つ空間の西の限界を示すが調査区外に拡がっているため全容は不明である。調査区内で確認した規模は南北三間（約6.45m）、東西一間以上（3.65m以上）であり、柱間寸法は各掘り方芯々の間隔で南北方向が215cm（約7.2尺）、東西方向が210cm（約7尺）を測る。さらに建物内からは建築材の一部と思われる角材、柱通りや半間の柱間通りに一定間隔で配置された礎板があり、床束柱を支えたものと推定される。検出面の海抜高22.10m前後、主軸方位はN－23°50′－Eである。各柱穴の掘り方は、平面形が不整円形を呈し、規模は径40～60cm、深さ15～20cmと浅く底面の平らな断面形を呈し、底面の海抜高21.90m程である。

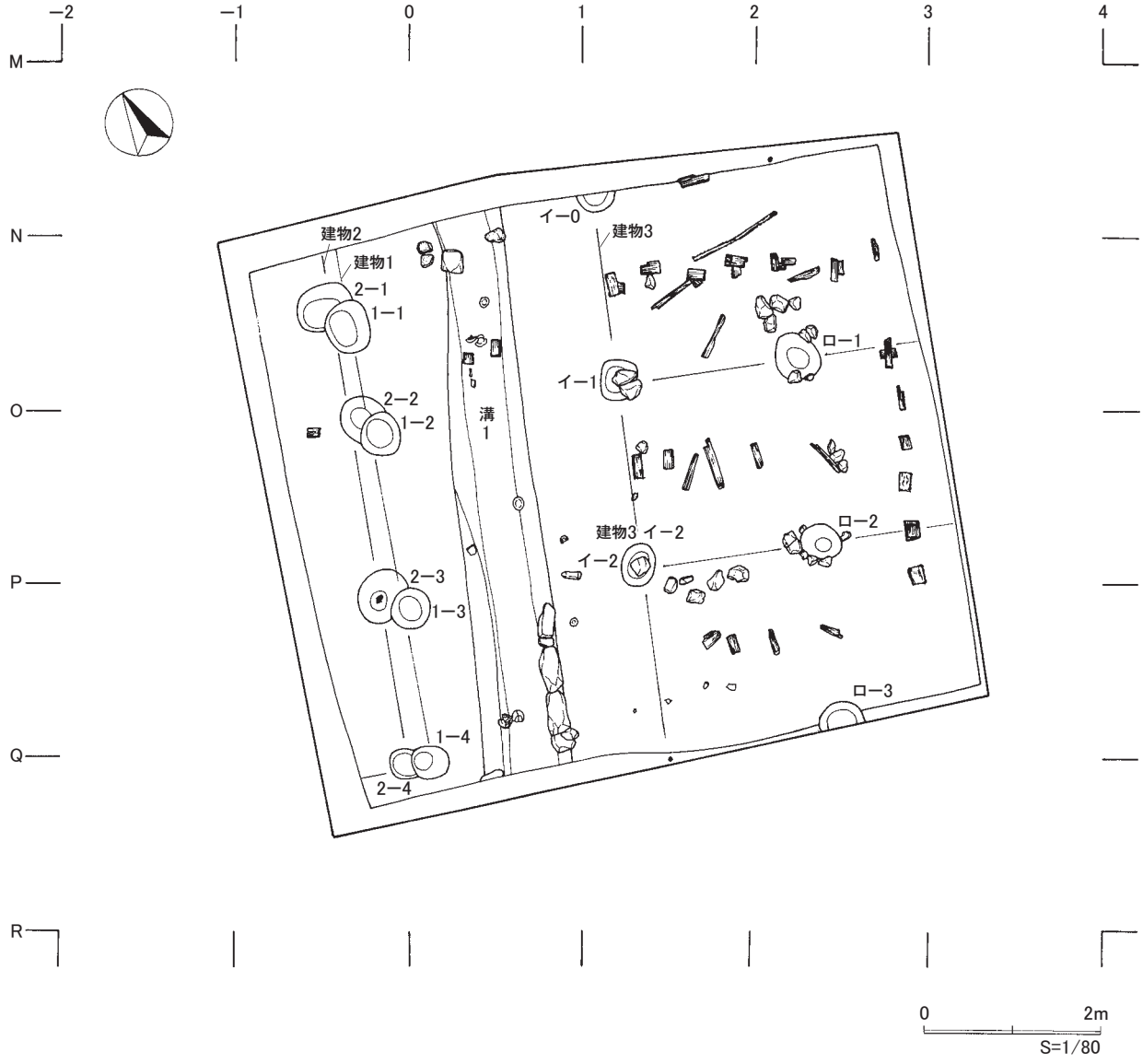


図8　第2面遺構全測図

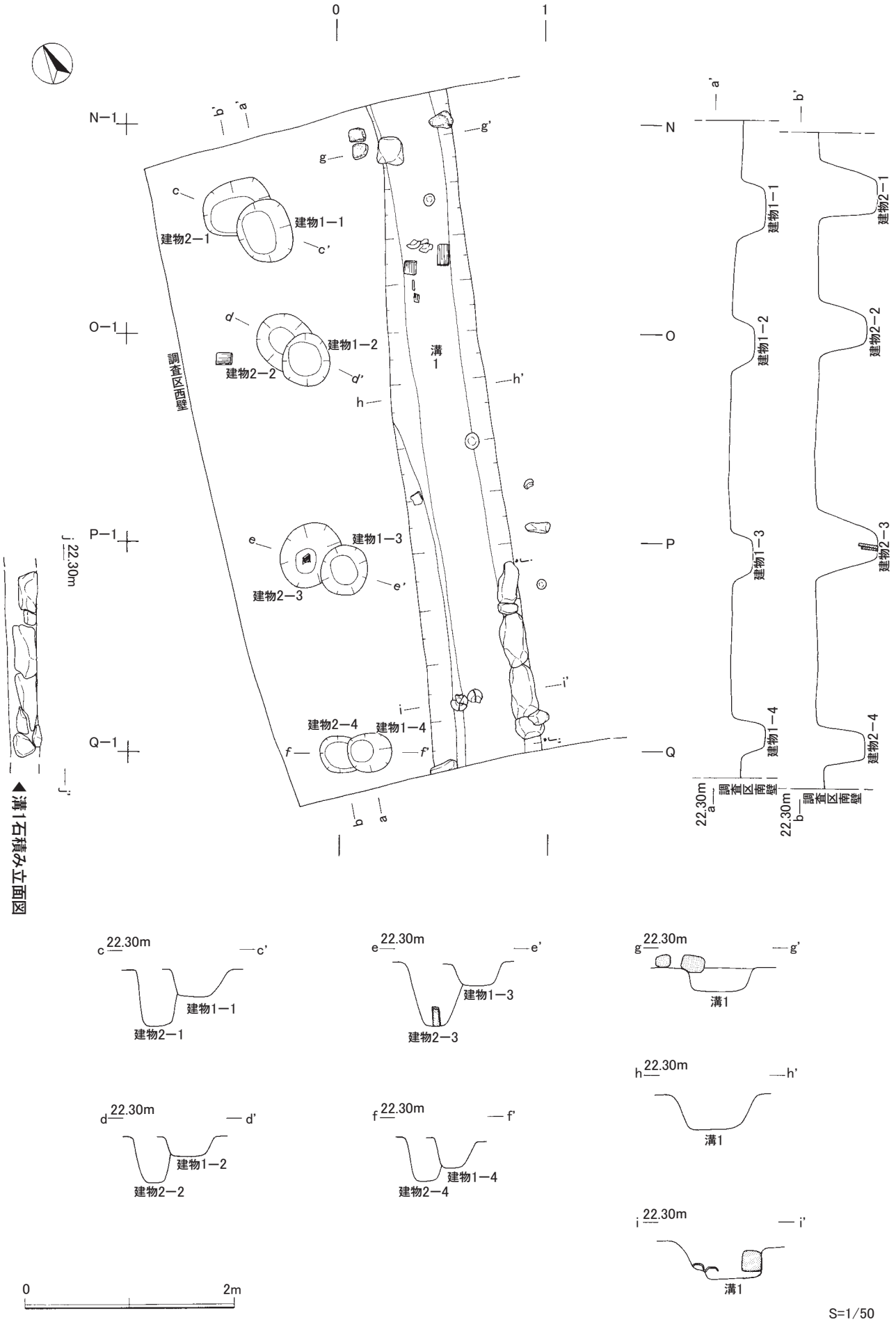


図９　第２面建物１・２、溝１

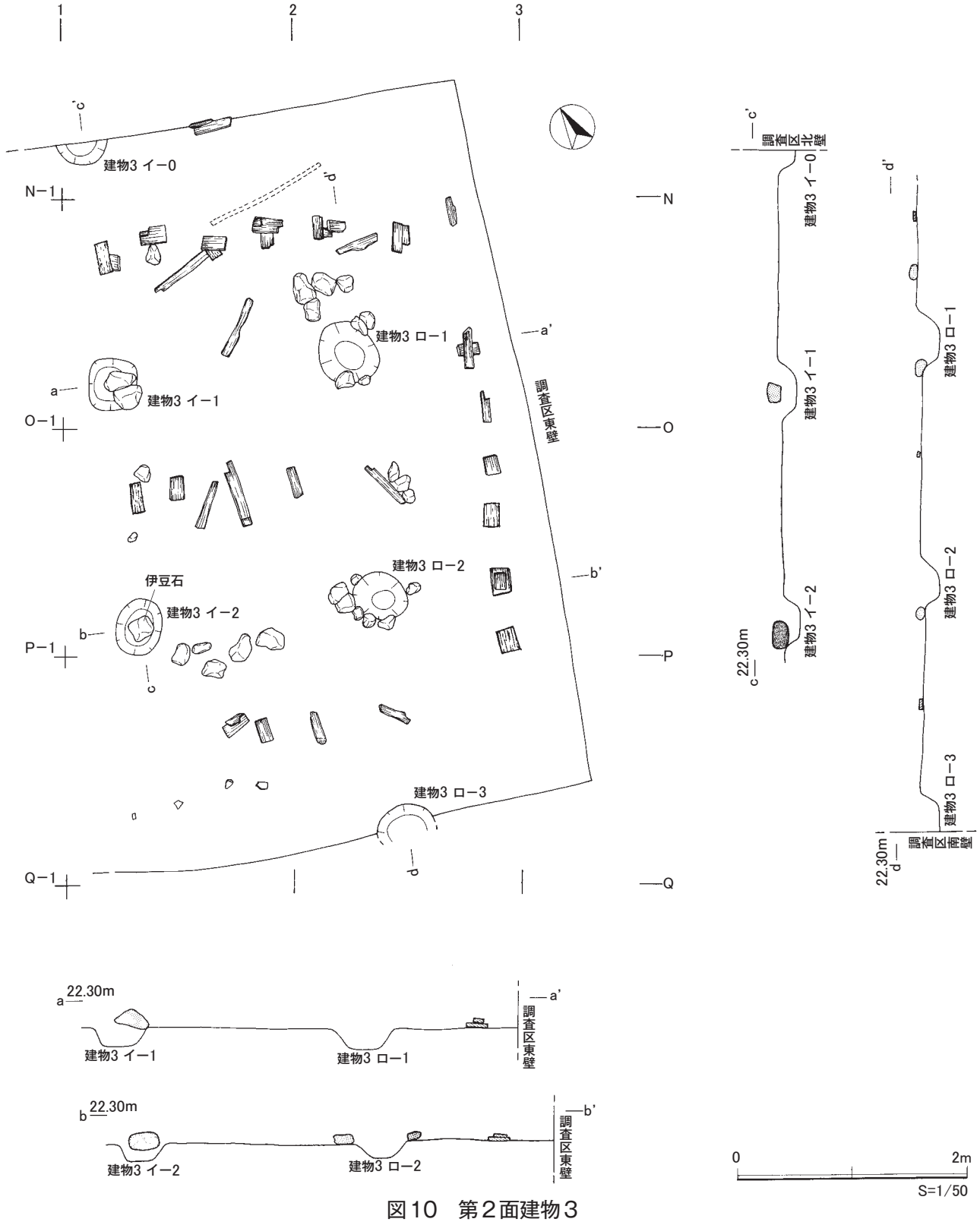


図10　第２面建物３

b．溝（図９・11）

溝１：調査区中央西寄りで南北方向の両岸を土丹塊を並べて補強したような溝を確認した。主軸方位はN − 23° 50′ − Eを測る。南北両端は共に調査区外に延び、全容は不明である。土丹塊は南側の東岸で一部確認できたが、後世の攪乱や開削により土丹塊は抜き取れていた。土丹塊には大小あり、大きいものは長辺40 ～ 50cm、幅20cm、高さ20cm程の扁平に加工している。規模は長さ6.5m以上、上面幅80 ～ 95cm、底面幅50cm、深さ30cm前後を測り、掘り方断面は逆台形を呈する。出土遺物は図11 − 17 ～ 42が覆土中、43 ～ 50が裏込土中からである。覆土中の遺物はかわらけが17 ～ 20の小皿で口径7.4 ～ 8.0cm、底径4.9 ～

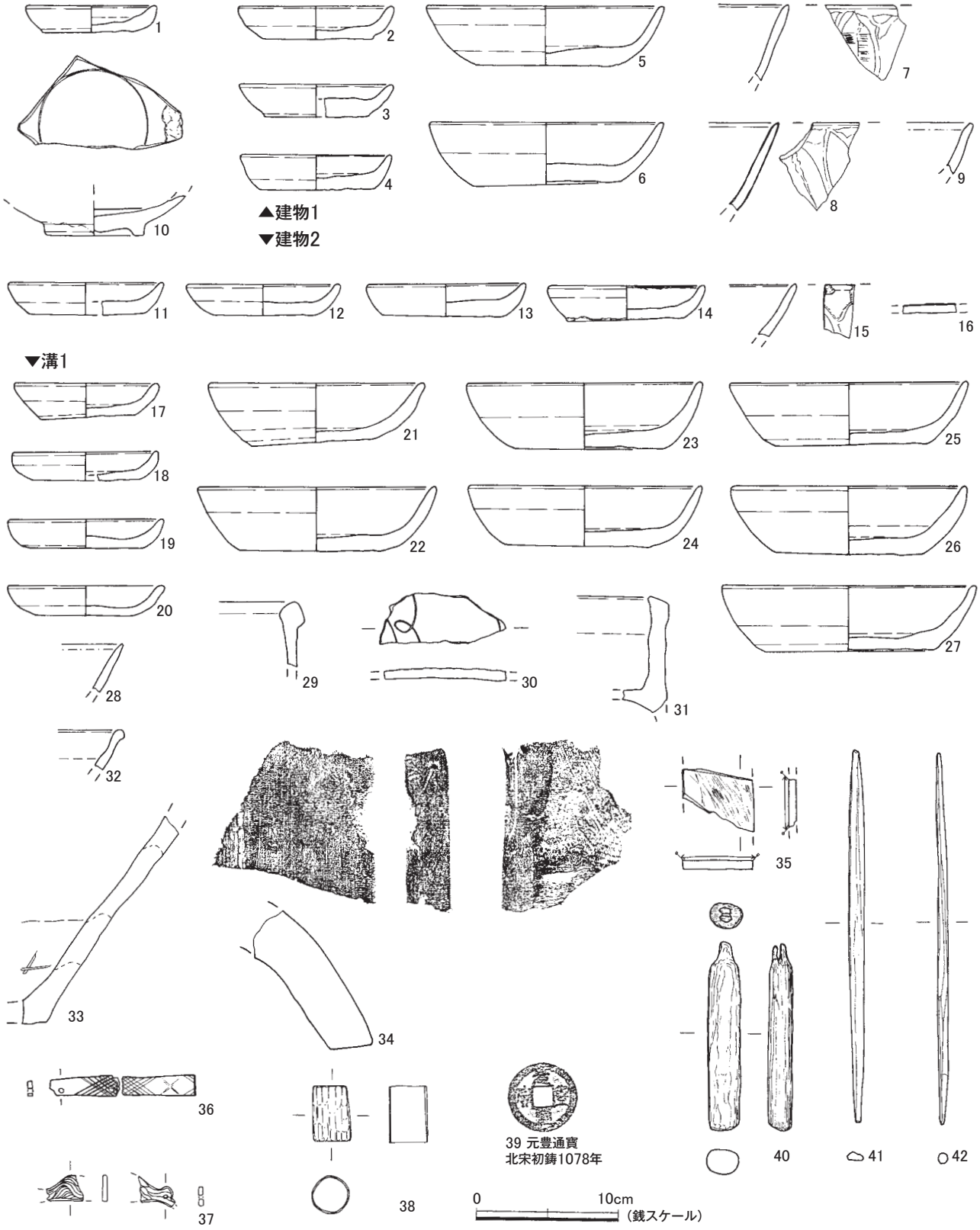


図11　第２面建物・溝

5.6cm、器高1.5cm前後で口径と底径の比率が小さく、低めの器高が主体である。21 ～ 27の大皿は器高3cmを超える背高気味で側面観碗型を呈する。28 ～ 31が白磁口冗皿や泉州窯系の盤・香炉、32・33の瀬戸窯皿・常滑窯甕、34は永福寺Ⅱ期男瓦と同類、35は京都鳴滝産の仕上砥石、36 ～ 38の骨角製、39の北宋銭「元豊通寶」、40 ～ 42が木製品である。

c. 第２面遺構外出土遺物

図12の遺物は第１面下～第２面上の地形層・遺物包含層（1 ～ 7）と、建物1・2の確認精査中（8 ～ 34）で出土した資料とは分けて掲載した。16 ～ 20は青磁蓮弁文碗・白磁口冗碗皿・施釉陶盤、4・5・21は瀬戸窯碗・入子、6・22は常滑窯片口鉢・甕、7は渥美窯甕、23は瓦質火鉢、24 ～ 31は銅製品の飾り金具や留め金具と北宋銭の「咸平元寶」「皇宋通寶」「紹聖元寶」「政和通寶」、32 ～ 34は木製品である。

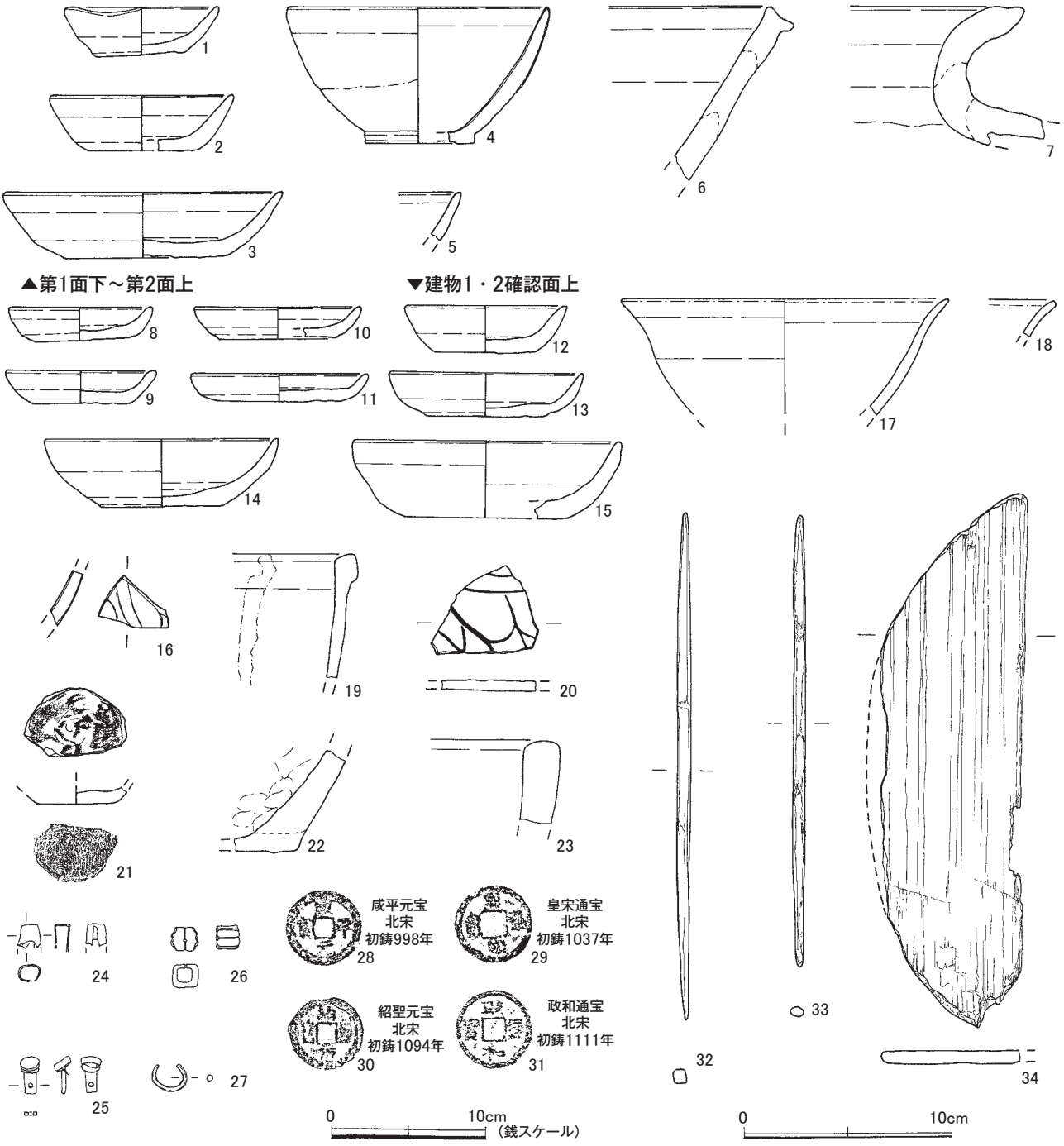


図12　第２面建物１・２内、遺構外出土遺物

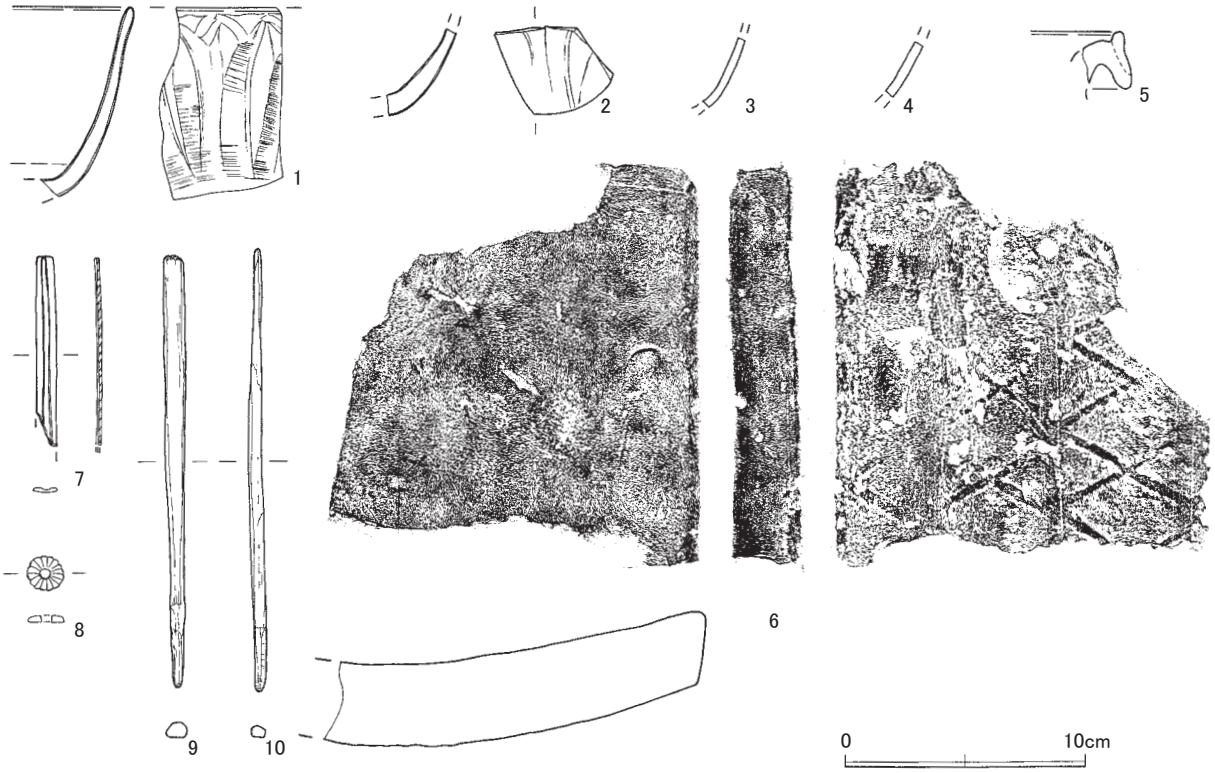


図13　第２面建物３内出土遺物

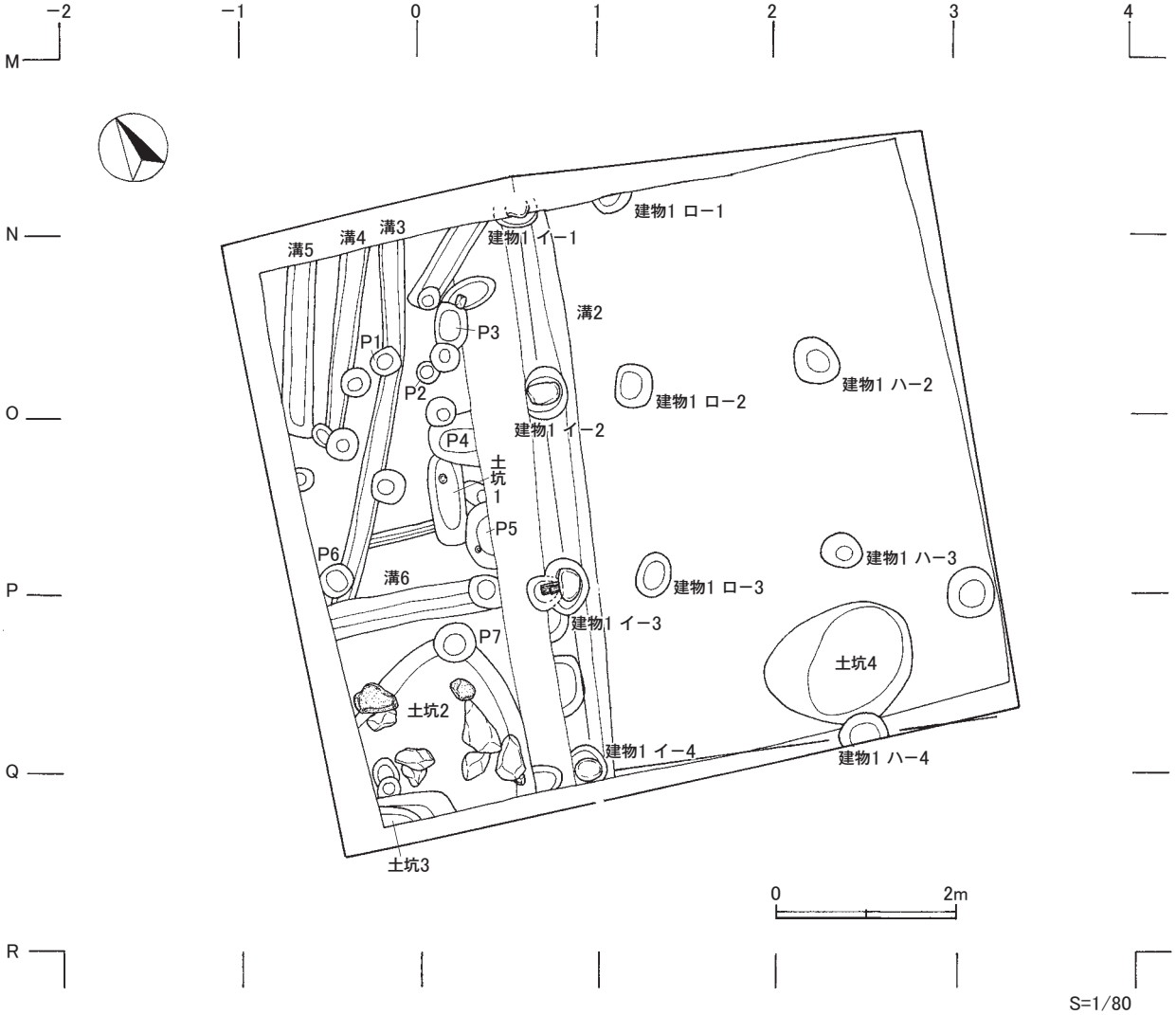


図14　第３面全測図

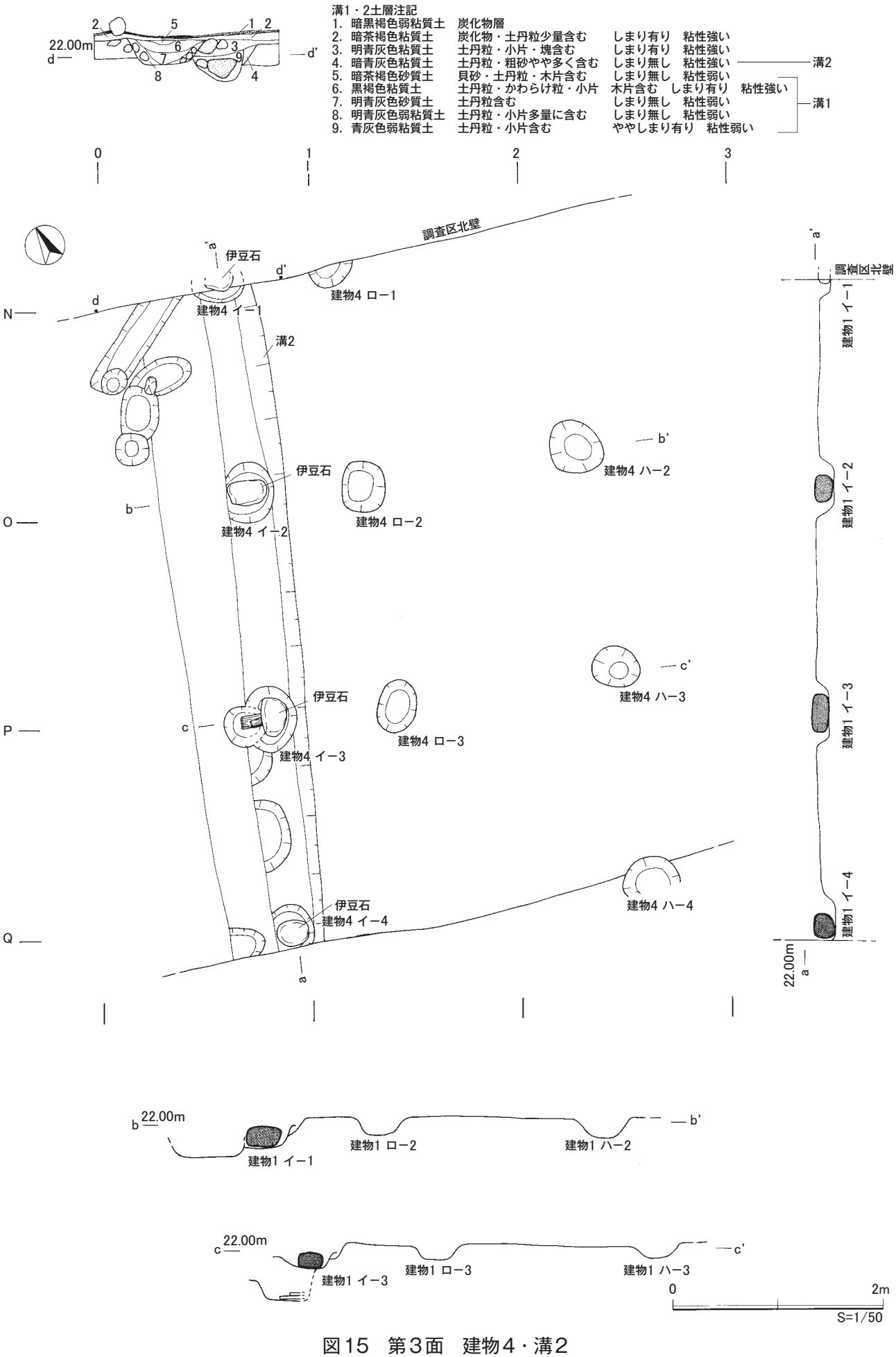


図15 第3面 建物4・溝2

3．第3面の遺構と遺物

第3面は薄い地形層の第2面構築土を除去すると、7層暗茶褐色粘質土と土丹粒を多量に混入した青灰色弱粘質土の薄い堆積が認められ、その直下は中世基盤層であった。この中世基盤層を構成しているのは調査区の北西域が岩盤削平面、東側が黒褐色粘質土ブロックを含む暗青灰色粘質土であった。遺構は礎石建物1軒、土坑4基、溝6条、ピット15口などを検出した。遺構確認面の海抜高は22.10m前後である。出土遺物はかわらけ、貿易陶磁器の青磁・白磁碗皿、常滑窯壺甕、木製品などである。

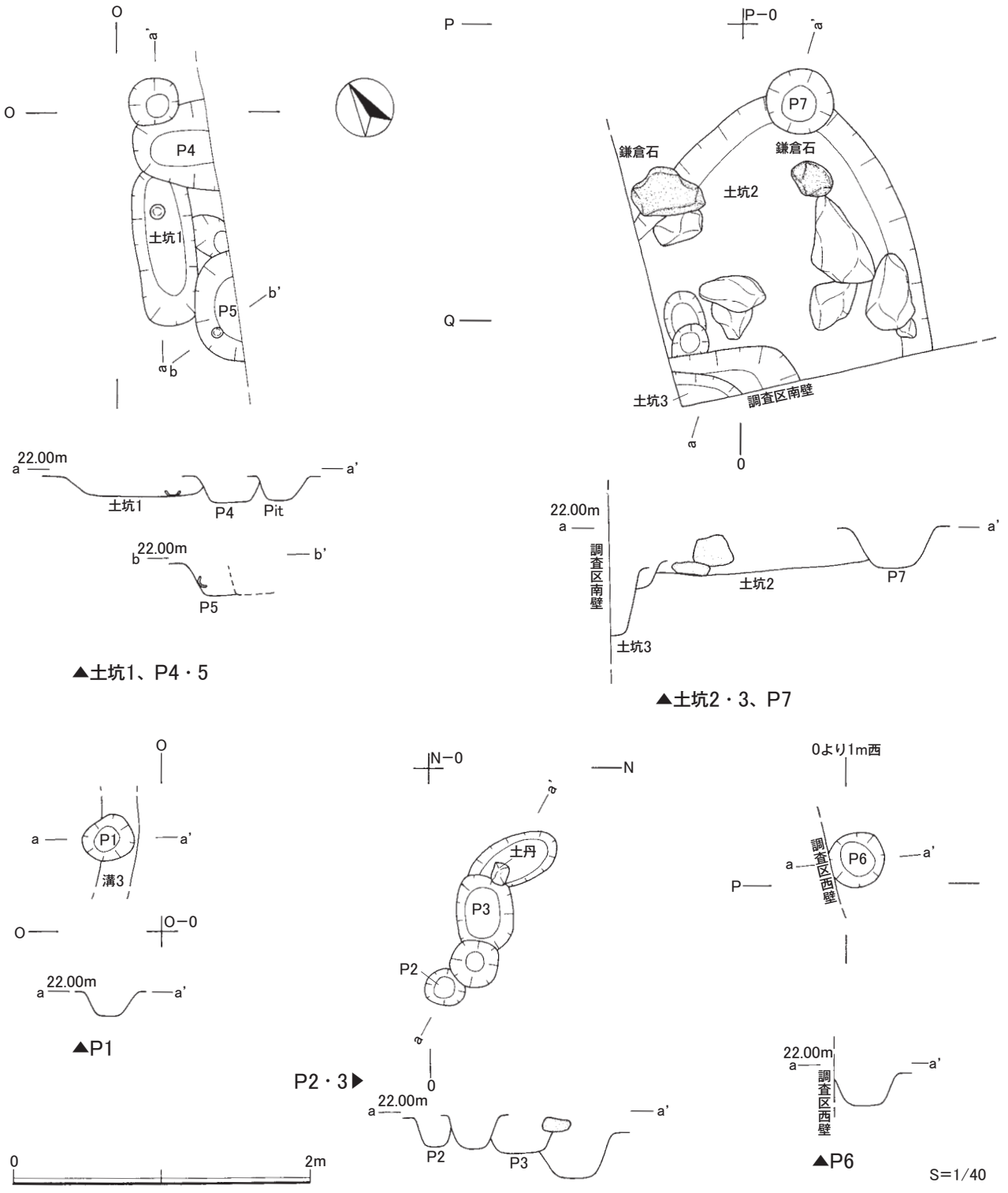


図16　第3面　土坑・ピット

a．礎石建物（図15）

建物4：調査区東側域で第2面溝1の東に位置している。礎石は溝1に沿って検出した建物東端にあたる南北列3間分の4個だけであったが、遺構精査により柱通りに一定の間隔で礎石が抜き取られた掘り方（礎石抜き方か）を検出することできた。調査区内での確認規模は南北3間×東西2間以上、礎石が残されていた西列は柱間寸法が半間（約100cm）になり、縁が取り付く建物と推定された。調査区外に拡がるため全体の規模や構造を明確にすることはできなかったので、ここでは建物の柱間寸法、各礎石掘り方の大きさや特徴について触れる。柱間寸法は西列の礎石芯々の間隔から各一間210cm（約7尺）と推定される。遺存する礎石は、形状が楕円～不整円形を呈し、径25～40cm、厚さ15～20cm、安山岩製（伊豆石）河原石の扁平なものを用いている。礎石上面の海抜高22.00m前後でほぼ水平な値を示し、主軸方位はN－23°50′－Eである。掘り方は平面形状が楕円～不整円形、径35～50cmで逆台形状の断面形を呈し、底面からの深さ10～18cmと浅い掘り方である。掘り方などからは掲載可能な遺物は出土していない。なお、本建物は調査区内での掘り方の配置や土層堆積などの重複関係を観察する限り、第2面で検出した建物3とは縁の取り付きを除き同位置で建て替えた可能性が高い。

b．溝（図14・15・17）

溝2：調査区中央西寄りの位置で南北方向に走る溝を検出したが、第2面溝1と建物4によって壊され、東半部を残すだけである。主軸方位は建物3・4と同一の軸方位を示し、南北両端は共に調査区外に延びている。規模は上面幅55cm以上、底面幅40cm以上、深さ20cm前後を測る。溝底の海抜高は北端が約22.0m、南端が21.9m程で北から南に向って緩やかに傾斜している。

溝3～6：調査区西側寄りの位置で削平岩盤面を掘り込む溝を4条検出した。いずれも規模は小さくU字形断面を呈する浅い溝であり、調査区外に延びた簡易的な排水溝と思われる。溝3は調査区の北壁0ラインに隣接した地点から西壁のPライン付近へ南に向かい緩やかな流れをもち、南端部は溝6により削平されている。確認した規模は長さ4.2m以上、上面幅30cm、底面幅18cm程、深さ15cm前後、溝底は

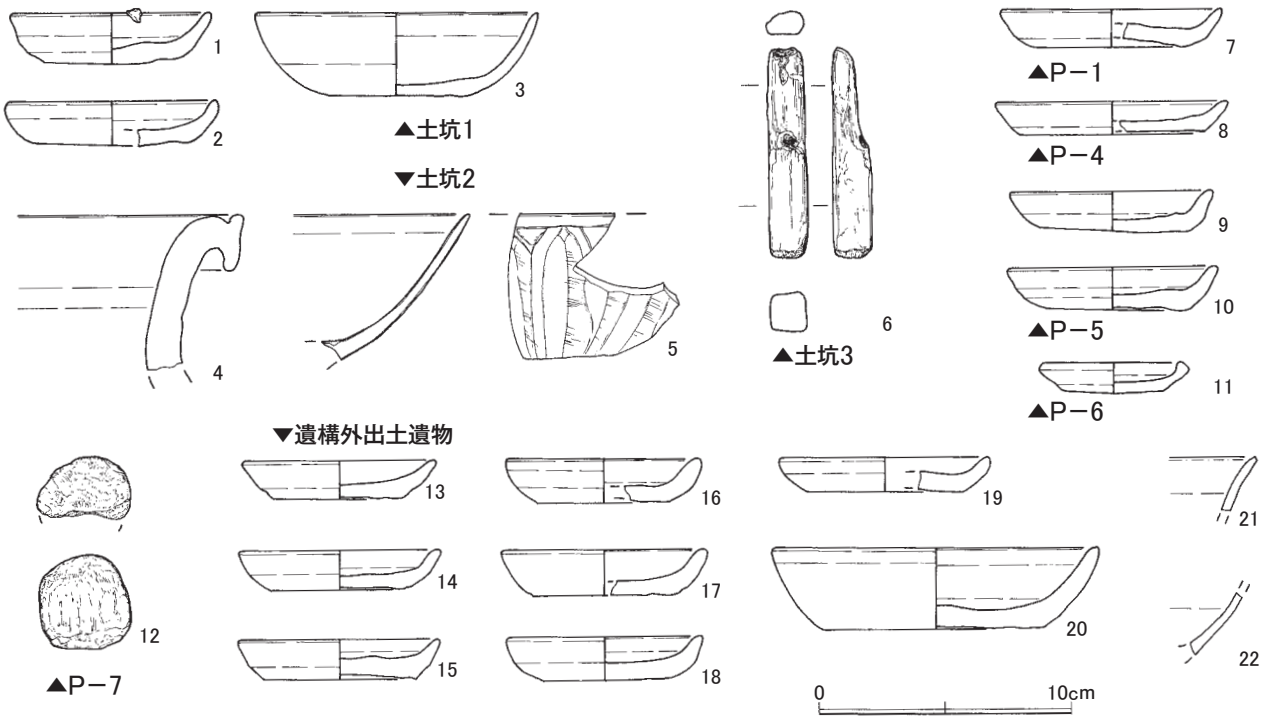


図17　第3面　遺構・遺構外出土遺物

平坦な造りである。溝４は溝３の西隣に位置し、南端がＯライン付近である。確認した規模は長さ２.1m以上、幅20 ～ 30cm、深さ10cm、南端が狭くなる掘り方である。溝５は溝４の西隣でほぼ平行した位置にある。確認した規模は長さ２.0m以上、幅32cm前後、深さ15cm、溝底はほぼ平坦である。溝６はＰライン沿いの東西位で確認され、東端は溝１に削平される。確認した規模は長さ１.9m以上、上面幅40cm、底面幅18cm前後、深さ20cmを測り、溝底はほぼ平坦である。

ｃ．土坑（図16・17）

土坑１：Ｏ－０杭北側に位置する。平面形は南北に長い隅丸長方形状を呈し、大きさは長径105cm、短径45cm、深さ30cm、底面の平坦な浅い掘り方である。覆土は土丹粒や炭化物を含む黒褐色粘質土である。出土遺物は図17－１～３のロクロ成形のかわらけである。

土坑２・３：調査区南西隅に位置し、調査区外に拡がっているため全容は不明である。土坑２は確認した規模が南北径２00cm・東西径215cm以上、深さ30cm、底面はほぼ平坦である。掘り方底面から肩部にかけて20 ～ 60cm程の土丹塊と鎌倉石がまとまりのない配置で９個発見された。覆土は土丹粒・粗砂を含む黒褐色弱粘質土であり、それに伴う遺物は４・５の常滑壺・青磁蓮弁文碗である。土坑３は覆土が土丹粒・土丹小塊を含む締まりのない黒褐色弱粘質土、図示可能な遺物は６の柄状木製品だけである。土坑２と重複関係にあるが、本址が新しい。

d．ピット（図16・17）

Ｐ1：Ｏ－０杭の北隣に位置し、溝３を壊して掘り込んでいる。掘り方は円形状を呈し、径30cm、深さ20cmを測り、覆土は土丹粒を多く含む暗茶褐色弱粘質土、遺物は図17－７の口径8cm以上で背低器形の糸切底かわらけ小皿が出土した。**Ｐ4・５**：Ｏ－０杭の南隣に位置し、土坑１と重複するが両ピットが新しい。Ｐ４は楕円形を呈し、径50cm以上、深さ22cmで平らな底面の海抜高22.55mを測る。出土遺物は８のかわらけ小皿で背低の器形を呈する。Ｐ５は径60cm以上、深さ30cmで底面が平坦な掘り方である。覆土中からは９・10のかわらけ小皿で口径8cm前後の背低器形である。**Ｐ６**：調査区西壁Ｐラインの位置で溝３と重複関係にあるが本址が新しい。平面形は円形を呈し、径38cm、深さ25cmと浅い。遺物は11のロクロ成形かわらけで小口径の内折れ皿である。**Ｐ7**：土坑２と重複するが本址が新しい。平面円形状を呈し、径45cm、深さ30cmである。覆土は炭化物・土丹粒を多く含む締まりのない黒褐色弱粘質土、遺物は12の球状の木製品である。

e．第３面遺構外出土遺物：図17－13 ～ 22の遺物は、この面の遺構に伴う資料以外で生活面上の包含層や地形層から出土したものである。13 ～ 20はロクロ成形のかわらけで小皿は口径7.5 ～ 8.2cmを測り、低めの器高をもつ内湾気味の器形であり、大皿はやや厚手器壁で低めの器高を呈している。21・22は白磁口兀皿・碗である。

４．第３面下の調査区南東トレンチ

第3面の調査終了後に掘り残し遺構や岩盤削平面の様相を把握する目的で調査区南東隅にトレンチを設定して遺構の確認調査を実施した。その結果、海抜高は南端約21.85m・北端約21.60mと緩やかに南へ傾斜した岩盤削平面が表出した。遺構は岩盤面を掘り込んだ土坑、溝状遺構、ピットなどの遺構を検出したが、これらに伴う遺物はかわらけ小片や木端片だけで実測可能な資料は認められなかった。

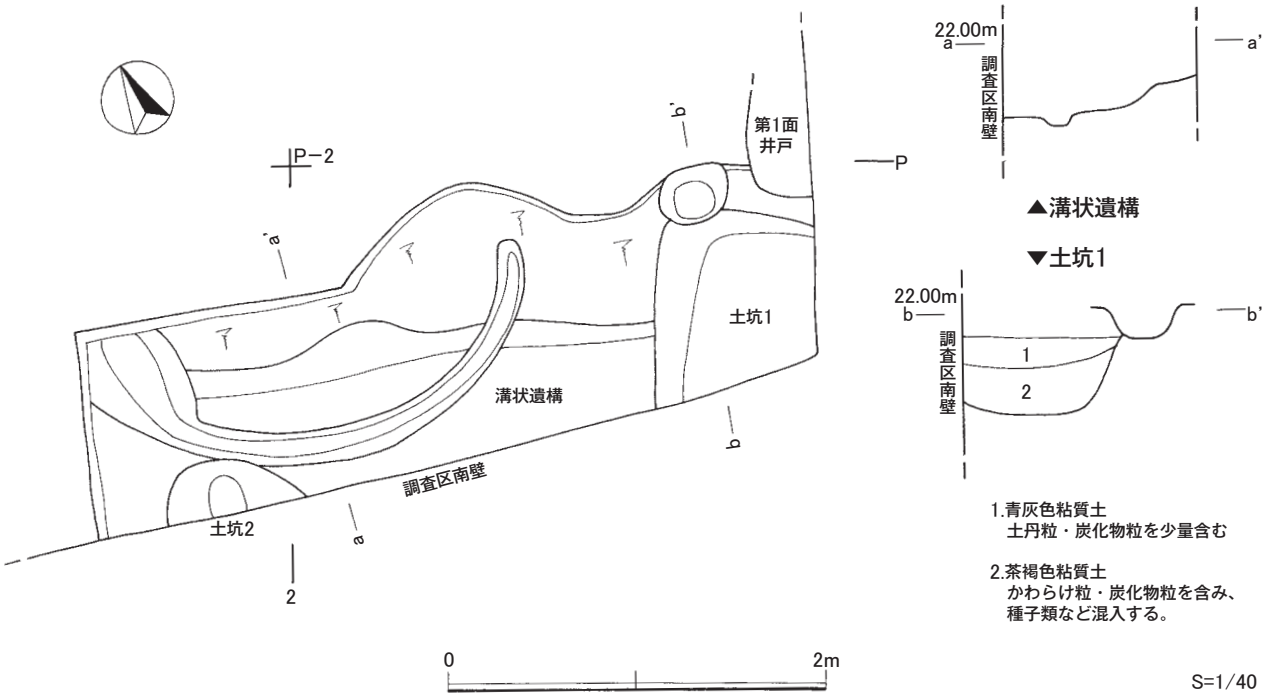


図18　第３面下調査区南東トレンチ

土坑１・２：調査区南東隅に位置し、土坑２基は調査区外に拡がっているため全容不明である。土坑１は確認できた規模が南北径100cm・東西径85cm以上、深さ55cmの断面Ｕ字形の掘り方を呈し、底面の海抜高21.45mを測る。覆土は上層が土丹粒・炭化物を含む青灰色弱粘質土、下層は茶褐色粘質土でかわらけ粒・炭化物を含んでおり、瓜科と思われる種子類が少量混入していた。土坑２は確認した規模が東西径75cm・南北径30cm以上、深さ25cmを測り、覆土は土丹粒・粗砂を含む青灰色弱粘質土の単層である。

表１　遺物観察表（１）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
7-1	第1面土坑1	かわらけ	(6.0)	(4.0)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
7-2	〃	かわらけ	(6.8)	(3.4)	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
7-3	〃	かわらけ	7.9	4.5	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
7-4	第1面土坑3	かわらけ	(6.4)	(3.1)	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
7-5	〃	瀬戸 天目茶碗	口縁～体部片			a.ロクロ b.砂粒 良土 c.灰白色 d.茶～黒褐色 薄手施釉 e.良好
7-6	第1面P-9	かわらけ	(7.7)	(5.1)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好 f.口縁部広範囲に煤付着 灯明皿
7-7	第1面P-10	瀬戸 折縁皿	底部小片			a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 砂粒 良土 d.灰白色 灰釉が外底部まで薄手施釉 e.良好 硬質
7-8	第1面P-11	瀬戸 水注	(7.9)	—	—	b.灰白色 砂粒 良土 d.緑灰色 やや厚め施釉 外側面剥離する e.良好 硬質
7-9	第1面P-14	かわらけ	(10.0)	(5.6)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
7-10	第1面P-18	かわらけ	(7.4)	(3.6)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
7-11	〃	かわらけ	(8.0)	(4.4)	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
7-12	第1面P-20	かわらけ	(6.6)	(4.6)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
7-13	第1面P-21	かわらけ	(7.4)	(4.1)	2.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.黄橙色 e.良好
7-14	〃	かわらけ	(9.4)	(6.6)	2.9	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
7-15	第1面P-22	かわらけ	(6.4)	(4.0)	(2.2)	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
7-16	第1面P-24	瀬戸 瓶子	肩部小片			b.白灰色 砂粒 良土 d.灰緑色～暗灰緑色 薄手施釉 e.良好 硬質 f.蓮花唐草文風の紋様
7-17	第1面P-26	常滑 甕	(40.0)	—	—	a.輪積技法 b.黄橙色 白色粒 赤色粒 砂粒 c.褐灰色 d.自然降灰 e.硬質 f.中野編年6a型式
7-18	第1面上	かわらけ	6.2	3.8	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
7-19	〃	かわらけ	(6.6)	(4.0)	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
7-20	〃	かわらけ	(6.9)	(5.2)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
7-21	〃	かわらけ	(11.2)	(5.8)	2.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.橙色 e.良好
7-22	〃	かわらけ	12.5	7.5	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.灯明皿
7-23	〃	かわらけ	(13.0)	(7.6)	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂多め 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
7-24	〃	瀬戸 灰釉碗	(16.4)	—	(3.2)	a.ロクロ b.明灰色 砂粒 良土 d.灰釉 灰緑色透明 粗い貫入あり 外面体部下半露胎 e.良好
7-25	〃	瀬戸 入子	(5.9)	(3.9)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 白色粒 良土 d.内面見込 外面灰緑色自然釉 e.良好
7-26	〃	瓦質 火鉢	口縁部小片			b.白桃色 砂粒 やや粗土 c.白色～白桃色 e.良好 f.外面口縁部下2条沈線と菊花文の押印
11-1	第2面建物1-1	かわらけ	6.8	(4.5)	1.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-2	〃	かわらけ	7.9	5.6	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-3	〃	かわらけ	(7.8)	(5.3)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い

表２　遺物観察表（２）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
11-4	〃	かわらけ	7.6	5.6	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-5	〃	かわらけ	12.2	7.2	3.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-6	〃	かわらけ	12.0	7.3	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.所々に鉄分付着
11-7	第２面建物1-1	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.淡灰緑色半透明 薄手施釉 f.外面蓮弁文を片切彫
11-8	〃	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 やや厚く施釉 貫入あり f.外面蓮弁文を片切彫
11-9	〃	白磁 口兀皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色～淡橙色 精良堅緻 d.灰白色不透明 薄手施釉 口唇部の釉剥ぎとり f.二次焼成受け釉白濁
11-10	第２面建物1-3	白磁 口兀皿	高台径5.0			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.緑味灰白色不透明 薄手施釉 f.内底面に一本の沈線が巡る
11-11	第２面建物2-2	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-12	〃	かわらけ	(7.8)	5.2	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-13	第２面建物2-4	かわらけ	8.0	6.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-14	〃	かわらけ	8.0	5.8	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.口唇部煤付着 灯明皿
11-15	〃	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.緑褐色半透明 f.外面蓮弁文を片切彫
11-16	〃	泉州窯系 盤	底部小片			a.ロクロ b.暗灰色 白色砂粒少量 良土 d.黄褐色 やや厚く施釉 f.二次焼成で器表荒れ明確ではないが二彩・三彩の可能性あり
11-17	第２面溝１	かわらけ	7.4	4.9	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-18	〃	かわらけ	(7.4)	(5.5)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-19	〃	かわらけ	8.0	5.6	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 c.橙色 e.良好
11-20	〃	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-21	〃	かわらけ	11.0	6.4	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-22	〃	かわらけ	12.2	7.5	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや良土 c.黄橙色 e.良好
11-23	〃	かわらけ	12.2	7.5	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-24	〃	かわらけ	12.0	7.6	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-25	〃	かわらけ	12.2	7.8	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-26	〃	かわらけ	12.0	7.7	3.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
11-27	〃	かわらけ	13.0	8.8	3.4	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い f.二次焼成受け外面体部下位～底部に焼け痕あり
11-28	〃	白磁 口兀皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色半透明 ごく薄手施釉 f.口唇部露胎
11-29	〃	泉州窯系 盤	口縁部小片			b.黄味灰白色 白色砂粒やや多め やや粗土 d.緑色～濃緑色 やや厚く施釉 f.二次焼成で器表荒れ明確ではないが二彩の可能性あり
11-30	〃	泉州窯系 盤	底部小片			b.暗灰色 白色砂粒やや多め やや粗土 d.黄色～緑色 やや厚く施釉 f.二彩・線彫りの文様
11-31	〃	泉州窯系 緑釉香炉	口縁～底部小片			b.灰色 白色砂粒やや多め やや粗土 d.緑色～濃緑色 やや厚く施釉 f.小片の為器形が定かではない 口縁部・底部は釉が剥離
11-32	〃	瀬戸 皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 砂粒 良土 d.灰緑色 薄手施釉 e.良好 やや軟質

表３　遺物観察表（３）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
11-33	〃	常滑 甕	底部～胴部小片			a.輪積技法 b.暗灰色 白色粒少量 砂粒 c.暗赤褐色　降灰部:灰白色 f.内部底辺近くにヘラ傷有り
11-34	〃	男瓦	厚さ 2.3 ～ 2.6㎝			a.凸面:縄目叩きを縦方向ナデによりナデ消す 凹面:離れ砂若干付着 布目痕 縦方向糸切痕 b.灰色 白色粒 小石粒 砂粒 やや粗土 c.灰黒色 e.良好
11-35	第2面溝1	砥石	残存長2.7幅3.6 厚さ0.4 ～ 0.5			b.黄灰色 f.仕上砥 鳴滝産 上面のみ細かな擦痕（刃物痕）有り
11-36	〃	骨角製品 装飾品	残存長6.9孔径0.2 幅0.9 ～ 1.0厚0.2			f.斜格子の紋様が線刻される 二次焼成受ける 裏面未加工
11-37	〃	骨角製品 装飾品	残存長1.9幅1.3厚0.2 残存長1.7幅1.0厚0.2			f.波状文が線刻される 二次焼成受ける 接合できないが同一個体の破片２点　一方には径0.2㎜程の孔有り
11-38	〃	骨角製品 管状	長さ2.9 径2.0 厚さ0.1			f.外面削りをかけ軽く磨きを施す 刷毛の軸の加工途中とも考えられる
11-39	〃	銅銭	外径24.2㎜内径19.0㎜ 孔径6.2㎜厚さ1.2㎜			f.元豊通寶 北宋 初鋳1078年
11-40	〃	木製品 用途不明	長さ9.8径1.2 ～ 1.7			a.楕円状に削り、片端が細く凸状に加工
11-41	〃	木製品 箸	長さ19.2厚さ0.8			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
11-42	〃	木製品 箸	長さ19.0厚さ0.5			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
11-43	第2面溝1 裏込め中	かわらけ	(7.4)	5.0	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.橙色 e.良好
11-44	〃	かわらけ	(7.9)	(5.9)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
11-45	〃	かわらけ	(8.2)	(5.7)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
11-46	〃	かわらけ	(8.0)	6.2	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-47	〃	かわらけ	(12.2)	(7.4)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.暗黄橙色 e.良好 f.体部下位にヘラ傷有り
11-48	〃	かわらけ	(12.0)	7.8	3.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
11-49	〃	かわらけ	(12.8)	(8.2)	2.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.暗黄橙色 e.良好
11-50	〃	かわらけ	13.0	6.5	3.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
12-1	第1面下 ～2面上	かわらけ	7.4	4.2	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部に歪みあり
12-2	〃	かわらけ	(8.6)	(5.1)	2.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-3	〃	かわらけ	13.2	7.8	3.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-4	〃	瀬戸 天目茶碗	(12.4)	(5.2)	6.4	a.ロクロ b.明灰白色 砂粒 白色粒 良土 d.茶～黒褐色 やや厚く施釉 e.良好 軟質
12-5	〃	瀬戸 碗	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 砂粒 白色粒 良土 d.灰緑色 やや厚く刷毛塗り e.良好 硬質 f.二次焼成の為所々釉剥げる
12-6	〃	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			a.輪積み技法 b.灰色 砂粒・白色粒・黒色粒少量含む 良土 c.暗赤褐色 e.良好
12-7	〃	渥美 甕	口縁部小片			a.輪積み技法 b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 c.灰色～黒褐色
12-8	第2面上	かわらけ	6.8	4.3	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.内外面共に鉄分カルシウム付着
12-9	〃	かわらけ	(7.0)	(4.4)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
12-10	〃	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-11	〃	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好

表４　遺物観察表（４）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
12-12	〃	かわらけ	(7.6)	4.8	2.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-13	〃	かわらけ	(9.0)	(5.4)	2.1	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-14	〃	かわらけ	(11.0)	5.7	3.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-15	第2面上	かわらけ	12.6	(7.8)	3.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-16	〃	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	体部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 やや砂粒多め d.灰緑色半透明 やや厚く施釉 貫入あり
12-17	〃	白磁 口冗碗	(15.6)	—	—	a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 やや砂粒多め d.灰白色半透明 薄手施釉 f.内外面共にピンホール有り 口縁部～体部片約1/8
12-18	〃	白磁 口冗皿	口縁部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色半透明 薄手施釉 f.口唇部内側露胎
12-19	〃	泉州窯系 盤	口縁部小片			b.灰白色～灰色 白色砂粒含むが良土 d.緑色 f.二次焼成で器表荒れ明確ではないが二彩・三彩の可能性あり 他に同一個体と思われる胴部破片一点有り
12-20	〃	泉州窯系 盤	底部小片			b.灰色 白色砂粒含むが良土 硬質 d.黄褐色 f.二次焼成で器表荒れる 線彫りの文様あり 文様不詳 他に同一個体と思われる胴部破片一点有り
12-21	〃	瀬戸 入子	—	3.9	—	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.灰白色 白色粒 砂粒 良土 e.硬質 良好 内底面に黒色物質付着
12-22	〃	常滑 甕	底部小片			a.輪積技法 b.灰色 白色粒 砂粒 c.暗褐色～暗赤褐色
12-23	〃	瓦質 火鉢	口縁部小片			a.ヘラ成形 b.灰白色 砂粒多量 小石粒 d.灰色～黒灰色 f.黒色処理
12-24	〃	銅製品 用途不明	残存長1.1 径0.8高さ1.0 厚さ0.05			f.経典等の軸芯両端につく隅金具か
12-25	〃	銅製品 目釘	長さ1.8幅0.6厚さ0.2 上部径1.0 孔径0.2			f.留め金周縁に細い花弁状の刻が入る 下方に孔有り
12-26	〃	銅製品 用途不明	厚さ0.2 ～ 0.3			f.一辺1.1㎝の立方体の様な形真中は空洞 用途不明の為向き定かでないが上面中央部に径0.1㎝の孔、側面に三本ずつ切り込みがあり、上下面から見ると花弁の様になる
12-27	〃	銅製品 環状金具	径 1.4 ～ 1.7			f.留め金部分と思われる
12-28	〃	銅銭	外径24.8㎜内径18.4㎜ 孔径5.6㎜厚さ1.5㎜			f.咸平元寶 北宋 初鋳998年
12-29	〃	銅銭	外径24.6㎜内径19.8㎜ 孔径7.0㎜厚さ1.4㎜			f.皇宋通寶 北宋 初鋳1037年
12-30	〃	銅銭	外径23.8㎜内径17.6㎜ 孔径5.4㎜厚さ1.5㎜			f.紹聖元寶 北宋 初鋳1094年
12-31	〃	銅銭	外径25.4㎜内径20.7㎜ 孔径6.0㎜厚さ1.4㎜			f.政和通寶 北宋 初鋳1111年
12-32	〃	木製品 箸	長さ26.0厚さ0.7			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
12-33	〃	木製品 箸	長さ21.3厚さ0.6			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
12-34	〃	木製品 曲物	残存長25.3厚さ0.6			f.曲物底の1/4程度破片
13-1	第2面直上（溝1より東側）	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁～底部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色不透明 やや厚く施釉
13-2	〃	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	体部小片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 やや厚く施釉 貫入あり
13-3	〃	白磁 口冗碗	体部小片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.再火で白濁した灰緑色の不透明 薄手施釉
13-4	〃	白磁 口冗皿	体部小片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色不透明 薄手施釉 ピンホール有り
13-5	〃	常滑 甕	口縁部小片			a.輪積技法 b.灰色 白色粒・黒色粒・砂粒少量 c.赤褐色 降灰部:灰緑色 d.自然降灰 f.中野編年６型式に相当と考えられる
13-6	〃	女瓦	厚さ3.0 ～ 3.4			a.凹面:離れ砂若干付着 縦方向ナデ 凸面:離れ砂若干付着 斜格子の叩き目（叩き板幅5.5㎝）端面:削り 端縁：やや幅広の削り 側面:削り 側縁:ナデ b.灰白色 白色粒 砂粒 良土 c.灰色 e.良好 f.部分的に二次焼成受け暗灰色

表５　遺物観察表（５）

（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種別	口径（ｃｍ）	底径（ｃｍ）	器高（ｃｍ）	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-7	〃	骨角製品 笄	残存長7.8幅1.0厚さ0.2			a.骨を刃物で削り出す 幅が狭く薄い作り
13-8	〃	骨角製品	径1.5 中央孔径0.4			f.装飾具 中央に穴があけられ周縁より孔に向け線刻した菊花文
13-9	〃	木製品 箸	長さ17.8厚さ0.8			a.片端欠失 刃物で断面多角形に削り加工
13-10	第2面直上（溝1より東側）	木製品 箸	長さ18.2厚さ0.6			a.刃物で断面多角形に削り、両口加工
17-1	第3面土坑1	かわらけ	7.8	5.5	2.0	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
17-2	〃	かわらけ	(8.3)	(6.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-3	〃	かわらけ	(11.1)	(4.8)	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好
17-4	第3面土坑2	常滑 壺	縁帯～頸部片			a.輪積技法 b.明灰色 黒色粒 白色粒やや多め c.褐色 降灰部:明灰緑色 e.良好 f.中野編年6a型式
17-5	〃	龍泉窯 青磁 鎬蓮弁文碗	口縁～体部小片			a.ロクロ 外面:鎬蓮弁文 b.灰白色 精良堅緻 d.灰緑色透明 薄手施釉
17-6	第3面土坑3	木製品 用途不明	長さ8.2幅1.5 厚さ0.9～1.6			f.先端部と中央に黒漆と思われる黒色の付着物あり
17-7	第3面P-1	かわらけ	(8.6)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
17-8	第3面P-4	かわらけ	(9.0)	(7.2)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
17-9	第3面P-5	かわらけ	7.9	5.8	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 赤色粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
17-10	〃	かわらけ	8.1	5.3	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 赤色粒 土丹粒 砂質やや粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
17-11	第3面P-6	かわらけ	(5.4)	(3.8)	1.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-12	第3面P-7	木製品 球状	径3.7			a.球状に加工を施す 毬杖の玉のようなものか
17-13	第3面上	かわらけ	(7.5)	(5.2)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
17-14	〃	かわらけ	(7.9)	(5.2)	1.5	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
17-15	〃	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.6	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好
17-16	〃	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-17	〃	かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.8	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 良土 c.黄橙色 e.良好
17-18	〃	かわらけ	(7.6)	4.8	1.7	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-19	〃	かわらけ	(8.2)	(6.2)	1.3	a.ロクロ 外底回転糸切痕 b.微砂 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
17-20	〃	かわらけ	12.8	8.4	3.2	a.ロクロ 外底回転糸切痕 板状圧痕 b.微砂 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.二次焼成を受け所々黒く変色
17-21	〃	白磁 口兀碗	口縁部小片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.暗白色透明 薄手施釉 口唇部露胎
17-22	〃	白磁 口兀碗	体部小片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.暗白色透明 薄手施釉 内外面施釉

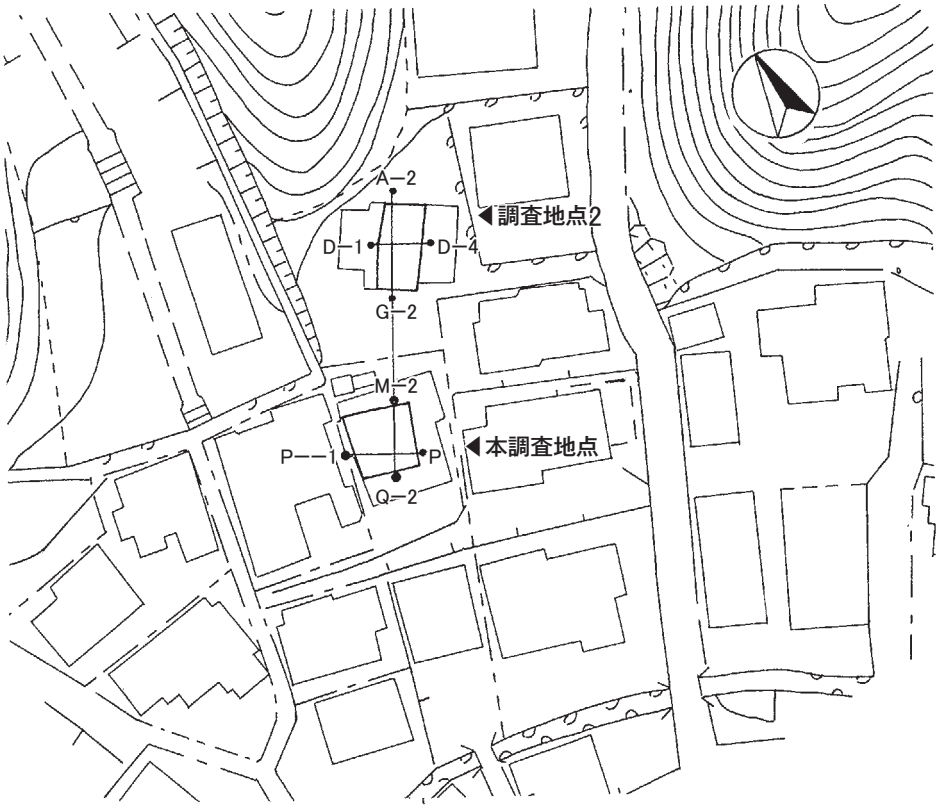
第四章　まとめ

本遺跡周辺には既に廃寺となっているが、「二階堂」の地名に由来する源頼朝御願寺の大寺院永福寺がある。当寺は奥州平泉の中尊寺二階大堂・大長寿院を模して造立され、別に二階堂と号した。鎌倉宮（大塔宮）の地は東光寺の旧跡と伝えら、その西側に残る小字名「四つ石」（永福寺総門＝礎石建ちの四脚門か）から二階堂川を挟んだ北東方の支谷には理智光寺があり、裏山の丘陵上には足利直義にって殺害された護良親王の墓塔が建っている。調査地点は紅葉ヶ谷の開口部東寄りに位置し、谷戸奥には遺跡名称にもなった瑞泉寺がひっそりとした佇まいをみせている。当寺は嘉暦二年（1327）の開創、二階堂南芳庵に住していた夢窓疎石を開山、二階堂道蘊（貞藤）開基と伝えられているが、はじめ瑞泉院と称したという。奉行人の二階堂氏は、鎌倉以来の豪族で工藤氏（伊豆伊東氏）からの分流であり、鎌倉初期から幕府に仕えていた行政は『吾妻鏡』建久五年（1194）十二月二日条に永福寺阿弥陀堂の奉行人として中原親能や武藤頼平と共にその名を連ねており、氏の称はこの二階堂に由来したもので、永福寺周辺に邸宅を構えていたのにちなんだ可能性を持っている。

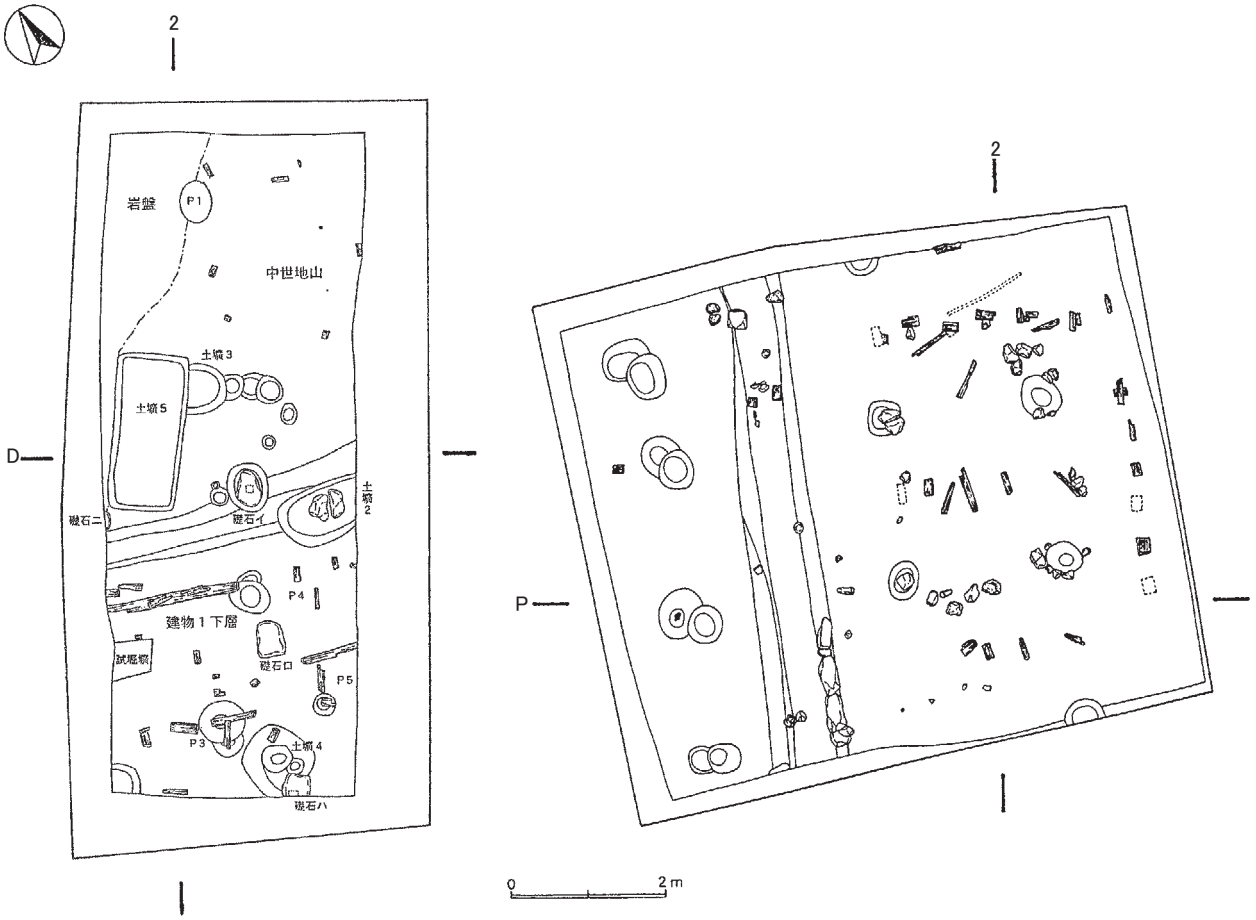
今回の調査において検出した遺構は谷戸内の山裾岩盤と中世地山とを削平して造成した第3面と、その上に破砕土丹塊を混ぜた地形層による第2面が、その上層の海抜高約22.70mでは拳大～頭大の大小土丹塊を多量に用いた厚い整地造成を挟んで検出したのが第1面で土地利用の変革を窺わせた。さらに図19に掲載した本調査地点の北側に位置した調査地点2（二階堂字紅葉ヶ谷647番6外地点：松吉・原2009）の調査においても同一造成を思わす破砕した大小土丹塊の厚い整地層が発見され、第1面の構築に伴う造成層と同じ工法の様相を示しており、海抜高約23.20mで確認された。両調査地点の整地層上面は比高差50cm程であり、これは現地形の北から南へと傾斜する谷戸地形にほぼ相応する比高差になるもので同時期に造成されたと想定できる。このような谷戸内における大小土丹塊の整地造成では、周囲の丘陵や山裾を大規模に掘削して行われた工事と思われるが、こうした丘陵や山裾の切り崩しと、土砂の搬出などには何らかの権力が介在したことが想像されよう。

第3・2面に発見された同一軸方向を示した礎石建物や掘立柱建物は、調査地が寺院関連施設や屋敷跡の一画であったことを窺わせるが、この建物が寺院関連施設だったことを積極的に示唆する遺物は認められなかった。屋敷跡の一画であったかもしれない。第3・2面に伴う遺物は出土資料総数の6割以上を占めており、その中でロクロ成形のかわらけが多くを占めている。建物内や土坑から出土したかわらけにはいわゆる「薄手丸深」形状が混じっていたこと、そして図示不可能な細破片を含めても手づくね成形のかわらけは全体量で僅か3点だけで、この両生活面に伴う建物は13世紀後葉以降、14世紀前葉に建てられたものと思われる。第1面の構築に伴う大造成において明確化する土地利用の変化は、調査地点2も合わせてそれ以前とは異なる性格を持ち始めたことを窺わせる。出土したかわらけの特徴は、薄手丸深型が主体をなしていたが、この他に体部が直線的に開き、側面観が逆台形状気味を呈した器形資料も一定量が混在しており、14世紀中頃から15世紀前葉に比定されるものと考えられる。

次に今回の調査からはコンテナ箱で5箱の遺物が出土した。ここでは表6を参照にして、出土遺物の種類別の出土量や出土比率の組成について述べることにしたい。なお、出土点数については便宜上、接合後の破片数（個体数）を使用している。この表では遺物をかわらけ（ロクロ・手捏ね成形）貿易陶磁器（青磁・白磁・青白磁）、国産陶器（瀬戸・常滑・渥美窯産品）、土製類（瓦類・瓦質火鉢・土器質火鉢）、石製品（砥石・滑石）、金属製品（銭・鉄滓他）、骨角製品、木製品（箸他）、自然遺物（動物骨・



▲近隣調査地点位置図

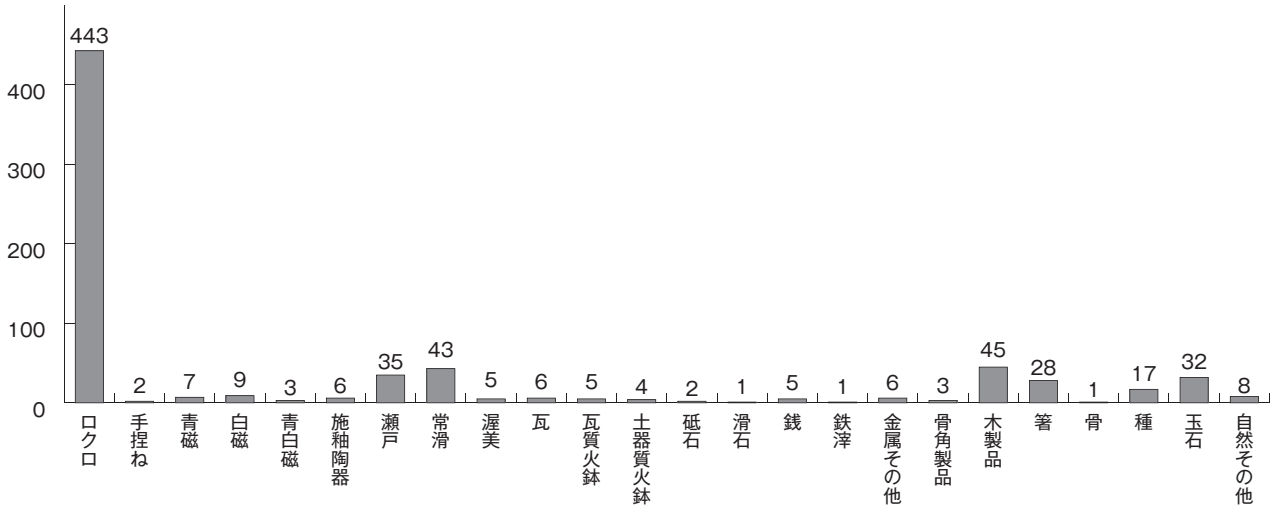


▲調査地点2（図1参照）　　▲本調査地点

図19　近隣調査地点対応図

表６　遺物分類別出土数量・比率表

出土地 種類		1面	2面	3面	個数	比率(％)
かわらけ	ロクロ	184	216	43	443	61.79%
	手捏ね	0	0	2	2	0.28%
舶戴陶磁器	青磁	0	6	1	7	0.98%
	白磁	0	7	2	9	1.26%
	青白磁	1	2	0	3	0.42%
	施釉陶器	0	6	0	6	0.84%
国産陶器	瀬戸	28	7	0	35	4.88%
	常滑	18	18	7	43	6.00%
	渥美	1	4	0	5	0.70%
土製品	瓦	1	5	0	6	0.84%
	瓦質火鉢	1	4	0	5	0.70%
	土器質火鉢	0	4	0	4	0.56%
石製品	砥石	0	2	0	2	0.28%
	滑石	1	0	0	1	0.14%
金属品	銭	0	5	0	5	0.70%
	鉄滓	1	0	0	1	0.14%
	その他	0	6	0	6	0.84%
加工品	骨角製品	1	2	0	3	0.42%
	木製品	0	32	13	45	6.28%
	箸	0	20	8	28	3.91%
自然遺物	骨	0	1	0	1	0.14%
	種	0	4	13	17	2.37%
	玉石	16	14	2	32	4.46%
	その他	1	7	0	8	1.12%
合計		254	372	91	717	100%
比率(％)		35.43%	51.88%	12.69%	100%	



種子・玉砂利等）に区分している。調査において総数約717点（100%）の遺物が出土し、そのうち58点（8.1%）が自然遺物で、残り562点（78.4%）が土器・陶磁器等の製品であった。最も多く出土したのはロクロ成形を主体としたかわらけ445点（内訳はロクロ成形443点、手捏ね成形2点：62.1%）、ついで箸を含んだ木製品73点（10.1%）、常滑窯43点（6.1%）である。以下、分類別の出土比率ついても触れる。

貿易陶磁器は少なく合計25点出土し、その内訳は青磁7点、白磁9点、青白磁3点、施釉陶器6点である。特に青磁では龍泉窯鎬蓮弁文碗、白磁では口冗碗皿がほとんどを占めており、施釉陶器は泉州窯系緑釉や二彩の盤が出土した。国産陶器は総数83点（11.6%）が出土し、内訳は瀬戸35点（4.9%）、常滑点（6.0%）、渥美3点（0.7%）である。

谷戸内の土地利用の変化は、両調査地点においてほぼ同じ土地造成の変遷と、近似した様相の遺物を共伴する第3・2面の生活面から同一軸方向を持つ礎石建物や掘立柱建物が検出された。これらの建物が寺院関連の堂舎（庫裡・方丈・僧房など）だったことを積極的に示唆するような明瞭な遺物は伴っておらず、屋敷地跡の一画であった可能性も考えられよう。ところで第1面においては建物は見られなくなるが、丘陵を大規模に掘削するような造成は、鎌倉幕府崩壊後もある程度の権力を保持し続けた権門勢力の係わるような領域であったことを示唆するものであろう。当調査地の谷戸は廃寺などいずれかの寺域の存在はこれまで推定されていないが、周辺には谷戸東奥に瑞泉寺、西に永福寺、南に理智光寺や東光寺などが存在していたと考えられ、この地もいずれかの寺院の影響が及んでいた可能性も否定できない。今後とも谷戸内での調査継続によって、この場の土地利用が次第に明らかにされていくものと思われる。

【引用・参考文献】

赤星直忠　1980「永福寺の研究」(『中世考古学の研究』所収) 有隣堂

白井永二編　1992『鎌倉事典』東京堂出版

宗臺秀明　2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」『かながわの中世～鎌倉から小田原～　－土器様式を中心として－』

2008「中世鎌倉の都市性」『白門考古論叢』中央大学考古学研究会編

宗臺富貴子　1996「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について－前期から後期までの出土様相－」『㈶瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯

中野晴久　2012「常滑窯の展開」『シンポジウム　中世渥美・常滑焼をおって』日本福祉大学知多半島総合研究所

貫　達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂

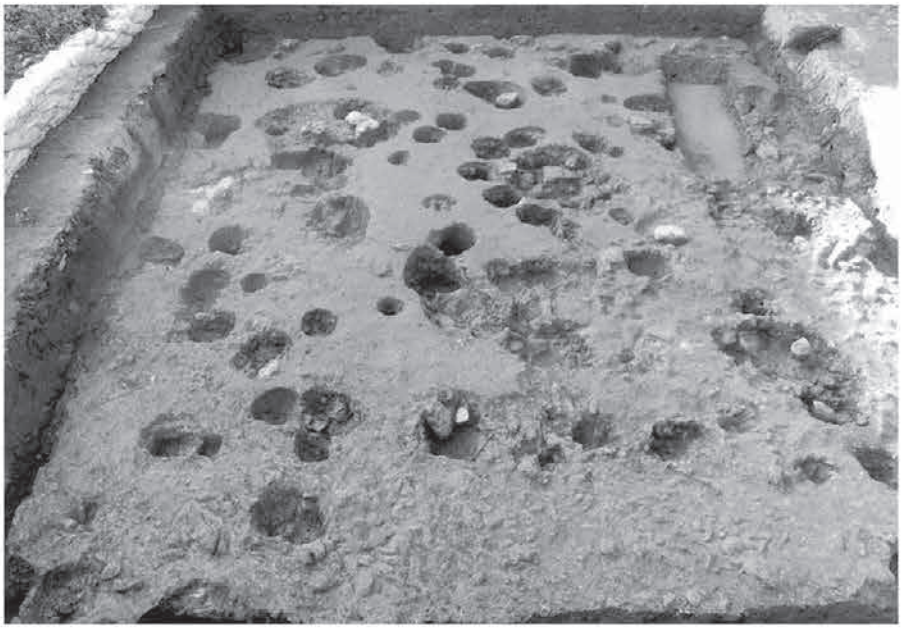
藤澤良祐　1995「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

馬淵和雄　1986「鎌倉永福寺とその范池」『佛教藝術』No.164　佛教藝術学会

1992「中世鎌倉における谷戸開発のある側面」『鎌倉』No.69　鎌倉文化研究会

◀ａ．第１面全景
（南から）

ｂ．第１面全景▶
（東から）



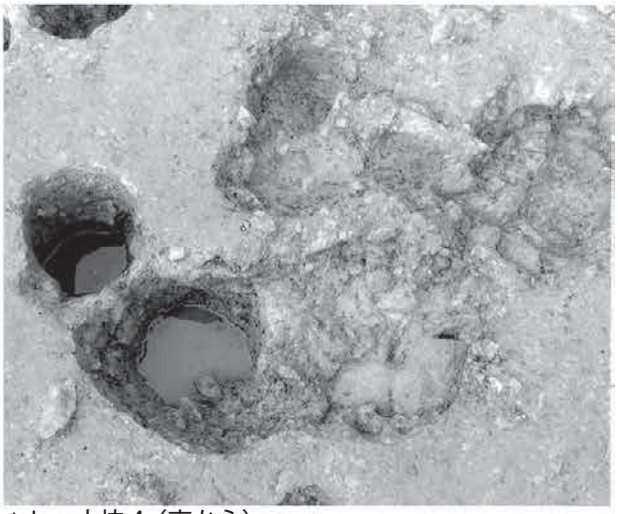
◀ｃ．第１面土坑１
（北から）

◀Ｐ１

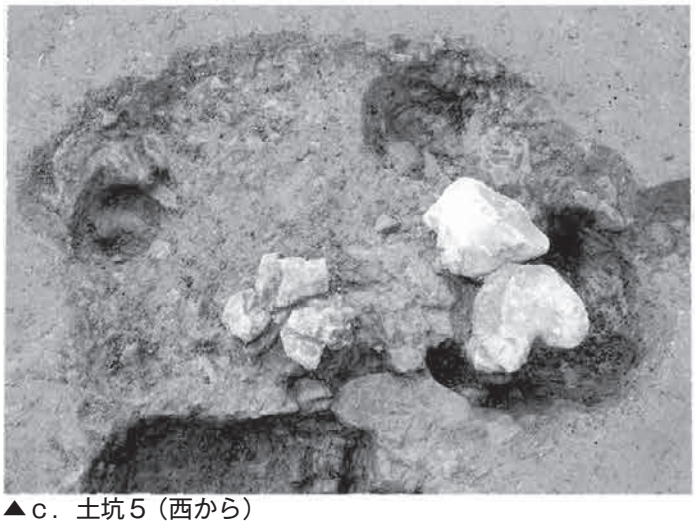
第１面

図版２

▲ａ．土坑３（北から）

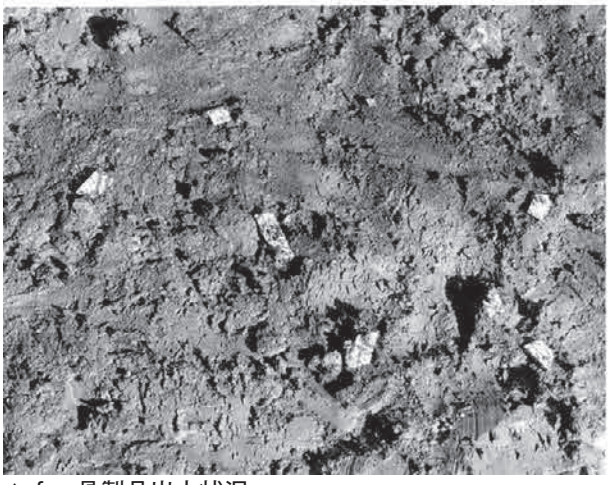


▲ｂ．土坑４（南から）



▲ｃ．土坑５（西から）

▲ｄ．Ｐ18（北から）



▲ｆ．骨製品出土状況

▲ｅ．Ｐ８、Ｐ26（西から）

第１面

◀ａ．第２面全景
（東から）

ｂ．第２面全景▶
（南から）

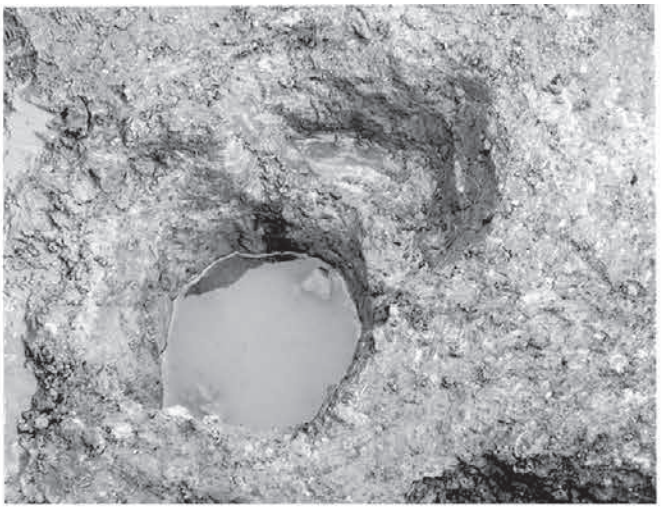
◀ｃ．第２面建物１・２、溝１（南から）

▲ｄ．建物３（東から）

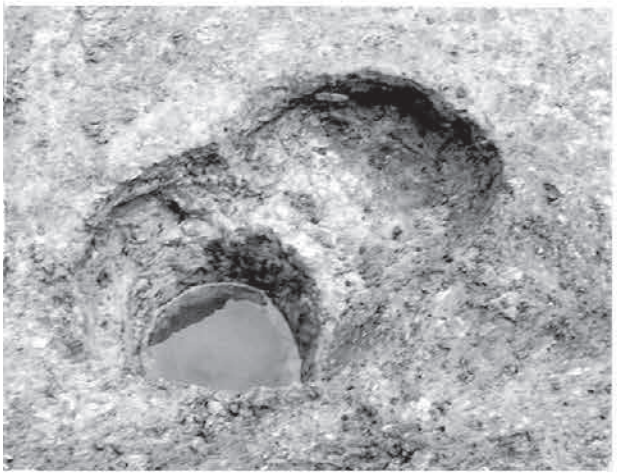
第２面

図版４

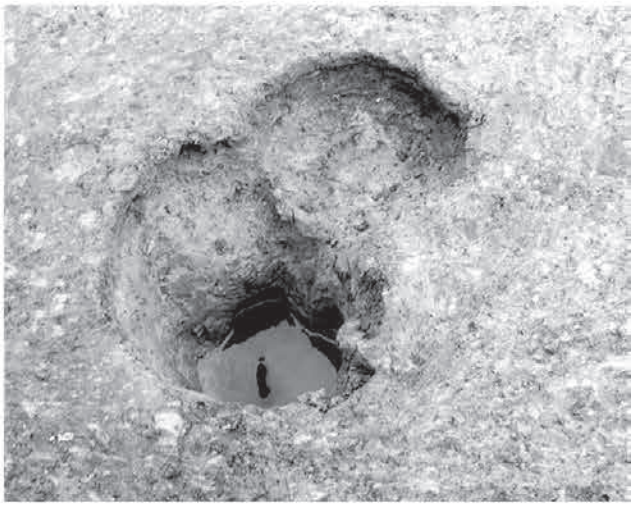
▲ａ．建物１・２（北から）



▲ｂ．建物１－１・２－１柱穴



▲ｃ．建物１－２・２－２柱穴

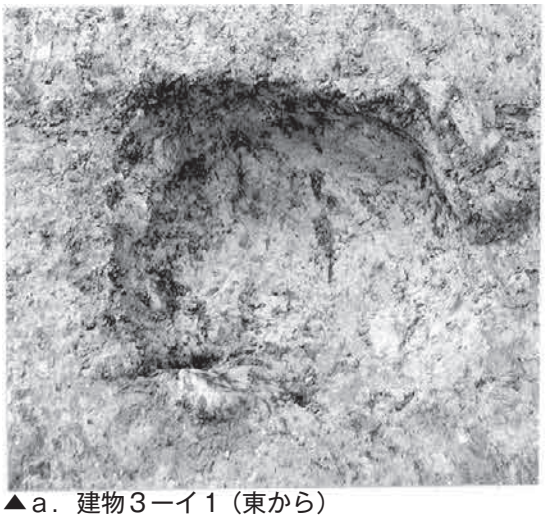


▲ｄ．建物１－３・２－３柱穴

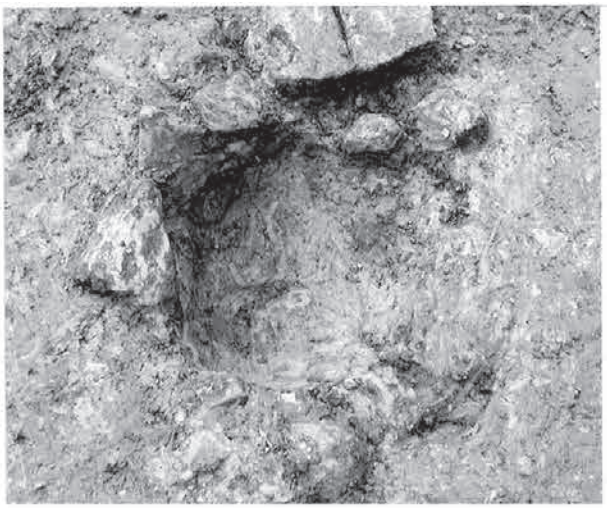
▲ｅ．建物３検出状況（北から）

▲ｆ．建物３検出状況（南から）

第２面



▲ａ．建物３ーイ１（東から）



▲ｃ．建物３ーロ１（東から）

▲ｂ．建物３ーイ２（東から）

▲ｄ．建物３ーロ２（東から）

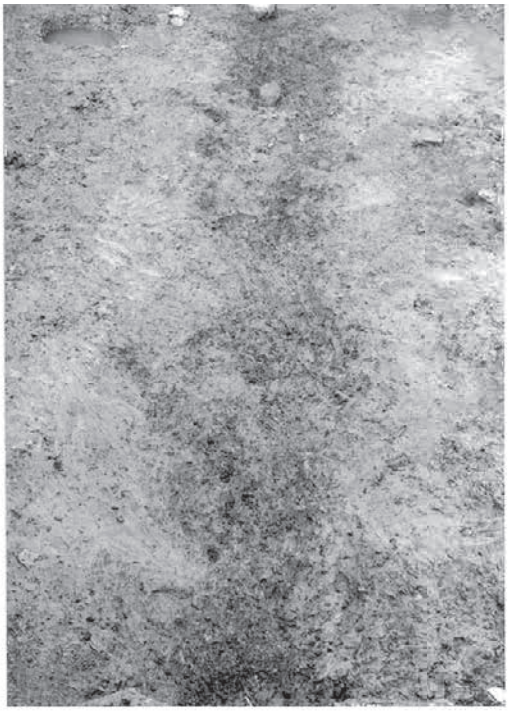
◀ｅ．建物３　中央礎板列（西から）

▶ｆ．建物３　北側礎板列（西から）

第２面

図版６

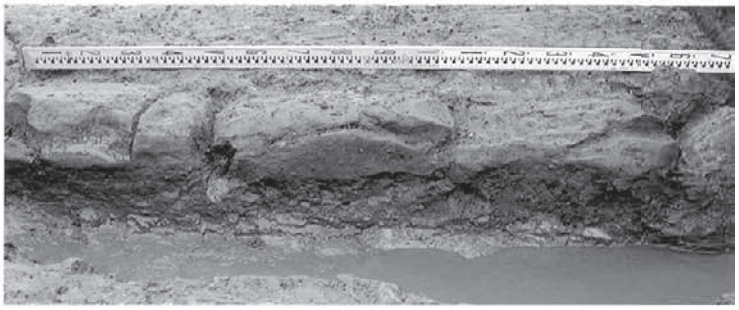
◀a．溝１完掘状況（南から）



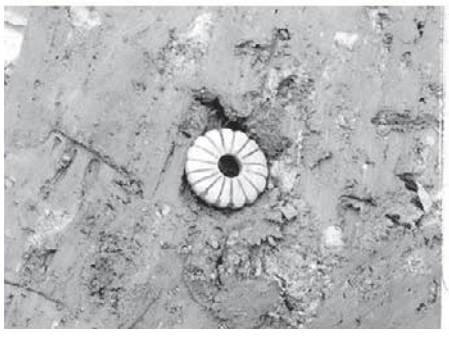
◀c．溝１炭化物層検出状況（南から）

▼b．溝１完掘状況（北から）

▼d．溝１石組検出状況（西から）



▶e．銅製品出土状況



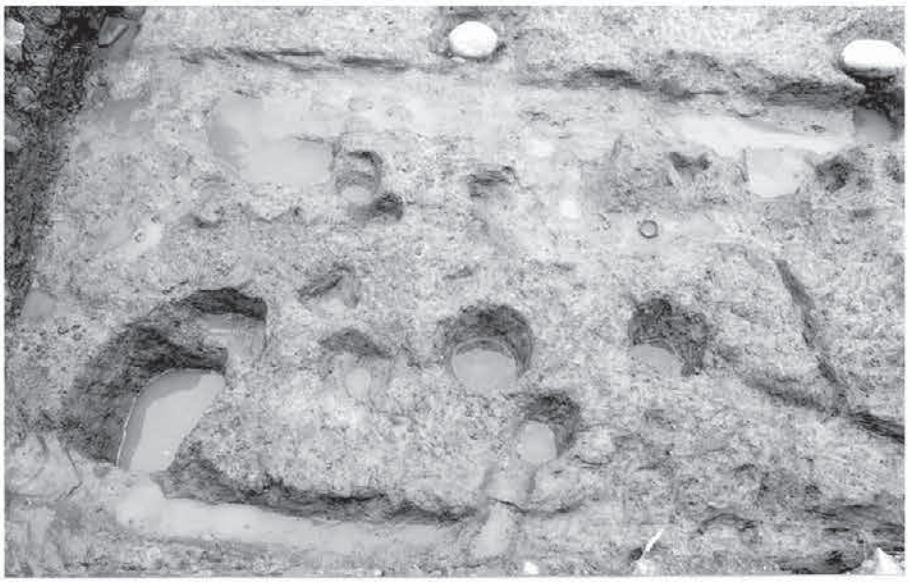
◀g．骨製品出土状況

▼f．銅製品出土状況

第２面

◀ａ．第３面全景（東から）

第３面全景ｂ．▶（南から）



◀ｃ．調査区西側遺構群（西から）

第３面

図版８

▲ａ．調査区北西域遺構群（西から）

▲ｂ．建物１、溝１（北から）

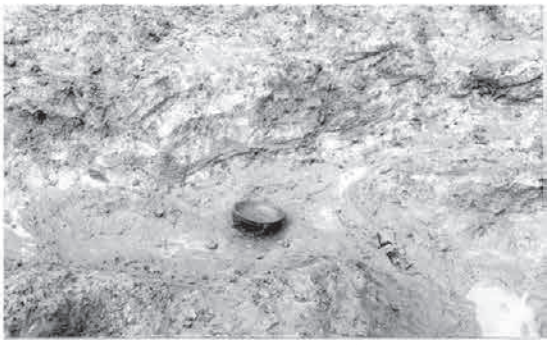
▲ｃ．建物１イー１（南から）

▲ｄ．建物１イー２（西から）

▲ｅ．建物１イー３、柱穴（西から）

▲ｆ．建物１イー４（西から）

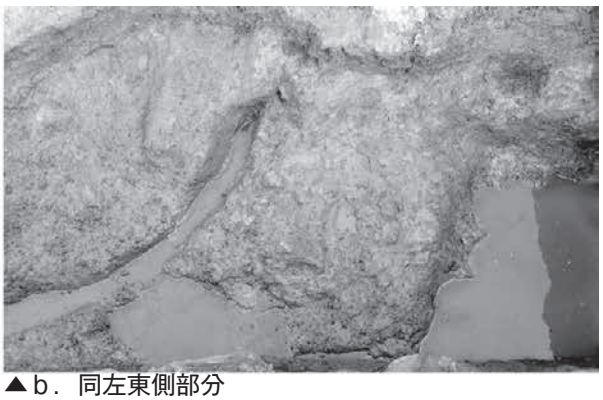
▲ｈ．土坑４（南から）



▲ｇ．土坑１（東から）

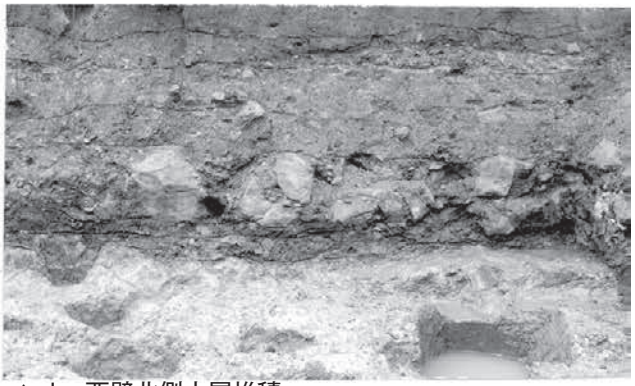
第３面

▲ａ．調査区南東隅トレンチ（南から）

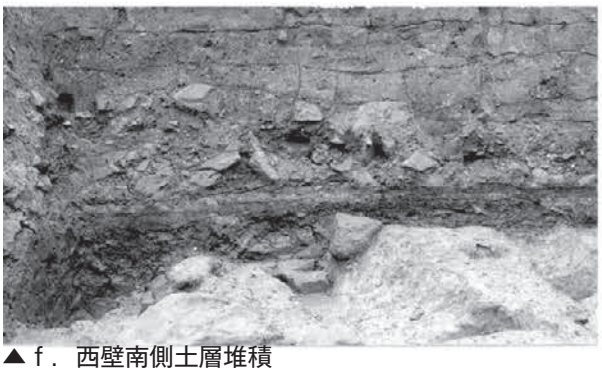


▲ｂ．同左東側部分

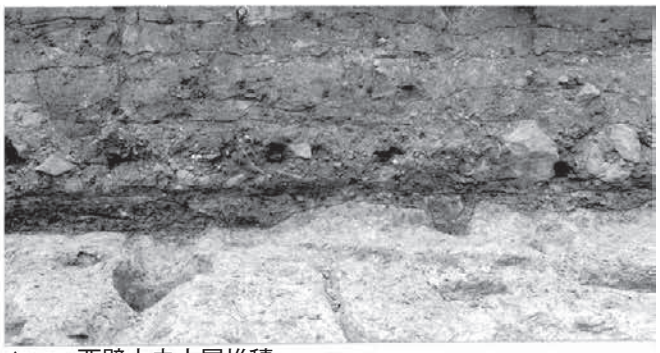
▲ｃ．西壁土層堆積



▲ｄ．西壁北側土層堆積

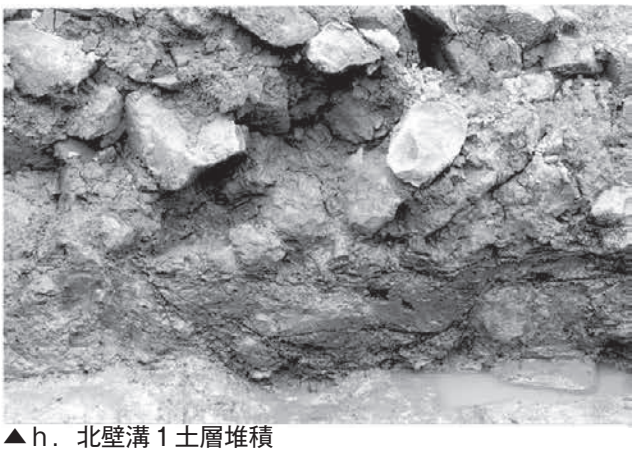


▲ｆ．西壁南側土層堆積



▲ｅ．西壁中央土層堆積

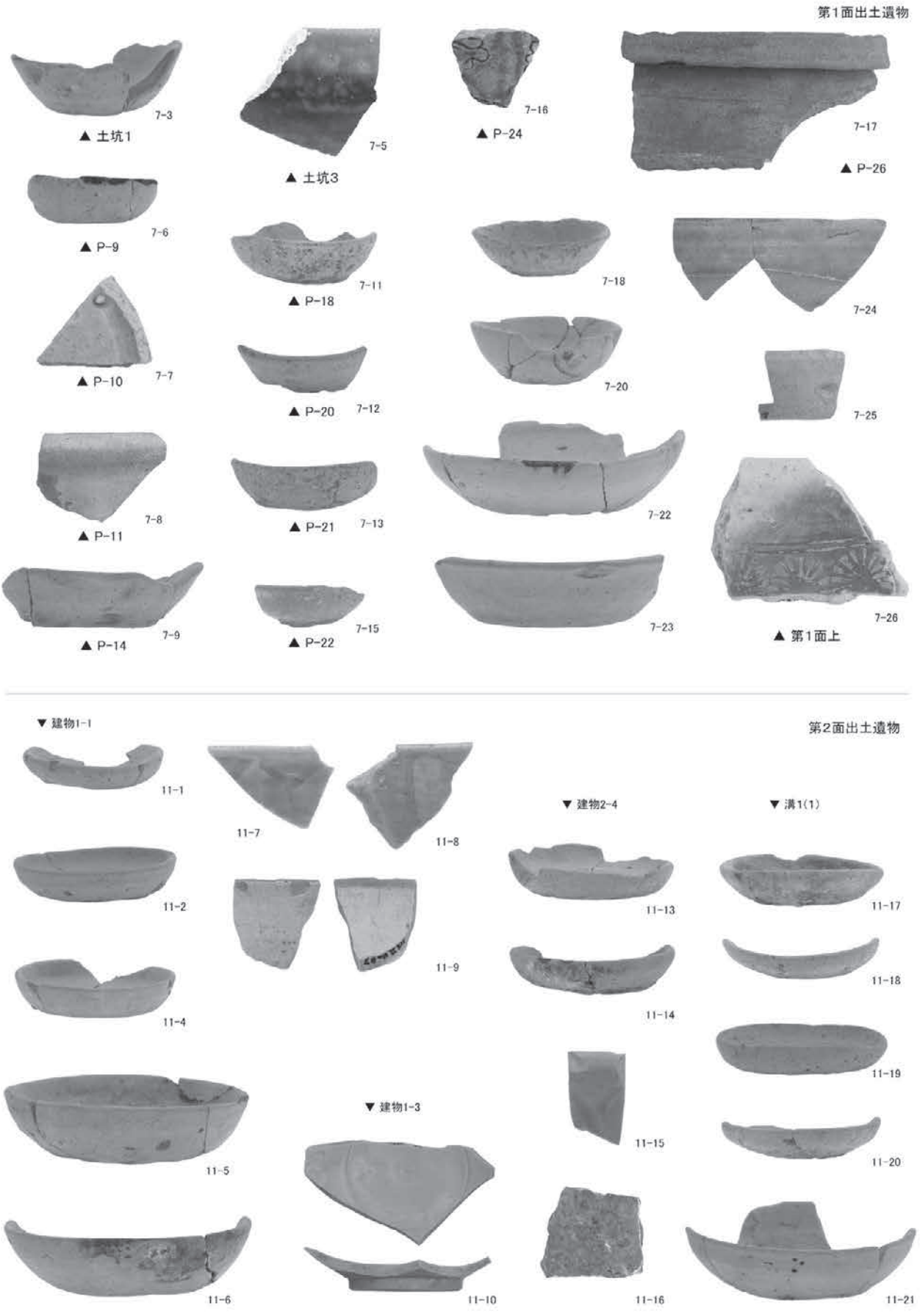
▲ｇ．東壁土層堆積



▲ｈ．北壁溝１土層堆積

第３面下、調査区壁土層断面

図版10

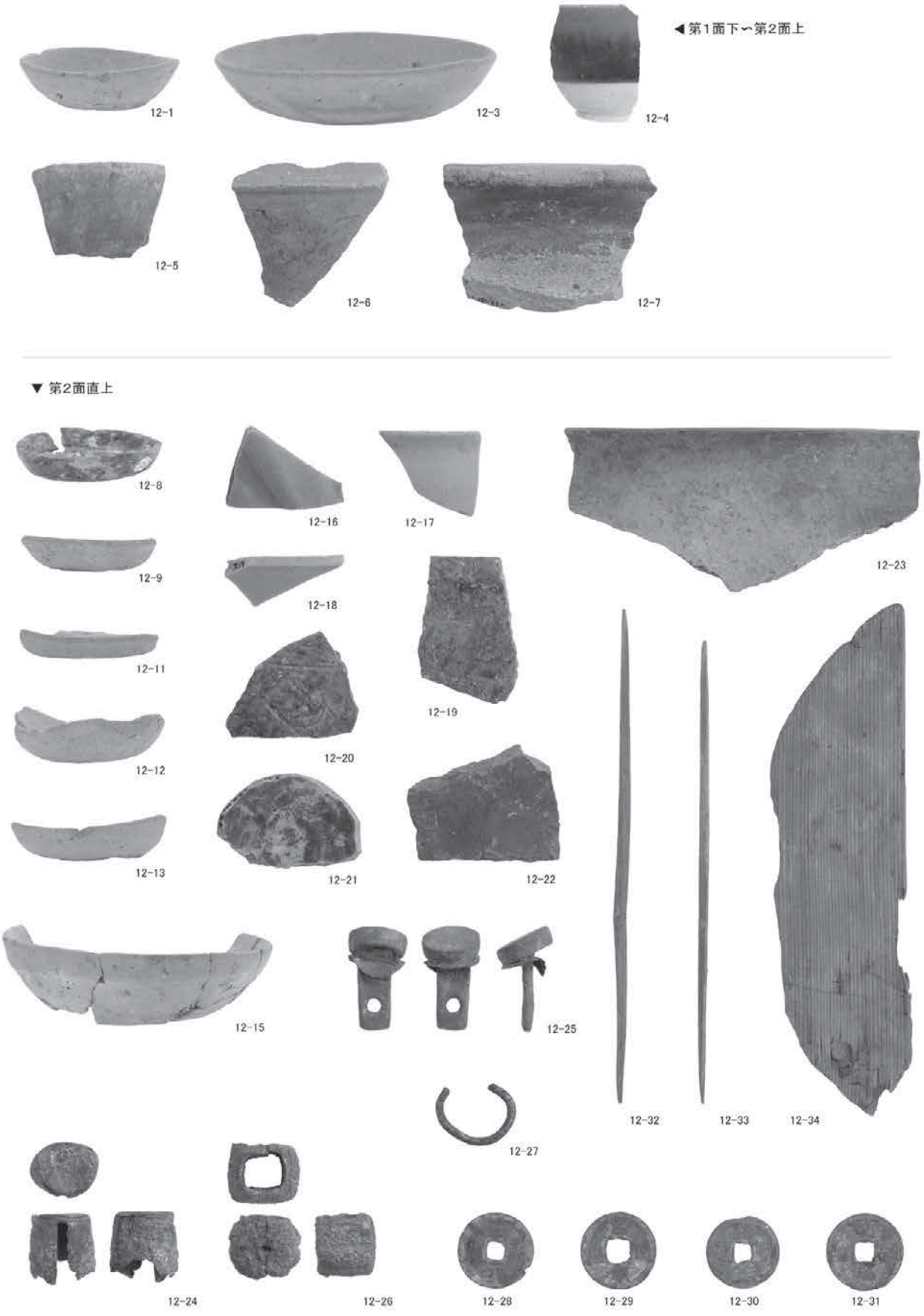


第１面、第２面遺構出土遺物（１）

溝1(2)▼
11-22
11-25
11-28
11-23
11-26
11-29
11-24
11-27
11-30
11-32
11-35
11-33
11-37
11-39
11-31
11-36
11-38
11-34
11-46
11-48
11-50
11-40
11-41
11-42

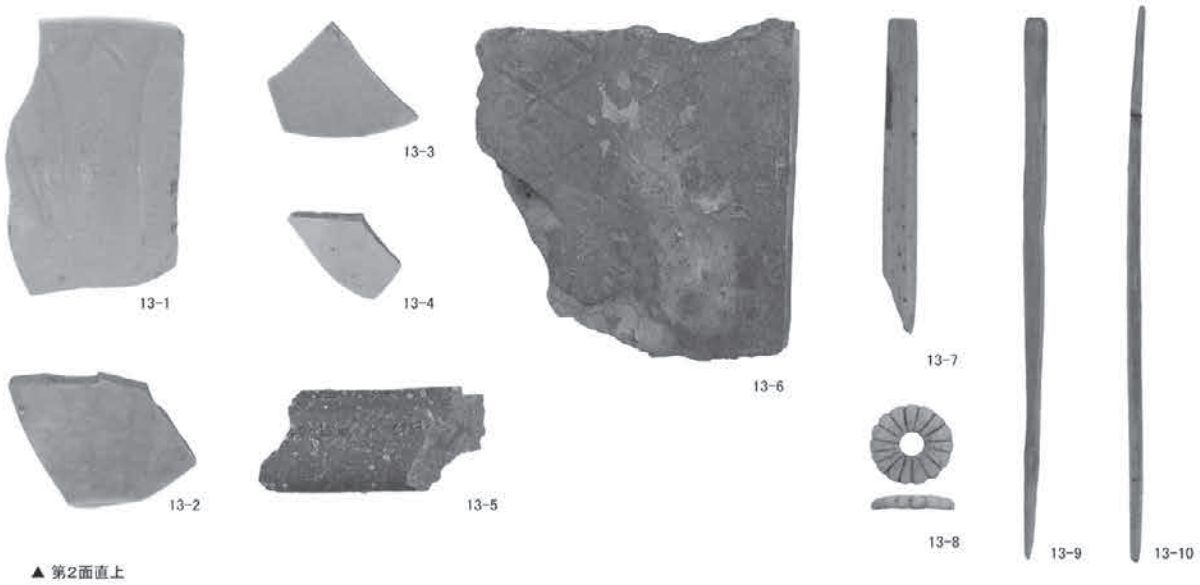
第２面遺構出土遺物（２）

図版12

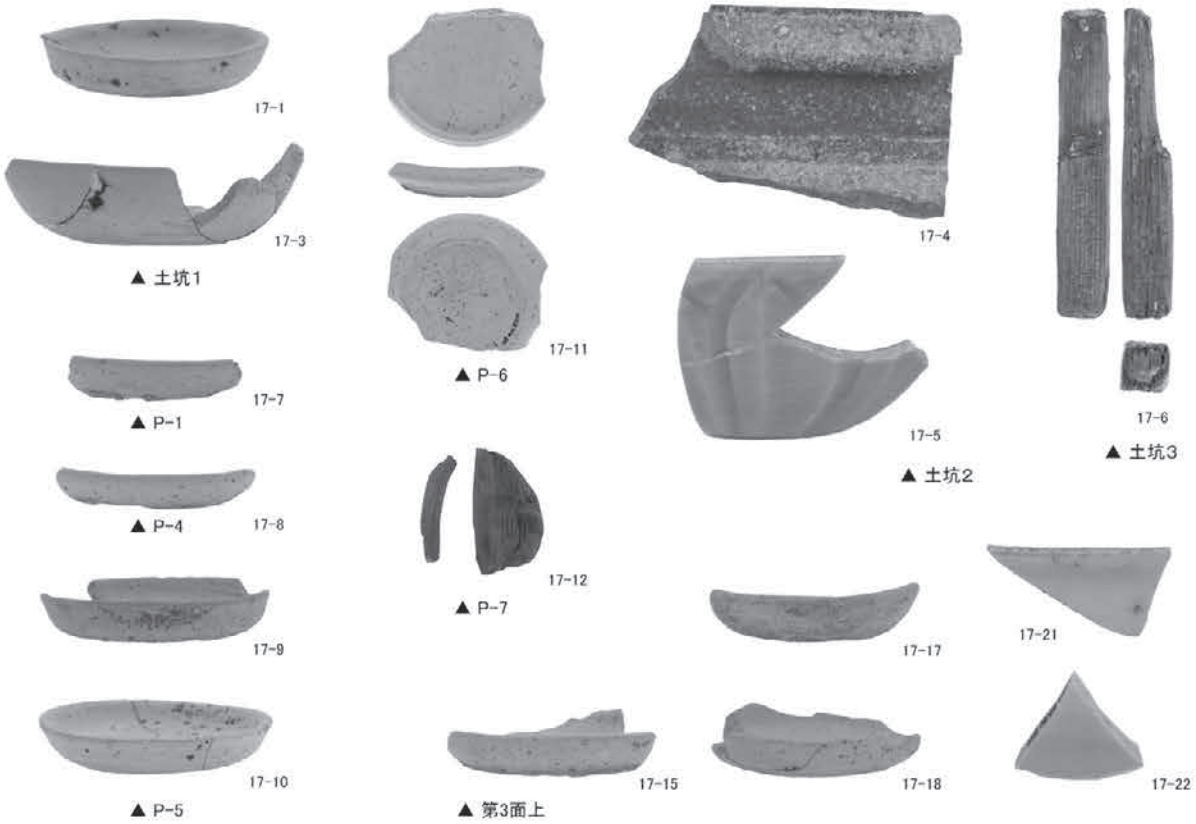


第２面遺構出土遺物（３）

第2面遺構



第3面遺構



第２面、第３面遺構出土遺物（４）

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

二階堂荏柄 76 番 8 地点

例　言

1．本報は鎌倉市二階堂荏柄76番8地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は個人専用住宅に係る建築範囲３５㎡を対象とし、平成１８年2月１７日から平成１８年４月２４日にかけて実施した。

3．現地での調査体制は以下の通り。

担当者	伊丹まどか
調査員	宇都洋平・鍛冶屋勝二・本城裕
作業員	河原龍雄・清水政利・田島道夫・(社) 鎌倉市シルバー人材センター

4．本報作成は以下の分担で行った。

遺構図版作成	岡田慶子・田畑衣理・渡辺美佐子
遺物実測	岡田慶子・田畑衣理・渡辺美佐子・伊丹まどか
遺物図版作成	岡田慶子・田畑衣理・渡辺美佐子
観察表	田畑衣理
遺構写真	宇都洋平・鍛冶屋勝二
遺物写真	須佐仁和
写真図版作成	田畑衣理
執筆・編集	松吉大樹(歴史的環境)・田畑衣理(グリッド配置図)・伊丹まどか

5．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が管理している。

6．本報図版の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。
遺構全測図：１／６０　個別遺構図：１／４０　　実測遺物図：１／３　　銭：１／１
なお各挿図にはスケールを表示してある。

7．検出した遺構の計測値・実測遺物観察表および、実測できなかった遺物の破片数は表にまとめて掲載した。

8．出土した遺物及び、調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

9．発掘調査及び報告書作成に関しては下記の方々よりご教授、ご協力を賜りました。記して深く感謝いたします。(敬称略・五十音順)
太田美智子・沖元道・押木弘巳・菊川英政・齊木秀雄・汐見一夫・原廣志・馬淵和雄

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 59

1．調査地の位置と歴史的環境（図１）
2．調査の経過（図２）
3．堆積土層（図３）

第二章　発見された遺構と遺物 …… 66

1．第１面の遺構と遺物（図４～図14）
2．第２面の遺構と遺物（図15～図21）
3．第３面の遺構と遺物（図22～図29）
4．第４面の遺構と遺物（図30～図32）
5．第５面の遺構と遺物（図33～図36）
6．第６面（図37）

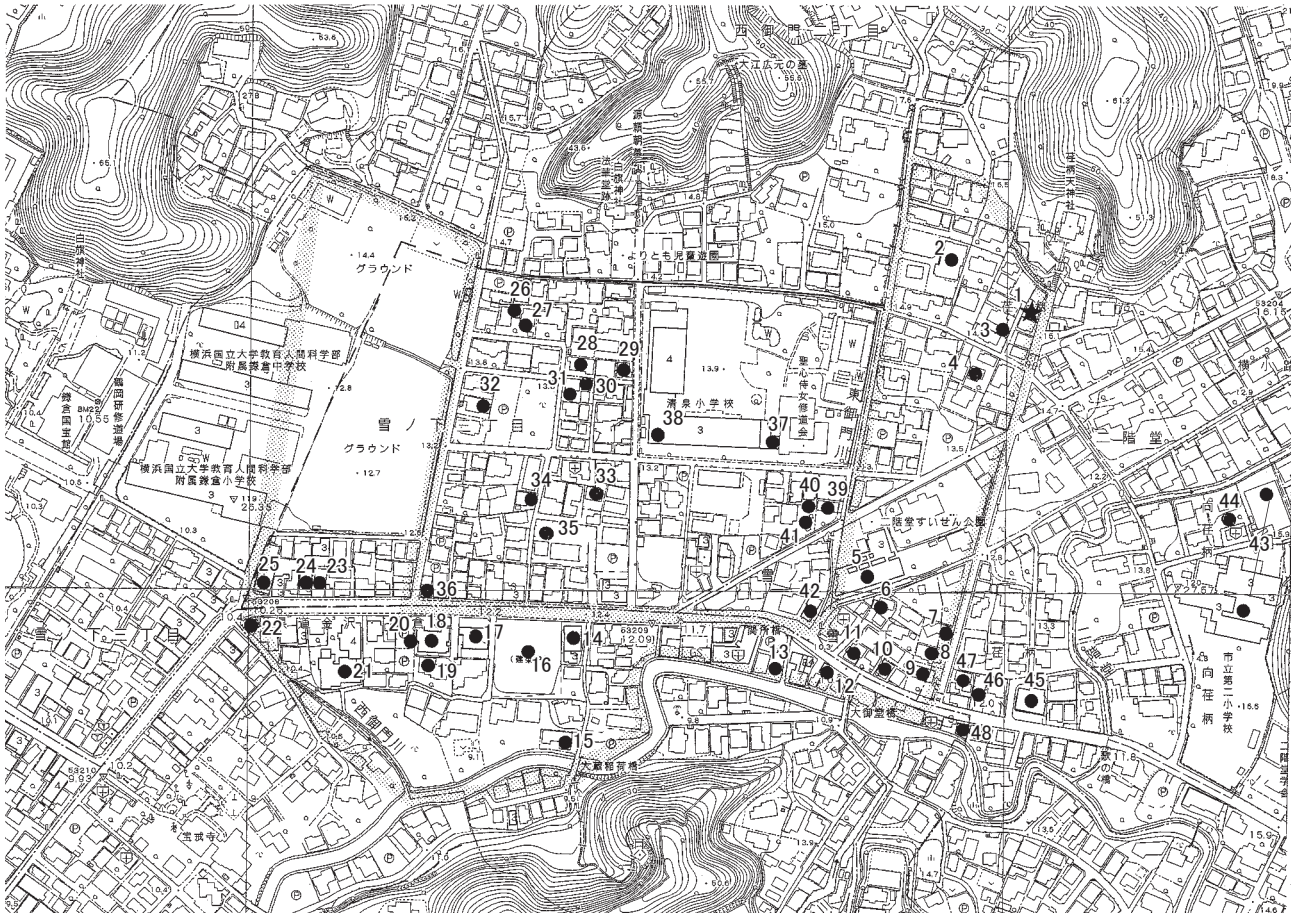
第三章　まとめ …… 108

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡図 ……57
図２　調査区の位置とグリッド配置図 ……58
図３　堆積土層図 ……62
図４　第１面全測図 ……65
図５　第１面各遺構（１）……67
図６　第１面各遺構（２）……68
図７　第１面各遺構出土遺物（１）……69
図８　第１面各遺構出土遺物（２）……70
図９　第１面各遺構出土遺物（３）……71
図10 第１面各遺構出土遺物（４）……72
図11 第１面面上出土遺物（１）……73
図12 第１面面上出土遺物（2）……74
図13 第１面構成土出土遺物（１）……75
図14 第１面構成土出土遺物（２）……76
図15 第２面全測図 ……79
図16 第２面各遺構 ……80
図17 第２面各遺構出土遺物（１）……81
図18 第２面各遺構出土遺物（２）……82
図19 第２面面上出土遺物 ……83
図20 第２面面上出土遺物（２）……85
図21 第２面構成土出土遺物 ……86
図22 第３面全測図 ……87
図23 第３面各遺構（１）……89
図24 第３面各遺構（２）……90
図25 第３面各遺構出土遺物（１）……91
図26 第３面各遺構出土遺物（２）……92
図27 第３面各遺構出土遺物（３）……93
図28 第３面各遺構出土遺物（４）……94
図29 第３面面上・構成土出土遺物 ……95
図30 第４面全測図 ……96
図31 第４面各遺構 ……98
図32 第４面各遺構・遺構外出土遺物 ……99
図33 第５面全測図 …… 101
図34 第５面各遺構・出土遺物（１）…… 102
図35 第５面各遺構・出土遺物（２）…… 103
図36 第５面面上・構成土出土遺物 …… 104
図37 第６面全測図 …… 105
図38 試掘坑・表採出土遺物 …… 107

図　版　目　次

遺構写真図版１ …… 125
　荏柄天神社
　第１面全景（北から）
　第１面調査区東側遺構群（北から）
遺構写真図版２ …… 126
　第１面遺構62　鬼瓦出土状況（西から）
　第１面遺構82（南から）
　第２面全景（東から）
　第３面全景（北から）
遺構写真図版３ …… 127
　第３面全景（東から）
　第３面遺構162　完掘状況（北から）
　第３面遺構162　板草履出土状況（北から）
　第３面遺構162　南東隅検出束柱（西から）
遺構写真図版４ …… 128
　第３面遺構136　礎板検出状況（北から）
　第４面全景（北から）
　第５面全景（北から）
　第５面遺構346　完掘状況（南から）
遺構写真図版５ …… 129
　第５面遺構335　完掘状況（南から）
　第５面遺構331・338・340　完掘状況（東から）
　第６面全景（東から）
遺物写真図版１ …… 130
遺物写真図版２ …… 131
遺物写真図版３ …… 132
遺物写真図版４ …… 133
遺物写真図版５ …… 134
遺物写真図版６ …… 135
遺物写真図版７ …… 136
遺物写真図版８ …… 137
遺物写真図版９ …… 138
遺物写真図版10 …… 139
遺物写真図版11 …… 140



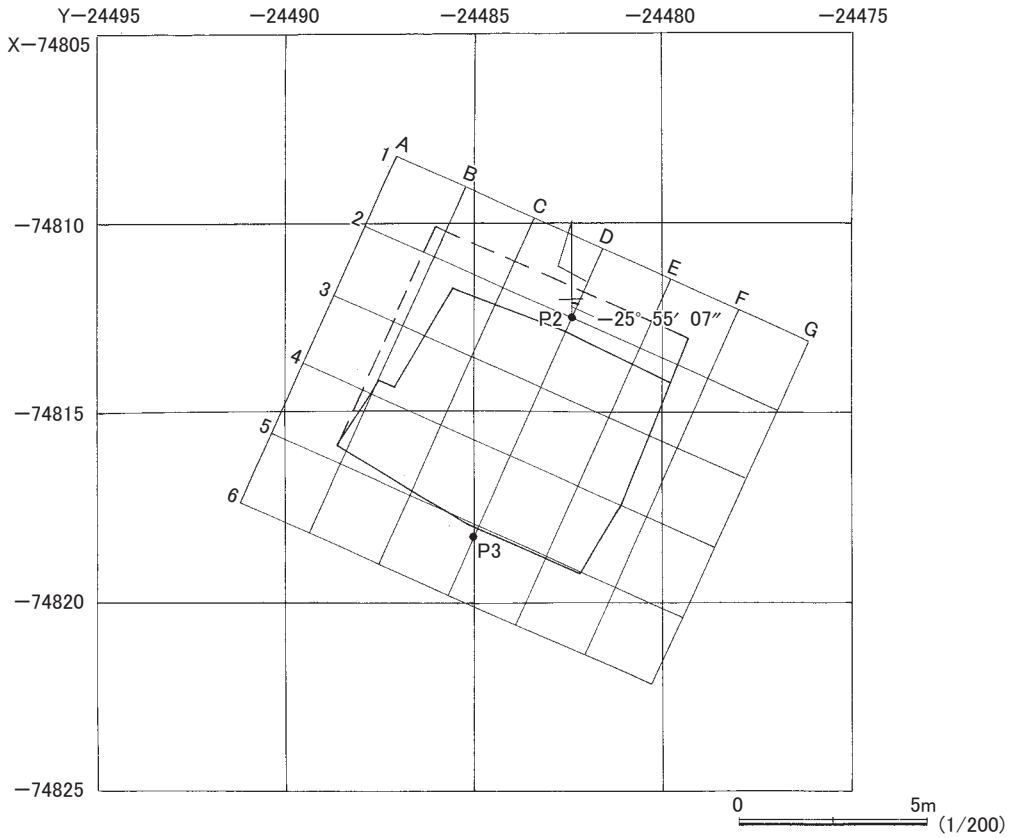
＜調査地点一覧＞

○大倉幕府周辺遺跡群（No.49） 1. 二階堂字荏柄76番8（本調査地点） 2. 二階堂字荏柄58番4外（原2002『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書(以下、市緊急報告書)18－1』） 3. 二階堂76番4（宮田2007 未報告） 4. 二階堂字荏柄27番3の一部（原2006『市緊急報告書22－1』） 5. 二階堂字荏柄38番１（原馬淵1993『市緊急報告書9－2』） 6. 雪ノ下字天神前562番30（馬淵2007　未報告） 7. 二階堂字3番6外（原2006　未報告） 8. 二階堂字荏柄13－6（山口2008 未報告） 9. 雪ノ下字大倉耕地565番4（原1991『市緊急報告書7』） 10. 雪ノ下字天神前562番29（福田1996『市緊急報告書12－1』） 11.雪ノ下字大倉耕地562番16（福田2001『市緊急報告書17－2』） 12. 雪ノ下四丁目567番7（馬淵2004『市緊急報告書20－2』） 13. 雪ノ下四丁目573番４（馬淵2006 未報告） 14. 雪ノ下四丁目581番2（松尾1983 未報告） 15. 雪ノ下四丁目580番10ほか（原2001『市緊急報告書17－2』） 16. 雪ノ下四丁目581番5（斉木2007『大倉幕府周辺遺跡群発掘調査報告書』） 17. 雪ノ下四丁目620番5（馬淵1998『市緊急報告書14－2』） 18. 雪ノ下四丁目620番1（河野1980 未報告） 19. 雪ノ下四丁目620番2（赤星1983 未報告） 20. 大倉南御門B（1983・1984　市教委立会調査 未報告） 21. 雪ノ下四丁目610番2（玉林1983・1984　未報告） 22. 大倉御門（手塚1980　未報告） 23. 雪ノ下三丁目607番1（降矢2004『市緊急報告書20－2』） 24. 雪ノ下三丁目607番ほか（菊川1994『市緊急報告書10－1』） 25. 雪ノ下三丁目606番1（菊川1993『市緊急報告書9－3』）

○大倉幕府跡（No.253） 26. 雪ノ下三丁目693番8（押木2009 未報告） 27. 雪ノ下三丁目693番1（滝沢2010 未報告） 28. 雪ノ下三丁目701番3（馬淵2005『市緊急報告書21－1』） 29. 雪ノ下三丁目704番3外（福田2011『市緊急報告書27－2』） 30. 雪ノ下三丁目701番3（馬淵2005『市緊急報告書12－1』） 31. 雪ノ下三丁目701番14（宮田2005『市緊急報告書21－1』） 32. 雪ノ下三丁目694番18（宮田2009 未報告） 33. 雪ノ下三丁目648番31（山口2009 未報告） 34. 雪ノ下三丁目651番8外（汐見1999『市緊急報告書15－2』） 35. 雪ノ下三丁目648番31（山口2009 未報告） 36. 雪ノ下三丁目618番4（汐見2002『市緊急報告書18－1』） 37. 雪ノ下三丁目・清泉小学校内（松尾1983『市埋蔵文化財調査年報Ⅰ』）38. 雪ノ下四丁目707番1（宮田1990『県埋蔵報告34』） 39. 雪ノ下三丁目637番4（熊谷2011『市緊急報告書27－2』） 40. 雪ノ下三丁目637番6外（伊丹2008 未報告） 41. 雪ノ下三丁目635番2外（熊谷2008　未報告） 42. 雪ノ下字大倉耕地569番1（馬淵1990『大倉幕府周辺遺跡群雪ノ下字大倉耕地569番1地点発掘調査報告書』）

○横小路周辺遺跡（No.253） 43. 二階堂字荏柄880・874番（馬淵1985『向荏柄遺跡発掘調査報告書』） 44. 二階堂字荏柄875－4（斉木2008 未報告） 45. 二階堂字荏柄9番1（菊川1990『市緊急報告書6』） 46. 二階堂字荏柄10番6ほか（福田2000『市緊急報告書16－2』） 47. 二階堂字荏柄10番1（原2003『市緊急報告書19』） 48. 雪ノ下五丁目557番1（手塚1998『市緊急報告書14－2』）

図１　調査地点と周辺の遺跡図



国土座標数値（世界測地系第Ⅸ系）
鎌倉市4級基準点

U156	X=−74831.0327	Y=−24526.9686	P1 ⇄ U162	26.008m	a:103° 31′ 10″
U162	X=−74841.8461	Y=−24504.1434	P1 ⇄ P2	11.960m	b:211° 13′ 20″
P1（任意点）	X=−74818.5785	Y=−24492.5131	P2 ⇄ P3	7.378m	c:239° 37′ 50″
P2（任意点）	X=−74811.6820	Y=−24482.7420			
P3（任意点）	X=−74817.6975	Y=−24485.1351			

図２　調査区の位置とグリッド配置図

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

１．調査地の位置と歴史的環境（図１）

本調査地点は現在の荏柄天神社の門前に位置する。『和名類聚鈔』に、相模国鎌倉郡七郡の一つとして「荏草郷（えがやのごう）」があり、奈良期から平安期に名が見える郷名で、天平七（735）年閏十一月十日付相模国封戸租交易帳には「荏草郷伍拾戸　田壱伯肆拾玖町肆段弐伯参拾陸歩」と、某親王のものと思われる食封もあった（註１）。中世では「荏草（えがや）」が転じて「荏柄（えがら）」となったという説もある（註２）。郷の範囲は、現在の荏柄天神社附近から名越まで及んでいたと推定されているが詳細は不明（註３）

荏柄天神社の祭神は菅原道真。相殿に八雲大神・熊野三柱神を祀っている。勧請については未詳であるが、長治元（1104）年頃には開かれていたとされる。天神に対する畏敬の念は、天神信仰として平安時代から今日に至るまで脈々と続いており、多方面の分野に影響を及ぼしている（註４）。『新編相模国風土記稿』は、源頼朝が幕府鬼門の鎮守として当社を崇敬したと伝え、『吾妻鏡』建仁二（1202）年九月十一日条では、将軍頼家が当社祭に大江広元を奉幣使として派遣していることからも知れる。室町期には鎌倉公方の保護を受けていたらしく、足利成氏は毎年正月廿三日の例祭、同二五日の千句の催しに参詣。二月廿三日朝から廿五日までの参籠するのを例としていたようである（註５）。建保元（1213）年二月廿五日、和田義盛の乱で捕えられた渋河刑部六郎兼守は、自らが処刑されることを聞き及び「不堪其愁緒」して和歌十首を当社に献じた。その日の夜から当社に「参籠」していた工藤藤三祐高は、翌朝退出する際に、その兼守の歌を取って将軍実朝に見せたところ、実朝は賞賛して兼守を赦してしまう（註６）。『吾妻鏡』はその続きを「已預天神之利生、亦蒙将軍之恩化、凡感鬼神、只在和歌者歟」と結んでいる。実朝の和歌に対する造詣の深さが窺われる例でもあるが、天神に和歌を捧げること、それに伴って享ける功徳など、中世における天神信仰の一端も垣間見ることができよう。工藤藤三祐高は当社に「参籠」していたのであるが、寛元二（1244）年七月廿日には、落合蔵人泰宗が七日間参籠し、不義密通に対して潔白の起請文を書いている（註７）。北野天満宮の事例ではあるが、『吾妻鏡』元仁元（1224）年十二月十六日条に「就地頭所務以下事、被定条条」として「一 諸社神官并神人等令書起請文時於他社不可書由事、於京都令書者、不嫌自他社、於北野可書也」とあることからも、起請文は天神社で書くものであったのだろう。となれば同建仁三（1203）年九月二日条、いわゆる比企氏の乱に際して、北条時政が天野民部入道遠景と仁田（新田）四朗忠常に「於荏柄社前」その企てを話したと態々記載されているのも、ある意味で天神に対しての意思表明、願掛けのようなものを感じてしまう。

荏柄天神社は大倉幕府周辺地域一帯としても捉えられる。治承四（1180）年十二月十二日、源頼朝は大倉へ移徙。御家人達は幕府周辺に宿館を構えている（註８）。大倉幕府周辺は御家人等の屋敷が多く建っていたようである（註９）。『吾妻鏡』建保元年三月廿五日条では、和田平太胤長の「荏柄前」の屋地が没収され、その屋地を胤長の父義盛が所望していたが、北条義時が同地を拝領することになり遺恨となった。これが和田義盛の乱の原因の１つとも伝えられる。また、同建長三（1251）年十月七日条では、薬師堂谷から出た火が「宇佐美判官荏柄家」まで延焼しているのが分かることから、将軍御所が若宮大路へ移った後も荏柄天神周辺に御家人の屋敷が建っていたようである。『吾妻鏡』文暦二（1235）年九月一日条に「右大将家法華堂前湯屋失火、風頻吹、法華堂頗難免此災之処、諏方兵衛尉盛重一人最前馳向、令壊中間民屋敷十宇之間、火止訖」とあり、大倉法華堂前には「湯屋」があったことが分かる。この場合の「湯屋」が風呂屋を指すのか、寺院に伴う斎戒沐浴などをする建物なのかは判断つかない。『吾妻鏡』

建長三年十二月三日条は、鎌倉における商業取引の場所を「大町、小町、米町、亀谷辻、和賀江、大倉辻、気和飛坂山上」の七箇所に特定する旨の触れであるが、「大倉辻」は現在の関取橋付近に推定されている（註10）。幕府が若宮大路へ移った後の大倉幕府周辺は、町屋と御家人の屋敷が混在していた様相だったのかもしれない（註11）。鎌倉幕府滅亡後は、残っている史料も断片的で周辺の様相は分からない。荏柄天神社は天正十八（1590）年四月と同十九年十一月に、それぞれ豊臣秀吉・徳川家康によって保護・寄進されているのが分かる（註12）　（松吉大樹）

【註】

（註１）『神奈川県史』資料編１古代「正倉院文書」58号
（註２）『鎌倉市史総説編』など。『新編相模国風土記稿』は荏柄天神は所在地名から称したとしている。
（註３）高柳光寿「二尺度郷・荏草郷」（『鎌倉市史総説編』、1976）
（註４）真壁俊信『天神信仰の基礎的研究』（日本古典籍註釈研究会、1984）など。
（註５）「殿中以下年中行事」（『群書類従』第22輯 武家部）
（註６）『吾妻鏡』建保元年二月廿五日条、同二月廿六日条。
（註７）『吾妻鏡』寛元二年七月廿日条。
（註８）『吾妻鏡』治承四年十二月十二日条。
（註９）幕府周辺における御家人等の居住状況については（秋山2006・山村2009）などに詳しい。
（註10）「（天文十七（1548）年十二月廿七日付）荏柄天神社造営関定書案」（荏柄天神社文書『神奈川県史資料編 古代・中世3（下）』6863号）は、小田原北条氏が荏柄天神社社殿造営のため社前に関を設け、その関銭が寄進されたことを伝える。関取橋はその由来か。
（註11）文永二（1265）年三月五日条でも「一所大町、一所小町、一所魚町、一所穀町、一所武蔵大路下、一所須地賀江橋、一所大倉辻」の七箇所に限る触れが出ている。
（註12）「（天文十八（1549）年四月日付）豊臣秀吉禁制」（浄光明寺文書『神奈川県史資料編 古代・中世3（下）』9717号）。「（天文十九（1550）年十一月日付）徳川家康社領寄進状案」（荏柄天神社文書『鎌倉市史料編』第一398号）。

【引用・参考文献】

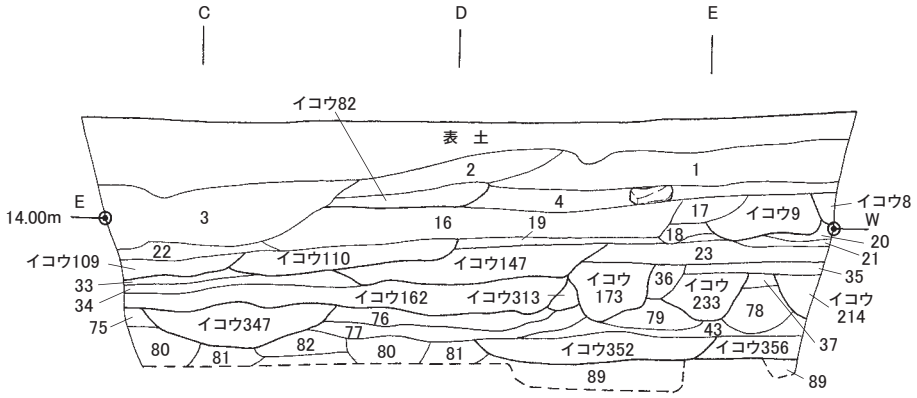
秋山哲雄『北条氏権力と都市鎌倉』（吉川弘文館、2006）
石井進・網野善彦編『中世の風景を読む－２都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（新人物往来社、1994）
石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世3武士の都 鎌倉』（平凡社、1989）
石井進『中世史を考える－社会論・史料論・都市論』（校倉書房、1991）
奥富敬之『鎌倉北条氏の基礎的研究』（吉川弘文館、1980、第3版1988）
鎌倉考古学研究所『中世都市鎌倉を掘る』（日本エディタースクール出版部、1994）
『鎌倉市史総説編』（吉川弘文館、1976）
『鎌倉市史社寺編』（吉川弘文館、1976）
河野眞知郎『中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都－』（講談社選書メチエ49、1995）
斉藤利男「「宿館」「宿所」と「本宅」」（『国立歴史民俗博物館研究報告』78、1999）
高橋慎一朗『中世の都市と武士』（吉川弘文館、1996）
高橋慎一朗「中世鎌倉における将軍御所の記憶と大門寺」（『年報都市史研究』11、2003）
原廣志「大倉幕府周辺遺跡群　二階堂荏柄58番4外地点（No.49）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』（第1分冊）鎌倉市教育委員会、2002
原廣志「大倉幕府周辺遺跡群　二階堂荏柄27番3の一部地点（No.49）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22』（第1分冊）鎌倉市教育委員会、2006
細川重男『鎌倉政権得宗専制論』（吉川弘文館、2000）
貫達人・川副武胤著『鎌倉廃寺事典』（有隣堂、1980）
山村亜紀『中世都市の空間構造』（吉川弘文館、2009）

２．調査の経過（図２）

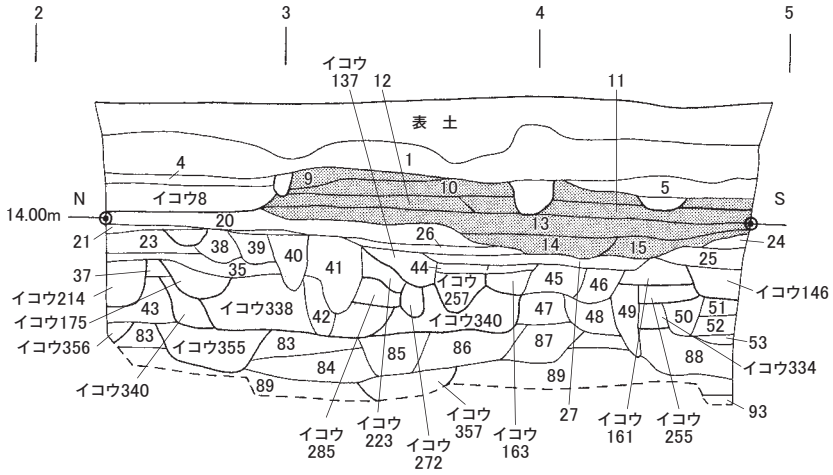
調査を開始するにあたっては調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設け、Ｐ２（Ｄ－２杭）と見返り点Ｐ３を設定。後日鎌倉市４級基準点Ｕ156とＵ162を用いて光波測量機によるトラバース測量を行い、Ｐ２（Ｄ－２杭）と見返り点Ｐ３に国土座標上の数値を移動した。しかし整理作業時に測量不備がみつかり、測量の際のデータを基に計算し座標値を算出したために、数値に若干のずれが生じてしまっている。測量軸は２ｍ方眼による軸線を用い、南北軸線には北から算用数字の１～６、東西軸線には西からアルファベットＡ～Ｇとした。南北軸線は真北に対して25° 55′ 07″東にずれる。現地調査では日本測地系（座標ＡＲＥＡ９）の国土座標数値を使用したが、本報告作成に当たって国土地理院が公開する座標変換ソフト「ｗｅｂ版ＴＫＹ２ＪＧＤ」で世界測地系第Ⅸ系に変換し、図２に表記した。

３．堆積土層（図３）

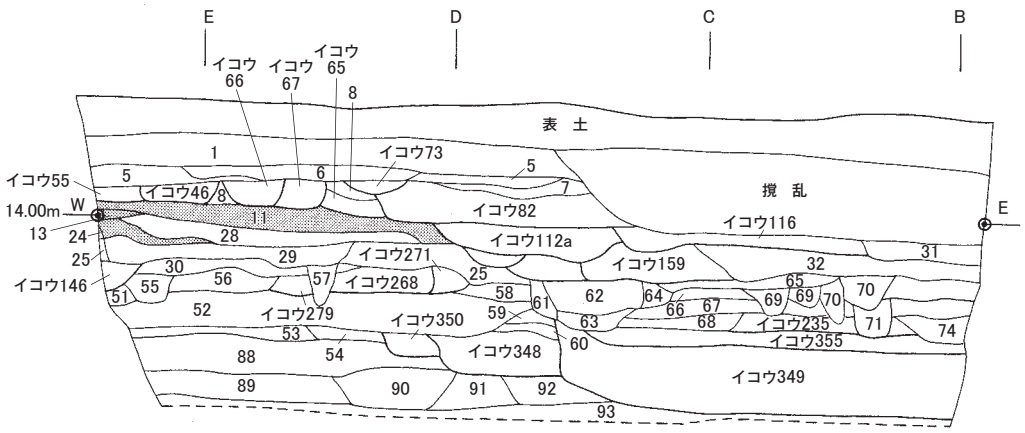
調査前現地表は海抜14，90mを測る。約30㎝の厚さで堆積していた現代埋土を取り除くと、第1面として報告している中世の生活面までの間に、明茶褐色砂質土の近世遺物を含む堆積層が約40㎝の厚さで堆積していたが遺構の検出には至らなかった。第1面は比較的しっかりとした暗茶褐色弱粘質土上で確認したが（海抜約14，20m）、上層の現代埋土に大きく削平を受けており、遺構の検出は調査区の東半分のみである。第1面確認面から10㎝下方の明茶褐色砂質土上で第２面の遺構を検出したが、地業を確認することはできなかった（海抜約14，10m）。第３面は破砕泥岩を含む堅く締まった黒褐色粘質土上で確認し（海抜13，80ｍ）、建物址の存在を示唆する礎板が遺存するピットなどを発見したが、生活面を造成する地業の確認はできなかった。第４面は褐鉄を多く含む茶褐色弱粘質土上で遺構を確認した（海抜13，50ｍ）。遺構は多く発見したが、遺物の出土量は大幅に減少する。第５面は褐鉄を多く含む暗青褐色粘質土上で遺構を確認したが、調査区南東部一部に、泥岩・泥岩粒・砂礫を含む青灰色砂質土の地業層が遺存していた（海抜13，30ｍ）。第６面は黒褐色粘質土上で遺構を確認した（海抜13，00ｍ）。第６面の遺構確認した標高では湧水が激しく、調査区全域を掘り下げての調査が困難となったため、調査区東壁・南壁に沿ってＬ字状に掘り下げて遺構を確認した。本報告では、第１面から第６面までを、それぞれａ・ｂの２期に分けて報告しているが、遺構は同じ場所で重複して検出され、短期間に生活面の造り替えを行った様子が分かる。



調査区北壁土層堆積図



調査区東壁土層堆積図



調査区南壁土層堆積図

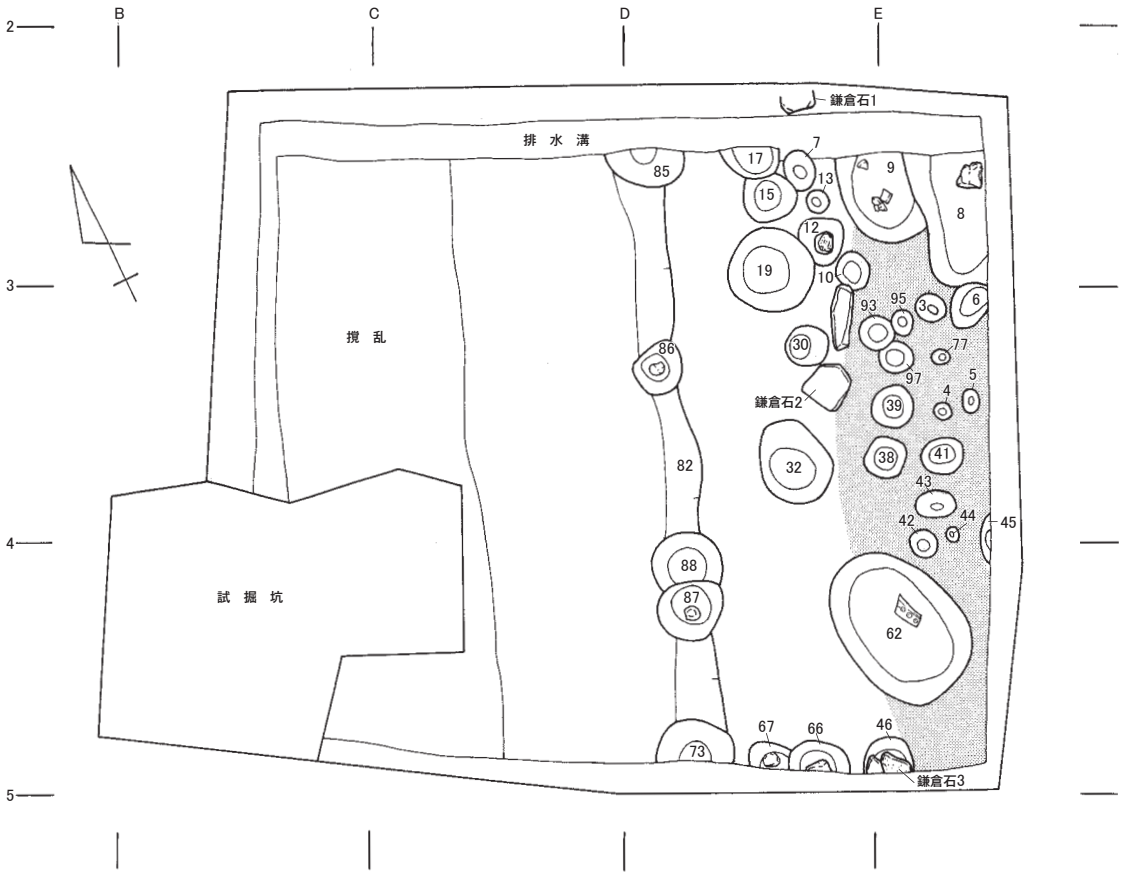
0 2m

図３　堆積土層図

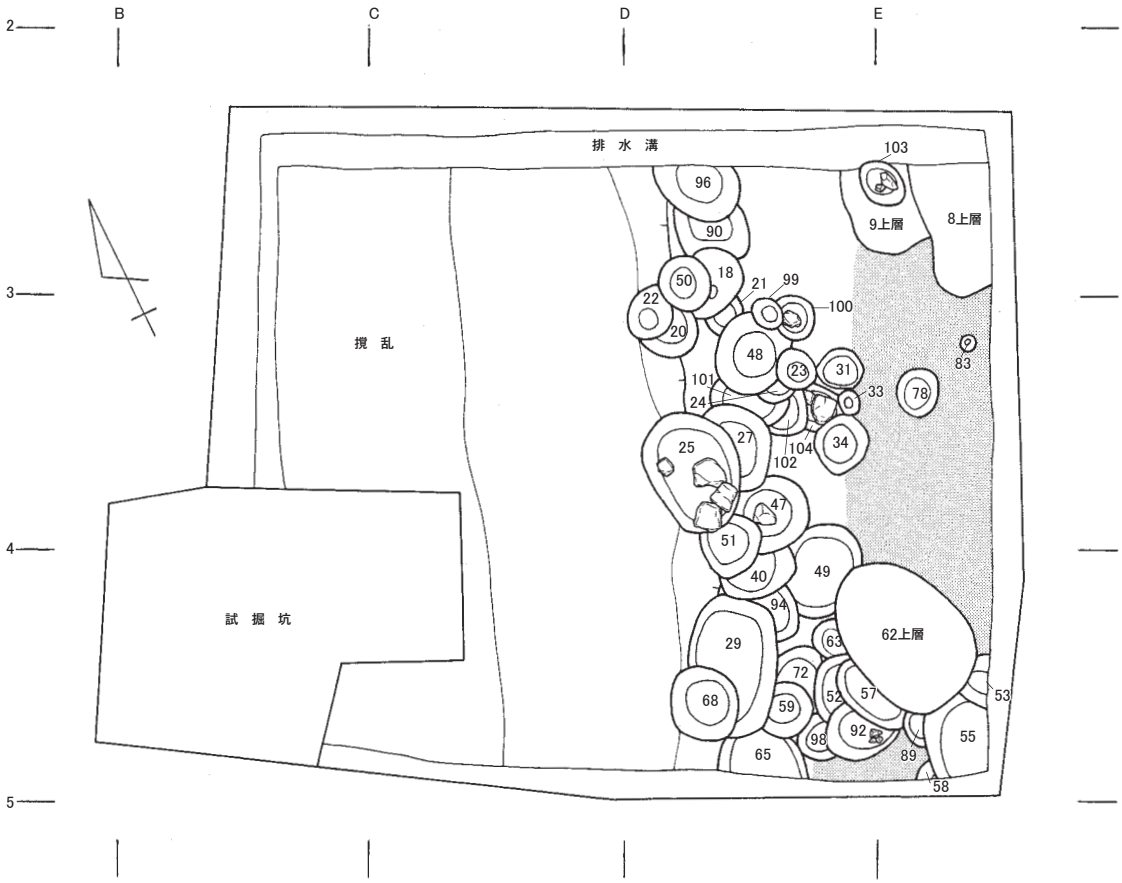
土層注記

1. 明茶褐色弱砂質土（近現代）
2. 暗褐色弱粘質土（近現代）
3. 灰褐色弱粘質土（近現代）
4. 明灰褐色弱粘質土　鉄分多量、粒～拳大の泥岩少量、炭化物・砂粒・かわらけ粒・かわらけ片微量、締まりあり
5. 灰茶褐色粘質土　茶灰色粘土多量、炭化物･小石大泥岩･かわらけ粒微量
6. 明灰茶褐色弱粘質土　5と同質でやや粘性弱い、締まりあり
7. 暗褐色粘質土　粒～拳大の泥岩密、鉄分・炭化物・かわらけ片少量、明茶色粘土混じる、締まりあり
8. 灰褐色弱粘質土　茶灰色調強い、粒～小石大の泥岩微量、かわらけ片・炭化物・礫ごく微量、締まりあり
9. 明茶褐色砂質土　褐鉄化した砂岩質・泥岩・砂粒密、かわらけ粒・かわらけ片少量
10. 明茶褐色砂質土　9より砂粒土密につまる、かわらけ粒･炭化物少量、礫・拳～半人頭大の泥岩ごく微量
11. 明茶褐色砂質土　10と同質で拳～半人頭大の泥岩少量
12. 灰茶褐色砂質土　9と同質で灰褐色弱粘質土多量
13. 明茶褐色砂質土　10と同質で小石～人頭大の泥岩多量、礫少量
14. 灰茶褐色弱粘質土　灰褐色粘質土中に褐鉄砂密につまる、粒～人頭大の泥岩・かわらけ粒少量
15. 明茶褐色弱粘質土　14と同質でより褐鉄砂密につまる、粒～小石大の泥岩・かわらけ粒少量、礫・炭化物ごく微量
16. 明灰褐色弱粘質土　拳大泥岩・炭化物・鉄分・泥岩粒・礫極微量　やや締まりあり
17. 明灰褐色弱粘質土　鉄分多量、泥岩粒・礫極微量　やや締まりあり
18. 明灰褐色弱粘質土　17と同質でより鉄分・炭化物・泥岩粒・かわらけ片多い
19. 明灰褐色弱粘質土　18と同質で鉄分・小石大の泥岩・炭化物・かわらけ片ごく微量
20. 黄茶橙色砂質土　砂利状・泥岩粒・砂岩密、明灰褐色弱粘質土多量、拳～半人頭大の泥砂岩・炭化物・かわらけ粒・遺物片・礫ごく微量
21. 明灰色弱粘質土　鉄分・泥砂岩粒多量、炭化物・かわらけ粒少量、黒褐色粘土粒・遺物片・礫ごく微量
22. 明茶褐色砂質土　20と同質で褐鉄化の激しい砂利密、小石大の泥岩少量、かわらけ片・炭化物微量
23. 黒褐色粘質土　炭化物・泥岩粒・かわらけ粒少量混入、灰色砂粒ごく微量、粘性強く締まり良い
24. 黒褐色粘質土　23と同質で炭化物・かわらけ粒・灰茶色粘土微量、やや締まりあり
25. 黒褐色粘質土　23と同質で底部褐鉄化して固く締まる
26. 灰茶褐色砂質土　砂岩質・砂粒密、灰色砂粒・泥岩粒多量、小石大の泥岩・炭化物少量、褐鉄化激しい
27. 明青灰色弱砂質土　粒～拳大の泥岩・かわらけ粒・炭化物・礫少量
28. 明灰褐色粘質土　粒～拳大の泥岩やや多量、かわらけ片微量、粘性強く締まり弱い
29. 黄茶褐色砂質土　褐鉄砂利・粒～人頭大の破砕泥岩密、明灰色粘土・炭化物・かわらけ粒・礫少量
30. 黒褐色粘質土　灰褐色粘土・灰色砂・泥岩粒・炭化物少量、鉄分微量、締まり弱い
31. 明灰褐色粘質土　粒～小石大の泥岩粒少量、炭化物・鉄分・かわらけ粒・礫微量、締まり良い
32. 灰褐色粘質土　拳大の泥岩・炭化物・鉄分・かわらけ粒微量、固く締まる
33. 明灰褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・かわらけ粒・木片ごく微量　きめ細やかな砂質土若干混じる、粘性強くやや締まる
34. 暗青灰色弱砂質土　褐鉄砂・泥岩粒・炭化物微量、きめ細やかな砂質土と粘質土（16と32）混入
35. 黒褐色粘質土　23と同質でより含有量多、褐鉄・茶灰色粘土少量混入、小石大泥岩・かわらけ片ごく微量、やや締まりあり
36. 黒褐色粘質土　焼土・炭化物・褐鉄・粒状泥岩少量、やや締まりあり
37. 黒褐色粘質土　23・35と同質で鉄分・炭化物・　やや締まりあり
38. 暗茶灰黒粘質土　褐鉄砂、炭化物微量、粘性強くやや締まる
39. 黒褐色粘質土　鉄分、泥岩少量、やや締まりあり
40. 黒褐色粘質土　暗茶灰色粘土混じる、鉄分（腐食）・炭化物少、やや締まりあり
41. 黒褐色粘質土　鉄分、粒～小石大の泥岩微量、やや締まりあり
42. 黒褐色粘質土　小石大の泥岩・遺物片微量、褐鉄化激しく締まり強い
43. 暗茶灰色粘質土　粘性強く締まりやや弱い、炭化物多量で一部褐鉄化する、泥岩微量
44. 黒褐色粘質土　23・35と同質　腐食鉄分やや多、締まり弱い
45. 黒灰褐色粘質土　腐食鉄分・炭化物
46. 黒茶褐色弱粘質土　鉄分（一部腐食化）・暗茶色粘土混入
47. 黒灰色粘質土　褐鉄化激しく固く締まる
48. 灰茶褐色弱粘質土　褐鉄化激しく固く締まる、泥岩粒多、炭化物微量
49. 黒灰色粘質土　暗茶色粘土混じる、炭化物多、鉄分
50. 黒灰色粘質土　鉄分・炭化物・　やや締まりあり
51. 暗茶灰色弱砂質土　黒色粘土と52が混じる、炭化物多、固く締まる
52. 茶褐色砂質土　粒～拳大の褐鉄激しい泥岩と砂利が密に

つまる
53. 明茶色砂質土　きめ細やかな褐鉄砂つまる、52の砂利混入
54. 暗灰褐色砂質土　きめ細やかな褐鉄砂がつまり固く締まる、黒色粘土・泥岩粒微量
55. 黒灰褐色粘質土　灰色砂・泥岩粒・炭化物、締まりあり
56. 黒灰褐色粘質土　炭化物・灰色砂・黒褐色粘土・鉄分、締まりあり
57. 黒褐色粘質土　炭化物・鉄分・黒褐色粘土・灰色砂、締まりあり
58. 黄灰褐色粘質土　鉄分・泥岩粒やや多、炭化物少、締まりあり
59. 青灰色弱砂質土　きめ細やかな砂・小石・砂利・泥岩粒多、炭化物微量
60. 青灰色弱砂質土　小石大の泥岩多、炭化物・灰色粘土少量
61. 茶灰褐色弱粘質土　鉄分多く固く締まる、粒～小石大の泥岩やや多、炭化物少量
62. 黒茶灰色粘質土　褐鉄・腐食鉄分・締まりあり
63. 暗灰褐色粘質土　含有物59と同質で鉄分微量
64. 黒茶褐色粘質土　含有物66と同質　締まりあり
65. 黒灰色粘質土　鉄分・炭化物多
66. 黄茶褐色粘質土　褐鉄化激しく固く締まる、泥岩粒
67. 黄茶褐色弱砂質土　褐鉄化激しく固く締まる､黒色粘土･腐食鉄分少量
68. 暗茶褐色弱砂質土　やや粘性あり、きめ細やかな暗灰色砂多
69. 黒茶褐色粘質土　褐鉄化進み固く締まる・炭多
70. 黒褐色粘質土　泥岩粒・かわらけ粒ごく微量、締まりあり
71. 黒茶褐色粘質土　炭・暗茶灰色粘土ごく微量、締まりあり
72. 黒茶褐色粘質土　褐鉄化進み固く締まる、腐食鉄分
73. 青灰褐色弱砂質土　褐鉄化進み固く締まる
74. 黒灰色粘質土　粘土内に炭多量に混じる、鉄分･遺物片･泥岩粒、締まりやや弱い
75. 黒灰色粘質土　炭化物ごく微量
76. 青黄灰色砂質土　きめ細やかな青灰色・黄灰色砂密、黒灰色粘土少、粒～小石大の泥岩・炭化物微量
77. 青灰色弱粘質土　茶褐色粘土少、泥岩粒・きめ細やかな砂微量
78. 黒茶褐色粘質土　黒褐色粘土と茶灰色粘土の混合土、炭化物・褐鉄少、泥岩粒ごく微量、締まりあり
79. 黒茶褐色粘質土　78と同質で褐鉄化激しい､茶褐色粘土･かわらけ片ごく微量、締まりあり
80. 明青茶灰色粘質土　粘性強くやや締まり弱・泥岩粒ごく微量
81. 暗茶灰色粘質土　炭化物
82. 暗青灰色粘質土　粘性強く締まりあり、泥岩粒・茶灰色粘土ごく微量
83. 黒灰色粘質土　粘性強くやや締まり弱い、暗茶灰粘土ごく微量
84. 黒茶灰色粘質土　褐鉄化やや進み固く締まる、泥岩粒・炭
85. 黒灰色粘質土　泥岩粒・炭・鉄分少量、締まりあり
86. 茶灰褐色粘質土　褐鉄化激しく固く締まる
87. 黒茶灰色粘質土　鉄分・砂質土少、腐食鉄分微量
88. 茶灰褐色粘質土　86と同質で含有量微量
89. 黒灰色粘質土　褐鉄化激しく固く締まる、腐食鉄分・黒色粘土微量、暗茶灰色粘土ごく微量
90. 暗青灰色弱砂質土　固く締まる、鉄分
91. 暗青灰色粘質土　褐鉄化進み固く締まる、90の砂質土混じる
92. 黒灰色弱粘質土　やや締まる、鉄分
93. 明青灰色弱砂質土　青灰色と灰色粘土の混合土､海砂質･砂利質密、黒灰色粘土塊・泥粒微量、地山か?



＜第1a面＞



＜第1b面＞

0 2m

図４　第１面全測図

第二章　発見された遺構と遺物

調査開始にあたって、表土から約50㎝下までは重機による表土掘削を行った。本報告で中世第１面とした生活面上層中に近世遺物の混入を確認したが、遺構の発見・確認はできなかったために、地表面から約70㎝下まで人力によって掘り下げて調査を開始した。各面の遺構は複雑に切りあって発見されたため（図３）、同一地業層上で確認した遺構を、切りあいの新旧・覆土観察等からａ・ｂの２時期に分けて報告している。遺構に付した番号は、遺構確認時点で付した番号であり、遺構の新旧を表すものではない。本文内では、各面の特徴的な遺構、および実測遺物出土のあった遺構のみを説明している。また、各期で発見した遺物は出土遺物観察表にまとめ、本文に詳細は記載していない。破片出土遺物も同様に出土数を表にまとめた。

以下、発見した遺構は上層から下層の順に第１面から第６面と分けて報告した。調査開始前現地表の海抜は約14，90ｍである。

１．第１面の遺構と遺物（図４～図14）

・第１ａ面（図４）

第１ａ面で発見した遺構は溝１条・土坑４基・ピット31穴である。調査区西側が近現代の掘り込みによって削平を受けていたため、調査区東側半分に偏って遺構が発見された。調査区東側で確認した破砕泥岩による丁寧な地業は、拳大の破砕泥岩・泥岩粒を使用し固く締まる。遺構の切りあい新旧・覆土の観察から、少なくとも２時期は生活面の造り替えが行われたと考えている。第１面の遺構確認レベルは海抜約14，20ｍである。第１面構成土は炭化物・泥岩粒・泥岩を含む堅く締まった暗褐色弱粘質土。

石列遺構（図４・図５）

調査区東で発見した、南北に並ぶ不整形な鎌倉石（砂質凝灰岩）切石である。鎌倉石１・鎌倉石２はピットを伴わない地業層上で、鎌倉石３はピット底面での発見である。また、鎌倉石１と鎌倉石２の間は225cm。鎌倉石２と鎌倉石３の間は300cmと、それぞれの関係を強く結びつける要素は弱いのだが、後述する溝（遺構82）にほぼ平行に並んでいることや、意図的に石の上面を平らに加工してあったことから図示した。石列の東側で確認した破砕泥岩による地業の一環であったとも考えられるが、石列から西側は地業が切れていたことから、区画を分ける施設の一部であった可能性も考えている。

遺構６（図４・図６・図９）

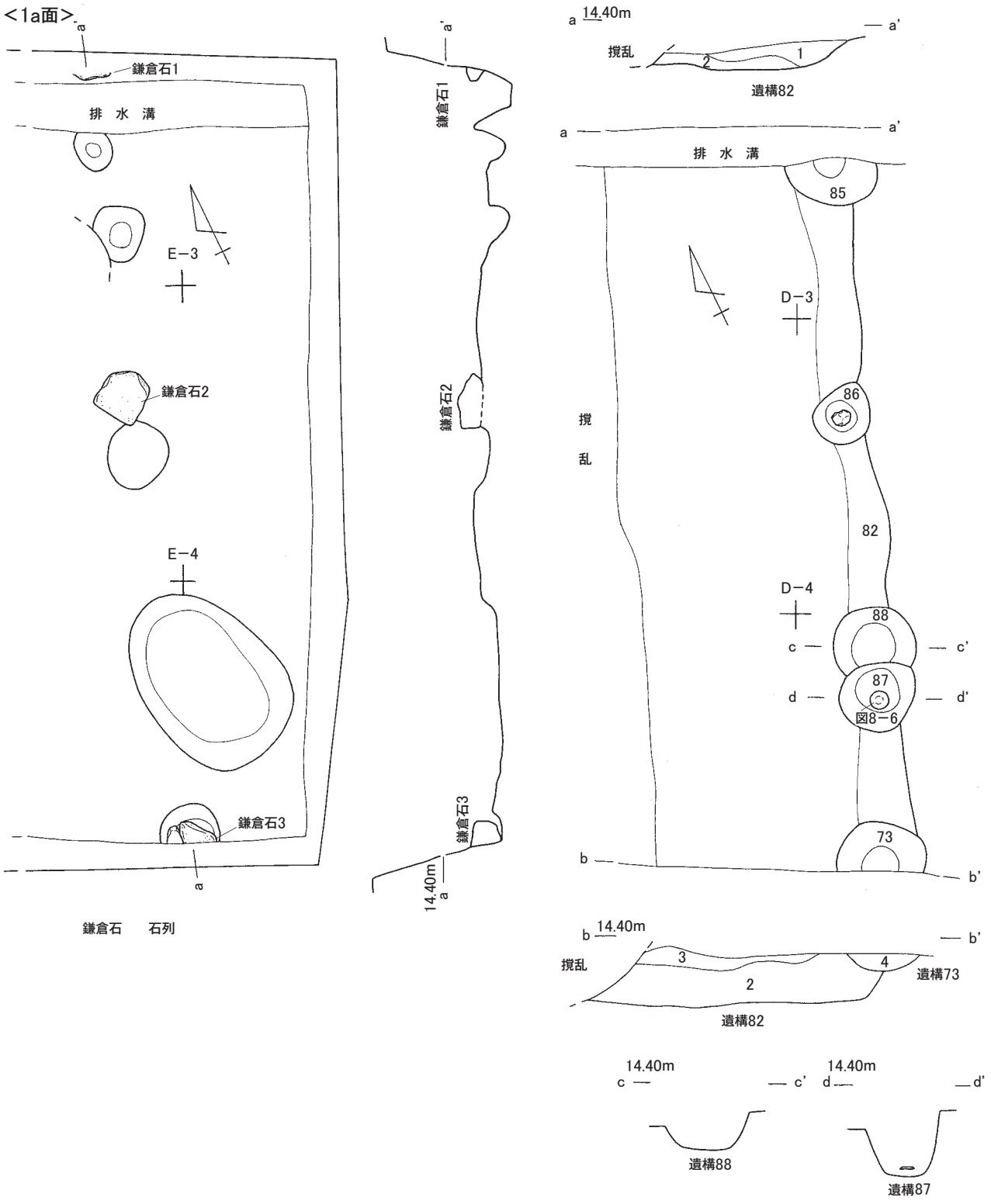
幅39cm×29cm。深さ15cm。ピットである。遺構８を切っている。覆土は暗褐色砂質土・炭化物・泥岩粒を含む。覆土の観察から、第1面上層の遺構の可能性がある。出土遺物は瀬戸小壷。

遺構８（図４・図６・図９）

調査区北東端で発見した。調査区外に遺構が延びてしまっている為に規模･形状は不明。土坑である。覆土内に大小の泥岩塊・泥岩粒が混入する。地業の一環であった可能性もある。深さ約28cm。出土遺物は須恵器坏口縁部片。

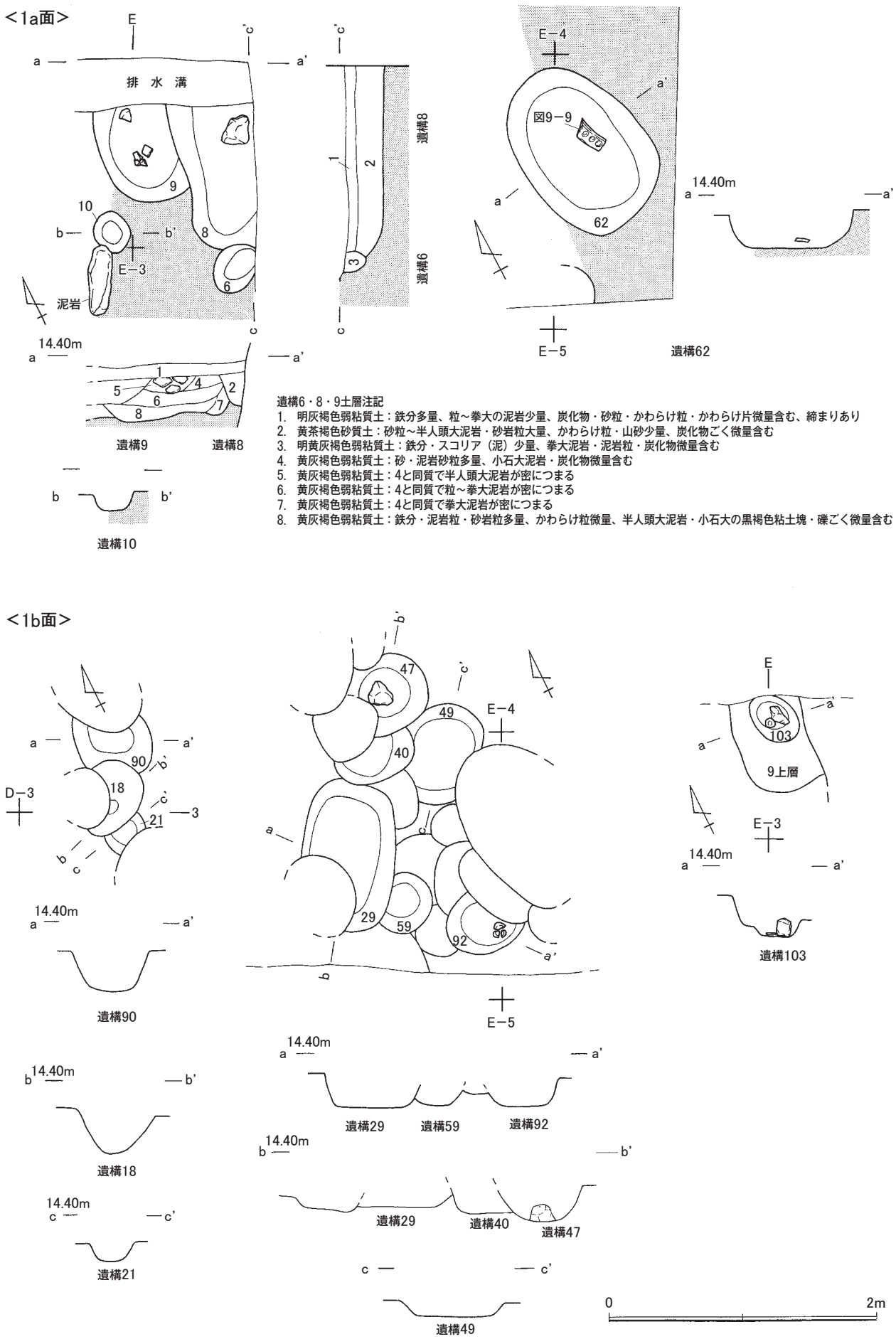
遺構９（図４・図６・図９）

調査区外に遺構が延びており規模・形状は不明。遺構８に切られる。土坑である。遺構８同様に覆土内に大小の泥岩塊・泥岩粒が含まれる。破砕泥岩による地業を掘りこんでいるようにもみえるが、遺構



遺構82土層注記
1. 暗灰褐色粘質土：小石大の泥岩・鉄分大量、炭化物・遺物片少量含む、締まりあり
2. 灰褐色弱粘質土：小石大の泥岩少量、遺物片微量含む
3. 暗褐色粘質土：粒～拳大の泥岩密、鉄分・炭化物・かわらけ片・明茶色粘土少量含む、締まりあり
4. 灰褐色弱粘質土：スコリア～粒大の泥岩微量、かわらけ粒・炭化物・礫ごく微量、締まりあり（遺構73）

図5　第1面各遺構（1）



遺構6・8・9土層注記

1. 明灰褐色弱粘質土：鉄分多量、粒～拳大の泥岩少量、炭化物・砂粒・かわらけ粒・かわらけ片微量含む、締まりあり
2. 黄茶褐色砂質土：砂粒～半人頭大泥岩・砂岩粒大量、かわらけ粒・山砂少量、炭化物ごく微量含む
3. 明黄灰褐色弱粘質土：鉄分・スコリア（泥）少量、拳大泥岩・泥岩粒・炭化物微量含む
4. 黄灰褐色弱粘質土：砂・泥岩砂粒多量、小石大泥岩・炭化物微量含む
5. 黄灰褐色弱粘質土：4と同質で半人頭大泥岩が密につまる
6. 黄灰褐色弱粘質土：4と同質で粒～拳大泥岩が密につまる
7. 黄灰褐色弱粘質土：4と同質で拳大泥岩が密につまる
8. 黄灰褐色弱粘質土：鉄分・泥岩粒・砂岩粒多量、かわらけ粒微量、半人頭大泥岩・小石大の黒褐色粘土塊・礫ごく微量含む

図6　第1面各遺構（2）

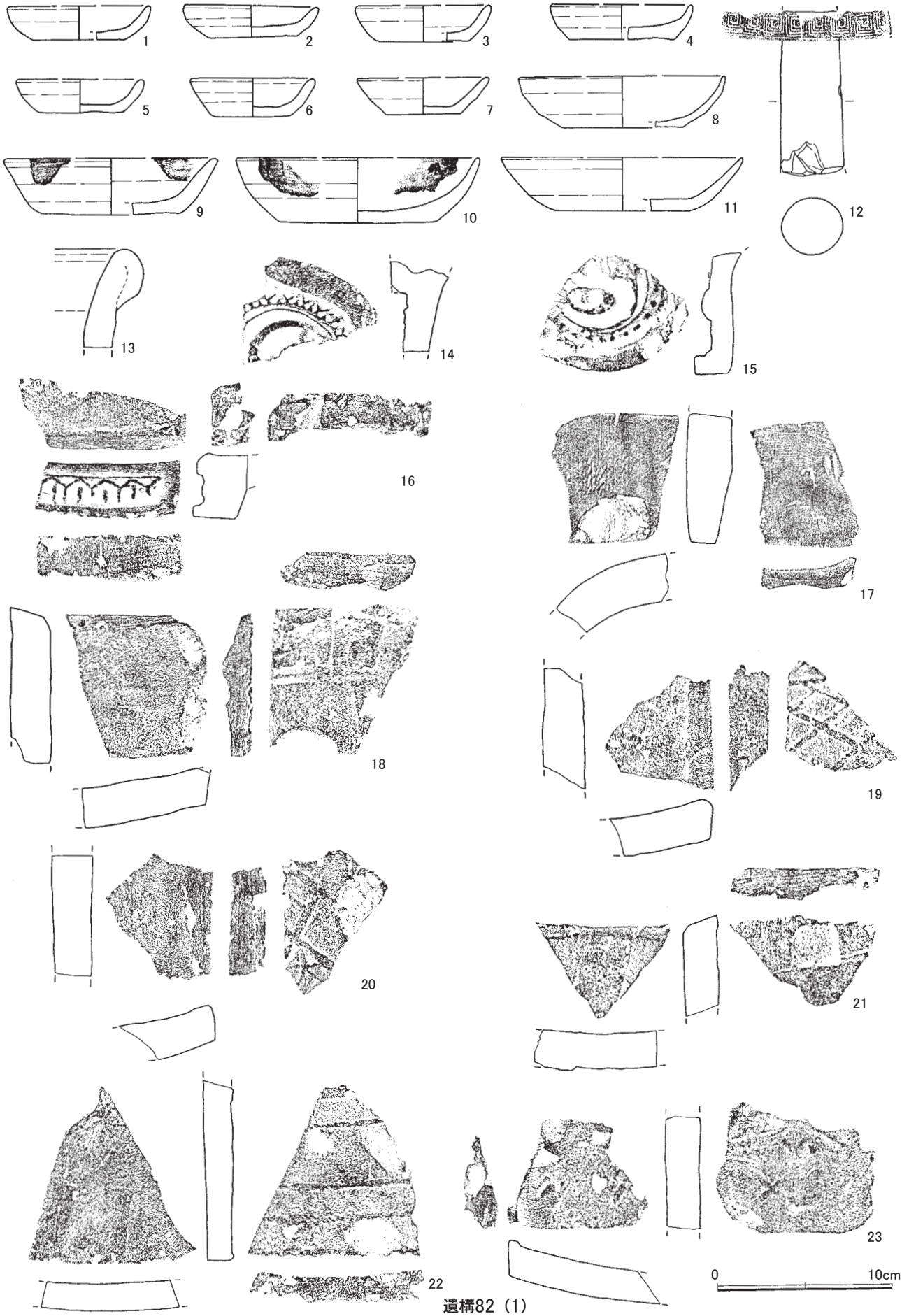


図７　第１面各遺構出土遺物（１）

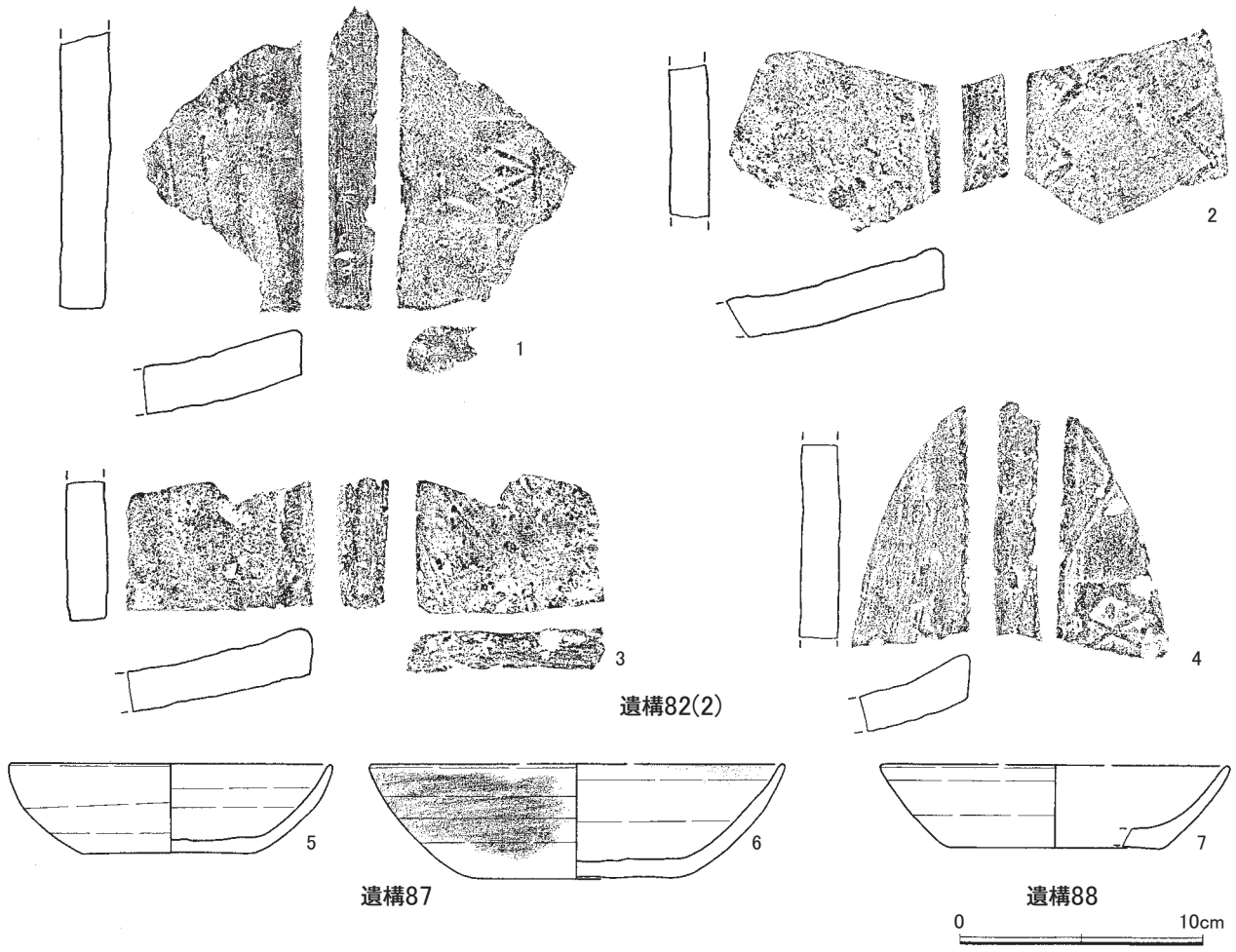


図８　第１面各遺構出土遺物（２）

８と共に地業の一環であった可能性もある。深さ約45cm。報告した遺物の内1点は、復元口径で15,02cm・底径8，4cm・器高4，4cmと大型のかわらけ（図９－４）である。

遺構10（図４・図６・図９）

楕円形のピットである。覆土は暗灰色砂質土。褐鉄・炭化物を含む。幅30cm×20cm・深さ15cm。出土遺物は砥石・中砥。

遺構62（図４・図６・図９）

楕円形を呈する土坑である。幅125cm×90cm。深さ26cm。暗褐色弱粘質土･玉石･泥岩･炭化物を含む。遺構62は第１ａ面地業層上層の遺構である。出土遺物はかわらけ･瀬戸卸皿･瓦。報告した鬼瓦破片（図９－９）は遺構底面から出土した。その他に破片で女瓦1点出土している。

遺構82（図４・図５・図７・図８）

南北に延びる溝状遺構。調査区外に遺構が延びていたこと、遺構西壁が近現代の撹乱によって壊されていたために、形状・規模は不明となった。確認した長さは490cm。深さ16cm。溝覆土からは報告した瓦のほかに、破片ではあるがかわらけ・手づくね・常滑甕・常滑片口鉢・土師器坏等多くの遺物が出土している。覆土は暗灰褐色弱粘質土。小石粒・炭化物・褐鉄を含む堅く締まった土。後述する遺構87・88を含む、遺構73・85・86・87・88は、遺構82東壁に沿って発見されており、柵等の施設があった可能性もある。

遺構87（図４・図５・図８）

溝状遺構（遺構82）を切って検出。ピットである。覆土は灰茶褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒を含む。

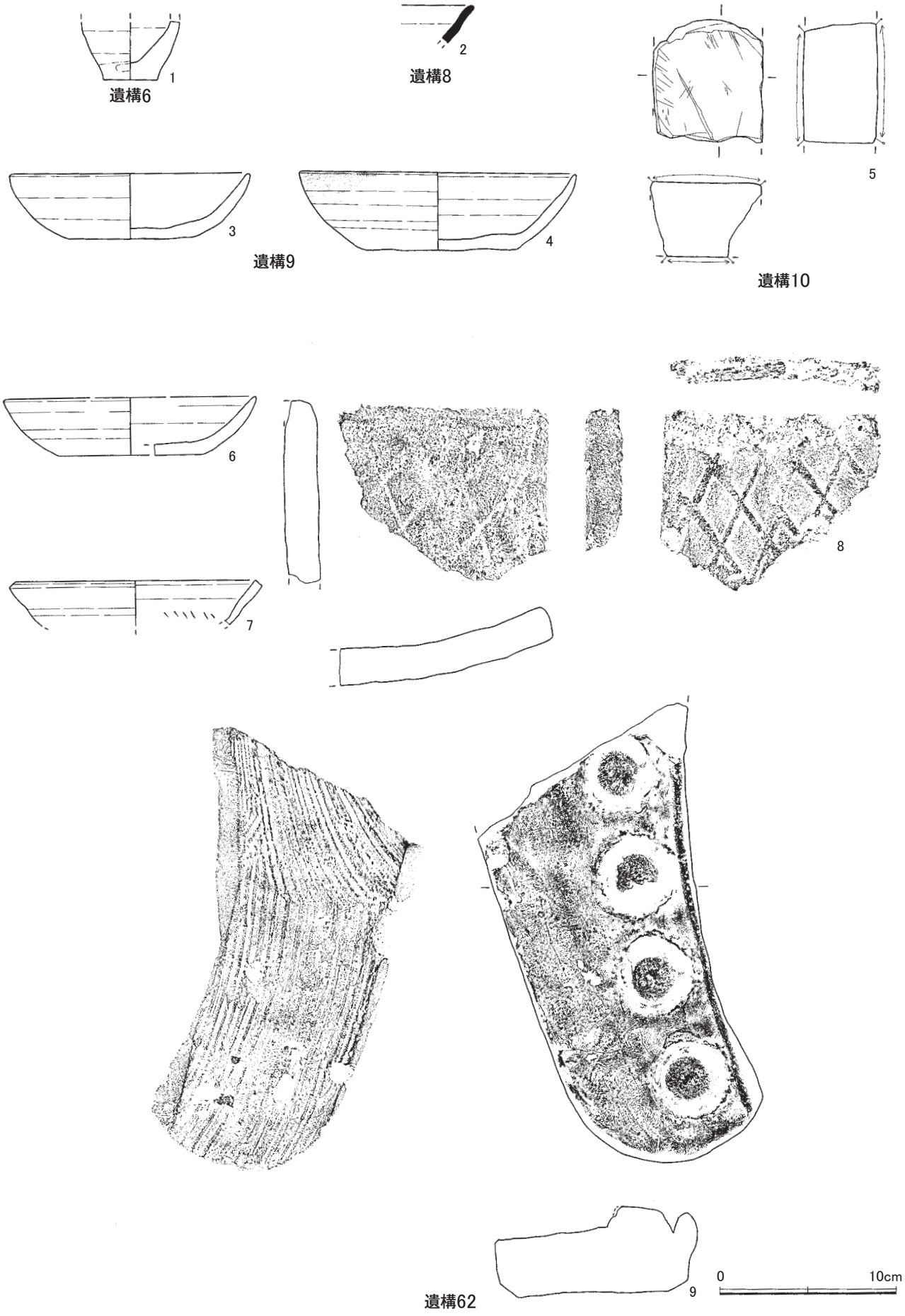


図９　第１面各遺構出土遺物（３）

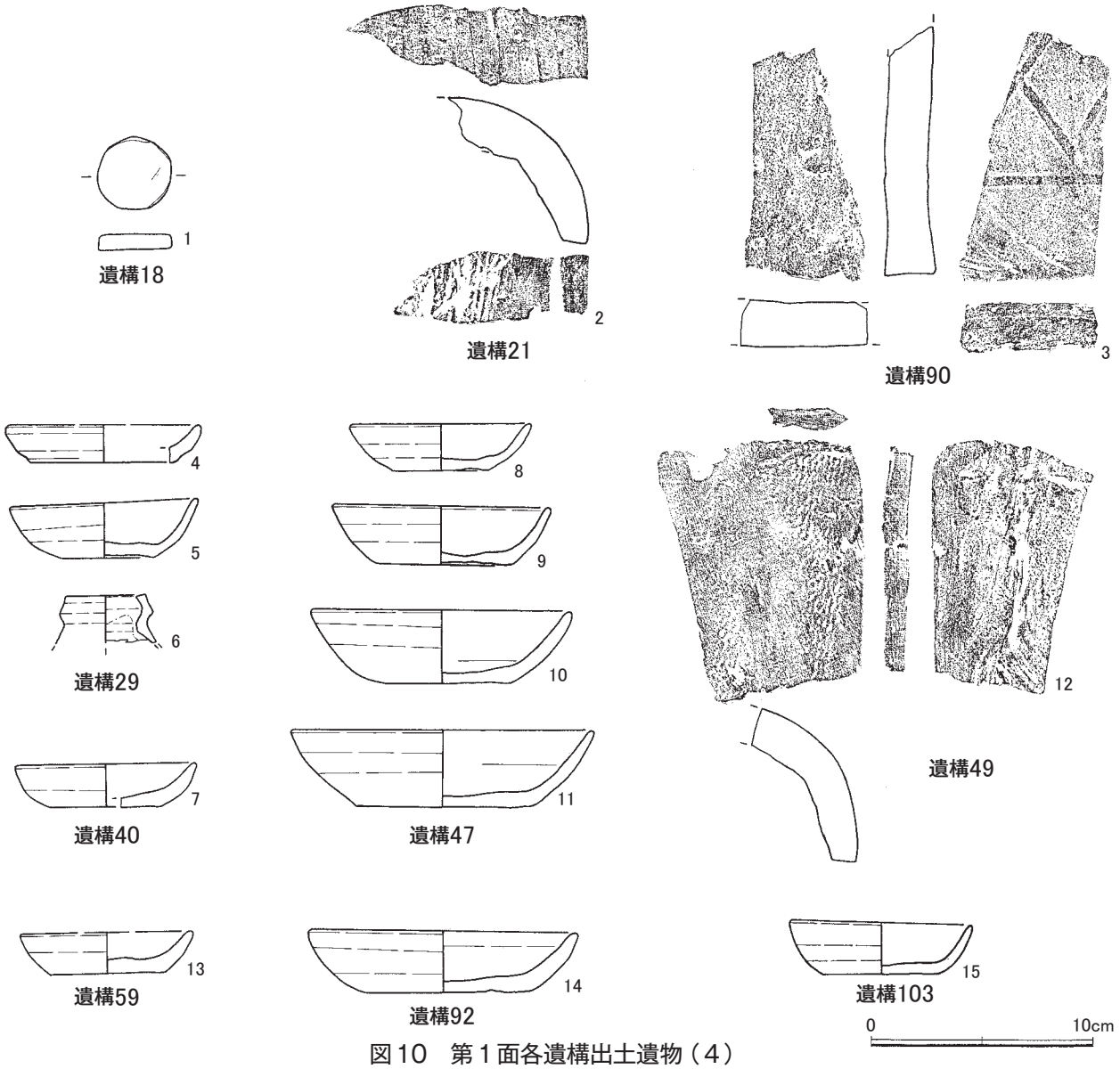


図10　第１面各遺構出土遺物（４）

幅56cm×45cm。深さ25，5cm。報告した遺物の内1点は、復元口径で16，5cm・底径７cm・器高4，8cmと大型のかわらけ（図８－６）である。その他に破片で女瓦が出土している。

遺構88（図４・図５・図８）

遺構87に切られる。ピットである。覆土は灰茶褐色弱粘質土･炭化物･泥岩粒を含む。遺構87覆土に近似。幅54cm×(40)cm。深さ22，5cm。出土遺物はかわらけ。

・第１ｂ面（図４）

第１ｂ面で発見した遺構は土坑５基・ピット37穴である。第１ａ面でも示した破砕泥岩による地業層と溝状遺構82の間に４時期の遺構を検出し、短期間に造り替えを行った様子を確認している。ピット底面に泥岩が遺存する遺構を数穴発見し、それぞれ礎石あるいは柱の根固めとして泥岩を使用した可能性を考えたが、調査区内で建物を推定することはできなかった。

遺構18（図４・図６・図10）

楕円形のピットである。覆土は暗褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒・褐鉄を含む。破片で男瓦が出土し

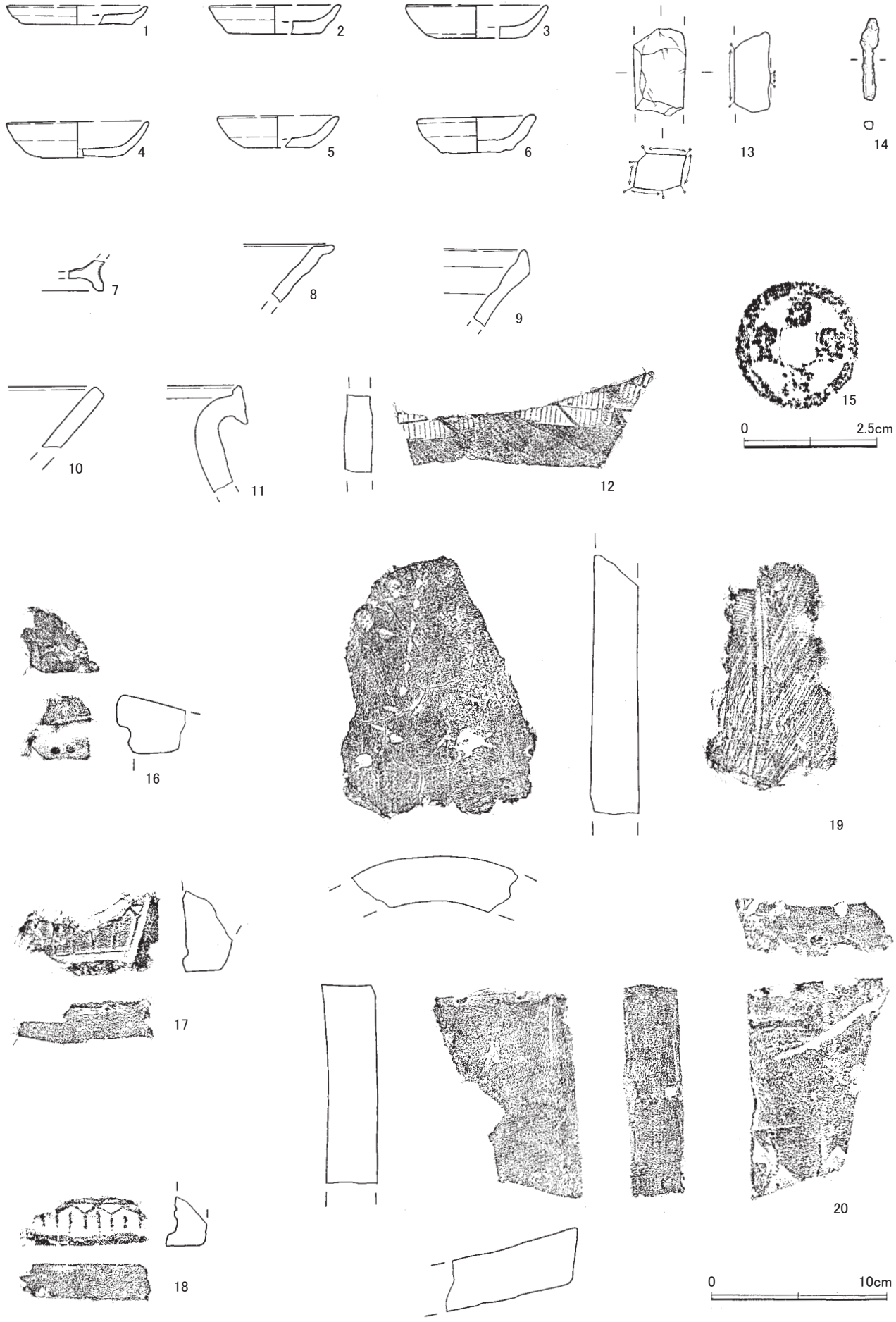


図11　第１面面上出土遺物（１）

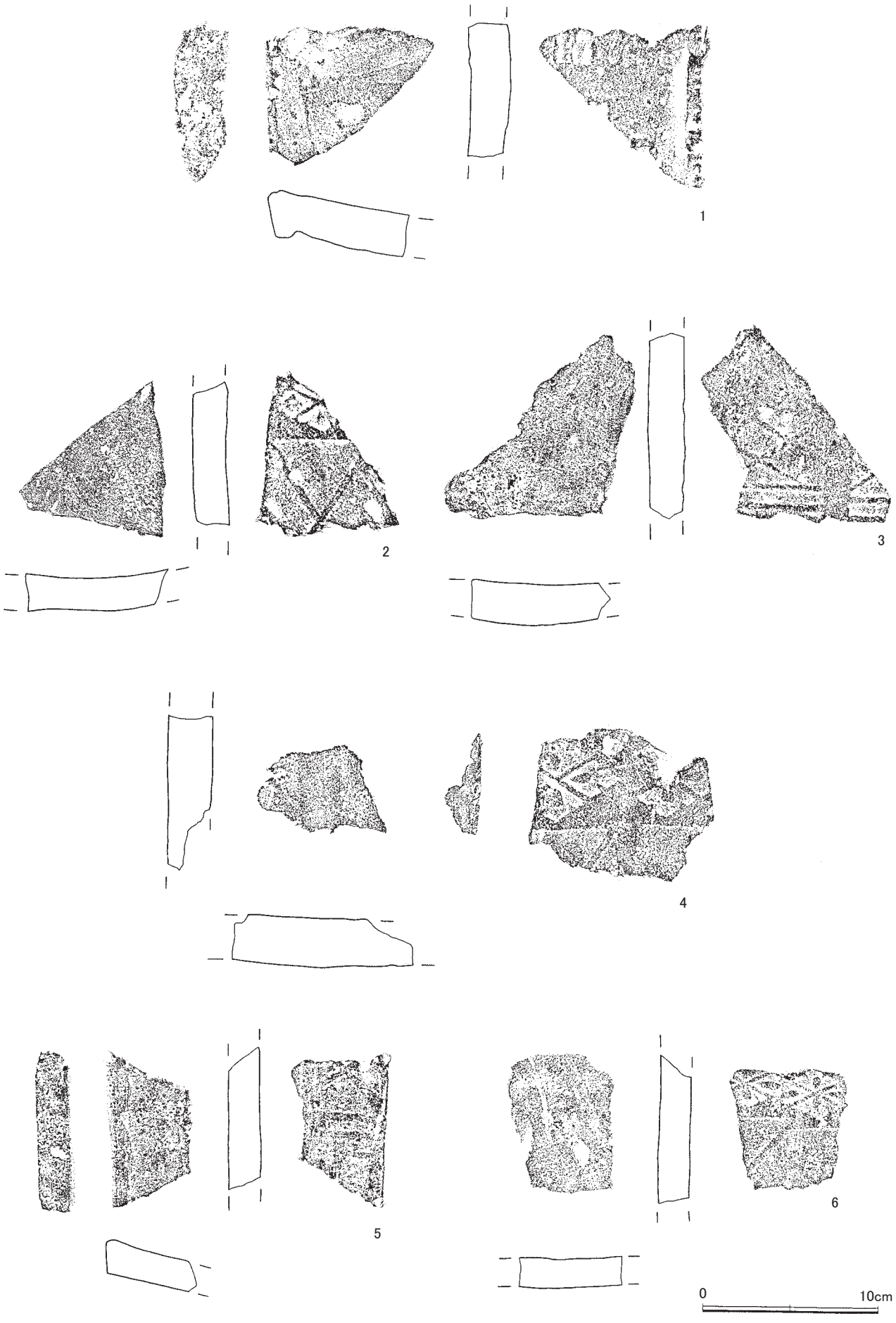


図12　第1面面上出土遺物（2）

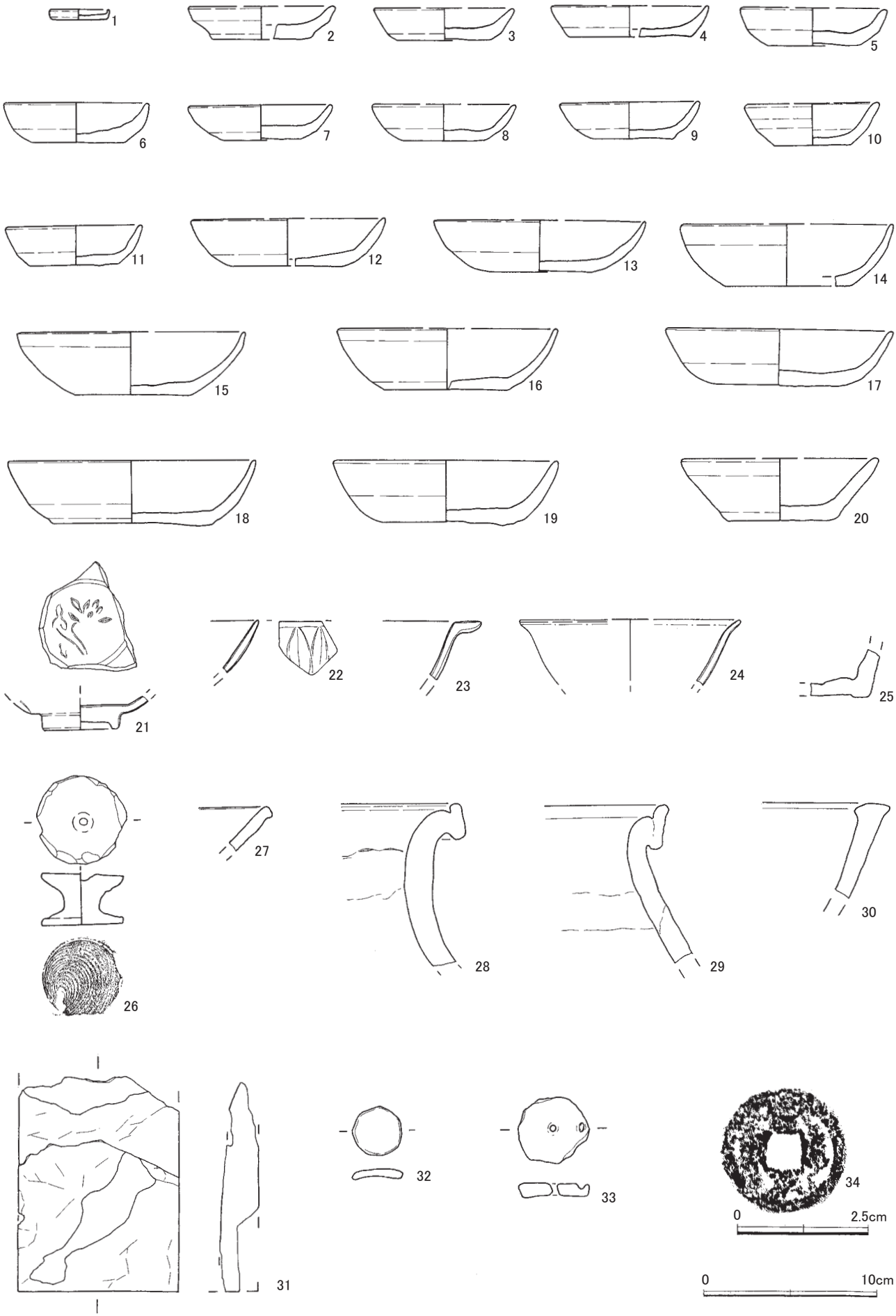


図13　第１面構成土出土遺物（１）

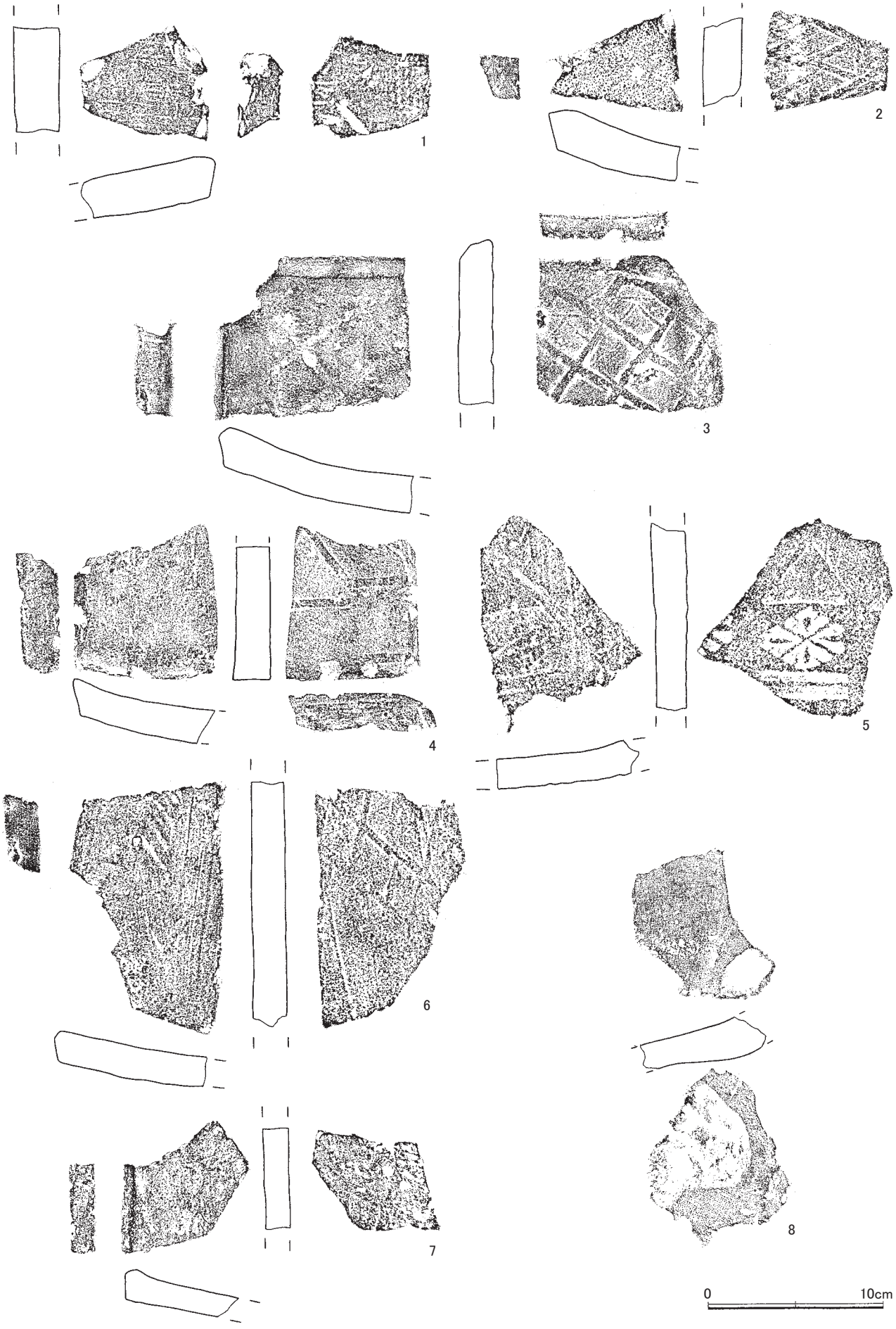


図14　第１面構成土出土遺物（２）

ている。幅55cm × 46cm。深さ30cm。出土遺物はかわらけ転用品。

遺構21（図4 ・図6 ・図10）

遺構18に切られる。円形のピットである。覆土は暗褐色砂質土・炭化物・泥岩粒を含む。幅36cm。深さ15cm。出土遺物はない。

遺構29（図4 ・図6 ・図10）

楕円形の土坑である。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩粒を含む。幅110cm × 70cm。深さ24cm。出土遺物はかわらけ・青白磁梅瓶。破片で女瓦が出土している。

遺構40（図4 ・図6 ・図10）

楕円形のピットである。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒・炭化物・褐鉄を含む。切りあった遺構47・51に壊され規模・形状は不明。幅60cm。深さ25cm。出土遺物はない。

遺構47（図4 ・図6 ・図10）

円形のピットである。覆土は暗灰色砂質土。泥岩粒・砂礫粒含む。遺構底面に不整形な砂質凝灰岩があった。柱の根固めとして使用か。幅65cm × 52cm。深さ12cm。出土遺物はかわらけ。

遺構49（図4 ・図6 ・図10）

楕円形の土坑である。覆土は暗灰色砂質土・炭化物・泥岩粒を含む。幅78cm × 68cm。深さ20cm。出土遺物は男瓦。その他に破片でかわらけ・常滑甕が出土している。

遺構59（図4 ・図6 ・図10）

円形のピットである。遺構29に切られ規模不明。径約46cm。深さ24cm。覆土は暗褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒を含む。出土遺物はかわらけ。

遺構90（図4 ・図6 ・10）

楕円形のピットである。遺構18・96に切られ規模・形状不明。幅55cm。深さ29cm覆土は暗灰色弱粘質土・炭化物・泥岩粒・褐鉄を含む。出土遺物は女瓦。その他に破片でかわらけ・手づくねが出土している。

遺構92（図4 ・図6 ・図10）

楕円形のピットである。遺構57に切られ規模不明。覆土は暗褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒・褐鉄を含む。幅50cm。深さ22cm。出土遺物のかわらけ（図10 − 14）は遺構底部で発見した。

遺構103（図4 ・図6 ・図10）

楕円形を呈するピットである。幅49cm × 29cm。深さ32cm。ピット底面に不整形な砂質凝灰岩とかわらけが正位置で遺存していた。覆土は暗褐色弱粘質土。出土遺物はかわらけ。

・第１面面上出土遺物（図11・図12）

第１面の面上で出土した遺物は、かわらけ・青白磁梅瓶・瀬戸折縁深皿・魚住捏ね鉢・常滑片口鉢Ⅱ類・常滑甕・石製品砥石・鉄製品釘・銅銭・瓦である。出土した瓦は実測遺物、破片ともに永福寺Ⅰ期～Ⅲ期に比定され年代に幅がある。細片の為実測はできなかったが、かわらけが目立って出土していた。その他に破片で手づくね・瀬戸壷・常滑甕・常滑片口鉢Ⅱ類・男瓦・女瓦・鐙瓦・火鉢・土師器甕が出土している。

・第１面構成土出土遺物（図13・図14）

第1面構成土で出土した遺物はかわらけ・青磁鎬蓮弁文碗・青磁蓮弁文折縁鉢・白磁口兀碗・青白磁梅瓶・瀬戸仏供具・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑甕・土器質火鉢・石製品硯・かわらけ転用品・瓦である。第

1面の構成土は後述する第２面の基壇状遺構覆土と重なる部分もあるが、灰褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒・褐鉄を含む堅く締まった土である。出土した遺物から概ね14世紀代の年代が比定されるが、外反する厚い側壁を持つかわらけ（図13－20）が１点ではあるが出土しており、15世紀前半代まで年代が下る可能性もある。第１面では遺構覆土内および構成土内からも瓦の出土が目立っているが、第1面面上で出土した瓦同様に年代に幅がある。その他に破片でかわらけ・手づくね・瀬戸壷・常滑甕・常滑片口鉢Ⅱ類・瓦・土師器甕が出土した。

２．第２面の遺構と遺物（図 15 ～図 21）

・第２ａ面（図15）

第２面で発見した遺構も、第１面同様にａ・ｂの２時期に分けて報告している。

第２ａ面で発見した遺構は基壇状遺構・溝状遺構１条・土坑８基・ピット６穴である。繁雑にピットが切りあった第１面とは大きく様相が異なり、やや大型の土坑が中心となる。調査区の東端では逆Ｌ字状に基壇状遺構が発見され、方形状の土坑を数基確認した。方形土坑はいずれも浅い形状であったが、上層の遺構に壊されてしまっている可能性がある。２時期の生活面の造り替えを確認した。第２面の遺構確認レベルは海抜約14，10ｍである。第２面構成土は明茶褐色砂質土･炭化物･泥岩粒･褐色砂を含む。

遺構105（図15）

調査区西側で発見した溝状遺構である。遺構の大半は調査区外に延びており形状・規模は不明であるが、遺構東壁に側板が遺存していたこと、遺構覆土に青灰色砂と礫砂を多く含み、泥岩粒が摩耗していたことなどから、遺構遺存部分が溝の東側壁であったと考えている。出土遺物はない。

遺構107（図15・図16・図17）

円形のピットである。幅63cm × 54cm。深さ14cm。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩・炭化物を含む。遺構底面近くに礎板状の木片が出土したが、遺存状態が悪く採集することはできなかった。出土遺物はかわらけ・常滑片口鉢Ⅰ類。その他に破片でかわらけ・手づくねが出土している。

遺構109（図15・図16・図17）

方形状の土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっているため規模は不明。遺構114を切る。覆土は茶褐色砂質土・泥岩・泥岩粒・炭化物を含む。深さ14cm。出土遺物はかわらけ。その他に破片でかわらけ・手づくね・常滑甕が出土している。

遺構110（図15・図16・図17）

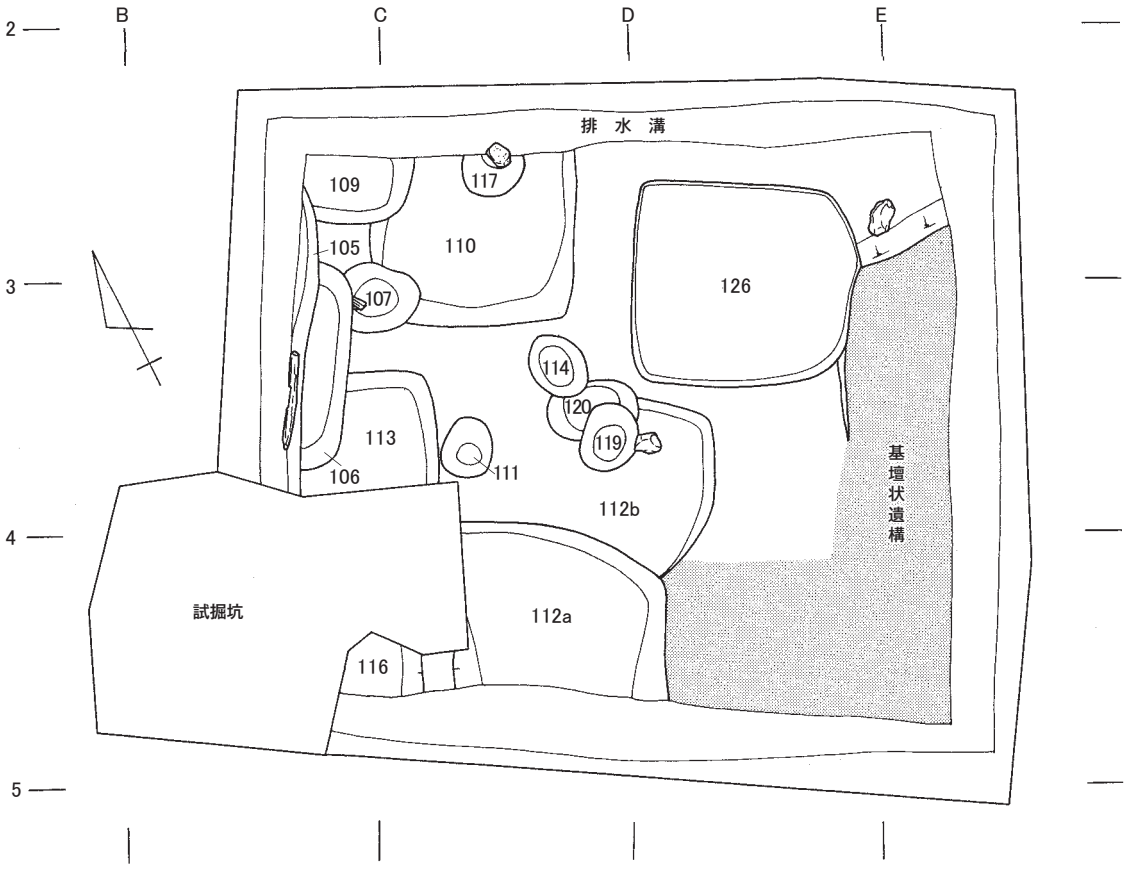
方形状の土坑である。覆土は灰茶褐色粘質土・泥岩粒炭化物・砂質凝灰岩細片を含む。調査区外に遺構が延びてしまっているため規模は不明。幅161cm。深さ15cm。出土遺物はかわらけ。その他に破片でかわらけ・手づくね・常滑甕が出土している。

遺構111（図15・図16・図17）

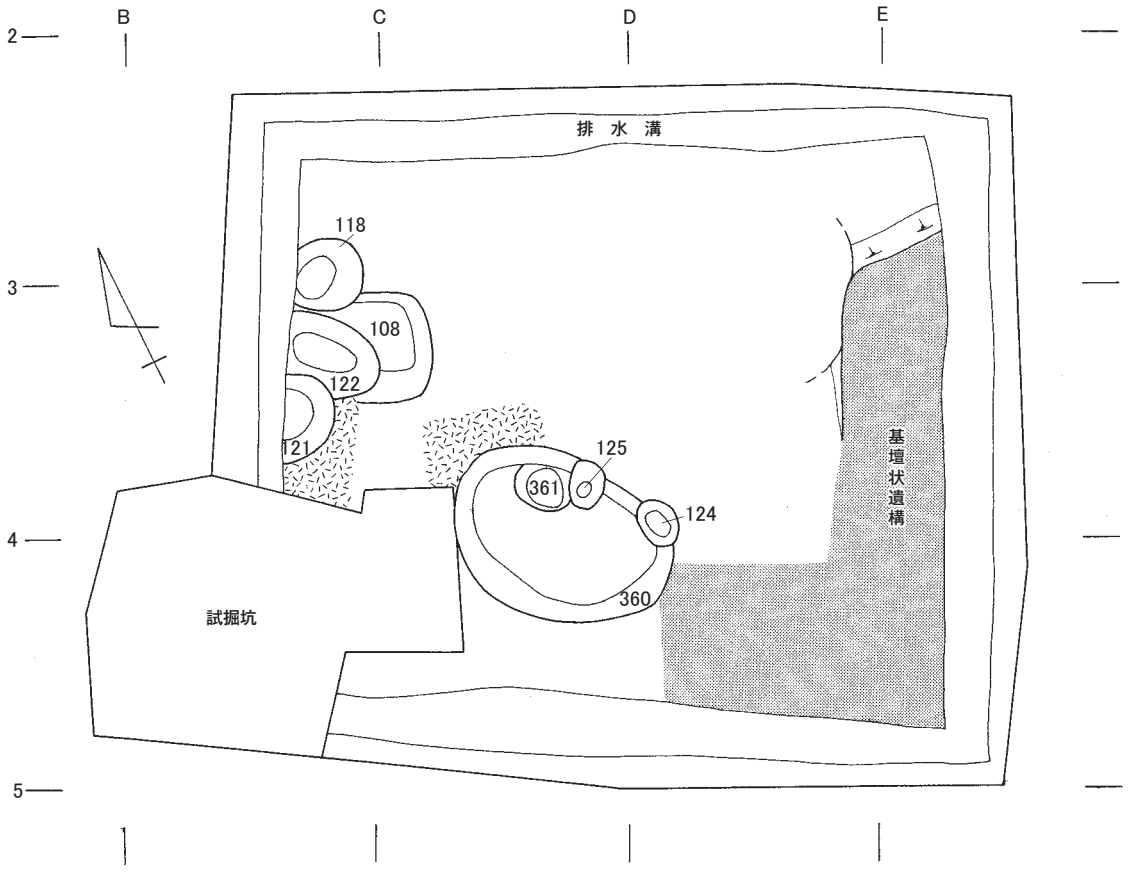
不正円形のピットである。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩・炭化物・褐鉄を含む。幅47cm × 38cm。深さ18cm。出土遺物はかわらけ・かわらけ質の火鉢。

遺構112ａ（図15・図16・図17）

方形土坑である。覆土は図16土層注記を参照。当初、遺構112bを含めた一つの遺構として掘り始めたため、破片数量は一括採集遺物として計測している。破片でかわらけ・手づくね・常滑甕・山茶碗・



<2a面>



<2b面>

0 2m

図15　第2面全測図

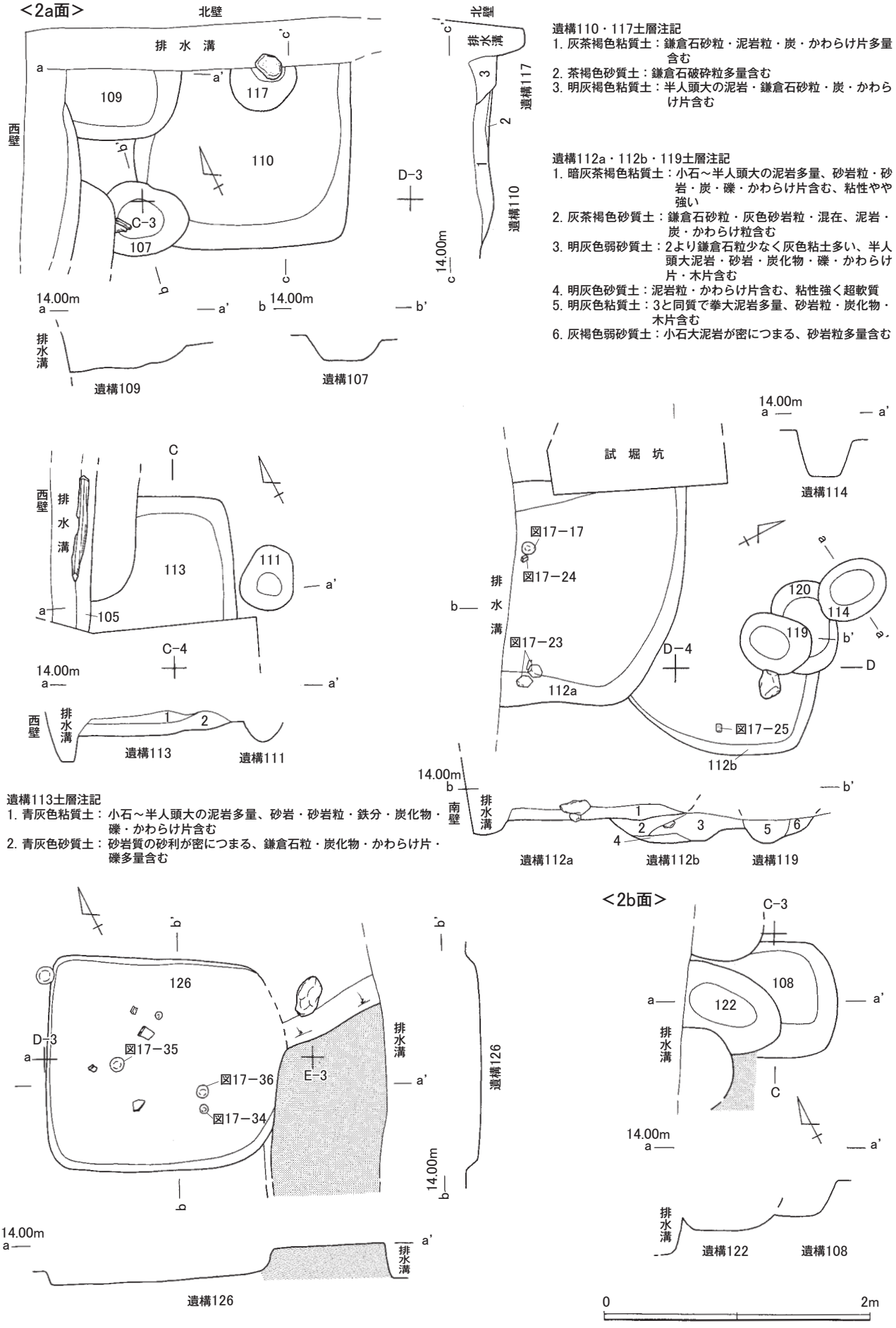

<2a面>
北壁
排水溝
109
117
110
107
C-3
D-3
西壁
14.00m
遺構109
遺構107
遺構117
遺構110
遺構113土層注記
1. 青灰色粘質土：小石～半人頭大の泥岩多量、砂岩・砂岩粒・鉄分・炭化物・礫・かわらけ片含む
2. 青灰色砂質土：砂岩質の砂利が密につまる、鎌倉石粒・炭化物・かわらけ片・礫多量含む
遺構113
遺構111
遺構110・117土層注記
1. 灰茶褐色粘質土：鎌倉石砂粒・泥岩粒・炭・かわらけ片多量含む
2. 茶褐色砂質土：鎌倉石破砕粒多量含む
3. 明灰褐色粘質土：半人頭大の泥岩・鎌倉石砂粒・炭・かわらけ片含む
遺構112a・112b・119土層注記
1. 暗灰茶褐色粘質土：小石～半人頭大の泥岩多量、砂岩粒・砂岩・炭・礫・かわらけ片含む、粘性ややや強い
2. 灰茶褐色砂質土：鎌倉石砂粒・灰色砂岩粒・混在、泥岩・炭・かわらけ粒含む
3. 明灰色弱砂質土：2より鎌倉石粒少なく灰色粘土多い、半人頭大泥岩・砂岩・炭化物・礫・かわらけ片・木片含む
4. 明灰色砂質土：泥岩粒・かわらけ片含む、粘性強く超軟質
5. 明灰色粘質土：3と同質で拳大泥岩多量、砂岩粒・炭化物・木片含む
6. 灰褐色弱砂質土：小石大泥岩が密につまる、砂岩粒多量含む
試掘坑
図17－17
図17－24
図17－23
図17－25
112a
112b
D-4
南壁
遺構114
遺構112a
遺構112b
遺構119
126
図17－35
図17－36
図17－34
E-3
遺構126
<2b面>
108
122
遺構122
遺構108
0
2m

図16　第2面各遺構

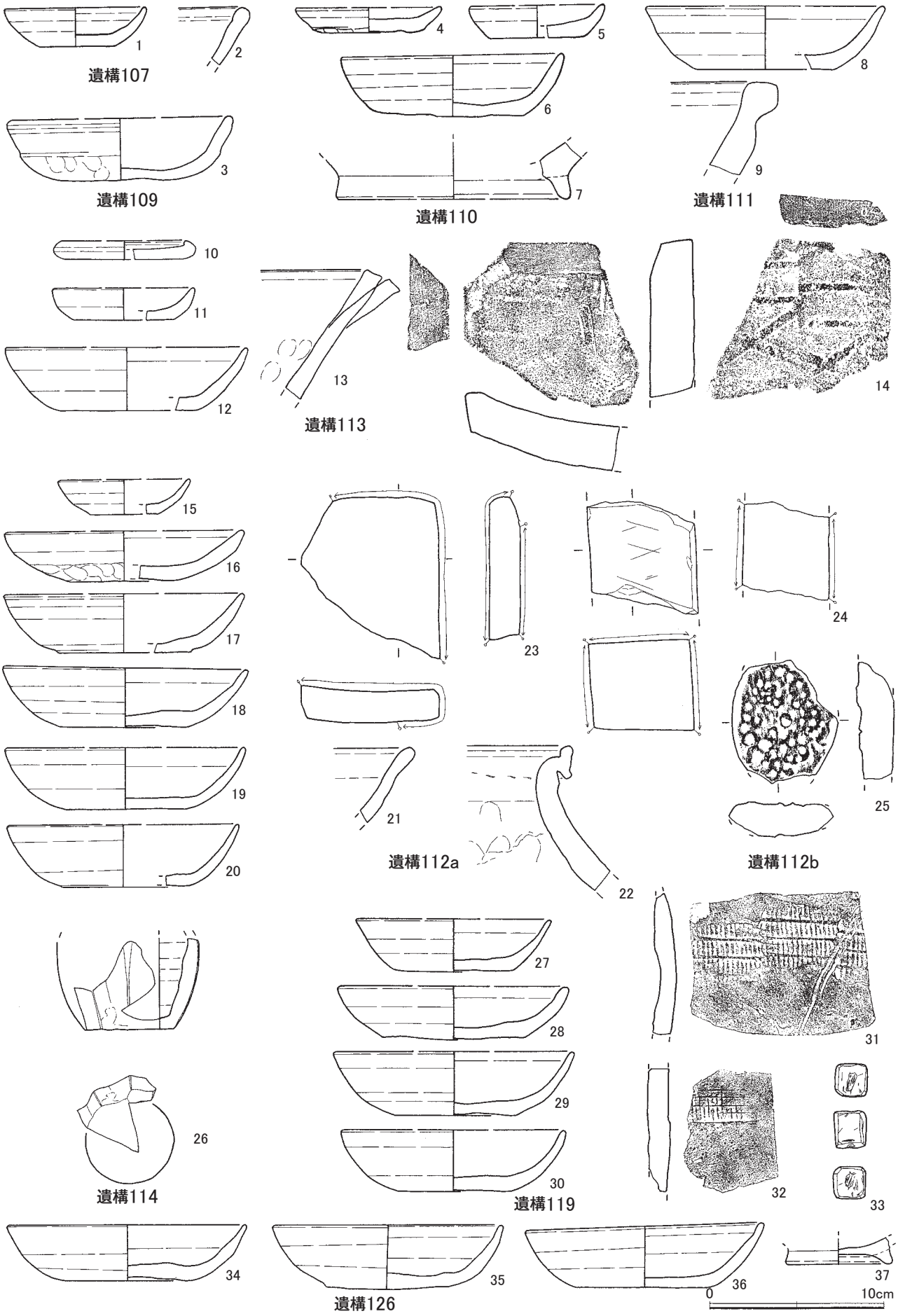


図17　第２面各遺構出土遺物（１）

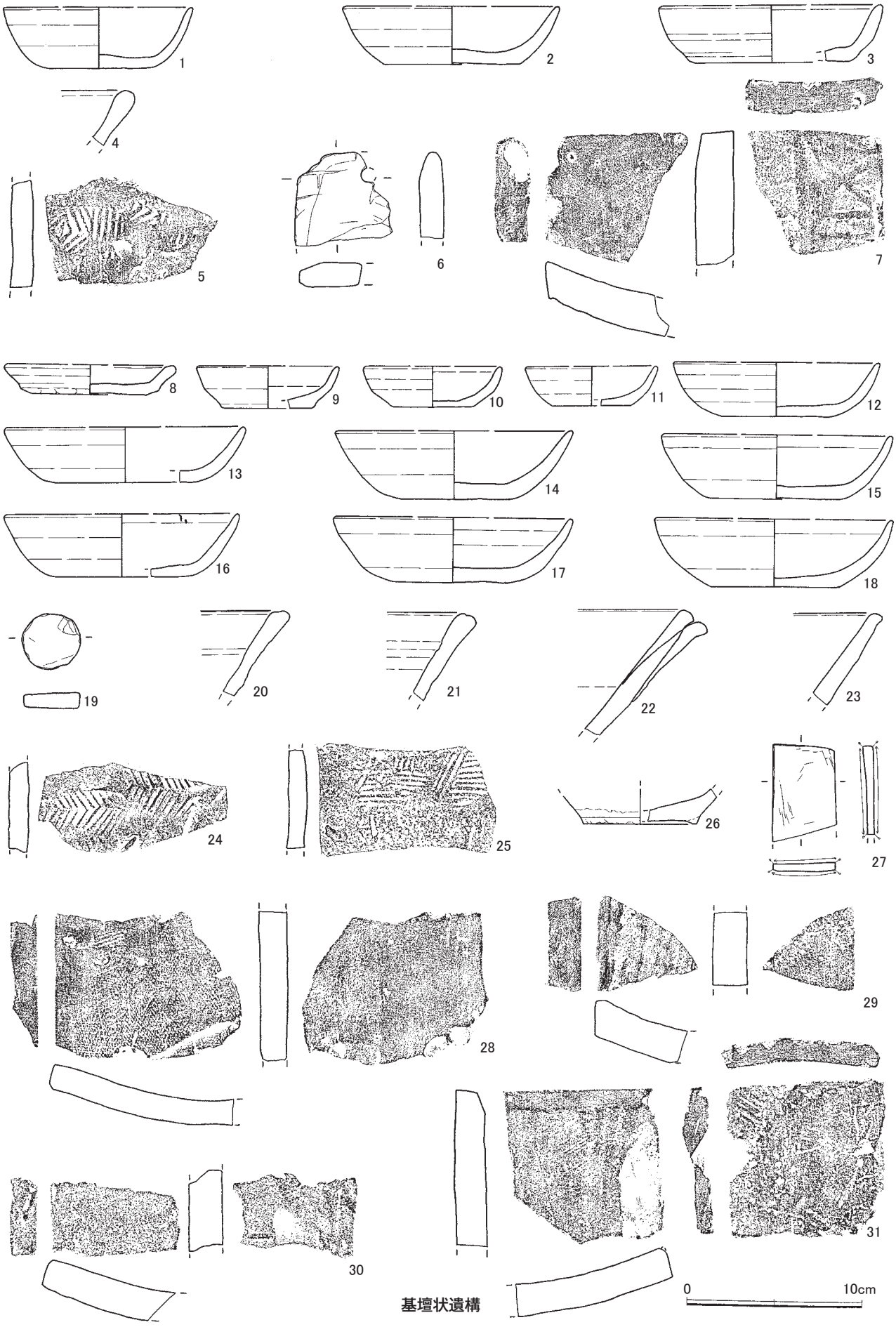


図18　第２面各遺構出土遺物（２）

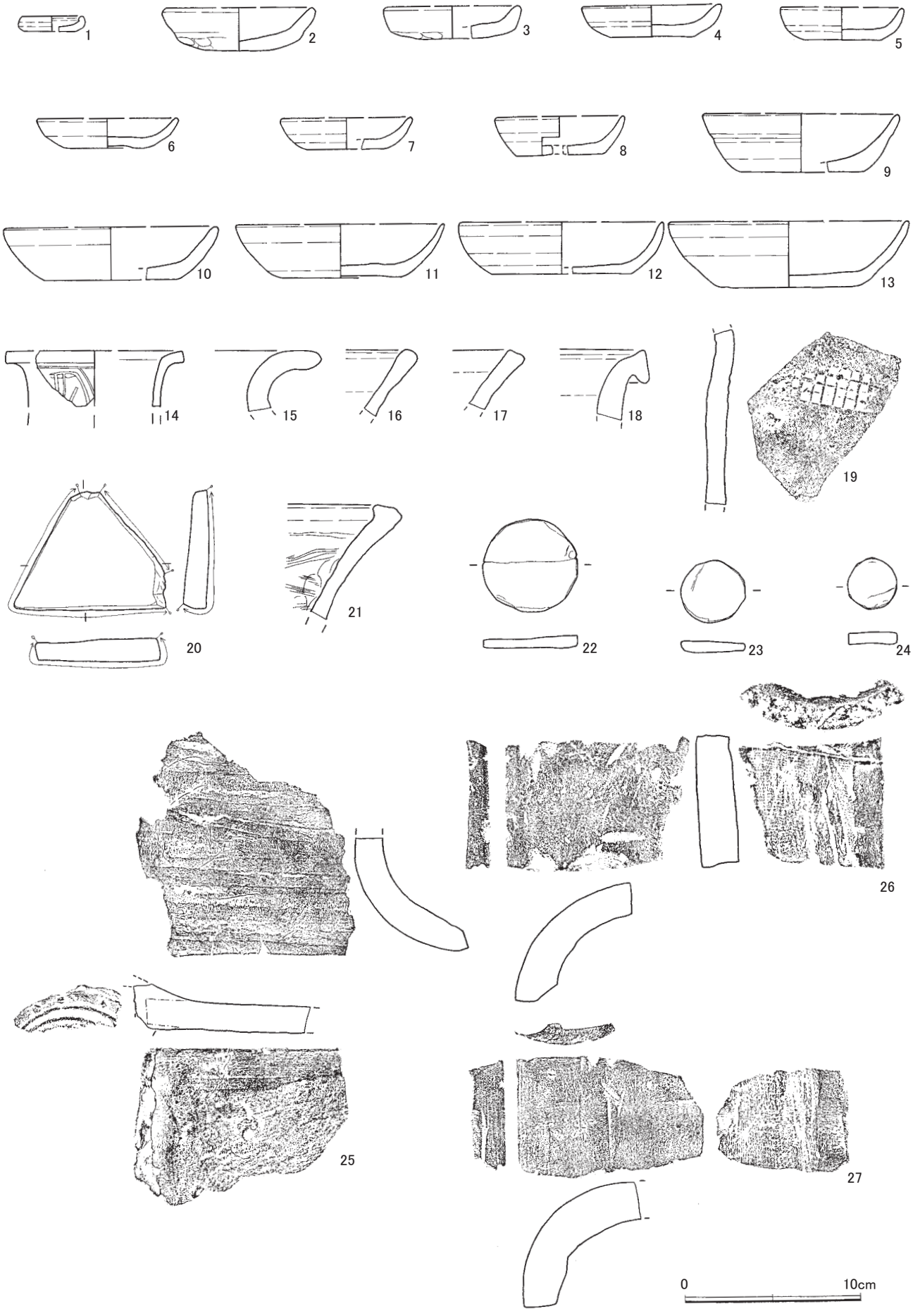


図19　第２面面上出土遺物

男瓦・土師器甕・輪高台の漆椀が出土している。調査区外遺構が延びてしまっている為に規模は不明。深さ10cm。出土遺物はかわらけ・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・瓦転用品・砥石。

遺構112ｂ（図15・図16・図17）

遺構112a・114・119・120に切られ規模・形状は不明。浅い方形の土坑である。覆土は灰茶褐色砂質土・泥岩・泥岩粒・炭化物を含む。深さ20cm。出土遺物は泥岩加工品。破片でかわらけ・手づくね・常滑甕・山茶碗・男瓦・土師器甕が出土しており、出土数量は多い。

遺構113（図15・図16・図17）

方形の土坑である。覆土は青灰色弱粘質土・泥岩・砂質凝灰岩・炭化物・褐鉄を含む。出土遺物はかわらけ・常滑甕・女瓦。その他に破片でかわらけ・手づくね・手づくね白かわらけ・常滑甕・男瓦が出土している。遺構106・試掘坑に切られてしまっていたために規模不明。深さ20cm。

遺構114（図15・図16・図17）

楕円形のピットである。覆土は青灰色粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物・礫を含む。幅180cm×158cm。深さ21cm。出土遺物は白磁水注。

遺構117（図15・図16）

円形のピットである。径約50cm。深さ約20cm。遺構底面に不整形な砂質凝灰岩が遺存。根固めとして使用か。覆土内から烏帽子の破片が出土したが遺存状態が悪く採集できなかった。その他に破片でかわらけ・手づくね・常滑甕・常滑壷・山茶碗が出土している。

遺構119（図15・図16・図17）

円形のピットである。遺構110を切る。覆土は明灰褐色弱粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物を含む。幅55cm×43cm。深さ19cm。出土遺物はかわらけ・常滑甕・滑石製品。その他に破片で女瓦が出土している。

遺構120（図15・図16）

楕円形のピットである。幅70cm×49cm。深さ20cm。覆土は明褐色弱粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物を含む。破片でかわらけが出土している。

遺構126（図15・図16・図17）

方形の土坑である。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩・炭化物を含む。幅117cm×160cm。深さ16cm。出土遺物はかわらけ・土師器碗。破片でロクロ土師器が出土しているが、図示したロクロ土師器の高台付碗と同一個体の可能性あり。

基壇状遺構（図15・図18）

調査区東端で発見した。調査区に対して逆Ｌ字状に遺存する。調査区壁で観察した土層堆積の様子から基壇状遺構として報告しているが、地業の端部であった可能性もある。覆土は泥岩・泥岩粒・砂礫・炭化物を含む砂質土、弱粘質土の互層で形成され固く締まる。覆土内からはかわらけ細片が多く採集された。地業材として使用したものか。出土遺物はかわらけ・かわらけ転用品・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑甕・砥石・女瓦。その他に破片で手づくね・手づくね白かわらけ・瀬戸壷・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑片口鉢Ⅱ類・男瓦・女瓦が出土している。

・第２ｂ面（図15）

第２ｂ面で発見した遺構は土坑２基・ピット６穴である。第２a面で確認した浅い方形土坑下層一部に、拳大の破砕泥岩・泥岩・礫・安山岩などで粗く地業した痕跡が残る。発見した土坑・ピットともに建物址の存在をうかがわせる遺構はなかった。

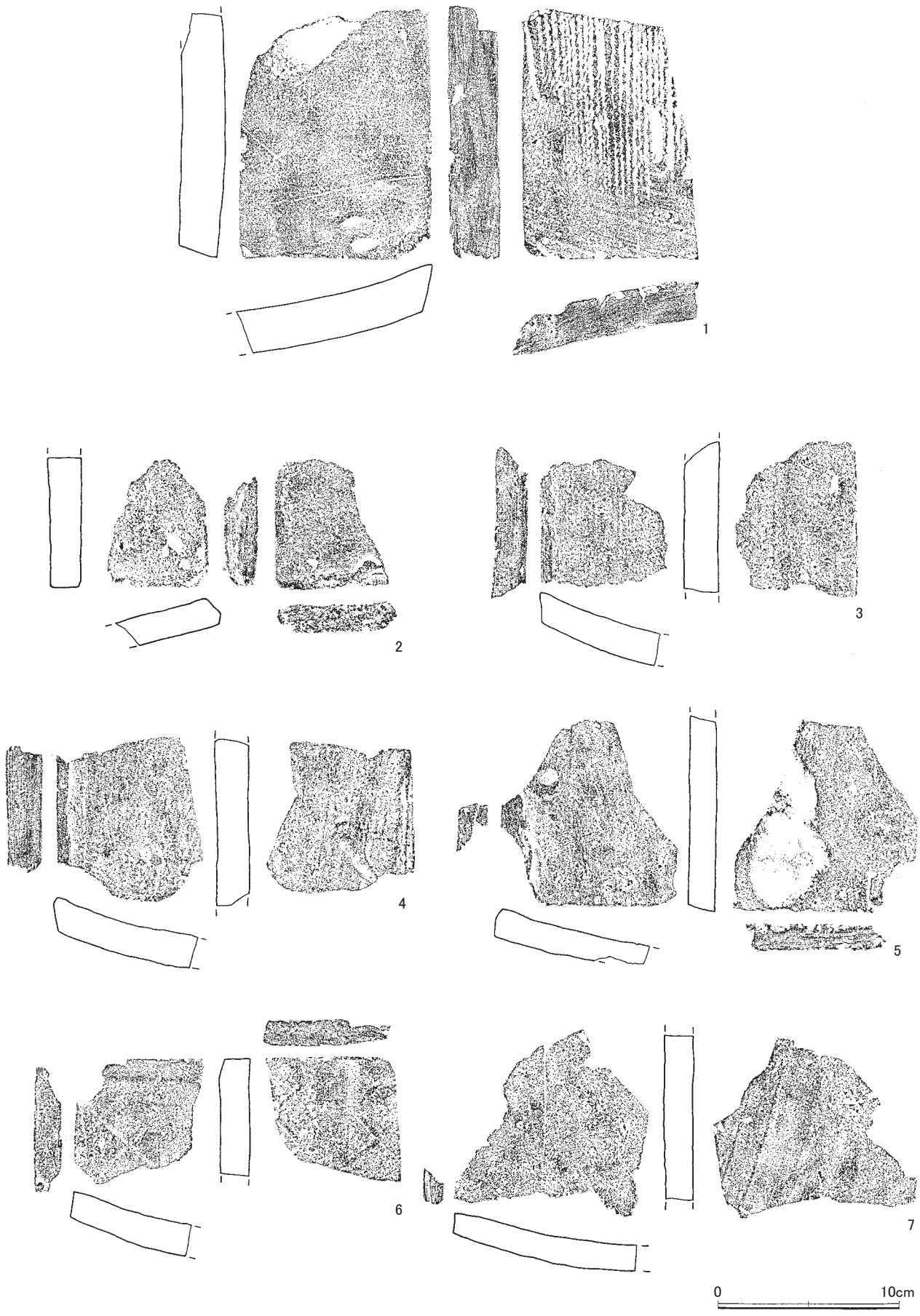


図20　第２面面上出土遺物（２）

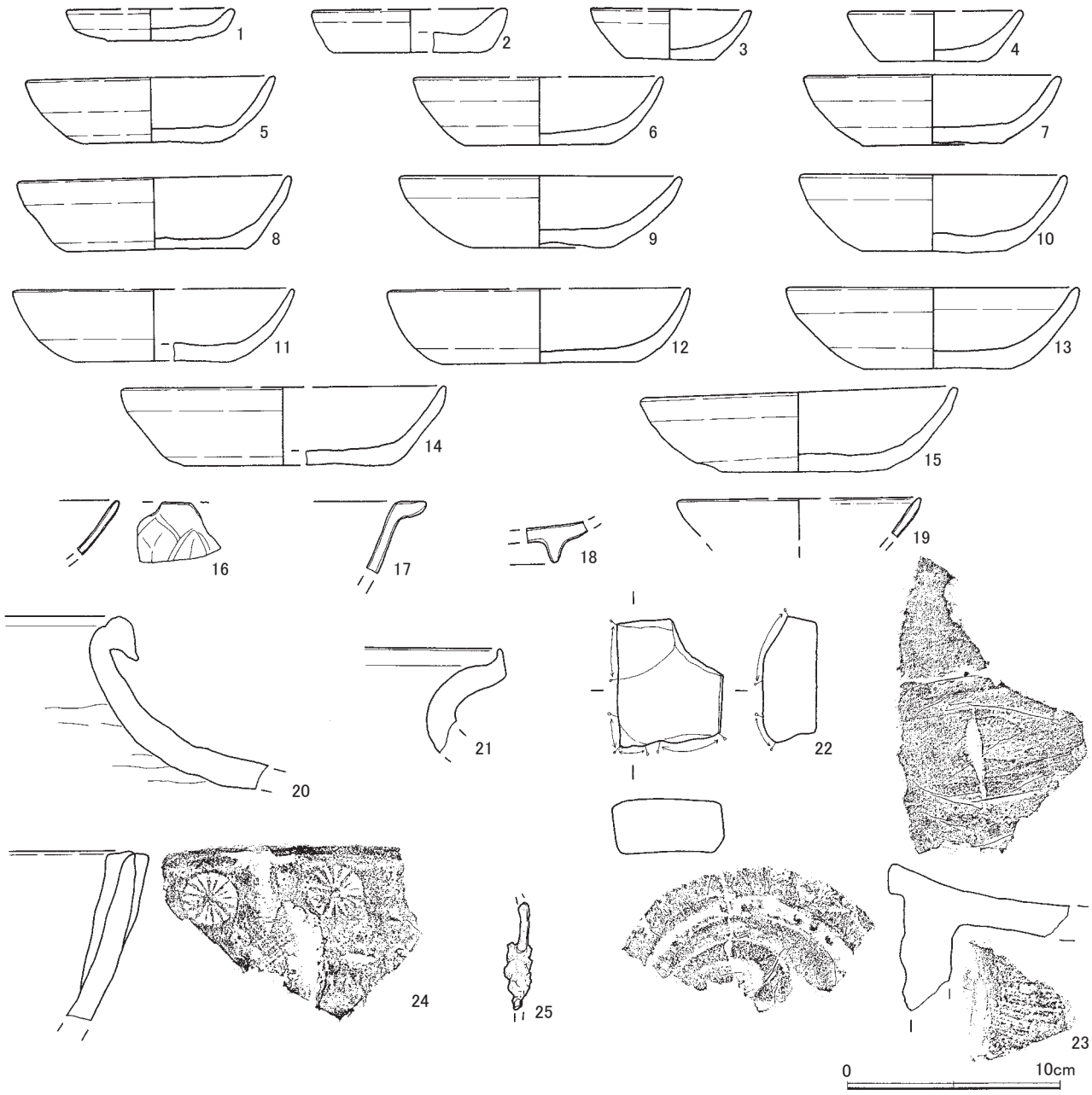


図21　第２面構成土出土遺物

遺構108（図15・図17・図18）

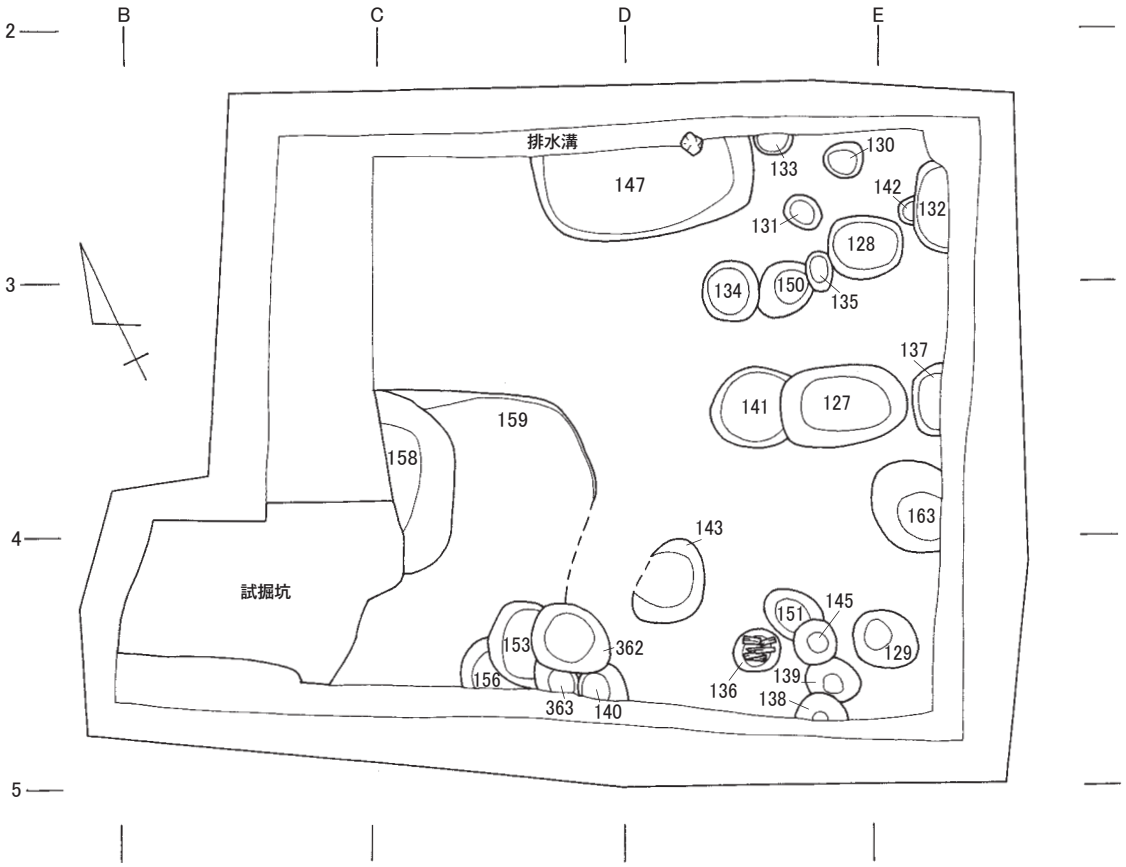
方形の土坑である。覆土は青灰色弱粘質土・炭化物・泥岩粒を含む。遺構118・122に切られ規模不明。深さ25，5cm。出土遺物はかわらけ・常滑甕・常滑片口鉢Ⅰ類・滑石製温石・女瓦。その他に破片で女瓦が出土している。

遺構122（図15・図16）

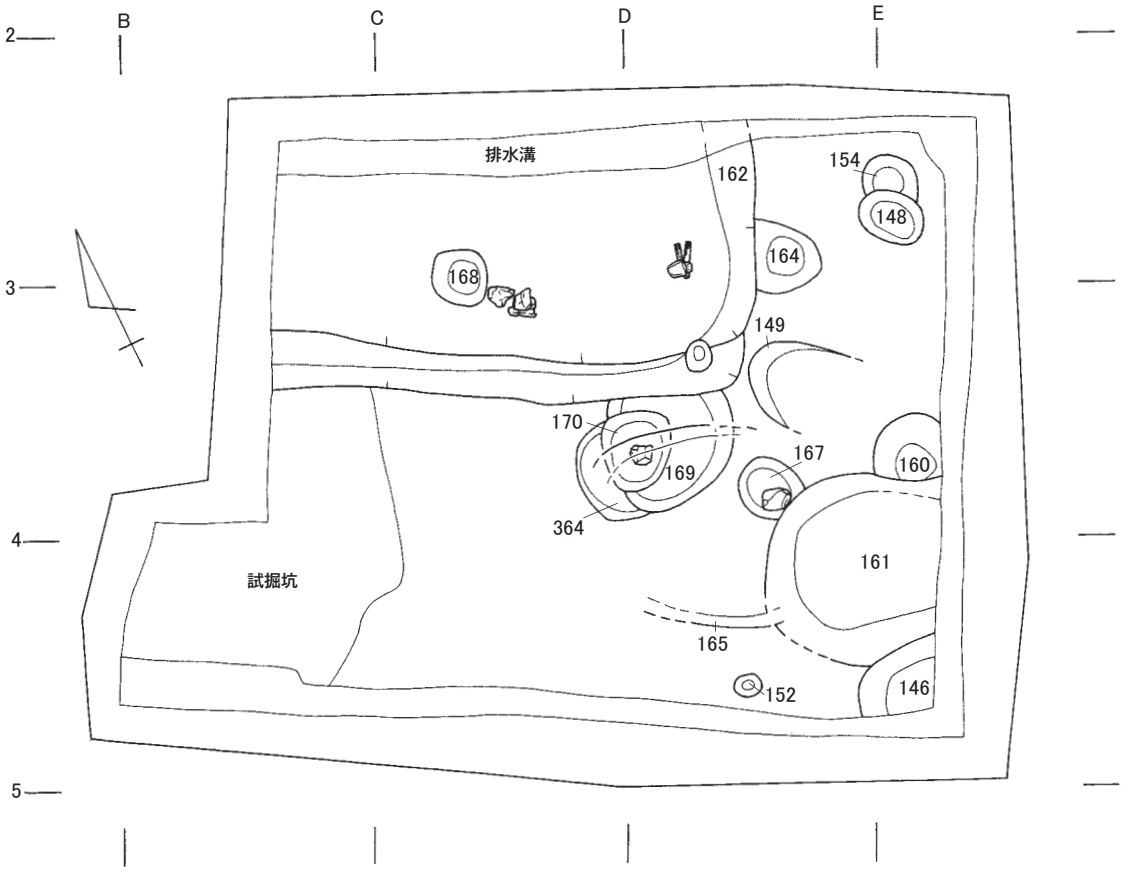
楕円形のピット。覆土は青灰色弱粘質土・泥岩粒を含む。幅82cm×65cm。深さ36，5cm。出土遺物はない。

・第２面面上出土遺物（図19・図20）

第２面の面上で出土した遺物は、かわらけ・かわらけ転用品・青白磁梅瓶・渥美甕・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑片口鉢Ⅱ類・常滑甕・常滑転用品・土器質火鉢・瓦である。第１面同様に瓦の出土量が多く、同じく年代に幅を持つ。破片ではかわらけ細片・常滑甕が多く出土した。かわらけ細片は地業の際に利用し



＜3a面＞



＜3b面＞

0 10cm

図22　第３面全測図

たのかもしれない。その他に破片で手づくね･手づくね白かわらけ･常滑甕･常滑片口鉢Ⅱ類･男瓦･女瓦･須恵器瓶類・灰釉陶器瓶類が出土している。

・第２面構成土出土遺物（図21）

第２面構成土出土遺物は、かわらけ・青磁蓮弁文碗・白磁口兀皿・常滑甕・瓦・瓦転用品・瓦質火鉢である。第２面構成土は明茶褐色砂質土・炭化物・泥岩粒・褐鉄を含む堅く締まった土である。面上出土遺物に比して構成土からの出土数量は大幅に減っている。その他に破片でかわらけ・手づくね・常滑甕・女瓦が出土している。

３．第３面の遺構と遺物（図 22 ～図 29）

・第３ａ面（図22）

第３面もａ・ｂの２期に分けて報告している。遺構確認レベルは標高約13，80mである。遺構の確認は破砕泥岩粒を含む固く締まった黒褐色粘質土上で行った。短期間に造り替えが行われたために、生活面を造成した地業は遺存していなかったが、調査区東側に青灰色砂を含む黒褐色粘質土の地業が一部遺存していた。上層の遺構に壊されたためか、礎板が遺存するピットや、柱穴痕と考えられる有機質土が遺存したピットなどを発見したが、建物址を推定することはできなかった。第３a面で発見した遺構は土坑７基・ピット21穴である。２時期の生活面を確認した。湧水量が多いため、堆積土中の水分保有量が増えたこともあり、破片を含めて木製品が多く出土した。

遺構127（図22・図23・図25）

楕円形の土坑である。覆土は茶褐色砂質土・泥岩・泥岩粒・褐鉄を含む。幅99cm × 64cm。深さ12，5cm。出土遺物は木製品の箸・経木折敷・用途不明品。

遺構134（図22・図23・図25）

円形のピットである。覆土は茶褐色砂質土・泥岩・泥岩粒・褐鉄を含む。幅49cm × 45cm。深さ22，5cm。出土遺物はかわらけ・木製品の箸。

遺構136（図22）

浅い円形のピットである。覆土は暗褐色弱粘質土･泥岩粒･炭化物を含む。幅36cm × 32cm。深さ７cm。遺構底面に礎板を確認したが、遺存状態が悪く採集できなかった。出土遺物はない。

遺構141（図22・図23・図25）

円形のピットである。遺構127に切られる。覆土は青灰色弱粘質土・泥岩・褐鉄を含む。幅62cm × 60cm。深さ12cm。出土遺物はかわらけ。

遺構143（図22・図23・図25）

楕円形のピットである。覆土は茶褐色砂質土・泥岩粒・褐鉄を含む。幅72cm × 54cm。深さ30cm。出土遺物はかわらけ。

遺構147（図22・図23・図25）

方形の土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっているために、正確な形状・規模は不明。深さ36cm。後述する第３ｂ面の遺構162の覆土の一部であった可能性もある。覆土は茶褐色砂質土・泥岩・褐鉄を含む。出土遺物はかわらけ・常滑甕・木製品の草履芯。その他に破片でかわらけ・手づくね・常

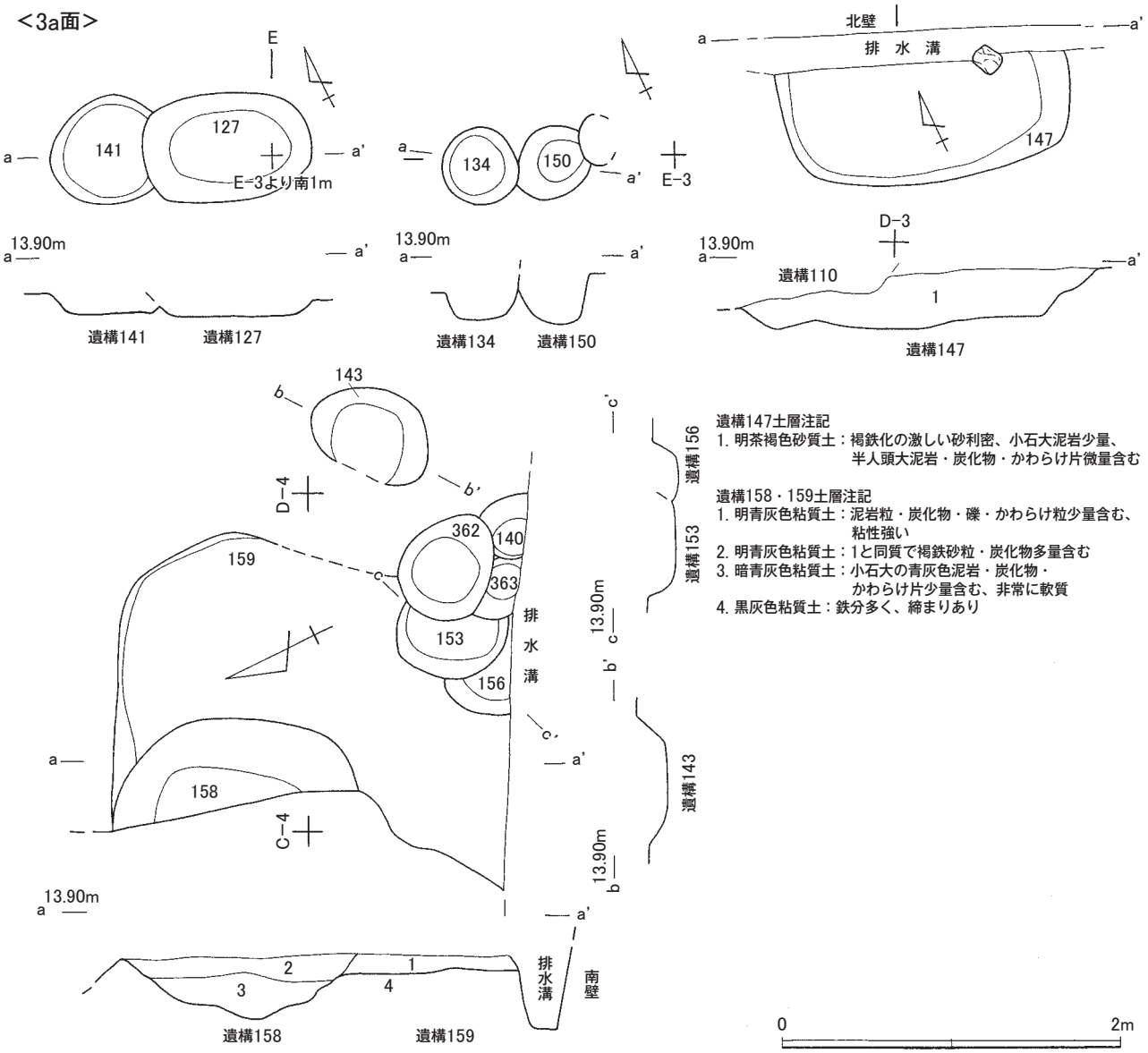


図23　第3面各遺構（1）

滑甕・土師器坏・土師器甕が出土している。

遺構150（図22・図23・図25）

円形のピットである。遺構134と遺構135に切られる。幅48cm×38cm。深さ27cm。覆土は青灰色弱粘質土・泥岩・泥岩粒・褐鉄・有機質土を含む。出土遺物はかわらけ・常滑片口鉢Ⅱ類。

遺構153（図22・図23・図25）

円形の土坑である。遺構362・363に切られる。幅68cm×53cm。深さ23，5cm。覆土は茶褐色砂質土・泥岩・褐鉄を含む。出土遺物はかわらけ。その他に破片でかわらけ・常滑甕が出土している。

遺構156（図22・図23・図25）

調査区外に遺構が延びてしまっているために形状・規模は不明。ピットである。深さ23cm。覆土は暗褐色弱粘質土・泥岩・炭化物を含む。出土遺物はかわらけ。その他に破片でかわらけ・手づくね白かわらけが出土している。

遺構158（図22・図23・図25）

土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっているために形状・規模不明。遺構159を切る。深さ31cm。覆土は明青灰色粘質土。出土遺物はかわらけ。

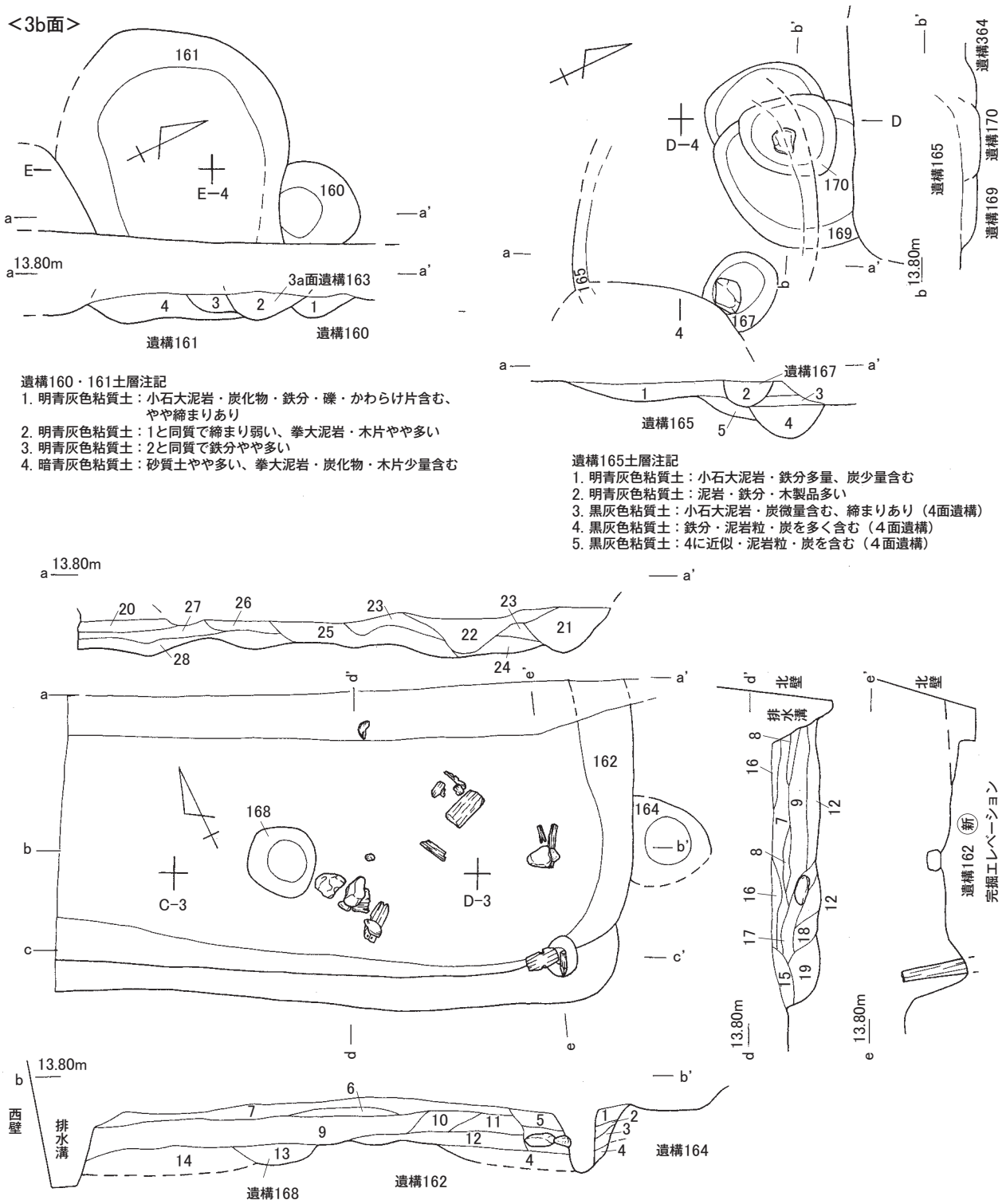

＜3b面＞
161
E
E−4
160
a
a'
13.80m
3a面遺構163
4
3
2
1
遺構161
遺構160
b'
D
D−4
170
169
遺構364
遺構170
遺構165
遺構169
165
167
遺構167
遺構165
5
b
遺構160・161土層注記
1. 明青灰色粘質土：小石大泥岩・炭化物・鉄分・礫・かわらけ片含む、やや締まりあり
2. 明青灰色粘質土：1と同質で締まり弱い、拳大泥岩・木片やや多い
3. 明青灰色粘質土：2と同質で鉄分やや多い
4. 暗青灰色粘質土：砂質土やや多い、拳大泥岩・炭化物・木片少量含む
遺構165土層注記
1. 明青灰色粘質土：小石大泥岩・鉄分多量、炭少量含む
2. 明青灰色粘質土：泥岩・鉄分・木製品多い
3. 黒灰色粘質土：小石大泥岩・炭微量含む、締まりあり（4面遺構）
4. 黒灰色粘質土：鉄分・泥岩粒・炭を多く含む（4面遺構）
5. 黒灰色粘質土：4に近似・泥岩粒・炭を含む（4面遺構）
20
27
26
23
23
25
22
21
28
24
e
d
d'
e'
北壁
排水溝
162
168
164
C−3
D−3
c
c'
遺構162（新）
完掘エレベーション
西壁
排水溝
6
7
9
10
11
5
12
13
14
遺構168
遺構162
遺構164
遺構162土層注記
1. 青灰色砂質土：小石大泥岩を含む砂利質土に木片・鉄分・かわらけ片含む
2. 暗灰色粘質土：木製品多量、小石大泥岩・炭化物含む
3. 暗灰色粘質土：2と同質で、1の砂利を多く含む
4. 暗灰色粘質土：2と同質で、2より色調明るい青灰色、非常に脆弱
5. 暗青灰色粘質土：海砂の様なきめ細かな砂を含む、小石大泥岩・炭化物・木片含む、やや締まりあり
6. 暗青灰色粘質土：5より色調黒い、粘性強く脆弱
7. 青灰色粘質土：粒～拳大泥岩・炭化物多量、鉄分・きめ細かな砂・かわらけ片・礫・木片含む、締まりあり
8. 暗青灰色粘質土：炭化物多量、きめ細かな砂・泥粒微量含む
9. 青灰色粘質土：粘性強く水分を多く含んだ脆弱な土、粒～拳大泥岩・炭化物・砂・木片ごく微量含む
10. 青灰色弱砂質土：きめ細かな砂の混合土、泥粒・炭化物・木片含む
11. 青灰色弱粘質土：10と同質、10より色調黒く木製品多量含む
12. 暗青灰色粘質土：木製品多量に含み粘性強く脆弱、粒～拳大泥岩・炭化物・礫含む
13. 黒灰色粘質土：泥岩粒・炭化物多量含む
14. 青灰色粘質土：きめ細かな砂と砂利混合土、粘質土と粒～小石大泥岩・炭化物多量含む
15. 茶黄色砂質土：粒～拳大泥岩・鉄分化した砂利多量含む（3面遺構）
16. 黄茶褐色弱粘質土：泥岩粒・鉄分多量、炭化物・礫含む、締まりあり
17. 暗青灰色粘質土：粘性強く脆弱、きめ細かな砂・泥岩粒・木片微量含む
18. 青灰色粘質土：拳大泥岩・炭化物・砂・木片含む
19. 暗青灰色粘質土：小石大泥岩・炭化物・木片多量含む（裏込めor竪穴部分）
20. 暗青灰色弱砂質土：きめ細かな砂質土と粘質土、粒～小石大泥岩・炭化物・褐鉄砂微量含む
21. 暗青灰色砂質土：泥砂粒・砂利密、小石大泥岩多量・炭化物・木片・黒褐色粘質土少量含む、締まり弱い
22. 暗青灰色砂質土：21と同質で遺物片・木片多量含む
23. 暗青灰色砂質土：21・22より青灰色のきめ細やかな砂多量、木片微量含む
24. 暗青灰色砂質土：泥岩粒・炭化物少量、小石大泥岩ごく微量、粘性土にきめ細やかな砂が混入
25. 暗青灰色粘質土：粒～拳大泥岩・炭化物・きめ細かな砂ごく微量含む、粘性強く締まり弱い
26. 暗青灰色粘質土：25と同質、下半部青は灰色のきめ細かな砂多量、炭化物・木片微量含む
27. 暗青灰色弱粘質土：25と同質できめ細かな砂少量含む
28. 暗青灰色粘質土：粒～小石大泥岩・炭化物・遺物片・木片ごく微量含む、粘性強く締まり弱い
0
2m

図24　第3面各遺構（2）

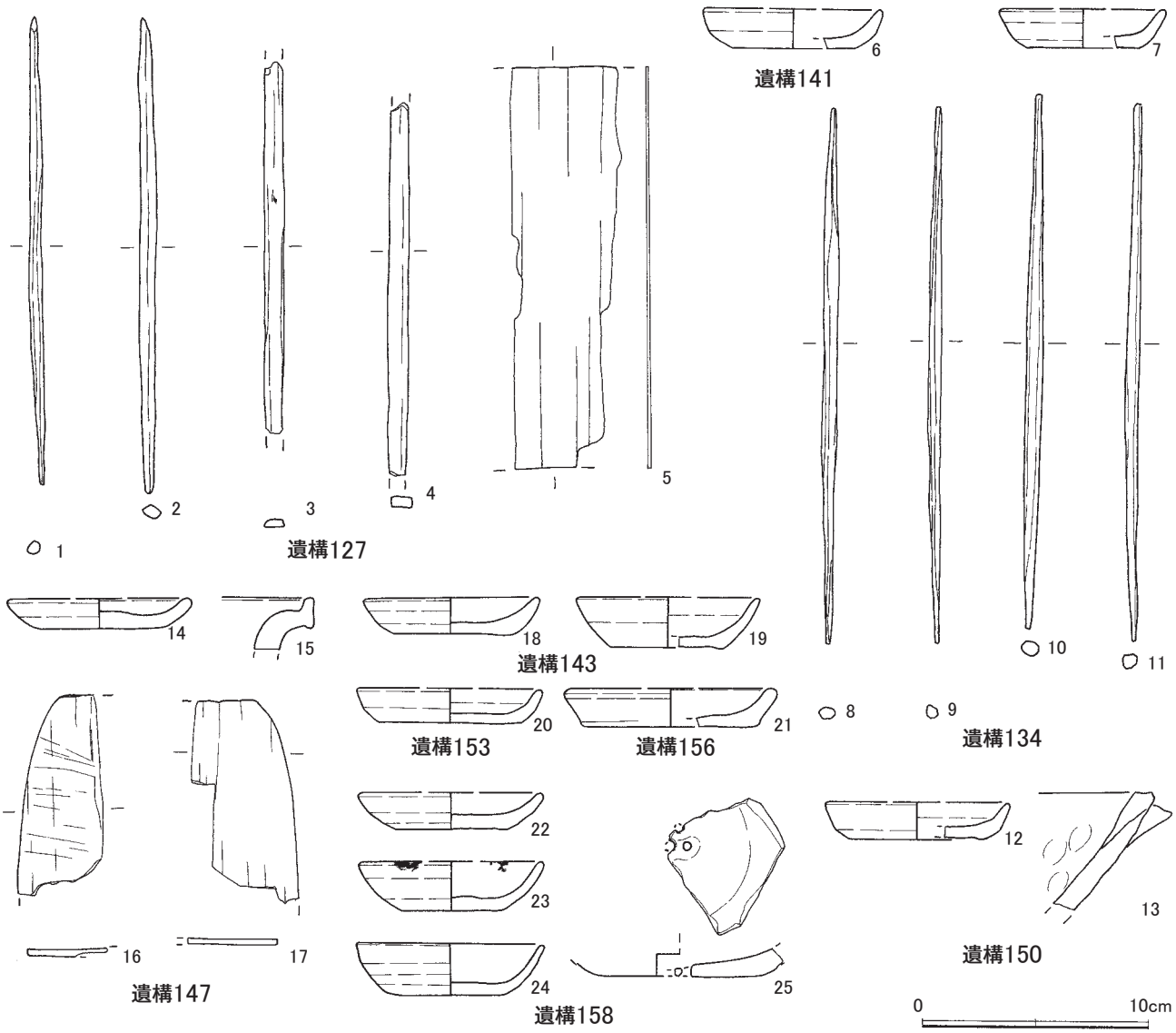


図25　第３面各遺構出土遺物（１）

遺構159（図22・図23）

方形土坑である。上層の遺構に壊されてしまっているために規模、形状が不明となったが、後述する第３ｂ面で発見した建物址（遺構162）と同様の遺構であった可能性もある。深さ７㎝。覆土は黒灰色粘質土・褐鉄を多く含む。出土遺物はない。

・第３ｂ面（図22）

第３ａ面同様に固く締まった地業層の検出はできなかったが、有機質土を多く含む粘性の強い黒褐色弱粘質土上で２時期の建物址（遺構162）１軒・土坑７基・ピット７穴を発見した。覆土内に木質痕と考えられる有機質土を含むピットを数穴確認したが、建物を推定することはできなかった。調査区南側は遺構検出が希薄となる。また、調査区東側で発見した遺構は上層の遺構によって壊され、遺存状態が悪かった。２時期の生活面の造り替えを確認した。

遺構160（図22・図24・図26）

円形のピットである。径約60cm。深さ12cm。覆土は暗青灰色粘質土・泥岩・炭化物・有機質土を含む。出土遺物は木製品の箸。

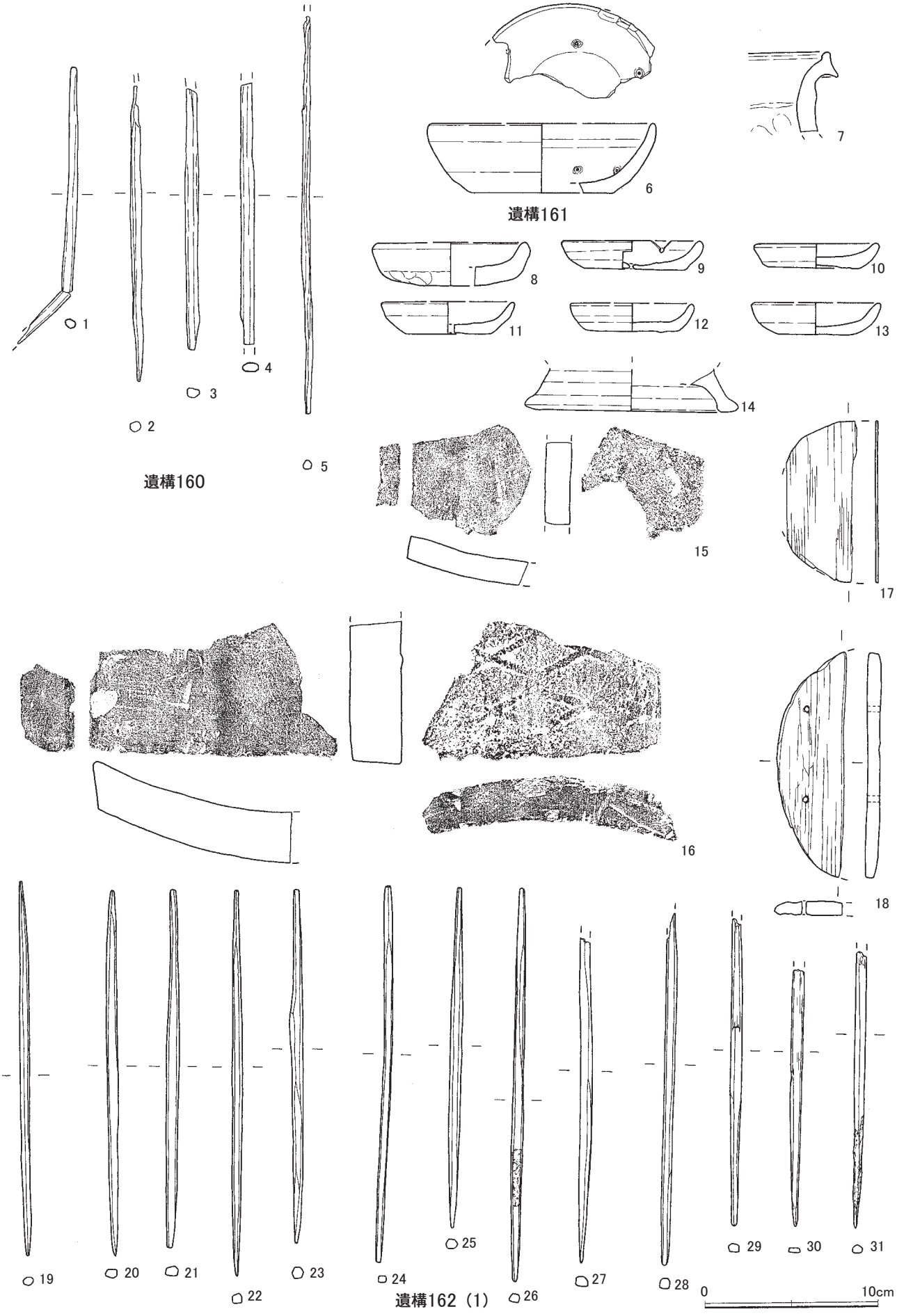


図26　第3面各遺構出土遺物（2）

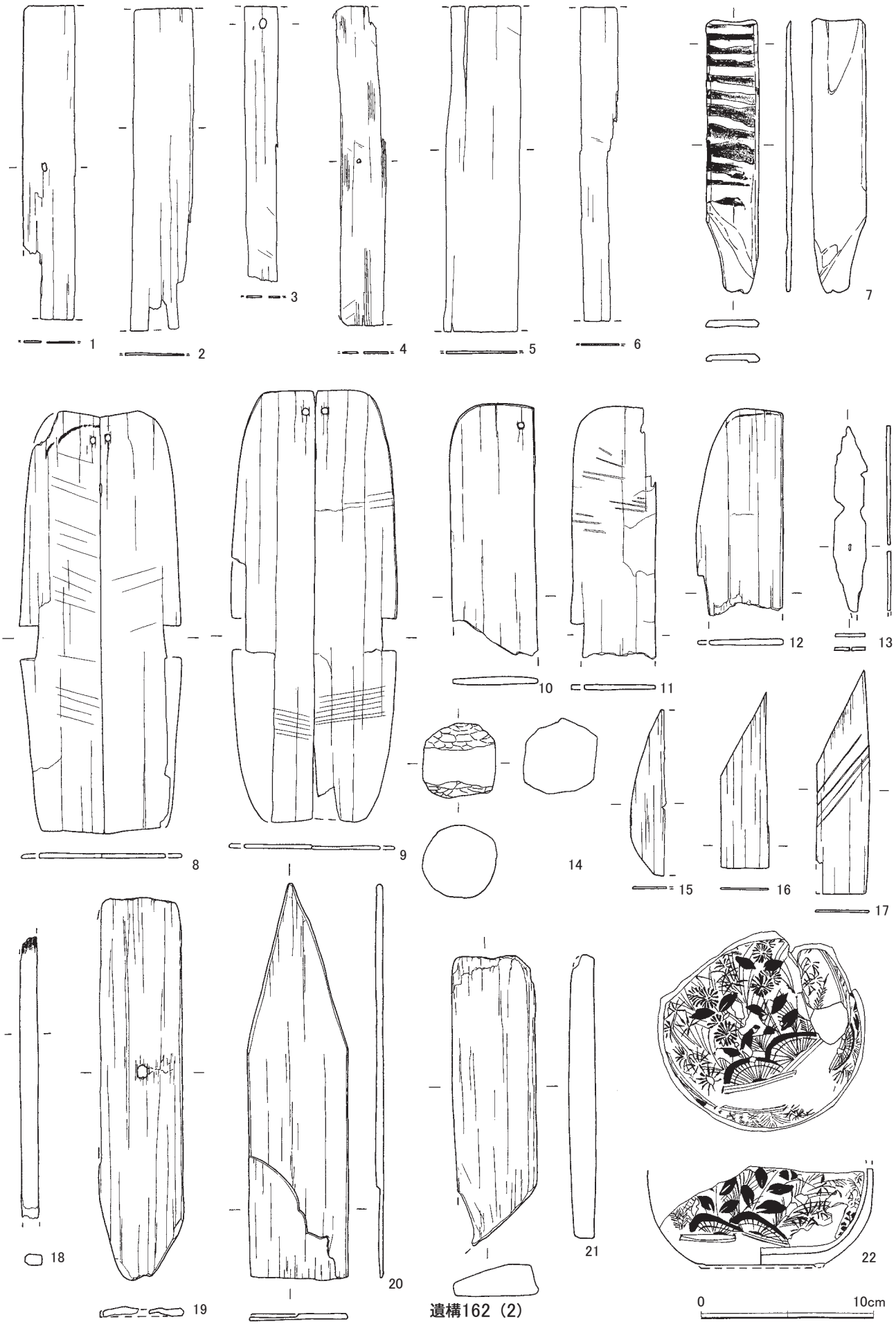
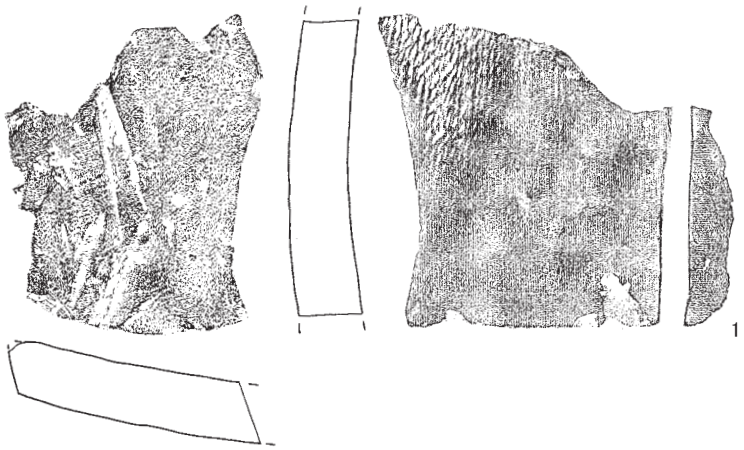
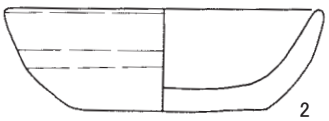


図27　第３面各遺構出土遺物（３）



遺構165



遺構170

図28　第３面各遺構出土遺物（４）

遺構161（図22・図24・図26）

円形の土坑である。幅150cm×（146）㎝。深さ20，5cm。覆土は明青灰色粘質土・泥岩・泥岩粒・礫・褐鉄を含む。出土遺物はかわらけ。その他に破片で宇瓦が出土している。

遺構162（図22・図24・図26・図27）

調査区外に遺構が延びてしまっているため形状・規模は不明であるが建物址と考えている。遺存値で幅365cm×205cm。深さ22cm。覆土は粗い砂粒を多く含む青灰色弱粘質土。上層に泥岩･泥岩粒を多く含む。覆土内には多くの破片を含む木製品が出土した。方形に遺存した形状から方形建物建築址と考えるには、上層の遺構に壊されていると想定しても深さが足りないことや、覆土中に礎板、あるいは礎板状の板材の出土を見ることから、柱建ての建物址であったと考えている。また、遺構南側で確認した遺構の切りあいから２時期の遺構であったと思われる。出土遺物はかわらけ・常滑甕・渥美四耳壷・女瓦・木製品の曲げ物・箸・経木折敷・草履品・形代・漆器椀・用途不明品が出土している。その他に破片でかわらけ・手づくね・常滑甕・山茶碗・男瓦・女瓦・火鉢・土師器甕・須恵器坏・須恵器壷・灰釉陶器埦が出土した。

遺構164（図22・図24）

円形の土坑である。遺構162に切られる。幅54cm×(54)㎝。深さ20cm。覆土は暗褐色粘質土･泥岩粒･褐鉄を含む。出土遺物はない。

遺構165（図22・図24・図28）

遺構169・170等に遺構に壊され規模は不明だが円形の土坑である。覆土は明青灰色粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物・褐鉄を含む。深さ12cm。出土遺物は女瓦。その他に破片でかわらけ・手づくね・常滑甕・土師器甕が出土している。

遺構167（図22・図24）

楕円形のピットである。幅55cm×47cm。深さ18cm。覆土は明青灰色粘質土・泥岩・褐鉄・木製品破片が多く含まれる。出土遺物はない。

遺構168（図22・図24）

円形のピットである。径43cm。深さ21，5cm。覆土は黒灰色粘質土・泥岩粒・炭化物を多く含む。出土遺物はない。

遺構169（図22・図24）

円形の土坑である。遺構162に切られる。95cm×(105)㎝。深さ7，5cm。覆土は茶褐色粘質土･泥岩･褐鉄・炭化物を含む。出土遺物はない。

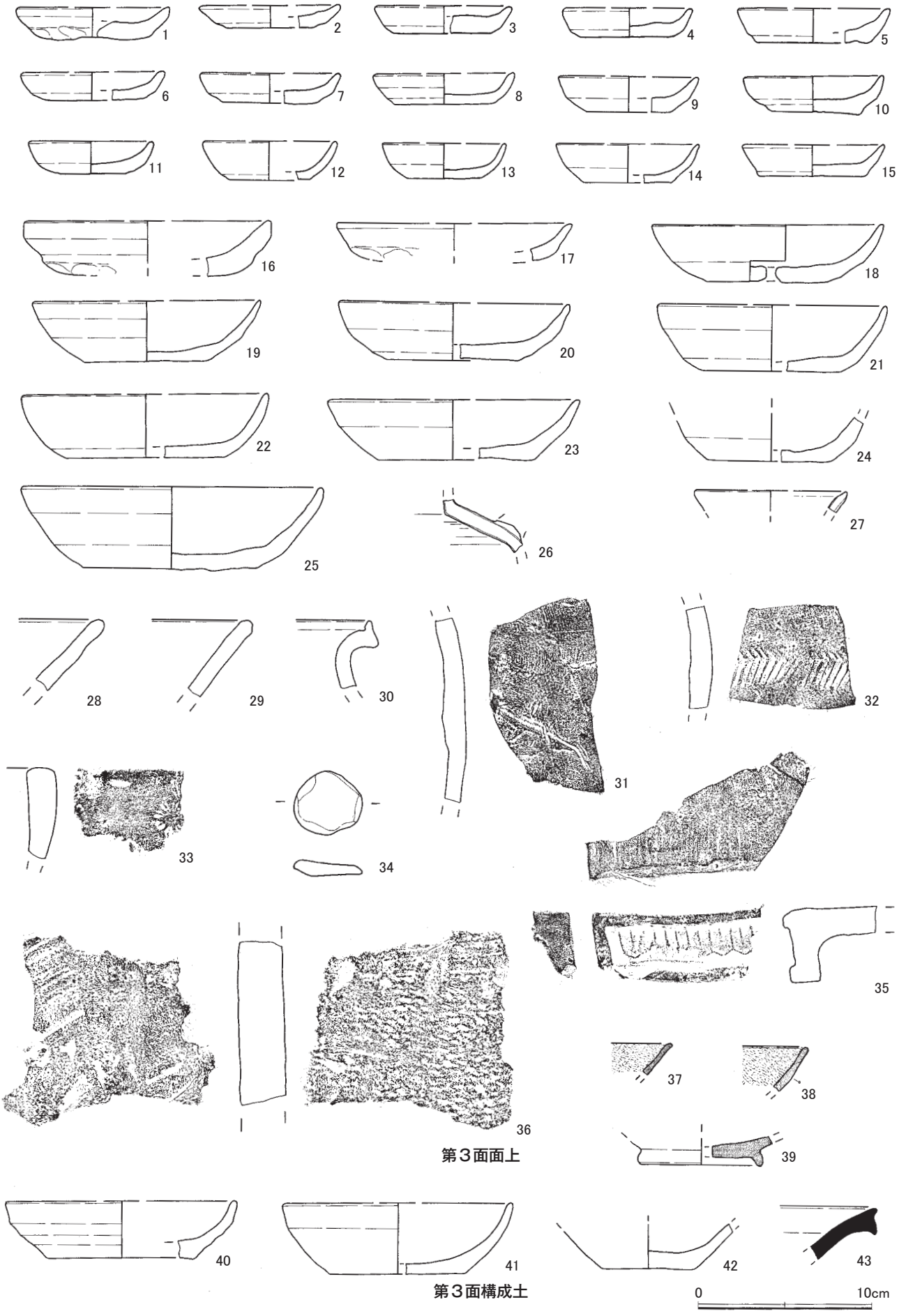
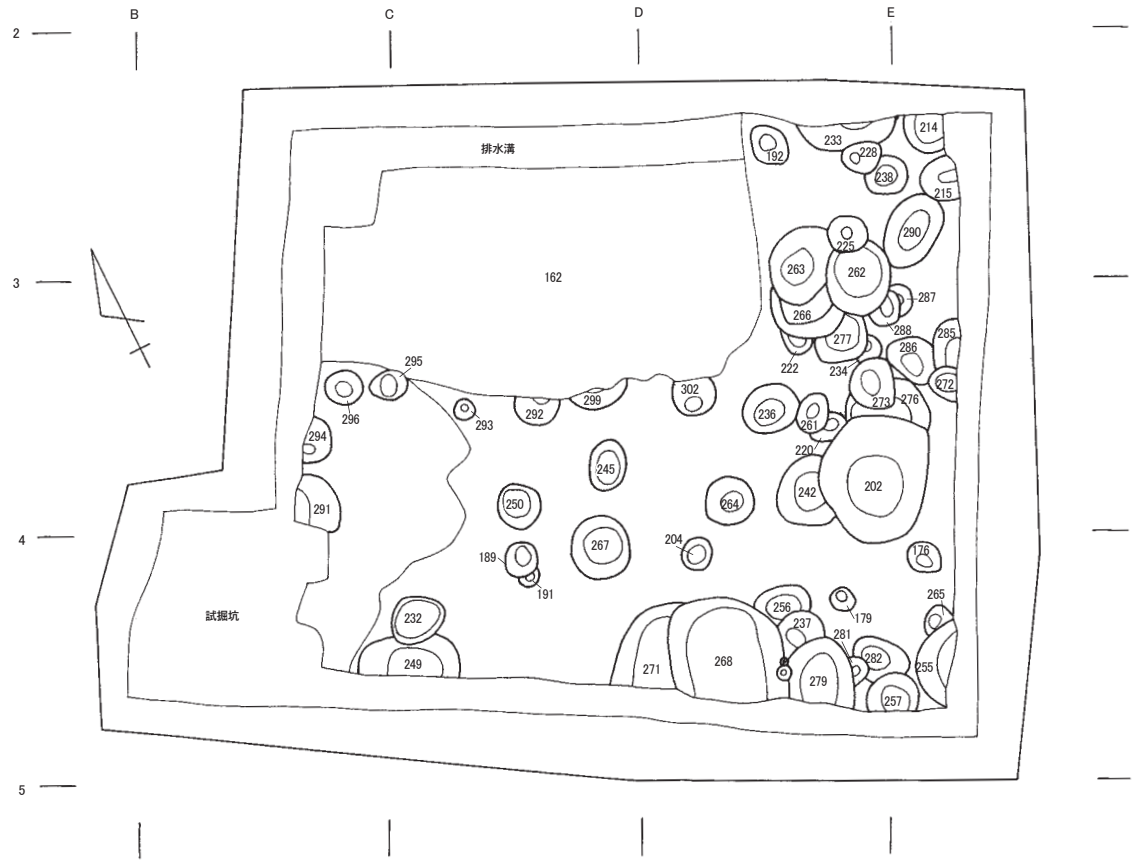


図29　第３面面上・構成土出土遺物

<4a面>



<4b面>

0 2m

図30　第４面全測図

遺構170（図22・図24・図28）

円形のピットである。63cm × 52cm。深さ16cm。覆土は茶褐色粘質土・泥岩・泥岩粒・褐鉄を含む。出土遺物はかわらけ。

・第３面面上出土遺物（図29）

第３面の面上で出土した遺物は、かわらけ・かわらけ転用品・白磁四耳壷・青磁口兀碗・常滑片口鉢Ⅰ類・常滑甕・瓦質火鉢・瓦・灰釉陶器埦である。破片では常滑甕片が目立って出土していた。その他にかわらけ・手づくね・渥美甕・常滑片口鉢Ⅰ類・山茶碗・男瓦・土師器甕・須恵器瓶類が出土している。

・第３面構成土出土遺物（図29）

第３面構成土から出土した遺物は、かわらけ・ロクロ土師器坏・須恵器甕である。第３面構成土は、固く締まった黒褐色粘質土・炭化物。泥岩粒。灰白色砂・黒色粘土を含む。部分的ではあったが薄く黒褐色砂質土が互層に堆積する。第３面構成土からは破片でかわらけ・瀬戸壷・常滑甕・山茶碗・土師器坏・土師器甕・ロクロ土師器・須恵器坏身・須恵器瓶類が出土している。

４．第４面の遺構と遺物（図30 〜図32）

・第４ａ面（図30 〜図32）

第４面は褐鉄を多く含む堅く締まった茶褐色粘質土上で確認した。第４面もａ・ｂと２枚の生活面に分けて報告している。遺構確認レベルは標高約13，50ｍ。第４ａ面で発見した遺構は土坑４基・ピット71穴である。繁雑に切り合った遺構覆土の観察から、第４ａ面は少なくとも３時期の生活面の造り替えがあったことを確認した。また、遺構覆土に柱痕と思われる、茶色有機質土が遺存するピットを数穴確認し、建物址の復元を試みたが遺構の大半は調査区東側に延びている様子で、建物址を復元することは出来なかった。調査区北側一部は、上層の遺構162に壊されてしまったため遺構の検出がない。第４面になると遺物の総出土量が減少するが、古代遺物の出土量は増加する。

遺構190（図30 〜図32）

上層の遺構に切られ規模は不明。楕円形のピットである。幅44cm × (46)㎝。深さ24㎝。覆土は暗青灰色弱粘質土。・泥岩粒を含む。出土遺物は土師器長胴甕・ロクロ土師器坏。

遺構194（図30 〜図32）

楕円形のピットである。幅27cm × 22cm。深さ８㎝。覆土は暗褐色弱粘質土・泥岩粒・褐鉄を含む。出土遺物の灰釉陶器埦は遺構底部で検出。

遺構195（図30 〜図32）

円形の土坑である。幅48㎝× 41㎝。深さ18cm。覆土は暗褐色弱粘質土･泥岩粒･褐鉄･青灰色砂を含む。出土遺物は須恵器長頸瓶・常滑片口鉢Ⅱ類。その他に破片で、土師器坏・土師器甕・須恵器壷甕瓶類が出土した。

遺構216（図30 〜図32）

円形の土坑である。幅53㎝× 48㎝。深さ19cm。覆土は暗褐色弱粘質土・炭化物を含む。出土遺物はロクロ土師器坏。その他に破片で土師器坏・須恵器坏が出土している。

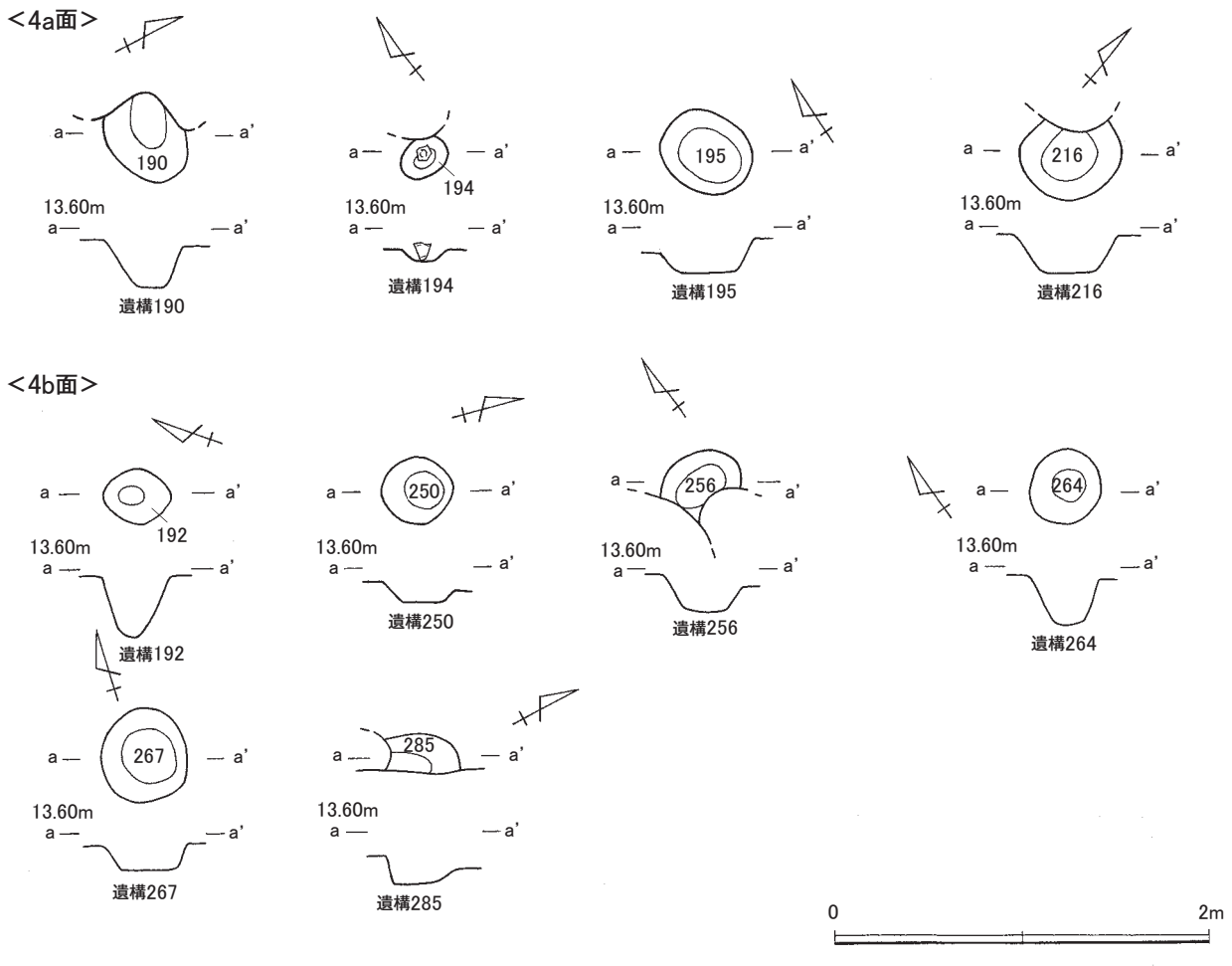


図31　第４面各遺構

遺構219（図30）

個別に図示はしていない。遺構210・211・218に切られる。円形の土坑である。径52cm・深さ33cm。覆土に炭化物・褐鉄とともに焼土ブロックが多く含まれる。

遺構224（図30）

円形のピットである。遺構212に切られる。個別の図面は報告していない。径17cm・深さ９，05cm。覆土は暗褐色粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物・焼土を含む。破片で土師器甕が出土している。

・第４ｂ面（図30～図32）

第４ｂ面で発見した遺構は土坑６基・ピット50穴である。遺構覆土の観察から３時期の生活面造り替えがあったことを確認している。第４ａ面と同様に、遺構覆土に柱痕と考えられる木質を含んだピットを確認したが、建物址を推定することはできなかった。

遺構192（図30～図32）

円形のピットである。幅35cm×28cm。深さ33cm。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物・褐鉄を含む。出土遺物は須恵器蓋・土師器長胴甕。その他に破片で土師器坏・須恵器坏身が出土している。

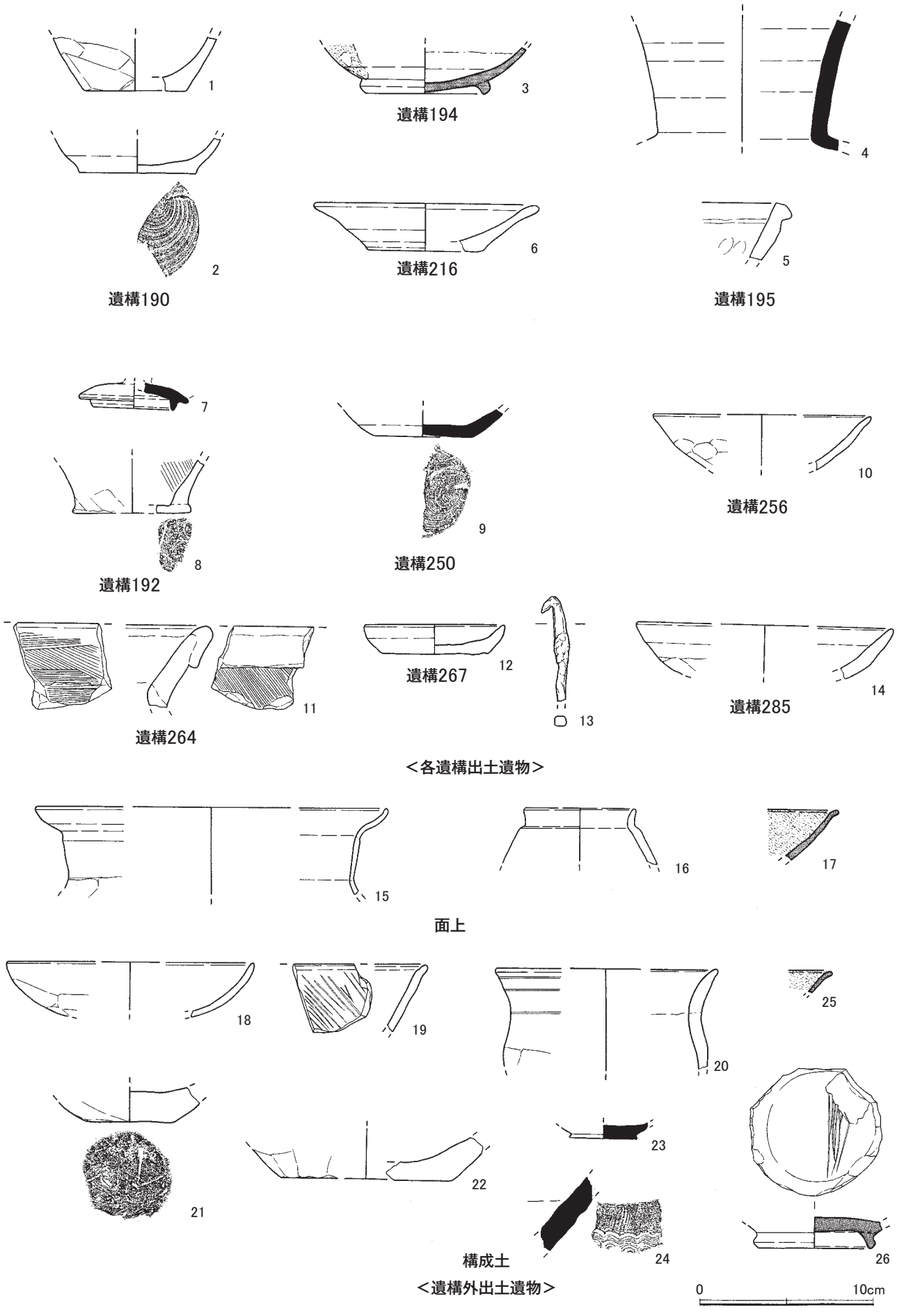


図32　第４面各遺構・遺構外出土遺物

遺構225（図30）

円形のピットである。径30cm・深さ15cm。個別に図面は報告していない。覆土は暗褐色弱粘質土・炭化物・焼土を含む。破片で土師器甕が出土している。

遺構250（図30 ～図32）

円形のピットである。幅38cm × 34cm。深さ13cm。覆土は暗褐色弱粘質土・泥岩粒・青灰色砂・褐鉄を含む。出土遺物は須恵器坏身。破片で須恵器坏身が出土しているが同一個体と思われる。

遺構256（図30 ～図32）

円形のピットである。上層の遺構に壊され、規模は不明。深さ20cm。出土遺物は土師器坏。その他に破片で土師器甕が出土している。

遺構264（図30 ～図32）

円形のピットである。幅40cm × 37cm。深さ27cm。覆土は暗褐色弱粘質土・泥岩粒・青灰色砂・褐鉄を含む。出土遺物は土師器壷。

遺構267（図30 ～図32）

円形のピットである。幅47cm × 45cm。深さ12cm。覆土は暗青灰色弱粘質土・泥岩粒・炭化物・青灰色砂を含む。出土遺物はかわらけ・鉄製品・釘。その他に破片でかわらけ・土師器坏・土師器甕・須恵器瓶類が出土している。

遺構277（図30）

土坑である。幅42cm × 36cm・深さ16cm。個別に図面は報告していない。覆土は暗褐色弱粘質土・炭化物泥岩粒・焼土を多く含む。破片で土師器坏・土師器甕・須恵器坏が出土している。

遺構285（図30 ～図32）

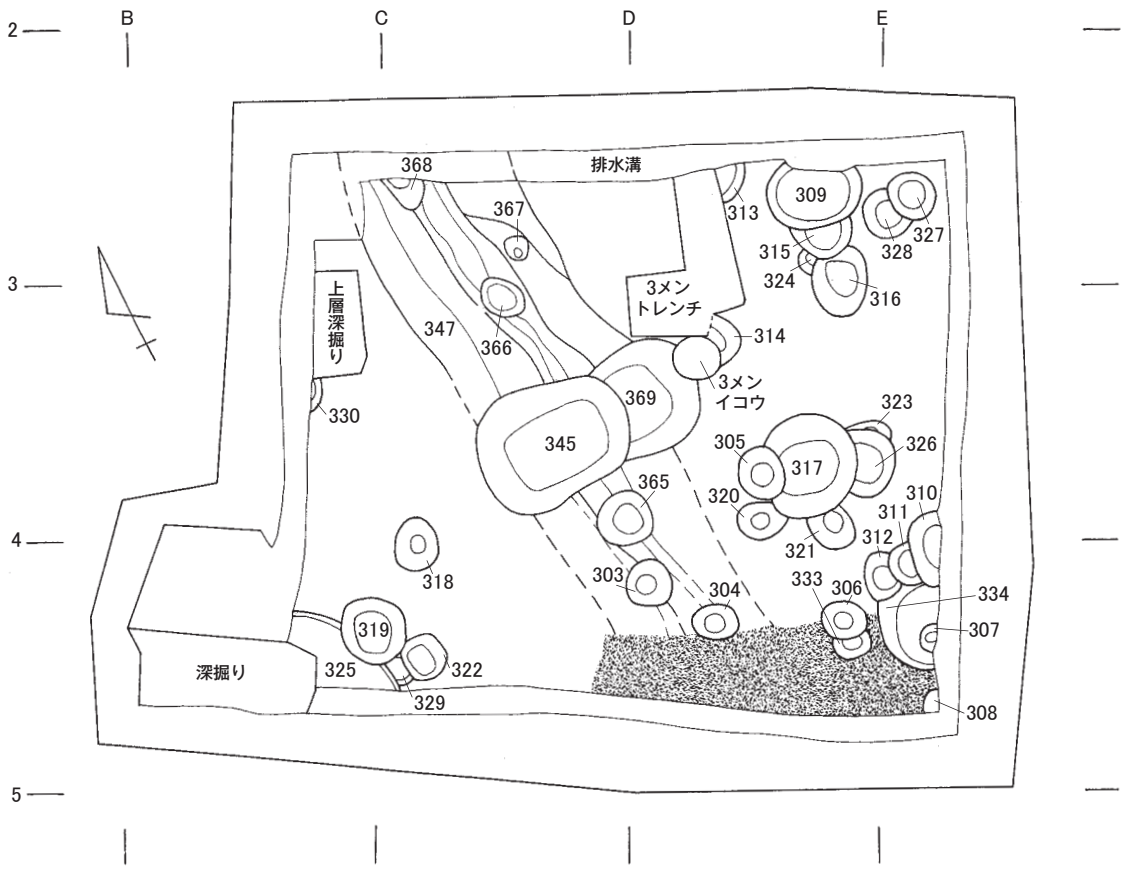
上層の遺構に壊されており、形状、規模は不明。ピットである。深さ15cm。覆土は暗褐色弱粘質土・泥岩粒・褐鉄・有機質土を含む。出土遺物は土師器坏。その他に破片で土師器甕が出土している。

・第４面面上出土遺物（図32）

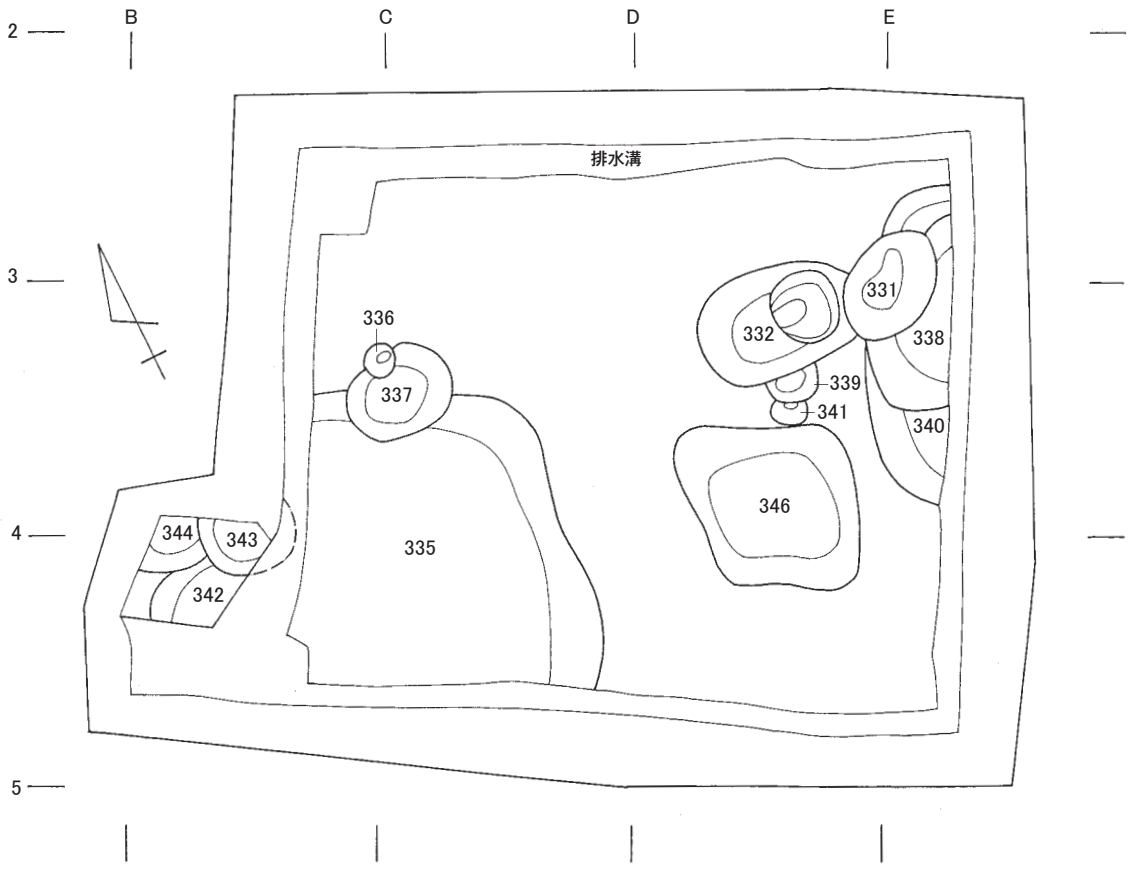
第4面は明茶褐色粘質土上で確認した。第4面になると中世以前の遺物が多く出土しているが、出土した遺物の年代は幅があり、上層の遺構によって地業および、遺構が攪乱されたと考えている。15は土師器甕。8世紀後葉以降の武蔵型。16は土師器甕の特殊品か。胎土は相模型坏に近似している。17は灰釉陶器碗。K 90号窯式段階と推定される。実測点数は3点と少ないが、破片でかわらけ・土師器坏・土師器甕・須恵器坏身・須恵器瓶類が出土し、出土点数も多い。

・第４面構成土出土遺物（図32）

第4面構成土は暗褐色弱粘質土。有機質土・炭化物・青灰色砂を含み、褐鉄が多く混入する固く締まった堆積層である。遺構覆土は大きく3時期に分かれる。18 ～ 22は土師器。18は坏。二次焼成によって器壁が炭化。古墳時代後期。19は盤状坏。体部内面に放射状の暗文。20は小型甕。21・22は甕。武蔵型に近い胎土を有するが産地不明。23・24は須恵器。23は坏。内面部分的に自然降灰あり・南武蔵窯G 5号形式。24は甕。内面に自然降灰が見られた。25・26は灰釉陶器埦。25は内外面回転ナデ・外面灰釉を薄く刷毛塗り・K 90号窯式。26は内底部に擦り・刻線、周辺に削りだしの痕跡残る。O 53号窯式か。破片で土師器坏・土師器甕・須恵器瓶類・緑釉陶器が出土している。構成土からは中世遺物の出土がなく、総体的に出土遺物量が減少する。



＜5a面＞



＜5b面＞

0 2m

図33　第５面全測図

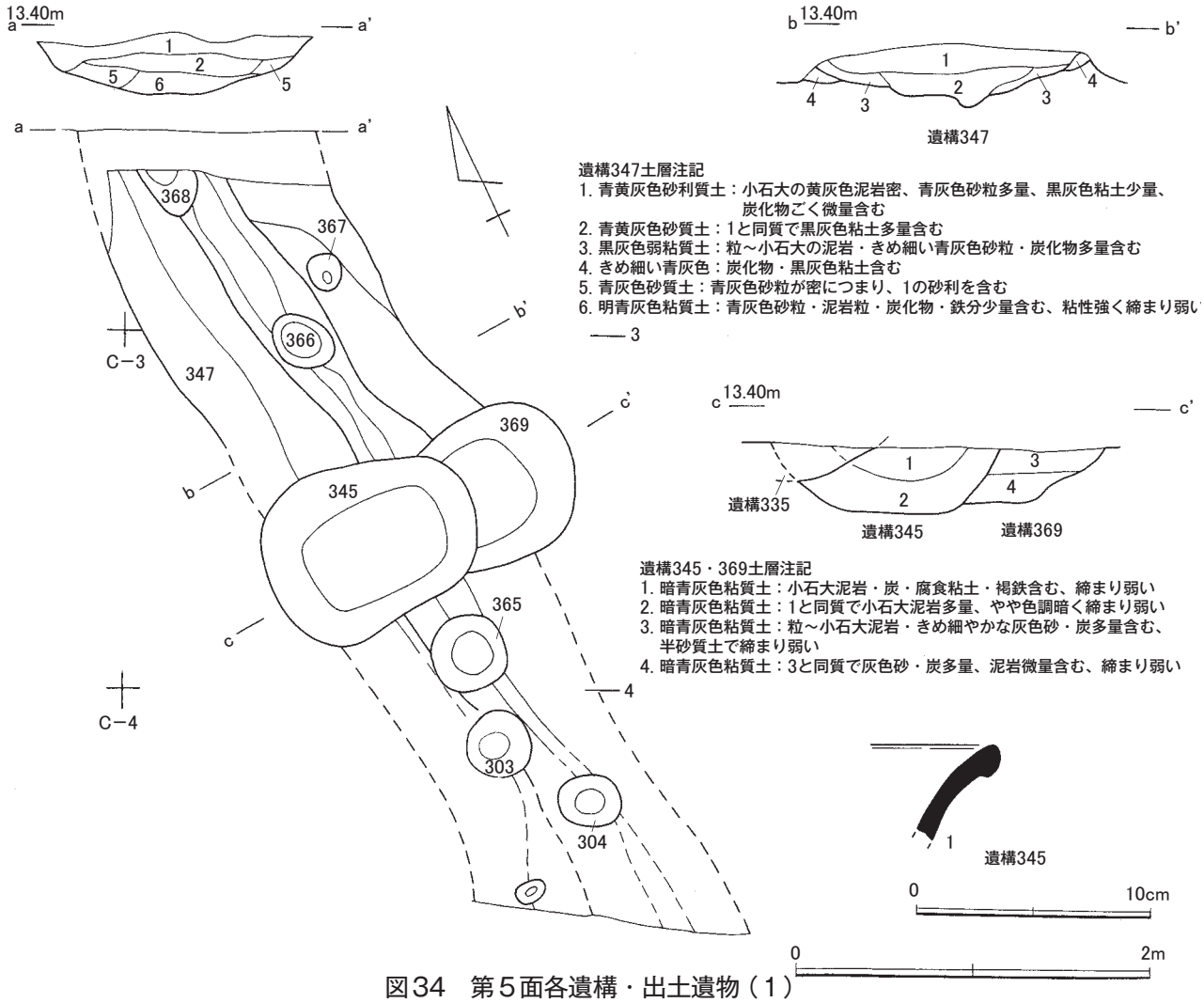


図34　第５面各遺構・出土遺物（１）

５．第５面の遺構と遺物（図 33 ～図 36）

・第５a面（図33 ～図36）

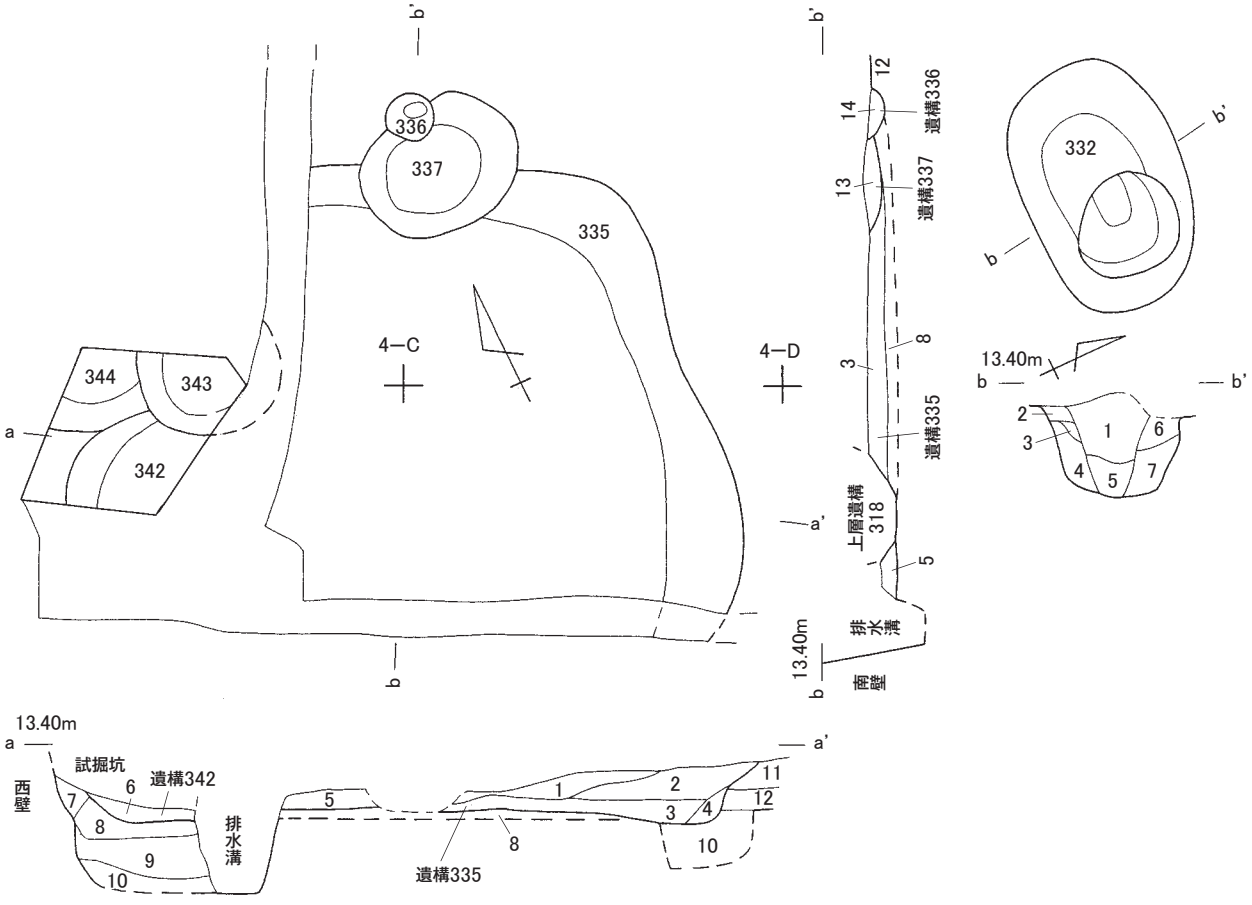
第５面は褐鉄を多く含む黒褐色粘質土上で確認した。遺構確認レベルは海抜13，30ｍ。第５面も遺構の切り合いからａ・ｂの２期に分けている。第５ａ面で発見した遺構は溝状遺構１条・土坑５基・ピット32穴。３時期の遺構の切りあいを確認した。第５ａ面では調査区南東部に泥岩・泥岩粒・炭化物・砂礫を含む青灰色砂質土の地業層が一部遺存していたが、同期に示した溝状遺構（遺構347）を埋める形で地業層が堆積している。第５面構成土上層は青灰色弱粘質土。褐鉄を多く含む堅く締まった粘土質の層が堆積していたが、下層は玉石・礫を多く含み、川砂に似た土質であった。

遺構345（図33・図34）

隅丸方形の土坑である。幅123cm×92cm。深さ40cm。遺構347・369を切る。覆土は暗青灰色粘質土・有機質土・青灰色砂質土・砂礫・炭化物・泥岩粒・泥岩を多くを含む。出土遺物は須恵器甕。その他に破片で土師器坏・土師器甕が出土している。

遺構347（図33・図34）

溝状遺構である。遺構北側は調査区外に延び、南側は上層の地業によって壊されてしまっていたために規模は不明。残存値で長さ(495)cm。幅130cm。深さ約40cm。覆土は暗青灰色弱粘質土・褐色砂質土・

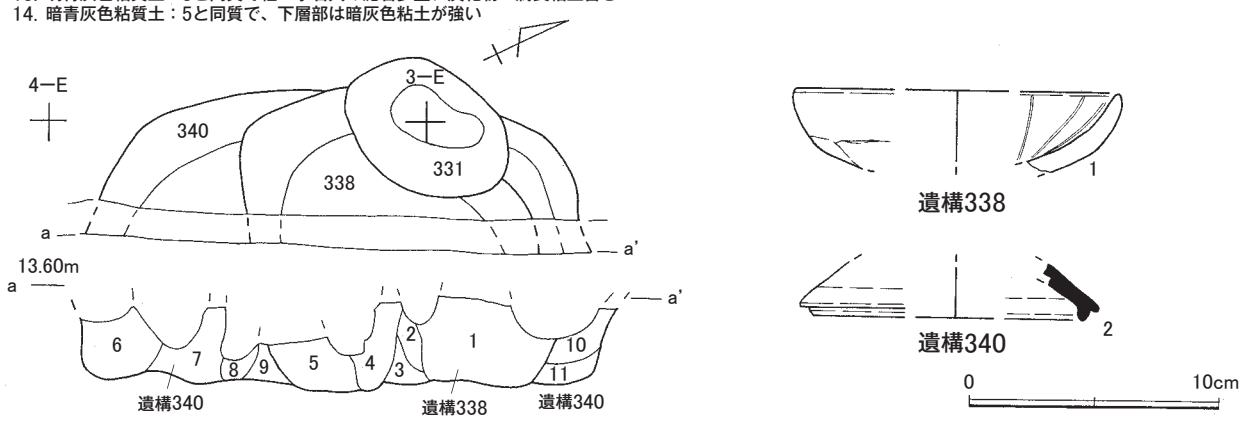


遺構335・336・337土層注記

1. 暗青灰色粘質土：炭化物多量、粒～小石大の泥岩少量含む、山砂・腐食土含み締まり弱い
2. 暗青灰色粘質土：1と同質で炭化物少なく、締まりあり
3. 明青灰色粘質土：粒～小石大の泥岩・炭化物少量含む、締まりややあり
4. 青灰色砂質土：11と同質で小石大泥岩・破砕砂岩・炭化物つまる
5. 暗青灰色粘質土：2と同質で含有物微量含む
6. 暗青灰色弱粘質土：きめ細かい青灰色砂粒・粒～小石大の泥岩・炭化物・腐食粘土多量含む
7. 暗灰色粘質土：泥岩粒・炭化物少量含む
8. 青灰色粘質土：6より粘性強い、黒灰色粘土多量、泥岩粒・炭化物・青灰色砂粒微量含む、締まりあり
9. 黒灰色粘質土：小石大の泥岩・青灰色砂粒微量含む、締まりあり
10. 黒灰色粘質土：固く締まる
11. 青灰色砂利地業土
12. 青灰色弱砂質土：きめ細かい青灰色砂粒多量、泥岩粒・炭化物少量含む
13. 明青灰色粘質土：3と同質で粒～小石大の泥岩多量、炭化物・腐食粘土含む
14. 暗青灰色粘質土：5と同質で、下層部は暗灰色粘土が強い

遺構332土層注記

1. 暗灰褐色粘質土：上層鉄分化激しい、炭化物・黒色粘土塊・粒～小石大泥岩・腐食鉄分・焼土多量含む、締まりあり
2. 暗灰褐色粘質土：1と同質で、鉄分少なく締まり弱い
3. 暗灰褐色粘質土：焼土・炭化物多量、粒～小石大泥岩・鉄分含む
4. 暗灰褐色粘質土：3と同質で炭化物・遺物片多量、焼土・鉄分微量含む、やや締まりあり
5. 黒灰褐色粘質土：1より黒色粘土塊多い、小石大泥岩・炭化物多量含む、鉄分化少なくやや締まりあり
6. 暗灰褐色粘質土：1と同質で鉄分化激しい、粒～小石大泥岩・炭化物・腐食鉄分多量含む、締まりあり
7. 暗灰褐色粘質土：6と同質で鉄分化・炭化物多量含む、粘性強くやや締まりあり



遺構338・340土層注記

1. 黒茶灰色粘質土：小石大泥岩・炭化物・腐食粘土少量含む、一部褐鉄化激しく締まりあり
2. 黒灰色粘質土：炭化物・腐食鉄分多量含む、締まり弱い
3. 黒茶灰色粘質土：1と同質
4. 黒褐色粘質土：灰色砂・泥岩粒多量、小石大泥岩・遺物片微量含む、褐鉄化激しく締まりあり
5. 黒茶灰色粘質土：1・3と同質で、鉄分多く固く締まる
6. 黒褐色粘質土：鉄分・泥岩粒・灰色砂・暗茶灰色砂利多量含む、底部褐鉄化激しく締まりあり
7. 黒茶灰色粘質土：炭化物・灰色砂・泥岩粒多量、焼土微量、拳大泥岩数点含む、締まりあり
8. 黒茶灰色粘質土：灰色砂・腐食鉄分（一部褐鉄化）・炭化物多量含む
9. 茶褐色粘質土：小石大泥岩･炭化物・泥岩粒微量含む、褐鉄化激しく固く締まる
10. 黒灰色粘質土：茶灰色粘土・灰色砂やや多量、炭化物・小石大泥岩微量含む、締まりあり
11. 黒茶灰色弱粘質土：小石大泥岩・灰色砂・炭化物多量含む

0 2m

図35　第５面各遺構・出土遺物（２）

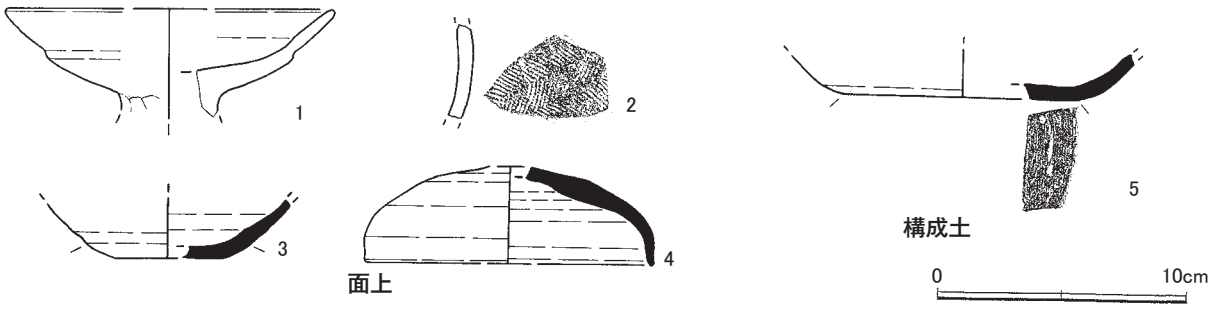


図36　第５面面上・構成土出土遺物

炭化物・泥岩粒・褐鉄・茶色有機質土を含む。下層に細粒子の青灰色砂が堆積。破片で土師器甕が出土している。自然流路か。

遺構365（図33・図34）

円形のピットである。径42cm。深さ15cm。覆土は暗の褐色粘質土・泥岩粒を含む。前述した遺構347に付属する遺構の可能性もある。溝状遺構347中央では遺構365の他に、北から遺構368・366・365・304のピットを確認している。遺構366と365の間は、上層の遺構345に切られて不明となってしまったが、それぞれのピットの芯芯間距離は、約115cmと規則的であった。柱穴であった可能性も考えている。遺構365を含む、それぞれのピットから出土遺物はない。

遺構366（図33・図34）

楕円形のピットである。幅35cm×30cm。深さ5cm。覆土は暗褐色粘質土・泥岩粒を含む。遺構365と同様に遺構347に付属する遺構と考えている。出土遺物はない。

遺構369（図33・図34）

楕円形の土坑である。溝状遺構347を切っている。また遺構345に切られ規模不明。残存値で幅(88)cm×(56)cm。深さ35cm。覆土は青灰色粘質土・炭化物・褐鉄・泥岩粒を含む。出土遺物はない。

・第５ｂ面（図33～図36）

第５ｂ面で発見した遺構は土坑６基・ピット７穴。２時期の遺構の切りあいを確認した。褐鉄・砂礫を含む暗青褐色粘質土上で検出した。発見した土坑は不整形な、やや大型の土坑が主となる。

遺構332（図33・図35）

楕円形の土坑である。幅132cm×885cm。深さ64cm。覆土は暗灰褐色粘質土･褐鉄を多く含み､炭化物･茶色有機質土を含む。破片で手づくね・土師器坏・土師器甕が出土している。

遺構335（図33・図35）

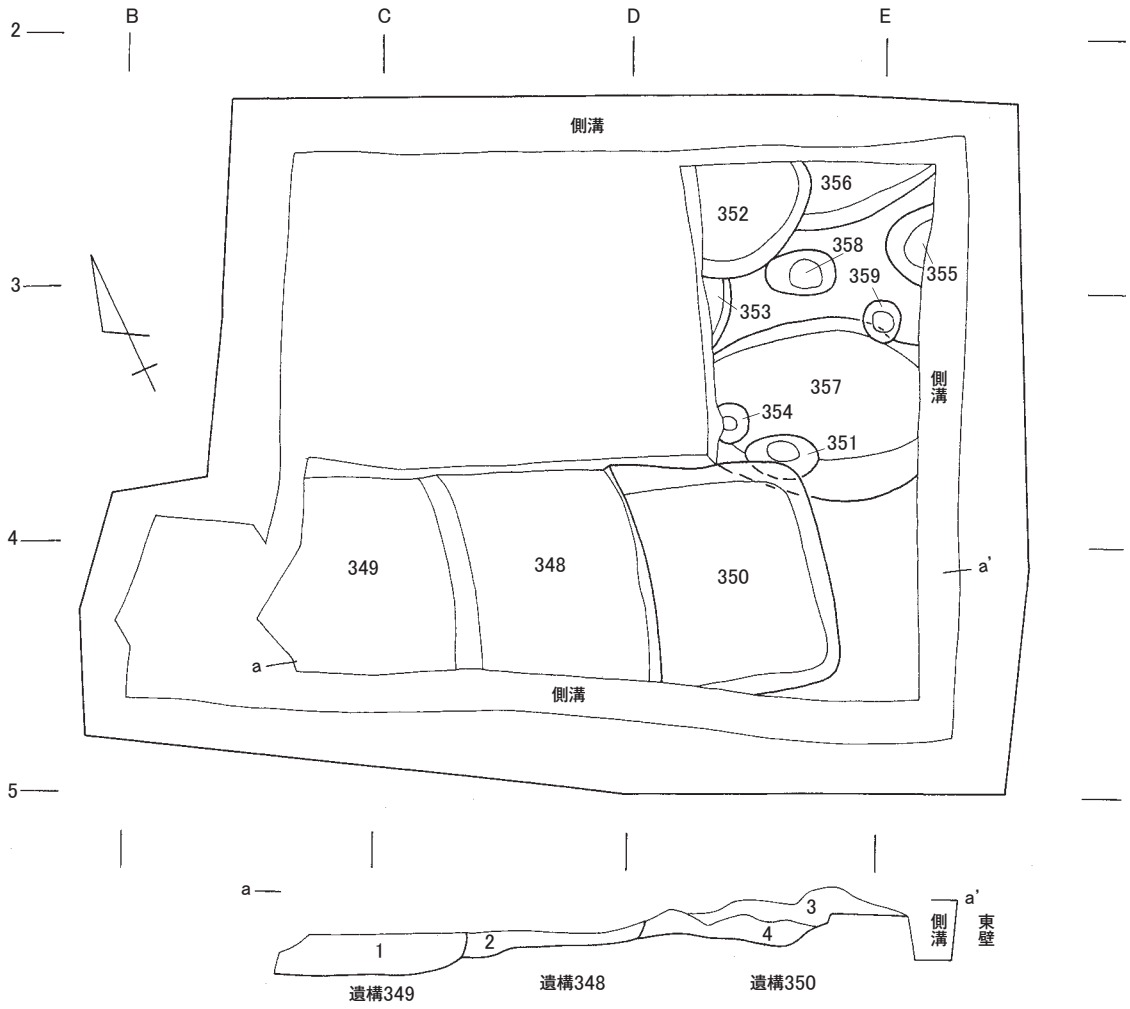
方形の土坑である。調査区外に遺構が延びており正確な形状不明。残存値で幅232cm×230cm。深さ35cm。遺構337に切られる。覆土は暗青灰色粘質土・多量の炭化物・泥岩粒・茶色有機質土を含む。出土遺物はない。

遺構336（図33・図35）

円形のピットである。幅25cm×25cm。深さ30cm。覆土は明青灰色粘質土・泥岩粒・炭化物を含む。下層に暗青灰色有機質土が堆積。出土遺物はない。

遺構337（図33・図35）

楕円形のピットである。幅88cm×67cm。深さ11cm。覆土は明青灰色粘質土・泥岩粒・炭化物・茶色有機質土を含む。出土遺物はない。



遺構348・349・350土層注記
1. 暗青灰色弱粘質土　0.1～0.3cm大の泥岩少量、青灰色砂混じる、粘性なし、締まりややあり
2. 暗青灰色弱粘質土　1と同質で砂・泥岩粒多い、粘性なし、締まりややあり
3. 暗灰色砂質土　0.1～0.3cm大の泥岩・褐鉄少量
4. 暗青灰色弱粘質土　0.1cm大の泥岩少量、粘性なし、締まりあり

図37　第6面全測図

0　2m

遺構338（図33・図35）

調査区外に遺構が延びてしまっているため正確な形状・規模は不明。残存値で幅(152)cm×(68)cm。深さ49cm。土坑である。覆土は黒褐色粘質土･焼土･褐鉄･泥岩粒･炭化物を含む。報告した土師器坏（図35-1）は遺構底面で発見した。その他に破片で土師器坏・土師器甕が出土している。

遺構339（図33・図34）

遺構332に切られる。円形のピットである。径44cm。深さ22cm。覆土は暗茶褐色粘質土・褐鉄・黒色粘土を含む。破片で土師器坏・土師器甕・須恵器壷甕瓶類が出土している。

遺構340（図33・図35）

調査区外に遺構が延びており、正確な形状・規模は不明。残存値で幅(256)cm×(64)cm。深さ40cm。土坑である。覆土は黒褐色粘質土・泥岩粒・焼土を含む。出土遺物は須恵器坏蓋。見受けかえり部を有する7世紀中葉頃の湖西窯。その他に破片で土師器坏・土師器甕が出土している。

・第5面面上出土遺物（図36）

灰茶褐色粘質土上で発見した。1は古墳時代後期の土師器高坏。内面に赤彩が施される。3は7世紀

前葉頃の須恵器坏。4は須恵器坏蓋。陵や段のない摘みを有しないタイプで、6世紀後葉～7世紀前葉頃の湖西窯と推定される。出土遺物はかわらけ(小)の破片が9個・その他に破片で土師器坏・土師器甕・須恵器坏身・須恵器坏蓋・須恵器瓶類が出土している。遺構、面上を合わせても出土遺物量は減少する。

・第５面構成土出土遺物（図36）

第5面構成土は砂礫・玉石・砂を多く含み、河底の堆積土に近似する。5は須恵器坏。底部は全面もしくは周縁回転ヘラケズリ調整、胎土に白色針状物質を含む。Ｍａ２号窯式と推定される。構成土からの遺物出土は破片で出土した遺物を加えても僅少であった。破片で土師器坏・土師器甕が出土している。

６．第６面（図37）

調査の過程で生じた廃土の処理を調査地内で行うことが難しくなったことと、調査区底面からの湧水が激しく全域を掘り下げての作業に危険が伴うようになったため、調査区南壁と東壁に沿ってL字状に掘り下げ、黒褐色粘質土上で遺構を確認し第6面とした。遺構確認レベルは海抜13，00ｍ。発見した遺構は土坑7基・ピット5穴である。調査区北東部では、不正円形の土坑が切りあって発見されたが、遺構覆土は泥岩粒・少量の炭化物・褐鉄を含む暗茶褐色粘質土であり、それぞれの遺構覆土は近似していた。調査区南部では調査区壁に沿って段状に西に向かって下がっていく様子を確認した。図面上では、遺構348・遺構349・遺構350と分けて報告しているが、遺構ではなく緩やかな斜面堆積の痕跡であったと捉えている。第6面では面上・遺構・構成土からの出土遺物はない。構成土は黒褐色粘質土・褐鉄・砂礫・堅く締まった黒色粘土を含む。

また、同一図面上に報告したが、遺構357は第6面構成土下層の明青灰色砂質土上（堆積土層図93層）で発見した土坑である。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒を含む。調査には至らなかったが、第6面下層にも生活層があったことを示唆する遺構である。

・試掘坑・表採出土遺物（図38）

調査地表採遺物と、試掘坑から出土した遺物はまとめて、図38と観察表に報告している。

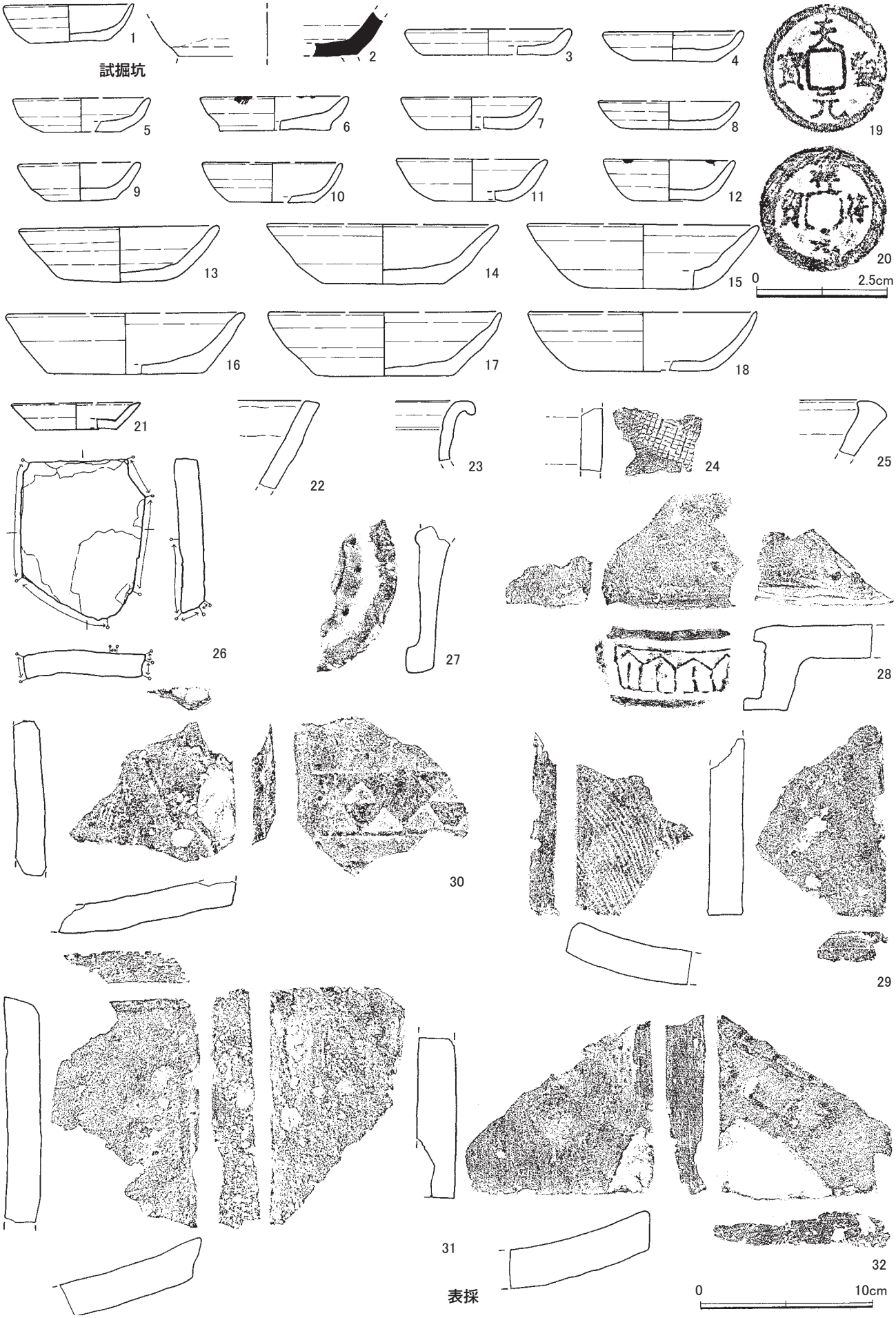


図38　試掘坑・表採出土遺物

第三章　まとめ

調査地北側の天神山、山腹には荏柄天神社が建ち、社殿を下る石段下西側に本調査地は位置する。遺跡地前には南北に天神社参道が六浦道（県道金沢鎌倉線）まで延びている。昭和11年（1936）荏柄天神社下西側の民家の井戸掘り作業中に、地表下３ｍの深さの砂層から諸磯ｂ式・阿玉台式の土器片や打製石斧・凹石・獣骨片等が出土した記録から、本調査地周辺には縄文前期・中期に古鎌倉湾の海浜上の遺跡地があったと考えられている。

以下検出した遺構・遺物について簡単なまとめを行いたい。

検出した遺構と遺物

約70㎝の厚さで堆積していた表土を取り除き、泥岩・泥岩粒を含む堅く締まった暗茶褐色弱粘質土上で第１面を確認した。本報告では遺構検出面を６面に分け、またそれぞれの面をａ・ｂの２期に分けて報告しているが、それぞれの確認面で複数回の生活面造り替えが行われ、繁雑に遺構が切りあって発見された。

第１ａ面は海抜14，20ｍで確認した。発見した遺構は溝１条・土坑４基・ピット31穴である。調査区の西半分は大きく現代埋土によって削平を受け、調査区東側のみの確認となった。調査区東際で硬く締まった地業を発見している。調査区外に地業が延びてしまっていたために規模は不明となったが、遺存値で南北方向に約500㎝・東西方向に約120㎝を測る。地業の西に平行した溝状遺構（遺構82）と、地業に沿った形で不整形ではあるが凝灰岩が遺存していたことや、地業表面が比較的丁寧に突き固められていたこと等から道路地業であった可能性も考えた。発見した遺構は地業を掘りこむ形で確認している。出土遺物した遺物は、かわらけの他に瓦の出土量が多く、男瓦・女瓦・鐙瓦・宇瓦・鬼瓦・雁振瓦・道具瓦と種類も多いが、瓦の年代は永福寺Ⅰ期～永福寺Ⅲ期に比定される瓦と鶴岡八幡宮境内出土瓦と同様の瓦が混在しており、年代に幅がある。

第１ｂ面で発見した遺構は土坑５基・ピット37穴である。遺構内に根固めに使用したと思われる泥岩を含むピット・土坑を検出したが、確認面積が狭小なため建物は推定できなかった。第１ａ面では２時期の、第１ｂ面では４時期の生活面造り替えを、遺構の切りあい・覆土の観察から確認した。出土遺物の観察から第１面は概ね14世紀代の年代が与えられるが、第１面構成土中から器壁が厚く、側壁が外反するタイプのかわらけが１点出土しており、15世紀代まで下る可能性もある。中世以降の撹乱や削平によって遺物の年代に混乱が起きたのかもしれない。

第２ａ面は海抜14，10ｍで確認した。発見した遺構は基壇状遺構・溝状遺構１条・方形土坑８基・ピット６穴である。基壇状遺構は上層の遺構に壊され一部しか遺存していなかったが、調査区東壁・南壁の土層堆積で基壇状に破砕泥岩を含む堅く締まった地業が盛り上がることを確認した。基壇状遺構の西側には、数基の方形土坑が検出された。方形土坑からの出土遺物はかわらけが中心であり、遺物から遺構の性格を測ることは出来なかった。調査区西端に方形土坑を切る形で、杭を伴う側壁が遺存する溝状の遺構を発見しているが、遺構の大半は調査区外に延びており、正確な形状・規模は不明である。

第２ｂ面で発見した遺構は土坑２基・ピット４穴である。第２ａ面で検出した方形土坑底面に、一部ではあるが破砕泥岩を含む薄い地業が遺存していた。第２ａ面で報告した基壇状の遺構に伴う地業であった可能性もある。第２ａ面・第２ｂ面は、それぞれ２時期の遺構の切りあいを確認した。第１面と

同様に第２面でも瓦が多く出土しているが、同じく永福寺Ⅰ期～Ⅲ期と幅広い年代が与えられる瓦が混在している。出土遺物から第２面は14世紀初頭の年代が与えられる。

第３ａ面は地業上の痕跡はないが、泥岩粒・褐鉄を含む硬く締まった黒褐色粘質土上で遺構を確認している。確認レベルは海抜13，80ｍ。発見した遺構は土坑７基・ピット21穴である。遺構136（図22）のように礎板を検出し、覆土内に木質痕が残るピットを確認したが、調査区の東側に遺構が延びており、建物址を推定することはできなかった。

第３ｂ面で発見した遺構は建物址・土坑７基・ピット７穴である。調査区北側で発見した建物址（遺構162）は、覆土内に礎板・礎板状の板材を検出したこと等から柱建ての建物だったと考えているが、調査区外に遺構が延びてしまっていることや、上層の遺構に大きく削平されていたため正確な形状・規模等に不安が残る。覆土内からは、報告した以外に多くの木製品破片が出土している。出土した木製品は、箸・折敷・漆器椀・漆器皿・草履などで生活痕を感じさせる。第３ａ面・第３ｂ面ではそれぞれ２時期の生活面の造り替えを、遺構の切りあい・覆土の観察から確認した。出土遺物の観察から第３面は13世紀第４四半期の年代が与えられる。

第４ａ面は明茶褐色粘質土上で確認した。確認レベルは海抜13，50ｍ。第４ａ面で発見した遺構は土坑４基・ピット71穴。第４ｂ面で発見した遺構は土坑６基・ピット50穴である。第４面は繁雑にピットが切りあい第３面と大きく遺構の検出状況が異なる。また出土遺物量は大幅に減少し、中世遺物はかわらけが面上・遺構出土の破片を入れても僅か10点の出土であり、古代遺物が中心となる。第４ａ面・第４ｂ面では、遺構覆土内に柱痕と思われる有機質土を確認したピットを検出しているが、建物の推定は出来なかった。また、それぞれ３時期の生活面の造り替えを、遺構の切りあい・覆土の観察から確認した。出土遺物の観察から第４面は13世紀前半の年代が与えられる。

第５面は海抜13，30ｍで確認した。第５ａ面は褐鉄を多く含む堅く締まった暗茶褐色粘質土上で、地業・南北に走る溝状土坑１基・土坑５基・ピット32穴を発見した。地業は調査区南でわずかに残り、自然流路と考えている溝状土坑（遺構347）を埋めている。第５ｂ面は第５ａ面の構成土下層、暗青褐色粘質土上で確認した。発見した遺構は土坑６基・ピット７穴である。出土遺物は調査区東側で確認した遺構332で手づくね大型13個・小型２個が破片で出土しているが、第４面と同様に古代遺物の出土が中心となり、出土量はさらに減少する。第５ａ面では３時期の、第５ｂ面は２時期の生活面の造り替えを、遺構の切りあい・覆土の観察から確認した。出土遺物の観察から第５面は13世紀初頭の年代が与えられる。

第６面は調査区東壁と南壁に沿ってＬ字状に掘り下げて黒灰色粘質土上で確認した。確認したレベルは海抜13，00メートルである。土坑７基・ピット５穴を発見したが、調査区南壁側で発見した方形の土坑３基は、遺構ではなく緩やかな斜面堆積の痕跡と考えている。調査区東側で、土坑・ピットなどの遺構を確認することは出来たが、面上・遺構・構成土のいずれからも出土遺物がないために年代の比定が難しい。

調査区東壁側で確認した遺構359は、第６面構成土下層に堆積する明青灰色砂質土上で発見した土坑である。第６面下層にも生活層があったと考えられる。

第６面検出後、調査区壁東南角を深掘りして、中世の地山層と思われる青灰色砂・灰色粘土・砂礫を含む明青灰色砂質土を確認した。確認レベルは海抜12，60ｍ。第６面検出面から、地山層までの間に出土遺物はない。

まとめにかえて

遺構の変遷を遡ると、中世地山層と考えている海抜12，60ｍの土層から、第６面とした生活面までの間に出土遺物がなく年代を比定する資料に不安がのこるが、第５面の出土遺物に古代遺物が中心ではあるが、遺構覆土から手づくね破片がまとまって出土していることから、第６面は13世紀初頭を遡らないと判断した。13世紀前半の早い時期（第５面）に調査地には生活痕が残され、第４面の13世紀半ばごろには短期間で複数回の建物、あるいは場の造り直しを行い、遺跡地の活発な営みを感じさせる。第３面の13世紀後半になると調査区の様相は大きく変わり、第４面で柱穴と考えるピットが、煩雑に切りあっていた場に方形の土坑が並び、出土遺物も多種になり量も増加する。場としての営みが活発となり、明らかに前代とは異なる使われ方をしているようである。また、その様相も14世紀前半になると地業を重ね、柵列を伴う溝が作られ、泥岩を根固めに持つピットが煩雑に切りあい、何度かの建物址の造り替えが行われる。出土遺物からは多種・多量の瓦の出土を見、調査地を含む周辺に寺社の存在を窺わせた。第1面とした土層上層には、遺構の確認は出来なかったが、近世遺物を含む薄い堆積層が観察された。

引用・参考文献

日本歴史大系第14巻　平凡社　1984年刊
鎌倉市史　考古編　吉川弘文館　昭和42年刊
鎌倉市史　社寺編　吉川弘文館　昭和54年刊
鎌倉廃寺事典　貫達人　川副竹胤　有隣堂　平凡社1984年刊
鎌倉事典　白井永二　平成4年刊
愛知県史（別編　窯業２中世・近世　瀬戸系）愛知県史編さん委員会　愛知県　平成19年刊
愛知県史（別編　窯業３中世・近世　常滑系）愛知県史編さん委員会　愛知県　平成19年刊
大宰府条坊跡XV（陶磁器分類編）大宰府市教育委員会　平成12年刊
永福寺跡－遺物編・考察編－（国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書）鎌倉市教育委員会　平成14年刊
宮久保遺跡Ⅲ（県立綾瀬西高等学校建設に伴う調査）國平健三、他　神奈川県立埋蔵文化財センター 1990年刊

出土遺物観察表

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図7-1	第1a面 遺構82	かわらけ	(8.8)	5.0	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
2		かわらけ	7.4	4.9	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒・礫を含む砂質粗土　色調：橙色　焼成：良好
3		かわらけ	(7.4)	(5.1)	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：橙色　焼成：良好
4		かわらけ	(7.8)	(5.7)	1.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土　色調：橙色　焼成：良好
5		かわらけ	(7.0)	(4.6)	1.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：橙色　焼成：良好
6		かわらけ	6.8	4.2	2.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・黒色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：橙色　焼成：良好
7		かわらけ	(7.3)	(4.1)	2.1	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・赤色粒・黒色粒・土丹粒・礫を含む砂質粗土　色調：橙色　焼成：良好
8		かわらけ	(11.5)	(6.8)	2.9	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む粉質良土　色調：橙色　焼成：良好
9		かわらけ	(11.8)	(7.7)	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質粗土　色調：黄橙色　焼成：良好　備考：口唇部に煤付着・灯明皿
10		かわらけ	(13.4)	8.7	3.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質やや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好　備考：口唇部に煤付着・灯明皿
11		かわらけ	(13.6)	(7.6)	3.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
12		瓦質燭台	軸のみ：残長8.9×最大径3.5			縦方向のミガキと黒色処理　胎土：灰桃色　黒色粒・白色粒・赤色粒の粗砂交じり　色調：黒灰色　焼成：軟質　備考：軸上部に雷文を配す
13		備前窯転用 摩耗陶片？	口縁部片			輪積み成形　胎土:灰褐色　微砂･白色粒･礫を含む　色調:明茶褐色　焼成:良好･硬質　備考:15ｃ代の製品か？口縁部に自然降灰、内外面～断面摩耗
14		巴剣頭文 鐙瓦	瓦当径（13.0）			外区内縁に剣頭文を配した右廻り巴文、瓦当面に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂を含むやや粗土　色調：灰色～黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期以降
15		巴文 鐙瓦	瓦当径（10.0）			外区内縁に小さな珠文を配し圏線を伴う右廻り巴文　胎土：灰色～黄橙色　粗砂を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：甘く、やや軟質　備考：瓦当径が小振り、永福寺Ⅲ期以降
16		剣頭文 宇瓦	瓦当部幅3.7×内区幅1.8			陽刻の上向き剣頭文・界線は上のみ、瓦当面に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石粒を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期以降
17		男瓦			2.5	凸面は縄目叩き・凹面は布目痕　胎土：精良　色調：暗灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅰ期
18		女瓦			2.4	凸面は横線と何かの組み合わせ文？→凹凸面共に不規則ナデ+離れ砂付着　胎土：灰白色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
19		女瓦			2.3	凸面は斜格子文・凹凸面共にナデ+離れ砂　胎土：色調と共に淡灰色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
20		女瓦			2.3	凸面は斜格子文+「大」・凹面縦位ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
21		女瓦			2.1	凸面は凹線の枠と何かの組み合わせ文？→凸凹面共に離れ砂　胎土：色調と共に灰褐色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ～Ⅲ期
22		女瓦			1.7	凸面は横線と何かの組み合わせ文？・凹面にナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：色調と共に灰褐色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
23		女瓦			1.9	凸面は斜格子文・凹面に不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
図8-1	第1a面 遺構82	女瓦			1.9	凸面は斜格子文+花菱文・凹面縦位ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
2		女瓦			1.7	凸面は斜格子文・凹面に不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
3		女瓦			1.7	凹凸面共に不規則ナデ→離れ砂　胎土：灰褐色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
4		女瓦			1.5	凸面は斜格子文+花菱文・凹面縦位ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰褐色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
5	第1a面 遺構87	かわらけ	12.9	(8.5)	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土　色調：橙色　焼成：良好
6		特大かわらけ	(16.5)	7.0	4.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質精良土　色調：橙色　焼成：良好　備考：内面口縁部～外面体部に煤付着
7	第1a面 遺構88	かわらけ	(13.9)	3.0	3.4	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂多･雲母･赤色粒･海綿骨芯･土丹粒を含む砂質土　色調:黄橙色　焼成：良好　備考：全体的に摩耗
図9-1	第1a面 遺構6	瀬戸 小壷		(3.0)		ロクロ成形・外底回転糸切痕　胎土：灰色 黒色砂粒を含む良土　釉調：灰緑色～茶褐色の灰釉を薄くツケ掛け　焼成：良好・堅緻　備考：藤澤編年前Ⅱ～Ⅲ期
2	第1a面 遺構8	須恵器 坏	口縁部片			ロクロ成形　胎土：色調と共に黒灰色　微砂・白色粒を含む緻密土　焼成：良好　備考：内外面口唇部に降灰あり
3	第1a面 遺構9	かわらけ	13.2	7.0	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒多・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
4		特大かわらけ	15.2	8.4	4.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む良土　色調：橙色　焼成：良好　備考：内面口縁部～外面体部に煤付着
5	第1a面 遺構10	石製品 砥石・中砥	残長7.5	6.2	4.2	砥面は上下2面使用、側面は破損の為不明　材質：流紋粗粒凝灰岩　色調：赤味を帯びた灰黄色　表面は水分を含み黒く変色　備考：天草産
6	第1a面 遺構62	かわらけ	(13.9)	(8.0)	3.2	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂･雲母･赤色粒･海綿骨芯･土丹粒を含むやや粗土　色調:橙色　焼成：良好
7		瀬戸 卸皿	(13.3)			ロクロ成形　胎土：淡黄色　混入物少ない良土　釉調：淡黄灰緑色の灰釉を薄く刷毛塗り　焼成：良好・堅緻　備考：藤澤編年中期前半
8		女瓦			2.0	凸面は斜格子文・凹面は凸面の斜格子文が写り込む→不規則なナデ　胎土：色調と共に灰桃色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ～Ⅲ期
9		鬼瓦			3.45	一部笵の手作りで文様部分は型作りの連珠を貼付、裏面は切り離し調整痕顕著　胎土：色調と共に灰褐色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
図10-1	第1b面 遺構18	かわらけ転用 円盤状土製品	径3.15～3.2×厚さ0.7			かわらけ底部を転用し、円盤状に加工を施す　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質良土　色調：橙色　焼成：良好

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図10-2	第1b面 遺構21	男瓦			2.0	凸面は縦位ナデ調整・凹面は不明　胎土：灰褐色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：黒灰色～灰色　釉調：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
3	第1b面 遺構90	女瓦			2.1	凸面は斜格子・凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ～Ⅲ期
4	第1b面 遺構29	かわらけ	(8.4)	(6.4)	1.65	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
5		かわらけ	8.1	4.0	2.35	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
6		青白磁 梅瓶	(3.5)			ロクロ成形　素地：灰白色　黒色粒を含む緻密土　焼成：堅緻　釉調：半透明な淡水青色釉を内面頸部～外面施釉
7	第1b面 遺構40	かわらけ	7.8	4.9	1.95	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質やや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
8	第1b面 遺構47	かわらけ	(7.8)	(4.2)	2.1	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・礫を含む砂質粗土　色調：淡橙色　焼成：良好
9		かわらけ	9.5	5.9	2.55	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土　色調：橙色　焼成：良好
10		かわらけ	11.3	5.9	3.25	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味良土　色調：淡橙色　焼成：良好
11		かわらけ	13.2	7.4	3.45	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
12	第1b面 遺構49	男瓦			1.9	凸面は縄目叩き→不規則なナデ・凹面は不規則なナデ→離れ砂　胎土：灰白色　精良　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：13ｃ後半の八幡宮タイプ
13	第1b面 遺構59	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.85	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土　色調：橙色　焼成：良好
14	第1b面 遺構92	かわらけ	11.7	7.2	2.75	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：橙色　焼成：良好
15	第1b面 遺構103	かわらけ	7.8	5.0	2.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒多を含む砂質気味良土　色調：橙色　焼成：良好
図11-1	第1面 面上	かわらけ	(7.6)	(6.0)	1.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む良土　色調：橙色　焼成：良好
2		かわらけ	(7.2)	(5.1)	1.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
3		かわらけ	(7.7)	(4.2)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質やや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
4		かわらけ	(7.8)	(4.0)	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや砂質土　色調：黄橙色　焼成：良好
5		かわらけ	(6.5)	(3.6)	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
6		かわらけ	(6.3)	(4.0)	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粉質土　色調：橙色　焼成：良好
7		青白磁 梅瓶	底部片			ロクロ成形　素地：灰白色　精良緻密　釉調：半透明な淡水色を高台畳付け～外底面をのぞき外面施釉・気泡あり　焼成：堅緻
8		瀬戸 折縁深皿	口縁部片			ロクロ成形　胎土：黄灰色 微砂・白色粒を含む良土　釉調：黄灰緑色の灰釉を薄く刷毛掛け　焼成：良好・堅緻　備考：二次焼成、藤澤編年中期
9		魚住 捏鉢	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・白色粒を含む　焼成：良好
10		常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：黒灰色　微砂・長石・石英を含む　色調：暗赤褐色　焼成：良好　備考：中野編年6a型式
11		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に黒灰色　微砂・長石・石英を含む　焼成：良好　備考：内外面口縁部～外面頸部自然降灰あり、中野編年6a型式
12		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・長石を含む　焼成：良好　備考：胴部外面に一斜線縦長格子のスタンプ文
13		石製品 砥石・中砥	残長4.5	2.6	2.0	砥面は4面使用　材質：流紋粗粒凝灰岩　色調：白っぽい黄色　備考：伊予産
14		鉄釘	残長4.4	0.5	0.4	備考全体が錆で覆われている
15		銅銭	外径2.4　内径1.9			紹聖元寶？　初鋳年1094　北宋　篆書
16		巴文 鐙瓦	瓦当部片			外区内縁に珠文を配す巴文→瓦当面離れ砂付着　胎土：灰桃色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：やや軟質　備考：永福寺Ⅲ期？
17		剣頭文 宇瓦	瓦当部片			陽刻の上向き剣頭文・界線は恐らく四方、瓦当面に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石粒を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期以降
18		剣頭文 宇瓦	瓦当部片			陽刻の上向き剣頭文・界線は上のみ、瓦当面に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石粒を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期以降
19		男瓦			2.7	凸面はナデ・凹面は布目痕＋糸切り痕　胎土：色調と共に灰色　粗砂・小石粒を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
20		女瓦			2.9	凸面は三鱗文・凹面は横位ナデ　胎土：灰白色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
図12-1	第1面 面上	女瓦			2.2	凸凹面共に不規則ナデ　胎土：灰白色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
2		女瓦			2.1	凸面は斜格子＋花菱文・凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰褐色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：黒灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
3		女瓦			2.3	凸面は斜格子文・凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：色調と共に灰色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
4		女瓦			2.4	凸面は斜格子＋花菱文・凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：灰白色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期
5		女瓦			1.8	凸面は斜格子文＋横線・凹面ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：色調と共に灰色　粗砂・小石・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
6		女瓦			1.7	凸面は斜格子＋花菱文・凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂　胎土：色調と共に灰褐色　粗砂・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図13-1	第1面 構成土	極小内折れ かわらけ	3.2	3.0	0.5	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒多を含む良土　色調：橙色　焼成：良好
2		かわらけ	(8.0)	(5.7)	1.7	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･赤色粒･土丹粒を含むやや粗土　色調:黄橙色 焼成：良好
3		かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
4		かわらけ	(8.7)	(6.9)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
5		かわらけ	(8.0)	(5.0)	2.0	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･土丹粒を含む粗土　色調:黄橙色 焼成：良好
6		かわらけ	7.8	5.0	2.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
7		かわらけ	7.9	4.5	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
8		かわらけ	(7.9)	(4.5)	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯を含む良土　色調：黄橙色 焼成：良好
9		かわらけ	7.8	4.5	2.1	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒多を含む砂質粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
10		かわらけ	(7.4)	(4.2)	2.35	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質良土　色調：橙色 焼成：良好
11		かわらけ	7.5	4.9	2.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質良土　色調：橙色 焼成：良好
12		かわらけ	(10.7)	(6.0)	2.7	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･赤色粒･海綿骨芯を含む良土　色調:淡橙色 焼成：良好
13		かわらけ	(11.8)	(5.7)	2.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土　色調：淡橙色 焼成：良好
14		かわらけ	(11.7)	(6.9)	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む粉質良土　色調：淡橙色 焼成：良好
15		かわらけ	(12.6)	(6.4)	3.5	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･赤色粒多･海綿骨芯を含む良土　色調:淡橙色　焼成：良好
16		かわらけ	(12.1)	(7.0)	3.5	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂多･雲母･赤色粒多を含むやや砂質土　色調:橙色 焼成:良好
17		かわらけ	12.6	7.3	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味　やや粗土　色調：淡橙色 焼成：良好
18		かわらけ	(13.8)	(8.8)	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質精良土　色調：橙色 焼成：良好
19		かわらけ	12.4	7.2	3.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・土丹粒を含む粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
20		かわらけ	(10.8)	6.0	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
21		竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗		高台径 4.2		ロクロ成形　素地：灰色　精良緻密土　釉調：青灰色不透明釉を内面～高台脇までやや厚く施釉　気泡・貫入あり　焼成：堅緻　備考：内底面に蓮華文を線刻
22		竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			ロクロ成形　素地：灰白色　若干の黒色粒子を含む精良緻密土　釉調：明灰緑色半透明釉をやや厚く施釉　貫入あり　焼成：堅緻
23		竜泉窯青磁 蓮弁文折縁鉢	口縁部片			ロクロ成形　素地：灰白色　若干の黒色粒子を含む精良緻密土　釉調：青緑色半透明釉をやや厚く施釉　貫入あり　焼成：堅緻
24		白磁 口兀碗	(12.5)			ロクロ成形　素地：灰白色　若干の黒色粒子を含む精良緻密土　釉調：灰白色不透明釉を薄く施釉　口唇部露胎　焼成：堅緻
25		青白磁 梅瓶	底部片			ロクロ成形　素地：灰白色　若干の黒色粒子を含む精良緻密土　釉調：水青色半透明釉を薄く施釉　焼成：堅緻
26		瀬戸 仏供具	4.6			ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：灰色 微砂を含む緻密土　釉調：灰緑色の灰釉をツケ掛け　焼成：良好　備考：藤澤編年前Ⅲ期か？破損断面は加工痕ありか？
27		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰黄色　微砂・長石を含む　色調：灰色　釉調：内面口縁～体部に自然降灰あり　焼成：良好　備考：中野編年6a型式
28		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰褐色　微砂・長石・石英を含む　色調：黒褐色　焼成：良好　備考：外面口縁～頸部に自然降灰あり　中野編年6a型式
29		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：黄橙色　長石・小石粒を含む　色調：黒褐色　焼成：良好　備考：中野編年6a ～ 6b型式
30		土器質 浅鉢型火鉢	口縁部片			輪積み成形　口縁部内外面横位ナデ、体部外面ナデ　胎土：灰白色　微砂を含む　色調：黄橙色　焼成：軟質
31		石製品　硯	残長11.9	9.0	2.0	一部を残し、全体的に剥離　材質：黒色粘板岩　色調：黒色　備考：鳴滝産
32		かわらけ転用 円盤状土製品	径2.7 ～ 2.8 ×厚さ 0.4			かわらけ片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母を含む良土 色調：橙色 焼成：良好
33		かわらけ転用 円盤状土製品	径3.7 ～ 4.0 ×厚さ 0.8			ロクロ成形かわらけ底部片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好　備考：中央に穿孔あり
34		銅銭	外径2.4　内径1.9			□□元寶（判読不能）
図14-1	第1面 構成土	女瓦			2.5	凸面は縄目叩き痕＋不規則ナデ・凹面横位ナデ→凹凸面共に離れ砂付着　胎土：色調と共に灰色　砂粒・白色粒を含む良土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅰ期
2		女瓦			2.3	凸面は斜格子文・凹面は不規則ナデ→凹凸面離れ砂付着　胎土：色調と共に橙色　砂粒・白色粒・赤色粒を含む良土　焼成：軟質　備考：永福寺Ⅱ期（埼玉県美里水殿瓦窯産）
3		女瓦			2.0	凸面は斜格子文＋「大」・凹面は凸面の叩きが写り込む→内外面共に離れ砂付着　胎土：色調と共に灰桃色　砂粒・白色粒・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
4		女瓦			2.0	凸面は斜格子文・凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂付着　胎土：灰白色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
5		女瓦			1.8	凸面は斜格子文＋花菱文･凹面は不規則ナデ→凹凸面共に離れ砂付着　胎土:灰白色　黒色粒･白色粒・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰黒色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
6		女瓦			1.9	凸面は斜格子文＋縦位ナデ･凹面は縦位ナデ→凹凸面共に離れ砂付着　胎土:灰白色　黒色粒･白色粒・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰黒色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（　）：復元値			
図14-7	第1面 構成土	女瓦			1.5	凸面は斜格子文・凹面は不規則ナデ→内外面共に離れ砂付着　胎土：色調と共に灰桃色　微砂・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
8		雁振瓦？				凸面はナデ、凹面は布目痕　胎土：淡灰色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒を含むやや粗土　色調：灰黒色　焼成：硬質　備考：男瓦（永福寺Ⅱ期）をつぶして鴈振瓦としている？
図17-1	第2a面 遺構107	かわらけ	7.8	4.2	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
2		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・長石・石英を含む　焼成：良好　備考：中野編年6a型式
3	第2a面 遺構109	かわらけ	(12.3)	(11.2)	3.6	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む粉質良土　色調：淡黄橙色 焼成：良好
4	第2a面 遺構110	かわらけ	(8.1)	(6.4)	1.3	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土　色調：橙色　焼成：良好
5		かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土　色調：黄橙色焼成：良好
6		かわらけ	12.3	8.4	3.35	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む粉質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
7		常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・長石・石英を含む　焼成：良好　備考：中野編年6a型式　内面磨滅あり
8	第2a面 遺構111	かわらけ	(13.2)	(7.7)	3.35	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
9		かわらけ質 火鉢？				輪積み成形　口縁部内外面横位ナデ、胴部に丸味をもつ浅鉢型　　胎土：微砂・雲母・白色粒・赤色粒を含む赤橙色　色調：赤橙色　焼成：軟質
10	第2a面 遺構113	内折れ かわらけ	(6.8)	(8.0)	1.1	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯を含む粉質良土　色調：黄橙色 焼成：良好
11		かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：橙色 焼成：良好
12		かわらけ	(13.5)	(7.6)	3.55	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土　色調：橙色 焼成：良好
13		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・長石・石英を含む　色調：暗赤褐色　焼成：良好　備考：内面に自然降灰あり　中野編年7～8型式
14		女瓦			2.6	凸面は斜格子叩き目・凹面は不規則ナデ→凹凸面離れ砂付着　胎土：灰色　砂粒・白色粒・小石粒を含む良土　色調：灰黒色　焼成：軟質　備考：永福寺Ⅱ期（埼玉県美里水殿瓦窯産）
15	第2a面 遺構112a	かわらけ	(7.2)	(3.8)	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒多を含む砂質気味良土　色調：橙色　焼成：良好
16		かわらけ	(13.2)	(10.8)	2.85	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粉質やや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
17		かわらけ	(13.3)	(7.3)	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粉質やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
18		かわらけ	13.6	7.1	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土　色調：橙色焼成：良好
19		かわらけ	(13.3)	(6.4)	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む粉質良土　色調：橙色焼成：良好
20		かわらけ	12.9	7.1	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む粉質良土　色調：橙色 焼成：良好
21		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・長石を含む　焼成：良好　備考：内面口縁部に自然降灰　中野編年5～6a型式
22		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：褐色　微砂・長石・小石粒を含む　色調：赤褐色　焼成：良好　備考：内外面口縁部・肩部に自然降灰　中野編年6b型式
23		すり瓦	残長8.7	残幅7.7	1.8	凸面縄目叩き痕・凹面布目痕瓦（永福寺Ⅰ期）の表面を擦り加工した転用品　胎土：器表と共に灰色　砂粒・白色粒を含む良土　焼成：硬質
24		石製品 砥石・中砥	残長8.8	残幅7.7	5.05	表裏3面を砥面として使用 材質：流紋岩質粗粒凝灰岩　色調：乳白色に赤褐色マーブル状　備考：天草産
25	第2a面 遺構112b	土丹加工 不明品	残長6.7	残幅7.7	1.9	土丹を楕円状に加工し、表面全体に貫通しない穴あり
26	第2a面 遺構114	白磁瓜型 水注？		(5.0)		八角形状で瓜型をあらわすのか？　素地：白色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：青味がかった乳白色不透明釉をやや薄く施釉　焼成：堅緻
27	第2a面 遺構119	かわらけ	(10.8)	(6.7)	2.9	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
28		かわらけ	(12.7)	(8.0)	3.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒・礫を含むやや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
29		かわらけ	13.3	6.7	3.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む砂質気味良土　色調：淡黄橙色 焼成：良好
30		かわらけ	(12.4)	(6.4)	3.45	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む砂質気味粗土　色調：淡黄橙色 焼成：良好
31		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・長石・石英を含む　色調：茶褐色　焼成：良好　備考：胴部外面にス縦長正方格子のスタンプ文
32		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：黒褐色　微砂・長石を含む　色調：暗茶褐色　焼成：良好　備考：胴部外面に正方格子のスタンプ文
33		滑石製不明品	1.9	1.8	2.1	滑石をサイコロ状に加工し、両側面に貫通しない窪みあり
34	第2a面 遺構126	かわらけ	13.2	7.1	3.15	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒多・土丹粒を含む砂質やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
35		かわらけ	12.8	6.8	3.65	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
36		かわらけ	13.2	7.0	3.45	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む粉質精良土　色調：橙色 焼成：良好
37		ロクロ土師器 高台付碗		(5.8)		ロクロ成形・内外面回転ナデ・外底回転糸切後ナデ調整？貼付高台　胎土：灰橙色　微砂・雲母・白色粒を含む　焼成：良好　備考：全体的に火を受ける
図18-1	第2b面 遺構108	かわらけ	(10.4)	(6.2)	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図18-2	第2b面 遺構108	かわらけ	(12.0)	(7.6)	3.1	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・白色粒・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：良好
3		かわらけ	(12.3)	(9.1)	3.1	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：灰黄色 焼成：やや甘い
4		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に淡灰色　微砂・長石・石英を含む　焼成：良好　備考：中野編年6a型式
5	基壇状 遺構	常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：色調と共に黄味灰色　微砂・長石を含む　色調：灰色　焼成：良好　備考：胴部外面に山形・三角入子複合＋縦線複合のスタンプ文
6		滑石製温石	残長14.8	残幅5.5	1.3	滑石鍋の口縁部を転用した温石片　外面鍔部分は削り取り、上方に径0.75cm程の穿孔あり
7		女瓦			厚2.2	凸面は斜格子叩き目→離れ砂付着　凹面は不規則ナデ　胎土：灰色　砂粒・白色粒を含む良土　色調：灰色　焼成：軟質　備考：永福寺Ⅱ期（埼玉県美里水殿瓦窯産）
8		かわらけ	(9.4)	(7.9)	1.7	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯を含む砂質やや粗土　色調：黄灰色　焼成：やや甘い　備考：口唇部に削りあり
9		かわらけ	(7.8)	(5.2)	2.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
10		かわらけ	(7.6)	(4.6)	2.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
11		かわらけ	(7.3)	(4.3)	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む粉質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
12		かわらけ	(11.4)	(6.0)	3.05	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：良好
13		かわらけ	(13.2)	(7.8)	3.15	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む粉質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
14		かわらけ	(13.1)	(6.3)	3.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土　色調：橙色 焼成：良好
15		かわらけ	(12.6)	(7.9)	3.6	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む粉質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
16		かわらけ	(12.9)	(7.6)	3.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む粉質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
17		かわらけ	(13.1)	(6.4)	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土　色調：橙色　焼成：良好
18		かわらけ	(13.0)	(7.2)	3.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯を含む良土　色調：橙色 焼成：良好
19		かわらけ転用 円盤状土製品	径3.1 ～ 3.2 ×厚さ 0.85			ロクロ成形かわらけ底部片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄橙色　焼成：良好
20		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・長石・石英を含む　色調：灰色　焼成：良好　備考：中野編年6a型式
21		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：微砂・長石を含む灰色　色調：灰色　焼成：良好　備考：中野編年6a型式
22		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部～体部片			輪積み成形　胴下部回転ヘラ削り　胎土：灰褐色　微砂・長石・石英を含む　色調：灰色　焼成：良好　備考：内面口縁部～体部に自然降灰　5 ～ 6a型式
23		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰褐色　微砂・長石・石英を含む　色調：灰色　焼成：良好　備考：内外面口縁部に自然降灰　中野編年5 ～ 6a型式
24		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・白色粒・長石を含む　色調：褐色　焼成：良好　備考：胴部外面に矢羽根・樹枝状複合のスタンプ文
25		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：黄味灰色　微砂・黒色粒・白色粒・長石を含む　色調：淡灰色　焼成：良好　備考：胴部外面に縦位矢羽根・樹枝状＋縦線の複合スタンプ文
26		常滑 山茶碗		(6.4)		輪積み成形　底部外面糸切、貼付高台で籾殻痕あり　胎土：色調と共に灰色　微砂・白色粒・長石を含む　焼成：良好　備考：内底面磨滅・部分的に自然降灰
27		石製品 砥石・仕上砥	残長5.5	3.6	0.6	表裏2面を砥面として使用　材質：頁岩（流紋岩質細粒凝灰岩）　色調：黄色味　備考：鳴滝産
28		女瓦			1.6	凸面は縦位ナデ・凸面は布目痕→不規則ナデ　胎土：色調と共に灰色　砂粒・白色粒を含む良土　焼成：やや軟質　備考：八幡宮（国宝館）Ｅタイプと同質
29		女瓦			2.1	凸面は不規則ナデ・凹面は縦位ナデ→離れ砂付着　胎土：色調と共に灰色～灰橙色　砂粒・白色粒を含む良土　焼成：軟質　備考：永福寺Ⅱ期（埼玉県美里水殿瓦窯産）
30		女瓦			1.9	凹凸面は不規則なナデ→離れ砂付着　胎土：色調と共に黄味淡灰色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
31		女瓦			1.6	凸面は縦位ナデ、凸面は不規則ナデ→離れ砂付着　胎土：色調と共に灰橙色　砂粒・白色粒を含む良土　焼成：軟質　備考：八幡宮（国宝館）Ｅタイプと同質
図19-1	第2面 面上	内折れ 極小かわらけ	3.3	2.9	0.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土　色調：橙色 焼成：良好
2		かわらけ	(8.3)	(7.0)	2.35	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土 色調：橙色 焼成：良好
3		かわらけ	(7.5)	(7.0)	1.8	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む砂質やや粗土 色調：黄橙色　焼成：良好
4		かわらけ	7.6	4.6	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
5		かわらけ	(6.8)	(4.2)	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
6		かわらけ	(7.8)	(4.2)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む砂質やや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
7		かわらけ	(7.2)	(4.5)	1.75	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
8		穿孔かわらけ	(7.2)	(5.0)	2.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：良好
9		かわらけ	(10.8)	(7.0)	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
10		かわらけ	(11.7)	(7.5)	3.0	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図19-11	第2面 面上	かわらけ	(11.5)	6.7	3.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
12		かわらけ	(11.2)	(7.7)	2.9	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒・礫を含むやや硬質な砂質気味粗土　色調：淡黄橙色 焼成：良好
13		かわらけ	(13.2)	8.0	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土　色調：橙色　焼成：良好
14		青白磁 花瓶	(9.8)			ロクロ成形　素地：灰白色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：水青色半透明釉を薄く施釉　焼成：堅緻　備考：外面に刻花文
15		渥美 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：暗灰色　微砂・長石・石英を含む　色調：灰黒色　焼成：良好　備考：内面口縁部に自然降灰　中野編年2b型式
16		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に黄灰色　微砂・長石を含む　焼成：良好　備考：中野編年5型式
17		常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・長石を含む　色調：灰褐色　焼成：良好　備考：中野編年6b ～ 7型式
18		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰黄色　微砂・長石・石英を含む　色調：暗褐色　焼成：良好　備考：内外面口縁部に自然降灰　中野編年6a型式
19		常滑 甕	肩部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・長石・石英を含む　色調：黒褐色　焼成：良好　備考：外面に自然降灰・正方格子のスタンプ文
20		擦り常滑	残存長 6.6	8.5	1.3	常滑甕胴部転用品　胎土：灰黒色　黒色粒・長石・石英を含む　色調：黒褐色　焼成：良好　備考：断面のほぼ全体が使用により摩耗
21		土器質 浅鉢型火鉢	口縁部片			輪積み成形　口縁部内外面横位ナデ、体部内面指頭痕　胎土：赤橙色　微砂・雲母・白色粒・赤色粒を含む　色調：黄橙色　焼成：軟質
22		かわらけ転用 円盤状土製品	径5.3 ×厚さ0.7			ロクロ成形かわらけ底部片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母・白色粒・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
23		かわらけ転用 円盤状土製品	径3.5 ～ 3.6 ×厚さ0.7			ロクロ成形かわらけ底部片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母・白色粒・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
24		かわらけ転用 円盤状土製品	径2.8 ～ 2.9 ×厚さ0.65			ロクロ成形かわらけ底部片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母・白色粒・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
25		巴文鐙瓦			1.9	外区内縁に小さな珠文を配す左廻り巴文→瓦当面離れ砂付着　男瓦部凸面縦位ケズリ、凹面糸切り痕→離れ砂付着　胎土：淡灰桃色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒を含む粗土　色調：灰桃色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期以降
26		道具瓦			2.1	凸面は不規則ナデ、凹面は布目痕　転用で破面割口は焼成前に刃物による切込面　胎土：黄灰色　砂粒・白色粒・赤色粒を含む良土　色調：黄灰色　焼成：軟質　備考：面戸瓦や棟瓦の可能性もあり
27		男瓦			2.5	凸面は縦位ナデ、凹面は布目痕　胎土：色調と共に灰～灰褐色　砂粒・白色粒を含む良土　焼成：硬質　備考：八幡宮（国宝館）タイプと同質
図20-1	第2面 面上	女瓦			2.4	凸面は縄目叩き痕＋横位ナデ→凹凸面共に離れ砂付着　胎土：灰色　砂粒・白色粒を含む良土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅰ期
2		女瓦			1.7	凹凸面は不規則なナデ→離れ砂付着　胎土：色調と共に灰桃色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
3		女瓦			1.8	凹凸面は縦位ナデ→離れ砂付着　胎土：色調と共に灰橙色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
4		女瓦			1.7	凹凸面は縦位ナデ→離れ砂付着　胎土：色調と共に灰桃色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
5		女瓦			1.5	凸面は不規則ナデ・凹面は縦位ナデ→共に離れ砂付着　胎土：灰桃色　砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
6		女瓦			1.7	凸面は斜格子＋縦位ナデ・凹面は不規則ナデ→共に離れ砂付着　胎土：色調と共に灰橙色～橙色　砂粒・白色粒・赤色粒を含む良土　焼成：軟質　備考：八幡宮（国宝館）Ｅタイプと同質
7		女瓦			1.5	凸面は縦位ナデ・凹面は不規則ナデ→共に離れ砂付着　胎土：色調と共に灰橙色～橙色　砂粒・白色粒・赤色粒を含む良土　焼成：軟質　備考：八幡宮（国宝館）Ｅタイプと同質
図21-1	第2面 構成土	かわらけ	(7.5)	(4.0)	1.4	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
2		かわらけ	(8.8)	(7.0)	1.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
3		かわらけ	(7.1)	4.0	2.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒多を含む粉質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
4		かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・小石粒・土丹粒を含む粗土　色調：橙色 焼成：良好
5		かわらけ	(11.2)	6.1	2.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒多・土丹粒を含む砂質良土　色調：橙色 焼成：良好　備考：内底面磨滅
6		かわらけ	(11.3)	6.5	3.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
7		かわらけ	(11.5)	6.5	3.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：良好
8		かわらけ	12.4	8.0	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒多を含む砂質良土　色調：淡橙色 焼成：良好
9		かわらけ	12.6	6.3	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・海綿骨芯・土丹粒多を含むやや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
10		かわらけ	12.2	6.6	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
11		かわらけ	(12.7)	(7.4)	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒多・白色粒を含む砂質気味良土　色調：橙色 焼成：良好
12		かわらけ	(13.6)	9.0	3.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
13		かわらけ	13.2	7.1	3.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
14		かわらけ	(14.6)	(9.4)	3.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色　焼成：良好
15		かわらけ	(14.3)	7.5	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒多・土丹粒を含む砂質気味粗土　色調：橙色 焼成：良好

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図21-16	第2面 構成土	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片			ロクロ成形　素地：灰色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：淡灰緑色不透明釉をやや厚く施釉　焼成：堅緻
17		竜泉窯青磁 蓮弁文鉢	口縁部片			ロクロ成形　素地：灰白色　若干の黒色粒を含む精良緻密土　釉調：青緑色不透明釉を厚く施釉　貫入あり　焼成：堅緻　備考18と同一個体の可能性あり
18		竜泉窯青磁 蓮弁文鉢	底部片			ロクロ成形　素地：灰白色　若干の黒色粒を含む精良緻密土　有料：青緑色不透明釉を厚く施釉　貫入あり　焼成：堅緻　備考17と同一個体の可能性あり
19		白磁 口兀皿	11.2			ロクロ成形　素地：白色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：乳白色不透明釉を薄く施釉　口唇部露胎 焼成：堅緻　備考：表面にキズあり
20		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：暗灰色　砂粒・長石・石英を含む　色調：暗褐色　焼成：良好　備考：内面口縁部・外面肩部に自然降灰　中野編年6a型式
21		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土:灰色　黒色粒･白色粒･長石･石英を含む　色調:褐色　焼成:良好　備考:内外面口縁部に自然降灰　中野編年5型式
22		すり瓦	5.9	4.8	2.4	凸面縄目叩き痕瓦（永福寺Ⅰ期）の表面を擦り加工した転用品　胎土：灰色　砂粒・白色粒を含む良土　色調：灰黒色　焼成：軟質
23		巴文 鐙瓦	瓦当径（12.8）			外区内縁に珠文を3個と2個が一単位となって交互に配される左廻り巴文　胎土:灰色　砂粒･白色粒・赤色粒・小石粒を含む粗土　色調：灰黒色　焼成：やや軟質　備考：八幡宮タイプ
24		瓦質 輪花型火鉢	口縁部片			輪積み成形　内面横位磨き・外面縦位ナデ　胎土：淡灰色　黒色粒・白色粒・雲母・小石粒を含む　色調：灰黒色　焼成：軟質　備考：胴部外面に菊花文スタンプ
25		鉄釘	残長5.0			両端欠損
図25-1	第3a面 遺構127	木製品　箸	20.2	0.55	0.55	多角形状に削り加工
2		木製品　箸	20.4	0.6	0.5	先端斜めに切断
3		木製品 棒状用途不明	残長16.0	0.85	0.3	両端欠損
4		木製品 棒状用途不明	残長14.7	0.8	0.6	両端欠損
5		木製品 経木折敷	17.3	0.45	0.1	柾目材使用
6	第3a面 遺構141	かわらけ	(7.6)	(5.2)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄灰色　焼成：やや甘い
7	第3a面 遺構134	かわらけ	(7.1)	(4.8)	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒・礫を含むやや粗土　色調：黄灰色　焼成：やや甘い
8		木製品　箸	23.1	0.65	0.5	多角形状に削り加工
9		木製品　箸	23.2	0.5	0.55	多角形状に削り加工
10		木製品　箸	23.3	0.7	0.6	多角形状に削り加工
11		木製品　箸	23.3	0.5	0.6	多角形状に削り加工
12	第3a面 遺構150	かわらけ	(7.9)	(5.9)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・礫を含むやや粗土 色調：黄灰色 焼成：やや甘い
13		常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰色　微砂・長石・石英を含む　色調：茶褐色　焼成：良好　備考：中野編年7～8型式
14	第3a面 遺構147	かわらけ	(7.7)	(5.8)	1.3	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕･内底面ロクロ成形痕顕著　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･赤色粒を含む良土　色調：橙色 焼成：良好
15		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・白色粒含む　色調：暗茶褐色　焼成：硬質　備考：外面口縁部に自然降灰　中野編年5型式
16		木製品　草履芯	残長9.15	残幅3.7	0.3	板目材使用　繊維圧痕あり
17		木製品　草履芯	残長8.2	残幅4.2	0.3	板目材使用
18	第3a面 遺構143	かわらけ	7.4	5.0	1.6	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･赤色粒･土丹粒を含むやや粗土 色調:黄橙色　焼成：良好
19		かわらけ	(7.7)	(4.8)	2.2	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･赤色粒を含む良土　色調:淡橙色　焼成：良好
20	第3a面 遺構153	かわらけ	(7.8)	(6.0)	1.45	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･赤色粒を含む良土　色調:橙色 焼成：良好
21	第3a面 遺構156	かわらけ	(8.8)	(7.7)	1.65	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･赤色粒を含む良土　色調:橙色 焼成:良好
22	第3a面 遺構158	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
23		かわらけ	(7.8)	(4.3)	2.15	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含むやや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い　備考：口唇部に煤付着・灯明皿
24		かわらけ	8.0	4.7	2.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含むやや砂質良土　色調：黄橙色 焼成：良好
25		穿孔かわらけ		(6.9)		ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：良好　備考：底部に穿孔あり
図26-1	第3b面 遺構160	木製品　箸	残長15.7	0.6	0.5	一端は四角形状に削り、一端は欠損
2		木製品　箸	残長16.6	0.7	5.5	一端は三角形状に削り、一端は欠損
3		木製品　箸	残長14.7	0.8	0.55	一端は四角形状に削り、一端は欠損
4		木製品　箸	残長14.5	0.9	0.5	両端欠損
5		木製品　箸	残長22.1	0.6	0.6	一端は三角形状に削り、一端は欠損

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図26-6	第3b面 遺構161	かわらけ	(12.2)	(8.2)	4.0	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い　備考：二重線の円形押印?が2箇所あり
7	第3b面 遺構162	常滑窯 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：暗灰色　微砂・白色粒・長石を含む　色調：黒褐色　焼成：良好　備考：外面口縁部に自然降灰　中野編年6b型式
8		かわらけ	(8.4)	(7.9)	2.4	手づくね・外底面指頭痕・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土 色調：黄橙色 焼成：良好
9		穿孔かわらけ	7.7	5.7	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い　備考：底部に穿孔あり
10		かわらけ	(8.4)	(7.9)	2.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：暗橙色 焼成：良好
11		かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
12		かわらけ	(6.7)	(5.1)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
13		かわらけ	(7.2)	(4.4)	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒多を含む粗土　色調：黄灰色 焼成：やや甘い
14		渥美 壷（四耳壷？）			(12.0)	輪積み成形　胎土：色調と共に明灰色　微砂・白色粒を含む緻密土　焼成：やや良好
15		女瓦			1.4	凸面は離れ砂叩き締めで調整不明瞭、凹面はナデ→離れ砂付着　胎土：灰色 微砂・白色粒・小石粒を含むやや良土　焼成：軟質　備考：八幡宮タイプ
16		女瓦			2.9	凸面は斜格子叩き目→離れ砂付着　凹面は縦位＋横位ナデ　胎土：灰褐色　砂粒・白色粒・小石粒を含む良土　色調：灰褐色～灰黒色　焼成：軟質　備考：永福寺Ⅱ期（埼玉県美里水殿瓦窯産）
17		木製品 用途不明	残長9.2	残幅3.7	0.15	柾目材使用　板材を円板状に加工
18		木製品 曲物蓋？	残長12.8	残幅3.8	0.7	柾目材使用　平面に小孔2箇所あり
19		木製品　箸	21.25	0.6	0.45	多角形状に削り加工
20		木製品　箸	20.7	0.65	0.45	多角形状に削り加工
21		木製品　箸	20.3	0.65	0.55	四角形状に削り加工
22		木製品　箸	21.85	0.5	0.5	多角形状に削り加工
23		木製品　箸	20.0	0.7	0.6	一端は四角形状、一端は欠損
24		木製品　箸	21.3	0.5	0.4	四角形状に削り加工
25		木製品　箸	19.3	0.7	0.55	多角形状に削り加工
26		木製品　箸	22.25	0.65	0.5	部分的に鉄分付着
27		木製品　箸	残長20.0	0.6	0.6	一端は多角形状、一端は欠損
28		木製品　箸	残長18.6	0.6	0.5	一端は四角形状、一端は欠損
29		木製品　箸	残長17.5	0.6	0.45	一端は四角形状、一端は欠損
30		木製品　箸	残長14.65	0.65	0.25	一端は多角形状、一端は欠損
31		木製品　箸	残長15.7	0.6	0.45	一端は多角形状で鉄分付着、一端は欠損
図27-1	第3b面 遺構162	木製品 経木折敷	17.65	残幅3.0	0.1	中央に直径0.3 ～ 0.4cmの小孔あり　柾目材使用
2		木製品 経木折敷	18.1	残幅3.45	0.1	柾目材使用
3		木製品 経木折敷	残長 15.4	残幅1.9	0.1	一辺に直径0.4 ～ 0.5cmの小孔あり　柾目材使用
4		木製品 経木折敷	17.9	残幅2.6	0.08	中央に直径0.3cmの小孔あり　柾目材使用
5		木製品 経木折敷	18.4	残幅4.3	0.1	柾目材使用
6		木製品 経木折敷	17.7	残幅2.15	0.5	柾目材使用
7		木製品 柄？	25.4	4.0	0.3	黒漆部分は紐状のもので黒漆漆糅2枚重ねとじ合わせ、それ以外は補強の為の漆加工か。
8		木製品 草履芯	23.85	9.2	0.3	繊維圧痕あり　柾目材使用
9		木製品 草履芯	24.5	9.35	0.3	繊維圧痕あり　柾目材使用
10		木製品 草履芯	残長 14.2	残幅4.75	0.45	柾目材使用
11		木製品 草履芯	残長 14.2	残幅4.7	0.35	繊維圧痕あり　柾目材使用
12		木製品 草履芯	残長 11.3	残幅4.9	0.35	小孔なし・繊維圧痕あり　表面部分的に鉄分付着　柾目材使用
13		木製品 人形代	残長 10.6	2.2	0.2	板状で烏帽子・頭部・胴部を切り込みで表現し、胴部中央に釘痕あり　経木折敷の転用品か？
14		木製品 毬杖の球	径4.2×厚4.1			胴部皮つき、自然木を輪切りにして両切り口を球状に整形

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（　）：復元値			
図27-15	第3b面 遺構162	木製品 形代？	残長9.4	残幅2.0	0.1	長楕円形を呈する板状木製品　柾目材使用
16		木製品 用途不明	9.8	2.7	0.05	片端を斜めに切り込む　経木折敷の転用品か？　柾目材使用
17		木製品 用途不明	12.7	3.0	0.1	片端を斜めに切り込み、表面に刃物によるキズ痕あり　経木折敷の転用品か？　柾目材使用
18		木製品 用途不明	残長16.0	1.0	0.65	棒状木製品で片端に煤付着　柾目材使用
19		木製品 用途不明	21.85	4.8	0.4	一端を山型に削り、中央に0.6×0.7cm大の小孔あり　全体的に腐食気味　柾目材使用
20		木製品 用途不明	22.5	5.7	0.35	一端を鋭角に削り、片面に装飾的な加工を施す　転用品か？　柾目材使用
21		木製品 用途不明	残長16.5	4.8	1.75	一端を斜めに切り込み　柾目材使用
22		漆器 碗		高台内径 6.2		輪高台　内外面共黒漆塗りに笹・芒・菊等の植物文と御所車の器物文を朱漆手描きで配した情景文
図29-1	第3面 面上	かわらけ	(8.5)	(6.8)	1.5	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む良土 色調：黄灰色　焼成：やや甘い
2		かわらけ	(7.7)	(5.0)	1.2	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粗土 色調：黄灰色　焼成：やや甘い
3		かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・土丹粒を含むやや粉質粗土 色調：黄橙色　焼成：やや甘い
4		かわらけ	(7.2)	(4.9)	1.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母多・赤色粒・土丹粒を含む砂質粗土 色調：橙色　焼成：良好
5		かわらけ	(8.3)	(6.2)	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母多・赤色粒・土丹粒を含む砂質粗土 色調：橙色　焼成：良好
6		かわらけ	(7.8)	(5.5)	1.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海面骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土 色調：淡橙色　焼成：良好
7		かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・白色粒・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄橙色　焼成：良好
8		かわらけ	(7.7)	(5.2)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄橙色　焼成：良好
9		かわらけ	(7.9)	(4.8)	1.9	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄灰色　焼成：やや甘い
10		かわらけ	7.7	5.0	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄橙色　焼成：良好
11		かわらけ	(6.8)	(3.6)	1.8	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄灰色　焼成：やや甘い
12		かわらけ	(7.4)	(4.5)	2.1	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒多を含む粉質良土 色調：黄橙色　焼成：良好
13		かわらけ	(6.8)	(4.0)	2.0	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒多を含む砂質気味良土 色調：橙色　焼成：良好
14		かわらけ	(7.9)	(4.9)	2.1	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒多・土丹粒を含むやや粗土 色調：淡橙色　焼成：良好
15		かわらけ	(7.9)	(6.0)	1.75	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒多を含むやや粗土 色調：黄灰色　焼成：やや甘い
16		かわらけ	(13.8)	(11.8)	(3.0)	手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む良土 色調：黄橙色　焼成：良好
17		かわらけ	(13.1)	(11.8)		手づくね成形・外底面指頭痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土 色調：黄灰色　焼成：やや甘い
18		穿孔かわらけ	12.8	6.8	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂多・雲母・赤色粒多を含む良土 色調：黄橙色　焼成：良好
19		かわらけ	(12.7)	(7.0)	3.4	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土 色調：黄橙色　焼成：良好
20		かわらけ	(12.7)	(7.3)	3.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・土丹粒を含む砂質粗土 色調：橙色　焼成：良好
21		かわらけ	(12.7)	(7.5)	(3.6)	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
22		かわらけ	(13.7)	(9.0)	3.6	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
23		かわらけ	(13.9)	(8.7)	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
24		かわらけ		(7.0)	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含むやや粗土 色調：淡橙色　焼成：良好　備考：内底面ロクロ成形痕顕著
25		かわらけ	16.7	9.8	4.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒多を含むやや良土 色調：橙色　焼成：良好　備考特大かわらけ
26		白磁 四耳壷				ロクロ成形　素地：灰白色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：不透明な青味を帯びた乳白色を内面一部～外面に施す　焼成：堅緻
27		青磁 口兀小碗	(8.4)			ロクロ成形　素地：灰白色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：青灰色不透明釉を厚く施釉、口唇部露胎 焼成：堅緻
28		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰色　微砂・長石を含む　色調：灰黒色　焼成：良好　備考：外面口唇部～内面にかけて自然降灰　5型式
29		常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰色　微砂・長石を含む　焼成：良好　備考：内面に自然降灰　中野編年6a型式
30		常滑 甕	口縁部片			輪積み成形　胎土：色調と共に灰黒色　微砂・長石を含む　焼成：良好　備考：内面口縁部に自然降灰　中野編年5型式
31		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：灰黒色　微砂・長石を含む　色調：暗赤褐色　焼成：良好　備考：線刻あり　中野編年5型式
32		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土：灰褐色　微砂・長石・小石粒を含む灰褐色　色調：暗褐色　焼成：良好　備考：胴部外面に矢羽根・樹枝状文複合のスタンプ文

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（ ）：復元値			
図29-33	第3面 面上	瓦質 輪花型火鉢	口縁部片			輪積み成形　全体的に摩耗し調整不明瞭　胎土：灰褐色　微砂・黒色粒・白色粒・雲母・小石粒を含む　色調：灰黒色（黒色処理剥離気味）　焼成：やや軟質　備考：胴部外面に菊花文スタンプ
34		かわらけ転用 円盤状土製品	径3.6 ～ 3.9 × 厚さ 1.85			ロクロ成形かわらけ底部片を転用し、円盤状に磨り加工を施す　胎土：微砂・雲母・白色粒・赤色粒を含む良土 色調：橙色　焼成：良好
35		剣頭文 宇瓦	瓦当幅 3.7		1.4	陽刻の下向き剣頭文、中心に「大」を配すか？　胎土：灰色　微砂・白色粒を含む良土　色調：黒灰色　焼成：軟質　備考：八幡宮（13世紀後半）タイプ
36		女瓦				凸面は横方向縄目叩き痕・凹面は糸切り痕、内外面共に離れ砂付着　胎土：色調と共に茶灰色　微砂・長石・石英を含む陶器質胎土　色調：茶灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅰ期（東海地方窯産）
37		灰釉陶器 埦				ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：色調と共に淡灰色　微砂・白色粒を含む緻密土　釉調：淡灰緑色の灰釉を薄くハケ塗り　焼成：良好　備考：K90号窯式
38		灰釉陶器 埦				ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：色調と共に淡灰色　微砂・白色粒を含む緻密土　釉調：淡灰緑色の灰釉を薄くハケ塗り　焼成：良好　備考：K90号窯式
39		灰釉陶器 埦				ロクロ成形・内外面回転ナデ・外底部回転糸切り無調整　胎土：色調と共に灰色　微砂・白色粒・海綿骨芯を含む　焼成：やや良好　備考：K90号窯式
40	第3面 構成土	かわらけ	（12.8）	（8.2）	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切り　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・赤色粒を含む良土 色調：黄橙色　焼成：良好
41		かわらけ	（12.7）	（7.7）	4.0	ロクロ成形・外底回転糸切り・板状圧痕・　胎土：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む良土 色調：淡橙色　焼成：良好
42		ロクロ土師器 坏		（5.2）		ロクロ成形・内外面回転ナデ→外底部回転糸切り無調整　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　橙色　色調：橙色　焼成：良好
43		須恵器 甕	口縁部片			ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：色調と共に暗灰色　微砂・雲母・白色粒を含む緻密土　焼成：良好
図32-1	第4a面 遺構190	土師器 長胴甕		（5.8）		体部外面下位～底部ヘラケズリ・内面ナデ　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　色調：暗灰黄色　焼成：良好
2		ロクロ土師器 坏		（6.6）		ロクロ成形・内外面回転ナデ→外底部回転糸切り無調整　胎土：微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯を含む　色調：橙色　焼成：良好　備考：G 59号窯式指向
3	第4a面 遺構194	灰釉陶器 埦		（6.7）		ロクロ成形・内外面回転ナデ・外底部回転糸切り→ヘラクズリ　胎土：微砂・白色粒を含むやや緻密土　色調：淡灰色　d：淡灰緑色の釉を漬け掛け　焼成：堅緻　備考：O53号窯式
4	第4a面 遺構195	須恵器 長頸瓶	頸部径 （9.6）			ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：微砂・白色粒・小石粒を含む緻密土　色調：暗褐色　焼成：良好　備考：南武蔵窯　小片の為、傾きに不安あり
5		常滑 片口鉢Ⅰ類				輪積み成形　胎土：色調と共に明茶褐色　微砂・長石・石英　焼成：良好　備考：外面口縁部下に強いナデ　中野編年5 ～ 6a型式
6	第4a面 遺構216	ロクロ土師器 坏	（12.4）	（6.4）	2.7	ロクロ成形・内外面回転ナデ→外底部回転糸切り無調整　胎土：微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯　色調：橙色　焼成：良好　備考：G 59号窯式指向
7	第4b面 遺構192	須恵器 蓋	（4.6）			ロクロ成形・内外面回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ　胎土：微砂・雲母・白色粒を含むやや緻密　色調：橙色　焼成：酸化焔気味　備考：陶邑Ⅲ－1（TK217）相当の東海系か。
8		土師器 長胴甕		（6.8）		体部外面ナデ・体部内面ハケメ・外底部木葉痕　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　色調：橙色　焼成：良好　備考：内面体部黒色処理　相模型（9 c 前葉～中葉頃）
9	第4b面 遺構250	須恵器 坏		（5.6）		ロクロ成形・内外面回転ナデ・外底部回転糸切り無調整　胎土：色調と共に暗灰色　微砂・白色粒・海面骨芯を含む　焼成：良好　備考：北武蔵窯G 59 ～ 25号窯式
10	第4b面 遺構256	須恵器 坏	（12.3）			外面口縁部ヨコナデ・体部下位指頭痕＋ヘラケズリ・内面ナデ　胎土：微砂・雲母・赤色粒・白色粒　色調：橙色　焼成：良好　備考：粗雑なつくりとなる9 C後葉頃の相模型最終形態に近いタイプ
11	第4b面 遺構264	土師器 壺か？	口縁部片			内外面口縁部ヨコナデ・内外面体部ハケ　胎土：微砂・雲母・白色粒・小石粒　色調：暗黄灰色　焼成：やや甘い　備考：古墳時代前期
12	第4b面 遺構267	かわらけ	（7.9）	（6.1）	1.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好　備考：器表面に鉄分付着
13		鉄釘	残長5.9	0.7	0.6	先端欠損
14	第4b面 遺構285	土師器 坏	（14.4）			内外面口縁部ヨコナデ・体部下位ヘラケズリ・内面ナデ　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む　色調：黄灰色　焼成：やや甘い　備考：相模型（8 c 中葉～ 9 c 前葉頃）
15	第4面 面上	土師器 長胴甕	（19.7）			内外面口縁部ヨコナデ・外面頸部以下ヘラケズリ　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　色調：茶褐色　焼成：良好　備考：口縁断面形態が「コ」の字状を呈する9 c 中葉頃の武蔵型
16		土師器 甕特殊品	（6.2）			外面口縁部ヨコナデ・外面体部不明瞭・内面ナデ　胎土：微砂・雲母・赤色粒を含む　色調：黄橙色　焼成：良好　備考：相模型坏に近い胎土を呈する特殊品
17		灰釉陶器 埦				ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：色調と共に淡灰色　黒色粒を含む緻密土　釉調：淡灰緑色を呈する灰釉を薄くハケ塗り・気泡多　焼成：やや堅緻　備考：K90号窯式
18	第4面 構成土	土師器 坏	（13.9）			内外面口縁部ヨコナデ・外面体部下位ヘラケズリ→ナデ？　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　色調：赤灰色（全体的に二次焼成で黒く変色）　焼成：良好　備考：半球形状を呈する古墳時代後期
19		土師器 盤状坏				内外面口縁部ヨコナデ・外面体部下位ヘラケズリ・内面ナデ　胎土：微砂・雲母・白色粒・海面骨芯を含むやや緻密土　色調：黄橙色　焼成：良好　備考：体部内面に斜放射状暗文あり
20		土師器 小型甕	（12.4）			外面口縁部ヨコナデ・外面体部ヘラケズリ→ナデ？　内面ナデ　胎土：微砂・雲母・白色粒・小石粒を含む　色調：暗橙色　焼成：良好　備考：古墳時代後期の系譜を引くヘラケズリ調整甕
21		土師器 甕		（5.0）		内面ナデ､外面体部ヘラケズリ･底部木葉痕　胎土:微砂･雲母･海綿骨芯･赤色粒を含む　色調:橙色　焼成：良好　備考：武蔵型に近い胎土を呈する不明品
22		土師器 甕		（10.2）		外面体部～底部ヘラケズリ→ナデ？　内面ナデ　胎土：微砂・雲母多・白色粒を含む橙色　色調：橙色　焼成：良好　備考：武蔵型に近い胎土を呈する不明品
23		須恵器 坏		（3.8）		ロクロ成形・内外面回転ナデ・外底部回転糸切り無調整　胎土：黄灰色　微砂・白色粒を含む緻密土　色調：灰色　焼成：良好　備考：内面部分的に自然降灰あり　南武蔵窯G 5号窯式
24		須恵器 甕				ロクロ成形・内外面回転ナデ、外面櫛描波状文あり　胎土：色調と共に灰黒色　微砂・白色粒を含む　焼成：良好　備考：内面に自然降灰あり
図32-25	第4面 構成土	灰釉陶器 埦				ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：色調と共に淡灰色　微砂・白色粒を含む　釉調：淡灰緑色の灰釉を薄くハケ塗り　焼成：良好　備考：K 90号窯式
26		灰釉陶器 埦				ロクロ成形・内外面回転ナデ・外底部回転ヘラケズリ→ナデ？　胎土：色調と共に灰色　微砂・白色粒を含む　焼成：良好　備考：内底部に擦り・刻線、周辺に削り出しの痕跡あり　O53号窯式に相当する駿河・遠江産か？

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径/長さ	底径/幅	器高/厚さ	観察内容
			単位：cm/（　）：復元値			
図34-1	第5面 遺構345	須恵器 甕				ロクロ成形・内外面ヨコナデ　胎土：暗褐色　微砂・白色粒を含む　色調：灰黒色　焼成：良好　備考：内面口縁部に自然降灰
図35-1	第5面 遺構338	土師器 坏	(13.0)			内面～外面口縁部ヨコナデ・外面下位へラケズリ　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　色調：橙色　焼成：良好　備考：内面に赤彩・放射状暗文のある古墳時代後期の畿内系土器
2	第5面 遺構340	須恵器 坏蓋	(11.2)			ロクロ成形・内外面回転ナデ　胎土：色調と共に暗灰色　微砂・白色粒を含む緻密土　焼成：良好　備考：見受けかえり部を有する７ｃ中葉頃の湖西窯
図36-1	第5面 面上	土師器 高坏	(12.8)			内面～外面口縁部ヨコナデ・外面下位無調整→内面赤彩　胎土：微砂・雲母・白色粒を含む　色調：灰橙色　焼成：良好・硬質　備考：小片の為、傾きに不安あり　古墳時代後期
2		弥生式土器 壺甕類				内外面ナデ→体部外面に波状縄文　胎土：微砂・雲母・赤色粒・白色粒を含む　色調：黄灰色　焼成：やや甘い
3		須恵器 坏？		(4.2)		ロクロ成形・内外面回転ナデ→外面体部下位～底部回転ヘラケズリ調整　胎土：灰色　微砂を含む緻密土　色調：暗灰色　焼成：良好　備考：南武蔵窯？
4		須恵器 坏蓋	(11.2)		(3.3)	ロクロ成形・内外面回転ナデ→天井部一部ヘラケズリか？　胎土：暗灰色　微砂・白色粒・小石粒を含む緻密土　色調：灰黒色　焼成：良好　備考：湖西窯（6ｃ後葉～7c前葉頃）
5	第5面 構成土	須恵器 坏		(9.2)		ロクロ成形・内外面回転ナデ→外底全面or周縁回転ヘラケズリ　胎土：色調と共に灰色　微砂・白色粒・白色針状物質を含む　焼成：良好　備考：北武蔵窯Ｍａ２号窯式（8世紀後半）
図38-1	試掘坑	かわらけ	7.2	4.4	2.1	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質良土　色調：橙色　焼成：良好
2		須恵器 長頸瓶				胎土:微砂･白色粒･礫を含む灰褐色土　色調:外面体部下位まで自然降灰により茶褐色　焼成:良好　備考：高台欠損
3	表採	かわらけ	(9.2)	(7.5)	1.45	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：やや甘い
4		かわらけ	7.8	4.8	1.65	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：橙色 焼成：良好
5		かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.9	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
6		かわらけ	(8.2)	(6.2)	2.0	ロクロ成形･外底回転糸切･板状圧痕　胎土:微砂･雲母･赤色粒･海綿骨芯･土丹粒を含む色調:淡黄橙色 焼成：良好 備考：灯明皿
7		かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.85	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土　色調：黄橙色 焼成：良好
8		かわらけ	(7.9)	(5.4)	1.6	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質良土　色調：黄橙色 焼成：良好
9		かわらけ	(6.8)	(3.9)	2.2	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂･雲母･赤色粒･海綿骨芯･土丹粒を含むやや粗土　色調:橙色　焼成：良好
10		かわらけ	(7.8)	(4.8)	2.3	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂多・雲母多・赤色粒・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
11		かわらけ	(8.4)	(4.5)	2.4	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：橙色 焼成：良好
12		かわらけ	7.4	4.1	2.35	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好　備考：灯明皿
13		かわらけ	11.2	6.5	3.2	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　色調：黄橙色 焼成：良好
14		かわらけ	(13.0)	(6.8)	3.5	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質やや粗土　色調：橙色 焼成：やや甘い
15		かわらけ	(13.0)	(6.9)	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切　胎土：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質良土　色調：橙色　焼成：良好
16		かわらけ	(13.3)	(8.9)	3.5	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂･雲母･赤色粒･海綿骨芯･土丹粒･礫を含む粗土　色調:黄橙色 焼成：良好
17		かわらけ	(13.2)	(7.8)	3.7	ロクロ成形・外底回転糸切・板状圧痕　胎土：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　色調：橙色 焼成：良好
18		かわらけ	(12.9)	(7.9)	3.4	ロクロ成形･外底回転糸切　胎土:微砂･雲母･赤色粒を含む粉質気味良土　色調:橙色 焼成:良好
19		銅銭	外径2.4	内径2.0		完形　天聖元寶　初鋳年1023　北宋　楷書
20		銅銭	外径2.4	内径1.85		完形　祥符元寶　初鋳年1008　北宋　行書
21		白磁 口兀皿		(4.5)	1.5	ロクロ成形　素地：白色　黒色粒を含む精良緻密土　釉調：青味灰白色半透明釉を薄く施釉、口唇部露胎　焼成：堅緻
22		常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片			輪積み成形　胎土：黄褐色　黒色粒・白色粒・長石を含む　色調：褐色　焼成：良好
23		常滑 広口壺	口縁部片			輪積み成形　胎土：灰色　黒色粒・白色粒・長石・石英を含む　色調：黒灰色　焼成：良好
24		常滑 甕	胴部片			輪積み成形　胎土:灰色　黒色粒･白色粒　色調:内面褐色･外面自然降灰により灰褐色　焼成:良好　　備考：胴部外面に正方格子のスタンプ文
25		土器質 浅鉢型火鉢	口縁部片			輪積み成形　内外面横位ナデ　胎土：橙色　微砂・赤色粒・白色粒・を含む器質　色調：灰黒色　焼成：軟質
26		すり瓦			1.5	内外面ナデ→離れ砂付着　胎土:灰色　砂粒･黒色粒･白色小石粒を含む　色調:灰色　焼成:硬質　備考：瓦転用品
27		巴文鐙瓦	瓦当径（12.1）			外区内縁に珠文を配す左廻り巴文　胎土：灰橙色　砂粒・白色粒・良土　色調：灰色　焼成：軟質　備考：永福寺Ⅲ期以降
28		剣頭文宇瓦	瓦当幅4.8			陽刻の上向き剣頭文・界線を設け、中心に左回りの巴文を配すか？　胎土：灰白色　小石粒が混じり、瓦当面に離れ砂付着　色調：灰黒色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期以降（ＹＮⅡ06）
29		女瓦			1.9	凸面は叩き目不明瞭 凹面は糸切り痕 内外面共に離れ砂付着 胎土：黄灰色 砂粒・小石粒・気泡を含む粗土 色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
30		女瓦			1.7	凸面は三鱗文　離れ砂が叩き締めで打ち込まれている、凹面は糸切り痕→ナデ+離れ砂付着 胎土：灰色 砂粒・白色粒・小石粒を含む粗土 色調：灰黒色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
31		女瓦			1.9	凸凹面共にナデ→離れ砂付着　胎土：赤褐色 砂粒・赤色粒・白色粒・小石粒を含む粗土　色調：灰褐色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅲ期
32		女瓦			2.2	凸面は斜格子叩き目、凹面は縦位ナデ→内外面共に離れ砂付着　胎土：灰白色 砂粒・白色粒・小粒・気泡を含む粗土　色調：灰色　焼成：硬質　備考：永福寺Ⅱ期

出土遺物破片数表

遺構No.	かわらけ（大）	かわらけ（小）	手づくね（大）	手づくね（小）	手づくね・白かわらけ	青磁蓮弁文碗	瀬戸壷	渥美甕	常滑甕	常滑壷	常滑片口鉢Ⅰ類	常滑片口鉢Ⅱ類	山茶碗	男瓦	女瓦	宇瓦	鐙瓦	役瓦	鬼瓦	火鉢	木製品	土師坏	土師甕	ロクロ土師器	須恵坏身	須恵坏蓋	須恵壷甕瓶類	灰釉陶器碗	灰釉陶器壷甕瓶類	緑釉陶器
1															1															
2														1	8		1													
11	1	2		1					11						3															
18														1																
19																1														
29															1															
49	3								1																					
55															1															
62															1															
68	2					1																								
72															1															
79														1	2															
80															1															
81														12	19	2	1			1										
82	118	16	14	1					26		1											1								
87															1															
90	1		4	1											1															
106															1															
107	5		3																											
108															1															
109	3		1	1					6																					
110	39	2	3	2					8																					
112	72	1	25	2					36				1	1									1							
113	21		6	1					9			1		1																
116	3		1																											
117	2		1						1	1			1																	
119															1															
120	1																													
126																							1							
132			1	2					1				1																	
137	2	1																												
140	10	7	3						10																					
142	2		1																											
147	27	20	6	3					10													2	3							
148																					5									
153	1	2							1																					
154									1																					
156	1				1																									
157	1								1																					
161																1														
162	7		5						7				1	2	1					1			2		1		3	1		
165	2		4	1					5														2							
172																						2	3							
174																						1	1				1			
175																							1							
180																							1							
185																						2	2							
187																						4								
188																						1	2							
192																						2			1					
195																						1	5				1			
197																							1							
198																						1								
200																						1	1							
201																						1								
202																							4							
203																							2							
204																						3								
205																							3							
206																							1							
207																							1							

出土遺物破片数表

遺構No.	かわらけ（大）	かわらけ（小）	手づくね（大）	手づくね（小）	手づくね・白かわらけ	青磁蓮弁文碗	瀬戸壷	渥美甕	常滑甕	常滑壷	常滑片口鉢Ⅰ類	常滑片口鉢Ⅱ類	山茶碗	男瓦	女瓦	宇瓦	鐙瓦	役瓦	鬼瓦	火鉢	木製品	土師坏	土師甕	ロクロ土師器	須恵坏身	須恵坏蓋	須恵壷甕瓶類	灰釉陶器碗	灰釉陶器壷甕瓶類	緑釉陶器
208																							3							
210																							5							
211																							1	1						
216																						3			1					
217																							1							
218																								3						
219																						2								
177																							1							
222																							2							
223																							2							
224																							2							
225																							1							
226																							2							
227																							11							
229																							1							
230																							1							
231																							2							
232																						2								
233																							2							
235																						4	1							
236																						1								
237																						1	4							
241																							1							
247																						1								
249																							2							
250																									4					
254	1																					3	1							
256																							2							
257																										1				
258																							3							
259																							1	1		1				
260																						1								
262																						3	8		1					
263																						2	12		2					
267		2																				2	4				1			
268																						1	6							
270																							2							
273		1																				1								
277																						2	4		1					
280																							1							
281																						2	1	1						
282																							1							
283	1																					1	4							
285																						1								
291																						1	3							
293																						1								
294																						1								
295																							1							
296																							1							
297																						1								
300																								1						
301																								1						
303																						2	1		1		1			
305																						1	2			1	1			
309																							2							
313																						1	4							
314																							3		1					
315																						1								
316																							1							
317																						3								
318																						1								

出土遺物破片数表

遺構No.	かわらけ（大）	かわらけ（小）	手づくね（大）	手づくね（小）	手づくね・白かわらけ	青磁蓮弁文碗	瀬戸壷	渥美甕	常滑甕	常滑壷	常滑片口鉢Ⅰ類	常滑片口鉢Ⅱ類	山茶碗	男瓦	女瓦	宇瓦	鐙瓦	役瓦	鬼瓦	火鉢	木製品	土師坏	土師甕	ロクロ土師器	須恵坏身	須恵坏蓋	須恵壷甕瓶類	灰釉陶器碗	灰釉陶器壷甕瓶類	緑釉陶器
319																						1	1							
322																							1							
327																							1							
331																						4	6				2			
332			13	2																		16	37							
334																							1							
338																						10	27							
339																						4	12				2			
340																						1	1							
342																							2				1			
343																							1							
345																						2	2							
347																							3							
352																						1								
355																							1							
第1面面上	103	21	11				3		37			4		18	48		5			2			1							
第1面構成土	182	7	31	3			1		53			2		4	14	1	1	1					2							
第2面面上	267	13	21	6	1				78			4		2	17												1		2	
第2面構成土	13	4							6						2															
基壇状遺構	226	20	6	1			1		88		1	1		1	4								2				1			
第3面面上	137	7	51	5				2	40		2		1	1									3				2			
第3面構成土	6	4					2		8				2									7	2	4	1		4			
第4面面上		2																				21	13		2		2			
第4面構成土																						4	18				1			1
第5面面上		9																				29	46		1	2	1			
第5面構成土																						4	6							
焼土部精査時																							3							
試掘坑深堀															1							2	2	1	1					
廃土山	3	3	1						12						3							2	3							

◀荏柄天神社

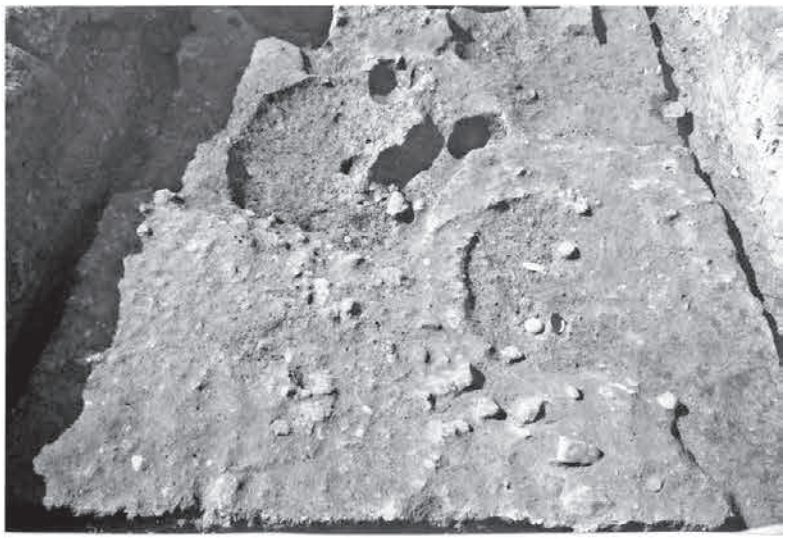
第１面全景（北から）▶

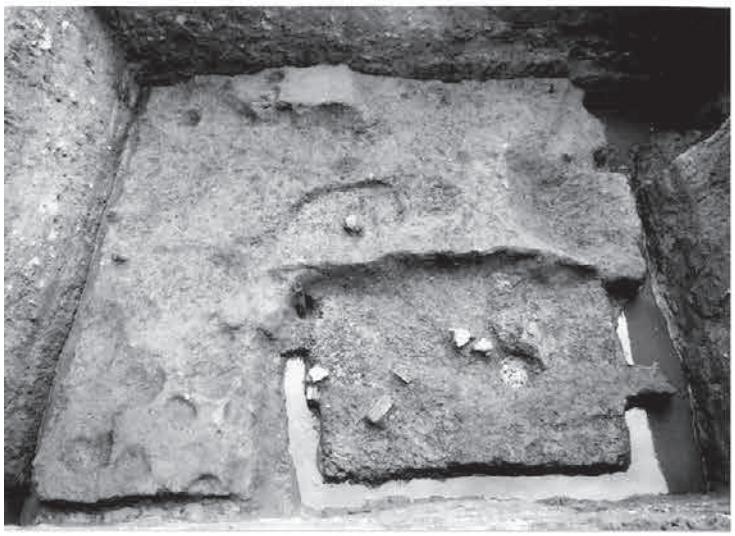
◀第１面調査区東側遺構群（北から）

▲第１面遺構82（南から）

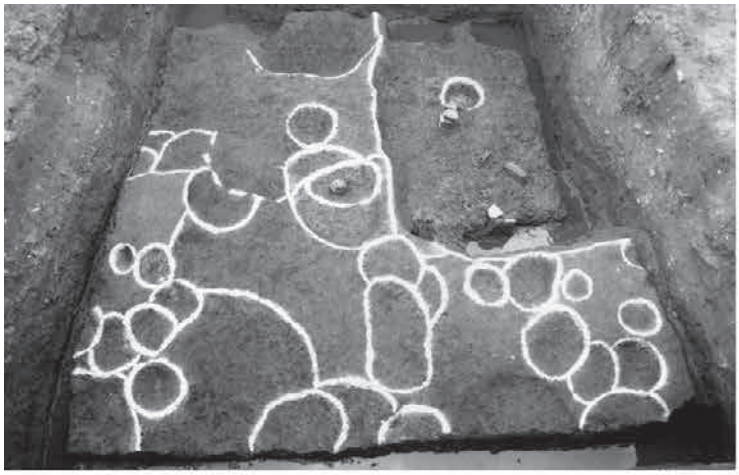
▲第１面遺構62　鬼瓦出土状況（西から）

第２面全景（東から）▶





◀第３面全景（北から）



◀第３面全景（東から）

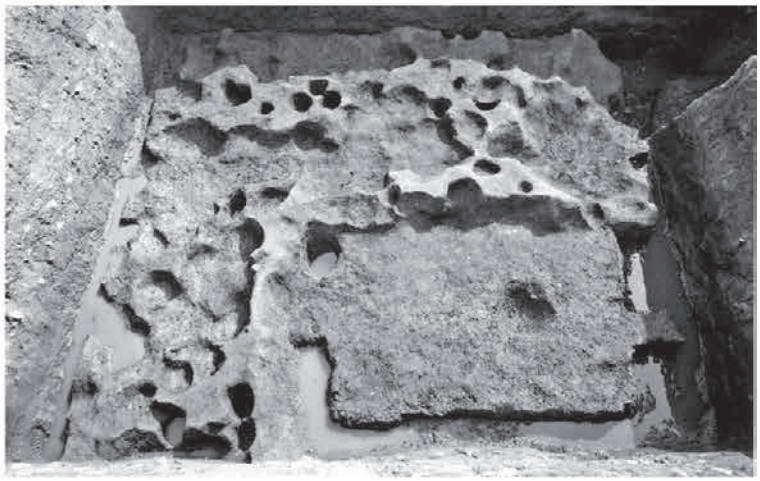
第３面遺構162▶
完掘状況（北から）

◀第３面遺構162
板草履出土状況（北から）

第３面遺構162▶
南東隅検出束柱（西から）

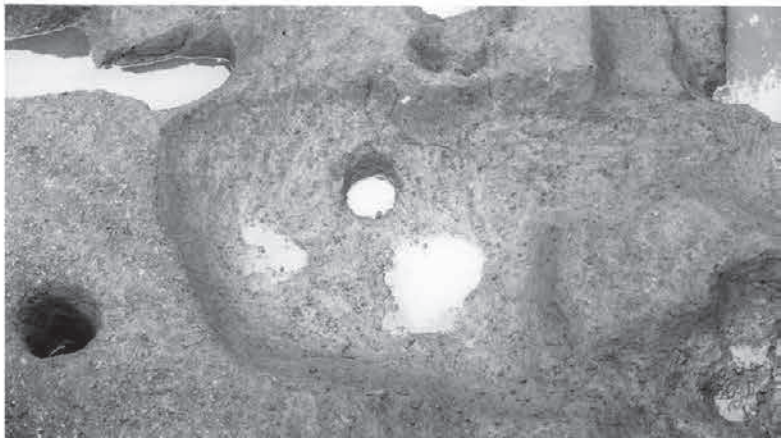
◀第３面遺構136
礎板検出状況（北から）

第４面全景（北から）▶



◀第５面全景（北から）

第５面遺構346▶
完掘状況（南から）



◀第５面遺構335
完掘状況（南から）

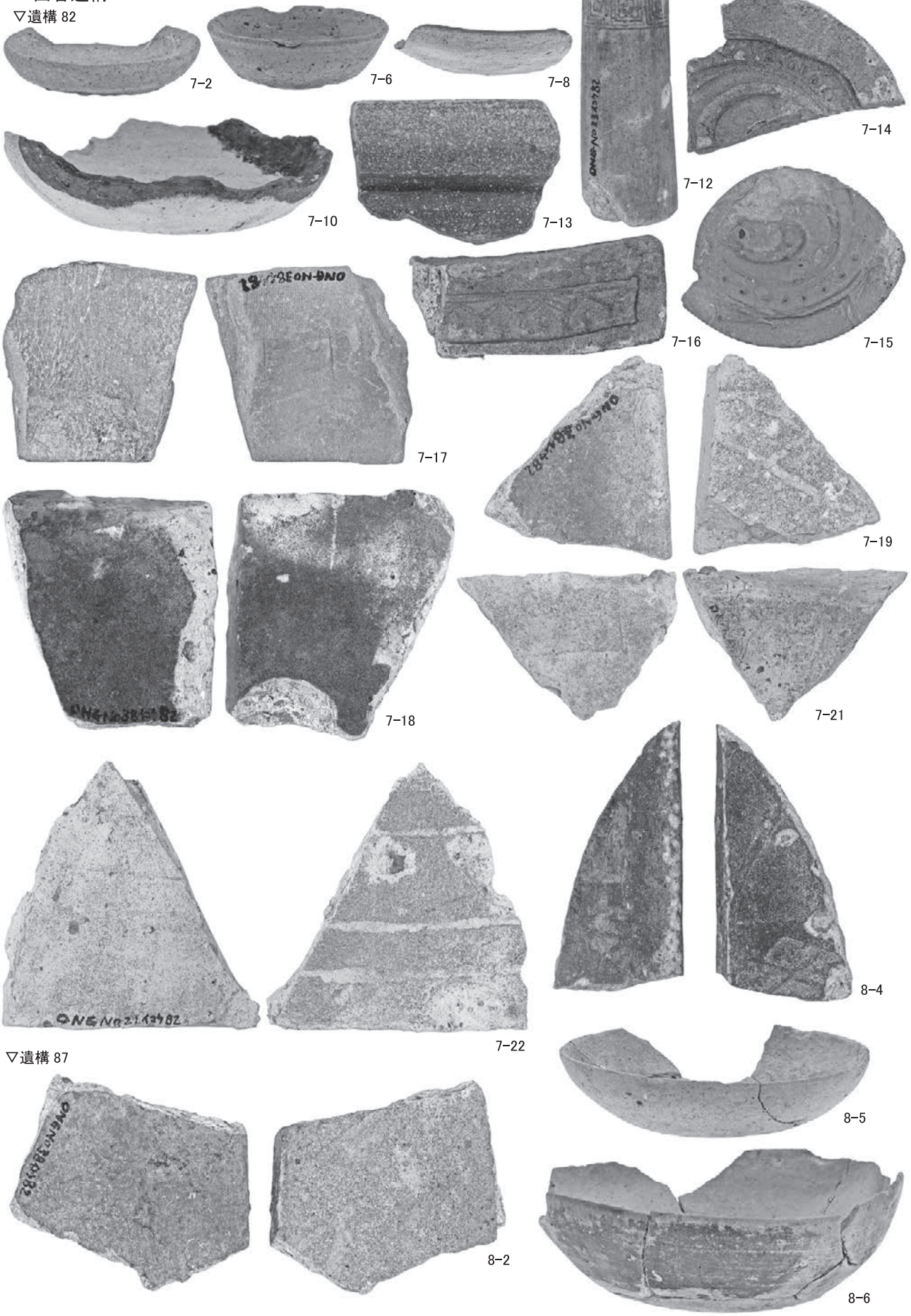
第５面遺構331・338・340▶
完掘状況（東から）

◀第６面全景（東から）

遺物写真図版 1

1 面各遺構

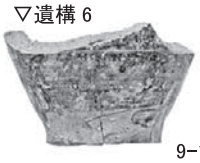
▽遺構 82



▽遺構 87

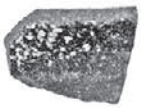
１面各遺構

▽遺構 6



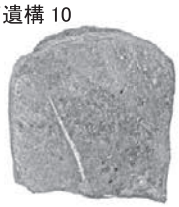
9-1

▽遺構 8

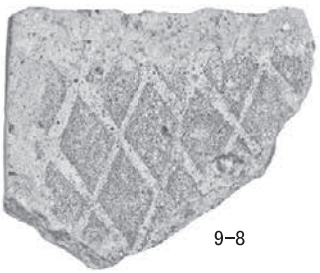


9-2

▽遺構 10



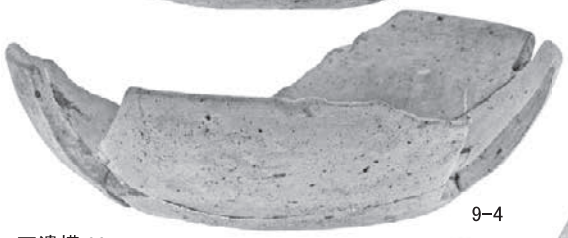
9-5



9-8

▽遺構 9

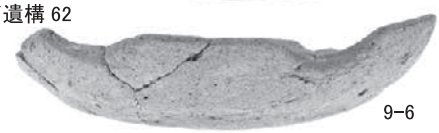
9-3



9-4

9-9

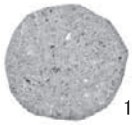
▽遺構 62



9-6

9-7

▽遺構 18



10-1

▽遺構 21

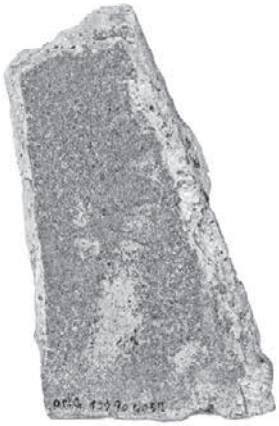
10-2

▽遺構 29

10-5

10-6

▽遺構 90



10-3

10-12

▽遺構 47

10—9

10-10

10-11

▽遺構 40

10-7

▽遺構 92

10-14

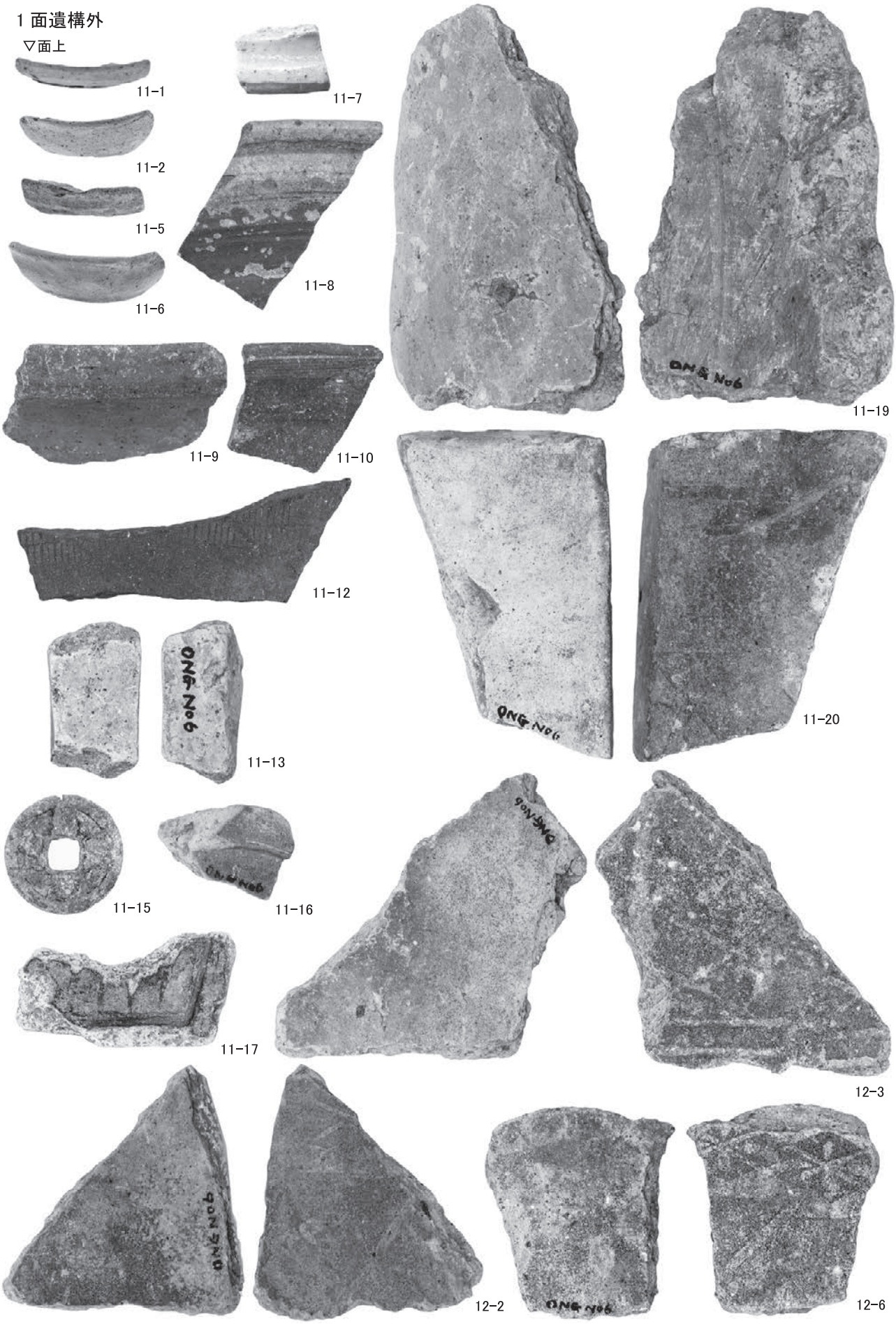
▽遺構 103

10-15

遺物写真図版３

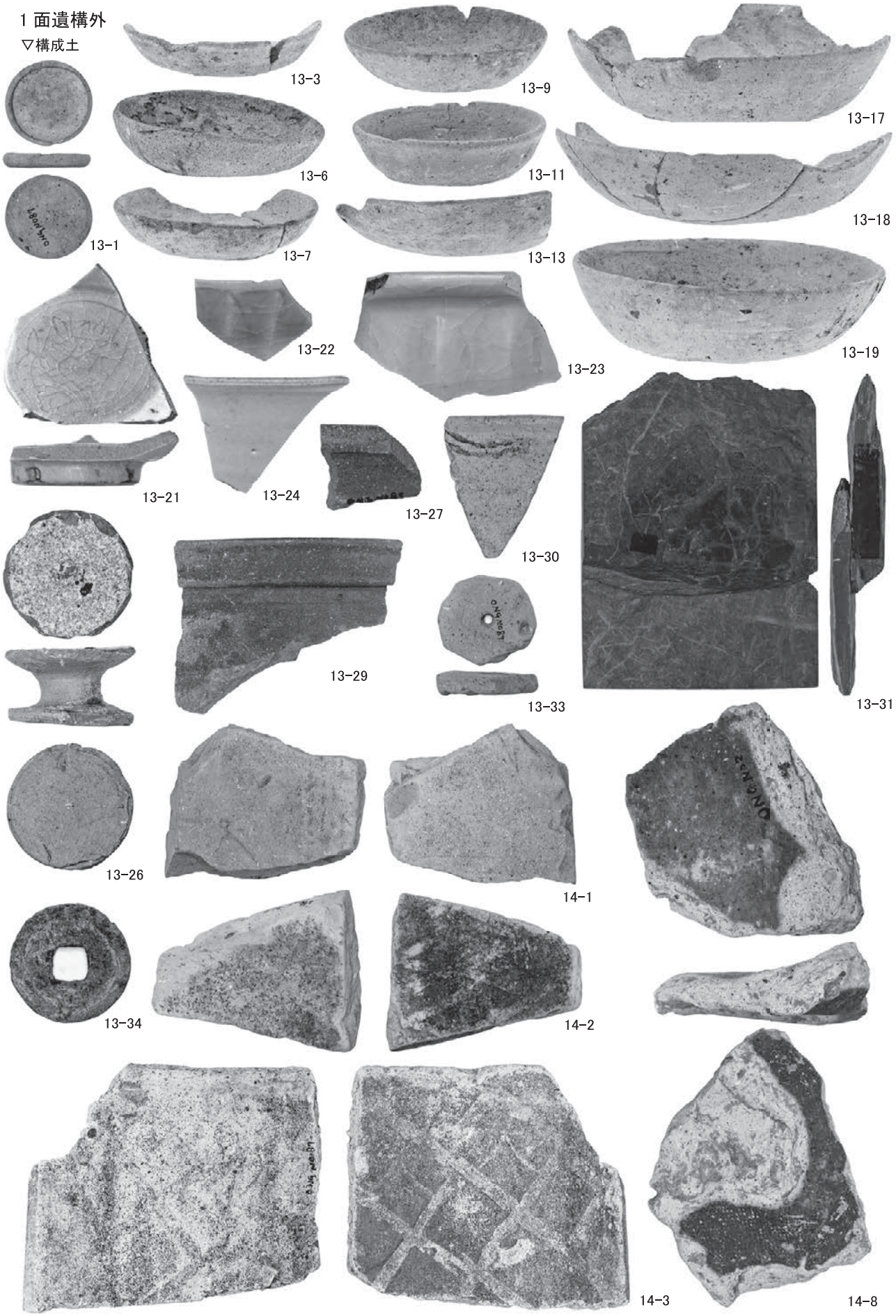
１面遺構外

▽面上



１面遺構外

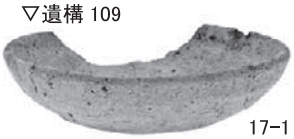
▽構成土


13-1
13-3
13-6
13-7
13-9
13-11
13-13
13-17
13-18
13-19
13-21
13-22
13-23
13-24
13-27
13-29
13-30
13-31
13-33
13-34
14-1
14-2
14-3
14-8

遺物写真図版５

2 面各遺構

▽遺構 109


17-1

17-2

17-3

▽遺構 110

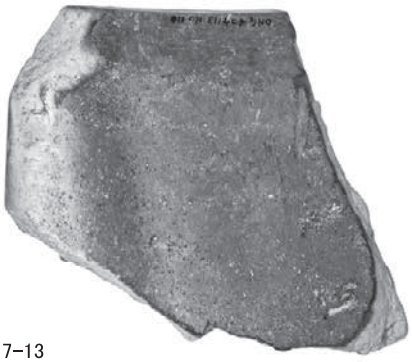
17-4

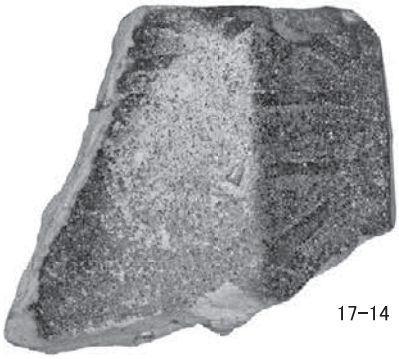
17-5

17-6

▽遺構 111

17-9




17-14

▽遺構 113

17-10

17-11

17-13

▽遺構 112a

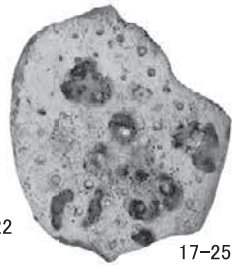
17-15

17-16

17-21

17-22

▽遺構 112b


17-25

17-18

17-23

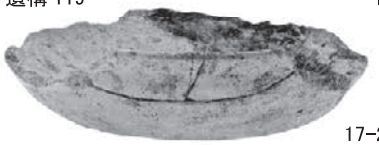
17-24

▽遺構 114

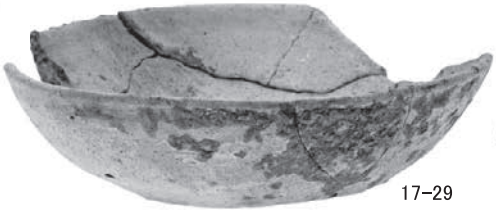
17-26

17-19

▽遺構 119

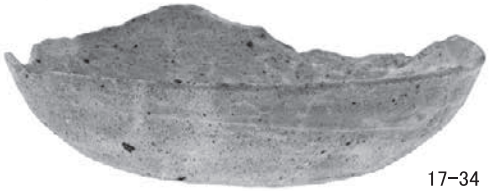

17-27

17-20


17-29

17-31

▽遺構 126


17-34

17-30

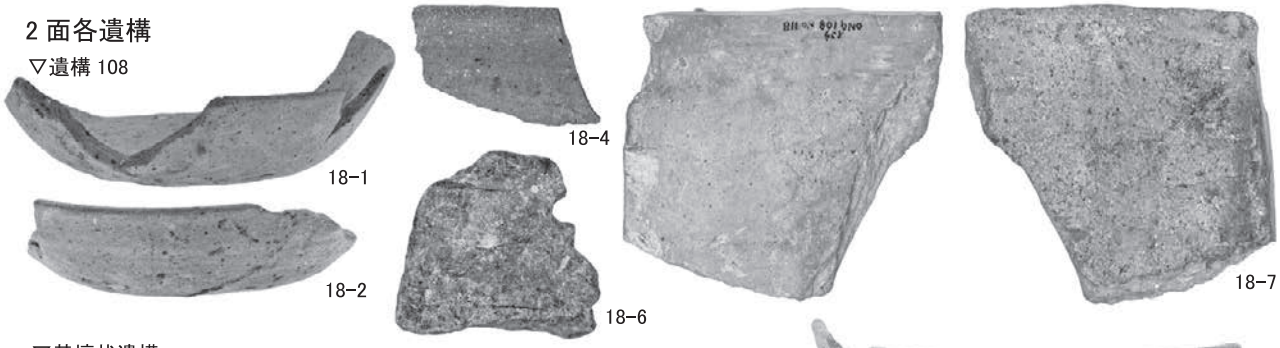
17-35

17-36

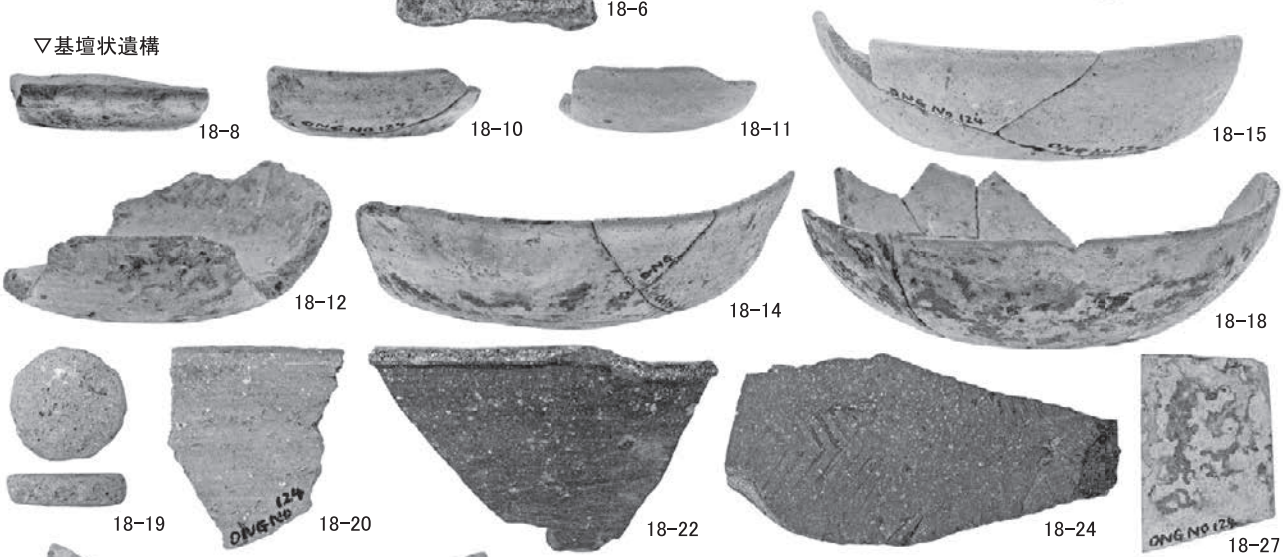
17-33

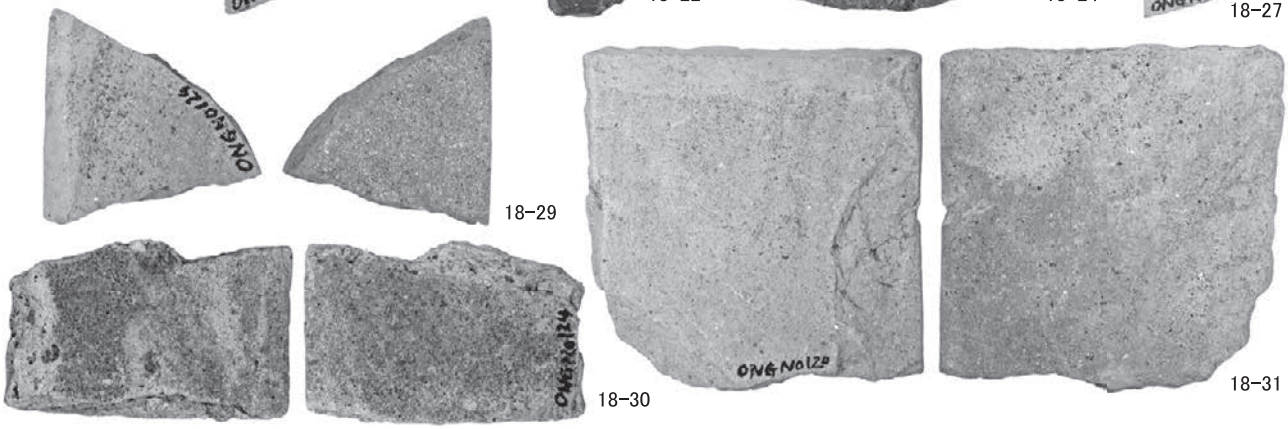
2面各遺構

▽遺構108



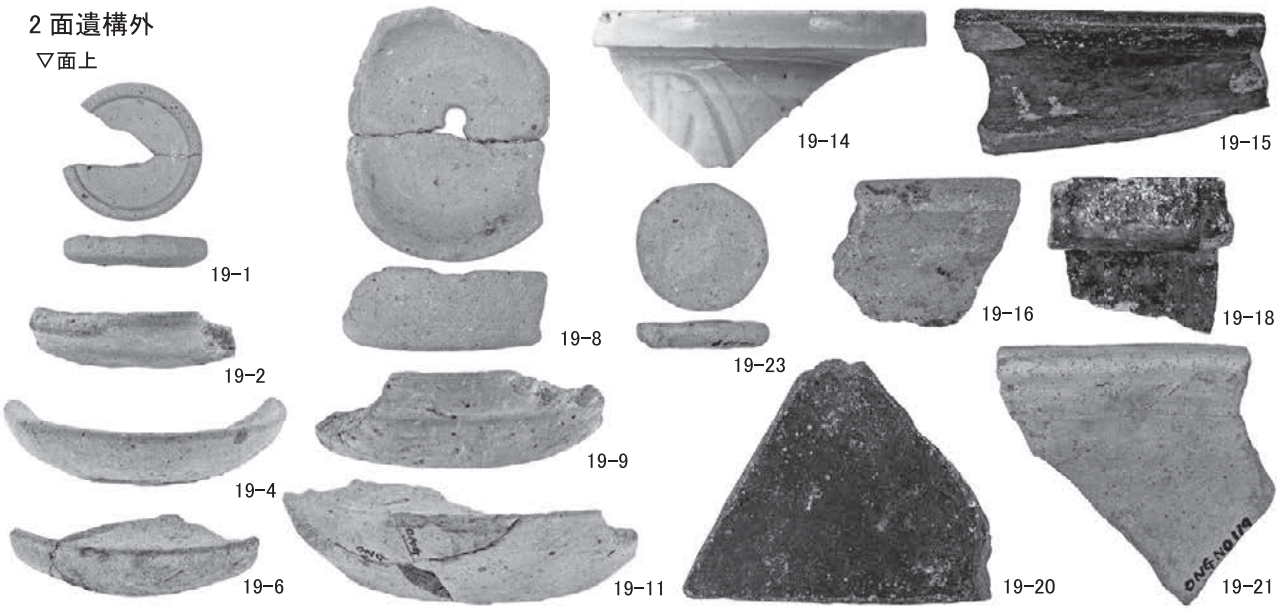
▽基壇状遺構





2面遺構外

▽面上

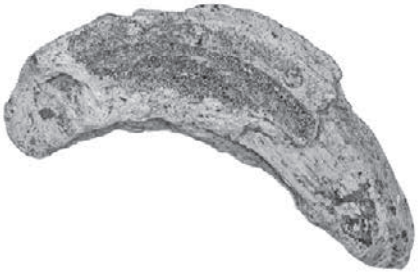


遺物写真図版７

2 面遺構外

▽面上

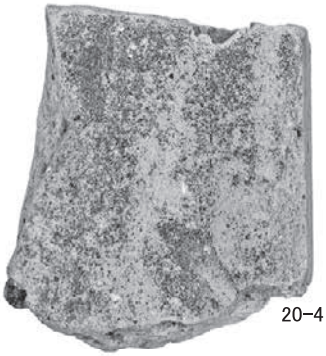
19-26



19-25

19-27

20-1



20-4

20-6

▽構成土

21-1

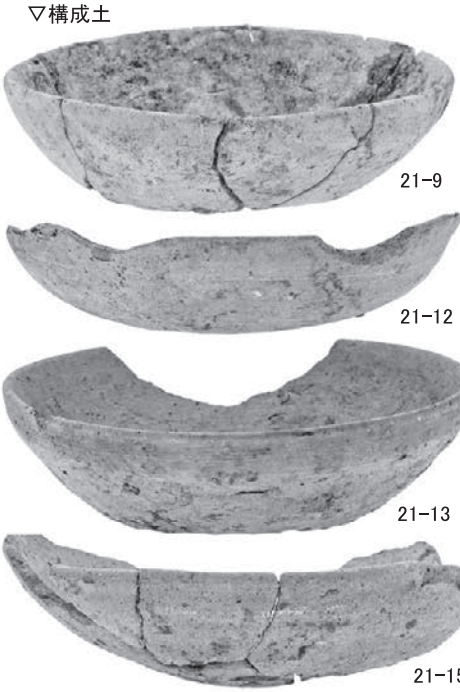
21-3

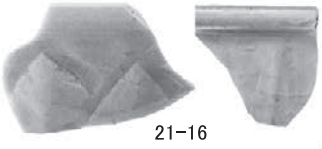
21-5

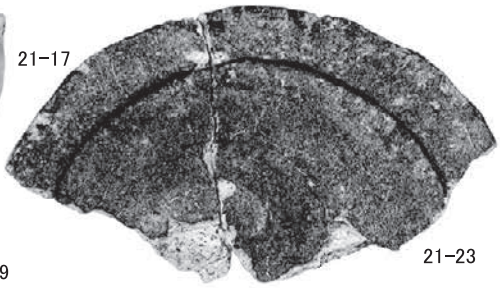
21-8

2 面遺構外

▽構成土


21-9


21-16


21-17

21-19

21-12

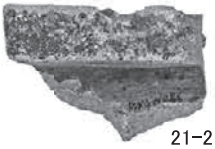
21-13

21-15

21-20

21-24

21-22


21-21

3 面各遺構

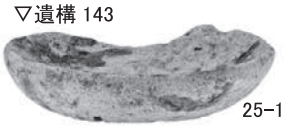
▽遺構 141

25-6

▽遺構 147

25-14

▽遺構 143


25-18

▽遺構 158

25-22

▽遺構 158

25-25

▽遺構 134

25-7

25-15

25-19

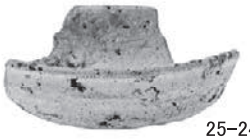
25-23

▽遺構 150

25-13

▽遺構 153

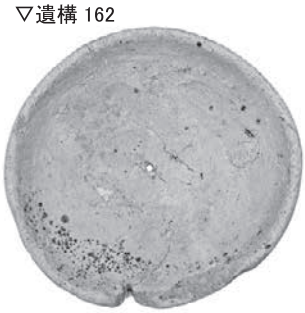
25-20


25-24

▽遺構 161

26-6

▽遺構 162



26-9

26-8

26-10

26-14

26-18

26-21

26-26

26-7

26-16

遺物写真図版９

3 面各遺構

▽遺構 162

27-1　27-5　27-7

27-8

27-14

27-22

▽遺構 170

28-2

▽遺構 165

28-1

3 面遺構外

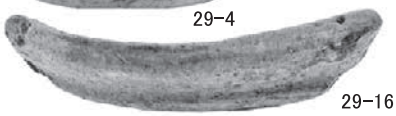
▽面上

29-1

29-10

29-14

29-4



29-16

29-22

29-24

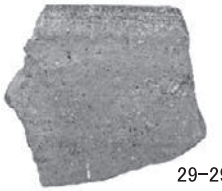
29-18

3 面遺構外

▽面上

29-26

29-27


29-29

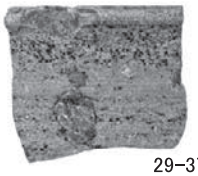
29-30

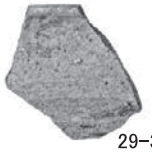
29-33

29-31

29-36

29-35


29-37


29-38

29-39

▽構成土

29-41

29-42

29-43

4 面各遺構

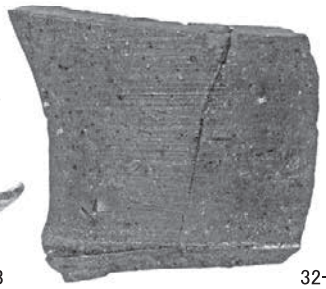
▽遺構 190

32-2

▽遺構 194

32-3

▽遺構 195


32-4

32-5

▽遺構 192

32-7

▽遺構 216

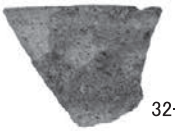
32-6

32-8

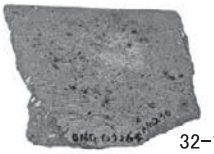
▽遺構 250

32-9

▽遺構 256


32-10

▽遺構 264


32-11

▽遺構 267

32-12

4 面遺構外

▽面上

32-15

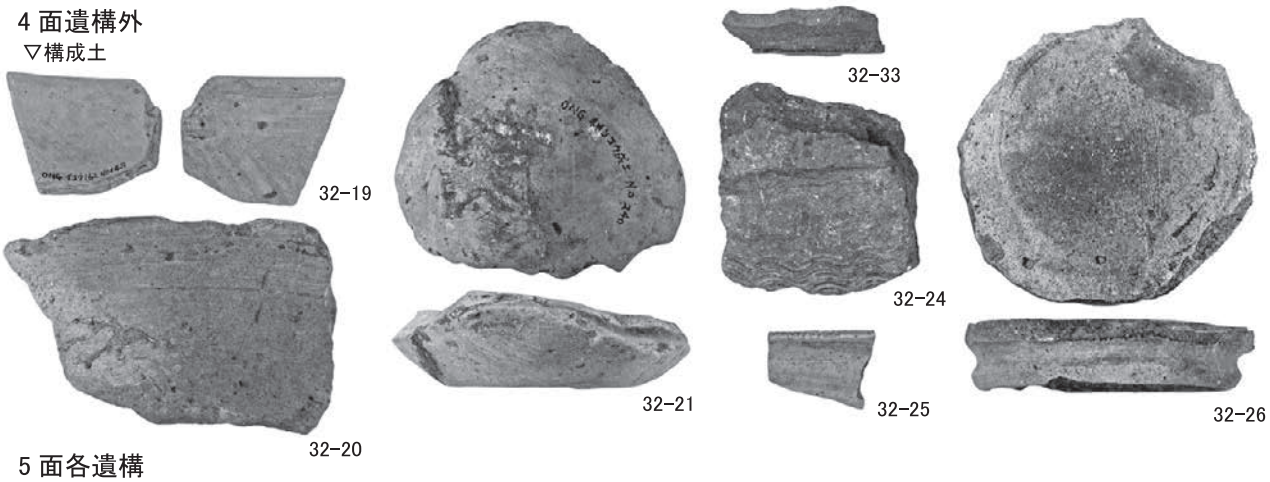
32-16

32-17

遺物写真図版11

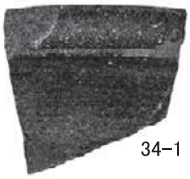
4面遺構外

▽構成土

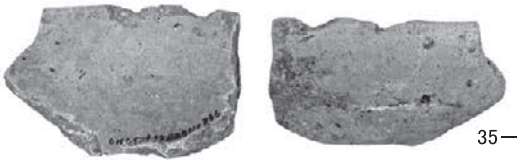


5面各遺構

▽遺構 345



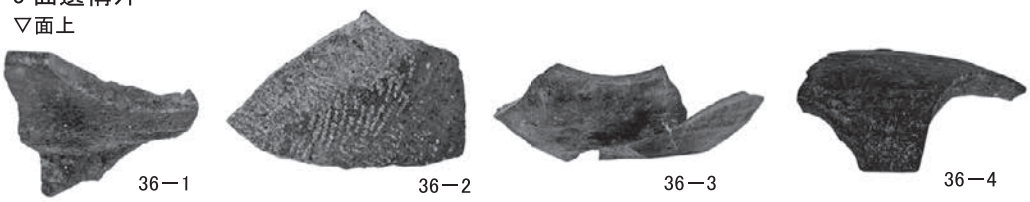
▽遺構 338



▽遺構 340

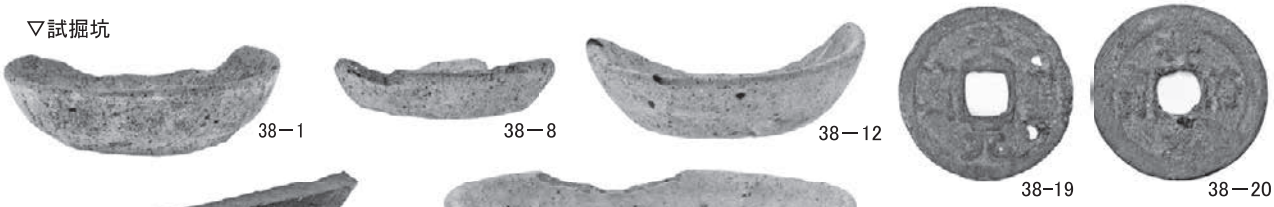
5面遺構外

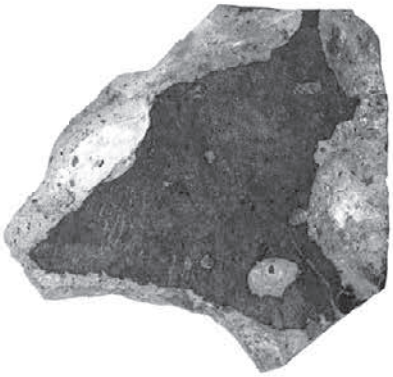
▽面上

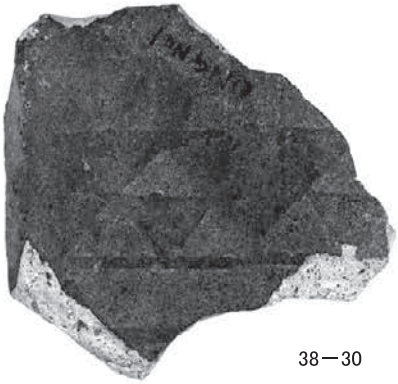


▽構成土

▽試掘坑







名越ヶ谷遺跡（No.231）

大町四丁目 1858 － 4

例　言

1．本報は鎌倉市大町四丁目１８５８－４地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。

2．発掘調査は個人専用住宅に係る建築範囲約１０、５０㎡を対象とし、平成１８年5月1日から平成１８年6月7日にかけて実施した。

3．現地での調査体制は以下の通り。

担当者	伊丹まどか
調査員	宇都洋平・本城裕
作業員	河原龍雄・中須洋二・永井隆三郎（社）鎌倉市シルバー人材センター

4．本報作成は以下の分担で行った。

遺構図版作成	田畑衣理・渡辺美佐子
遺物実測	田畑衣理・渡辺美佐子
遺物図版作成	田畑衣理・渡辺美佐子
観察表	田畑衣理
遺構写真	宇都洋平・鍛冶屋勝二
遺物写真	須佐仁和
写真図版作成	田畑衣理
執筆・編集	松吉大樹（歴史的環境） 伊丹まどか

5．出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が管理している。

6．本報図版の遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。
遺構全測図：１／６０　個別遺構図：１／４０　実測遺物図：１／３　銭：１／１
なお各挿図にはスケールを表示してある。

7．検出した遺構の計測値・実測遺物観察表および、実測できなかった遺物の破片数は表にまとめて掲載した。本文中では数字のみ「例：かわらけ4」と個体数を表示した。

8．出土した遺物及び、調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

9．発掘調査及び報告書作成に関して馬淵和雄氏よりご教授、ご協力を賜りました。記して深く感謝いたします。

目　次

本　文　目　次

第一章　調査地点の位置と歴史的環境 …… 145

1．歴史的環境（図1）
2．遺跡位置とグリッド配置図（図2）
3．堆積土層（図３）

第二章　検出した遺構と遺物 …… 151

第１面の遺構と遺物（図４・図５）
第２面の遺構と遺物（図６）
第３面の遺構と遺物（図７・図８）
第４面の遺構と遺物（図９）
第５面の遺構と遺物（図10）
第６面の遺構と遺物（図11）
第７面・第８面の遺構と遺物（図12）

第三章　まとめ …… 165

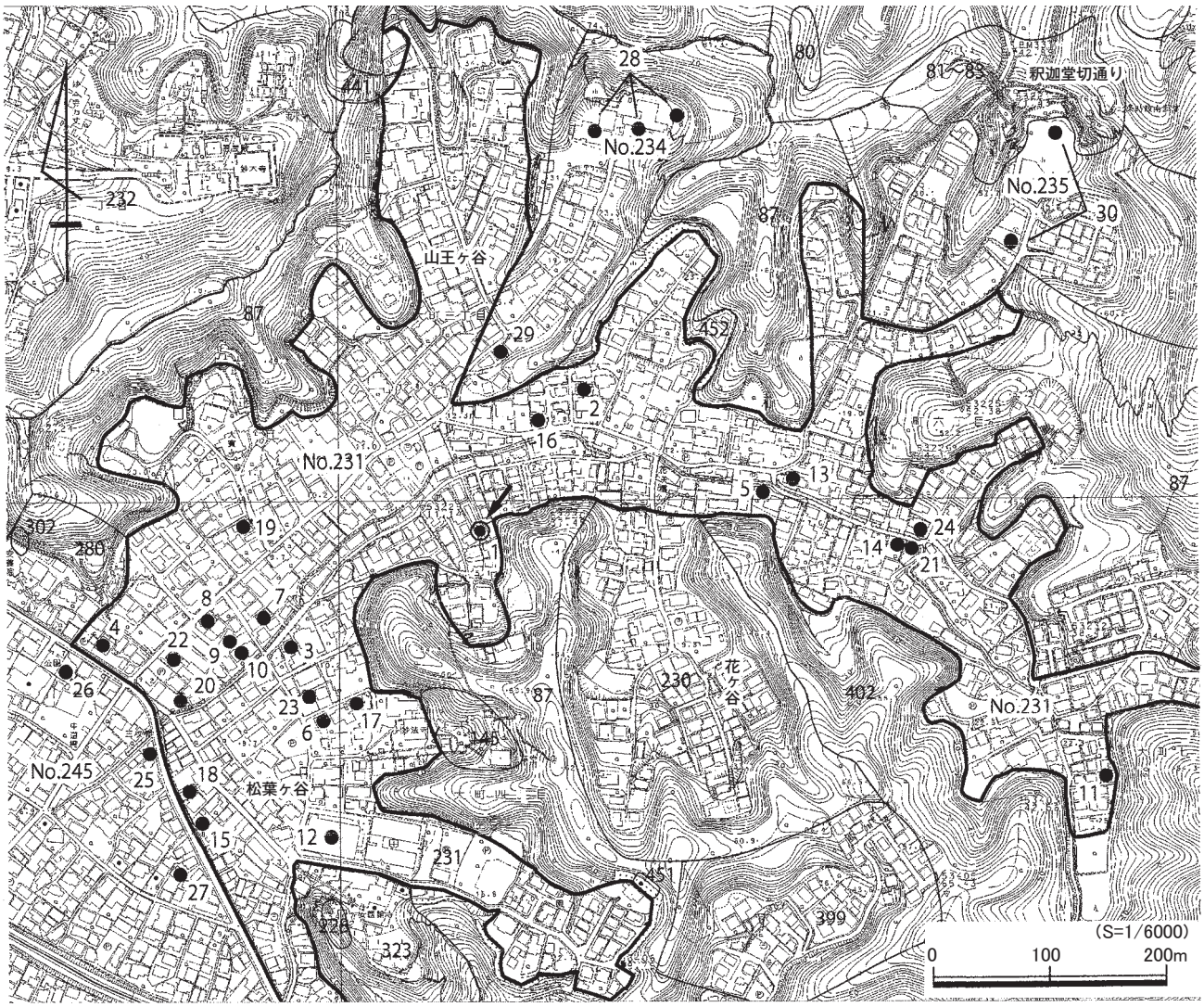
遺構計測表
出土遺物観察表
出土遺物破片数表

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺遺跡 …… 144
図２　遺跡位置図・国土座標とグリッド配置図… 148
図３　調査区堆積土層図 …… 149
図４　第１面（全測図・個別遺構図） …… 151
図５　第１面（遺構・面上・構成土出土遺物）…… 152
図６　第２面（全測図・個別遺構図・出土遺物）… 155
図７　第３面（全測図・個別遺構図・遺構48・
　　遺構49出土遺物） …… 156
図８　第３面（個別遺構図・出土遺物） …… 158
図９　第４面（全測図・個別遺構図・出土遺物）… 160
図10 第５面（全測図・個別遺構図・出土遺物）… 161
図11 第６面（全測図・出土遺物） …… 162
図12 第７面・第８面確認トレンチ（全測図）…… 163
図13 廃土山・表採出土遺物 …… 164

図　版　目　次

図版１ …… 172
　第１面全景（北から）
　第１面調査区南端部遺構群
　第２面全景（遺構41完掘後　北から）
図版２ …… 173
　第２面遺構37（東から）
　第３面全景（南から）
　第３面全景（北から）
　第３面遺構49（西から）
図版３ …… 174
　第４面全景（南から）
　第４面遺構54・55・56・77・78（西から）
　第４面遺構74（西から）
　第５面全景（北から）
図版４ …… 175
　第６面全景（北から）
　第６面遺構118礎板検出状況（南から）
　第６面青白磁蓋出土状況（西から）
　調査区東壁土層堆積状況
図版５ …… 176
図版６ …… 177



○名越ヶ谷遺跡（No.231）

1. 大町四丁目1858番4地点（本調査地点）
2. 大町三丁目1367番4地点　玉林1986『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書（以下、市緊急報告書)2 』鎌倉市教育委員会（以下、省略）
3. 大町四丁目1880番6外地点　田代ほか1995 『市緊急報告書11ー1 』
4. 大町三丁目1217番1地点　菊川1995『市緊急報告書11ー1 』
5. 大町四丁目1736番2外地点　田代ほか1998『市緊急報告書14ー1 』
6. 大町四丁目1888番地点　汐見ほか2000『市緊急報告書16―2 』
7. 大町三丁目1826番9地点　手塚ほか2002『市緊急報告書18―2』
8. 大町三丁目2356番3地点　宮田ほか2001『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』名越ヶ谷発掘調査団・宮田事務所
9. 大町三丁目2356番11地点　宮田2003『市緊急報告書19』
10. 大町三丁目2356番10地点　福田2003『市緊急報告書19』
11. 大町七丁目1615番8地点　森2004『市緊急報告書20―1』
12. 大町四丁目1901番16外地点　宮田2003『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書―医療法人財団額田記念会 老健ぬかだ建設に伴う調査―』名越ヶ谷遺跡発掘調査団・(有)博通
13. 大町六丁目1494番1外地点（宗臺2002年2月調査・未報告）
14. 大町六丁目1708番4地点　汐見ほか2004『市緊急報告書20―2』
15. 大町四丁目2395番2の一部外地点　滝沢ほか2006『市緊急報告書22―1』
16. 大町三丁目1364番1の一部他地点　宮田ほか2004『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書』(有)博通
17. 大町四丁目2406番1地点（田代2005年7月調査・未報告）
18. 大町四丁目1888番の一部地点　山口2012『市緊急報告書22―2』
19. 大町三丁目1230番4外地点（森2006年1月調査・未報告）
20. 大町三丁目2353番2外地点（宇都2007年12月調査・未報告）
21. 大町六丁目1708番23外地点（森2010年5月調査・未報告）
22. 大町三丁目2354番1地点（福田2011年7月調査・未報告）
23. 大町四丁目1884番14地点（山口2012年9月調査・未報告）
24. 大町六丁目1506番11地点（押木2013年4月調査・未報告）

○米町遺跡（No.245）

25. 大町二丁目2411番2地点　福田1989『市緊急報告書5 』
26. 大町二丁目2338番1地点　宮田1999『米町遺跡発掘調査報告書ー大町二丁目2338番1地点ー』米町遺跡発掘調査団・宮田事務所
27. 大町二丁目2404番の一部地点　福田2000『市緊急報告書16ー2』

○名越山王堂跡（No.234）

28. 大町三丁目1340番外地点　斉木1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書ー電通鎌倉研修所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告ー』山王堂跡発掘調査団
29. 大町三丁目1362番1地点　原2013『市緊急報告書29―1』

○大町釈迦堂口遺跡（No.235）

30. 大町六丁目1442番4外　永田史ほか2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』

図１　調査地点と周辺遺跡

第一章　調査地点の位置と歴史的環境

１．歴史的環境（図１）

本調査地点は妙法寺の北東側、釈迦堂切通しへ向かう道筋にあり、「松葉ヶ谷」と「花ヶ谷」の間に位置する。現在の住居表示は「大町」となっているが、中世以来の広義的な地域名称としては「名越」に含まれる。調査地点の遺跡名称「名越ヶ谷」については、『新編相模国風土記稿』に「東方名越町より東南北に亘りて総名とす」とあり、「松葉ケ谷」や「山王ケ谷」、また「六坊ケ谷」や「花ケ谷」などを含む谷戸群を総じて「名越ヶ谷」と称することに由来している。

先述したが、当調査地点は中世以来の名称では「名越」に位置する。「名越」は『吾妻鏡』建久三年（1192）七月十八日条の、北条政子が産所として「名越御館浜御所」に赴いた記事をはじめとして散見され、北条時政は比企能員を名越自亭に招き、仁田忠常・天野遠景に暗殺させ、同邸にて恩賞を与えた（註１）。また「遠州（北条時政）名越亭」で源実朝の元服の儀が行われるなど、北条氏にとって重要な邸宅が存在していたことが伺われる（註２）。この館は北条時政・義時・朝時と相伝され、名越氏を称した朝時の子孫らに伝えられた。浜に近く後方に山を負っているとする記述や（註３）、比企ヶ谷山から見て将軍御所と南北の方角に当たるなど（註４）、場所の特定が叶いそうな記事も見られるが、その具体的な場所については未だ明らかにはされていない。北条義時は「名越山」に山荘をもっており、将軍実朝の和歌会が行われている（註５）。「名越山」は安国論寺や妙法寺の背後から名越切通に連なる山で、頂上は切通付近と考えられ、当調査地点も名越山の西端の麓に位置している。『新編相模国風土記稿』「大町村」には「村東にあり、山頂に登れば南に三浦郡の海浜、西に由比ケ浜、霊山ケ崎等を望み、遠く富岳に対して最勝景なり」とある。中世以来名越地域における重要な山であったと考えられよう。名越には、問注所執事三善康信（善信）亭に文庫があったとされ、三善亭が焼失した際、その後面の山際に構えた文庫も焼亡している（註６）。また康信の子孫である町野康俊・康持の屋敷や武田入道、備前三郎長頼などの御家人が邸宅を有していたことが見られ（註７）、北条氏のみならず多くの人家が立ち並んだ地域であったと推定される。

当調査地点は「松葉ヶ谷」と「花ヶ谷」の間に位置している。「松葉ヶ谷」は、現在の大町・材木座の安国論寺・長勝寺・妙法寺のある谷名で『新編相模国風土記稿』によれば、名越ヶ谷内の支谷とする。建長五年に日蓮が鎌倉で最初に構えた草庵（法花堂・本囿寺）の場所として知られ、安国論寺・長勝寺・妙法寺ともに本国寺旧跡であるとの伝えが残っている（『新編相模国風土記稿』など）。室町期に日澄が撰したと伝える「日蓮聖人註画讃」には「同（建長五）年為諫国主、速自房州移于鎌倉名越松葉谷、栖小庵」とあり、日蓮の当地に於ける足跡が知れるが（註８）、延徳五年（1493）四月廿日付の「結城政朝安堵状」には「名越谷松葉谷法花堂屋地事」とあり、松葉谷法花堂屋地が退転し、鷲宮分と称していたのを結城政朝が正行院に法花堂本国寺屋地として宛行っている（註９）。これらの史料を鑑みると、名越松葉ヶ谷の名称が室町期には定着していたと考えられよう。江戸後期のものと伝える「酉七月一六日京都本囿寺役僧宛松葉ケ谷覚書」には「一唯今松葉ケ谷と申候ハ妙法寺・安国寺之間山畑を申候、然共、往古ニハ自是南東近辺を惣而名越松葉ケ谷と申候様勘へ見申候、北東之山間を蛇ケ谷と申、北之山間を花ケ谷と申候、（中略）惣而松葉ケ谷と申候儀分明ニ御座候」とあり（註10）、「松葉ヶ谷」周辺の状況が詳しく記されている。『新編相模国風土記稿』は、最光寺（現横須賀市野比）や、安穏寺（現横須賀市芦名）もかつて松葉ヶ谷にあったと伝える。正応五年（1292）九月上旬の奥付をもつ「聖教題未詳奥書」に「於南部州

扶桑相州鎌倉松山草庵書写之」とある（註11）。「松山草庵」が「松葉ヶ谷」の古称または別称であるかは未詳だが、一応の可能性を指摘しここに挙げる。

「花ヶ谷」は「松葉ヶ谷」に隣接し、妙法寺の背後にあたる。『新編相模国風土記稿』によると、かつてこの地に足利直冬の菩提寺である慈恩寺（廃寺）があり、境内に数百種の草花が植えられ、人々が遊覧してその花壇を賞賛したことからその名が付けられたと伝える。慈恩寺は白華山と号し、寺名は直冬の法名慈恩寺殿玉渓道昭に由来する。開山は桂堂聞公で、開創年代については未詳。「殿中以下年中行事」によると、毎年正月十六日に住僧が関東公方のもとに参上している。寺の様相は、寺主永貞が応永廿五年（1418）に刻んだ詩板によると（「慈恩寺詩板」伝宗庵旧蔵）、海浜に近く、谷は深く梨・李など多数の花木・奇石・美泉があり、仏殿が軒を連ね、丘上に七層の塔があったらしい。しかし、万里集九の『梅花無尽蔵』に「脚倦不登慈恩塔婆之旧礎」とあることから、文明十八年（1486）頃までには、寺は廃寺となり、塔の礎石のみが残すという状況だったようである。時期は遡るが、元亨三年（1323）に執り行われた北条貞時十三年忌供養に際して、当寺の僧衆五人が参列しているのが見れるが（註12）、この慈恩寺が当寺または前身の寺であったかについては未詳。また、永徳三年（1383）四月十一日付の「関東公方足利氏満御教書写」には、「慈恩寺領武蔵国太田庄花積郷内御厩瀬渡并船事」とあるが（註13）、これについても花ヶ谷の慈恩寺領であるかは不明である。また「花ヶ谷」には慈恩寺意外にも寺が存在していた可能性がある。「鶴岡八幡宮寺供僧次第」には、鶴岡二十五坊の一つ宝蔵坊（海光院）の供僧紹賢が、嘉慶三年（1389）二月に「名越花谷」にあった「西門寺」の別当に任じられたとあり（註14）、また他に木足（束）寺（目足寺・無垢息寺）という禅寺が存在していたが、文安三年（1446）年に円覚寺正続院領内瓜ヶ谷口山上の昭西堂跡の地に移ったとされる（註15）。

当調査区の周辺には妙法寺・安国論寺・大宝寺などの寺院があるが、「名越」には現在は廃寺となった、または移転した寺院の存在を史料から見ることができる。貞永二年五月七日付の「瑜祇経金剛夜叉口決奥書」には「名越西廟堂」の名が見え（註16）、嘉禎三年六月廿二日付の「秘蔵記奥書」には「相州鎌倉名越於蓮花寺午時書了」とある（註17）。他にも「相州鎌倉名越参東陽寺」（註18）、「相州鎌倉名越郷善導寺」（註19）、「名越善勝寺」（註20）、「名越竹鼻清凉寺」（註21）、「名越保寿寺」（註22）、「名越長福寺」（註23）など枚挙に暇がない。

以上、甚だ簡単に当調査区周辺の歴史的環境を概観してきた。中世以来「名越」は鎌倉の南東を防衛する地域であった上に、海浜にも近く、交易や交通の要衝でもあったと考えられている。当調査区の西には大宝寺があるが、当地は新羅三郎義光以来、佐竹氏が屋敷を有していたという伝承が残っている（註24）。また当調査区の北には名越山王堂があり（現在は廃絶）、その谷地の一角には、大友氏の一族である詫磨氏が屋地を有していたと推定されている（註25）。北条氏や三善氏の邸宅が「名越」にあったと先述したが、有力御家人たちが当地域に屋地を有していた状況と、寺院の多さを鑑みると、当調査区が歴史的に重要な場所に位置していると考えられるのである。（松吉大樹）

【註】

（註１）『吾妻鏡』建仁三年九月二日条、同九月六日条（以下、断りのない限り『鏡』と略す）。

（註２）『鏡』建仁三年十月八日条

（註３）『鏡』安貞二年十二月十二日条。

（註４）『鏡』正嘉元年八月十八日条。

（註５）『鏡』建永元年二月四日条。同正嘉二年五月五日条には、名越（北条）時章の山荘が新善光寺辺りにあったという記述が見られるが、義時の山荘と同じものを指すかどうかについては未詳。

（註６）『鏡』承元二年正月十六日条。尚、大町四丁目1736番２外地点（田代郁夫ほか『鎌倉市埋蔵文化財緊急報告書14（第１分冊）』鎌倉市教育委員会、1998）を、三善康信邸と想定する説もあるが、詳細については未詳（「第18回東勝寺名越山王堂長勝寺外」『鎌倉－鎌倉史蹟めぐり会記録－』鎌倉文化研究会、1972、25～32頁）。

（註７）『鏡』寛喜三年三月廿五日条、延応元年十二月十三日条、康元元年十一月廿六日条。

（註８）『続群書類従９上』。

（註９）「長勝寺文書」（『神奈川県史資料編３下』6400号文書）。

（註10）「妙本寺文書」。

（註11）「金沢文庫文書」（『神奈川県史資料編２』）。

（註12）「北条貞時十三年忌供養記」（『神奈川県史資料編２』）。

（註13）「相州文書所収鎌倉郡我覚院文書」（『神奈川県史資料編３上』4918号文書）。

（註14）「鶴岡八幡宮供僧職次第」（『鶴岡叢書』）。

（註15）「古教妙訓証文」（「黄梅院文書」『神奈川県史資料編３下』6049号文書）

（註16）『神奈川県史資料編１』321号文書

（註17）『神奈川県史資料編１』327号文書

（註18）「梵篋印奥書」（「金沢文庫文書」『神奈川県史資料編１』633号文書）

（註19）「倶舎論釈頌疏義鈔巻上奥書」（『神奈川県史資料編２』1073号文書）

（註20）「菩提心論私見聞」（「金沢文庫文書」12）

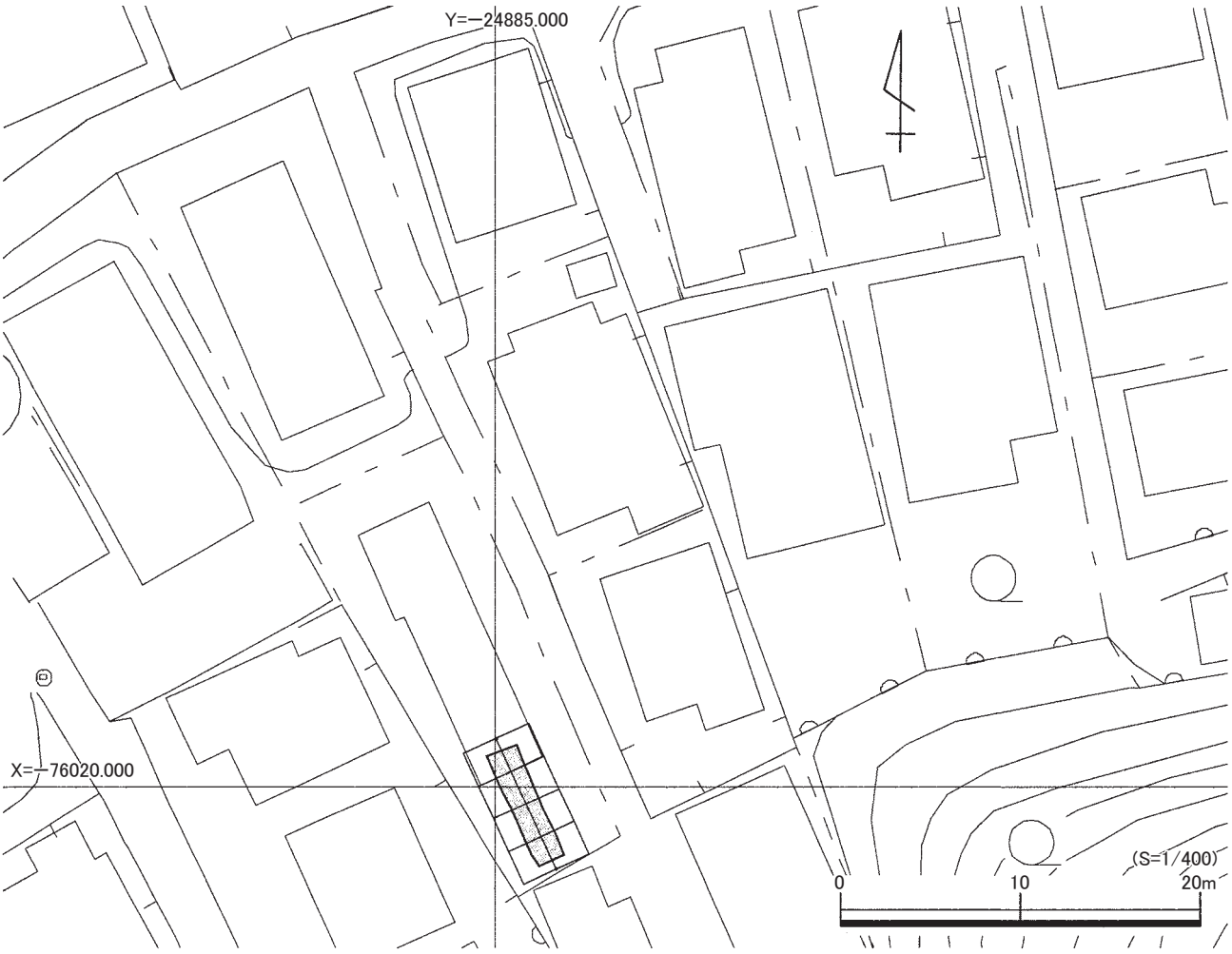
（註21）「教誡儀鈔奥書」（「金沢文庫文書」『神奈川県史資料編２』1853号文書）

（註22）「称名寺授與灌頂記」（「金沢文庫古文書」『神奈川県史資料編３上』3743号文書）

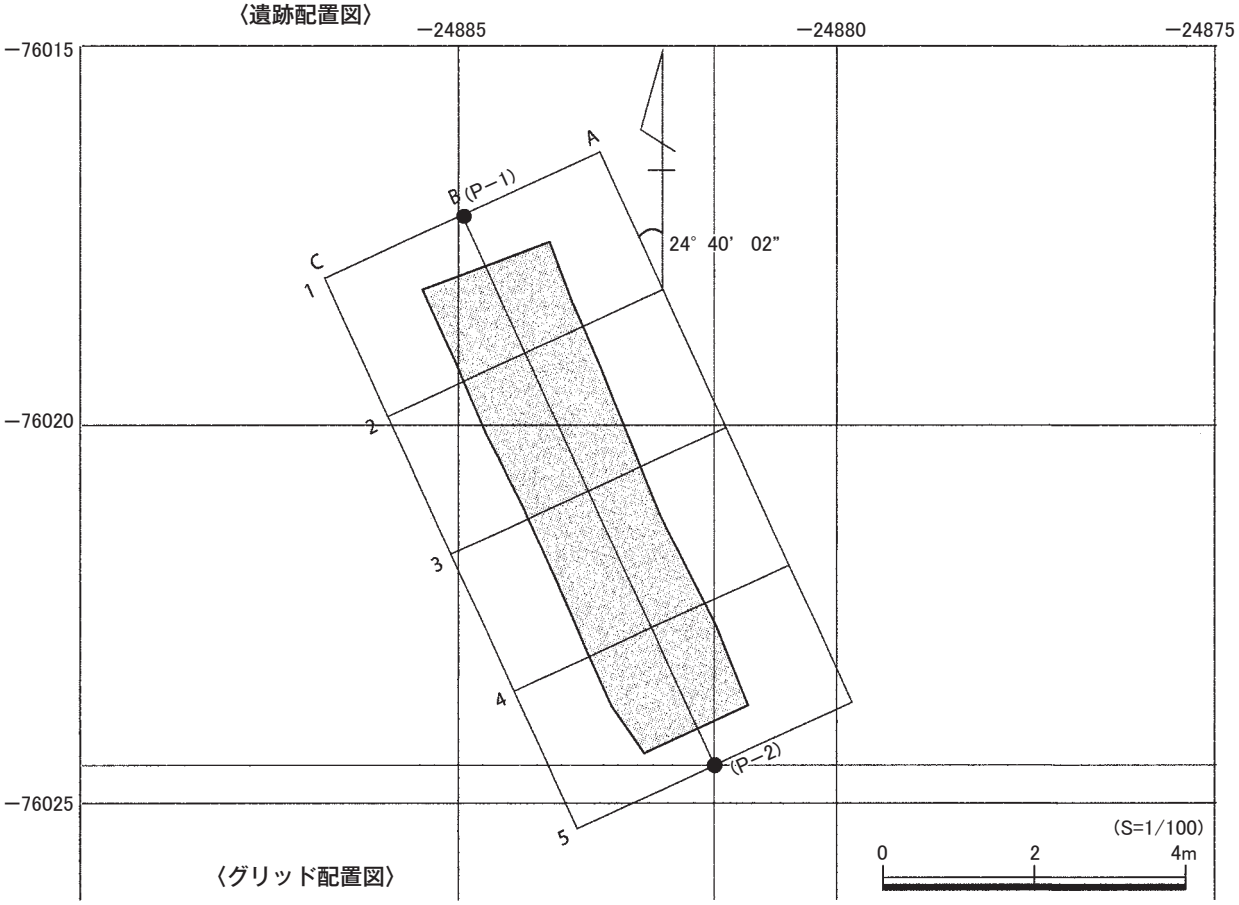
（註23）「足利直義御教書」（「円覚寺文書」『神奈川県史資料編３上』3749号文書）

（註24）『日本歴史地名体系』「大町村 大宝寺」項など

（註25）「建長三年八月四日付 関東御教書案」（「託磨文書」『鎌倉遺文』7334号文書）、「弘長二年八月廿日付 詫磨能秀譲状案」（「託磨文書」『神奈川県史資料編１』492号文書）、「建武元年四月十八日付 後醍醐天皇綸旨案」（「詫磨文書」『神奈川県史資料編３上』3160号文書）



〈遺跡配置図〉



〈グリッド配置図〉

図２　遺跡位置図・国土座標とグリッド配置図

２．遺跡位置とグリッド配置図（図２）

本調査は鎌倉市大町四丁目1858－４地点における、個人専用住宅の建築に伴う発掘調査である。現地調査期間は平成18年５月１日から６月７日までの約１ヵ月間で、調査面積は約10.50㎡である。現地表の標高は調査区北側で海抜13.50ｍ、南で海抜13.70ｍであり、南から北に向かって緩やかな傾斜地となる。

調査を開始するにあたっては調査区にほぼ平行した任意の方眼軸を設け、Ｐ－１と見返り点Ｐ－２を設定後、光波測量機によってトラバース測量を行い、Ｐ－１と見返り点Ｐ－２に国土座標上の数値を移動した。しかし整理作業時に測量不備がみつかり、測量の際のデータを基に計算し座標値を算出したが、数値に若干のずれが生じてしまっている。測量軸は２ｍ方眼による軸線を用い、南北軸線には北から算用数字の１～５、東西軸線には東からアルファベットＡ～Ｃとした。南北軸線は真北に対して24° 40′ 02″西にずれる。現地調査では日本測地系（座標AREA9）の国土座標数値を使用したが、本報告作成に当たって国土地理院が公開する座標変換ソフト「web版TKY2JGD」で世界測地系第Ⅸ系に変換し、図２に表記した。

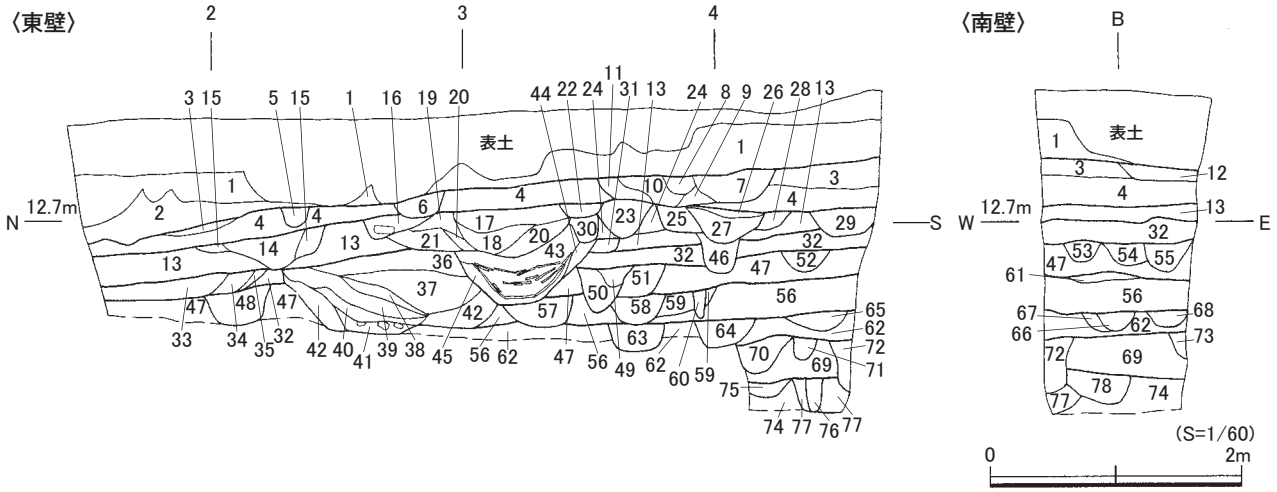


図３　調査区堆積土層図

３．堆積土層（図３）

緩やかに南から北に傾斜する現地表から、南側約20㎝～北側40㎝の表土を除去すると、近世以降の耕作土と思われる堆積層が観察できる。耕作土下層の泥岩・泥岩粒・炭化物を含む暗茶灰色弱粘質土上で第１面を検出した。確認レベルは海抜12.50ｍ～13.20m。第２面は泥岩・破砕泥岩を含む明灰色弱粘質土の締まりある地業上で検出した。確認レベルは12.40m～12.80m。第３面は泥岩粒・炭化物・かわらけ片を含む、締まりのある暗茶褐色粘質土上で検出した。確認レベルは12.20m～12.70m。第４面はやや大型の泥岩・炭化物を含む茶灰色粘質土上で検出した。確認レベルは12.10m～12.50m。第５面は泥岩粒・褐鉄を含む堅く締まった暗茶褐色粘質土上で検出した。確認レベルは11.90m～12.30mである。第６面～第８面は調査区南東隅に設けた試掘坑で確認している。第６面の確認レベルは12.00mである。構成土は微量の泥岩粒・褐鉄を含む堅く締まった暗青灰色粘質土。第７面の確認レベルは約11.80m。構成土は泥岩粒少量・山砂と思われる砂質土を含む暗褐色弱粘質土である。第８面の確認レベルは約11.50m。構成土は少量の泥岩・微量の泥岩を含む青灰色土である。中世の地山層と考えている。

土層注記（図3）

1．黄灰色砂質土:泥岩･炭化物･かわらけ片･山砂(耕作土か？)
2．明黄灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・かわらけ片・山砂（耕作土か？）
3．暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第１面構成土）
4．暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量に含む土丹地業、炭化物・かわらけ（第1面構成土）
5．茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物多量（第1面遺構13）
6．暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物微量
7．暗茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第1面遺構8）
8．暗茶褐色弱粘質土:泥岩･泥岩粒･かわらけ片(第1面遺構8)
9．暗茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・かわらけ片・炭化物（第1面遺構8）
10. 明茶褐色弱粘質土：泥岩・かわらけ片・焼土・炭化物（第1面遺構8）
11. 明茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・かわらけ片・炭化物（第1面遺構8）
12. 茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第1面遺構7）
13. 明灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量に含む土丹地業（第2面構成土）
14. 暗灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒
15. 茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒
16. 灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第2面遺33）
17. 暗茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・かわらけ片微量（第2面遺構41）
18. 暗茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第2面遺構41）
19. 暗茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・かわらけ片微量（第2面遺構41）
20. 暗茶褐色弱粘質土：炭化物･かわらけ片微量（第2面遺構41）
21. 茶褐色弱粘質土:泥岩･泥岩粒多量､炭化物･かわらけ片（第2面遺構41）
22. 暗黄灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第2面遺構39）
23. 茶灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物
24. 暗茶褐色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第2面遺構27）
25. 暗灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第2面遺構40）
26. 暗茶灰色弱粘質土：泥岩粒・炭化物・かわらけ片（第2面遺構25）
27. 暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量・炭化物（第2面遺構25）
28. 暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量、炭化物（第2面遺構24）
29. 暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物
30. 暗茶褐色弱粘質土：泥岩多量・泥岩粒・炭化物
31. 暗茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物微量
32. 暗茶褐色粘質土:泥岩粒･炭化物･かわらけ片(第3面構成土)
33. 暗灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物多量（第3面遺構52）
34. 暗灰色粘質土：泥岩・泥岩粒多量（第3面遺構52）
35. 暗灰色粘質土：泥岩粒・炭化物微量（第3面遺構52）
36. 暗黄灰色弱粘質土：泥岩多量・泥岩粒・炭化物（第3面遺構51）
37. 暗黄灰色弱粘質土：泥岩多量、泥岩粒・炭化物微量（第3面遺構51）
38. 黒褐色弱粘質土：炭化物多量・泥岩少量（第3面遺構51）
39. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒・炭化物多量（第3面遺構51）
40. 炭化物層：泥岩・泥岩粒（第3面遺構51）
41. 暗茶灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・有機質土（第3面遺構51）
42. 暗茶灰色粘質土：泥岩・炭化物（第3面遺構51）
43. 明茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・かわらけ片（第3面遺構49）
44. 茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量、炭化物（第3面遺構49）
45. 茶灰色弱粘質土：泥岩少量・泥岩粒・かわらけ片（第3面遺構49）
46. 暗茶灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物
47. 茶灰色粘質土：泥岩・炭化物（第4面構成土）
48. 暗茶褐色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物微量（第4面遺構87）
49. 暗茶褐色粘質土:泥岩･泥岩粒･炭化物微量､茶褐色粘土（第4面遺構71）
50. 暗茶褐色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物微量（第4面遺構71）
51. 暗茶褐色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第4面遺構70）
52. 暗青灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量、炭化物微量（第4面遺構65）
53. 暗青灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物（第4面遺構57）
54. 暗青灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物微量（第4面遺構60）
55. 茶褐色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物微量（第4面遺構61）
56. 暗茶褐色粘質土：泥岩粒・褐鉄（第5面構成土）
57. 暗茶灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・褐鉄（第5面遺構99）
58. 暗灰色弱粘質土：泥岩・泥岩粒多量・炭化物・灰色粘土（第5面遺構96）
59. 暗褐色粘質土：泥岩粒・炭化物・灰色粘土（第5面遺構97）
60. 茶褐色粘質土：有機質土多量・炭化物多量、杭穴か？
61. 暗茶灰色粘質土：泥岩多量・炭化物少量（壁の東側に広がる遺構覆土か？）
62. 暗青灰色粘質土：泥岩粒微量・褐鉄（第6面構成土）
63. 暗青灰色粘質土：泥岩粒・褐鉄（第6面遺構121）
64. 暗青灰色粘質土：泥岩粒・炭化物・褐鉄（第6面遺構113）
65. 暗茶褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物・褐鉄（第6面遺構120）
66. 暗青灰色弱粘質土：泥岩粒・炭化物・褐鉄（第6面遺構108）
67. 暗青灰色弱粘質土：泥岩粒・炭化物・褐鉄微量（第6面遺構109）
68. 暗褐色粘質土：泥岩・泥岩粒微量、褐鉄（第6面遺構107）
69. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・山砂（第7面構成土）
70. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量、褐鉄
71. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量、褐鉄
72. 暗褐色弱粘質土：泥岩粒・炭化物微量、（根固めの為か底部に不整形な泥岩あり）
73. 暗褐色弱粘質土：泥岩・炭化物
74. 青灰色粘質土：泥岩・泥岩粒微量（第8面構成土）
75. 茶褐色弱粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物
76. 暗褐色粘質土：泥岩・泥岩粒微量
77. 青灰色粘質土：泥岩粒・炭化粒微量
78. 青灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化粒微量

第二章　検出した遺構と遺物

調査は重機によって表土から約60cm堆積していた現代の耕作土を除き第１面を検出した。第１面～第５面までの遺構確認面は南から北に向かって緩やかに傾斜する。発見した遺構は土坑・溝状土坑・ピット。出土遺物はかわらけ・国産陶磁器・舶載磁器などの中世遺物の他に破片ではあるが土師器・須恵器などの古代遺物が出土している。狭小な範囲での調査だったため、発見した遺構・遺物から遺跡地の性格を明確に把握することは難しいが、遺跡地周辺の様相を推定する資料の一つと考えたい。

各面に付した遺構番号は調査作業の簡便を測るために、遺構プランに対して付してあり、必ずしも番号の新旧が遺構の新旧を表すものではない。また、調査に伴う平面図測量に際しては、旧来からの測量方法である平板測量を行っている。

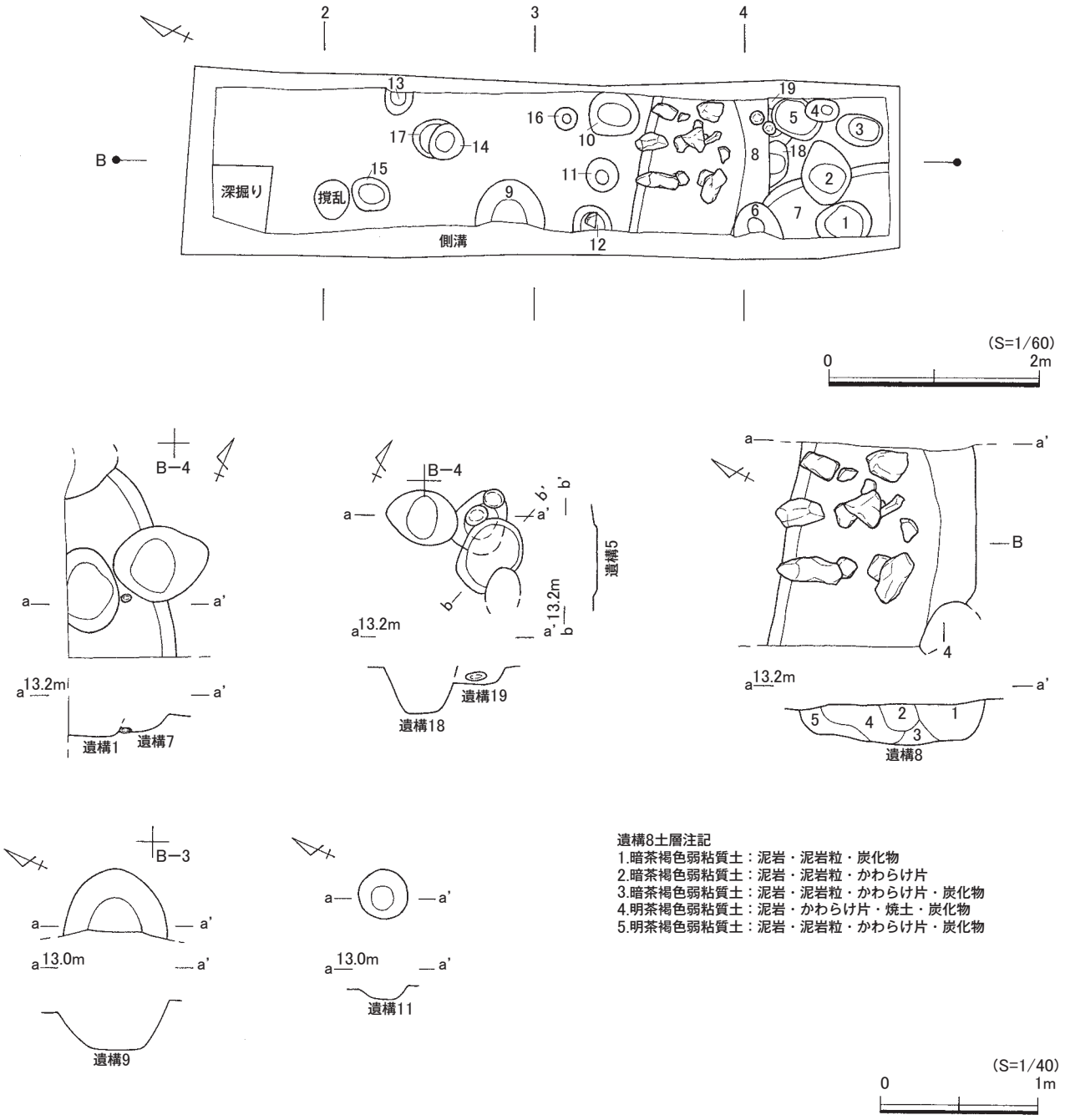


図４　第１面（全測図・個別遺構図）

第１面の遺構と遺物（図４・図５）

第１面は暗茶褐色粘質土・泥岩粒・泥岩を含む堅く締まった堆積層上で遺構を確認した。堆積層は調査区中央付近から北に向かって緩やかに傾斜する。発見遺構はやや平坦に地業されていた調査区南側に集中した。検出した遺構は土坑２基・溝状土坑１基・ピット19穴。２時期の遺構の切りあいを確認した。第１面構成土には焼痕のある泥岩と、部分的に炭化物が層状に堆積していた。

出土した遺物はかわらけ・常滑甕を中心として、少量の瀬戸製品・火鉢・鉄釘があり、破片で青磁碗・手づくね・土師器甕が各１点出土している。第１面確認レベルは、海抜12.50ｍ～13.20ｍ。

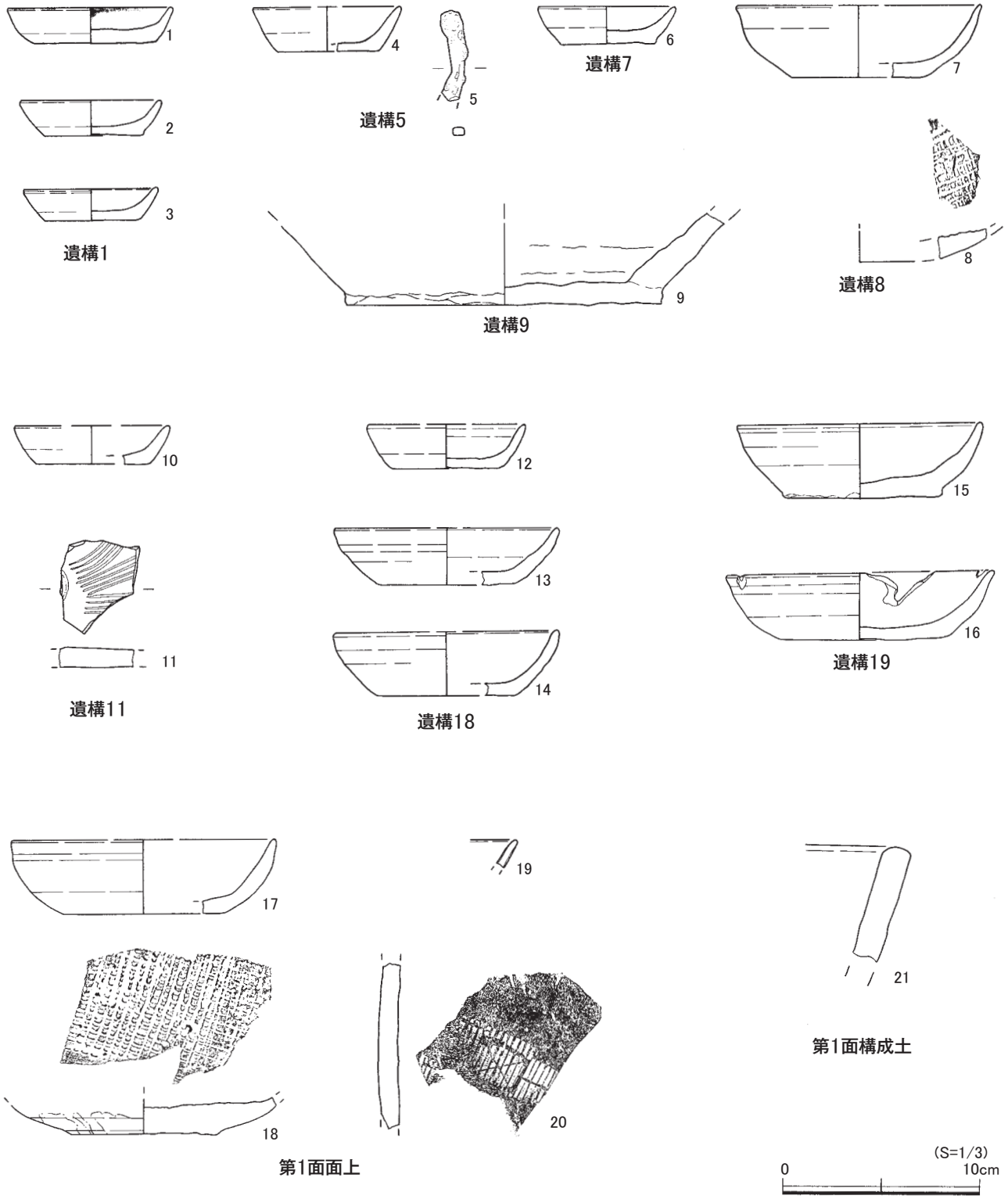


図５　第１面（遺構・面上・構成土出土遺物）

遺構１（図４・図５）

ピットである。長さ53cm・幅(34) cm・深さ14cm。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩粒・泥岩・炭化物を含む。

出土遺物（図５）

１～３はかわらけである。１は口唇部内側に油煤痕付着・底径大きく器高低い、小型のかわらけである。内底やや強めの指頭によるナデあり。２・３は内底指頭によるナデあり・胎土に雲母が多く混じる。破片でかわらけ（大)15・かわらけ（小）３が出土した。

遺構５（図４・図５）

ピットである。長さ48cm・幅40cm・深さ２cm。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩粒（多)・泥岩・炭化物を含む。

出土遺物（図５）

４はかわらけ・内底指頭によるナデあり。５は鉄製品・釘。破片でかわらけ（大)13・かわらけ（小）２・鉄釘が出土した。

遺構７（図４・図５）

土坑である。長さ60cm・幅48cm・深さ11cm。覆土は茶褐色弱粘質土・炭化物・泥岩粒を微量に含む。

出土遺物（図５）

６はかわらけ。内底指頭によるナデの後見込み周囲を回転ナデ。破片でかわらけ(大)10・かわらけ(小)１・常滑甕１が出土した。

遺構８（図４・図５）

溝状土坑である。調査区外に遺構が延びており正確な形状・規模は不明。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩（多)・泥岩粒（多)・炭化物・茶色粘土を含む。覆土上層には40cm前後の大型で不整形・焼痕のある泥岩が多く堆積していた。狭い範囲の調査ではあるが、遺構８を境に調査区の堆積は北に向かって緩やかに傾斜しており、遺構８は土留めの役割を果たしていたのかもしれない。第１面より上層の遺構と思われる。長さ122cm・幅(130)cm・深さ28cm。

出土遺物（図５）

７はかわらけ。内底指頭によるナデ。８は瀬戸灰釉卸皿。破片でかわらけ（大)31・常滑甕３が出土している。

遺構９（図４・図５）

土坑である。長さ66cm・幅(40)cm・深さ32cm。覆土上層に３～５cmの泥岩が厚く堆積。遺構底部に炭化物が厚く堆積していた。覆土は黒色弱粘質土・炭化物を多く含む。

出土遺物（図５）

９は常滑甕の底部片。内底、内側面に指頭による調整痕が残る。外底部砂付着。破片でかわらけ（大）１が出土している。

遺構11（図４・図５）

ピットである。長さ32cm・幅32cm・深さ８cm。覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩粒・炭化物を含む。

出土遺物（図５）

10はかわらけ。外側面に糸切り痕残る。11は瀬戸灰釉折縁皿の底部片・４本単位の櫛掻文。破片の為欠落部分が大きいが、底部中央に同心円状の文様が描かれ、その周囲に草文を配していると思われる。外底部に糸切り痕は遺存していなかった。破片でかわらけ（小）１・瀬戸折縁深皿１が出土している。

遺構12（図４）

浅いピットである。ピット底部に常滑甕底部片が遺存していた。長さ40cm・幅(35)cm・深さ不明。

覆土は茶褐色弱粘質土・泥岩粒・炭化物・焼土を含む。個別に図面は掲載していない。

遺構18（図４・図５）

ピットである。長さ45cm・幅32cm・深さ28cm。覆土は褐色弱粘質土・泥岩粒・炭化物を多く含む。

出土遺物（図５）

12～14はかわらけ。12は明るい橙色を呈し、器壁薄く、やや内湾して立ちあがる。内底指頭によるナデの後、見込み周囲を回転ナデ。13は内底指頭によるナデあり。14は内底指頭によるナデの後、見込み周囲を回転ナデ。破片でかわらけ（大）３・かわらけ（小）５・常滑甕１・鉄滓１が出土している。

遺構19（図４・図５）

ピットである。長さ44cm・幅35cm・深さ12cm。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒・炭化物を含む。

出土遺物（図５）

15・16はかわらけ。15は小石粒の混じる粗い胎土・内底に強く指頭によるナデ残る。16は内底指頭によるナデあり。破片でかわらけ（大）７・かわらけ（小）３・常滑甕１が出土している。

第１面面上出土遺物（図５）

第１面の面精査時に発見した遺物である。17はかわらけ。内底指頭によるナデあり。18は瀬戸灰釉卸皿底部片・内底部卸目に摩耗痕は見られない。外底部糸切り痕が明瞭に残る。19は竜泉窯青磁碗の口縁部片。破片の為不明瞭だが蓮弁文様か。20は常滑甕胴部片。破片でかわらけ(大)51･かわらけ（小）３・常滑甕９・火鉢１が出土している。

第１面構成土出土遺物（図５）

第１面構成土は暗茶灰色弱粘質土･泥岩･破砕泥岩･泥岩粒･焼痕のある泥岩･炭化物を含み､固く締まっている。構成土内にも炭化物が多く含まれていたが、発見した遺構覆土では層状に炭化物を検出する遺構を多く見た。21は土器質火鉢･口縁部片。内側面に炭化物付着。破片でかわらけ（大)23･かわらけ（小）４・常滑甕14が出土している。

第２面の遺構と遺物(図６)

第２面は明灰色弱粘質土・泥岩粒・破砕泥岩・泥岩を含む泥岩地業層上で遺構を確認した。堆積土に含まれる泥岩の一部には焼痕が残る。堆積層は調査区中央付近に位置する遺構41辺りから北に向かって緩やかに傾斜する。調査区北側にスクリーントーンで示した部分は、破砕泥岩による地業が遺存していた個所である。地業下層には炭化物層が広く堆積していた。検出した遺構は土坑６基･溝状土坑１基･ピット16穴。２時期の遺構の切りあいを確認した。出土した遺物は青白磁梅瓶・研磨石製品。破片で青白磁梅瓶・火鉢・鉄滓が１点出土している。第２面確認レベルは、海抜12.40mから12.80m。

遺構29(図６)

個別に遺構図は掲載していない。ピットである。長さ56cm･幅45cm･深さ16cm。覆土は暗茶褐色粘質土･泥岩粒・暗茶褐色粘土を含む。遺構底面に不整形の泥岩が遺存していた。根固めとして使用か。破片でかわらけ（小）１が出土している。

遺構33(図６)

個別に遺構図は掲載していない。ピットである。遺構41を切る。長さ58cm・幅(28)cm・深さ７cm。覆土は暗灰色粘質土・泥岩・泥岩粒・炭化物・暗灰色粘土を含む。遺構底部に焼痕の残る不整形な泥岩

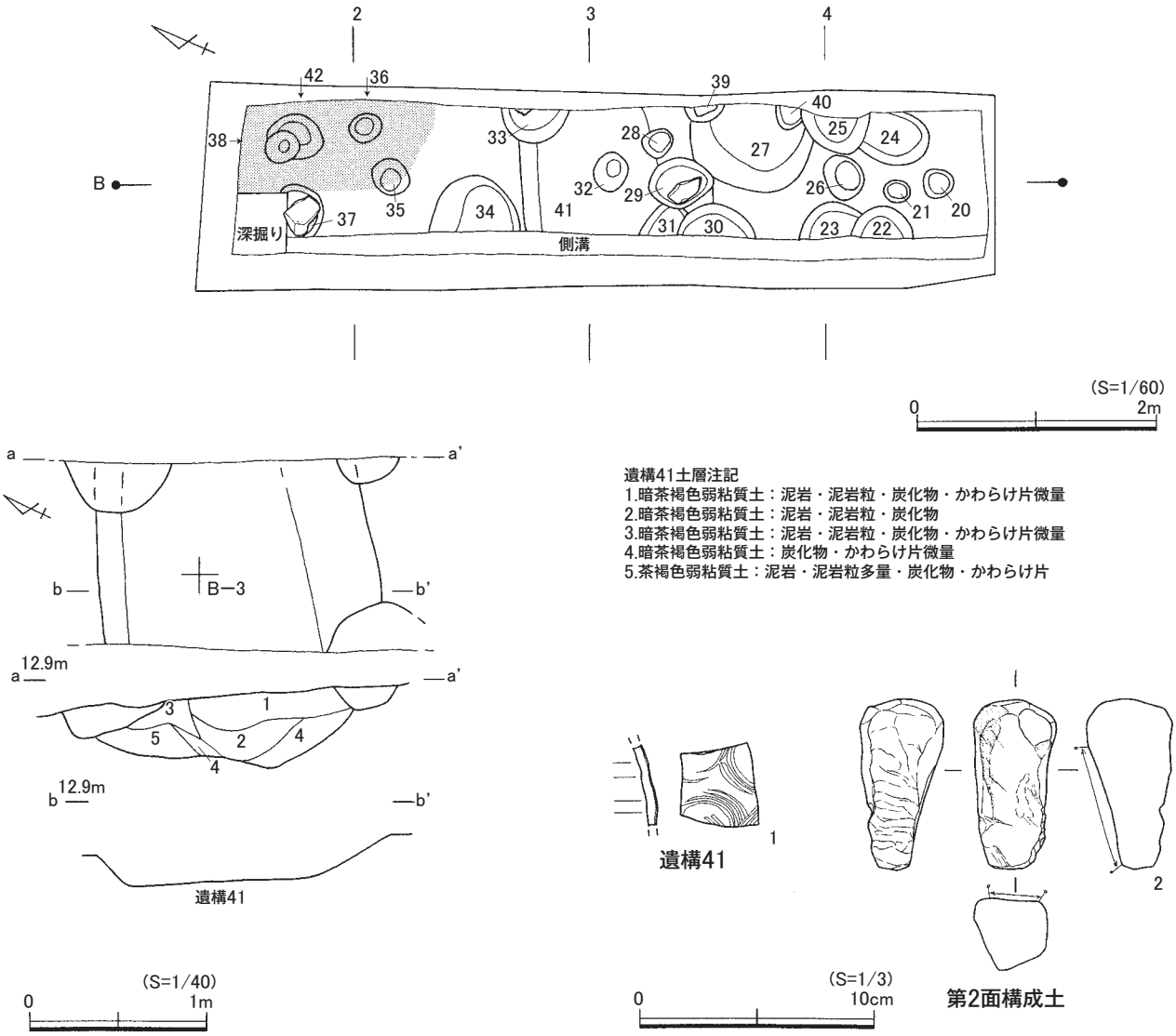


図６　第２面(全測図・個別遺構図・出土遺物)

が遺存していた。根固めとして使用か。破片でかわらけ(小) 3 が出土している。

遺構37(図６)

個別に遺構図は掲載していない。ピットである。長さ48cm・幅(36)cm・深さ19cm。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒を多く含む。覆土内の泥岩の多くには焼痕が残る。出土遺物はない。

遺構39(図６)

個別に遺構図は掲載していない。ピットである。長さ34cm・幅14cm・深さ不明。覆土は暗黄灰色弱粘質土・泥岩・泥岩粒を含む。底面に常滑胴部片が遺存していた。礎石、あるいは根固めとして使用か。常滑胴部片上で深さ７cmを測った。破片で常滑甕１が出土している。

遺構41(図６)

溝状土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっている為に正確な形状・規模は不明。長さ(108)cm・幅160cm・深さ29cm。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒・泥岩・炭化物を含む。遺構41を境に調査区内で北に向かって緩やかに傾斜していることや、覆土内に含まれる泥岩が大型であること、多量であること等から、第１面で発見した遺構８と同様に土留めであった可能性を考えている。

出土遺物(図６)

１は青白磁梅瓶。破片でかわらけ(大)11・常滑甕４が出土している。

第２面面上出土遺物(図６)

第２面精査時に出土した遺物は出土量も少なく破片のみであったため、本報告に掲載していない。破片でかわらけ(小)16・常滑甕15が出土した。

第２面構成土出土遺物(図６)

２は用途不明・石製品。人為的に加工した痕跡がある。端部および、側面に摩耗痕あり。破片でかわ

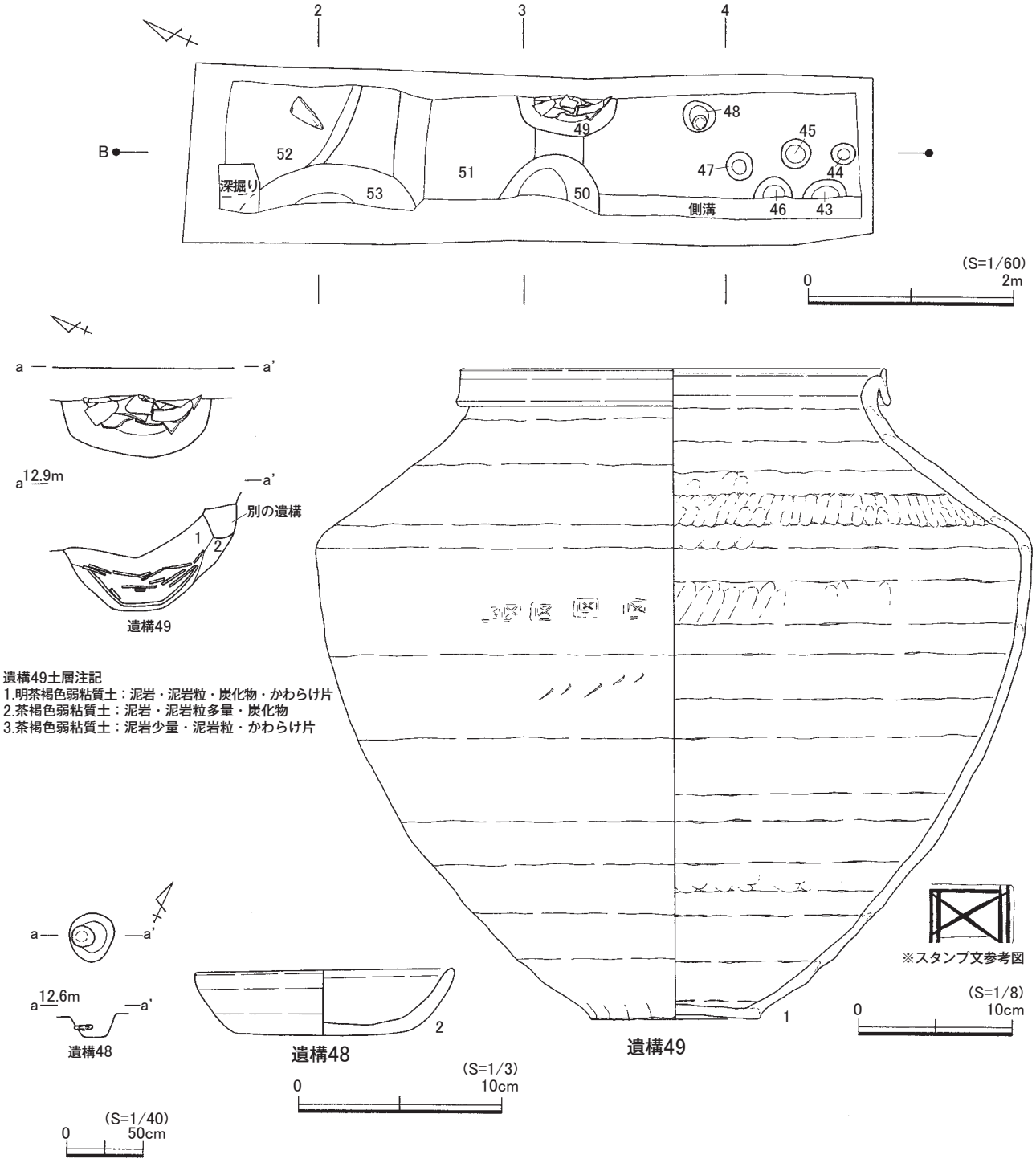


図７　第３面(全測図・個別遺構図・遺構48・遺構49出土遺物)

らけ(大)25・かわらけ(小) 3 ・青白磁梅瓶１・瀬戸壷２・常滑甕４・火鉢１が出土している。

第３面の遺構と遺物(図７・図８)

第３面は暗茶褐色粘質土・泥岩粒・泥岩を含む堅く締まった堆積層上で遺構を確認した。上層の生活面と同様に、堆積層は調査区中央付近から北に向かって緩やかに傾斜する。検出した遺構は土坑４基・溝状土坑１基・ピット６穴。２時期の遺構の切りあいを確認した。第３面構成土は暗茶褐色粘質土・泥岩粒・炭化物を含み固く締まっていた。出土した遺物は破片も含めてかわらけ・常滑甕を中心として、舶載品・瀬戸製品・常滑製品・常滑甕転用品・火鉢がある。第３面確認レベルは、12.20mから12.70m。

遺構48(図７)

ピットである。長さ31㎝・幅29cm・深さ14cm。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒・泥岩・炭化物を含む。覆土内に完形のかわらけ（図７－２）が遺存していた。

出土遺物（図７）

２はかわらけである。内底やや強めの指頭によるナデあり。外側面回転ナデが強く残る。破片でかわらけ５・常滑甕１が出土している。

遺構49(図７)

土坑である。長さ96㎝・幅(37)㎝・深さ約60㎝。調査区外に遺構が延びてしまっていたために、正確な形状・規模は不明である。土坑内で発見した常滑窯・甕上部は土圧により潰れていたが、甕底部は遺構底面に据えた状態で発見された。覆土は暗灰色弱粘質土・泥岩粒・泥岩・炭化物を含む。

出土遺物（図７）

１は常滑甕。胴部にスタンプ文。中野編年７～８形式に比定される。甕以外の出土遺物はない。

遺構51(図７・図８)

断面逆台形を呈する溝状土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっている為に正確な形状・規模は不明。長さ(98)㎝・幅184㎝・深さ44cm。覆土は暗黄灰色弱粘質土・泥岩・泥岩粒を多く含む。堆積土層図（図８）で示した３層・７層は有機質土を含む炭化物が厚く堆積していた。第１面遺構８・第２面遺構41と同様に土留めの性格を持つ可能性も考えている。

出土遺物（図８）

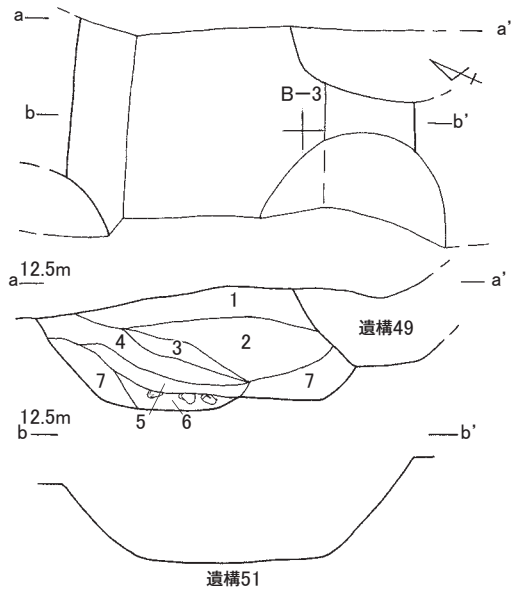
１～６は堆積土層図の１～３層の間に出土した遺物である。１～４はかわらけ。１～３は内底指頭によるナデあり。３は外側面雑な整形。４は調整不明・やや粉質な胎土。５は瀬戸入子口縁部片。６は常滑甕転用品。摩耗痕あり。１～３層からは破片でかわらけ(大)22・かわらけ（小）３・常滑甕６が出土している。７～８は４～７層の間に出土した遺物である。７はかわらけ・内底指頭によるナデあり。全体に磨耗している。８は内底指頭によるナデの後、見込み周囲に回転ナデ。９は青磁劃花文碗・外側面無文・内側面花文か。４～７層からは破片でかわらけ(大）６・かわらけ(小）１・常滑甕９が出土している。

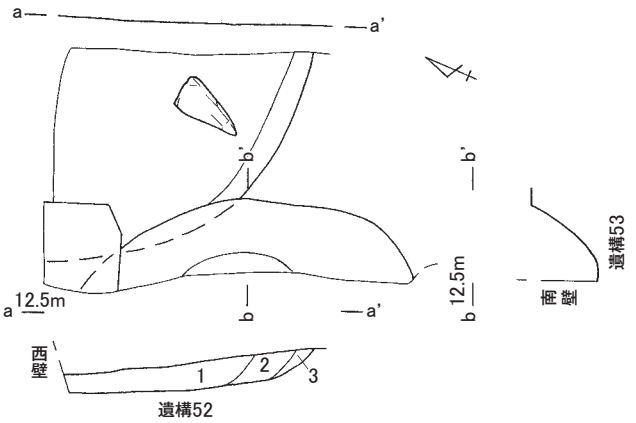
遺構52(図８)

浅い土坑である。長さ(130)㎝・幅(106)㎝・深さ23㎝。調査区外に遺構が延びてしまっているため正確な形状・規模は不明。覆土は上層に炭化物を多く含み、泥岩・泥岩粒を含む。

出土遺物（図８）

10・11はかわらけ。10は内底指頭によるナデあり・外側面雑な整形。11は内底指頭によるナデあり・





遺構52土層注記
1.暗灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物多量
2.暗灰色粘質土：泥岩・泥岩粒多量
3.暗灰色粘質土：泥岩粒・炭化物微量

遺構51土層注記
1.暗黄灰色弱粘質土：泥岩多量・泥岩粒・炭化物
2.暗黄灰色弱粘質土：泥岩多量・泥岩粒・炭化物微量
3.黒褐色弱粘質土：炭化物多量・泥岩少量
4.暗茶褐色粘質土：泥岩粒・炭化物多量
5.炭化物層：泥岩・泥岩粒
6.暗茶灰色粘質土：泥岩・泥岩粒・炭化物・有機質土
7.暗茶灰色粘質土：泥岩・炭化物

(S=1/40)
0 2m

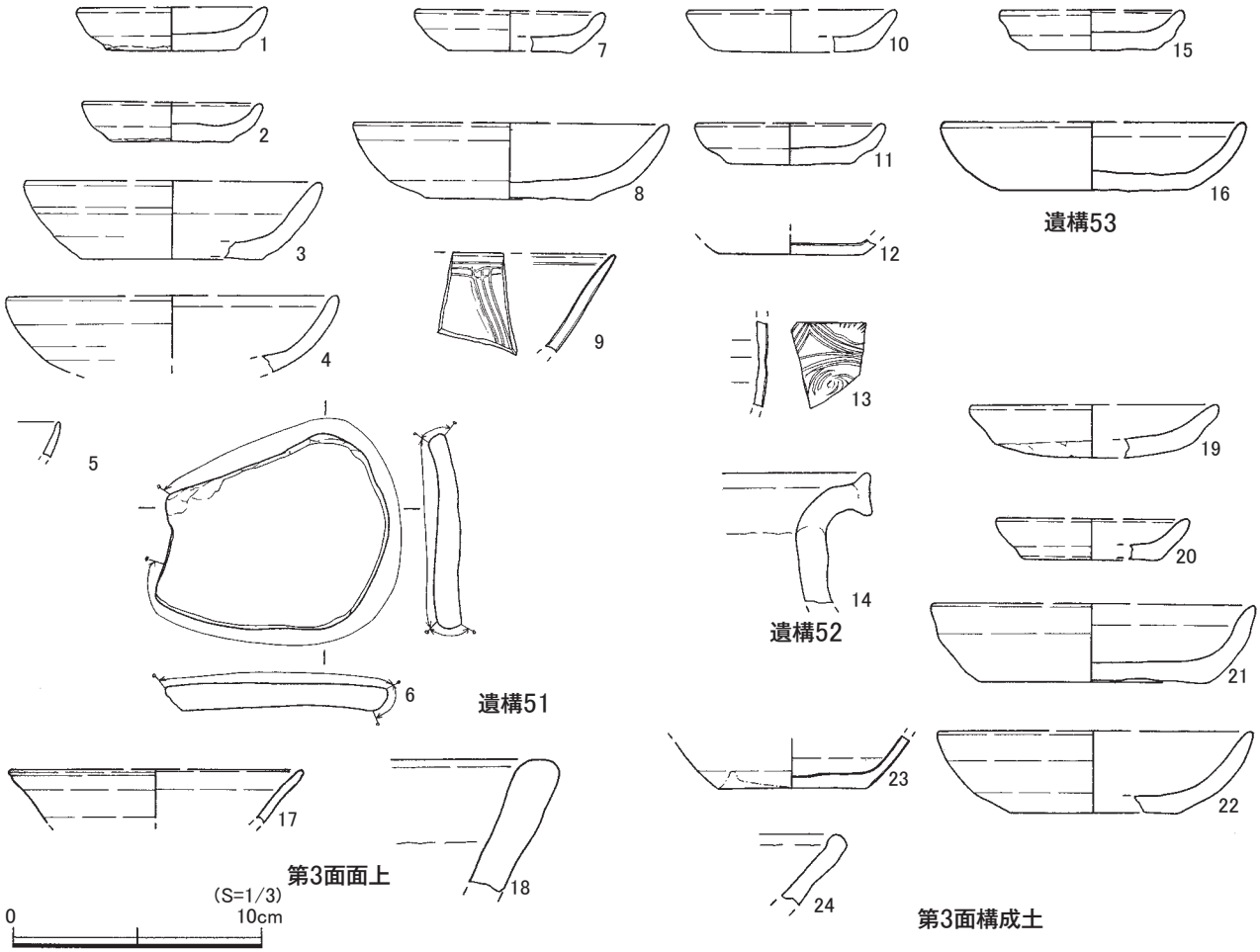


図8　第３面（個別遺構図・出土遺物）

外側面雑な整形。12は白磁口兀皿底部片。13は青白磁梅瓶胴部片。14は常滑窯・甕口縁部片。破片でかわらけ（大）5・かわらけ（小）3・常滑甕4が出土している。

遺構53（図８）

土坑である。調査区外に遺構が延びてしまっている為に正確な形状。規模は不明。長さ(175)cm・幅(38)cm・深さ(34)cm。覆土は暗茶褐色弱粘質土・泥岩粒・炭化物を多く含む。

出土遺物(図８)

15・16はかわらけ。15は内面に鉄分付着・内底指頭によるナデあり。16は薄手の器壁を持つ・内底指頭によるナデあり。

第３面面上出土遺物(図８)

第3面直上には、炭化物が薄く堆積していた。17は東濃型山茶碗口縁部片・内外口唇部、内面口縁部に淡緑色の降灰釉。18は瓦質火鉢口縁部片・内側面火熱による剥離痕。粗い胎土。第3面面上では遺物の出土量が減少する。破片でかわらけ（大）8・常滑甕１・山茶碗１・火鉢１が出土した。

第３面構成土出土遺物(図８)

第3面構成土は暗灰褐色弱粘質土・暗褐色砂質土・泥岩粒・泥岩を含む堅く締まった地業であった。19は手づくね成形のかわらけ・内外面共に指頭による調整痕不明瞭。20～22はかわらけ・20は内底指頭によるナデあり・小石粒を含む粗い胎土。21は内底指頭による強いナデ。22は内底指頭によるナデの後見込み周囲を回転ナデ。23は白磁口兀皿底部片・底部外面板状工具によるナデ痕。24は常滑窯・片口鉢Ⅰ類口縁部片。破片でかわらけ（大)46・かわらけ（小）2・手づくね（大）1・白磁口兀皿１・常滑甕12・常滑片口鉢Ⅰ類1が出土している。

第４面の遺構と遺物(図９)

第4面は茶褐色粘質土・泥岩粒・破砕泥岩・泥岩・炭化物を含む堅く締まった地業層上で遺構を確認した。第１面～第3面までの地業層は南から北に向かって緩やかに傾斜する土地を利用しているが、第4面はやや平坦な地業を観察している。検出した遺構は土坑8基・ピット25穴。3時期の遺構の切りあいを確認した。時代が遡る遺構の覆土と、第4面構成土下層には覆土内に炭化物を含まない。また、第3面で発見した遺構51に壊され、調査区中央付近での遺構発見は出来なかった。

出土した遺物は破片を含めてロクロ成形のかわらけ・手づくね成形のかわらけ・常滑製品・瀬戸製品・舶載品・渥美製品・石製品が出土している。第4面の確認レベルは、海抜12.10mから12.50m。

遺構61(図９)

ピットである。調査区外に遺構が延びてしまっている為に形状・規模は不明。長さ(19)cm・幅(19)cm・深さ22cm。覆土は茶褐色粘質土・少量の泥岩粒・炭化物。

出土遺物(図９)

１は常滑窯・甕口縁部片。

遺構72(図９)

ピットである。長さ44cm・幅(24)cm・深さ15cm。覆土は暗茶褐色粘質土・泥岩粒・微量の炭化物・茶色粘土を含む。底部に不整形の泥岩が遺存する・礎石か。出土遺物はない。

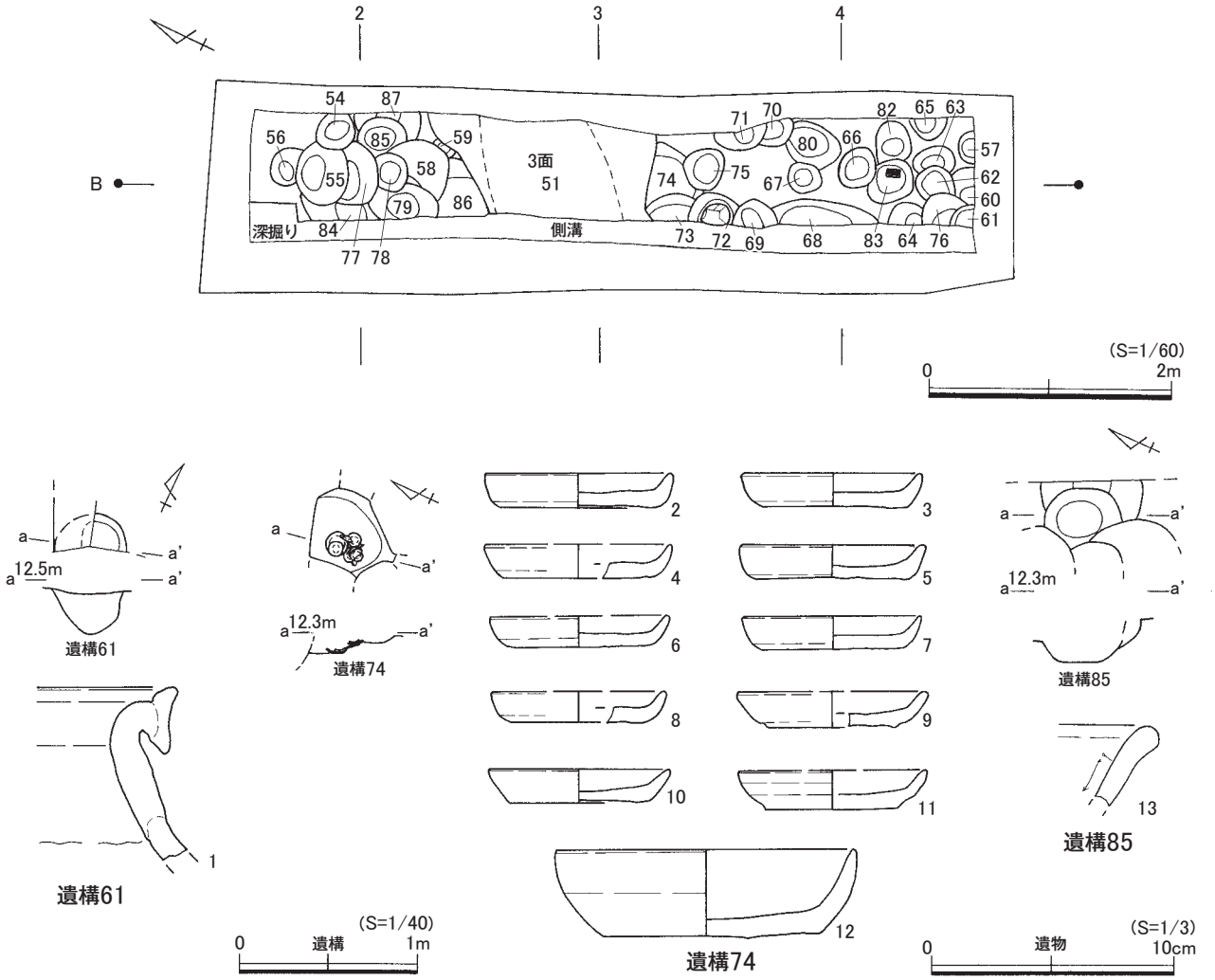


図９　第４面(全測図・個別遺構図・出土遺物)

遺構74(図９)

土坑である。上層の遺構に切られ形状・規模不明。遺構底部にかわらけがまとまって出土した。長さ(58)cm・幅(48)cm・深さ19cm。覆土は暗茶褐色粘質土・泥岩粒・微量の炭化物を含む。

出土遺物(図９)

２～12は遺構底部で発見したかわらけ。２～８は内底指頭によるナデ・口径と底径の差がなく低い器高を持つ。９は内底指頭によるナデ・小石粒を含む粗い胎土。10・11は内底指頭によるナデの後、見込み周囲を回転ナデ。12は内底指頭によるナデの後、見込み周囲を回転ナデ・やや直立して立ち上がる器壁を持つ。破片でかわらけ(大)１・かわらけ(小)14が出土している。

遺構83(図９)

ピットである。長さ(38)cm・幅36cm・深さ23cm。覆土は暗茶灰色粘質土・泥岩粒・炭化物・黒褐色有機質土を含む。個別に図面を掲載していないが、全測図に四角形で示した部分に黒褐色有機質土が遺構底部まで堆積していた。柱痕と思われる。破片でかわらけ(大)３が出土している。

遺構85(図９)

ピットである。長さ42cm・幅(36)cm・深さ25cm。覆土は暗茶褐色粘質土・微量の炭化物・泥岩粒を多く含む。

出土遺物(図９)

13は常滑片口鉢Ⅰ類口縁部片内側面に淡緑色の降灰釉。破片で片口鉢Ⅰ類胴部が１点出土している。

同一個体と思われる。

第４面面上・構成土出土遺物

第４面面上と構成土では小片の為、報告できる遺物はなかったが、第４面面上からはかわらけ（小）２・常滑甕１が破片で出土。構成土からはかわらけ（大）１・常滑甕３・土師器甕1が破片で出土した。出土遺物量は第４面になって減少する。

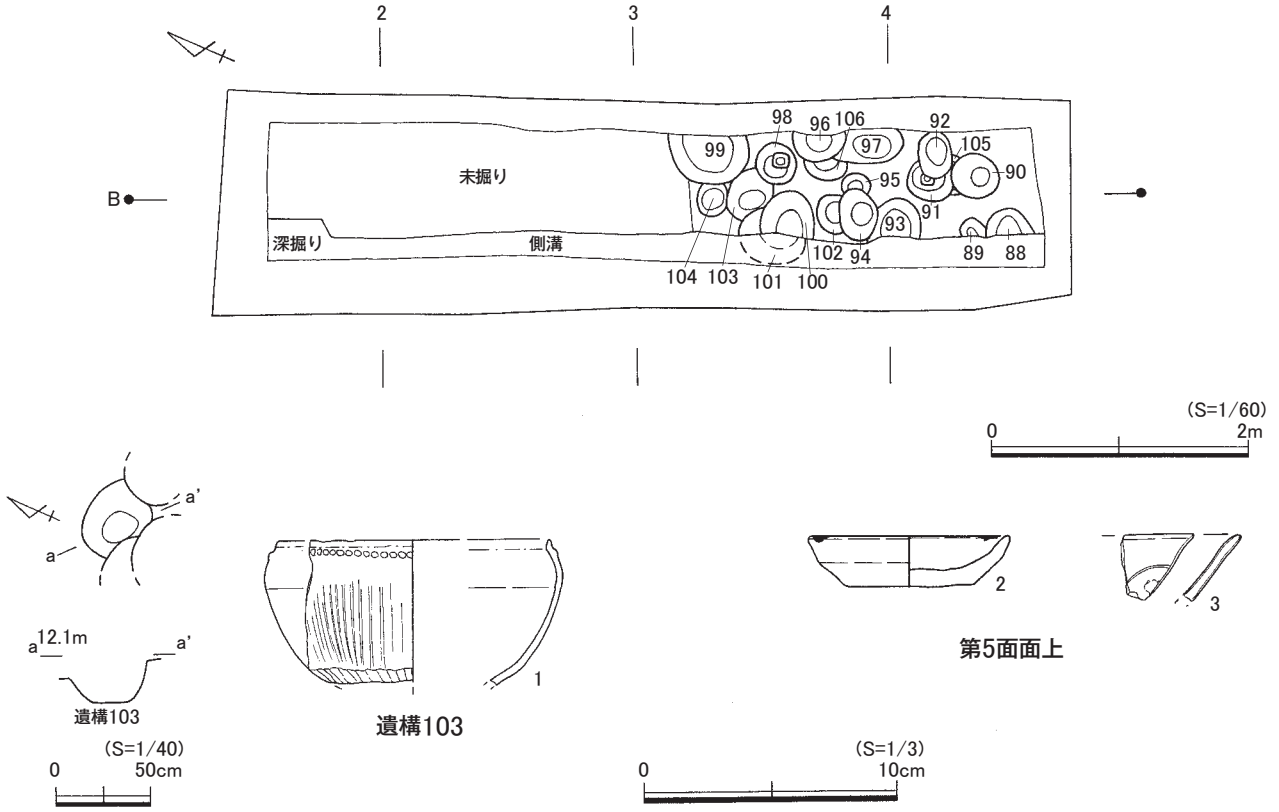


図10　第５面(全測図・個別遺構図・出土遺物)

第５面の遺構と遺物(図10)

調査壁崩落の危険が伴うために、第５面以下は調査区を狭めて調査を行った。第５面は暗茶褐色弱粘質土上で検出した。上層の第４面と同様に複数のピットが切りあって発見されたが、地業の様子を確認することは出来なかった。発見した遺構はピット19穴である。３時期の遺構の切りあいを確認している。第５面構成土は泥岩粒・褐鉄を含む堅く締まった土。出土した遺物はかわらけ・手づくね成形のかわらけ・舶載磁器・常滑製品・土師器。第５面の確認レベルは、海抜11.90mから12.30m。

遺構91(図10)

ピットである。長さ36cm･幅(30) cm･深さ25cm。覆土は暗茶褐色粘質土･少量の泥岩粒。褐鉄を含む。遺構中央に柱痕と思われる方形を呈するピットを確認した。破片で常滑甕３が出土している。後述する遺構98にも、同様に柱穴痕と考える方形のピットを観察している。遺構91と遺構98の芯芯間の距離は122cmであった。個別に図面は掲載していない。

遺構98(図10)

ピットである。長さ34cm・幅31cm・深さ13cm。覆土は暗茶灰色弱粘質土・微量の泥岩粒・炭化物・灰色粘土を含む。遺構内に柱痕と思われるピットがあく。破片で手づくね(大)1が出土している。個別に図面は掲載していない。

遺構101(図10)

ピットである。調査区外に遺構が延びてしまっている為、正確な形状・規模は不明。長さ53cm・幅(45)cm・深さ36cm。覆土は暗茶灰色粘質土・泥岩粒・泥岩を含む。遺構底面に拳大の泥岩が遺存していた。根固めか。破片でかわらけ(大)2・白磁壷1・褐釉壷甕類1が出土した。白磁壷は隣接する遺構103出土の白磁壷(図10-1)と接合した。

遺構103(図10)

ピットである。長さ43cm・幅35cm・深さ19cm。覆土は暗褐色粘質土・多量の泥岩粒・炭化物・褐鉄・灰色粘土を含む。

出土遺物(図10)

1は白磁無頸壷。内外面に乳白色の透明釉を厚く施釉。肩部に珠文。胴部に蓮弁状の文様が配される。生産地は景徳鎮窯か。破片でかわらけ(小)1が出土している。

遺構105(図10)

ピットである。長さ30cm・幅27cm・深さ50cm。覆土は暗褐色粘質土・微量の泥岩粒・褐鉄を多く含む。遺構底面に拳大の泥岩が遺存していた。根固めか。個別に遺構図は掲載していない。出土遺物はない。

第5面面上出土遺物(図10)

2はかわらけ。口唇部に油煤痕・灯明皿か。3は白磁碗口縁部片・内面に劃花文。破片でかわらけ(大)2・手づくね(大)2・常滑甕1が出土している。

第5面構成土出土遺物

第5面構成土は褐鉄を含む堅く締まった暗茶褐色粘質土である。破片でかわらけ(小)1・手づくね(大)10・土師器坏1・土師器甕1が出土した。遺物出土量は第4面と比較してさらに減少する。

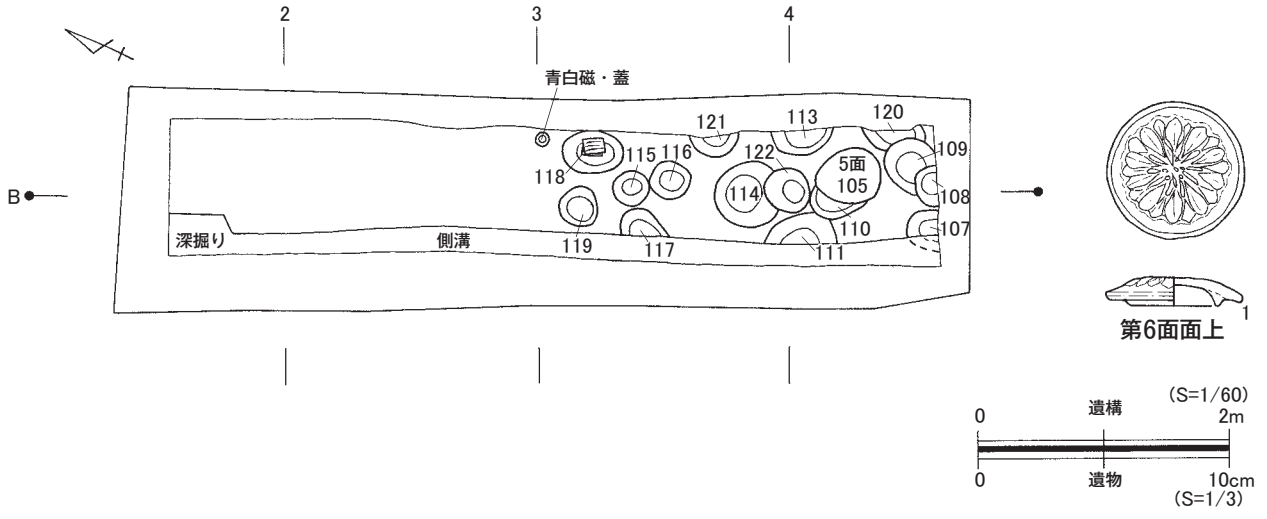


図11　第6面(全測図・出土遺物)

第６面の遺構と遺物(図１１)

第６面は暗青灰色粘質土上で検出した。第６面構成土は黒褐色粘質土・泥岩粒・微量の青灰色砂質土・褐鉄を含む堅く締まった土であり、遺構覆土にも褐鉄が多く含まれる。発見した遺構はピット15穴である。２時期の遺構の切り合いを確認した。出土遺物量は極端に減少し、報告した遺物の他に第６面面上でかわらけ(大)1・土師器甕４、第６面構成土からは土師器甕１が破片で出土している。第６面の確認レベルは12.00m。

遺構118(図11)

底面に礎板が遺存するピットである。長さ46cm・幅34cm・深さ17cm。遺存する礎板は２枚が重なり、下方の礎板は建材の転用品らしく、礎板の裏面、遺構底部に接する面に焼痕が残る。上方の礎板、長さ17 ～ 17.05cm・幅８～ 10cm・厚さ２cm。下方の礎板、長さ17.05cm・幅12.05 ～ 14.05cm・厚さ２cmを測り、釘痕が残る。覆土は暗青灰色弱粘質土・泥岩粒・微量の炭化物を含む。破片で土師器甕４が出土した。

第６面面上出土遺物(図１１)

１は青白磁壷蓋である。頂部に陽刻の花文が配される。破片でかわらけ１・土師器甕４が出土している。第６面構成土からは、土師器甕が破片で１点出土した。

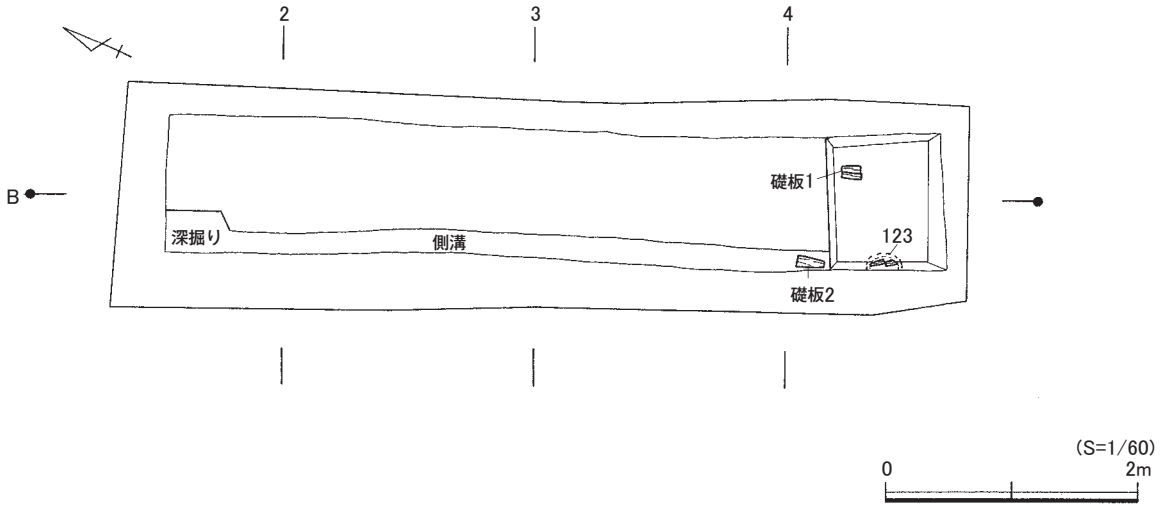


図12　第７面・第８面確認トレンチ(全測図)

第７面・第８面の遺構と遺物(図１２)

湧水と崩落の危険から調査区をさらに狭め、調査区南端を深掘りして調査区壁の土層観察で第７面・第８面の生活面があることを確認した。第７面構成土は暗褐色弱粘質土・泥岩粒・青灰色砂質土を含む。確認レベルは、海抜11.80m。第８面は青灰色粘質土・少量の泥岩粒を含む。中世の地山層と考えている。確認レベルは、海抜11.50m。両面共に破片も含めて、出土遺物はない。

遺構123(図12)

平面での調査は出来なかったが、西側調査区壁で発見した遺構である。深さ22cm。規模・形状は不明。遺構底部に礎板２枚が重なって遺存していた。上方の礎板は長さ18.5cm・幅８～ 10cm・厚さ２cm。

下方の礎板は長さ22.5cm・幅10.5cm・厚さ3.3cmを計測した。覆土は暗褐色弱粘質土・微量の泥岩粒を含む。出土遺物はない。

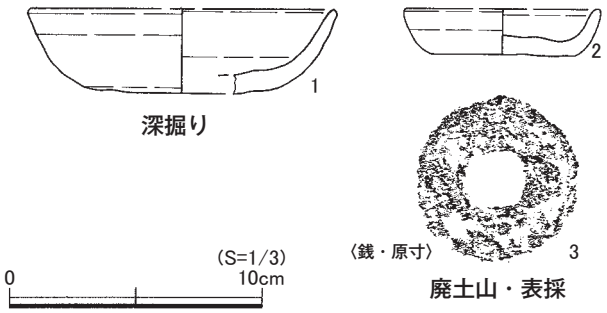


図13　廃土山・表採出土遺物

この他に、図面上で礎板１・礎板２と示した礎板を確認している。第６面・遺構118底面で発見した礎板上面のレベルと、第７面で発見した礎板１・礎板２の礎板上面のレベルは、ほぼ同じ海抜での検出であった。礎板１・２は第６面遺構に所属した礎板の可能性もある。遺構118と第７面で発見した礎板１の芯芯距離は210cmであった。

それぞれの礎板上面のレベル。・礎板１－11.63ｍ。・礎板２－11.65ｍ。・遺構123－11.34ｍ。

廃土山・表採出土遺物(図13)

１・２はかわらけ。１は内底弱いナデ・小石粒の混じる粗い胎土。２は内底ナデの後、見込み周囲を回転ナデ。３は銭・遺存状態悪く判読が困難であるが、開元通寶か。銭周囲を擦った痕跡あり。

第三章　まとめ

本調査地の位置する名越ヶ谷は、鎌倉市街地の東端にある大規模な谷戸で、谷戸内には大小の支谷が開析している。谷戸の開口部には鎌倉市中から名越坂の切通しを経て三浦へと向かう大町大路と称される道路が東西に走り。谷戸奥に開かれた釈迦堂切通しは、大倉幕府へと通じる六浦路へとつながる。釈迦堂口東側は北条時政名越山荘（名越亭）と推定され、谷戸内のそれぞれの支谷は名越北条氏の居館のほかにも、多くの御家人が居住していたと考えられる。名越ヶ谷の谷戸一帯は鎌倉市中の防衛上の要地であった。狭小な面積での調査であったため、遺跡地の様相や性格を推定することは困難であったが、調査地周辺の様相を明らかにする資料の一つとして報告したい。

本調査では、８枚の生活面を確認した。それぞれの生活面は破砕泥岩による、比較的しっかりとした地業を行っている。地業層は焼痕の残る泥岩を多く含み、炭化物層が調査区に広がる部分も多く確認した。調査地を含む周辺域での火災の痕跡と思われる。第１面から第４面の地業層は、南から北に向かって緩やかに傾斜し、傾斜がやや急になる辺りで調査区外に遺構が延びる大型の土坑を確認している。土坑覆土には大型の泥岩を多く含み、土留めの遺構ではなかったかと推測しているが、限定された範囲での判断の為不安は残る。確認したそれぞれの生活面でピット・土坑などの遺構を発見し、礎板、あるいは根固めと考えられる泥岩が遺構底面に遺存する柱穴を確認したが、あまりに狭い面積での調査であったため、建物の範囲、規模を推定することは出来なかった。第３面で発見した遺構49は遺構の半分以上が調査区外に延びていたが、常滑窯の甕が土坑内に正位置で据えてあり据え甕と考えている。遺構廃棄の時点で埋められた土圧で上部が破損していたが、ほぼ一個体が出土した。甕内部の堆積土に特徴的な含有物は観察されなかったが、貯蔵遺構であったと思われる。調査面積の狭さもあって、出土した遺物はかわらけ・手づくね・舶載磁器（青磁・白磁・青白磁）・国産陶磁器（瀬戸・渥美・常滑）・火鉢・南伊勢系土鍋・砥石・鉄釘・鉄滓・銭・土師器と多種ではあったが、遺物整理箱数にして11箱と少量で、そのうち８箱は第３面・遺構49出土の常滑窯・甕破片であり遺物の総出土数量は少ない。第１面面上から第６面面上まで、調査区南端で120㎝、北端で60cmの間に８枚の生活面を確認し、それぞれの生活面で複数回の造り替えが行われていることを観察したが、出土した遺物は年代的な変化が見られず、概ね14世紀代といえる。調査区を大幅に狭めて確認した第７面・第８面は出土遺物がないために年代の比定ができない。

引用・参考文献

日本歴史大系第14巻　　平凡社　1984年刊
鎌倉市史　考古編　吉川弘文館　昭和42年刊
鎌倉市史　社寺編　吉川弘文館　昭和54年刊
鎌倉廃寺事典　貫達人　川副武胤　有隣堂　平凡社1984年刊
鎌倉事典　白井永二　平成４年刊
愛知県史（別編　窯業２中世・近世　瀬戸系）愛知県史編さん委員会　愛知県　平成19年刊
愛知県史（別編　窯業３中世・近世　常滑系）愛知県史編さん委員会　愛知県　平成19年刊
大宰府条坊跡XV（陶磁器分類編）大宰府市教育委員会　平成12年刊

遺構計測表（cm）

面	遺構№	長さ	幅	深さ	面	遺構№	長さ	幅	深さ
1	1	54	(32)	14	4	61	(19)	(19)	22
1	2	60	48	21	4	62	38	(24)	18
1	3	43	32	7	4	63	34	16	17
1	4	32	22	9	4	64	(30)	(18)	18
1	5	48	40	2	4	65	38	(18)	22
1	6	48	(32)	9	4	66	36	30	19
1	7	60	48	11	4	67	29	26	12
1	8	122	(130)	28	4	68	(90)	(21)	26
1	9	66	(40)	32	4	69	38	(23)	19
1	10	48	42	8	4	70	(36)	(22)	26
1	11	32	32	8	4	71	6	(16)	22
1	12	40	(35)	不明	4	72	44	(24)	15
1	13	27	(32)	4	4	73	(40)	(22)	17
1	14	35	32	13	4	74	(58)	(48)	19
1	15	36	30	17	4	75	34	33	12
1	16	23	21	13	4	76	(40)	(27)	26
1	17	40	(17)	12	4	77	52	(25)	18
1	18	45	32	28	4	78	33	(26)	13
1	19	44	35	12	4	79	60	(31)	26
2	20	25	24	7	4	80	46	(40)	19
2	21	22	19	8	4	82	(32)	30	30
2	22	52	(28)	14	4	83	(38)	36	36
2	23	59	(30)	12	4	84	(58)	(24)	(24)
2	24	60	(44)	17	4	85	42	(36)	(36)
2	25	58	(30)	19	4	86	(50)	(40)	(40)
2	26	39	32	9	4	87	(56)	(24)	(24)
2	27	106	(76)	11	5	88	35	(21)	15
2	28	26	23	13	5	89	22	(15)	13
2	29	56	45	16	5	90	38	36	20
2	30	66	(27)	17	5	91	36	(30)	25
2	31	45	(28)	12	5	92	38	27	18
2	32	34	28	21	5	93	42	(30)	22
2	33	58	(28)	7	5	94	42	0	24
2	34	78	(47)	17	5	95	22	11	24
2	35	34	30	10	5	96	41	22	10
2	36	27	24	不明	5	97	(56)	28	20
2	37	48	(36)	19	5	98	34	31	13
2	38	30	26	14	5	99	60	(38)	25
2	39	34	14	不明	5	100	44	(34)	14
2	40	24	21	7	5	101	53	(45)	36
2	41	(108)	160	29	5	102	30	(19)	22
2	42	49	38	38	5	103	43	35	19
3	43	42	(18)	16	5	104	(25)	(24)	12
3	44	24	19	8	5	105	30	27	0
3	45	28	28	24	5	106	34	(15)	16
3	46	36	(20)	19	6	107	(32)	(24)	10
3	47	26	24	22	6	108	33	(18)	26
3	48	31	29	14	6	109	45	41	12
3	49	96	(37)	40	6	110	46	16	12
3	50	100	(42)	44	6	111	58	(27)	17
3	51	(98)	184	44	6	113	48	(20)	23
3	52	(130)	(106)	23	6	114	52	(49)	17
3	53	(154)	(38)	39	6	115	28	28	23
4	54	33	(30)	16	6	116	32	30	12
4	55	(54)	44	20	6	117	37	(21)	11
4	56	31	(21)	17	6	118	46	34	17
4	57	18	(15)	15	6	119	33	30	20
4	58	60	(35)	35	6	120	48	(15)	17
4	59	(18)	(4)	17	6	121	38	(16)	9
4	60	30	(20)	19	6	122	16	33	12

出土遺物観察表

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径／長さ	底径／幅	器高／厚	観察内容
			単位：cm　（　）は復元値			観察内容 a：成形・調整　b：胎土・素地・材質　c：色調　d：釉調　e：焼成　f：遺存値　g：備考
図5-1	第1面 遺構1	かわらけ	8.1	6.2	1.6	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：ほぼ完形　g：口唇部に薄く煤付着・灯明皿か？
-2		かわらけ	7.0	5.0	1.8	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母多・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　c：橙色　e：良好　f：1/2程度
-3		かわらけ	6.7	5.0	1.6	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母多・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　c：橙色　e：良好　f：ほぼ完形
-4	第1面 遺構5	かわらけ	(7.4)	(5.1)	2.0	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味やや良土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-5		鉄釘	残存長 4.4	0.6	0.4	f：先端欠損　g：全体的に錆が激しい
-6	第1面 遺構7①	かわらけ	6.9	4.8	1.7	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂多・雲母・赤色粒多・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味粗土　c：橙色　e：良好　f：ほぼ完形
-7	第1面 遺構8	かわらけ	(12.2)	6.8	3.5	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒を含む砂質気味良土　c：淡橙色　e：良好　f：1/6程度
-8		瀬戸 灰釉卸皿				a：ロクロ　b：明黄灰色　微砂粒を含む良土　c：淡灰緑色を呈する灰釉をツケ掛け　e：良好・硬質　f：底部小片　g：藤澤編年中期か？
-9	第1面 遺構9①	常滑 甕	(7.2)	16.0		a：輪積み　外底砂目底　b：暗灰色　微砂・白色粒・小石粒　c：黒灰色～暗褐色　e：良好・硬質　f：底部片
-10	第1面 遺構11	かわらけ	(7.7)	(5.7)	1.9	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒を含む砂質気味良土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-11		瀬戸 灰釉折縁深皿				a：ロクロ　b：黄味がかった灰白色　緻密良土　c：灰緑色を呈する灰釉をハケ塗り　外底露胎　e：良好・堅緻　f：底部小片　g：内底面に4本単位の櫛掻文あり　藤澤編年中期
-12	第1面 遺構18	かわらけ	(7.9)	(5.2)	2.2	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕・薄手碗型　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味良土　c：橙色　e：良好　f：1/3程度
-13		かわらけ	(11.2)	(7.0)	2.9	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質やや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-14		かわらけ	(11.2)	(7.0)	3.3	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-15	第1面 遺構19	かわらけ	12.3	8.0	3.7	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒・小石粒を含む砂質粗土　c：黄橙色　e：良好
-16		かわらけ	13.5	8.3	3.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粗土　c：橙色　e：良好　f：完形　g：口唇部に故意的に打ち欠いた様な痕跡あり
-17	第1面 面上	かわらけ	(13.2)	(8.0)	3.75	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯含む砂質気味やや粗土　c：橙色　e：良好　f：1/3程度
-18		瀬戸 灰釉卸皿		(14.0)		a：ロクロ・外底回転糸切　b：明黄灰色　微砂粒を含む良土　c：淡灰緑色を呈する灰釉をツケ掛け　e：良好・硬質　f：底部1/2程度　g：藤澤編年中期Ⅲか？
-19		竜泉窯 青磁椀				b：黄味がかった灰白色　緻密　d：淡青灰色半透明釉をやや薄く施す　貫入あり　e：堅緻　f：口縁部片　g：二次焼成の為か白濁している
-20		常滑 甕				a：輪積み　b：微砂・白色粒・長石・石英を含む灰色　c：暗褐色　d：外面に自然降灰　e：良好・硬質　f：胴部片　g：外面に単×（バツ）文＋縦線文＋横線1本のスタンプ文あり
-21	第1面 構成土	土師質 火鉢				a：輪積み　b：橙色　微砂・白色粒・小石粒、砂質粗土　c：褐色　e：軟質　f：口縁部片
図6-1	第2面 遺構41	青白磁 梅瓶				b：灰白色　白色粒・黒色粒を含む緻密土　d：淡青灰色半透明釉をやや薄く施釉　e：堅緻 f：胴部片　g：外面に唐草文
-2	第2面 構成土	研磨石製品	最大長 7.2	最大幅 3.5	最大厚 3.5	a：砥面は1面使用？　表面は刃物による切り痕みたいなケズリ痕あり　b：流紋粗粒凝灰岩　c：赤味を帯びたマーブル状、表面は水分を含み黒く変色　f：完形？　g：天草産か？砥石とは断定できないが、一部金属製ではない石より柔らかいものを磨いたり、砥いだりした痕跡あり
図7-1	第3面 遺構49	常滑 甕	(55.2)	22.4	85.6	a：輪積み　b：暗褐色　微砂・白色粒・小石粒　c：褐色　d：外面口縁部～肩部・内底面に黄色味がかった灰白色を呈する自然降灰あり　e：良好・硬質　f：口縁部・体部1/6～底部　g：肩部に単×（バツ）文＋縦線文のスタンプ文あり　中野編年7～8型式
-2	第3面 遺構48①	かわらけ	12.6	8.4	3.2	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質やや粗土　c：橙色　e：良好　f：完形
図8-1	第3面 遺構51上層	かわらけ	(7.5)	(5.4)	1.7	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・土丹粒を含むやや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/4程度
-2		かわらけ	(7.1)	(4.8)	1.55	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む粗土　c：黄橙色　e：良好　f：2/3程度
-3		かわらけ	(11.9)	(7.4)	3.1	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-4		かわらけ	(13.2)			a：ロクロ　b：微砂・雲母・白色粒・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質気味やや粗土　c：橙色～黄橙色　e：良好　f：1/5程度
-5		瀬戸 入子				a：ロクロ　b：灰白色　黒色粒若干混じる緻密良土　c：淡黄灰色　e：良好・堅緻　f：口縁部片　g：口唇部に自然降灰
-6		常滑甕転用 研磨製品	7.8	8.9	1.0	a：常滑甕体部の断面・外表面に研磨痕あり　b：器表と共に暗褐色　微砂粒・長石粒　e：良好・硬質　f：完形
-7	第3面 遺構51下層	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.6	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯多を含む砂質気味良土　c：黄橙色　e：良好　f：1/3程度
-8		かわらけ	(12.4)	(6.8)	3.0	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒多を含む粉質気味粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-9		竜泉窯青磁 劃花文碗	口縁部片			a：ロクロ　b：灰色　少量の黒色粒を含む精良緻密土　d：暗青緑色半透明釉を薄く施釉　e：堅緻　f：口縁部片　g：外面は無文・内面は分割線のみで、文様は不明

図版番号	出土位置 出土層位	種別	口径／長さ	底径／幅	器高／厚	観察内容
			単位：cm　（　）は復元値			観察内容a：成形・調整　b：胎土・素地・材質　c：色調　d：釉調　e：焼成　f：遺存値　g：備考
図8--10	第3面 遺構52	かわらけ	(8.2)	(6.4)	1.7	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含むやや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/5程度
-11		かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.65	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯多・土丹粒を含む粉質気味やや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/2程度
-12		白磁 口兀皿		(5.6)		a：ロクロ　b：灰白色　少量の黒色粒を含む精良緻密　d：青味がかった乳白色不透明釉をやや厚く施釉　気泡・キズあり　e：堅緻　f：底部1/6　g：底部外面は板状工具で釉をのばしている箇所あり
-13		青白磁 梅瓶				b：灰白色　少量の黒色粒を含む精良緻密　d：水青色半透明釉をやや薄く施釉　気泡あり　e：堅緻　g：外面に牡丹唐草文
-14		常滑 甕				a：輪積み　b：暗灰色　微砂・白色粒・小石粒　c：黒褐色　d：外面口縁部と肩部に自然降灰　e：良好・硬質　f：口縁部片　g：中野編年6 a 型式
-15	第3面 遺構53	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.6	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/5程度　g：内面は褐鉄付着
-16		かわらけ	(11.9)	(7.4)	2.7	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質気味良土　c：橙色　e：良好　f：1/5程度
-17	第3面 面上	東濃型 山茶碗	(11.6)			a：ロクロ　b：色調と共に淡灰色　砂粒を少量含む緻密良土　d：内外口唇部・内面口縁部に淡緑色の自然降灰あり　e：良好・硬質　f：口縁部1/4程度
-18		瓦質火鉢				a：輪積み　b：色調と共に黄橙色　砂粒・白色粒・小石粒を含む　e：軟質気味　f：口縁部片
-19	第3面 構成土	かわらけ	(9.8)	(8.0)	(2.1)	a：手づくね　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む粉質土　c：黄橙色　e：やや甘い（胎芯生焼け気味）　f：1/4程度　g：手づくねの指頭調整不明瞭
-20		かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.65	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・白色粒・土丹粒・小石粒を含む砂質粗土　c：橙色　e：良好　f：1/4程度
-21		かわらけ	(12.8)	(9.0)	3.1	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質やや粗土　c：暗橙色・硬質気味　e：良好　f：1/5程度
-22		かわらけ	(12.5)	(6.8)	3.25	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/3程度
-23		白磁 口兀皿		(6.0)		a：ロクロ　b：灰白色　微砂粒を含む精良緻密　d：青味がかった乳白色不透明釉をやや厚く施釉　キズあり　e：堅緻　f：底部1/2　g：底部外面は板状工具で釉をのばしている箇所あり
-24		常滑 片口鉢Ⅰ類				a：輪積み　b：黒色粒・長石を含む淡灰色　c：淡灰色　e：良好・硬質　g：中野編年6 a 型式
図9-1	第4面 遺構61	常滑 甕				a：輪積み　b：暗灰色　微砂・長石・石英を含む　c：赤褐色　d：内面口唇部と外面肩部に自然降灰　e：良好・硬質　f：口縁部片　g：中野編年7型式
-2	第4面 遺構74	かわらけ	7.6	6.6	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：完形
-3		かわらけ	7.5	6.0	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや良土　c：黄橙色　e：良好・硬質　f：2/3程度
-4		かわらけ	(7.6)	(6.2)	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質気味やや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/2程度
-5		かわらけ	7.6	6.5	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味良土　c：黄橙色　e：良好・硬質　f：ほぼ完形
-6		かわらけ	(7.2)	(6.0)	1.3	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂多・雲母・白色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土　c：黄橙色　e：良好　f：1/3程度
-7		かわらけ	7.4	6.0	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや良土　c：黄橙色　e：良好・硬質　f：ほぼ完形
-8		かわらけ	(7.0)	(5.6)	1.3	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・白色粒・海綿骨芯を含む砂質気味やや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-9		かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂多・雲母・海綿骨芯・小石粒を含む砂質粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/6程度
-10		かわらけ	7.3	6.0	1.4	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質気味良土　c：黄橙色　e：良好・硬質　f：ほぼ完形
-11		かわらけ	(7.7)	(5.5)	1.6	a：ロクロ・外底回転糸切　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒・礫を含む砂質粗土　c：黄橙色　e：良好　f：1/3程度
-12		かわらけ	12.3	9.0	3.5	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土　c：橙色　e：良好　f：完形
-13	第4面 遺構85	常滑 片口鉢Ⅰ類				a：輪積み　b：黒色粒・長石・石英を含む淡灰色　c：淡灰色　e：良好・硬質　f：口縁部片　g：体部内面に磨滅痕あり　中野編年6 a 型式
図10-1	第5面 遺構103	白磁 無頸小壷	(10.8)			b：白色　少量の黒色粒を含む精良緻密　d：内外面に乳白色半透明釉をやや厚く施釉　直立気味の口縁部と工具による調整痕のある下部は無釉　貫入・気泡あり　e：堅緻　f：1/5程度　g：肩部に珠文・胴部に蓮弁状の文様（不鮮明）が配される、広口小壷の可能性もあり
-2	第5面 精査時	かわらけ	7.8	5.1	2.0	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含むやや粗土　c：黄橙色　e：良好　f：2/3程度　g：口唇部に煤付着・灯明皿
-3		白磁碗				a：ロクロ　b：白色　少量の黒色粒を含む精良緻密　d：青味がかった乳白色半透明釉を薄く施釉　キズあり　e：堅緻　f：口縁部片内面に劃花文あり
図11-1	第6面 精査時	青白磁 壷蓋	径5.4 ×高さ 1.1			b：白色　精良緻密　d：水青色透明釉を薄く施釉　内面露胎　e：堅緻　f：完形　g：頂部に陽刻の花弁を配す
図13-1	廃土山 表採	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.3	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・海綿骨芯・土丹粒・小石粒を含む粗土　c：橙色　e：良好　f：1/5程度
-2		かわらけ	(7.6)	5.6	1.7	a：ロクロ・外底回転糸切・板状圧痕　b：微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む良土　c：黄橙色　e：良好　f：2/3程度
-3		銭	外径2.2　内径1.8			f：完形　g：開元通寶？　初鋳年621　唐　楷書　表面・縁に擦り加工が施されているか

出土破片数表

遺構No.	面	かわらけ（大）	かわらけ（小）	手づくね（大）	手づくね（小）	青磁劃花文碗	青磁無文碗	白磁碗	白磁口兀皿	白磁壷	青白磁蓋	青白磁梅瓶	褐釉壷甕類	瀬戸入子	瀬戸卸皿	瀬戸折縁深皿	瀬戸壷	渥美甕	常滑甕	常滑片口鉢Ⅰ類	擦り常滑	山茶碗	火鉢	南伊勢系土鍋	砥石	石製品	玉石	鉄釘	鉄滓	銅銭	土師器坏	土師器甕	近現代
1	1	15	3																													
2	1	8																	1													
3	1	7																														
4	1	1																	1													
5	1	13	2																								1					
6	1	3																														
7	1	10	1																1													
8	1	31													1				3													
9	1	1																	1													
10	1	3																														
11	1		1													1																
14	1																		2													
18	1	3	5																1									1				
19	1	7	3																1													
1面面上	2	51	3				1								1				9				1									
1面構成土	1	23	4																14				1									1
攪乱		5		1															12												1	2
23	2		2																				1									
24	2	2	7																3													
25	2		3																				1									
26	2		2																													
27	2	4																	2													
28	2																		1													
29	2		1																													
30	2		1																1													
32	2	1																	1													
33	2		3																													
34	2																		1													
35	2	2																					1					1				
38	2		3																													
39	2																		1													
41	2	11										1							4													
42	2	14	5																3													
2面面上	2		16																15													
2面構成土	2	26	3									1					2		4				2		1							

遺構No.	面	かわらけ（大）	かわらけ（小）	手づくね（大）	手づくね（小）	青磁劃花文碗	青磁無文碗	白磁碗	白磁口冗皿	白磁壷	青白磁蓋	青白磁梅瓶	褐釉壷甕類	瀬戸入子	瀬戸卸皿	瀬戸折縁深皿	瀬戸壷	渥美甕	常滑甕	常滑片口鉢Ⅰ類	擦り常滑	山茶碗	火鉢	南伊勢系土鍋	砥石	石製品	玉石	鉄釘	鉄滓	銅銭	土師器坏	土師器甕	近現代
43	3	3																														
44	3		1																1														
45	3	4																	1														
46	3	3																	1														
47	3	5	3																1														
48	3	5																	1														
49	3																		1														
50	3	2																	4														
51下層	3	6	1			1													9														
51上層	2	22	3											1					6		1												
52	3	5	3						1			1							4														
53	3	6	1																1														
3面面上	3	8																	1			1	1										
3面構成土	3	46	2	3					1										12	1													
54	4	2																				1											
55	4	1																															
56	4	1																	1														
58	4			3			1																										
61	4																		1														
62	4		3																														
63	4		3																2														
66	4	2																							1								
67	4	5																	1														
68	4		8													1			4														
69	4				3																			1									
70	4	4																	1														
71	4																																
73	4		1																														
74	4	1	14																														
76	4																		2														
79	4		3	1																													
80	4	5																3															
82	4																						1										
83	4	3																															
84	4																		1														

遺構No.	面	かわらけ（大）	かわらけ（小）	手づくね（大）	手づくね（小）	青磁劃花文碗	青磁無文碗	白磁碗	白磁口兀皿	白磁壷	青白磁蓋	青白磁梅瓶	褐釉壷甕類	瀬戸入子	瀬戸卸皿	瀬戸折縁深皿	瀬戸壷	渥美甕	常滑甕	常滑片口鉢Ⅰ類	擦り常滑	山茶碗	火鉢	南伊勢系土鍋	砥石	石製品	玉石	鉄釘	鉄滓	銅銭	土師器坏	土師器甕	近現代
85	4																			1												
86	4			1																												
4面面上	4		2																1													
4面構成土	4	1																	3								1				1	
88	5			1																											1	
90	5																															
91	5																		3													
92	5			1																						1					2	
93	5			2																												
94	5			1																										1	2	
96	5	7																														
97	5	3		1																												
98	5			1																										1	1	
99	5	10																														
100	5																															
101	5	2								1			1																			
102	5																														2	
103	5		1							1																						
104	5		1																													
106	5			2									1						2													
5面面上	5	2		2				1											1													
5面構成土	5		1	10																										1	1	
113	6																														1	
118	6																														4	
119	6																													1	1	
120	6																														3	
122	6			1																												
6面面上	6	1									1																				4	
6面構成土	6																														1	
廃土山表採	1	9	1	1															2							1			1		3	

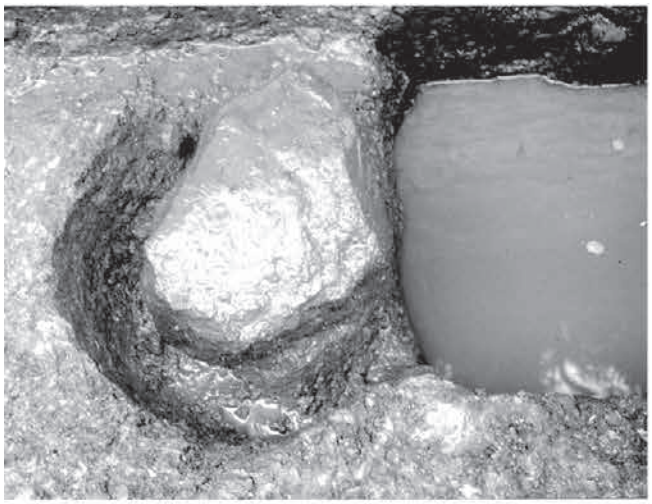
図版１

◀第１面全景（北から）

▲第１面調査区南端部遺構群
（遺構１・２・３・４・６　東から）

▼第２面全景（遺構41完掘前　北から）

▼第２面全景（遺構41完掘後　北から）



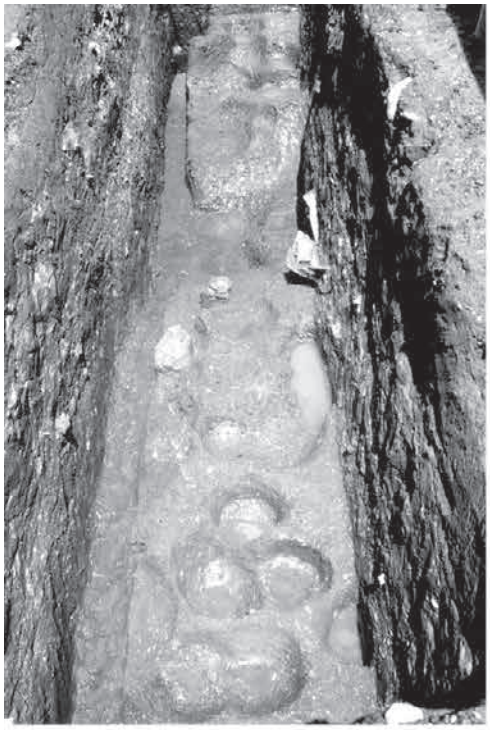
▲第２面遺構37（東から）

▶第３面全景（北から）

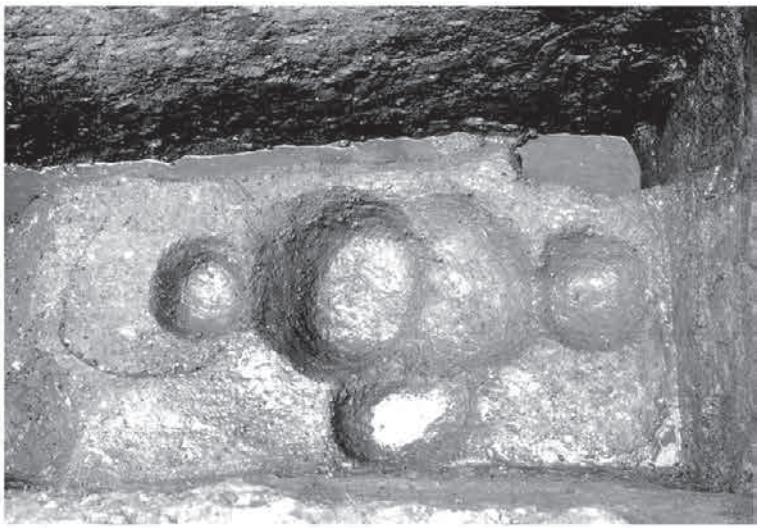
◀第３面全景（南から）

第３面遺構49（西から）▶

図版３



◀第４面全景（南から）

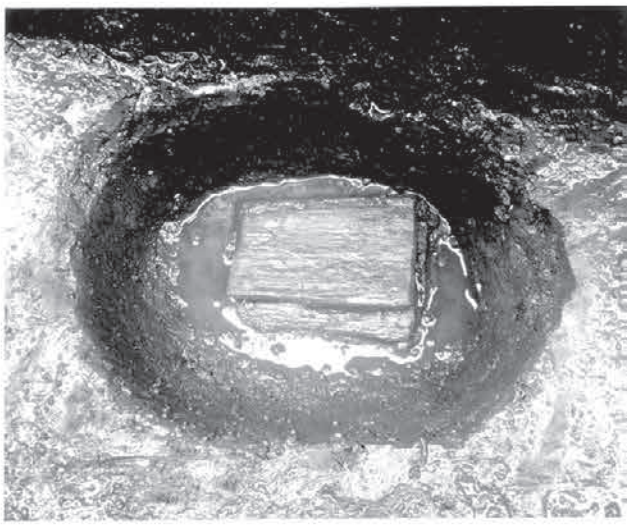


▲第４面遺構54・55・56・77・78（西から）

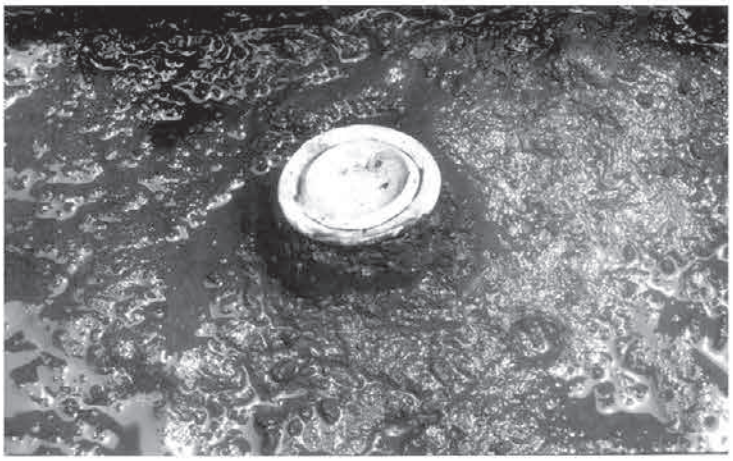
▲第４面遺構74（西から）

▼第５面全景（北から）

◀第６面全景（北から）

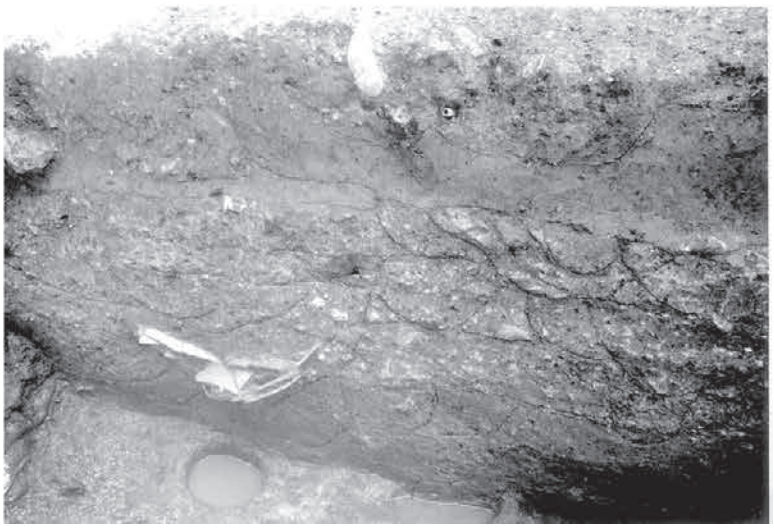


▲第６面遺構118礎板検出状況（西から）



◀第６面青白磁蓋出土状況（西から）

調査区東壁土層堆積状況▶
（グリッド３～４付近　北西から）



図版５

〈1 面〉

▽遺構1

5-1

5-2

5-3

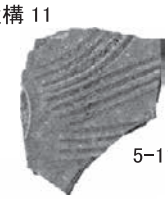
▽遺構 7

5-6

▽遺構 8

5-8

▽遺構 11



5-11

▽遺構 18

5-12

▽遺構 19

5-15

▽遺構 9

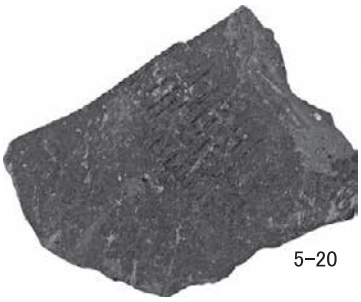
5-9

5-14

5-16

▽面上

5-18



5-20

〈2 面〉

▽遺構 41

6-1

▽構成土

6-2

〈3 面〉

▽遺構 49

7-1

<3 面 >

▽遺構 48

7-2

▽遺構 51

8-2

8-4

8-7

8-9

8-6

▽遺構 52

8-11

8-12

8-13

8-14

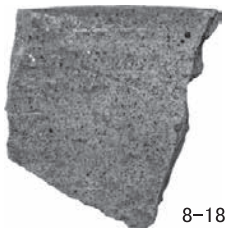
▽遺構 53

8-15

8-16

▽面上

8-17



8-18

▽構成土

8-19

8-22

8-21

8-23

<4 面 >

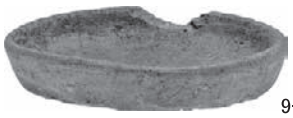
▽遺構 61

9-1

▽遺構 74

9-2

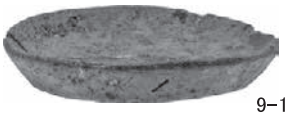
9-3



9-5

9-6

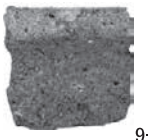
9-7



9-10

9-12

▽遺構 85



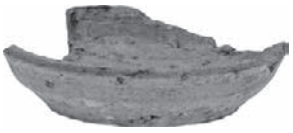
9-13

<5 面 >

▽遺構 103

10-1

▽面上



10-12

10-3

<6 面 >

▽面上

11-1

大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

雪ノ下四丁目 570 番 1 地点

例　言

1．本報は、「大倉幕府周辺遺跡群」（№49）内、雪ノ下四丁目570番1地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2．調査期間　　2006年（平18）7月11日～2006年（平18）8月22日

3．調査面積　　32㎡

4．略　称　　YO4570

5．調査体制

担　当　者	馬淵和雄
調　査　員	鍛治屋勝二・松原康子・沖元道（資料整理）
調査補助員	鈴木弘太・岩崎卓治（資料整理）・森谷十美（資料整理）
作　業　員	河原龍雄･沼上三代治･田島道夫･鈴木啓之(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)

6．本報作成分担

遺構図整理	沖元
遺物実測	松原・沖元・岩崎
同墨入れ	松原・沖元・岩崎
同観察表	森谷
同計量表	沖元
同写真撮影	沖元
原稿執筆	馬淵
編集・総括	馬淵

縄文土器に関しては次の方々の御教示を得た。記して感謝したい。
大竹憲昭・小笠原永隆・劔持輝久・大工原豊

目　次

本　文　目　次

第一章　調査地点概観 …… 182

第二章　調査の概略 …… 185

1．調査にいたる経緯
2．調査方法
3．調査の経過

第三章　調査結果 …… 187

1．土層堆積
2．各説―調査面と出土遺物

第四章　まとめ―調査地点における滑川右岸の変遷について …… 203

挿　図　目　次

図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 …… 183
図２　明治15年頃の大倉一帯…… 185
図３　調査区設定図 …… 186
図４　調査区壁土層図 …… 188
図５　近世面 …… 189
図６　第１河床面，同出土遺物 …… 190
図７　第２河床面，同出土遺物（１）…… 191
図８　第２河床面出土遺物（２）…… 192
図９　第２河床面出土遺物（３）…… 193
図10 第３河床面，同出土遺物 …… 194
図11 第４・５河床面，
　　第５河床面出土遺物（１）…… 195
図12 第５河床面出土遺物（２）…… 196
図13 第５河床面出土遺物（３）…… 197
図14 第６河床面出土遺物（１）…… 198
図15 第６河床面出土遺物（２）…… 199
図16 第７・８河床面，同出土遺物 …… 200
図17 第６～８河床面出土遺物（１）…… 201
図18 第６～８河床面出土遺物（２）…… 202
図19 第９河床面出土遺物 …… 202
図20 第９河床面より下，最終状況 …… 202
図21 表採遺物 …… 203

表　目　次

表１　出土遺物観察表（１）…… 204
表２　出土遺物観察表（２）…… 205
表３　出土遺物観察表（３）…… 206
表４　出土遺物観察表（４）…… 207
表５　出土遺物観察表（５）…… 208
表６　出土遺物観察表（６）…… 209
表７　出土遺物計量表（１）…… 210
表８　出土遺物計量表（２）…… 211
表９　出土遺物計量表（３）　…… 212

図　版　目　次

図版１…… 213
　１－１　大御堂橋より調査地点を望む
　１－２　県道より調査地点を望む
　１－３　調査地点近景
　１－４　Ⅰ区第２河床面全景（南から）
　１－５　Ⅰ区第２河床面全景（東から）
　１－６　Ⅱ区第１河床面軒平瓦（図６－６）
　　出土状況（北東から）
図版２…… 214
　２－１　Ⅰ区第３河床面全景（南から）
　２－２　Ⅰ区第３河床面全景（東から）
　２－３　Ⅰ区第３河床面五輪塔水輪(図10－１)
　　出土状況（東から）
　２－４　Ⅰ区第３河床面五輪塔水輪(図10－１)
　　出土状況（西から）
　２－５　Ⅰ区第４・第５河床面全景（南から）
　２－６　Ⅰ区第４・第５河床面全景（東から）
図版３…… 215
　３－１　Ⅱ区第４・第５河床面（南から）
　３－２　Ⅱ区第５河床面丸瓦（図13－44）
　　出土状況（南から）
　３－３　Ⅰ区第７・第８河床面全景（東から）
　３－４　Ⅰ区第７・第８河床面全景（南から）
　３－５　Ⅰ区第７・第８河床面遺物出土状況
　　（西から）
　３－６　Ⅰ区第７・第８河床面土師器皿
　　（図17－8）出土状況（西から）
図版４…… 216
　４－１　Ⅰ区東壁土層断面
　４－２　Ⅰ区西壁土層断面
図版５…… 217
　５－２　Ⅰ区西壁土層断面下部
　５－２　Ⅰ区西壁土層断面下部
図版６…… 218
　６－１　Ⅱ区東壁土層断面
　６－２　Ⅱ区西壁土層断面
　６－３　Ⅱ区深掘り坑西壁土層断面
図版７…… 219
　出土遺物１
図版８…… 220
　出土遺物２
図版９…… 221
　出土遺物３
図版10 …… 222
　出土遺物４
図版11 …… 223
　出土遺物５
図版12 …… 224
　出土遺物６

第一章　調査地点概観

位　置

六浦道（県道金沢鎌倉線）は鶴岡八幡宮東の筋違橋交差点から旧「岐れ道」交差点（関取橋）まで約350ｍの間直線をなす。その北側一帯を占めるのが大倉幕府跡である。神奈川県遺跡台帳は大倉幕府西縁を本来の線よりも100ｍ以上東に設定している。台帳上でこの「大倉幕府跡」とされた場所の東・西・南側を囲むのが、「大倉幕府周辺遺跡群」である。調査地点は幕府東南角から県道金沢鎌倉線を20～30ｍ西に進み、そこから約20ｍ南に入った、滑川に面した位置にある。東側には東御門川が流れているので、この場所は滑川と東御門川の合流地点右岸にあたる。地番は鎌倉市雪ノ下四丁目570番1。

なお、県遺跡台帳で大倉幕府西限が横浜国大付属小学校校庭の東縁になっているのは、『鎌倉市史　総説編』（高柳1959）以来の明白な誤りである。これは明治24年の神奈川師範学校設置時に敷設された道であり、それ以前に存在した筋違橋から北上する道が本来の幕府西限であった（この道の続きは校庭の北側に再び現われる）。

地　勢

現況では滑川の河岸に位置しているが、地形的に見て調査地点がかつて河川敷に含まれていたことは間違いない。このことは後述の調査結果からも明らかで、ここには鎌倉平野部を形成する茶褐色～黒褐色の粘質土はなく、角の磨り減った河川特有の礫や岩塊類が深くまで地層を構成している。

地勢上からみれば、この付近は朝比奈峠から下ってきた川が狭い谷間を抜け、それにいくつかの支流が合流して市内中心部の沖積平野を形成し始めるあたりである。調査地点の東200ｍで北から二階堂川が、同じく東80ｍで南から大御堂川が流れ込み、さらに隣地では、北から東御門川が流れ込む。調査地点の現地表標高は9.7～9.8ｍで、前面の六浦道の現況路面からは40～50㎝ほど。また、この付近の滑川の河床は5.2ｍ程度なので、4.5～4.6ｍ前後の比高差があることになる。

歴史的環境

縄文時代の遺物が、若干高い場所になる荏柄天神社の前面で採集されている（赤星1959）。これには前期諸磯b式土器が含まれており、一帯の離水時期についての議論が必要であろう。滑川流域は古くから開けており、「大倉幕府周辺遺跡群」に含まれる近在の滑川崖線上には弥生時代中期後半～後期の大きな集落がある（地点7ほか，馬淵1998・同1999・斉木2007）。また律令期の集落も指呼の距離で発見されている（地点58・5，馬淵ほか1985・馬淵1993）。

鎌倉時代に入ると、この付近は鎌倉の中心となる。治承四年（1180）年、源頼朝の「新亭」が大倉の地に造られ、以後「大倉幕府」と呼ばれて源氏三代将軍が政務を執り行う場所となった。南北朝時代の歴史書『保暦間記』は、そこは先祖の頼義がはじめて鎌倉に館を構えたところだといっているが、信頼性については検討の要がある。幕府が若宮大路の東側に移転した鎌倉時代中期以後は記事が減るが、大倉幕府東南角は、本来の二階堂大路が六浦道から分岐する地点でもあり（現在の大塔宮行きのバス通りは明治にできた道）、かつて「大倉辻」と呼ばれた場所であった可能性がある。「大倉辻」とは、鎌倉幕府が『吾妻鏡』建長三年（1251）12月3日・同文永二年（1265）3月5日の二度、「鎌倉中」の商業地区を指定したときに現れる地名である（『吾妻鏡』同日条）。鎌倉後期に調査地点一帯がかなり繁華な場所であったことがうかがえる。

また、滑川の上流150ｍほどの対岸の谷には、頼朝が父義朝および義朝と共に死んだ鎌田正清追福のために建立した勝長寿院があった。谷の名称はそれにちなんで「大御堂谷（おおみどうがやつ）」という。また勝長寿院は大

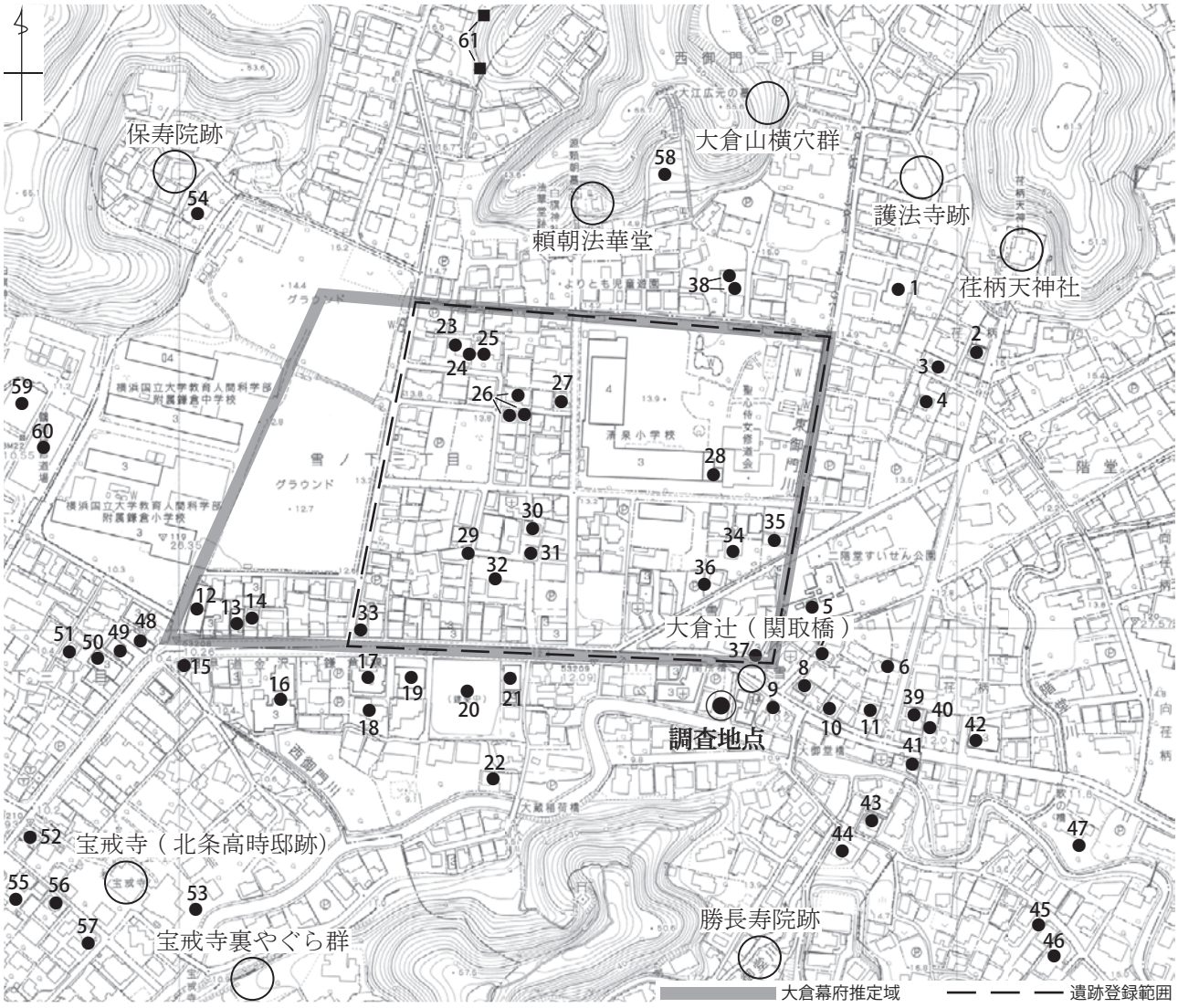


図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡（網目内が大倉幕府推定域，点線内が県遺跡台帳登録範囲）（1/5000）

倉御所の南に位置するためか、「南御堂」ともいう。寺の造営は元暦元年（1184）11月26日に「地曳始」がおこなわれて始まり、文治元年（1185）10月24日の「供養」で完成をみている（『吾妻鏡』同日条）。廃絶時期についてはよくわかっていないが、『快元僧都記』天文九年（1540）9月23日条に、遷宮のときの「簾中方の社参のこと、勝長寿院に尋ねられ」とあるのを最後に、健在を示す記事は見当たらなくなる。調査区の東100ｍの滑川にかかる橋を「大御堂橋」という。

大倉幕府東南角の関取橋西詰には、天文十七年（1548）、玉縄城主北条氏康により荏柄社造営料徴収のための関所が置かれた（「荏柄天神社造営関定書案」『神奈川県史　資料編』3－6863）。以来この地には「関取場」の名がついた。賦課の対象は「商人方」と「道者方」に分けられ、荷物や馬に関銭がかけられている。また他国への飛脚からも徴収しているが、往来の道俗や地元民には課していない。関取場については、発掘調査でもそれらしき礎石建物が発見されている（地点18，馬淵ほか1990）。

その他近辺の発掘調査地点については、図１を参照してほしい。

図１調査地点名

調査地点名の「地点」「遺跡」は省略。発行者が鎌倉市教育委員会の場合はこれを省略。調査団の名称が遺跡名と同じ場合は「調査団」とのみ記す

略称は次のとおり

『市緊急報告書』―『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』

『急傾斜地報告書』―『鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』

大倉幕府周辺遺跡群（№49）　本調査地点 雪ノ下四丁目570番１　1.二階堂字荏柄58-4外（2000原）原2002『市緊急報告書』18-1　2.二階堂字荏柄76-7外（2006伊丹）　3.二階堂字荏柄76-4（2007宮田）　4.二階堂字荏柄27-3の一部（2002原）原2006『市緊急報告書』22-1　5.二階堂字荏柄38-1（1991馬淵）馬淵1993『市緊急報告書』9-2　6.二階堂字荏柄3-6外（2006原/2008原・山口）　7.雪ノ下字大倉耕地562-30（2007馬淵）　8.雪ノ下字大倉耕地562-16（2000福田）菊川泉2001『市緊急報告書』17-2　9.雪ノ下四丁目567-7（2002馬淵）馬淵2004『市緊急報告書』20-2　10.雪ノ下天神前562-29（1994福田）福田1996『市緊急報告書』12-1　11.雪ノ下大倉耕地565-4（1989菊川英）菊川英1991『市緊急報告書』7　12.雪ノ下三丁目606-1（1991菊川英）菊川英1993『市緊急報告書』9-3　13.雪ノ下三丁目607外（1992菊川英）菊川英1994『市緊急報告書』10-1　14.雪ノ下三丁目607-1（2001降矢）降矢2004『市緊急報告書』20-2　15.雪ノ下四丁目600（1980市教委）　16.雪ノ下四丁目610-2（1983-84玉林）未報告　17.雪ノ下四丁目620-18(1980河野）未報告　18.雪ノ下四丁目620-2（1980赤星）　19.雪ノ下四丁目620-5（1996馬淵）馬淵1998『市緊急報告書』14-2・馬淵1999『大倉幕府周辺遺跡群』調査団　20.雪ノ下四丁目581-5（2003齋木）齋木2007『大倉幕府周辺遺跡発掘調査報告書』㈲鎌倉遺跡調査会　21.雪ノ下四丁目581-2（1981-82松尾）未報告　22.雪ノ下四丁目580-10外（2000原）原2001『市緊急報告書』17-2

大倉幕府跡（№253）　23.雪ノ下三丁目693-8（2009齋木・押木）　24.雪ノ下三丁目693-1（2010宮田・滝澤）　25.雪ノ下三丁目694-18（2009宮田・安藤）　26.雪ノ下三丁目701-14・701-3・701-1（2002-2003馬淵・滝澤）馬淵ほか2005『市緊急報告書』21-1　27.雪ノ下三丁目704-3外（2005福田）福田2011『市緊急報告書』27-2　28.雪ノ下三丁目707-1（1990宮田）　29.雪ノ下三丁目651-8（1997小林）汐見1999『市緊急報告書』15-2　30.雪ノ下三丁目648-3（2009原・山口）　31.雪ノ下三丁目648-8（2010齋木・降矢）　32.雪ノ下三丁目629-1（2007森）宮田他2011『大倉幕府跡発掘調査報告書』㈱博通　33.雪ノ下三丁目618-4（2000小林）汐見2002『市緊急報告書』18-1　34.雪ノ下三丁目637-6外（2008伊丹・宇都）　35.雪ノ下三丁目637-4（2006熊谷）熊谷2011『市緊急報告書』27-2　36.雪ノ下三丁目635-2外（2008齋木・熊谷）　37.雪ノ下字大倉耕地569-1（1989馬淵）馬淵1990『大倉幕府周辺遺跡群』発掘調査団

大倉幕府北遺跡（№193）　38.西御門二丁目756-10・756-6（2004宮田・滝澤）滝澤2009『市緊急報告書』25-1

横小路周辺遺跡（№259）　39.二階堂字荏柄10-6（1998福田）福田2000『市緊急報告書』16-2　40.二階堂字荏柄10-1（2001原）原2003『市緊急報告書』19　41.雪ノ下五丁目557-1（1996手塚）野本1998『市緊急報告書』14-2　42.二階堂字荏柄9-1（1988菊川）菊川1990『市緊急報告書』6

田楽辻子周辺遺跡（№33）　43.浄明寺一丁目556-6外（2009押木）押木2012『市緊急報告書』28-2　44.雪ノ下五丁目555-1（2000福田・原）福田2006『市緊急報告書』22-1　45.浄明寺一丁目661（1998宮田）森2000『市緊急報告書』16-1　46.浄明寺字釈迦堂658（1989手塚）手塚・田畑1990『釈迦堂田楽辻子遺跡』発掘調査団

杉本寺周辺遺跡（№158）　47.二階堂字杉本932-1他８筆（2005宮田）2007『杉本寺周辺遺跡発掘調査報告書』㈱博通

政所跡（№247）　48.雪ノ下三丁目965（1990手塚）瀬田1992『市緊急報告書』8　49.雪ノ下三丁目966-1（1990手塚）瀬田1992『市緊急報告書』8　50.雪ノ下三丁目971-6（1997手塚・野本）　51.雪ノ下三丁目970-2外（1997手塚）野本1999『市緊急報告書』15-2

北条高時邸跡（№281）　52.小町三丁目426-3（1994原）原他1996『市緊急報告書』12-1　53.小町三丁目451-1（2004菊川）菊川・森2004『北条高時邸跡』㈱斉藤建設

保寿院跡（№250）　54.西御門一丁目922-4（2004宮田）宮田・滝澤2007『市緊急報告書』23-2

若宮大路周辺遺跡群（№242）　55.小町三丁目425-1の一部（2005原）原・宇都2012『市緊急報告書』28-1　56.小町三丁目425-3（2004原）原・宇都2013『市緊急報告書』29-1　57.小町三丁目455-4（1998原）

史跡・法華堂跡（源頼朝墓・北条義時墓）　58.西御門二丁目686他（2005福田）福田他2005『北条義時法華堂跡』

史跡・鶴岡八幡宮境内　59.雪ノ下二丁目1051-1内（1982松尾）松尾他1985『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』　60.雪ノ下二丁目1051-3内（1979齋木）齋木他1983『研修道場用地発掘調査報告書』鎌倉市鶴岡八幡宮

西御門東やぐら群（№449）　61.西御門一丁目22-1・23・25-1・2（2001・2002・2003鈴木）鈴木他「西御門東やぐら群　かながわ考古学財団調査報告181」（財）かながわ考古学財団

第一章引用・参考文献（上記以外）

赤星直忠1959　『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館

高柳光寿1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館

図２　明治15年頃の大倉一帯（迅速測図第１測期第10測回　明治15年５・６月）(1/20000)

第二章　調査の概略

１．調査にいたる経緯

雪ノ下四丁目570番1において、地盤の柱状改良工事をともなう個人専用住宅建設の照会があった。大倉幕府周辺遺跡群の一角に位置しているが、滑川の川べりにあって設計変更は困難であることから発掘調査が必要とされた。調査は2006年7月11日から開始された。

２．調査方法

掘削方法

表土層のうち地表下平均70㎝までを重機により掘削、以下を人力によった。掘削深度は安全面への配慮から２ｍを原則とし、段階的に調査区を狭めた。また残土置場の確保のため調査区を二分割し、前半部を「Ⅰ区」、後半部を「Ⅱ区」と呼んだ。調査面積32㎡のうち、Ⅰ区が約19㎡、Ⅱ区が約13㎡となっている。

測量基準の設定

調査区中心を縦に通過する基準線２を置き、これに直交する軸線を５ｍおきに配した。整理にあたって世界測地系に変換した。基準線の座標は以下の通り。

図３　調査区設定図（1/300）

2 A（調査区北側）　X − 75 044.9064　Y − 24 650.5920
2 C（調査区南側）　X − 75 054.6816　Y − 24 652.7277

3．調査の経過

調査は7月11日にⅠ区表土を重機掘削して始まり、8月24日に機材を撤収して終了した。その間8月10日に、調査区を反転し、Ⅰ区からⅡ区に移行した。

第三章　調査結果

1．土層堆積

近世層

現地表面は近代の造成によって調査区内でほぼ平坦になっているが、調査の結果、近世までは川に向かって傾斜していることが判明した。近世層は地表下50（Ⅰ区東壁南寄り）～130㎝前後（Ⅱ区西壁北寄り）、標高では8.40（Ⅱ区西壁北寄り）～9.20ｍ（Ⅰ区東壁南寄り）に現われる。

近世層は暗灰褐色砂質の耕作土で、全体に１ｍ前後の厚みがあり、中位の8.60ｍ前後に宝永火山灰の堆積を挟んで、近世を通じて一帯が畠作地であった様子が認められる。近世層最下部の標高はⅠ区東壁北寄りで8.20ｍ、同南寄りで8ｍと川に向かって若干の傾斜はあるものの、Ⅰ区ではおおむね平坦といえる。しかしⅡ区では6.70ｍと急激に深くなり、大きく起伏を持つようになるので、ほぼⅠ区の辺りが畠作の南限だとみてよい。

中世層

上述近世層の最下面以下が中世層となる。中世層はⅠ区南半部から次第に滑川方向に下っていき、構成土も拳大～人頭大の礫層となるので、この辺りから河川敷となっていたことがわかる。層はきわめて厚く、掘削深度の2ｍにいたってもなお下に続く。厚さは1.3ｍ以上ある。

土層断面の観察によれば、その間に大きく５時期程度の変遷を見出せ、さらに砂の堆積からみて細かな変遷は数多くある。しかし、おそらくひとたびの増水で河床の形状は簡単に変化したであろうから、それぞれの年代幅など詳細を把握することは難しい。大きな傾向として、下層から上層に行くにつれ、南方向に移行する様子がうかがえる。すなわち北側の平地が滑川方向に拡張していく傾向にある。

出土遺物の年代からみれば、掘削した最下層から15世紀とおぼしい小型土師器皿が出土しており、総体で中世後期～近世初期（戦国時代）に属している。上述のように、深度規制により２ｍ以下は掘削が及んでおらず、中世前期の詳細は窺いにくいが、砂礫層はさらに下に続いているので、相当早くから調査地点が河川敷であったことがわかる。

2．各説―調査面と出土遺物

上述の数多い河床面について、調査時には砂層の堆積等を目安として9時期に分けた。しかし河川という、降雨量など自然条件に大きく作用されるであろう場の性格から、堆積土は局所的な変化を示し、Ⅰ・Ⅱ区間の層位は整合的に連関しないことが少なくない。したがって、ここに示した河床面は、実際のときどきのそれを忠実に反映しているとは言い難い。また、層それぞれの詳細な年代や存続期間などについても不明とせざるをえない。

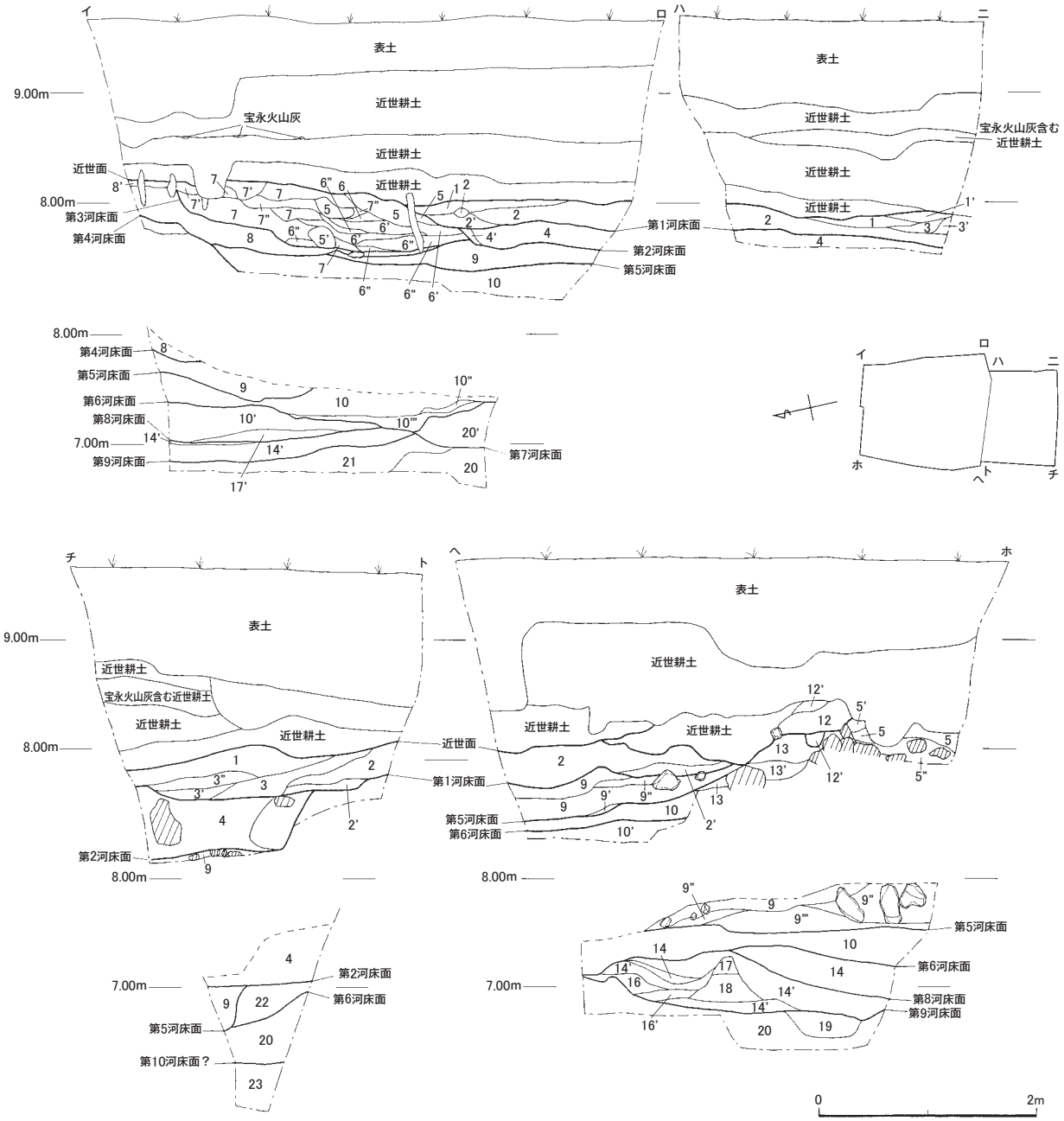


図４　調査区壁土層図

図4　土層説明

1.　暗灰褐色砂質土
2.　暗灰色砂質土　しまり良い
2'.　暗灰色砂質土　きめ細かい川砂
3.　暗灰褐色砂質土　3と4の混土
4.　灰黄褐色破砕泥岩層
4'.　灰黄褐色破砕泥岩層　4より砂多い
5.　暗灰色砂質土　微細な礫含む
5'.　明灰色砂質土　泥岩粒子を多く含む
5".　明灰色砂質土　全体に粒子粗い
6.　暗灰黄色砂質土
6'.　暗灰黄色砂質土　ややしまり良く、7の小塊混入
6".　暗灰黄色砂質土　7の小塊多い
6'".　暗灰黄色砂質土　7との混土
7.　黒褐色強粘質土　泥岩小粒子含む、鉄分多い
7'.　暗灰褐色強粘質土
7".　黒褐色強粘質土
8.　暗灰黄色砂層　河床堆積土
9.　黄褐色礫層　水磨した礫多い、黒色砂多く鉄分の沈澱みられる、一時の河床
9'.　暗灰黄色砂層　川砂層、黒色砂粒含む
9".　灰色砂層
9'".　9の中に大型泥岩が含まれている
10.　暗褐色砂礫層　水磨した礫多い、黒色砂多く鉄分の沈澱みられる、一時の河床
10'.　暗褐色砂礫層　黒色土塊含む
11.　暗茶褐色砂礫層　水磨した礫多い、遺物含む、一時の河床
11'.　暗褐色砂礫層　水磨した礫多い、一時の河床
12.　灰色砂質土　白い泥岩小塊多く含む

12'.　灰色砂質土　近世耕土との混土
12''.　灰黄色砂礫層　やや黄味帯びる
12'''.　灰黄色砂礫層　黒色粒子含む
13.　灰黄白色砂質土
13'.　灰黄白色砂質土　大粒泥岩含む
14.　暗灰黄色砂層　粗い粒子（1mm前後）の砂層
14'.　暗灰黄色砂礫層　5mm ～ 1cm大の小円礫層、木質の遺存体多い
14''.　灰黒色粘質土　木質遺存体多い
15.　暗灰色粘質土
16.　暗灰黄色粘質土　泥岩と黒色粘質土の混土
16'.　灰黄色粘質土　泥岩と黒色粘土の混土、16と同土だが色が違う
17.　暗灰黄色砂層　14とほぼ同土
18.　黒灰色粘質土　植物遺体含む
19.　黒灰色粘質土　植物遺体含まず、地山ブロック
20.　青灰色砂礫層
21.　暗青灰色砂層
22.　赤茶色粘質土　褐鉄・砂粒を非常に多く含む、一部に黒茶色粘土を層状に含む。しまり良い
23.　暗灰色粗砂　貝片を非常に多く含む、一部に磨滅した凝灰質砂岩片と泥岩片を含む、しまり良い

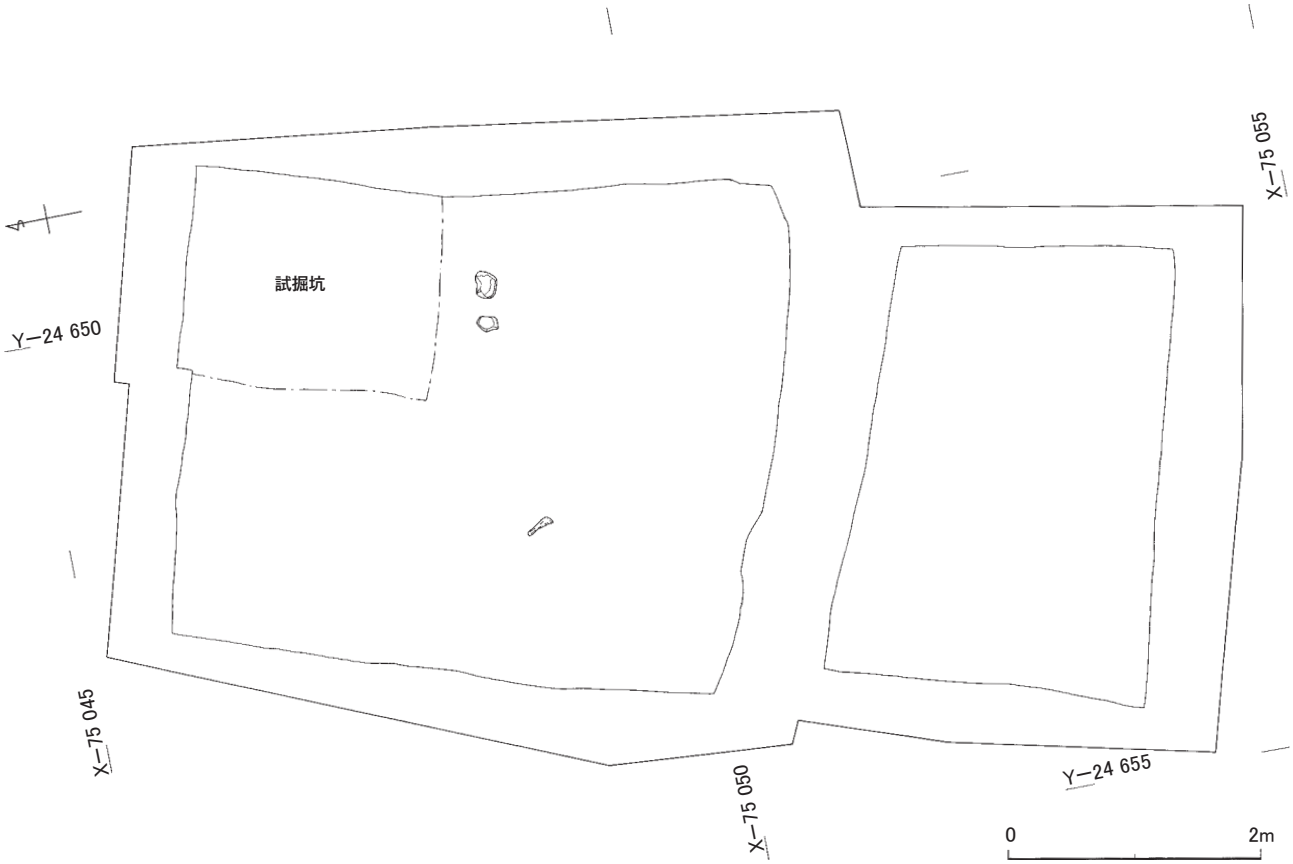


図５　近世面

近世面（図５）

最低位面標高（Ⅱ区南壁）：7.85 m　**最高位面標高（Ⅰ区北壁）：**8.20 m

出土遺物：図化可能遺物なし

特記事項：ほぼ8.60 m前後に宝永火山灰層があり、その上下は暗褐色砂質の耕作土となっている。宝永層下は30 ～ 40cmの厚みがあり、江戸時代前期頃からここが畑であったことがうかがえる。

第１河床面（図６）

Ⅰ区北半部においては近世の耕作土を除去するとすぐに砂層や暗～黒褐色の粘質土が現れ、水流の作用によるものとみて、一時的な河床であると判断した。南半部においてはやや傾斜が急になって、近世耕作土下に厚さ40cmほどの砂層が堆積しており、その中層に一時期の河床を確認した。Ⅱ区ではこの河床面は西から東に向かってだんだん低くなっていき、東壁中央部で最低位となる。あるいは二階堂川の領域に入っているのだろうか。

最低位面標高（Ⅱ区東壁）：7.45 m　**最高位面標高（Ⅰ区北壁際）：**8.20 m

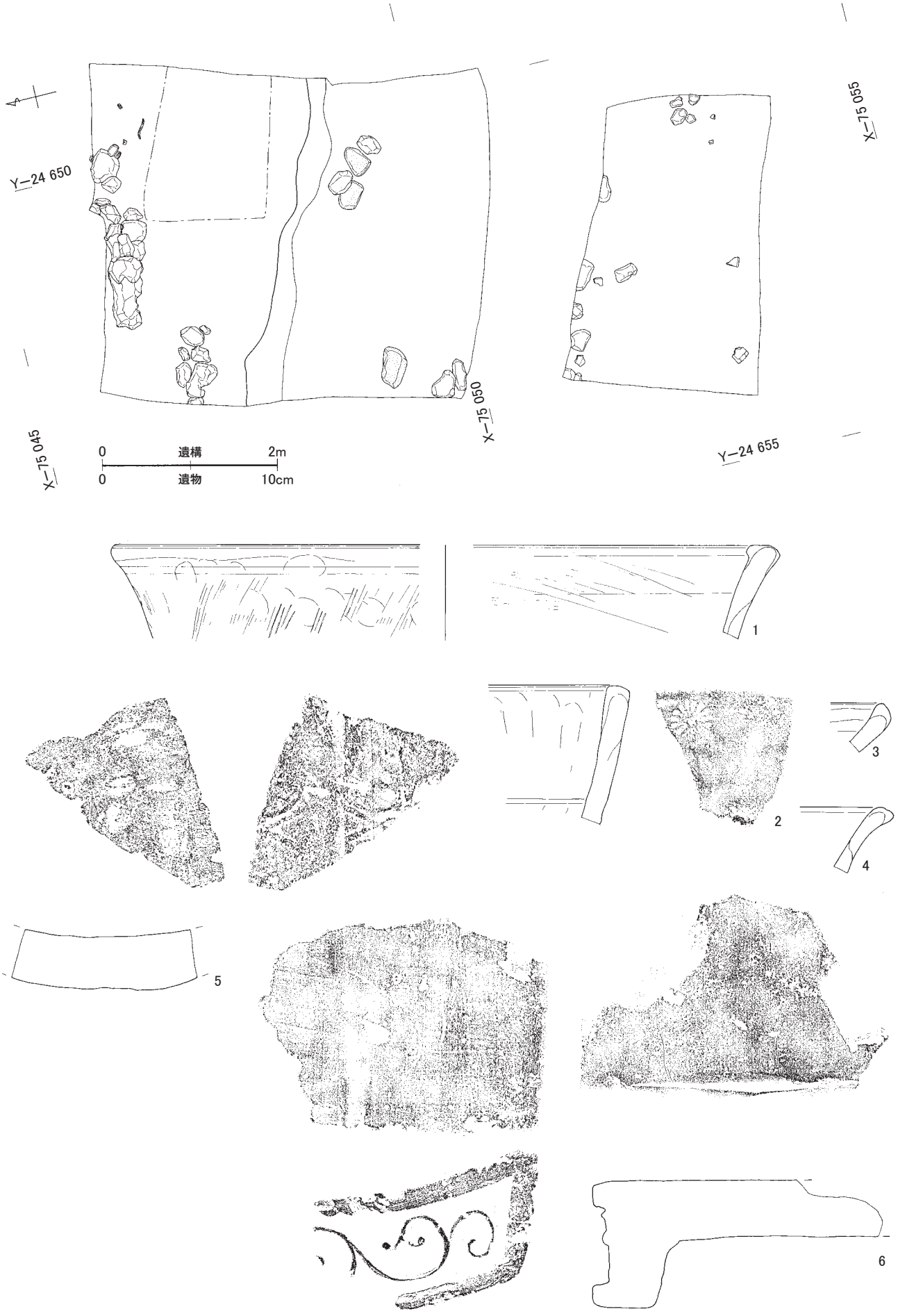


図６　第１河床面，同出土遺物

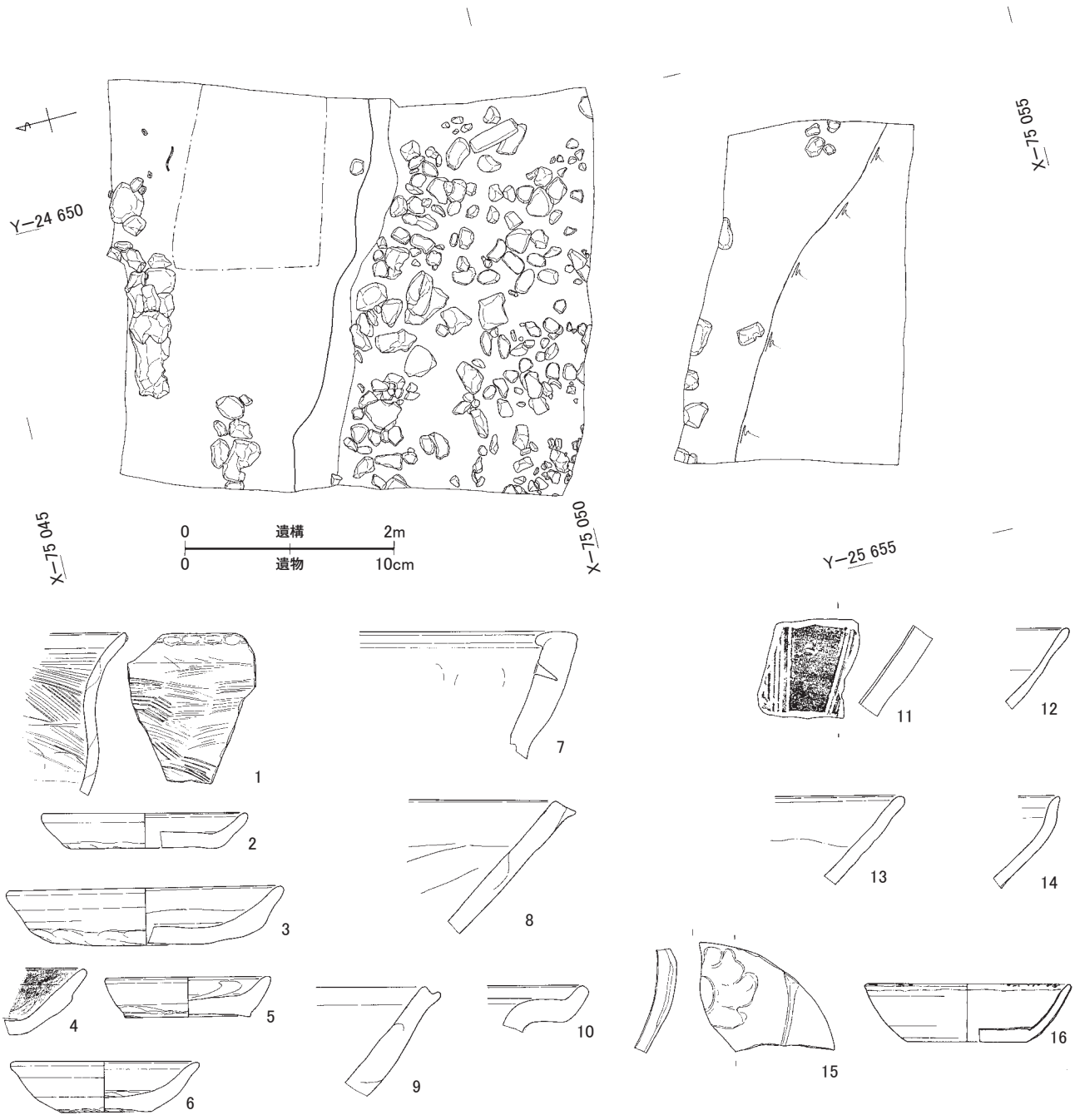


図７　第２河床面，同出土遺物（１）

出土遺物（図6）：瓦器火鉢（1・2）・常滑片口鉢Ⅰ類（3）・瀬戸片口鉢（4）・平瓦（5）・軒平瓦（6）

特記事項：呈示した出土遺物は全体に鎌倉時代前期の様相を示すが、下層との相対的な年代関係から、本河床面は中世末期頃とみられる。

第２河床面（図７）

Ⅰ区東壁南半部の第１河床面下には、厚さ20㎝ほどの砂層がある。これを除くと拳大～半人頭大の泥岩や凝灰岩の層となる。厚さ20㎝ほどの砂層は川底の堆積土であろうと考えられるので、その下の泥岩と凝灰岩層を河床とした。Ⅱ区南半部は緩く下る。

最低位面標高（Ⅱ区東壁中央部）：7.60ｍ　最高位面標高（Ⅰ区北壁際）：8.20ｍ

出土遺物（図７～９）：弥生土器甕（1）・土師器皿手づくね種小型（2）・土師器皿手づくね種大型（3・4）・

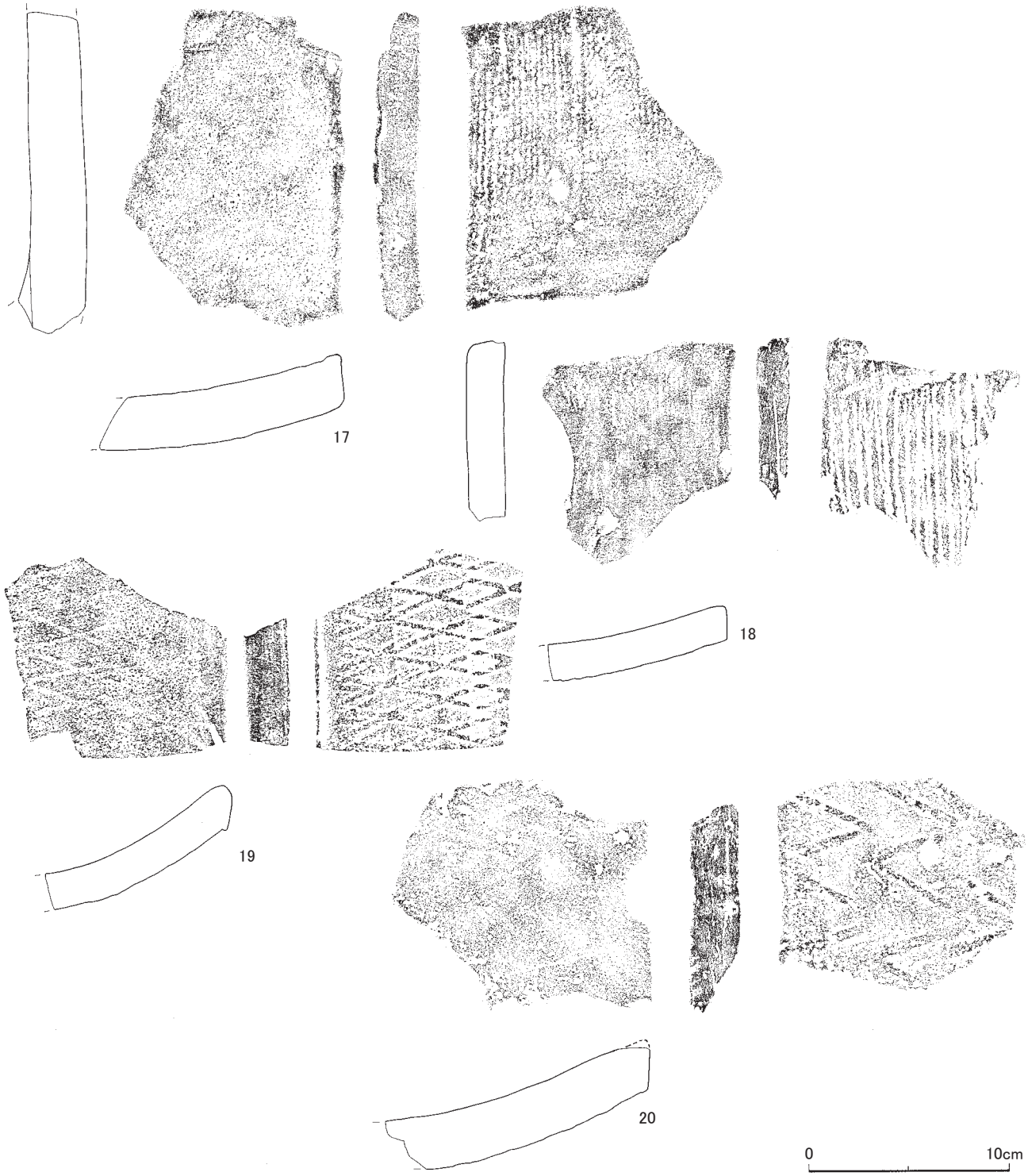


図８　第２河床面出土遺物（２）

土師器皿Ｒ種小型（5・6）・瓦器火鉢（7）・産地不明片口鉢（8）・常滑片口鉢Ⅱ類（9）・常滑甕（10）・備前擂鉢（11）・東濃型山茶碗（12）・瀬戸鉢（13）・瀬戸黒褐釉天目型碗（14）・竜泉窯青磁貼付牡丹文水指（15）・白磁口はげ皿（16）・軒平瓦（17）・平瓦（18 ～ 20）・丸瓦（21）・滑石印判（22）・柱状石（23）

特記事項：この時点で河岸が南にせり出し、平地が拡張されている。次述の第3河床面の上を地形（じぎょう）して平坦面を拡げている。当地点における画期ということができる。遺物は鎌倉時代前期を含むが、これも河川特有の混入であり、ここでは新しい遺物の年代に依拠して15 ～ 16世紀前後と考えたい。弥生の甕（1）は近在の大倉幕府周辺遺跡群内の中期後半集落から流出したものだろう。

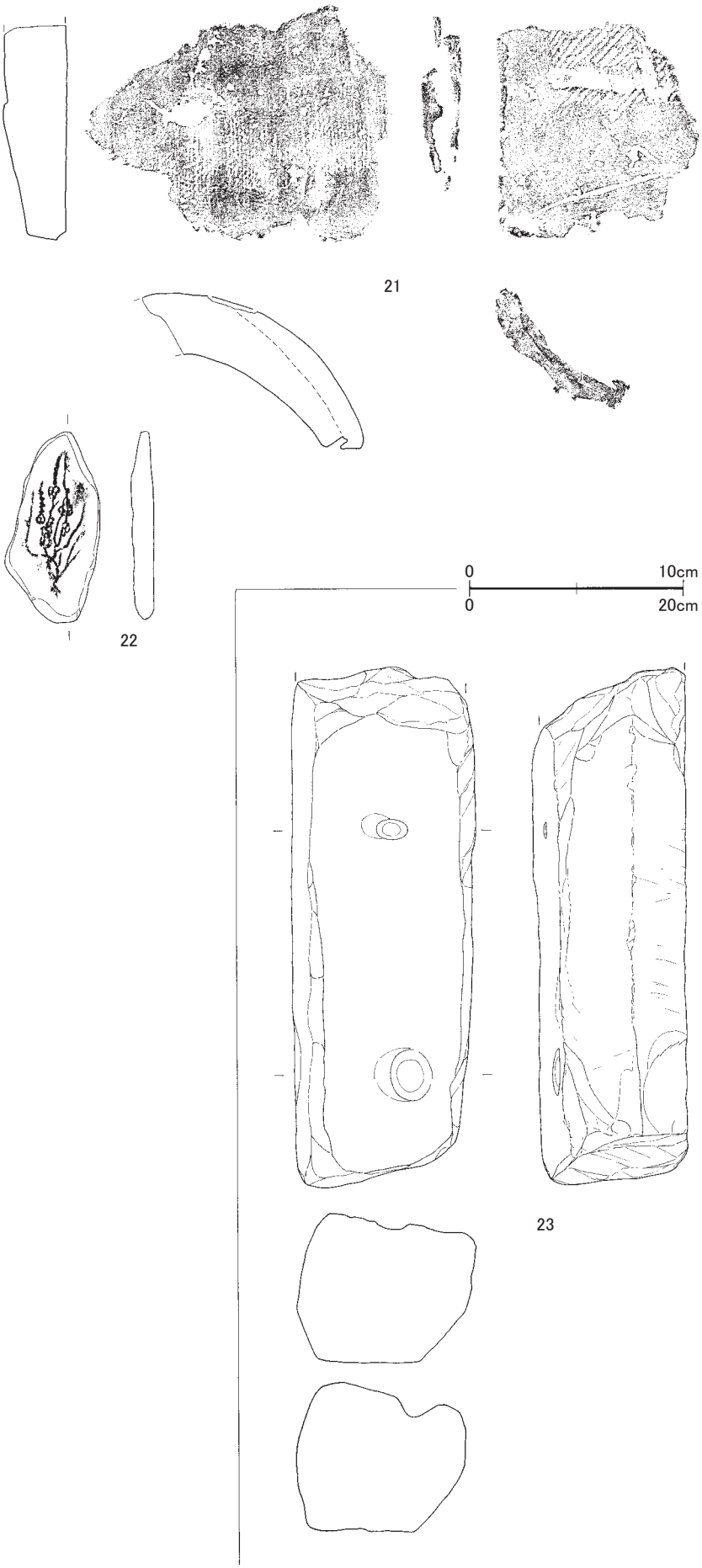


図９　第２河床面出土遺物（３）

第３河床面（図10）

Ⅰ区北半部の近世面および第１・第２河床面下に、暗灰色土や黒褐色粘質土の入り混じった大きな層の塊があった。この層は最大で60cmの厚みがあり、細かく分層することができるが、層と層の間に砂など流水の痕跡をとどめるものが観察できないので、一括して人為的に客土されたものと判断した。すなわち、繰り返しになるが、このとき地形（じぎょう）によって河岸が南側に移行し、北の平地側が拡がったことになる。この地形層を除くと水磨した人頭大の泥岩や凝灰岩の散在する層が現われ、これを３番目の（第３）河床面とした。調査区東壁では北から50cmほどのところで落ちが始まり、途中で上層の第２河床面に削られて消失する。Ⅱ区ではほぼ平坦に推移する。

最低位面標高（Ⅱ区西壁際）：7.54ｍ

最高位面標高（Ⅰ区北壁際）：8.16ｍ

出土遺物（図10）：石製五輪塔水輪（1）

特記事項：五輪塔水輪は最大径が中位よりやや上にあり、14世紀中葉～同第3四半期頃まで遡らせることは可能である。しかし層そのものはやはり15世紀以降に属するとみたい。Ⅰ区の北壁際から急速に落ち始め、Ⅱ区では途中から50cmを超える段差を持つようになる。

第４河床面（図11）

第３河床面を構成する人頭大の泥岩・凝灰岩層は最大で50cmの厚みがあり（Ⅱ区西壁南寄り）、これを除くと新たに河床が現れる。これを「第４河床面」とした。Ⅰ区北壁際から落ち始め、この辺が河岸

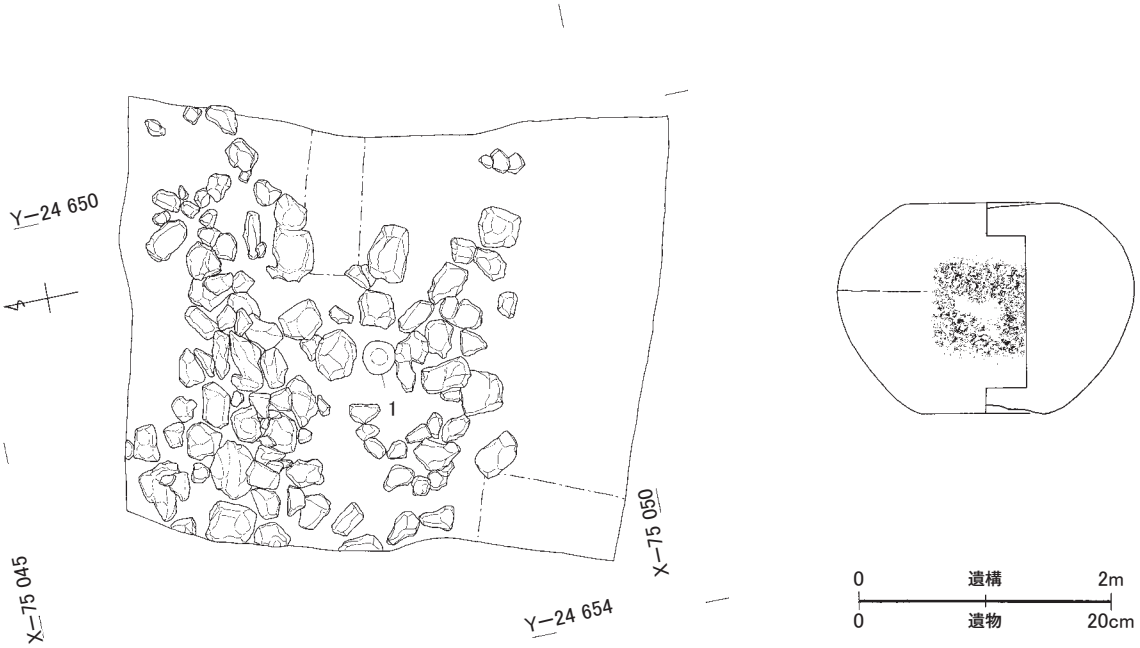


図10　第３河床面，同出土遺物

であったことがわかる。暗灰褐色の砂が堆積しており、その下に第 4 河床面がある。この面は露頭部分が少なく、次の第 5 河床面と併せて呈示する。

最低位面標高（Ⅱ区西壁）：7.51 m　**最高位面標高（Ⅰ区北壁際）**：7.90 m

出土遺物：図化可能遺物なし

特記事項：第 5 河床面をⅠ区中央部で一部削り取ってわずかに上方に向かい、第 3 河床面に削られている。全体に土の残りが少ないため、出土遺物にこの面からのものは乏しい。

第５河床面（図 11）

Ⅰ区北半部の第 4 河床面底部には暗灰褐色の砂が堆積している。また、同区南半部には黒色の砂を多く含んだ黄褐色の礫層がある。両者を除くと現れる水磨した暗褐色の半人頭大の礫層上面を、一時の河床面と判断した。Ⅰ区北半部は第 4 河床面に削られている。Ⅱ区でも半人頭大の礫の層となる。

最低位面標高（Ⅱ区西壁）：6.88 m　**最高位面標高（Ⅰ区北壁際）**：7.52 m

出土遺物（図 11 ～ 13）：弥生土器甕（1）・土師器皿手づくね種小型（2 ～ 4）・土師器皿手づくね種大型（5）・土師器皿ロクロ種小型（6・7）・同前中型（8 ～ 10）・土師器皿転用摩耗片（11）・土師器片転用円盤（12）・尾張山茶碗系片口鉢（13）・尾張型山茶碗（14）・常滑片口鉢Ⅱ類（15 ～ 18）・常滑片口鉢Ⅱ類転用摩耗陶片（19・20）・常滑甕（21 ～ 23）・常滑甕転用磨耗陶片（24）・備前擂鉢（25・26）・瀬戸卸し皿（27・28）・瀬戸灰釉皿（29）・瀬戸黒褐釉天目型碗（30）・瀬戸灰釉卸し目付き鉢・瀬戸灰釉瓶子（32）・瀬戸？黒褐釉瓶子（33）・瀬戸美濃鉄釉皿（34）・瀬戸美濃鉄釉擂鉢（35）・竜泉窯青磁画花文碗（36）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文折縁鉢（37）・竜泉窯系青磁無文碗（38）・平瓦（39 ～ 43）・丸瓦（44）・滑石温石（45）・砥石仕上げ砥（46）

特記事項：Ⅱ区の壁断面観察から西に向かって傾斜していることがわかる。弥生土器を除いても、出土遺物には鎌倉時代初期から戦国時代まで含まれているが、年代はこれも 15 世紀以降であろう。

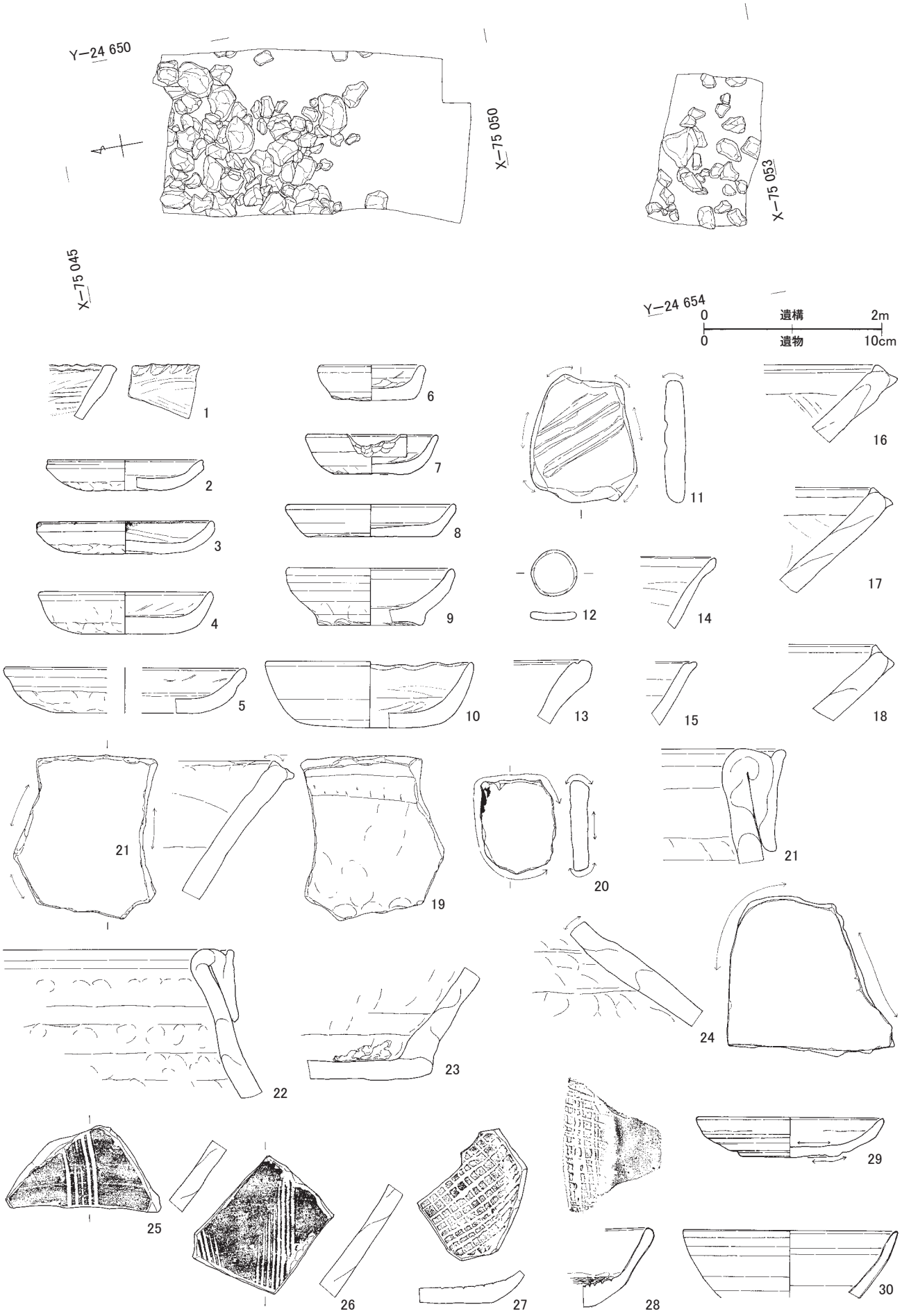


図11　第４・５河床面，第５河床面出土遺物（１）

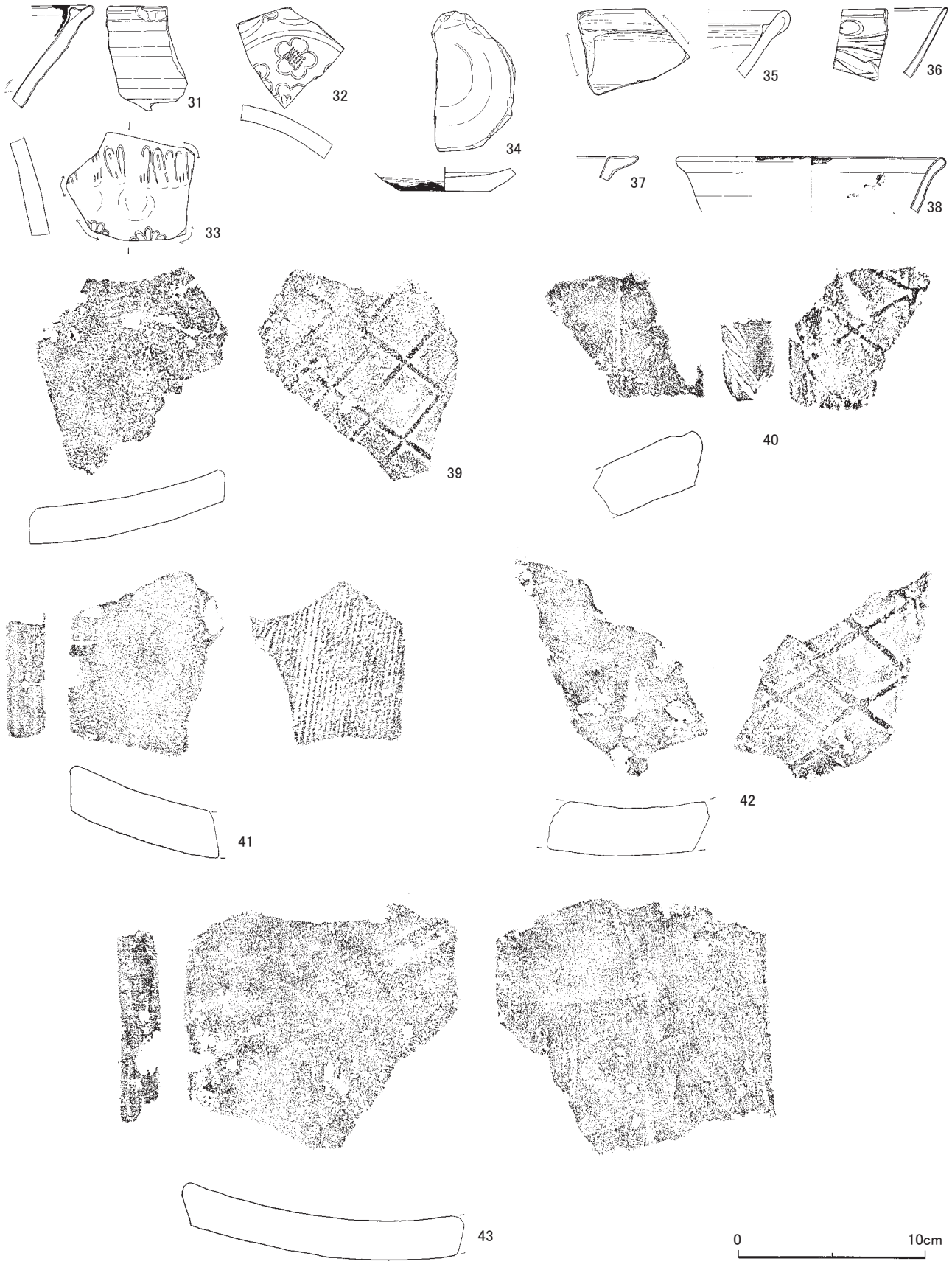


図12　第５河床面出土遺物（２）

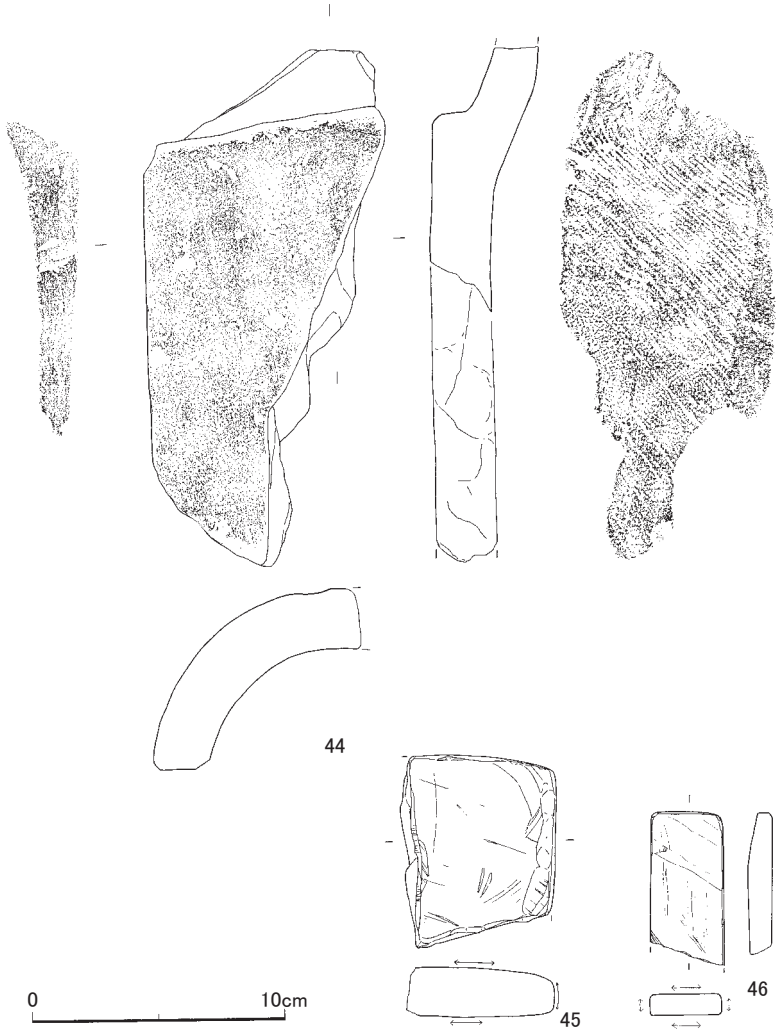


図13　第５河床面出土遺物（３）

第６～８河床面（図14 ～ 18）

Ⅱ区においては第５河床面以下は幅（南北）１m×長さ２mのきわめて狭い調査区となった。この中で断面観察によって３枚の河床面らしき砂層・砂礫層が観察でき、第６～第８の河床面とした。ただし締まりの悪い礫層のため崩落の危険性があり、法面の傾斜角を大きくとった。そのため調査区は一層狭くなった上大量の湧水に阻まれ、面毎の平面実測は断念せざるを得ず、第７・第８河床面として一括して呈示する（図16）。

また出土遺物については、河床面毎に分離できたもの（図14 ～ 16）とできなかったものがあり、後者は一括採集を余儀なくされた。

第６河床面出土遺物（図14・15）：土師器皿手づくね種小型（1）・土師器皿ロクロ種小型（2 ～ 4）・土師器皿ロクロ種中型（5）・土師器皿ロクロ種大型（6・7）・渥美甕（8）・常滑片口鉢Ⅰ類（9）・常滑片口鉢Ⅱ類（10 ～ 14）・常滑甕（15・16）・瀬戸縁釉小皿（17）・竜泉窯青磁蓮弁文碗（18）・重圏文軒平瓦（19）・平瓦（20 ～ 22）・丸瓦（23）・滑石鍋（24）・不明石製品（25）・石（26）

特記事項：土師器皿ロクロ種の2・5に14世紀第3四半期～ 15世紀初頭の要素がある。鎌倉時代中期に遡るものもあるが、全体的には14世紀代を主体としている。Ⅱ区のみの検出なので北側の河岸は検出できなかったが、川の中であることは間違いない。

第３～第８河床面出土遺物（図17）：土師器皿手づくね種小型（1）・尾張型山茶碗（2）・常滑片口鉢Ⅱ類（3）・竜泉窯青磁碗（4）・高麗青磁瓶子（5）

第６～第８河床面出土遺物（図17・18）：縄文土器深鉢（6・7）・土師器甕（8・9）・土師器皿ロクロ種小型（10・11）・土師器皿ロクロ種大型（12・13）・瓦器火鉢（14）・瓦器製品（15）・東遠型山皿（16）・常滑片口鉢Ⅰ類（17）・常滑片口鉢Ⅱ類（18）・常滑甕（19）・常滑甕転用磨耗陶片（20）・備前擂鉢（21）・瀬戸灰釉四耳壺（22）・瀬戸灰釉碗（23）・瀬戸灰釉大平鉢（24・25）・瀬戸灰釉瓶子（26）・瀬戸灰釉小皿（27）・瀬戸灰釉碗（28）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（29）・竜泉窯青磁無文碗（30）・竜泉窯青磁瓶（31）・竜泉窯青磁鉢（32）・平瓦（33・34）・砥石中砥（35）・硯（36）・石皿（37）

特記事項：遺物年代でいえば13世紀代のものは少なくないが、竜泉窯青磁30・31が14世紀後半以降、瀬戸灰釉の食器23・25・26が15世紀前半であり、全体的にはこれも14世紀後半～ 15世紀に主体があるとみていい。このときも調査地点は川の中にある。

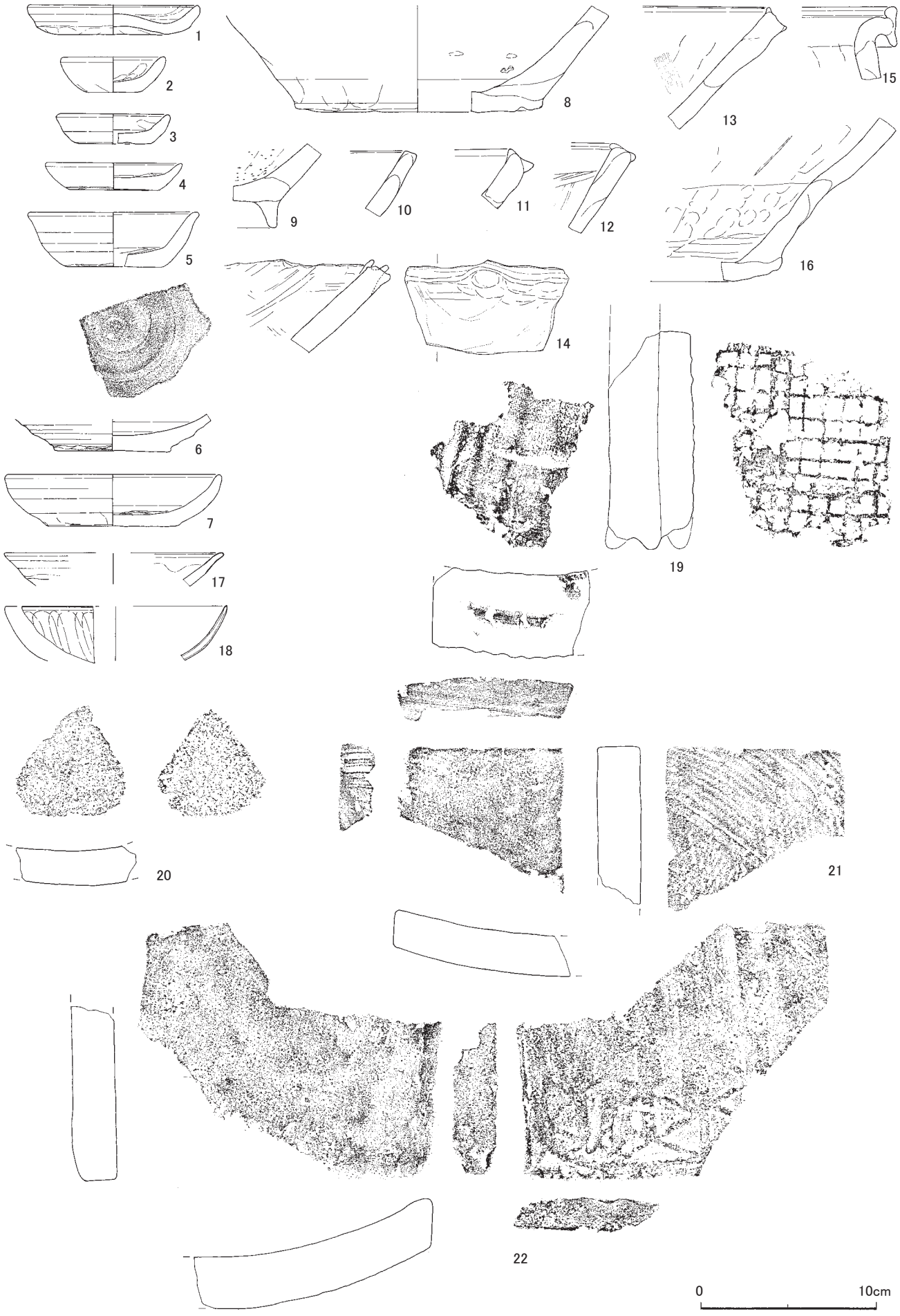


図14　第6河床面出土遺物（1）

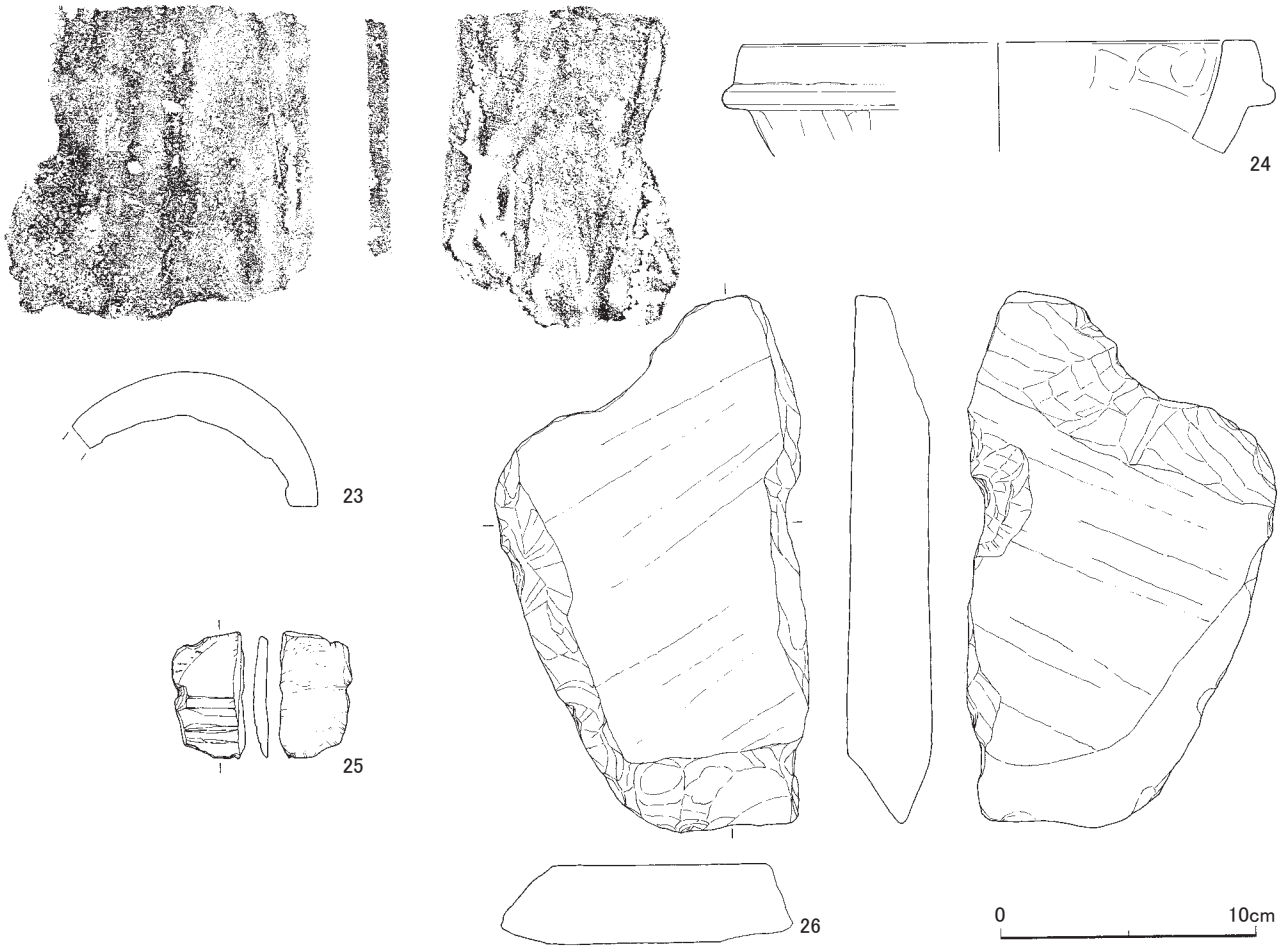


図15　第６河床面出土遺物（２）

第７・８河床面（図16）

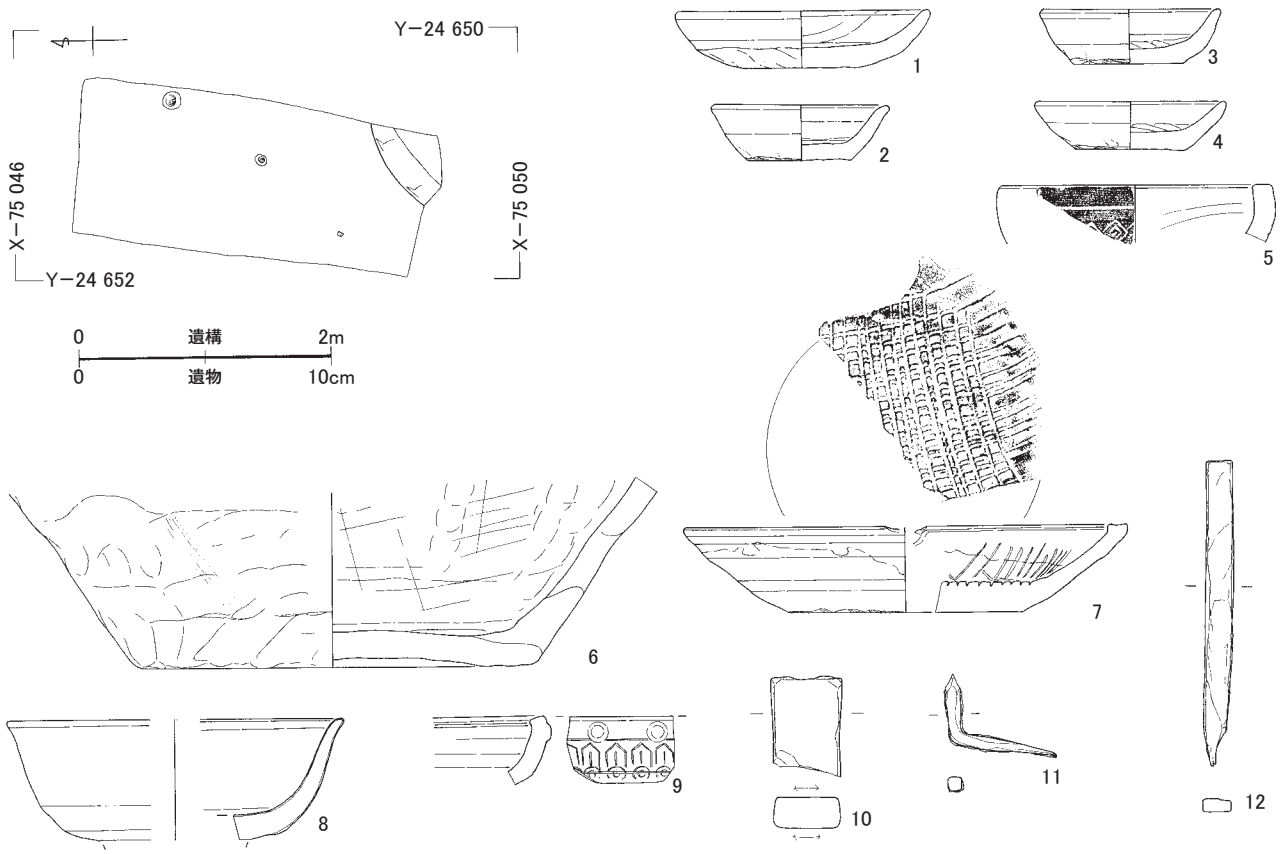
Ⅰ区では、上述のように激しい湧水のためⅡ区の６面に相当する面は確認できなかった。また第７・８面を分離することができなかったため、遺構図はここでは併せて呈示する。Ⅱ区においてもⅠ区の当該面に相当するものを平面的に分離しえなかった。南東隅に落込みがあるが人的な営為とは見えない。面上で2点の土師器皿ロクロ種が出土した。

第7河床面出土遺物（図16）：土師器皿手づくね種小型（1）・土師器皿ロクロ種小型（2 ～ 4）・瓦器香炉（5）・常滑甕（6）・瀬戸卸し皿（7）・瀬戸灰釉碗（8）・瀬戸灰釉香炉（9）・砥石中砥（10）・鉄釘（11）・鉄製品（12）

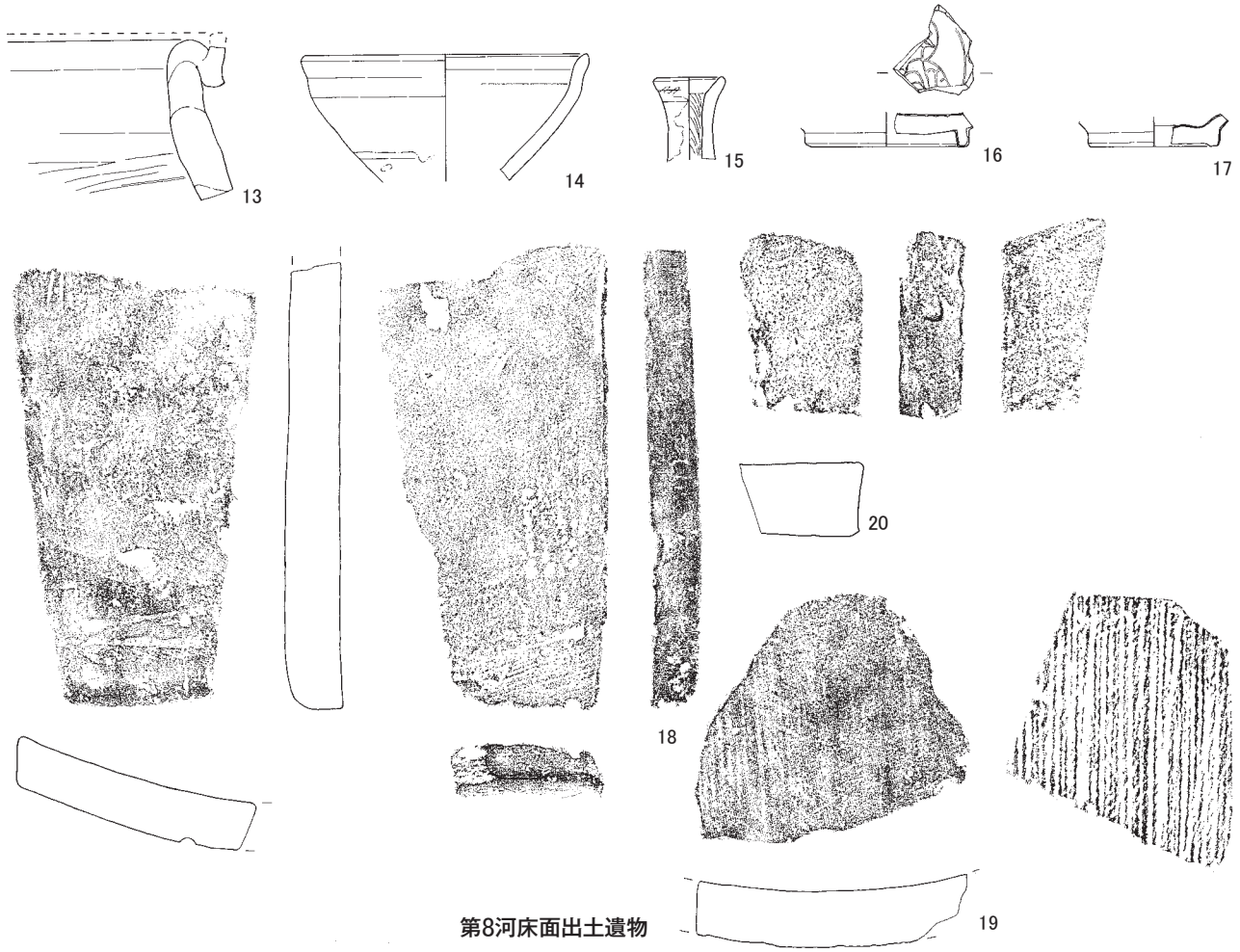
特記事項：14世紀前半～中葉頃か

第8河床面出土遺物（図16）：常滑甕（13）・瀬戸黒褐釉天目型碗（14）・瀬戸灰釉仏花瓶（15）・竜泉窯青磁鉢（16）・青白磁碗（17）・平瓦（18・19）・東海系平瓦（20）

特記事項：17 ～ 20等は鎌倉時代前～中期の様相を持つが、13世紀末～ 14世紀前半か

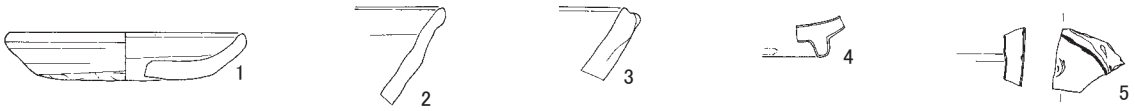


第7河床面出土遺物

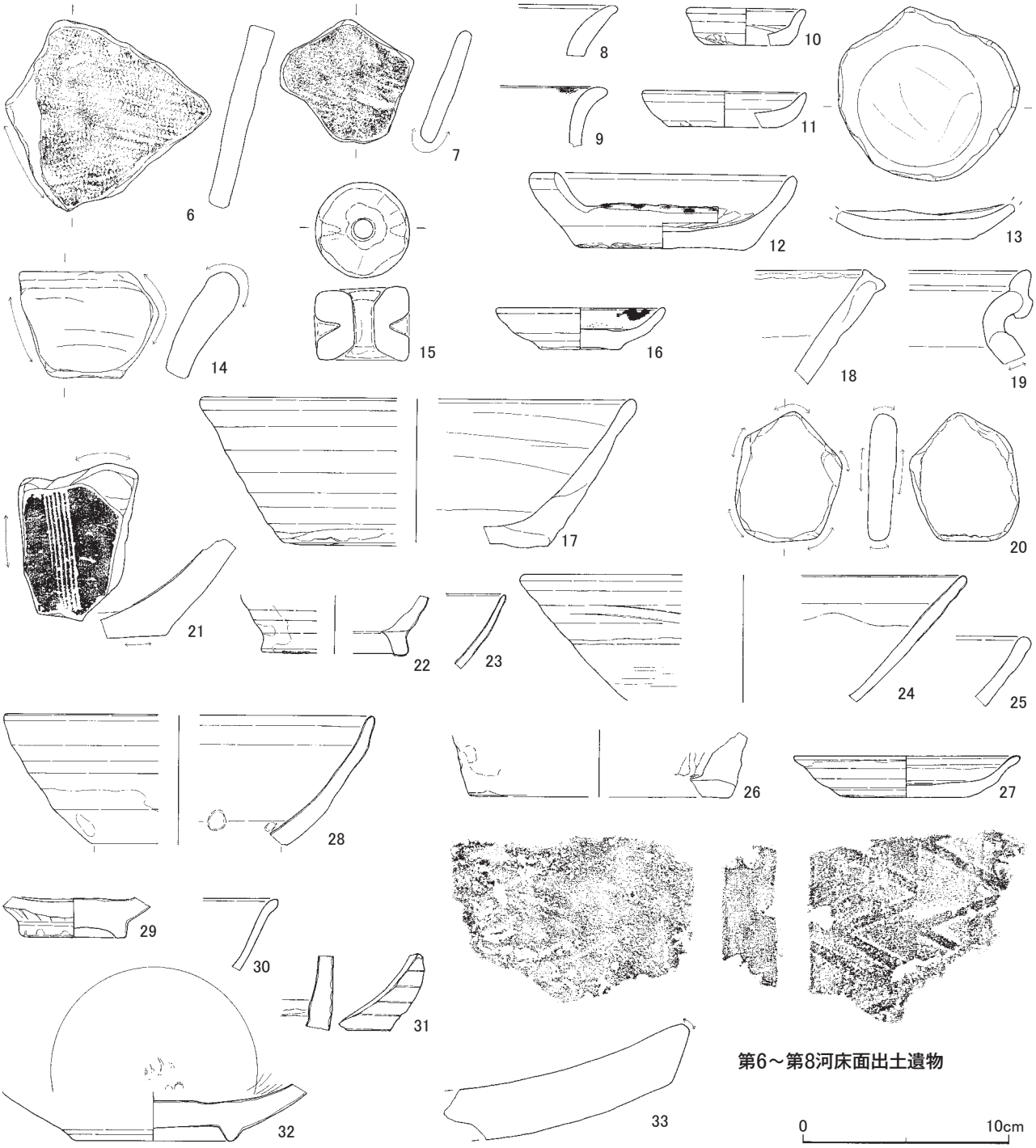


第8河床面出土遺物

図16　第７・８河床面，同出土遺物



第3～第8河床面出土遺物



第6～第8河床面出土遺物

図17　第６～８河床面出土遺物（１）

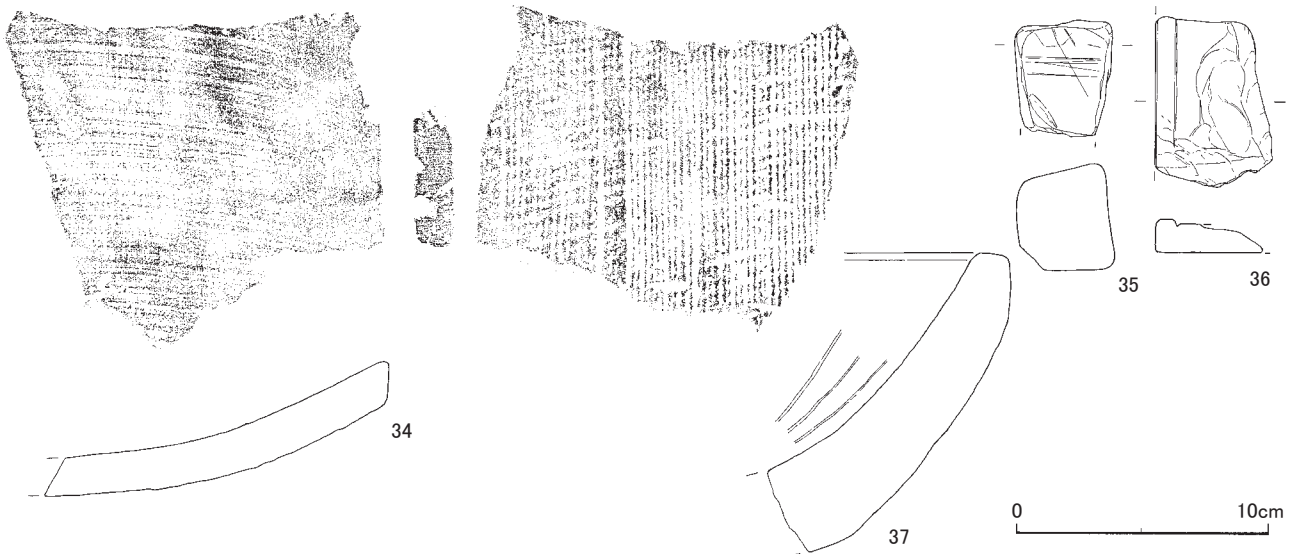


図18　第６～８河床面出土遺物（２）

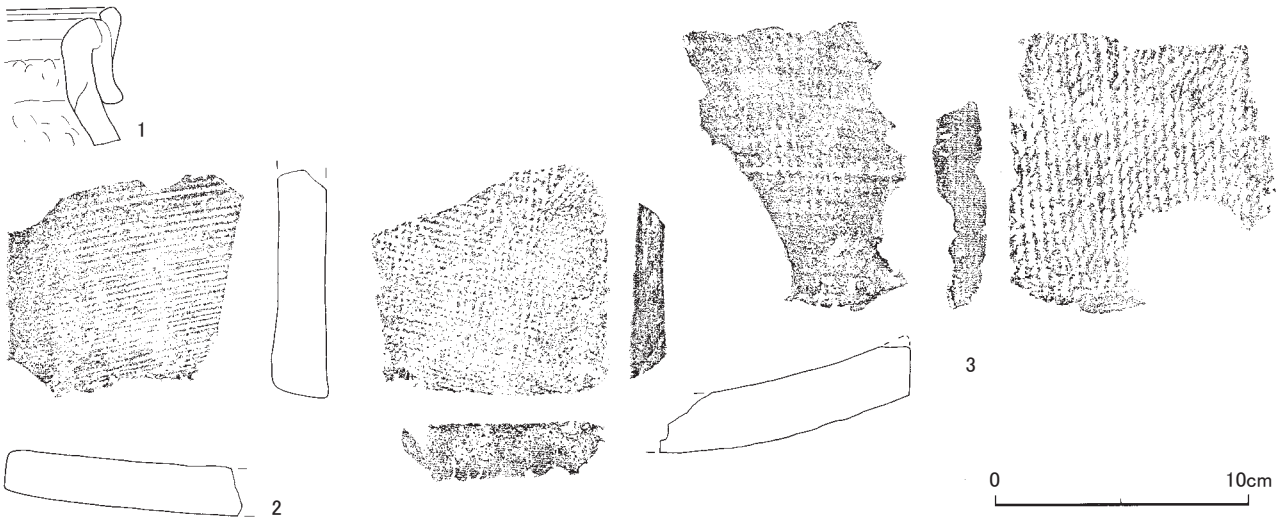


図19　第９河床面出土遺物

図20　第９河床面より下，最終状況

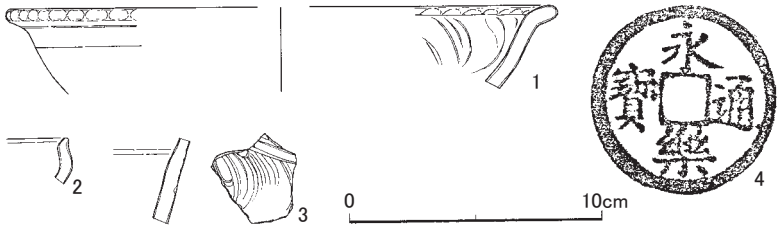


図21　表採遺物

第９河床面

第８河床面の下で礫層の様相が変わり、鉄分の多い茶褐色の礫層となったので、その時点での河床面とした。ここでの採集遺物を以下に示す。

出土遺物（図19）：常滑甕（1）・平瓦（2・3）

特記事項：１の常滑甕は14世紀中葉に下る。

第９河床面下最終確認区（図20）

岩盤を探査するためにⅠ区においては65㎝×１．６ｍの深掘り坑を入れ、Ⅱ区においてはさらに25㎝×80㎝の深掘り坑を入れた。しかし、依然として礫層が続いており、岩盤を確認するには至らなかった。

Ⅰ区最低面標高：6.75ｍ　Ⅱ区最低面標高：5.85ｍ

出土遺物：土師器皿ロクロ種小型（1・2）・土器蓋（3）

特記事項：土師器皿１・２は14世紀中葉～後半に属する。この時期も川の中にある。

表採遺物（図21）

竜泉窯青磁稜花鉢（1）・竜泉窯天目型青磁碗（2）・青白磁梅瓶（3）・永楽通宝（4）

第四章　まとめ―調査地点における滑川右岸の変遷について

中世前期の河川右岸については、掘削深度が当該期の層まで及ばず、詳細は不明である。しかし河川内の堆積らしい礫層が下層に続いていることは確認できたので、右岸がそれ以後よりも北寄り（内陸寄り）にあることがうかがえる。遅くとも中世前期までには、調査地点は川の中であった可能性が高い。

中世後期以後、調査地点は川の中となることが確認できた。この状況は近世まで続く。その間に大きくは５時期の変遷があり、さらに細かな河床変化が多数ある。

近世以後当地は畑となる。この時点で大倉南御門一帯の耕作地が広がったことになる。近世層中位に宝永火山灰層が認められるところから、おそらくは近世初期から幕末以後、戦前頃まで畑地であったとみられる。

表１　出土遺物観察表（１）

挿図番号	出土遺構	種　別	備　　考
図6-1	第１ 河床面	瓦器 火鉢	口径（35.8)cm　輪積み成形　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕・縦位のハケ目 内面はヨコナデのち斜位のナデ　胎土は灰色で白色粒子を含む良土
2	第１ 河床面	瓦器 火鉢	口縁部片　輪積み成形　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕・縦位のハケ目・上部に押印の菊花文　内面ヨコナデ　胎土は灰白色で雲母・黒色粒子・礫を含む
3	第１ 河床面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形のちロクロ整形　胎土は灰色で長石・黒色粒子を含む 器表に自然釉が薄くかかる
4	第１ 河床面	瀬戸 片口鉢	口縁部片　輪積み成形のちロクロ整形　胎土は灰色で長石・黒色粒子を含み、表面に長石が吹き出している　内面に灰緑色、外面に黒褐色の自然釉がかかる
5	第１ 河床面	平瓦	口径（11.9)cm　底径（10.1）cm　器高3.1cm　胎土は灰白色で礫を多く含む 凸面に斜格子との組合せ文のタタキ　凹面ナデ　永福寺Ⅱ期
6	第１ 河床面	軒平瓦	口径（12.3)cm　底径（18.1）cm　器高3.1cm　胎土は灰色で白色粒子を含む良土　凸面ナデ　凹面は布目を一部ナデ消している　永福寺Ⅰ期　均正唐草文　折り曲げか顎貼付けか不明
図7-1	第２ 河床面	弥生土器 甕	口縁部片　輪積み成形　一部ヨコハケナデのちナデ　口縁端部に押捺文 胎土は淡橙色で黒雲母・黒色粒子を含む　宮ノ台式
2	第２ 河床面	土師器皿 Ｔ種小型	口径（9.6)cm　底径（7.2）cm　器高1.7cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子を含む良土
3	第２ 河床面	土師器皿 Ｔ種大型	口径（13.2)cm　底径（9.6）cm　器高2.8cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
4	第２ 河床面	土師器皿 Ｔ種大型	口縁部片　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・白色粒子を含む良土　器表面に二次焼成による煤付着
5	第２ 河床面	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.7)cm　底径（5.8）cm　器高1.9cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
6	第２ 河床面	土師器皿 Ｒ種小型	口径（8.9)cm　底径（4.4）cm　器高2.4cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・強い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は黄灰白色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
7	第２ 河床面	瓦器 火鉢	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　内面に貫通しない小孔あり 胎土は淡橙色で赤色粒子・白色粒子を含む良土　器表面黒色処理
8	第２ 河床面	産地不明 片口鉢	口縁部片　輪積み成形　内面ヨコナデ・ナナメナデ　口縁部下までヨコナデ　胎土は黄灰白色で長石・礫を含む　常滑Ⅱ類の生焼けあるいはⅡ類を模した在地産の瓦質片口鉢
9	第２ 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕と縦位のハケ目　内面ヨコナデ　胎土は灰色で長石・礫を含む　口縁～内面に黄灰白色の降灰　外面は黒褐色
10	第２ 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　　ヨコナデ 胎土は灰色で白色粒子を含む粘性強い良土　器表に黄灰白色の降灰
11	第２ 河床面	備前 擂鉢	胴部片　回転ヨコナデ　内面に５条以上の櫛目あり 胎土は灰色で白色粒子・礫を含む粘性強い良土　器表は暗茶褐色
12	第２ 河床面	東濃型 山茶碗	口縁部片　輪積み成形のちロクロ整形　口縁部シメナデ 胎土は灰色で精良土　口縁頂部～内面に薄く降灰
13	第２ 河床面	瀬戸 鉢	口縁部片　回転ヨコナデ 胎土は灰白色で白色粒子を含む良土　緑灰白色の灰釉をハケ塗り
14	第２ 河床面	瀬戸 黒褐釉天目型碗	口縁部片　回転ヨコナデ　胎土は灰色で白色粒子を含む良土 釉薬は鉄釉（黒褐釉）を漬け掛け、口縁部は茶褐色、胴部は黒褐色
15	第２ 河床面	竜泉窯青磁 貼付牡丹文水指	胴部片　素地は灰白色で精良土　釉薬は青緑灰色で不透明、釉薬厚い　14c前半
16	第２ 河床面	白磁 口はげ皿	口径（9.5)cm　底径（5.6）cm　器高2.8cm　ロクロ成形　外底部回転糸切りのちヘラケズリ 素地は白色で白色粒子を含む精良土　釉薬は乳白色で不透明、釉薬薄い　口縁部釉薬削り取る
図8-17	第２ 河床面	軒平瓦	遺存長（13.2)cm　遺存幅（16.8）cm　厚2.7cm　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む 凸面縄目・黒色微砂　凹面糸切痕を一部ナデ消し　側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅰ期
18	第２ 河床面	平瓦	遺存長（12.8)cm　遺存幅（10.4）cm　厚1.8cm　胎土は灰色で白色粒子を含む良土 凸面縄目　凹面離れ砂・ナデ　側面・端面ヘラケズリ　永福寺Ⅰ期
19	第２ 河床面	平瓦	遺存長（10.4)cm　遺存幅（11.7）cm　厚1.8cm　胎土は暗灰色で白色粒子を含む良土、緻密 凸面細目斜格子・離れ砂　凹面に細目斜格子が転写・ナデ・黒色微砂が多く付着 側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅰ期
20	第２ 河床面	平瓦	遺存長（13.5)cm　遺存幅（14.1）cm　厚2.8cm　胎土は灰白色で礫を多く含む 凸面斜格子　凹面ナデ　側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅱ期
図9-21	第２ 河床面	丸瓦	遺存長（11.6)cm　遺存幅（13.0）cm　厚2.9cm　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む 凸面縄目のちナデ　凹面糸切り痕　側面ヘラケズリ 桶巻きの際に巻き合わせた部分を端面にしている　永福寺Ⅱ期
22	第２ 河床面	滑石 印判	遺存長（9.0)cm　遺存幅（4.5）cm　厚1.0cm　灰色
23	第２ 河床面	柱状石	長49.1cm　幅17.4cm　厚14.1cm　碇石の折れたものの可能性もある　表面に径数cmの穴が２つあり
図10-1	第３ 河床面	石製 五輪塔水輪	最大径23.6cm　高16.5cm　花崗岩製
図11-1	第５ 河床面	弥生土器 甕	口縁部片　輪積み成形　外面斜位ハケ　内面横位ハケ　口縁部にヘラ状工具によるキザミ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子を含む
2	第５ 河床面	土師器皿 Ｔ種小型	口径（8.8)cm　底径（4.0）cm　器高1.8cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰色で雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む　器表は橙色

表２　出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土遺構	種　別	備　　考
3	第５ 河床面	土師器皿 Ｔ種小型	口径（9.8)cm　底径（4.0）cm　器高1.9cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
4	第５ 河床面	土師器皿 Ｔ種小型	口径（9.8)cm　底径（8.5）cm　器高2.4cm　手づくね後内底部口縁部ナデ　内底部弱いナデ 胎土は灰色で赤色粒子・海綿骨針を含む　器表は橙色
5	第５ 河床面	土師器皿 Ｔ種大型	口径（13.7)cm　底径（8.2）cm　器高2.6cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
6	第５ 河床面	土師器皿 Ｒ種小型	口径6.0cm　底径4.7cm　器高2.5cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部弱いナデ　胎土は橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
7	第５ 河床面	土師器皿 Ｒ種小型	口径（7.35)cm　底径（4.35）cm　器高2.3cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
8	第５ 河床面	土師器皿 Ｒ種中型	口径（9.4)cm　底径（7.2）cm　器高1.85cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　磨耗激しく調整不明瞭 胎土は黄橙色で雲母・赤色粒子・黒色粒子を多く含む
9	第５ 河床面	土師器皿 Ｒ種中型	口径（9.3)cm　底径（6.0）cm　器高2.3cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
10	第５ 河床面	土師器皿 Ｒ種中型	口径（10.0)cm　底径（7.0）cm　器高3.7cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒を多く含む
11	第５ 河床面	土師器皿転用 磨耗片	土師器皿底部を使用　長7.0cm　幅6.0cm　厚1.2cm　外底部板状圧痕 胎土は黄橙色で雲母・赤色粒子・海綿骨針・礫・泥岩粒を多く含む粗土
12	第５ 河床面	土師器片転用 円盤	土師器片を使用　長2.6cm　幅2.6cm　厚0.5cm 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
13	第５ 河床面	尾張 山茶碗系片口鉢	口縁部片　回転ヨコナデ　口縁部内側に沈線　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む
14	第５ 河床面	尾張型 山茶碗	口縁部片　輪積み成形のちロクロ成形　口縁部シメナデ　胎土は橙色で白色粒子を含む 器表は茶褐色　口縁部～内面に薄く降灰がかかる　常滑産
15	第５ 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　口縁部下までヨコナデ　口縁部に沈線状のくぼみ 胎土は暗灰色で長石・白色粒子を含む
16	第５ 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面ヨコナデ　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は板状工具による縦位ナデ　胎土は暗灰色で長石・白色粒子を含む　器表は赤茶褐色
17	第５ 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面は使用により磨耗　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は板状工具による縦位ナデ　胎土は暗灰色で白色粒子を含む　器表は赤茶褐色
18	第５ 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面ヨコナデ　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は板状工具による縦位ナデ　胎土は暗灰色で長石・礫を含む　器表は茶褐色
19	第５ 河床面	常滑片口鉢Ⅱ類 転用磨耗陶片	常滑片口鉢口縁部を使用　口径（9.5)cm　底径（7.5）cm　器高1.2cm　輪積み成形 内面は使用により磨耗　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕・板状工具による縦位ナデ 胎土は淡橙色で長石を含む
20	第５ 河床面	常滑片口鉢Ⅱ類 転用磨耗陶片	常滑片口鉢胴部片を使用　長5.5cm　幅4.5cm　厚1.0cm　輪積み成形　外面わずかに磨耗 胎土は淡橙色で長石・礫を含む
21	第５ 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　内外面ともやや磨耗 胎土は灰色で長石・礫を多く含む、緻密
22	第５ 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　胴部内面下方に指頭痕あり 口縁部に焼成前になにか当った痕跡　胎土は灰色で長石・白色粒子・礫を含む
23	第５ 河床面	常滑 甕	底部片　輪積み成形　ナデ　外面底部からの掻き上げ　底面に離れ砂　　胎土は灰色で長石・白色粒子を含む　外面は暗茶褐色　内面に灰緑色の自然釉がかかり、内底面に窯クソ付着
24	第５ 河床面	常滑甕 転用磨耗陶片	常滑甕胴部片を使用 長9.3cm　幅9.4cm　厚1.6cm　輪積み成形　内面は暗灰色で指頭痕・ナデ 外面は灰緑色の自然釉がかかり、叩き目あり　胎土は灰色、長石を含む
25	第５ 河床面	備前 擂鉢	胴部片　回転ヨコナデ　内面に５条の櫛目　胎土は橙色で長石・白色粒子を含む
26	第５ 河床面	備前 擂鉢	胴部片　回転ヨコナデ　内面に８条の櫛目　胎土は暗灰色、長石・礫を含む
27	第５ 河床面	瀬戸 卸し皿	底部片　外底部回転糸切り　回転ヨコナデ　胎土は黄灰白色で精良土　二次焼成
28	第５ 河床面	瀬戸 卸し皿	器高4.5cm　外底部回転糸切り　胎土は黄灰白色で精良土 口縁～胴部中まで灰緑色の灰釉を漬け掛け
29	第５ 河床面	瀬戸 灰釉皿	口径（10.35)cm　底径（5.4）cm　器高2.3cm　回転ヨコナデ　胴部外面下半回転ヘラケズリ 内底部磨耗　削り出し高台、中央に糸切痕が残る　胎土は灰色の精良土 口縁部に灰緑色の灰釉を漬け掛け
30	第５ 河床面	瀬戸 黒褐釉天目型碗	口径（12.0)cm　胎土は黄灰白色で精良土　回転ヨコナデ 釉薬は鉄釉（黒褐釉）を漬け掛け、釉の発色は口縁部が茶褐色、胴部は黒褐色
図12-31	第５ 河床面	瀬戸 灰釉卸し目付き鉢	口縁部片　回転ヨコナデ　胎土は灰白色で精良土 黄灰緑色で透明の灰釉漬け掛け、貫入あり
32	第５ 河床面	瀬戸 灰釉瓶子	胴部片　外面に押印の梅花文 胎土は灰白色で精良土　灰緑色で透明の灰釉がかかる、貫入あり
33	第５ 河床面	瀬戸？ 黒褐釉瓶子	胴部片　外面に押印の菊花文・二重蓮弁文 胎土は灰白色で良土　釉薬は鉄釉（黒褐釉）の漬け掛け　中国産の可能性あり
34	第５ 河床面	瀬戸美濃 鉄釉皿	底径（5.0）cm　回転ヨコナデ　外底部回転糸切り　胎土は黄灰白色で良土　灰茶褐色の鉄釉かかる

表３　出土遺物観察表（３）

挿図番号	出土遺構	種　別	備　　考
35	第5 河床面	瀬戸美濃 鉄釉擂鉢	口縁部片　回転ヨコナデ　胎土は黄灰白色で良土　茶褐色の鉄釉がかかる
36	第5 河床面	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片　ロクロ成形　素地は灰色で精良堅緻　釉薬は灰緑色で透明、貫入あり、釉薬薄い
37	第5 河床面	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文折縁皿	口縁部片　ロクロ成形　素地は灰白色で精良堅緻　釉薬は青緑色で半透明、気泡あり　14c前半
38	第5 河床面	竜泉窯系青磁 無文碗	口径（14.0)cm　ロクロ成形　素地は灰色で精良堅緻　釉薬は灰緑色で半透明、貫入あり、釉薬厚い 口縁部に油煤付着　この油煤は割れた後に付着した可能性もある
39	第5 河床面	平瓦	遺存長(12.6)cm　遺存幅（11.2）cm　厚1.9cm　胎土は暗灰色で白色粒子・礫を含む 凸面に格子　凹面にナデ　鶴岡八幡宮系Ⅱ類Dに近いもの
40	第5 河床面	平瓦	遺存長(8.4)cm　遺存幅（9.3）cm　厚2.8cm　胎土は黄灰白色で礫を含む 凸面斜格子　凹面ナデ　側面ヘラケズリのちナデ、目的不明だが刃状工具による切り込み複数あり 永福寺Ⅱ期
41	第5 河床面	平瓦	遺存長(10.6)cm　遺存幅（9.7）cm　厚2.4cm　胎土は灰白色で白色粒子を含む良土、緻密 凸面縄目　凹面ナデ　側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅰ期
42	第5 河床面	平瓦	遺存長(13.7)cm　遺存幅（11.1）cm　厚2.8cm　胎土は灰白色で礫を多く含む 凸面格子　凹面布目・黒色微砂　永福寺Ⅱ期
43	第5 河床面	平瓦	遺存長(15.0)cm　遺存幅（15.6）cm　厚2.2cm　胎土は暗灰色で礫を含む 凸面ナデ　凹面ナデ　側面ヘラケズリ　鶴岡八幡宮系Ⅳ類Bに近いもの
図13-44	第5 河床面	丸瓦	遺存長(20.3)cm　遺存幅（11.6）cm　厚2.4cm　胎土は橙色で雲母・白色粒子・礫を含む 凸面ナデ　凹面糸切の上に布目　側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅰ期
45	第5 河床面	滑石 温石	遺存長(7.7)cm　遺存幅（6.2）cm　厚2.0cm　灰白色
46	第5 河床面	砥石 仕上げ砥	遺存長（6.0）cm　幅3.0cm　厚1.0cm　黄灰白色　側面に切出し痕　砥面2面　鳴滝
図14-1	第6 河床面	土師器皿 T種小型	口径（9.7)cm　底径（6.0）cm　器高1.7cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は黄灰白色で雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
2	第6 河床面	土師器皿 R種小型	口径（5.8)cm　底径（3.4）cm　器高2.0cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
3	第6 河床面	土師器皿 R種小型	口径（6.1)cm　底径（4.5）cm　器高1.7cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
4	第6 河床面	土師器皿 R種小型	口径（7.7)cm　底径（5.2）cm　器高1.5cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・赤色粒子を含む
5	第6 河床面	土師器皿 R種中型	口径（9.5)cm　底径（5.8）cm　器高3.1cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
6	第6 河床面	土師器皿 R種大型	底径（6.6）cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り 胎土は黄灰色で雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
7	第6 河床面	土師器皿 R種大型	口径（12.25)cm　底径（7.7）cm　器高3.0cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
8	第6 河床面	渥美 甕	底部片　輪積み成形　内底面ヨコナデ　胎土は灰色で長石・礫を含む
9	第6 河床面	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片　輪積み成形のち右回転ロクロ整形　貼付高台　胎土は灰色で長石・白色粒子・礫を含む
10	第6 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　胎土は暗灰色で白色粒子を含む 口縁部～内面に薄く降灰
11	第6 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面ヨコナデ　外面口縁部下までヨコナデ、胴部に指頭痕あり 胎土は灰色で長石・白色粒子を含む　器表は茶褐色
12	第6 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面は使用により磨耗　外面口縁部下までヨコナデ 外面胴部に指頭痕あり・板状工具による縦位ナデ　胎土は鈍い橙色で長石・礫・白色粒子を含む
13	第6 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面は使用により磨耗　外面口縁部下までヨコナデ 外面胴部に指頭痕あり・板状工具による縦位ナデ　胎土は橙色で長石・礫・白色粒子を含む
14	第6 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面ヨコナデ・磨耗　外面口縁部下までヨコナデ　器表は赤褐色 外面胴部に指頭痕あり・板状工具による縦位ナデ　胎土は橙色で礫・白色粒子を含む
15	第6 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　胎土は灰色で長石・白色粒子を含み、表面に長石が吹き出している　縁帯部に暗灰緑色の自然釉がかかる
16	第6 河床面	常滑 甕	底部片　輪積み成形　底部～胴部に板状工具掻き上げ　内面指頭痕・ナデ　底部離れ砂 外面板状工具による縦位ナデ　胎土は灰色で長石・礫・白色粒子を含む　器表は橙色
17	第6 河床面	瀬戸 緑釉小皿	口径（12.5)cm　胎土は灰白色で良土　淡灰緑色で透明の灰釉が漬け掛け、貫入あり
18	第6 河床面	竜泉窯青磁 蓮弁文碗	口径（12.6)cm　ロクロ成形　素地は灰色で精良堅緻 釉薬は青灰緑色で不透明、気泡あり　釉薬厚い　14c
19	第6 河床面	重圏文 軒平瓦	遺存長(10.2)cm　遺存幅（12.8）cm　厚4.5cm　胎土は鈍い赤橙色で赤色粒子・白色粒子・礫を含む 凸面小格子　凹面布目　顎貼付　7c後葉　千葉地遺跡に同様のものあり
20	第6 河床面	平瓦	遺存長(9.8)cm　遺存幅（10.7）cm　厚2.3cm　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む 凸面斜め糸切り痕・縄目　凹面離れ砂・ナデ　側面はラクズリのちナデ　永福寺Ⅱ期

表４　出土遺物観察表（４）

挿図番号	出土遺構	種　別	備　　考
21	第6 河床面	平瓦	遺存長(7.4)cm　遺存幅(7.0) cm　厚1.9cm　胎土は灰色で石英・白色粒子・礫を含む 凸面ナデ　凹面ナデ
22	第6 河床面	平瓦	遺存長(15.3)cm　遺存幅(13.9) cm　厚2.9cm　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む 凸面斜格子　凹面縄目・ナデ　側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅱ期
図15-23	第6 河床面	丸瓦	遺存長(13.4)cm　遺存幅(10.2) cm　厚2.0cm 胎土は灰橙白色で黒色微砂・赤色粒子・白色粒子・礫を含む祖土 凸面ナデ　凹面布目　側面ヘラケズリ　永福寺Ⅲ期か
24	第6 河床面	滑石 鍋	口径(20.2)cm　灰白色
25	第6 河床面	不明石製品	長5.0cm　幅2.9cm　厚0.5cm　灰色　工具痕がみられるが産地・用途とも不明
26	第6 河床面	石	長20.9cm　幅11.5cm　厚3.4cm　灰色　裏表ともに平坦になっており加工されたものか
図16-1	第7 河床面	土師器皿 T種小型	口径(9.9)cm　底径(5.9) cm　器高2.3cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
2	第7 河床面	土師器皿 R種小型	口径6.8cm　底径4.2cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部弱いナデ　胎土は橙色で赤色粒子・海綿骨針を含む
3	第7 河床面	土師器皿 R種小型	口径(7.0)cm　底径4.4cm　器高2.1cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄灰色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
4	第7 河床面	土師器皿 R種小型	口径(7.3)cm　底径(4.4) cm　器高1.9cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・強い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は橙色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
5	第7 河床面	瓦器 香炉	口縁部片　外面上部に沈線と押印の枡文　器表面磨き・黒色処理 胎土は灰色で白色粒子・黒色粒子を含む
6	第7 河床面	常滑 甕	底径(16.0) cm　輪積み成形　外面底部から板状工具による縦位ナデ　内面ヨコナデ　底部離れ砂 胎土は灰色で長石・白色粒子・礫を含む
7	第7 河床面	瀬戸 卸し皿	口径(17.4)cm　底径(9.2) cm　器高3.4cm　外底部回転糸切り　外面回転ヨコナデ 胎土は灰白色で白色粒子を含む良土 口縁部～胴部中まで黄灰緑色で透明の灰釉を漬け掛け、貫入あり
8	第7 河床面	瀬戸 灰釉碗	口径(13.2)cm　底径(6.0) cm　器高4.8cm　外底部回転糸切り　外面回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ 胎土は灰白色で白色粒子を含む良土　灰緑色で透明の灰釉を漬け掛け、貫入あり
9	第7 河床面	瀬戸 灰釉香炉	口縁部片　回転ヨコナデ　押印の剣先連弁文　珠文付き 胎土は黄灰白色で白色粒子を含む　灰緑色で透明の灰釉が掛かる、貫入あり
10	第7 河床面	砥石 中砥	遺存長(4.0) cm　幅2.8cm　厚1.2cm　黄灰白色　上野産
11	第7 河床面	鉄釘	長6.2cm　幅0.6cm　厚0.6cm　重さ10.7g
12	第7 河床面	鉄製品 船釘	長12.2cm　幅1.0cm　厚0.5cm　重さ38.8g
13	第8 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　回転ヨコナデ　胎土は暗灰色で長石・白色粒子を含む　器表は暗茶褐色、鉄分の吹き出しあり　口縁部に黄灰色の降灰が薄くかかる　広口壺の可能性もある
14	第8 河床面	瀬戸 黒褐釉天目型碗	口径(11.7)cm　回転ヨコナデ 胎土は黄灰白色で良土　釉薬は黒褐色の鉄釉（黒褐釉）を内面～外面胴部中まで漬け掛け
15	第8 河床面	瀬戸 仏花瓶	口径2.7cm　最少径2.0cm　残器高(2.9) cm　回転ヨコナデ　内面に絞りあり 胎土は灰白色で良土　黄灰緑色で不透明の灰釉を薄くハケ塗り
16	第8 河床面	竜泉窯青磁 鉢	底径(6.4) cm　ロクロ成形　内底面に画花文　削り出し高台　高台内側中央部は露胎 素地は灰色で精良堅緻　釉薬は灰緑色で半透明、気泡あり、釉薬薄い　14c
17	第8 河床面	青白磁 碗	底径(5.2) cm　ロクロ成形　削り出し高台　高台畳付け～高台内側は露胎 素地は白色で精良堅緻　釉薬は青白色で不透明、釉薬薄い
18	第8 河床面	平瓦	遺存長(19.6)cm　遺存幅(10.5) cm　厚2.0cm　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む 凸面離れ砂・糸切りのちナデ　凹面布目痕を一部ナデ消す　側面ヘラケズリのちナデ　永福寺Ⅰ期
19	第8 河床面	平瓦	遺存長(12.2)cm　遺存幅(11.4) cm　厚2.3cm　　胎土は暗灰色、白色粒子を含む良土、緻密 凸面縄目・離れ砂　凹面離れ砂・縄目のちナデ　永福寺Ⅰ期
20	第8 河床面	東海系 平瓦	遺存長(8.7)cm　遺存幅(5.8) cm　厚3.1cm　胎土は淡黄橙色で長石・白色粒子を含む 凸・凹面に白色の離れ砂多い　側面はヘラケズリのちナデ　猿投窯八事裏山などに類品あり
図17-1	第3～8 河床面	土師器皿 T種小型	口径(9.2)cm　器高1.9cm　手づくね後内底部口縁部ナデ 胎土は灰白色で黒雲母・赤色粒子を含む
2	第3～8 河床面	尾張型 山茶碗	口縁部片　輪積み成形のちロクロ整形　口縁部シメナデ 胎土は黄灰色で長石・礫を含む粗土　常滑産
3	第3～8 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　回転ヨコナデ　胎土は灰色で白色粒子を含む良土
4	第3～8 河床面	竜泉窯青磁 碗	底部片　ロクロ成形　削り出し高台　高台内側まで釉薬かかる 素地は灰色で精良堅緻　釉薬は灰緑色で不透明、貫入・気泡あり、釉薬厚い
5	第3～8 河床面	高麗青磁 瓶子	胴部片　外面に黒色と白色の象嵌 素地は灰色で精良堅緻　釉薬は灰緑色で半透明、貫入・気泡あり、釉薬厚い
6	第6～8 河床面	縄文土器 深鉢	胴部片　輪積み成形　胎土は鈍い橙色で雲母・赤色粒子・白色粒子を含む 外面単節磨り消し縄文　内面は丁寧にナデられている　煤付着　中期、加曽利E

表５　出土遺物観察表（５）

挿図番号	出土遺構	種　別	備　　考
7	第６～８ 河床面	縄文土器 深鉢	胴部片　輪積み成形　外面に条痕文のようなものがあるが摩耗により詳細不明 胎土は淡黄橙色で黒雲母・白色粒子・黒色粒子を多く含む 縄文晩期もしくは、弥生前期
8	第６～８ 河床面	土師器 甕	口縁部片　輪積み成形　内外面ともにヨコナデ 胎土は橙白色で赤色粒子・白色粒子を含む良土　古墳時代後期か
9	第６～８ 河床面	土師器 甕	口縁部片　輪積み成形　内外面ともにヨコナデ　二次焼成か口縁部～外面に煤付着 胎土は橙白色で黒雲母・白色粒子・黒色粒子を多く含む　古墳時代後期か
10	第６～８ 河床面	土師器皿 R種小型	口径（5.8)cm　底径（4.0）cm　器高1.8cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・白色粒子を含む
11	第６～８ 河床面	土師器皿 R種小型	口径（7.8)cm　底径（5.8）cm　器高1.8cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
12	第６～８ 河床面	土師器皿 R種大型	口径（12.8)cm　底径7.8cm　器高3.7cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は淡橙色で雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
13	第６～８ 河床面	土師器皿 R種大型	底径4.3cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む
14	第６～８ 河床面	瓦器 火鉢	口縁部片　輪積み成形　回転ヨコナデ 胎土は灰白色で白色粒子を含む　器表は灰色、黒色処理
15	第６～８ 河床面	瓦器 製品	口径4.5cm　器高3.6cm　孔径1.0cm　胴部対角線上２箇所に貫通しないφ0.8cmの穴 胎土は灰白色で白色粒子・黒色粒子を含む　器表は黒色処理
16	第６～８ 河床面	東遠型 山皿	口径（8.2)cm　底径4.0cm　器高2.0cm　輪積み成形のちロクロ成形　外底部遅い回転糸切り 内底面に重ね焼き痕　口縁部内側に煤付着 胎土は灰色で精良土　内面に緑色透明の自然釉がかかる
17	第６～８ 河床面	常滑 片口鉢Ⅰ類	口径（21.0)cm　底径（12.0）cm　器高7.1cm　輪積み成形のち右回転ロクロ整形 胎土は灰色で長石・礫・白色粒子を含む
18	第６～８ 河床面	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面磨耗　外面口縁部下までヨコナデ　胴部に指頭痕あり 胎土は鈍い橙色で長石・礫・白色粒子を含む
19	第６～８ 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ 胎土は灰色で長石・白色粒子を含み、表面に長石が吹き出している　器表は茶褐色
20	第６～８ 河床面	常滑甕転用 磨耗陶片	長5.4cm　幅5.5cm　厚1.4cm　輪積み成形 胎土は灰色で長石・白色粒子を含む　器表は茶褐色
21	第６～８ 河床面	備前 擂鉢	底部片　回転ヨコナデ　外底部摩耗　内面は灰色で磨耗、６条の櫛目 胎土は鈍い橙色で白色粒子・礫を含む
22	第６～８ 河床面	瀬戸 灰釉四耳壺	底径（7.5）cm　胎土は灰白色で精良土　回転ヨコナデ　貼付高台　高台内面は露胎 釉薬は灰緑色で透明の灰釉、貫入あり　畳付けに焼台の一部が付着
23	第６～８ 河床面	瀬戸 灰釉碗	口縁部片　回転ヨコナデ 胎土は黄灰色で良土　胴部中まで灰緑白色の灰釉を漬け掛け
24	第６～８ 河床面	瀬戸 大平鉢	口縁部片　回転ヨコナデ 胎土は黄灰色で良土　器表は淡灰緑色で不透明の灰釉、表面がざらつき一部白くなっている
25	第６～８ 河床面	瀬戸 大平鉢	口径（24.8)cm　回転ヨコナデ　体部外面下半回転ヘラケズリ 胎土は黄灰色で長石を含む良土　胴部中まで灰緑色で半透明の灰釉をハケ塗り、貫入あり
26	第６～８ 河床面	瀬戸 灰釉瓶子	底径（12.8）cm　内面ヨコナデ 胎土は灰色で精良土　内底部に緑色で透明の灰釉が掛かる、貫入あり、一部露胎
27	第６～８ 河床面	瀬戸 灰釉小皿	口径（10.8)cm　底径（6.0）cm　器高2.0cm　外底部回転糸切り　回転ヨコナデ 胎土は灰色で礫を含む精良土　口縁～内面中まで黄灰緑色で透明の灰釉を漬け掛け、貫入あり
28	第６～８ 河床面	瀬戸 灰釉碗	口径（18.0)cm　回転ヨコナデ　外面下半回転ヘラケズリ 胎土は黄灰白色で良土　内面～外面中まで黄灰緑色で半透明の灰釉漬け掛け、貫入あり
29	第６～８ 河床面	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	底径5.1cm　ロクロ成形　削り出し高台　畳付～高台内は露胎 素地は灰色で精良堅緻　釉薬は灰緑色で半透明、気泡あり
30	第６～８ 河床面	竜泉窯青磁 無文碗	口縁部片　ロクロ成形　素地は暗灰色で精良土　釉薬は淡灰緑色不透明、釉薬薄い
31	第６～８ 河床面	竜泉窯青磁 瓶	胴部片　素地は灰白色で精良堅緻　釉薬は青灰緑色で透明、気泡あり
32	第６～８ 河床面	竜泉窯青磁 鉢	底径（8.0）cm　削り出し高台　高台内側中央部は露胎 素地は暗灰色で精良土　釉薬は暗灰緑色で不透明、貫入・気泡あり、釉薬やや厚い　15c
33	第６～８ 河床面	平瓦	遺存長(9.9)cm　遺存幅（13.3）cm　厚2.8cm　胎土は灰白色で礫を多く含む 凸面斜格子・離れ砂　凹面ナデ調整
図18-34	第６～８ 河床面	平瓦	遺存長(14.2)cm　遺存幅（15.3）cm　厚1.8cm　胎土は灰色で白色粒子・礫を含む良土 凸面縄目・離れ砂　凹面糸切り痕・離れ砂　側面ナデ
35	第６～８ 河床面	砥石 中砥	遺存長（4.5）cm　幅4.0cm　厚4.2cm　淡橙色　層状で気泡が多い　砥面４面　天草産
36	第６～８ 河床面	硯	遺存長（6.8）cm　遺存幅（4.5）cm　厚1.3cm　暗灰色　雨畑産
37	第６～８ 河床面	石皿	遺存長（14.6）cm　遺存幅（6.5）cm　厚3.8～2.0cm 内面摩耗　外面なだらかに整形されている
図19-1	第９ 河床面	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　器表は赤茶褐色　口縁部に灰緑色の降灰 胎土は灰色で長石・白色粒子を含み、表面に長石が吹き出している

表６　出土遺物観察表（６）

挿図番号	出土遺構	種　別	備　　考
2	第9 河床面	平瓦	遺存長(9.8)cm　遺存幅 (9.5) cm　厚1.9cm　胎土は暗灰色で白色粒子を含む良土 凸面糸切り・縄目・離れ砂　凹面糸切り・離れ砂　側面ヘラケズリ・ナデ
3	第9 河床面	平瓦	遺存長(12.0)cm　遺存幅 (11.0) cm　厚2.1cm　胎土は灰色で白色粒子を含む良土 凸面縄目・離れ砂　凹面糸切りのちナデ・離れ砂　側面ヘラケズリ・ナデ
図20-1	第9河床面下 最終確認区	土師器皿 R種小型	口径6.7cm　底径4.5cm　器高2.0cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄灰色で赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
2	第9河床面下 最終確認区	土師器皿 R種小型	口径 (5.7)cm　底径 (4.5) cm　器高1.7cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部に穿孔あり 胎土は橙色で赤色粒子・海綿骨針を含む
3	第9河床面下 最終確認区	土器 蓋	径 (15.4)cm　高さ 3.75cm　回転ヨコナデ　つまみと内側の突端は貼り付け 胎土は灰色で赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む　器表は橙色　二次焼成か内外面に煤付着
図21-1	表採	竜泉窯青磁 稜花鉢	口径 (21.4)cm　ロクロ成形のち型押し整形　内面に型押し文　口縁内面が蓮弁 素地は灰白色で精良土　釉薬は青灰緑色で不透明、貫入・気泡あり、施釉厚い
2	表採	竜泉窯 天目型青磁碗	口縁部片　ロクロ成形　口縁端部の釉薬は剥離 素地は灰白色で精良堅緻　釉薬は淡灰緑色不透明、気泡、施釉やや厚い
3	表採	青白磁 梅瓶	胴部片　素地は白色で精良堅緻　釉薬は水青色透明、貫入、施釉薄い
4	表採	永楽通宝	明　1408年　真書

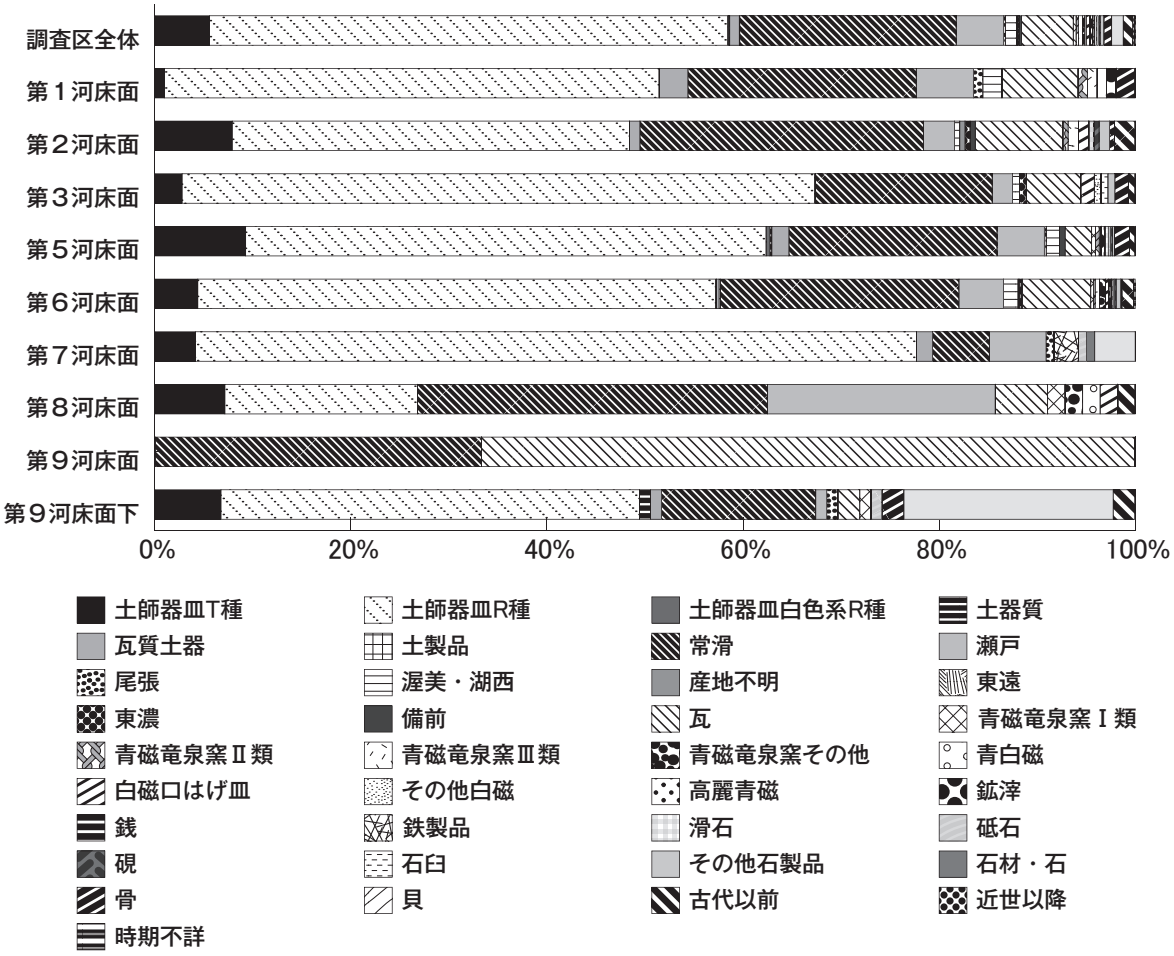
表7　出土遺物計量表（1）

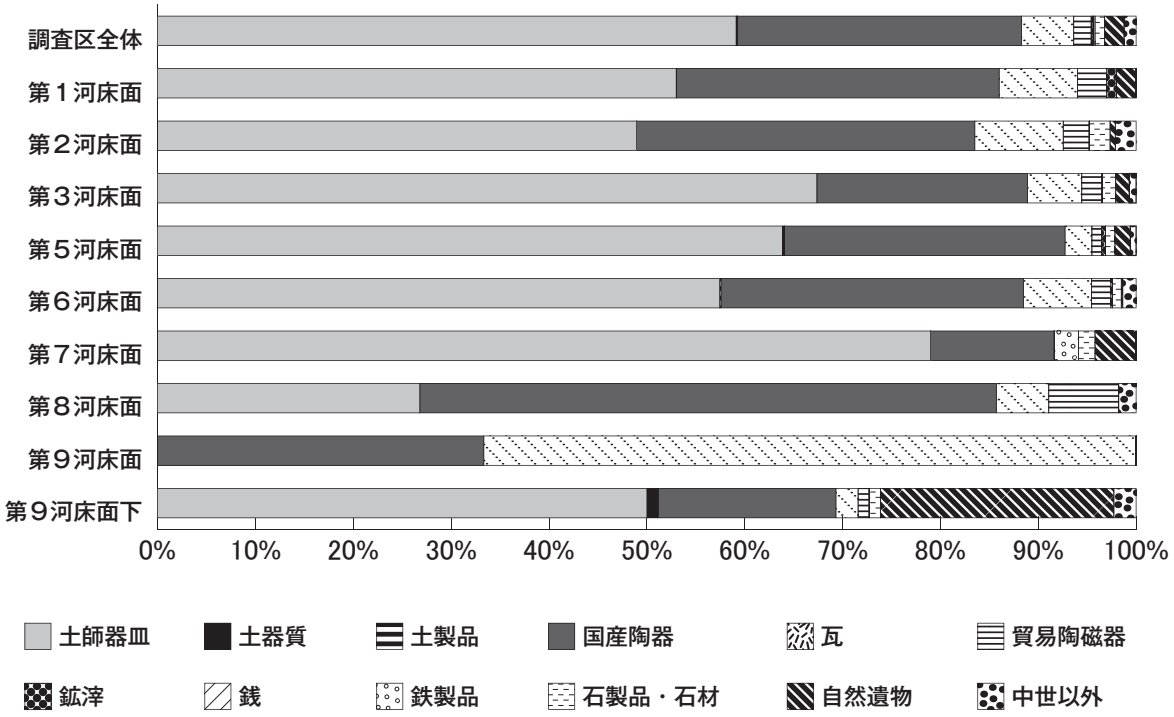
				第1河床面		第2河床面		第3河床面		第5河床面		第6河床面	
古代以前		弥生土器		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	2	0.39%	0	0.00%
		土師器		0	0.00%	3	1.61%	1	0.68%	1	0.19%	8	1.23%
土器（中世）	土師器皿	T種	大	1	0.97%	13	6.99%	4	2.70%	41	7.96%	22	3.39%
			小	0	0.00%	2	1.08%	1	0.68%	7	1.36%	6	0.92%
		R種	大	48	46.60%	73	39.25%	80	54.05%	245	47.57%	316	48.69%
			中	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.58%	1	0.15%
			小	4	3.88%	4	2.15%	13	8.78%	24	4.66%	33	5.08%
			転用品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.39%	0	0.00%
			産地不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
		R種白色系	大	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.39%	0	0.00%
	土器質	火鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
		蓋		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
	瓦質土器	火鉢		3	2.91%	2	1.08%	0	0.00%	8	1.55%	1	0.15%
		香炉		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		器種不明		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.15%
土製品		羽口		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
国産陶器	常滑	壺		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
		甕		24	23.30%	51	27.42%	26	17.57%	94	18.25%	139	21.42%
		片口鉢	Ⅰ類	0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	6	1.17%	5	0.77%
			Ⅱ類	0	0.00%	2	1.08%	1	0.68%	4	0.78%	11	1.69%
		山茶碗		0	0.00%	0	0.00%	1	0.68%	2	0.39%	1	0.15%
		鳶口壺		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
		摩耗陶片（甕転用）		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.39%	0	0.00%
		磨耗陶片（Ⅱ類鉢転用）		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.15%
		器種不明		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
	瀬戸	壺類		0	0.00%	0	0.00%	2	1.35%	7	1.36%	3	0.46%
		仏具類		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
		碗類		1	0.97%	2	1.08%	0	0.00%	5	0.97%	5	0.77%
		皿類		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	5	0.97%	3	0.46%
		盤類		1	0.97%	3	1.61%	1	0.68%	7	1.36%	11	1.69%
		柄付片口		2	1.94%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
		入子		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.31%
		片口鉢		1	0.97%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		擂鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.15%
		器種不明		1	0.97%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.46%
	尾張	山茶碗窯系片口鉢		1	0.97%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
	渥美・湖西	壺		1	0.97%	0	0.00%	1	0.68%	1	0.19%	0	0.00%
		甕		1	0.97%	1	0.54%	0	0.00%	5	0.97%	10	1.54%
		片口鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
	産地不明	片口鉢		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
	東遠	山皿		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
	東濃	山茶碗		0	0.00%	1	0.54%	1	0.68%	0	0.00%	1	0.15%
	備前	擂鉢		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	3	0.58%	1	0.15%
瓦		平瓦		7	6.80%	12	6.45%	5	3.38%	12	2.33%	41	6.32%
		軒平瓦		1	0.97%	1	0.54%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
		丸瓦		0	0.00%	4	2.15%	3	2.03%	2	0.39%	4	0.62%
貿易陶磁器	青磁竜泉窯(系)	太宰府Ⅰ類	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.39%	2	0.31%
		太宰府Ⅱ類	碗類	1	0.97%	1	0.54%	1	0.68%	2	0.39%	1	0.15%
		太宰府Ⅲ類	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
			盤類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
			その他	1	0.97%	2	1.08%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.15%
		その他	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
			盤類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
			その他	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
	青白磁	梅瓶		1	0.97%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		碗		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
	白磁	口はげ	皿	0	0.00%	2	1.08%	2	1.35%	0	0.00%	2	0.31%
		その他	皿	0	0.00%	0	0.00%	1	0.68%	0	0.00%	0	0.00%
	高麗青磁	瓶子		0	0.00%	0	0.00%	1	0.68%	0	0.00%	0	0.00%
鉱滓		鉄滓		1	0.97%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.39%	0	0.00%
		銅滓		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
金属製品	銭	中国銅銭		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
	鉄	釘		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
石製品	滑石	鍋		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
		印判		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
		加工品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
	砥石	鳴滝		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
		天草		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
		上野		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
	硯			0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.15%
	石臼			0	0.00%	0	0.00%	1	0.68%	0	0.00%	0	0.00%
	その他	不明加工品		0	0.00%	1	0.54%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.46%
		大型石製品		0	0.00%	1	0.54%	1	0.68%	0	0.00%	0	0.00%
		碁石		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%
石・石材		片岩系石材		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
自然遺物	骨			2	1.94%	1	0.54%	2	1.35%	8	1.55%	1	0.15%
	貝	ハマグリ類		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		サザエ・アカニシ		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		ツメタガイ		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		カキ		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		ウミニナ類		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
		二枚貝		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
近世以降		近世土器陶磁器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
時期不詳		東海産不明土器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.15%
合計				103	100%	186	100%	148	100%	515	100%	649	100%

表8　出土遺物計量表（2）

				第7河床面		第8河床面		第9河床面		第9河床面下		総計	
古代以前		弥生土器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	4	0.20%
		土師器		0	0.00%	1	1.82%	0	0.00%	1	1.15%	16	0.78%
土器（中世）	土師器皿	T種	大	2	1.64%	2	3.64%	0	0.00%	6	6.90%	93	4.55%
			小	3	2.46%	2	3.64%	0	0.00%	0	0.00%	21	1.03%
		R種	大	79	64.75%	9	16.36%	0	0.00%	31	35.63%	970	47.48%
			中	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.20%
			小	10	8.20%	2	3.64%	0	0.00%	7	8.05%	103	5.04%
			転用品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
			産地不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		R種白色系	大	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
	土器質	火鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		蓋		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	1	0.05%
	瓦質土器	火鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	16	0.78%
		香炉		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		器種不明		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
土製品		羽口		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
国産陶器	常滑	壺		0	0.00%	2	3.64%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.20%
		甕		7	5.74%	15	27.27%	1	33.33%	14	16.09%	404	19.77%
		片口鉢	Ⅰ類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	12	0.59%
			Ⅱ類	0	0.00%	3	5.45%	0	0.00%	0	0.00%	21	1.03%
		山茶碗		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.20%
		鳶口壺		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		摩耗陶片（甕転用）		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		磨耗陶片（Ⅱ類鉢転用）		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		器種不明		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	瀬戸	壺類		0	0.00%	1	1.82%	0	0.00%	0	0.00%	15	0.73%
		仏具類		1	0.82%	1	1.82%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
		碗類		2	1.64%	5	9.09%	0	0.00%	0	0.00%	22	1.08%
		皿類		2	1.64%	1	1.82%	0	0.00%	0	0.00%	12	0.59%
		盤類		2	1.64%	5	9.09%	0	0.00%	0	0.00%	32	1.57%
		柄付片口		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
		入子		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		片口鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		擂鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		器種不明		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	7	0.34%
	尾張	山茶碗窯系片口鉢		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	4	0.20%
	渥美・湖西	壺		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
		甕		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	19	0.93%
		片口鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	産地不明	片口鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	東遠	山皿		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	東濃	山茶碗		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
	備前	擂鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.24%
瓦		平瓦		0	0.00%	3	5.45%	2	66.67%	1	1.15%	89	4.36%
		軒平瓦		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
		丸瓦		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	16	0.78%
貿易陶磁器	青磁竜泉窯(系)	太宰府Ⅰ類	碗類	0	0.00%	1	1.82%	0	0.00%	1	1.15%	6	0.29%
		太宰府Ⅱ類	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.24%
		太宰府Ⅲ類	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
			盤類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
			その他	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.29%
		その他	碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
			盤類	0	0.00%	1	1.82%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
			その他	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	青白磁	梅瓶		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		碗		0	0.00%	1	1.82%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	白磁	口はげ	皿	0	0.00%	1	1.82%	0	0.00%	0	0.00%	7	0.34%
		その他	皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	高麗青磁	瓶子		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
鉱滓		鉄滓		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
		銅滓		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
金属製品	銭	中国銅銭		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	鉄	釘		3	2.46%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
石製品	滑石	鍋		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		印判		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		加工品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	砥石	鳴滝		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	2	0.10%
		天草		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
		上野		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	硯			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.15%
	石臼			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	その他	不明加工品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.20%
		大型石製品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.10%
		碁石		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
石・石材		片岩系石材		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
	骨			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	2.30%	16	0.78%
	貝	ハマグリ類		3	2.46%	0	0.00%	0	0.00%	4	4.60%	7	0.34%
		サザエ・アカニシ		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	2	0.10%
		ツメタガイ		1	0.82%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.15%	2	0.10%
		カキ		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	2.30%	2	0.10%
		ウミニナ類		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	3.45%	3	0.15%
		二枚貝		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	8	9.20%	8	0.39%
近世以降		近世土器陶磁器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.20%
時期不詳		東海産不明土器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.05%
合計				122	100%	55	100%	3	100%	87	100%	2043	100%

表９　出土遺物計量表（３）


調査区全体
第１河床面
第２河床面
第３河床面
第５河床面
第６河床面
第７河床面
第８河床面
第９河床面
第９河床面下
0%
20%
40%
60%
80%
100%
土師器皿T種
土師器皿R種
土師器皿白色系R種
土器質
瓦質土器
土製品
常滑
瀬戸
尾張
渥美・湖西
産地不明
東遠
東濃
備前
瓦
青磁竜泉窯Ⅰ類
青磁竜泉窯Ⅱ類
青磁竜泉窯Ⅲ類
青磁竜泉窯その他
青白磁
白磁口はげ皿
その他白磁
高麗青磁
鉱滓
銭
鉄製品
滑石
砥石
硯
石臼
その他石製品
石材・石
骨
貝
古代以前
近世以降
時期不詳


調査区全体
第１河床面
第２河床面
第３河床面
第５河床面
第６河床面
第７河床面
第８河床面
第９河床面
第９河床面下
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
土師器皿
土器質
土製品
国産陶器
瓦
貿易陶磁器
鉱滓
銭
鉄製品
石製品・石材
自然遺物
中世以外

１－１　大御堂橋より調査地点を望む

１－２　県道より調査地点を望む

１－３　調査地点近景

１－４　Ⅰ区第２河床面全景（南から）

１－５　Ⅰ区第２河床面全景（東から）

１－６　Ⅱ区第１河床面軒平瓦（図６－６）出土状況
（北東から）

図版２

２－１　Ⅰ区第３河床面全景（南から）

２－２　Ⅰ区第３河床面全景（東から）

２－３　Ⅰ区第３河床面五輪塔水輪（図１０－１）
出土状況（東から）

２－４　Ⅰ区第３河床面五輪塔水輪（図１０－１）
出土状況（西から）

２－５　Ⅰ区第４・第５河床面全景
（南から）

２－６　Ⅰ区第４・第５河床面全景（東から）

３－１　Ⅱ区第４・第５河床面（南から）

３－２　Ⅱ区第５河床面丸瓦（図13－44）出土状況（南から）

３－３　Ⅰ区第７・第８河床面全景（東から）

３－４　Ⅰ区第７・第８河床面全景（南から）

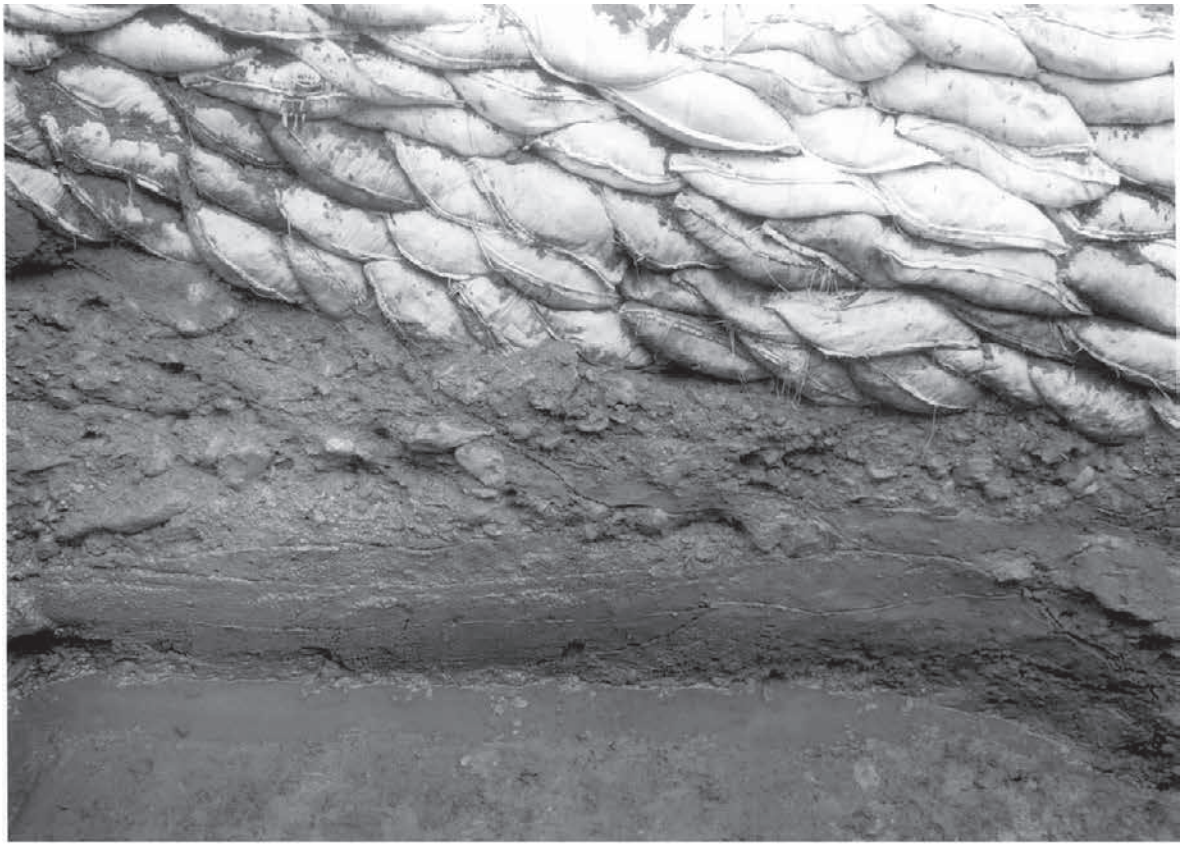
３－５　Ⅰ区第７・第８河床面遺物出土状況（西から）

３－６　Ⅰ区第７・第８河床面土師器皿（図17－8）
出土状況（西から）

図版４

４－１　Ⅰ区東壁土層断面

４－２　Ⅰ区西壁土層断面



５－２　Ⅰ区西壁土層断面下部

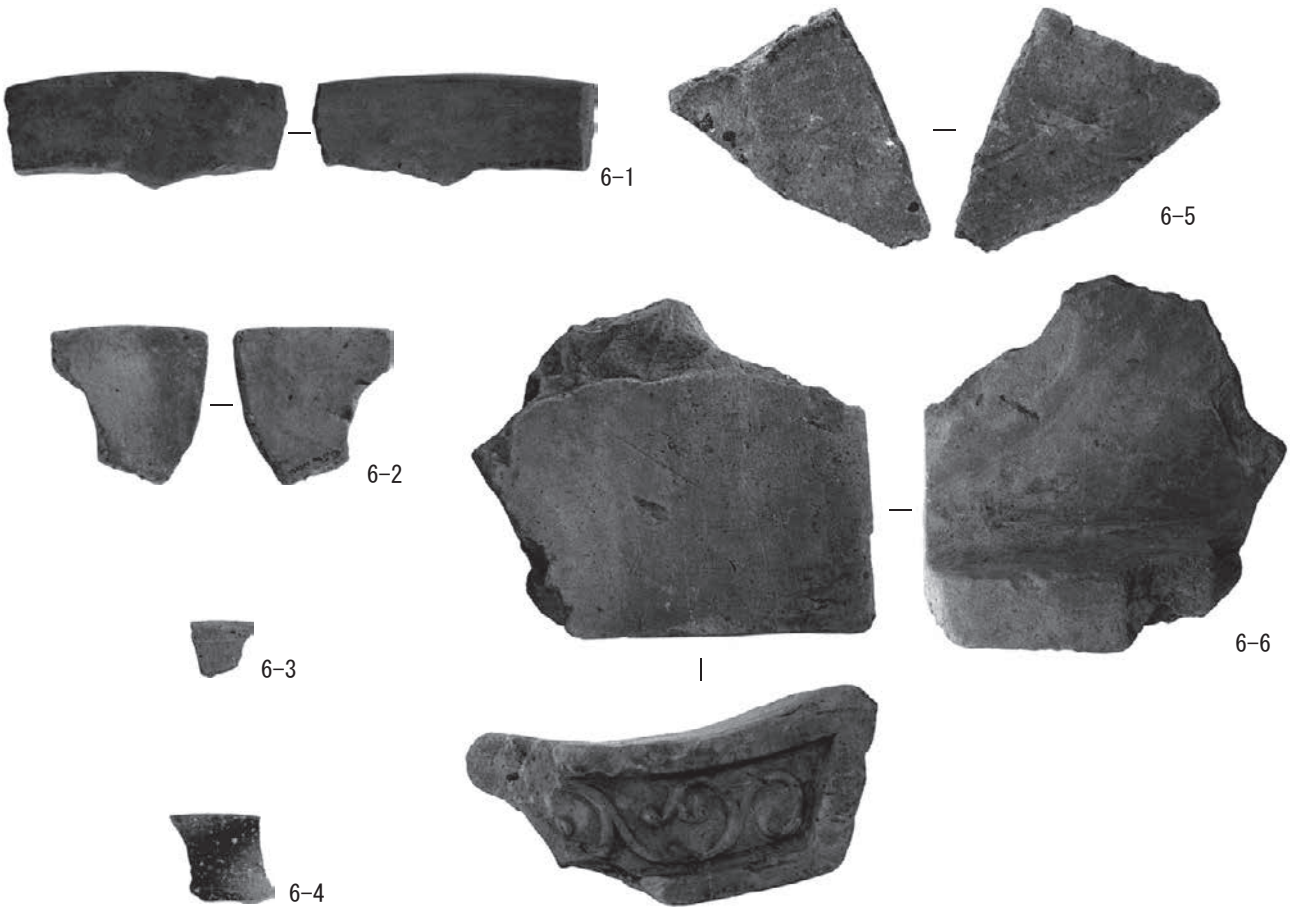
５－２　Ⅰ区西壁土層断面下部

図版６

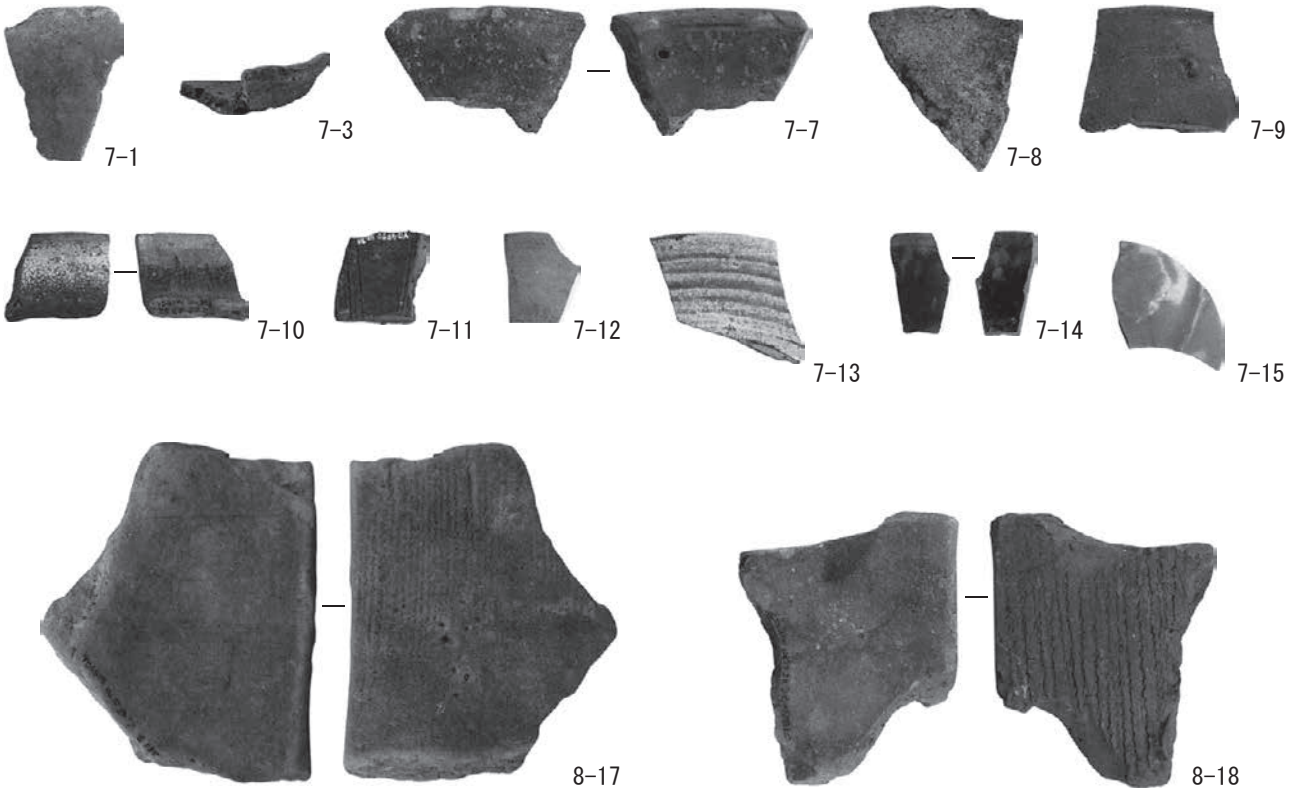
６－１　Ⅱ区東壁土層断面

６－２　Ⅱ区西壁土層断面

６－３　Ⅱ区深掘り坑西壁土層断面



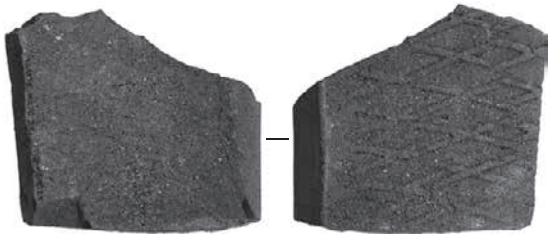
第１河床面



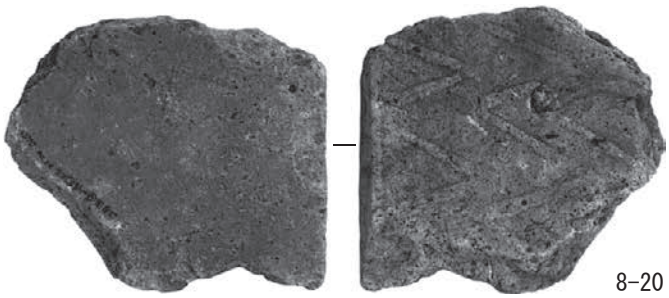
第２河床面

出土遺物１

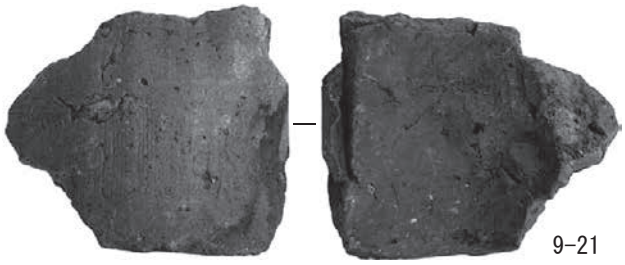
図版８



8-19



8-20

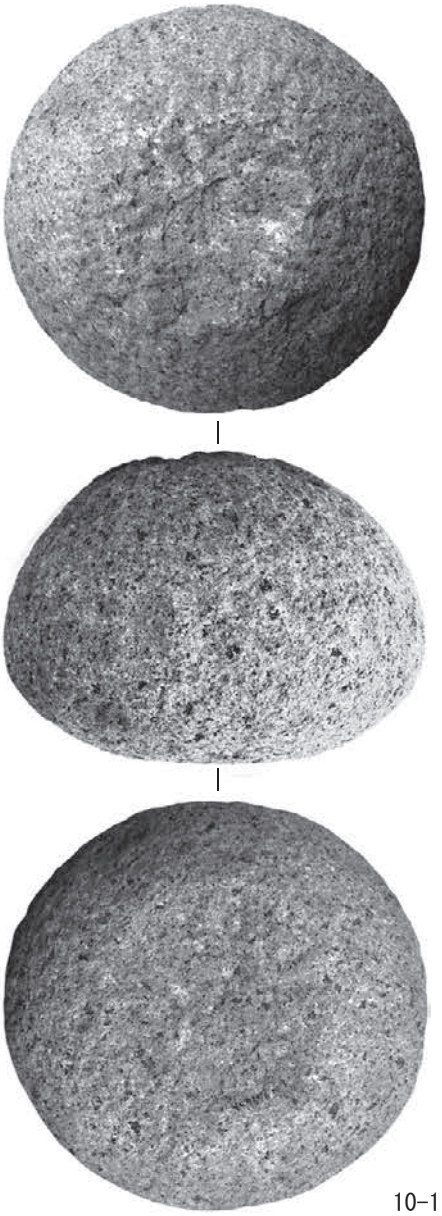


9-21

9-22

9-23

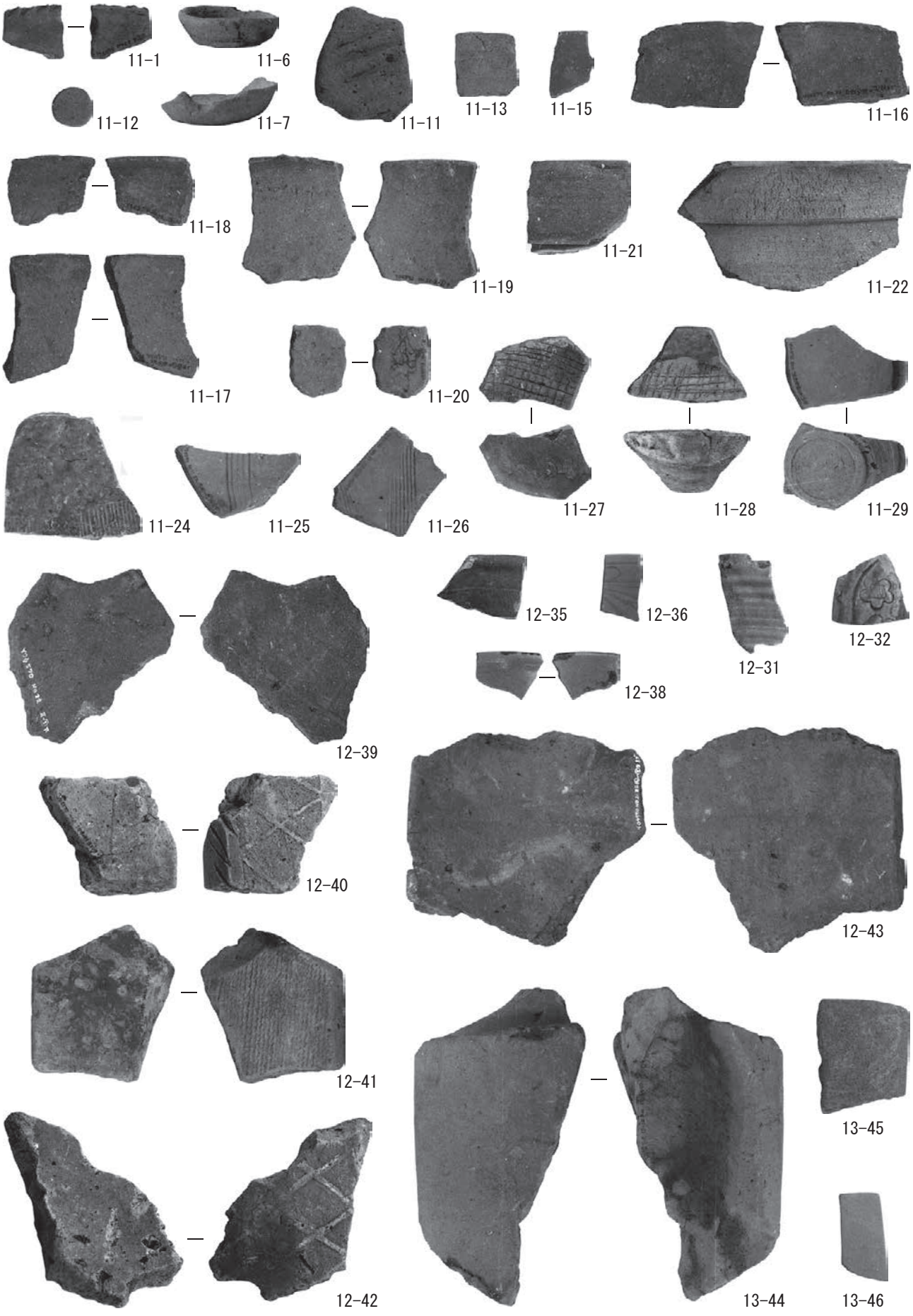
第２河床面



10-1

第３河床面

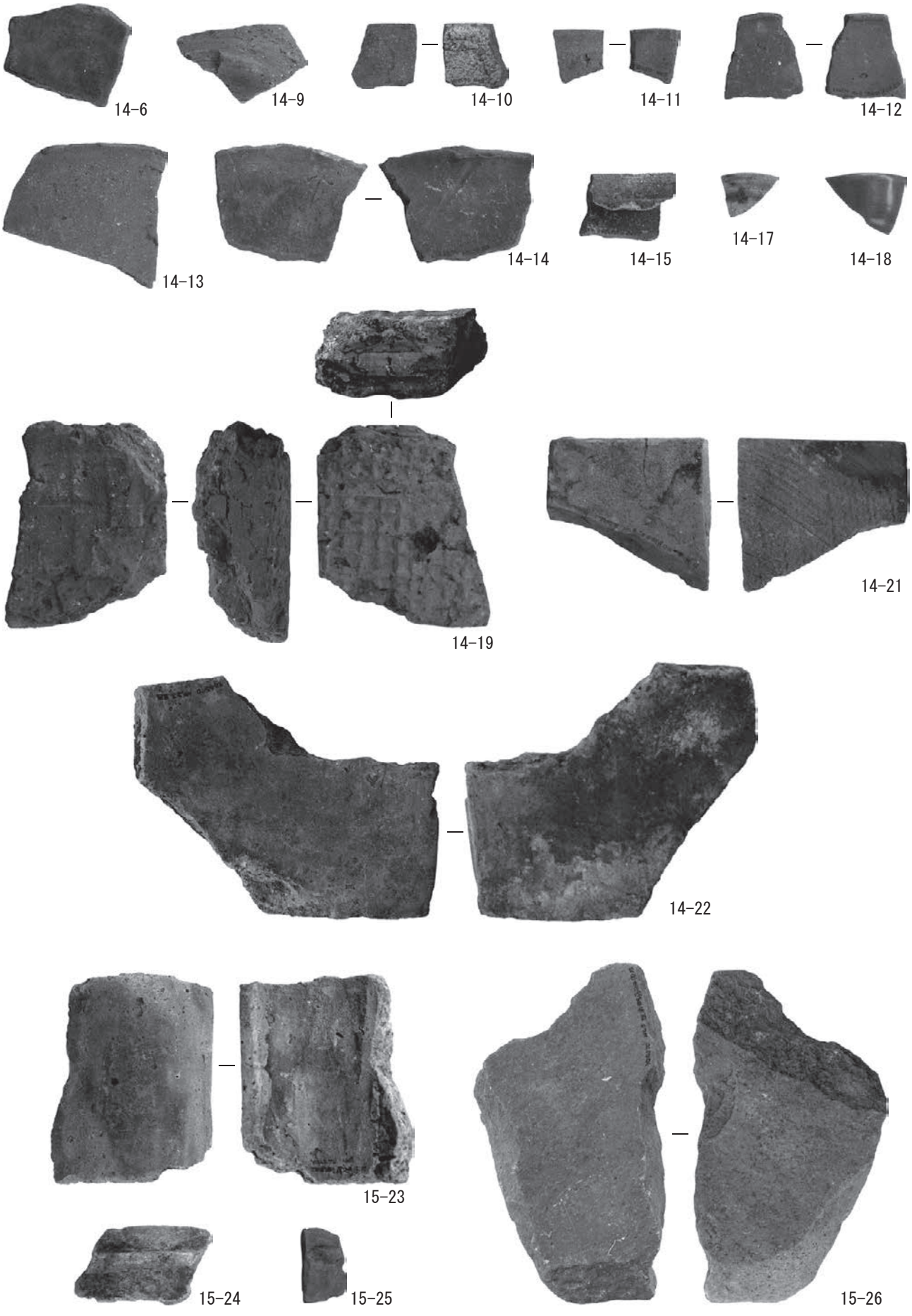
出土遺物２


11-1
11-6
11-12
11-7
11-11
11-13
11-15
11-16
11-18
11-19
11-21
11-22
11-17
11-20
11-24
11-25
11-26
11-27
11-28
11-29
12-35
12-36
12-31
12-32
12-38
12-39
12-40
12-43
12-41
12-42
13-44
13-45
13-46

第５河床面

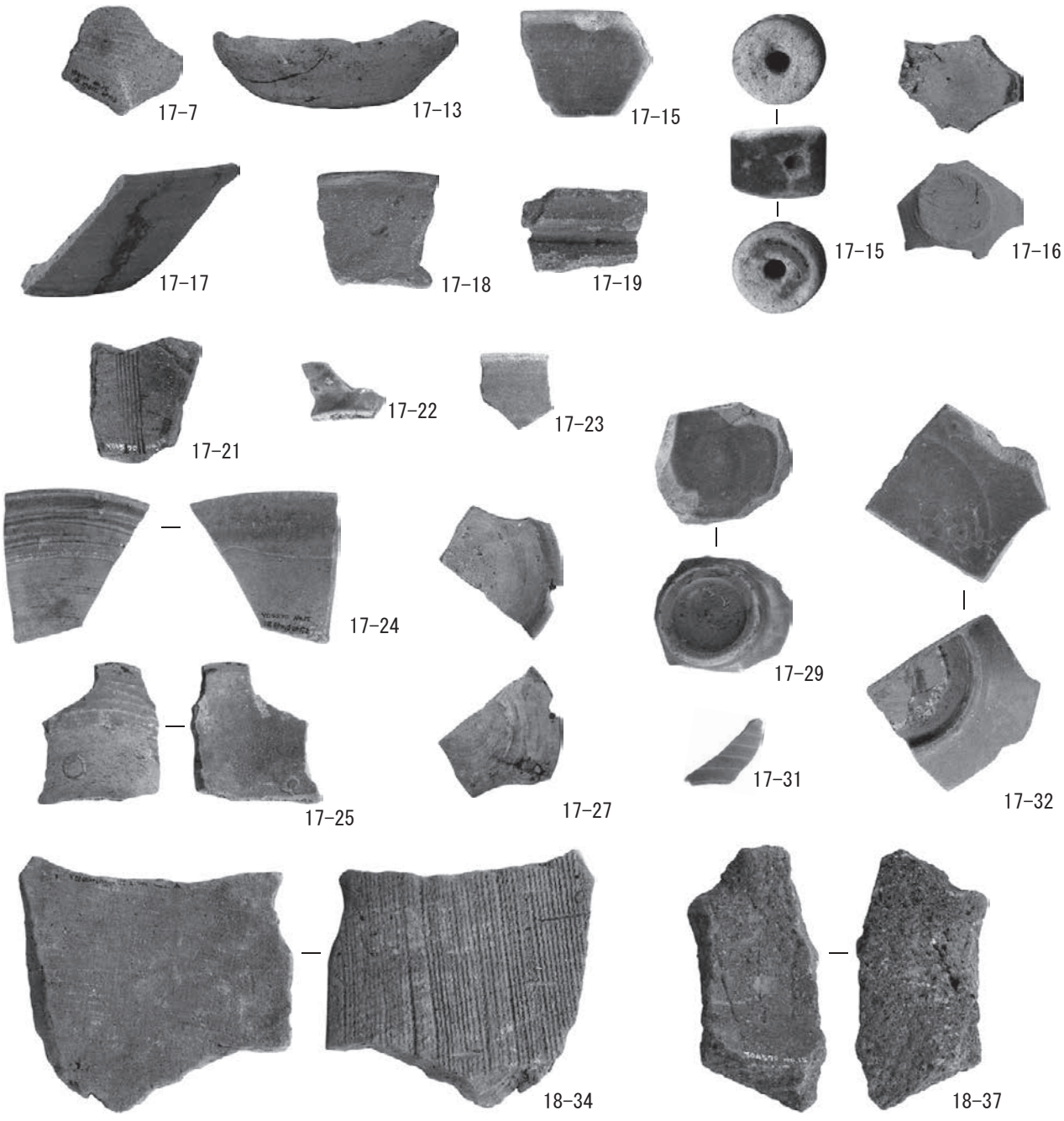
出土遺物３

図版10



第6河床面
出土遺物4

第3～8河床面

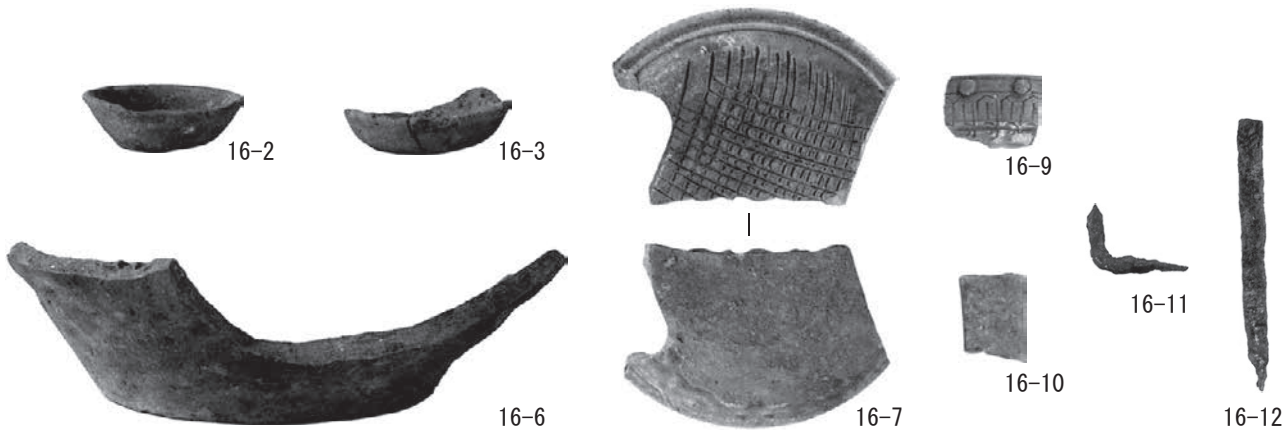


第6～8河床面

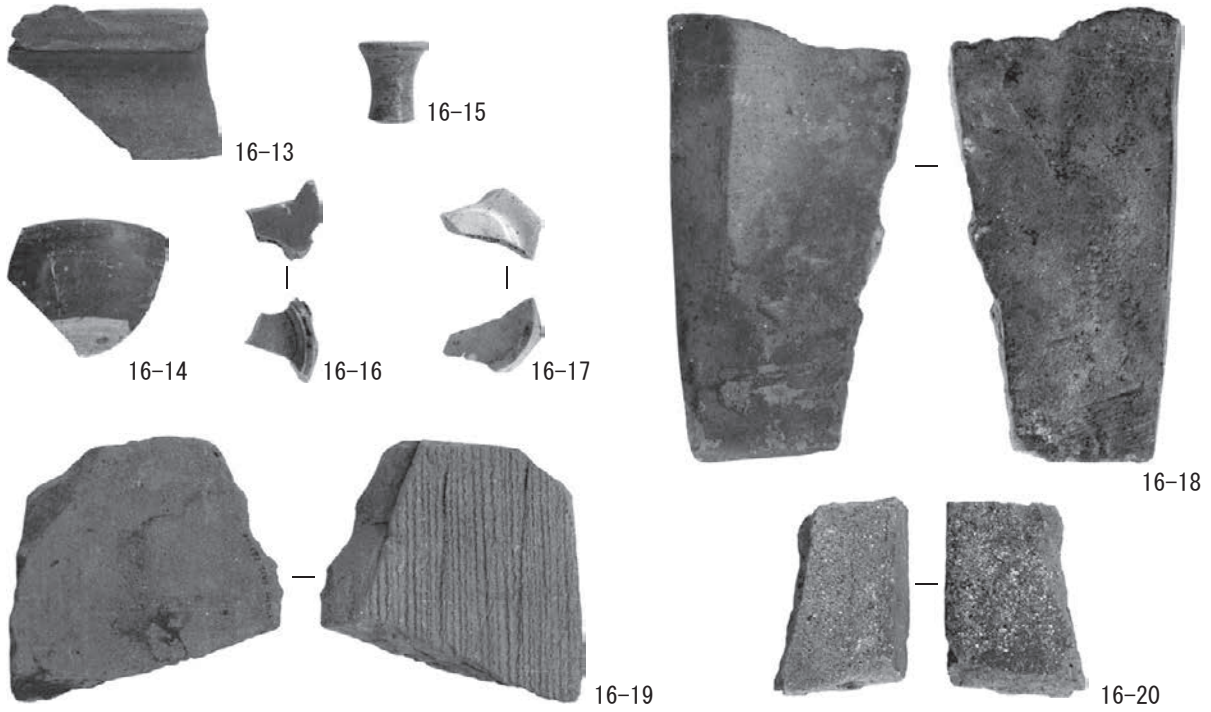
表採

出土遺物5

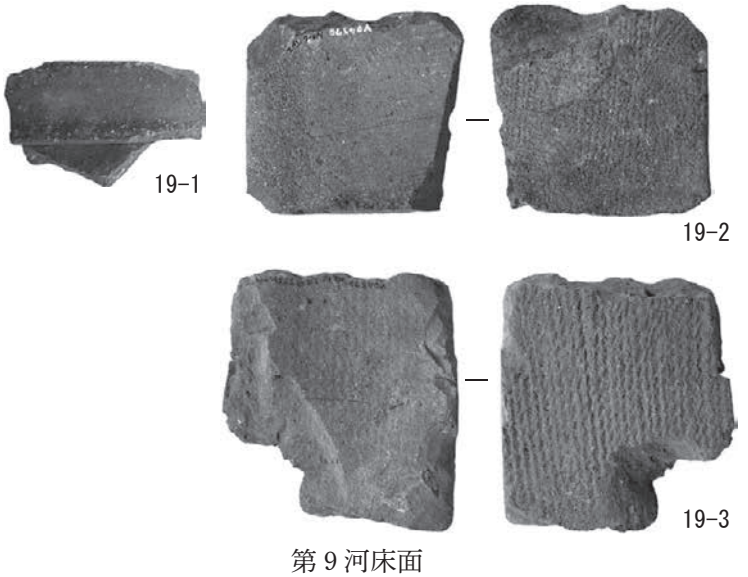
図版12



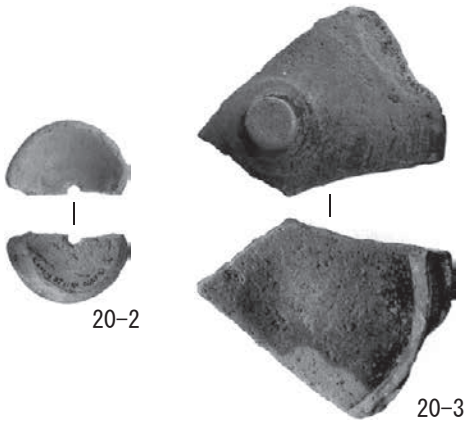
第 7 河床面



第 8 河床面



第 9 河床面



第 9 河床面下
最終確認区

出土遺物6

大慶寺旧境内遺跡（No.361）

寺分一丁目 943 番 2 外地点

例　　言

1．本報は、「大慶寺旧境内遺跡」（№361）内、寺分一丁目943番２外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2．調査期間　　2006年（平18）９月15日～2006年（平18）11月２日
3．調査面積　　56.10㎡
4．略　称　　DT1943
5．調査体制
　担　当　者　　馬淵和雄
　調　査　員　　鍛治屋勝二・松原康子・沖元道（資料整理）
　調査補助員　　鈴木弘太・森谷十美（資料整理）
　作　業　員　　鈴木啓之･丹野正弘･沼上三代治･渡辺輝彦(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)
6．本報作成分担
　遺構図整理　　沖元
　遺物実測　　松原・森谷・沖元
　同墨入れ　　森谷・沖元
　同観察表　　森谷
　同計量表　　沖元
　同写真撮影　　沖元
　原稿執筆　　馬淵・沖元（担当部分末尾に記名）
　編集　　沖元

縄文土器に関しては次の方々の御教示を得た。記して感謝したい。
大竹憲昭・小笠原永隆・劔持輝久・大工原豊

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡と調査地点の概観 …… 228
　1．位置と地勢
　2．歴史的環境
第二章　調査の概要 …… 234
　1．調査にいたる経緯
　2．調査の経過
　3．調査方法
第三章　調査結果 …… 236
　第1節　概　要
　　1．層序と面の概要
　第2節　各　説
　　1．Ⅰ面
　　2．Ⅱ面
　　3．Ⅲ面
　　4．Ⅳ面
　　5．Ⅴ面
　　6．最終深掘り坑
第四章　まとめと考察 …… 252
　1．遺構の変遷と年代
　2．調査地点周辺の土地造成について
　3．大慶寺と周辺の古道

挿　図　目　次

図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡 …… 229
図２　明治15年頃の調査地点周辺…… 232
図３　調査区設定図 …… 235
図４　調査区・深掘り坑土層断面図 …… 237
図５　Ⅰ面遺構全図、Ⅰ面出土遺物 …… 240
図６　Ⅱ面遺構全図、
　　Ⅱ面・集中出土２出土遺物 …… 241
図７　Ⅲ面遺構全図、Ⅲ面出土遺物 …… 242
図８　溝１、同部材 …… 243
図９　Ⅳ面遺構全図、Ⅳ面出土遺物 …… 244
図10　落込み１出土遺物 …… 245
図11　Ⅴ面遺構全図、Ⅴ面・落込み２出土遺物 … 246
図12　井戸１ …… 247
図13　最終深掘り坑 …… 248
図14　遺構変遷図 …… 253
図15　調査地点周辺図 …… 254
図16　調査地点周辺断面概念図 …… 254
図17　階段状造成模式図（１）…… 254
図18　階段状造成模式図（２）…… 255
図19　階段状造成模式図（３）…… 255
図20　大正10年（1921年）の調査地点周辺 …… 256
図21　平成16（2004年）の調査地点周辺 …… 257

表　目　次

表１　出土遺物観察表（１）…… 249
表２　出土遺物観察表（２）…… 250
表３　出土遺物計量表 …… 251

図　版　目　次

図版１…… 259
　１－１　調査地点近景（北から）
　１－２　調査地点近景（南から）
　１－３　調査地点遠景（南西から）
　１－４　東光寺境内所在板碑
図版２…… 260
　２－１　２区Ⅰ面全景（北から）
　２－２　２区Ⅰ面全景（南から）
　２－３　２区Ⅱ面全景（北から）
　２－４　２区Ⅱ面遺物集中２（西から）
図版３…… 261
　３－１　２区Ⅱ面遺物集中２（南西から）
　３－２　２区Ⅲ面全景（北から）
　３－３　２区Ⅲ面溝１（西から）
　３－４　２区Ⅲ面溝１（北から）
図版４…… 262
　４－１　１区Ⅳ面全景（北から）
　４－２　２区Ⅳ面全景（北から）
　４－３　１区Ⅳ面落込み１内遺物集中(西から)
図版５…… 263
　５－１　１区Ⅴ面全景（北から）
　５－２　２区Ⅴ面全景（北から）
　５－３　１区Ⅴ面落込み２内遺物集中(南から)
　５－４　１区Ⅴ面落込み２内遺物集中(西から)
図版６…… 264
　６－１　１区Ⅴ面落込み２内遺物(図11－16)
　　出土状況
　６－２　１区Ⅴ面井戸１（南から）
　６－３　２区最終深掘り坑（西から）
図版７…… 265
　７－１　１区南壁土層
　７－２　１区北壁土層
図版８…… 266
　８－１　２区北壁土層
　８－２　２区最終深掘り坑北壁土層
図版９…… 267
　９－１　図15－イ　東光寺裏平場
　９－２　江ノ島道道標（1)(山崎)
　９－３　江ノ島道道標（2)(山崎・拡大)
　９－４　江ノ島道道標（3)(山崎・拡大)
　９－５　富士塚
図版10 …… 268
　出土遺物

第一章　遺跡と調査地点の概観

１．位置と地勢

地勢

横浜市南部から藤沢市東南部を南西の江ノ島付け根に向かって流下する柏尾川は、三浦半島を相模野台地から地勢的に分断し、両岸に50 ～ 80ｍの丘陵を形成する。鎌倉・藤沢の市境付近では、右岸（北・西岸）が坂東武士のふるさととして知られる村岡丘陵となり、左岸は鎌倉市の台峰から鎌倉・藤沢市境をまたいで江ノ島まで連なる片瀬丘陵となる。調査地点は台峰丘陵北西端にあって、柏尾川水系が左岸に開析した支谷の一つに位置する。

この支谷は柏尾川の開析した沖積平野に北面し、湘南モノレール湘南深沢駅から東に400m、湘南町屋駅から南に600mほどの場所になる。この支谷の入口南側にあるのが大慶寺で、調査地点は寺の山門から約100ｍ南東の谷尻に近い北側山裾に位置している。現住所は鎌倉市寺分一丁目943番2ほか。付近の地表面の標高は15ｍ前後、東の梶原山の山裾でもあり、谷を縦走する前面の道からの比高は１ｍほどある。大船から藤沢市川名にかけて広範に水面下にあった縄文海進期には、調査地点も汀線に程近かったであろう。

交通

調査地点を交通の面からみれば、およそ次のようになる。

長谷方面から大仏坂隧道を常盤に抜け、藤沢まで通じるバス通りがある（県道32号藤沢鎌倉線）。このバス通りに面して、八雲神社前の交差点から300ｍあまり先の右側（北側）に私立幼稚園があり、ここから山裾に沿うように路地が通じている。これが旧道で、バス通りの北側を西に進み、市立深沢小学校の先で藤沢方面への道から北に別れる。この道を北上すると200ｍほどで北に分け入る小道がある。小道に入って100ｍほどにある等覚寺という寺の門前を過ぎたあたりで右（東）に入り、さらに200ｍ進むと右手（東南）に視野が開け、谷が広がる。この谷の入口右手にあるのが大慶寺である。

梶原山は近代の宅地造成により旧状をほとんど留めていないが、山上から調査地点の谷尻を経て、御霊神社の脇から現在の県道32号線に下りてくる道がおそらくあったはずである。この下り坂、またはその支線が大慶寺の谷に下りてきた､すぐの右側(東側)に調査地点がある。対面位置には東光寺がある。道は西北に開けた支谷の中心軸を縦走し、大慶寺と駒形神社の間を抜け、上述のバス通りから北上してきた道と交差し、200 ～ 300ｍ先で柏尾川の形成した沖積平野に出る。いっぽうバス通りから分岐、北上してきた道は北西方向に曲がっていく。両者ともその先は近代の広大な工場や鉄道車庫に阻まれて接続はわからなくなるが、前者は現在の「古館橋」、後者は「町屋橋」あたりに渡河点があり、村岡丘陵に通じていたのだろう。

支谷の中には上掲の東光寺・駒形神社・大慶寺といった中世以来の社寺がある。調査地点の対面位置にあるのが東光寺で、現在の大慶寺と駒形神社は西北にほんの70 ～ 80ｍ、谷を出て西側にある等覚寺は、もと調査地点から東約200ｍの現深沢中学校の場所にあった。往時鎌倉西北部のこの狭い谷一帯に、かなり濃密な宗教的空間が形成されていたことがわかる。

２．歴史的環境

鎌倉市の西側を北西に向かって伸びる台峰は、弥生時代から近世まで遺跡が豊富なことで知られ、過去にも数地点の調査事例がある。簡単に見ておきたい。

図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡（1/5000）

大慶寺旧境内遺跡（№361）本調査地点　寺分一丁目943番2
1.寺分一丁目819-1（1998瀬田）押木2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16-2」鎌倉市教育委員会
寺分藤塚遺跡（№360）2.寺分一丁目502-1他19筆76-7外（1996土屋）継他2002「鎌倉の横穴墓」東国歴史考古学研究所3.上町屋字谷戸781-2（1988福田）
倉久保遺跡（№226.）4.山崎字富士塚868-82（1998田村）田村1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16-2」鎌倉市教育委員会
天神山城（№384）5.山崎字宮廻760（1995田代）松山・浜野「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-1」鎌倉市教育委員会6.山崎字宮廻689-1（2005斉木）2009「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25-2」鎌倉市教育委員会
天神山下城（№358）7.山崎字宮廻708-1（1993田代）田代1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10-2」鎌倉市教育委員会8.山崎横穴群B（№21）9.垣根谷横穴群（№45）10.上町屋横穴群（№35）11.大慶寺横穴（№154）12.昌清院東やぐら（№237）13.陣出やぐら群（№130）14.藤塚西やぐら群（№433）

縄文時代

調査地点近辺では、北約1km付近の湘南町屋駅東側の台峰縁辺部の水道山遺跡で、標高15～16m前後の層から、中期前葉から後期中葉にかけての土器と石器が大量に出土している。土器は中期では曽利・加曾利E、後期は堀之内・加曾利B・称名寺などがある。石器は打製および磨製石斧・石垂・凹石などが採集されている。遺構は未検出ながら、近在に集落の存在することを予想させる（若松ほか2001）。

弥生時代

台山は弥生時代の遺跡に恵まれており、とくに調査機会の多い北面の字藤源治付近（私立北鎌倉女学園一帯）に濃密な分布が示される（丑野1974／手塚ほか1985／斉木ほか1985／玉林ほか1988／宗臺1993／大河内1996／若松ほか1998）。本地点近在では、上記水道山遺跡の別地点で弥生時代中期後半～後期の集落が見つかっている。この遺跡では12軒の竪穴住居が検出され、後期の住居址からは鉄斧も出土した（斉木1980調査、未報告）。

古墳時代

上掲の台山弥生時代遺跡からはたいてい古墳時代の遺構・遺物が存在する。鎌倉市北部から藤沢市南部にかけては古墳時代後期の横穴墓が多数分布することで知られ、富士塚一帯でも6地点で確認されている。調査地点近在では北西約500ｍの寺分藤塚遺跡で、間口30mほどの狭い支谷の斜面に8基が群集しているのが発見されている（土屋ほか2002）。当然当該期集落の存在が予想されるところであり、前出水道山戸ケ崎遺跡や、本地点北約１kmの天神山城遺跡で古墳時代前期～後期の住居などが発見されている。

奈良～平安時代

律令時代前期まで鎌倉には東海道が通過していたことから、この時期の遺跡は鎌倉・藤沢両市内に数多い。台山一帯でも上掲の遺跡のほとんどでこの時期の住居跡が検出されている。調査地点付近はこの時代尺度（さかど）郷に含まれていた可能性があるが、詳細については材料が不足している。

中世

平安時代後期、あらたに登場してきた「兵（つわもの）」が争乱の平定で名を上げ、国衙の軍制改革の中で押領使などとなって次第に地歩を固めていく。桓武平氏の祖として知られる高望王はその代表的な一人であり、関東八平氏の一つ、村岡氏の祖ともされる。高望王は桓武から四代目、寛平年間に朝敵を平定して平姓をもらい上総介となったと伝え、その後裔は坂東に土着して国衙官人になる。諸系図により異なるが、嫡子を平良茂（『尊卑文脈』）あるいは良文（『千葉大系図』『三浦系図』）と伝え、北武蔵村岡郷（埼玉県熊谷市）を本拠として「村岡」を名乗るようになる。のち、子、または孫が相模東部三浦半島付け根の地に移り住み、その地はいつしか村岡（神奈川県藤沢市村岡・弥勒寺）と呼ばれることになった。

村岡氏は鎌倉氏（大庭氏）・三浦氏・千葉氏の祖ともいい、平安後期の坂東武士団にあってきわめて有力な幹流のひとつである。本調査地点の柏尾川対岸に当たる村岡丘陵が、桓武平氏村岡流の本拠とさ

れる。調査地点から2㎞北に、高望王の後裔の居館址と伝えられる場所もある（「村岡城址」）。また、１kmあまり西の柏尾川に「古館橋」という名の橋がかかっており、ここも村岡氏の館にゆかりの地と伝える。

鎌倉から藤沢・横浜に向かっては、道沿いに御霊神社が並ぶ。鎌倉権五郎景政（正）を祀る御霊神社は、鎌倉市坂ノ下から当地、そして横浜市戸塚区にかけて七社を数える。これらを結んだ線が、鎌倉氏の勢力範囲を示すと同時に鎌倉の西の境界をも示すのだろう。景政は大庭御厨の開発領主としても知られる。御厨の東の境界は、鎌倉市長谷の神明社から御霊社とほぼ同じ線を藤沢市川名付近まで向かい、境川と柏尾川の合流点以北は境川沿いにそのまま北上する。神明社は御厨の信仰の核なので、これはその四至の東側を示している可能性もある。一方御霊社の線は合流地点から柏尾川沿いに東行するので、平安時代後期の村岡は大庭御厨と鎌倉郡に挟まれた境界域に位置することになる。

本地点西南の小丘陵を越えたところに並ぶ深沢小学校と御霊神社は、鎌倉景政の後裔、梶原景時の邸跡と伝える場所である。この一帯には景時の影が濃く残る。小学校校舎裏の山裾には鎌倉時代後期の石窟墓「やぐら」があり、中におさめられた五輪塔は景時の墓と呼ばれている。塔そのものは景時から1世紀以上下る鎌倉時代末期の様式で、墓塔ではなく後代の人々が立てた供養塔とみなければいけないが、景時の出自は鎌倉氏であり、祖先鎌倉景政の開発した大庭御厨の一隅に居を構えていたのであろう。御霊神社にも「建武元年十二月廿三日」銘の五輪塔地輪がある（「建武元年」は1334年）。

『太平記』によれば、元弘三年（1333）、新田義貞軍を防ぐため、武蔵・相模・出羽・奥州の軍6万余騎を率いた執権北条守時は、5月18日洲崎に向かう。日に5・6度の白兵戦を敢行するも、ついに非勢とみて切腹し、侍大将南条高直ら90余人も自刃、攻撃軍はこの夜山ノ内まで侵入したという。『梅松論』には、

> 「武蔵路は相模守守時、洲崎千代塚において合戦をいたしけるが、是も討ち負て一足も退かず自害す。南条左衛門尉并入道一処にて命を落す」

とある。ここに見える「洲崎千代塚」については、寺分村あるいは台村南部に遺称地があったともいうが、現在は不明である。当時の洲崎は山崎村・梶原村・寺分村にまたがる広範囲な地名であった。

調査地点から北西500ｍの柏尾川河川敷に近い小丘陵には、高さ203cmの宝篋印塔がある。新田義貞鎌倉攻めの戦死者の骨を集めて供養のため立てたと言われるもので、「陣出の泣き塔」と通称される。

「願主行浄、預造立、石塔婆、各々檀那、現世安穏、後生善処　文和五年丙申二月廿日、供養了」の銘文があり、塔身に金剛界四仏の種子を刻む（「文和五年」は1356年）。寺院や廃寺伝承はないが、大慶寺の寺領を示す地名「寺分」にあるところから、何らかの関係があるかもしれない。

戦国時代以後

早雲庵宗瑞（伊勢新九郎長氏・「北条早雲」）は、明応七年（1498）、足利茶々丸を討滅して伊豆を平定したあと相模国に進む。文亀元年（1501）までに小田原を制圧し（黒田2005）、関東の動乱に乗じて相模東部の上杉支配地を次々に収めていく。当時三浦半島から相模東部にかけて圧倒的な勢力を有していた三浦道寸義同を平塚岡崎城に破ったのち、永正九年（1512）、鎌倉郡の西北玉縄に広大な城を築く。玉縄城は三浦半島の付け根にあって、三浦一族を半島内に封じるとともに、後北条氏にとり東相模経営のきわめて重要な拠点となった。いま旧状はほとんど失われているが、戦前の赤星直忠の縄張図や（赤星1959）、1955年撮影の航空写真によれば、村岡丘陵の複雑な地形を利用して、直径800ｍの環状をなす山稜内に本丸を置き、その外側に家臣などの居館を配し、さらにその外周にもうひと巻きの山稜を有する複郭構造を持つ。そしてそこから、支尾根を利用して周囲に放射状に郭を伸ばす強固な構造を有していた。さらに周囲の長尾台（横浜市）・御幣山（藤沢市）・二伝寺（藤沢市）・村岡（藤沢市）・天神山（鎌

図２　明治１５年頃の調査地点周辺（『迅速測図』）（1/20000）

倉市）などに支城を配した（赤星1959）。天神山城は本調査地点から約１㎞北方に位置している。

大慶寺について

臨済宗円覚寺派、霊照山と号する。本尊木造釈迦如来は永禄十年（1567）仏師快円の作。開創時期は明確ではないが、開山は大休正念（浄智寺開山・円覚寺二世・建長寺三世・寿福寺六世）、開基は長井光禄とされる（「釈迦如来坐像胎内銘札」『神奈川県史　資料編』３－7572）。「弘安の初め」無象静照（浄智寺四世）がここに住した（『本朝高僧伝』）。元亨三年（1323）の北条貞時十三回忌に際して、道顕が砂金五両を納め僧衆83名が参列しているので、かなりの大寺だったことがわかる（「北条貞時十三年忌供養記」『県史　資料編』2－2364）。室町時代には関東十刹に列せられており（『扶桑五山記』）、寺格も高かった。延慶から元応年間（1308 ～ 1321）頃秋澗（礀）道泉が住山し、歴代住持は之庵道慣・傑翁是英ら彼の弟子が多い。方外庵（秋澗塔所）・覚華庵・本光庵（之庵塔所）・指月庵・天台庵・大堂庵などの塔頭があった（『新編相模国風土記稿』ほか）。

戦国時代には寺勢次第に衰え、後北条氏治世下の天文十六年（1547）、玉縄城主北条氏康は須崎（現洲崎）大慶寺分が以前から武蔵国比企郡三保谷の養竹院領だったことを認め、同院に安堵している（「帰源院文書」『鎌倉市史　史料編』２－460）。このとき奇文禅才を鎌倉に常住させているが、天文十八年にい

たって、古河公方足利晴氏が禅才を大慶寺住持とした（「帰源院文書」『同前』2 − 461）。禅才は復興に尽くし、永禄十年（1565）本尊を再興したが（前掲「釈迦如来坐像胎内銘札」）、衰運止まらず、永禄九年（1566）北条氏政が円覚寺帰源庵に大慶寺分を安堵し（「帰源院文書」『同前』2 − 465）、その後天正にいたるまで大慶寺分は帰源庵のものだったようである（「帰源院文書」『同前』2 − 469・470）。帰源庵開山の傑翁是英が大慶寺の住持ともなったので、両寺の関係はその縁から生じたのであろうという（川副ほか1959，川副執筆分）。この辺りの字「寺分」は大慶寺の寺領であったことから来ている。

大慶寺は江戸時代には廃絶、方外庵のみ残った。延享四年（1747）、方外庵主是性は大休正念坐像（現帰源院蔵）を再興し（前掲「釈迦如来坐像胎内銘札」）、さらにその後「大慶寺」の寺名を復興した。現在寺域内本堂裏には臨済禅に特徴的な柏槇の大木があり、その脇に2基の宝塔が立っている。宝塔は2基とも安山岩製で総高131㎝（右）と106㎝（左）、いずれも相輪が破損しており、左側の塔のそれは後補である。復元すればほぼ同じ大きさになろう。鎌倉時代末期の宝篋印塔などに通有の関東様式の下半部を備える。すなわち、基礎、反花座下部ともに二区に分け、後者には格狭間が刻まれる。また背後の崖裾には数基の「やぐら」も見られ、鎌倉時代後期のこの寺のありようを窺わせる。

近在の寺社

東光寺　調査地点の対面位置にある古義真言宗寺院。天照山薬王院東光寺と号し、高野山派、もと手広青蓮寺末。永享三年（1431）、高野山慈眼院の法印霊範が隠居所として中興したという。現在の本尊は不動明王だが、薬王院というから薬師如来を本尊としていたのであろう。来歴はよくわかっていないものの、古くからの寺である可能性がある。

駒形神社　本調査地点から西北約70mの山腹にある。寺分鎮守、祭神は馬を保護する霊験を祀る駒形大神、もとは邇々芸命と伝える。社伝によると治承年中大庭景親の所領で、天候不順のときには代参が詣でて祈願したという。大庭景親の所領ということは、ここが鎌倉時代まで大庭御厨に属していたということだろうか。大庭氏の祖鎌倉景政を祀る御霊神社（後述）が近隣にあるので、可能性は高い。

等覚寺　いま調査地点の支谷を出た南側山裾にあるが、もとは現在の深沢中学校の場所にあり、御霊神社と境を接していた。中学建築の際現在地に移転した。休場山弥勒院等覚寺と号する。古義真言宗、もと青蓮寺末、今高野山宝珠院末。応永年間、秀恵僧都が開いたという。本尊不動明王。

御霊神社　本調査地点から谷尻に上がり、深沢中学校西側の坂を下りた西側にある。調査地点からは直線距離で200mほどの距離しかない。梶原村の鎮守で祭神は鎌倉権五郎景政。坂ノ下から横浜市戸塚区にかけて残る7社の御霊神社を結んだ線が、鎌倉氏の所領を示しているのだろう。また長谷に始まる神明社を結ぶ線が藤沢市川名から境川沿いに北に延びるのは、鎌倉景政が開発領主となった大庭御厨の東限を示している可能性があろう。

深沢御霊神社辺の字を梶原という。先述の通り、深沢小学校の地は梶原景時の居館と伝わり、すぐ脇に景時の墓とされるやぐらおよび五輪塔がある。やぐらも五輪塔も実際には鎌倉時代後〜末期造立の供養塔であるにしても、この一帯に彼の存在感が際だって濃いのは確かである。鎌倉時代後〜末期であれば景時死後1世紀あまりしか経っていない。里人の記憶に彼の邸の記憶は依然鮮明であっただろう。深沢小学校校地をそう伝えるのは、あながち伝承とも言いきれまい。

（馬淵）

第二章　調査の概要

１．調査にいたる経緯

寺分一丁目943番2ほかで個人専用住宅建設の照会があった。当該地点は大慶寺旧境内遺跡（№361）として県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡であるため、2006年5月16・17日に２×３ｍの試掘坑を設定して調査した。深さ240㎝まで掘削した結果、地表下約140㎝で遺物散布面を確認し、さらに少量ながら遺物を包含する層が下に続くことが確認できた。

建築計画では鋼管杭の打設による基礎工事を伴い、遺構の損傷は避けられないが、強度維持の関係上設計変更は困難なため、記録保存のための本発掘調査が実施されることとなった。調査は同年9月15日に重機による表土の掘削から始まった。

２．調査の経過

日誌抄

9月15日（金）	重機による掘削
9月21日（木）	Ⅰ区1面全景写真撮影・平面実測
10月4日（水）	Ⅰ区遺物散布面全景写真撮影
10月10日（火）	Ⅰ区落ち込み2写真撮影
10月11日（水）	Ⅰ区南壁際深掘り
10月12日（木）	Ⅰ区井戸1掘り上げ
10月13日（金）	重機により調査区反転
10月17日（火）	Ⅱ区土塁状遺構写真撮影と平面実測
10月20日（金）	Ⅱ区1面全景写真撮影
10月25日（水）	Ⅱ区2面全景写真撮影
10月26日（木）	Ⅱ区3面全景写真撮影
10月27日（金）	Ⅱ区4面全景写真撮影
10月30日（月）	Ⅱ区5面全景写真撮影・調査区北壁分層と写真撮影
10月31日（火）	Ⅱ区最終深掘り
11月2日（木）	機材撤収

３．調査方法

掘削方法

掘削にあたって、残土は場内処理とし、置場を確保するため建設予定範囲56㎡を南北に二分割し、前半を「Ⅰ区」、後半を「Ⅱ区」とした。作業効率を考慮して、分割は均等ではなく、前者を後者に比べいくらか広く取った。

測量基準の設定

ここでは作業効率を考慮して、調査区長軸中心部を通る測量基準線と、それに直交する基準線を５ｍおきに配した。そして、のちこれらを世界測地系に座標変換するという方法を採用した。

調査区は以下の範囲内にある。

［エリア９］　X－74 037.55～X－74 049.45
　　Y－28 219.75～Y－28 228.20

（馬淵）

図3　調査区設定図 (1/300)

第三章　調査結果

第１節　概　要

１．層序と面の概要

地表面と表土

地表面の標高は14.46ｍ～ 14.60ｍほどで、ほぼ平坦な面になっている。表土層は山側から谷側へ傾斜しており、地滑り等の理由により一度埋没した後、平場が形成されたことが窺える。この表土層を20 ～ 40㎝ほど除くと、Ⅰ面の土塁状遺構の頂部に到達する。

Ⅰ面

表土層の下に現われる最初の面で、標高13.45ｍ（西北）～ 13.85ｍ（東南）程度。黄灰色砂質土ないし明褐色砂質土で構成される面に土塁状遺構が構築されている。土塁状遺構の西側(谷側)よりも東側(山側）のほうが、調査区北側（谷口側）よりも調査区南側（谷尻側）のほうが標高が高くなっており、本来の地形の影響を受けている可能性が考えられる。

Ⅱ面

Ⅰ面を５cm ～ 28㎝掘り下げた、標高13.33ｍ（西北）～ 13．76ｍ（東南）に褐色の砂質土が現れる。遺構は非常に少ないが、土師器皿片を中心とする遺物片が大量に含まれる粘質土層も検出されたためこれをⅡ面とし、一度精査した。Ⅰ面と同様、調査区東南隅から調査区西北隅へとゆっくりと傾斜している。

Ⅲ面

Ⅱ面を構成する砂質土を剥がすと、標高13.19ｍ（西北）～ 13.68ｍ（東南）程度で青灰色ないし暗灰色の粘質土が現れる。特に２区において部材を残す溝が検出され、これをⅢ面とした。Ⅰ・Ⅱ面と同じように調査区東南隅が最も標高が高く、調査区西北隅が最も標高が低い。

Ⅳ面

Ⅲ面構成土は10 ～ 50㎝ほどの厚みがあり、これを除くと標高13.08ｍ～ 13．44ｍほどで粘性の強い暗灰色粘質土や青灰色砂質土が現れ、方形状の落込みが確認されたのでⅣ面とした。

Ⅴ面

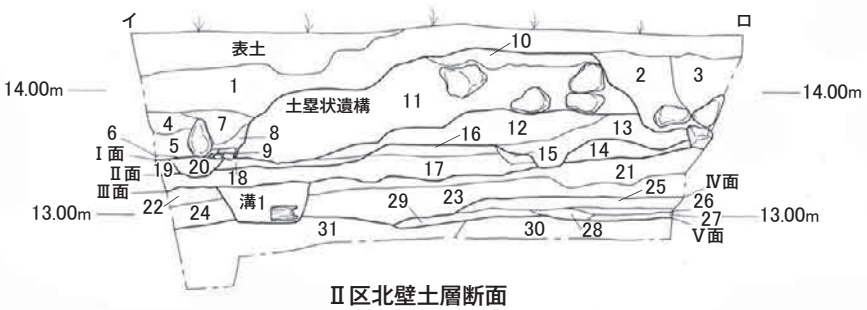
標高12.80ｍ（南側）～ 13.15ｍ（北側）ほどの、Ⅳ面の遺構底部で既に確認されていた黒灰色粘質土を広げていくと東側（山側）へ落ちる落込みが確認されたので、これをⅤ面とした。平面的に遺構を確認したのはこの面までである。

最終深掘り坑

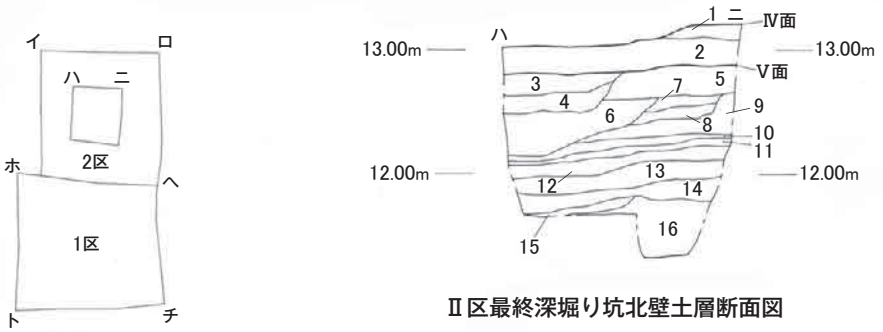
Ⅴ面で規制深度に達したため、これ以下は深掘り坑により下層の土層堆積を把握した。

遺物の出土がなかったため、Ⅴ面より下層はすべて自然堆積によるものである可能性を否定できないが、確実に自然堆積（地山）と確認した層は標高12.08ｍ～ 12.23ｍにかけて堆積する12層（Ⅱ区最終深掘り坑北壁土層断面図）から下層である。12層からⅤ面までの堆積層には炭化物や泥岩粒・凝灰質砂岩粒などが混入しており、自然堆積だとしても地滑り等の要因による堆積の可能性が考えられる。

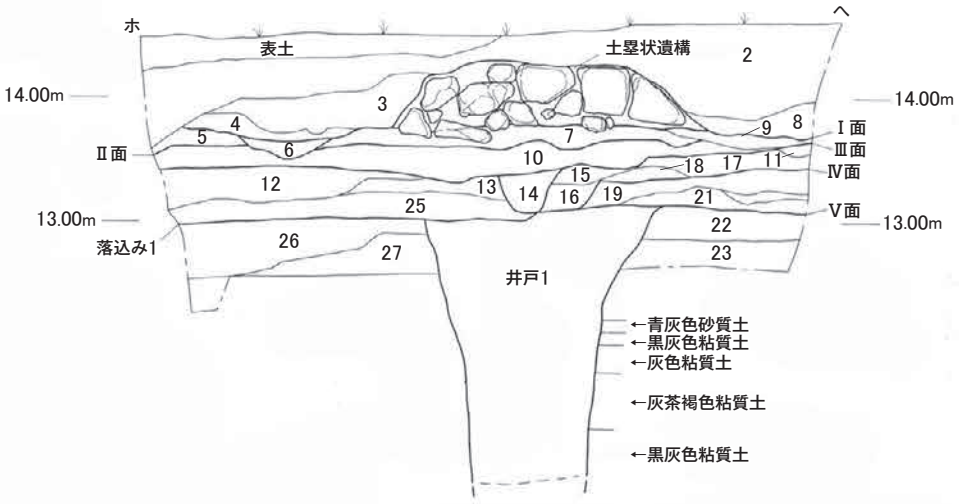
（沖元）



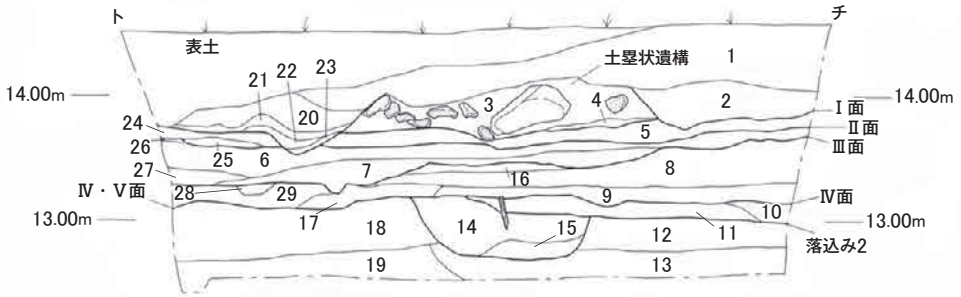
Ⅱ区北壁土層断面



Ⅱ区最終深堀り坑北壁土層断面図



Ⅰ区北壁土層断面



Ⅰ区南壁土層断面（反転図）

図４　調査区・深掘り坑土層断面図

１区北壁土層断面

１．黄茶褐色の粗い砂質土　拳大位までの凝灰質砂岩多く含む
２．拳大～枕大の凝灰質砂岩多量につまる　明茶褐色の粗い砂質土、鉄分、茶褐色粘質土塊含む
３．２に似る
４．拳大～半人頭大の凝灰質砂岩、泥岩の間にしまり弱い灰茶色砂がつまる。泥岩粒含む
５．(黒) 暗褐色粘質土　鉄分塊・白スコリア粒・炭化物・明灰茶色粘質土塊含む、しまり良い
６．灰茶褐色弱粘質土　褐鉄粒・炭化物含む、しまりやや弱い
７．４に似るが拳大の凝灰質砂岩が４より多く全体につまる
８．５に凝灰質砂岩片を含む
９．凝灰質砂岩が平らにつまる
10．20cm大の凝灰質砂岩・泥岩粒・黄茶褐色砂質土による地行状の層　しまり良い（土塁状遺構）
11．大型凝灰質砂岩層　間に黄茶褐色砂質土の粗い砂質土がつまる（土塁状遺構構成土）
12．明灰茶色砂質土　泥岩粒・凝灰質砂岩粒・炭化物・褐鉄粒・暗灰色粘土塊含む、しまりやや弱い（上面Ⅰ面）
13．中型～拳大泥岩・凝灰質砂岩　黄灰色～青灰色の粗い砂質土が間につまる、しまり弱い（上面Ⅰ面）
14．灰茶色粘質土　砂粒・土師器皿小片多く含む、凝灰質砂岩粒含む、しまりやや弱い（遺物集中２）
15．16に似る　土師器皿小片は含まない
16．灰茶色砂質土　炭化物・土師器皿小片・凝灰質砂岩粒・褐鉄粒含む　しまりやや弱い（上面Ⅱ面）
17．明灰茶色砂質土　拳大凝灰質砂岩・５cm大の黒茶色粘土塊・褐鉄塊・土師器皿小片・炭化物・泥岩粒含む　間に褐鉄層をはさみ、その下層は青灰色を帯びる（上面Ⅱ面）
18．明灰茶色砂質土　炭化物・凝灰質砂岩粒・土師器皿細片含む　しまりやや弱い（上面Ⅰ面）
19．18に似るが土師器皿細片は含まず、凝灰質砂岩含む（上面Ⅰ面）
20．20cm大の凝灰質砂岩つまる　間に黄灰色砂質土、灰茶色粘質土の混合、玉石・炭化物含む（小溝１）
21．暗灰色弱粘質土　青灰色砂を多く含む、凝灰質砂岩粒・火山灰塊含む（上面Ⅲ面）
22．21にほぼ同じ（上面Ⅲ面）
23．暗灰色粘質土　凝灰質砂岩粒・白色スコリア含む
24．23にほぼ同じ
25．青灰色砂質土　凝灰岩質砂岩粒塊多く含む　地行状の層（上面Ⅳ面）
26．暗灰色粘質土　青灰色砂塊多く含む、木片含む
27．暗灰色粘質土　26より青灰色塊少ない
28．暗灰色粘質土　青灰色砂塊はほとんど含まないが、火山灰塊少量含む　しまりやや弱い
29．黒灰色粘質土　青灰色凝灰質砂岩粒塊少し含む、白色スコリア含む　しまり良い
30．黒灰色粘質土　青灰色粘土わずかに含む　31より粘性強い（上面Ⅴ面）
31．黒灰色粘質土　白色スコリア少量含む（上面Ⅴ面）

２区最終深掘り坑北壁土層断面

１．青灰色弱砂質土＝２区北壁№25（上面Ⅳ面）
２．黒灰色粘質土＝２区北壁№30（上面Ⅴ面）
３．黒灰色粘質土　少量（２より多め）の灰色スコリア・泥砂粒・炭化物含む　粘性強
４．黒灰色粘質土　３より含有量多く、色調は灰色が強い
５．黒灰色粘質土　３・４より固くしまり、色調は灰色が強い　スコリア・炭化物含む
６．黒灰色粘質土　３～５より黒色強い　粘性は３～５より強いがやや軟質　微量のスコリア・炭化物含む
７．黒灰色粘質土　６と同質　しまりは６より良く、色調は灰色が強い
８．黒灰色粘質土　灰色スコリア多い、弱砂質土・炭化物・鉄分若干混入　しまり弱い
９．黒灰色粘質土　微量のスコリア・炭化物含む　固くしまる
10．青灰色弱粘質土　多くのスコリア・砂粒・黒色粘土塊・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・炭化物混入
11．黄灰色砂質土　スコリア・黒色粘土塊・黒色粒含む
12．黒色粘土　スコリア微量に含む　粘性強い（以下地山）
13．灰色砂質土　青灰色スコリア砂粒・黒色粘土・泥・凝灰質砂岩粒含む
14．茶灰色粘質土　非常に多くの腐食自然木混入、黒色粘土塊・泥粒含む
15．暗灰色粘質土
16．灰褐色粘質土　14と同じ腐食木片と小石～人頭大の凝灰質砂岩混入
17．黒色土　半鉄分化した腐植土混入

１区北壁土層断面

２．黄茶褐色の粗い砂質土　拳大位までの凝灰質砂岩多く含む
３．暗褐色弱粘質土に大型泥岩・大型凝灰質砂岩混ざる
４．暗褐色弱粘質土　炭化物多く含む、泥岩粒含む
５．明褐色弱砂質土　泥岩粒・鉄分多く含む（上面Ⅰ面）
６．明褐色弱砂質土　炭化物多く含む（小溝１）
７．黄灰色弱砂質土　泥岩･凝灰質砂岩多量に含む、炭化物･鉄分含む（上面Ⅰ面）
８．黄灰色弱砂質土
９．黄灰色弱砂質土　泥岩・凝灰質砂岩密に含む　地行状の層（上面Ⅰ面）
10．明茶褐色砂質土　炭化物・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・鉄分含む（上面Ⅱ面）
11．青灰色弱砂質土　（上面Ⅲ面）
12．茶褐色弱砂質土　鉄分・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・炭化物多く含む（上面Ⅲ面）
13．青灰色粘質土　泥岩粒・炭化物含む（上面Ⅲ面）
14．青灰色粘質土　拳大の泥岩・凝灰質砂岩つまる（小穴）
15．青灰色粘質土　（上面Ⅲ面）
16．暗灰色粘質土　泥岩粒・凝灰質砂岩粒・灰色粘土含む、遺物片・炭化物混入　粘性強い（落込み１）
17．青灰色弱粘質土　炭化物・泥岩粒多く含む、鉄分含む、砂質土混入（上面Ⅲ面）
18．暗灰色弱粘質土
19．暗灰色粘質土　炭化物・灰色スコリア・鉄分含む　粘性強い（上面Ⅳ面）
20．黒灰色粘質土　炭化物・スコリア多く含む
21．青灰色弱砂質土　鉄分・泥岩粒・凝灰質砂岩粒・木片含む
22．黒灰色粘質土　灰色スコリア含む（上面Ⅴ面）
23．黒灰色粘質土　スコリア含む
25．16と同質　（落込み１）
26．黒灰色粘質土　（上面Ⅴ面）
27．黒灰色粘質土

１区南壁土層断面

１．黄茶褐色の粗い砂質土　くるみ大～40cm位の凝灰質砂岩多く含む
２．１に似る　ややしまり弱い
３．黄茶褐色の粗い砂質土　最大70cm位の大きな凝灰質砂岩含む　１・２よりしまり強い（土塁状遺構）
４．黄灰色砂質土　１cm前後の凝灰質砂岩粒含む

５．黄灰色砂質土　きめ細かな凝灰質砂岩粒含む、鉄分含む固くしまる（上面Ⅰ面）
６．褐色弱砂質土　炭化物・鉄分・礫片・泥岩粒・木片・粘土塊含む（上面Ⅱ面）
７．明黄茶色粘質土　炭化物・泥岩粒含む　粘性強い
８．青灰色粘質土　泥岩粒･砂粒･炭化物少量含む（上面Ⅲ面）
９．暗青灰色粘質土　白色砂粒・木片・鉄分含む、黄褐色粘土粒少量含む
10．黒灰色粘質土　（落込み２）
11．暗青灰色粘質土　木片・遺物片・炭化物・白色粒・青灰色粘土塊含む（落込み２）
12．黒灰色粘質土　炭化物･木片･青灰色粘土粒微量含む（上面Ⅴ面）
13．黒灰色粘質土　白色スコリア少量含む
14．黒灰色粘質土　青灰色粘土粒少量含む　やわらかい土
15．黒灰色粘質土
16．青灰色粘質土　炭化物・鉄分・泥岩粒含む
17．黒灰色粘質土　鉄分・青灰色粘土粒若干含む
18．12と同質　青灰色粘土粒若干含む（上面Ⅳ・Ⅴ面）
19．黒灰色粘質土　青灰色粘土粒微量含む　13より粘性強い
20．黄灰色砂質土　小石～半人頭大の凝灰質砂岩・泥岩を多量に含む、炭化物・粘土粒を含む
21．暗褐色粘質土　鉄分・泥岩粒を含む
22．暗褐色粘質土　黄灰色砂粒・鉄分多く含む（小溝１）
23．黄灰色砂質土　３に似る
24．５と同質　（上面Ⅰ面）
25．黄灰色砂質土　３・23・24と同質　地行状の層
26．25と同質
27．６と同質　明茶褐色弱粘質土塊含む
28．明灰褐色弱粘質土　（上面Ⅲ面）
29．暗茶灰色粘質土　炭化物･鉄分･泥岩粒若干含む（上面Ⅲ面）

第２節　各　説

１．Ⅰ面

面の概要（図５）

検出高：13.45ｍ～13.85ｍ　**面構成土**：黄灰色砂質土・明褐色砂質土・明灰茶色砂質土　**検出遺構**：土塁状遺構１本・小溝１条・小穴１穴　**Ⅰ面包含層出土遺物**：常滑甕（１）**Ⅰ面出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（２）　**特記事項**：調査区の南側（谷尻側）のほうが北側（谷口側）よりも標高が高く、土塁状遺構の東側（山側）のほうが西側（谷側）よりも標高が高い。１の甕は常滑編年６ｂ～７型式のもので13世紀末～14世紀前半のもの。２の土師器皿は13世紀末以降のもの。

土塁状遺構（図５）

位置：Ｘ（－74 038.10～－74 048.06）　Ｙ－28 221.36～－28 227.10　**充填土**：大型凝灰質砂岩及び大型泥岩と黄茶褐色の粗い砂質土　**断面形**：台形　**規模**：最大幅3.25ｍ×長さ（9.50ｍ）×最大高0.58ｍ　**主軸方位**：N-21.5°-W　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：大型の凝灰質砂岩と泥岩を中心に構築され、石と石の間に黄茶褐色砂質土がつまり、よくしまる。遺物片はほとんど混入しない。上面に柱穴を確認できなかったことから、築地の基礎である可能性は低いか。

本来の山の等高線にほぼ平行する関係で構築されていることや、谷戸内に位置すること、山側のほうが標高が高いことから、防御を意識した施設というより、区画を意識して構築されたと考えるべきか。

小溝１（図５）

位置：Ｘ（－74 039.20～－74 048.26）　Ｙ－28 224.78～－28 227.95　**充填土**：黄灰色砂質土・明褐色砂質土　**断面形**：逆台形・深皿形　**規模**：最大幅0.61ｍ×長さ（9.50ｍ）×深さ0.14～0.19ｍ　**主軸方位**：N-21.5°-W　**流下方向**：南東→北西　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：土塁状遺構を挟んで東側（山側）よりも、小溝１のある西側（谷側）のほうが標高が低いことや、土塁状遺構と主軸方位がほぼ一致することから、土塁状遺構に付属する排水溝の可能性が考えられる。流下方向は谷尻側から谷口側へとなっており、自然地形と矛盾しない。

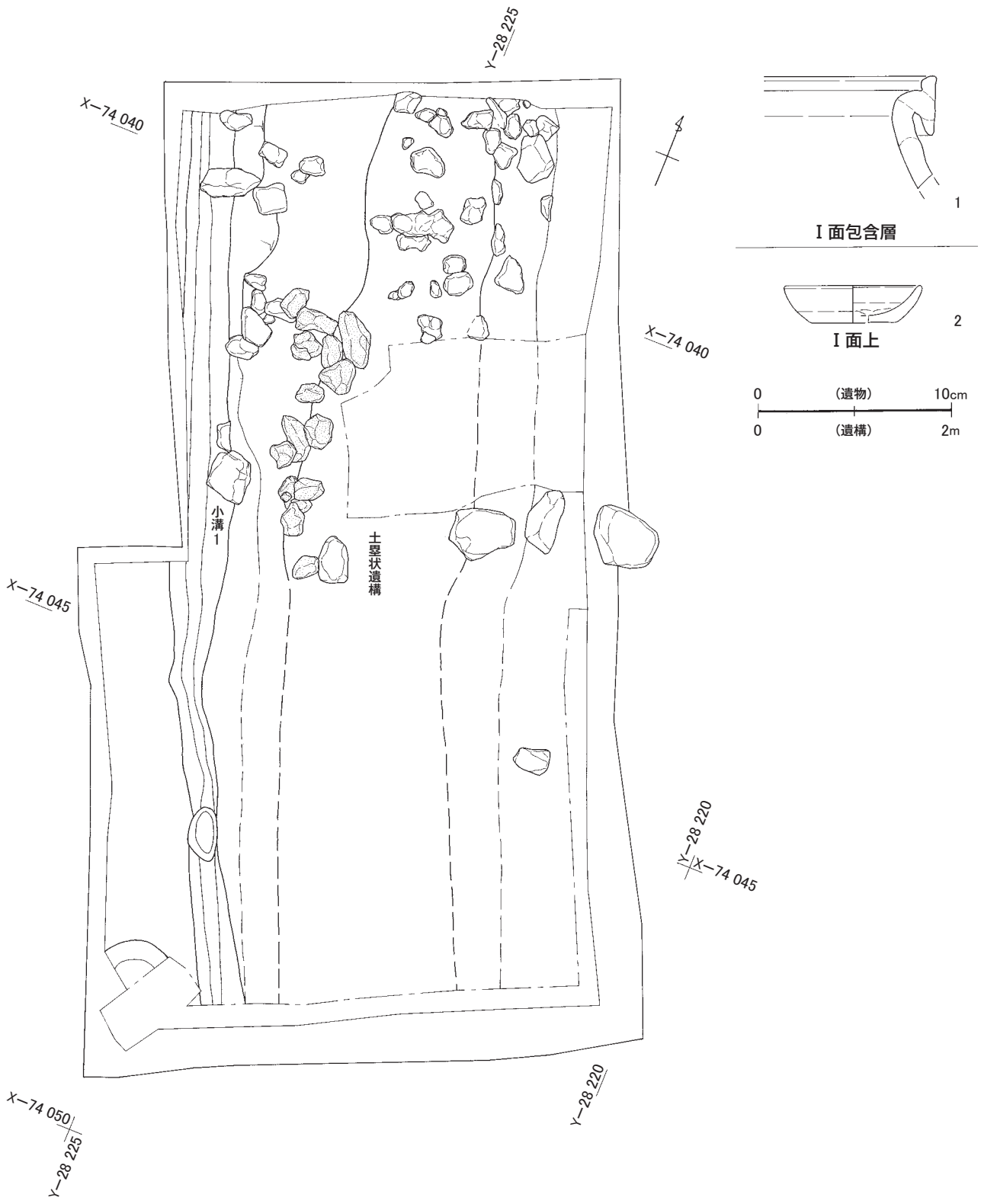


図５　Ⅰ面遺構全図、Ⅰ面出土遺物

２．Ⅱ面

面の概要（図６）

検出高：13.33 m～13.76 m　**面構成土**：褐色砂質土・明茶褐色砂質土・灰茶色砂質土　**検出遺構**：遺物片集中出土１箇所・小穴１穴　**Ⅱ面包含層出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（１）　**特記事項**：遺構が少な

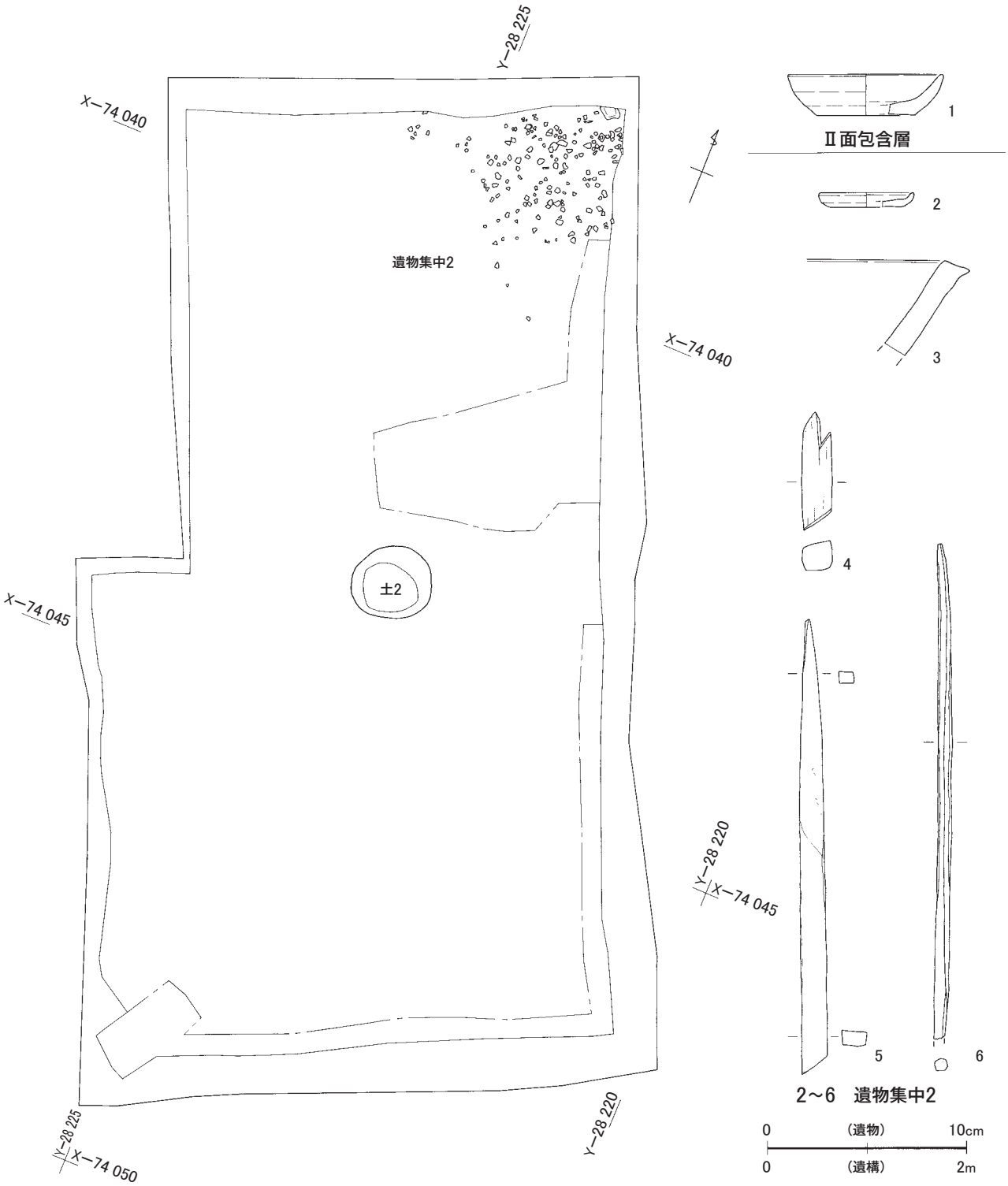


図６　Ⅱ面遺構全図、Ⅱ面・集中出土２出土遺物

いため、生活面であったかは不明。地行と地行の間を面として検出した可能性もある。１の土師器皿は13世紀末以降のもの。

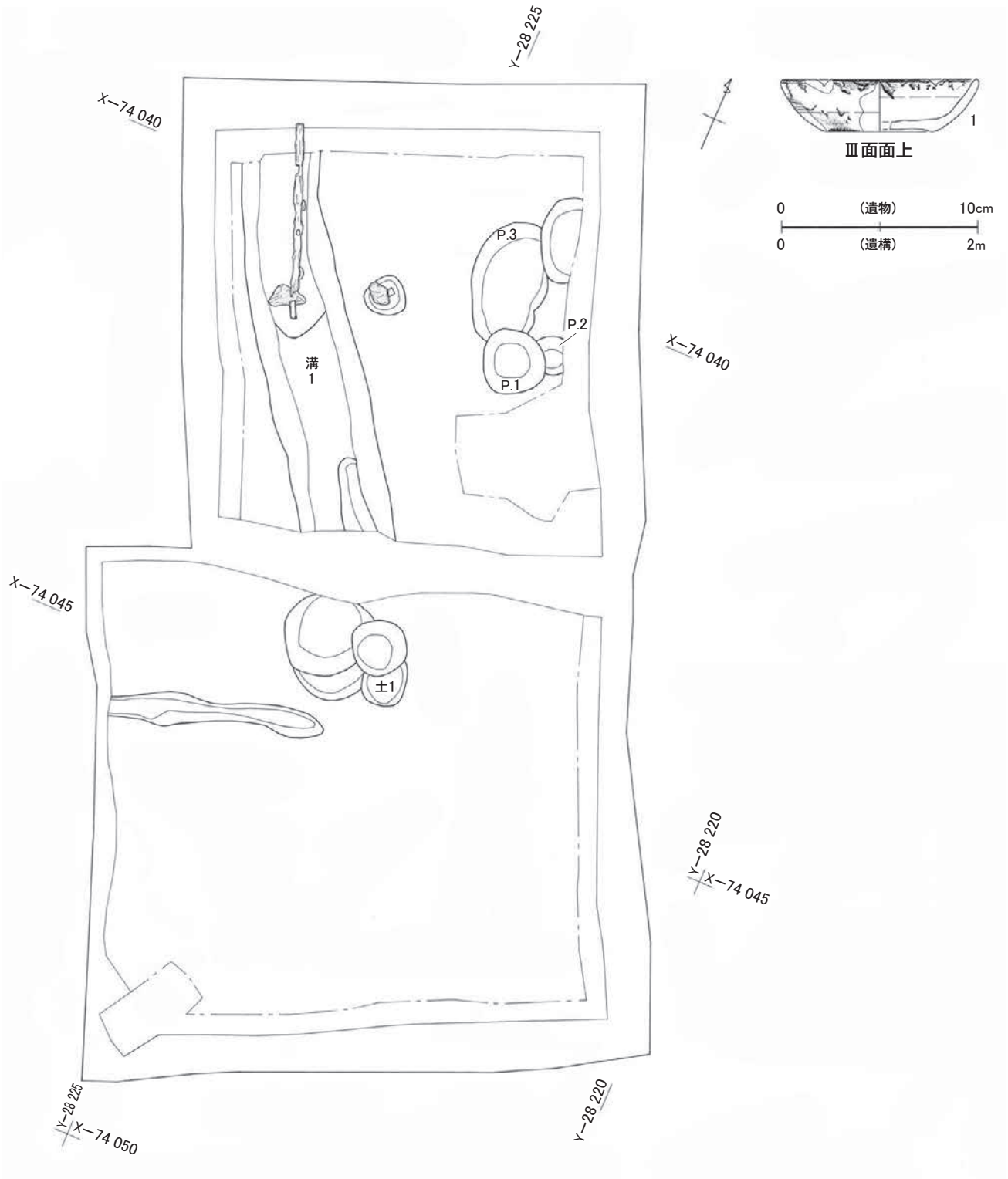


図７　Ⅲ面遺構全図、Ⅲ面出土遺物

遺物集中２（図６）

位置: X − 74 040.29 ～(− 74 037.92) Y (− 28 225.76)～(− 28 223.46)　**充填土:**灰茶色粘質土　**平面形:**不整形　**規模:**南北(2.36 m) × 東西(2.31 m)　**出土遺物:**土師器皿Ｒ種極小型(２)・常滑片口鉢Ⅱ類(３)・不明木製品(４)・串状木製品(５)・箸状木製品(６) **特記事項:** 灰茶色粘質土に遺物破片が大量に混入。

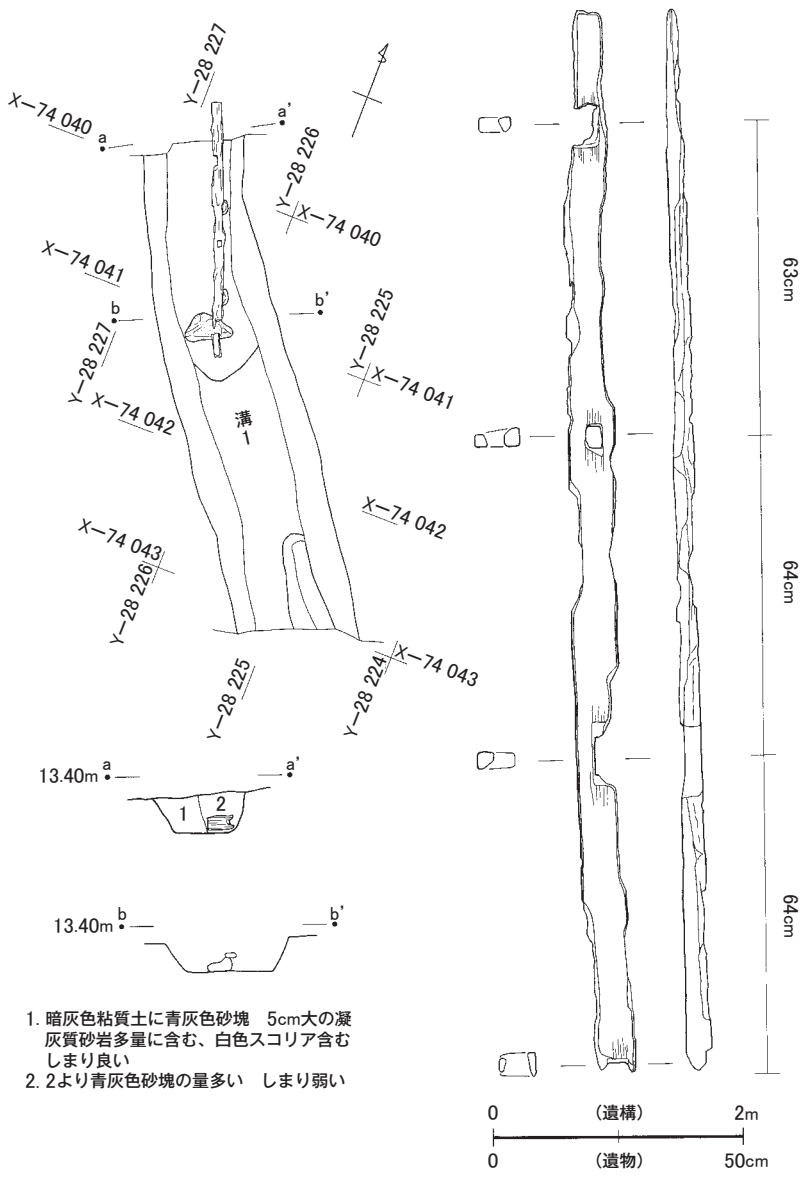


図８　溝１、同部材

地行の過程で遺物片の入った粘質土を部分的に充填した可能性もあり、面の遺構として評価できない可能性もある。３のⅡ類片口鉢は９型式で15世紀前半に編年されているもの。

３．Ⅲ面

面の概要（図７）

検出高：13.19ｍ～13.68ｍ　**面構成土**：青灰色粘質土・暗灰色粘質土　**検出遺構**：溝１条・小溝１条・小穴９穴　**Ⅲ面出土遺物**：土師器皿Ｒ種中型（１）　**特記事項**：部材の残る溝が検出されたことから、一時期の生活面としてみてよいか。１の土師器皿は13世紀末以降のもの。

溝１（図８）

位置：Ｘ（－74 039.35～－74 043.27）Ｙ（－28 224.29～－28 227.29）**充填土**：暗灰色粘質土　**断面形**：逆台形　**規模**：最大幅1.02ｍ×長さ（3.96ｍ）×最深0.32ｍ　**主軸方位**：N-30°-W　**流下方向**：南→北　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：溝１出土の部材は腐食が激しく、本来の形を留めていない。また、腐食により加工痕も明瞭に確認できず。流下方向は谷尻側から谷口側へとなっており、自然地形と矛盾しない。また、上層で検出された土塁状遺構と軸方位が大きく変わらないことから、区画溝である可能性が考えられる。Ｉ区で検出されていないが、延長線上に土坑とした窪みがあり、これが続きかも知れない。

４．Ⅳ面

面の概要（図９）

検出高：13.08ｍ～13．44ｍ　**面構成土**：暗灰色粘質土・青灰色粘質土　**検出遺構**：落込み１基　**Ⅳ面包含層出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（１）・土師器皿Ｔ種大型（２）・棒状木製品（３）・不明木製品（４）・滑石製石鍋（５）　**Ⅳ面出土遺物**：球状木製品（６・７）・不明木製品（８・９）　**特記事項**：調査区の大半を落込みが占めており、ほかの遺構は確認できず。１の土師器皿は13世紀中頃まで遡りうるもの。２の土師器皿は13世紀中頃までのもの。

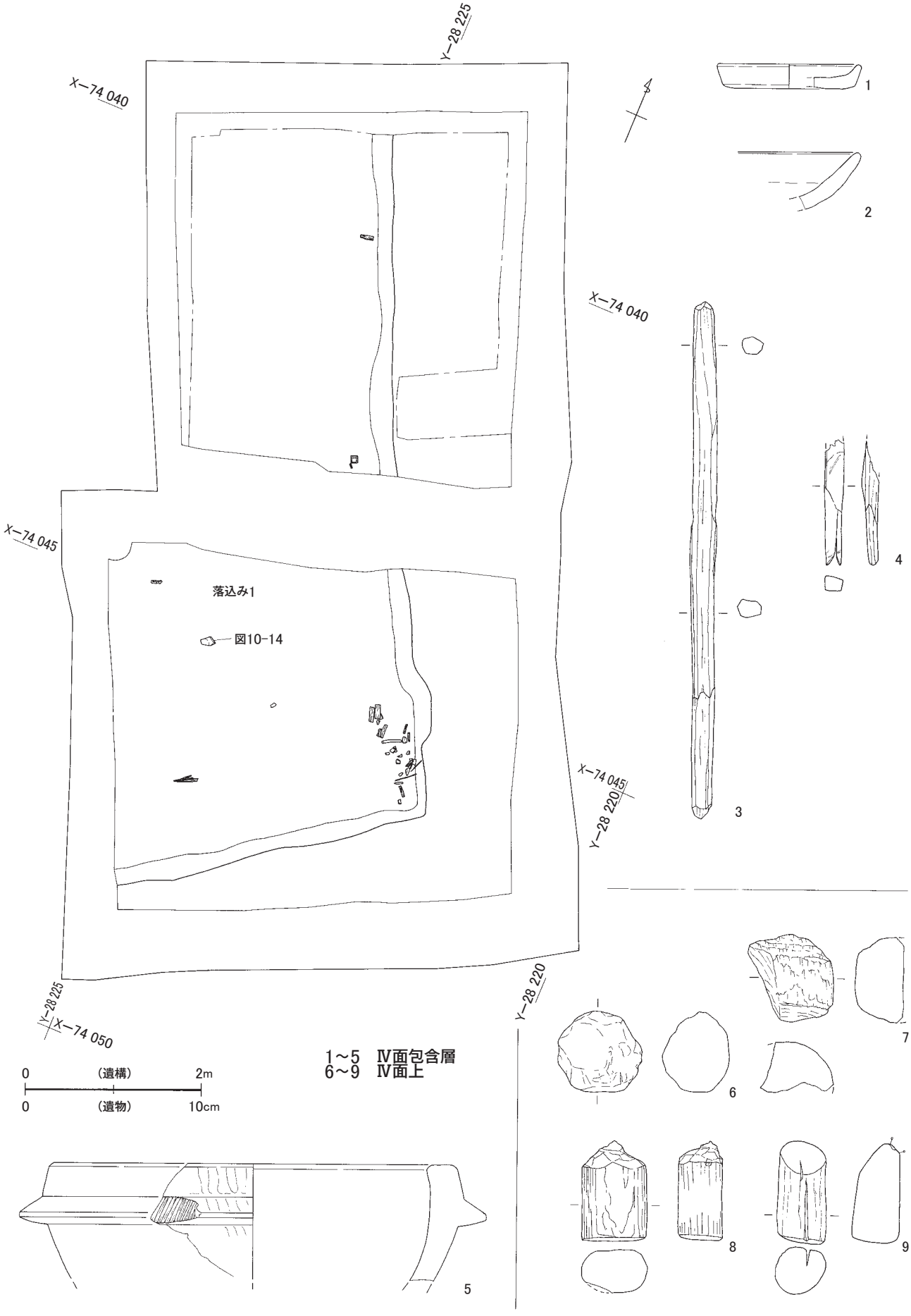


図９　Ⅳ面遺構全図、Ⅳ面出土遺物

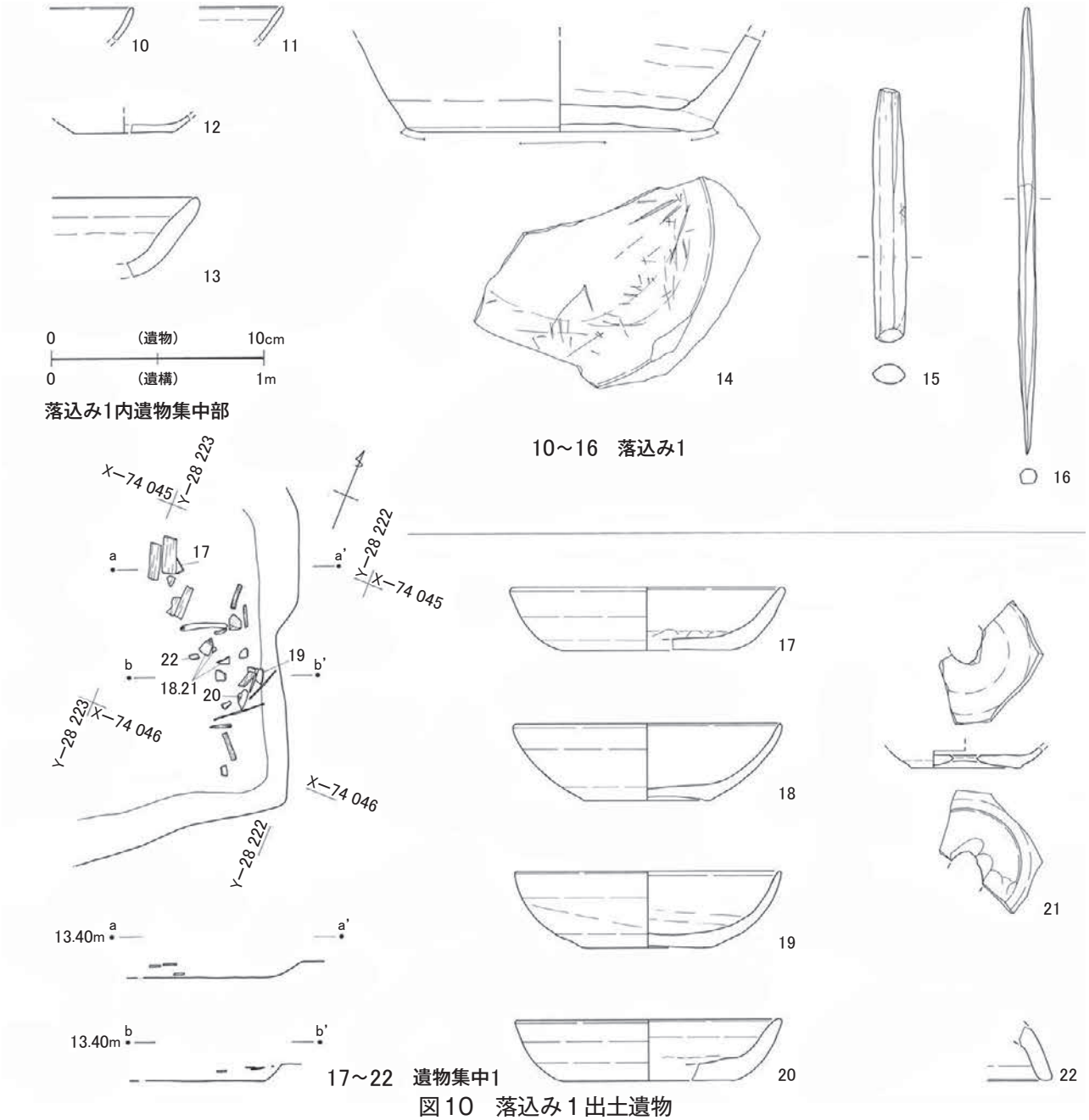


図10 落込み1出土遺物

落込み1（図9・10）

位置：X（－74 039.82）～（－74 048.19）Y－28 222.01～（－28 227.39） **充填土**：暗灰色粘質土 **平面形**：長方形？ **断面形**：逆台形 **規模**：長さ（8.40ｍ）×幅（3.63ｍ） **主軸方位**：N-28°-W **出土遺物**：白色系土師器皿Ｒ種大型（10・11）・白色系土師器皿Ｒ種小型（12）・土師器皿Ｔ種大型（13）・常滑壺（14）・棒状木製品（15）・箸状木製品（16） **特記事項**：調査区より西側（谷側）と北側（谷口側）に広がっており、平場を形成した際の段差を検出した可能性がある。13の土師器皿は13世紀中頃までのもの。14の常滑壺は外底部が摩耗しており、２次使用が考えられる。

落込み1内遺物集中1（図10）

位置：X－74 045.14～－74 046.10　Y－28 222.24～－28 223.03 **出土遺物**：土師器皿Ｒ種大型（17～20）・土師器皿Ｒ種中型転用品（21）・土師器高台（22） **特記事項**：落込み1の南東隅に遺物が集中して出土する範囲を確認した。20の型式の出現は13世紀第３四半期まで遡るものだが、17～19は13世紀末以降のもの。

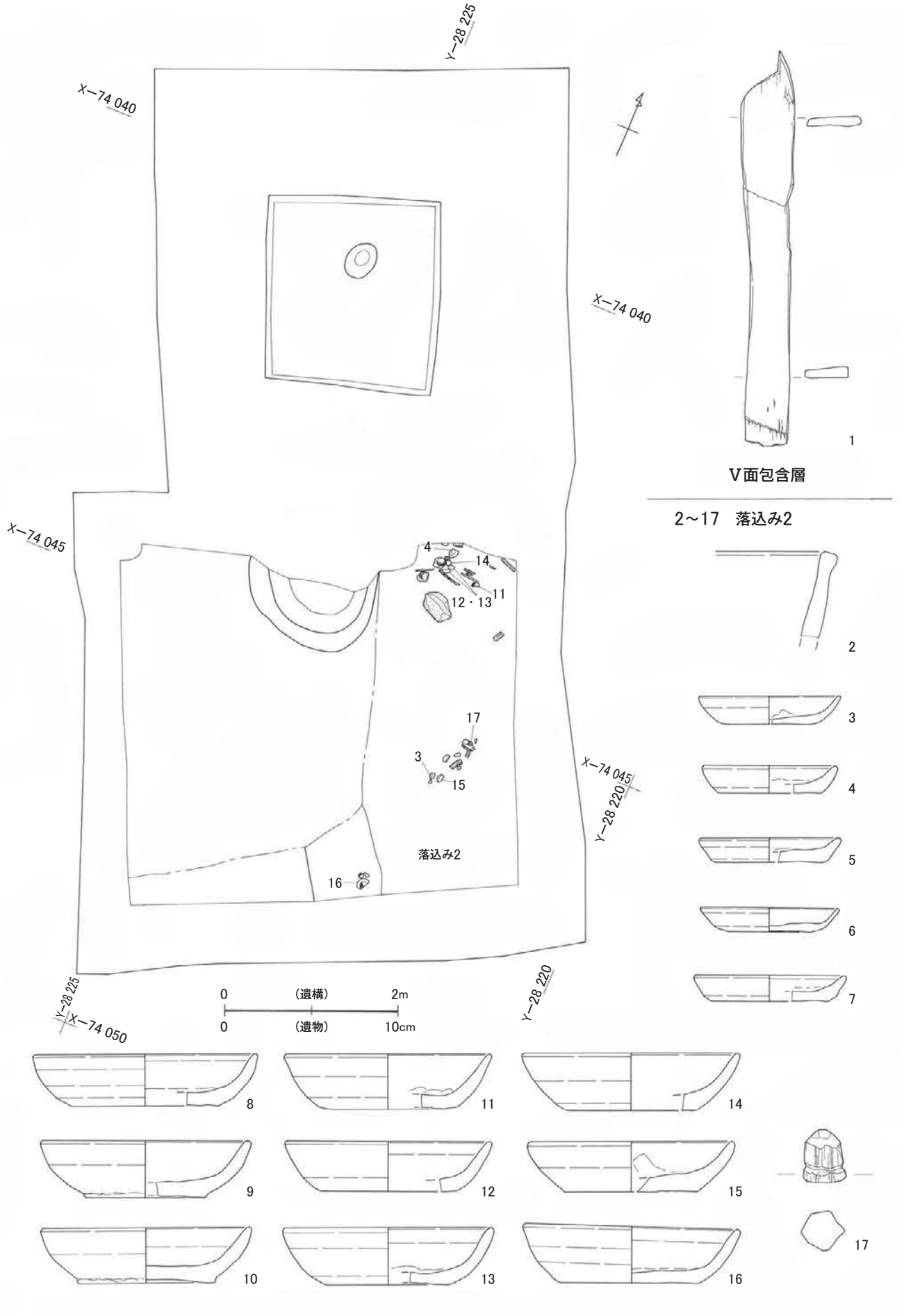


図11　V面遺構全図、V面・落込み２出土遺物

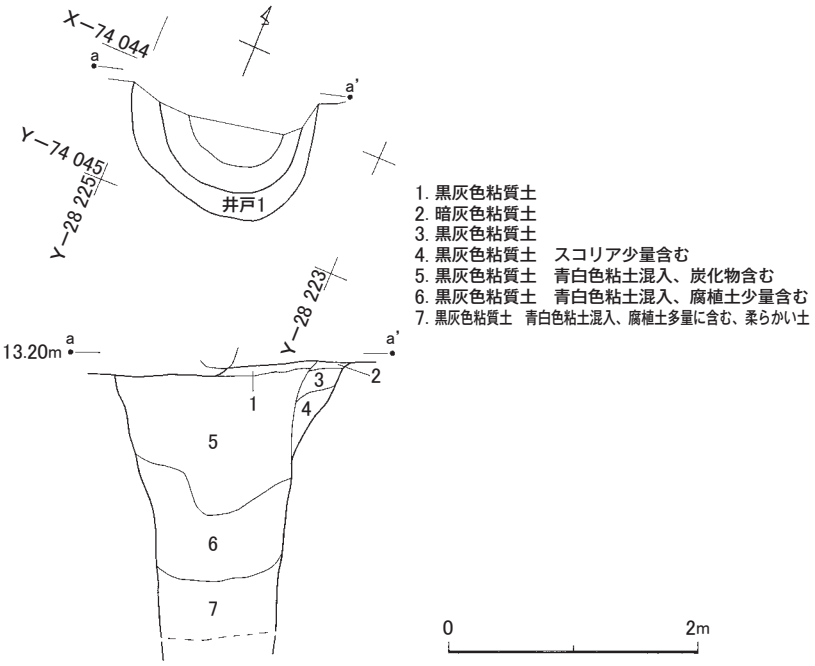


図12　井戸１

５．Ｖ面

面の概要（図１１）

検出高：12.80ｍ～13.15ｍ　**面構成土**：黒灰色粘質土　**検出遺構**：落込み１基・井戸１基・小穴１穴　**Ｖ面包含層出土遺物**：木製品形代（１）　**特記事項**：本地点において確認・調査した最終生活面。検出遺構自体は少ないが、井戸が検出されていることから、生活面として使用されていたことは確認できる。

落込み２（図１１）

位置：Ｘ（－74 043.07）～（－74 047.59）Ｙ（－28 220.75）～－28 223.21　**平面形**：不明　**断面形**：逆台形か　**規模**：長さ（4.00ｍ）×幅（2.46ｍ）×最深0.15ｍ　**主軸方位**：N-27°-W　**出土遺物**：縄文土器深鉢（２）・土師器皿Ｒ種小型（３～７）・土師器皿Ｒ種大型（８～16）・不明木製品（17）　**特記事項**：上層の落込み１により削平されており、正確な規模・形態は不明。落込み自体は山側へと落ちており、自然地形とは矛盾するが、検出範囲が狭小なこともあり、形成要因を明確にするまでには至らない。２の縄文土器は早期から前期の繊維土器。出土した中世土師器皿は13世紀第３四半期まで遡りうるものもあるが、その主体は13世紀末以降のものである。

井戸１（図12）

位置：Ｘ－74 043.77～－74 044.91　Ｙ－28 223.50～－28 225.04　**充填土**：黒灰色粘質土・暗灰色粘質土　**平面形**：円形　**断面形**：漏斗型　**規模**：長さ（1.04ｍ）×幅1.85ｍ×深さ2.20ｍ以上　**主軸方位**：N-13°-W　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：壁際で検出されたこともあり、安全性を考慮して完掘しなかった。

６．最終深掘り坑

概要（図４・13）

標高13.20ｍほどのⅣ面から2.0ｍ×2.0ｍ四方で深掘り坑を開け、Ｖ面下からは2.0ｍ×1.0ｍの広さで標高11.7ｍ（深さ1.50ｍ）ほどまで掘り下げた。前述したように遺物の出土がなかったため、人為的な作為の入った層か自然堆積か明確にできなかったが、標高12.08ｍ～12.23ｍにかけて堆積する12層（図４・Ⅱ区最終深掘り坑北壁土層断面図）から下層は確実に自然堆積（地山）であることを確認した。

調査地点より西方22ｍほどにある、谷戸中央部を南北に縦断する道路面が標高12.00ｍ前後となることから、この12層以下を自然堆積（地山）と評価すること自体は必ずしも矛盾するものではない。

（沖元）

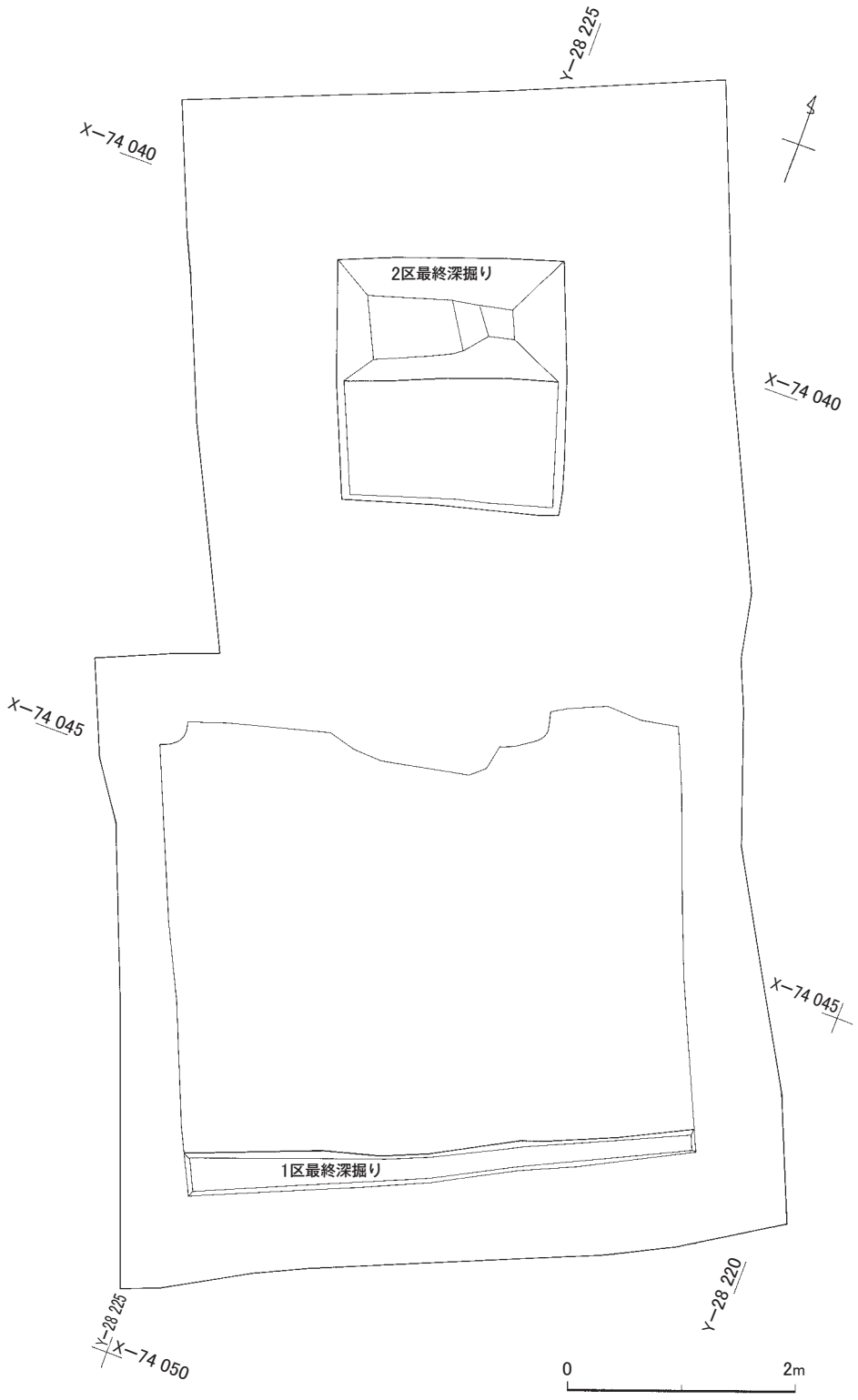

Y−28 225
X−74 040
2区最終深掘り
X−74 040
X−74 045
X−74 045
1区最終深掘り
Y−28 220
Y−28 225
X−74 050
0
2m

図13　最終深掘り坑

表１　出土遺物観察表（１）

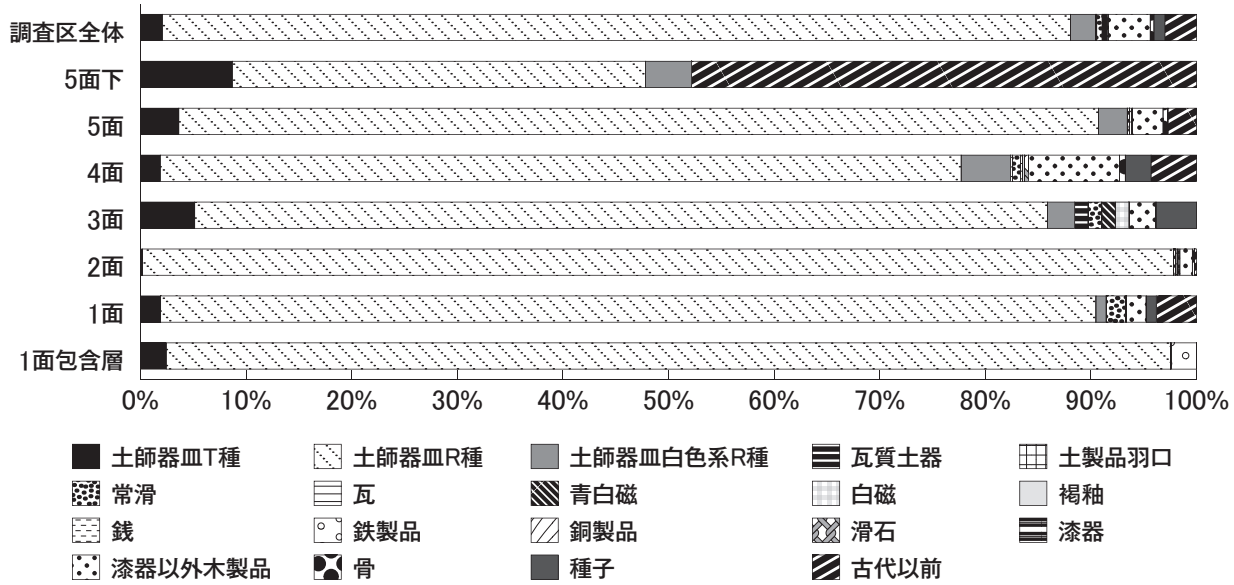
挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	1面 包含層	常滑 甕	口縁部片　輪積み成形　ヨコナデ　胎土は暗灰色で長石・石英・白色粒を含む 外面に黄灰白色の降灰がかかる　内面は赤茶褐色
2	1面上	土師器皿 R種小型	口径（7.2)cm　底径（4.2）cm　器高1.95cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
図6-1	2面 包含層	土師器皿 R種小型	口径（7.8)cm　底径（4.8）cm　器高2.1cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子を含む
2	2面 遺物集中２	土師器皿 R種極小型	口径（4.8)cm　底径（3.6）cm　器高8.0cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は橙色で黒雲母・赤色粒子・礫を含む
3	2面 遺物集中２	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　内面ヨコナデ　外面口縁部下までヨコナデ、胴部は指頭痕あり・板状工具による縦位ナデ　胎土は茶褐色で微砂・礫・長石・白色粒を含む
4	2面 遺物集中２	不明 木製品	長6.0cm　幅1.5cm　厚さ1.5cm
5	2面 遺物集中２	串状 木製品	長23.2cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm
6	2面 遺物集中２	箸状 木製品	遺存長(25.2)cm　幅0.7cm　厚さ0.6cm　ほぼ完形　通常の箸状木製品よりも長い
図7-1	3面上	土師器皿 R種中型	口径（10.2)cm　底径（6.0）cm　器高2.7cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む　口縁～胴部に油煤付着
図9-1	4面 包含層	土師器皿 R種小型	口径（8.2)cm　底径（6.2）cm　器高1.4cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
2	4面 包含層	土師器皿 T種大型	口縁部片　手づくね後内底部口縁部ナデ　内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒を含む
3	4面 包含層	棒状 木製品	遺存長(29.4)cm　幅1.5cm　厚さ1.0cm
4	4面 包含層	不明 木製品	遺存長(7.1)cm　幅1.0cm　厚さ0.9cm
5	4面 包含層	滑石製 石鍋	口径（22.6)cm　最大径（26.6)cm　銀灰色　内外面に煤付着 外面に作成時の工具痕があるが口縁頂部にはない　鍔部に目的不明の工具痕
6	4面上	球状 木製品	最大径4.9cm　球状に加工
7	4面上	球状 木製品	遺存径5.0cm　球状に加工
8	4面上	不明 木製品	長5.8cm　長径3.8cm　短径2.5cm　外面に加工痕
9	4面上	不明 木製品	長5.7cm　最大径3.0cm　外面に加工痕
図10-10	4面 落込み１	白色系土師器皿 R種大型	口縁部片　右回転ロクロ　胎土は黄灰白色で混入物少なく精良土
11	4面 落込み１	白色系土師器皿 R種大型	口縁部片　回転ロクロ　胎土は黄灰白色で混入物少なく精良土
12	4面 落込み１	白色系土師器皿 R種小型	底径（4.6）cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り　胎土は黄灰白色で混入物少なく精良土
13	4面 落込み１	土師器皿 T種大型	口縁部片　手づくね後内底部口縁部ナデ　内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子を含む　二次焼成を受け薄く煤けている
14	4面 落込み１	常滑 壺	底径（14.5）cm　輪積み成形着　外底面に磨耗痕・使用痕があり底部片を転用した可能性もある 胎土は灰褐色で白色粒・礫を含む良土　器表は灰茶色　二次焼成で薄く煤が付く
15	4面 落込み１	棒状 木製品	長12.1cm　幅1.6cm　厚さ0.9cm
16	4面 落込み１	箸状 木製品	長21.3cm　幅0.8cm　厚さ0.7cm　両口
17	落込み１内 遺物集中１	土師器皿 R種大型	口径（13.0)cm　底径（8.0）cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
18	落込み１内 遺物集中１	土師器皿 R種大型	口径（13.0)cm　底径（6.0）cm　器高3.5cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部弱いナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む粉質の精良土
19	落込み１内 遺物集中１	土師器皿 R種大型	口径（12.6)cm　底径（6.2）cm　器高3.6cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は白橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む粉質の精良土
20	落込み１内 遺物集中１	土師器皿 R種大型	口径（12.6)cm　底径（8.0）cm　器高2.9cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ　胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
21	落込み１内 遺物集中１	土師器皿 R種中型転用品	底径（5.0）cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部弱いナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む粉質の精良土　底部中央付近に穿孔がなされている
22	落込み１内 遺物集中１	土師器 高台	脚部片　胎土は淡橙色で砂粒・雲母・白色粒・黒色粒を含む　器表は淡橙色　古代

表２　出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図11-1	5面 包含層	木製品 形代	長22.7cm　幅3.0cm　厚さ0.6cm　烏帽子をかぶった人形か
2	5面 落ち込み2	縄文土器 深鉢	口縁部片　輪積み成形　口縁端部にキザミがあるが摩滅により明瞭でない 胎土は茶褐色で繊維・砂粒・礫・雲母・白色粒・黒色粒を含む　器表は茶褐色 使用時または二次焼成の煤が付着　縄文早期～前期
3	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径（8.2)cm　底径（4.6）cm　器高1.6cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕らしきものあり 内底部ナデ　胎土は白橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子を含む粉質の精良土
4	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径（7.8)cm　底径（5.8）cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
5	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径（8.2)cm　底径（6.2）cm　器高1.4cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り　外底部板状圧痕 内底部ナデ　胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・海綿骨針を含む
6	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径（8.0)cm　底径4.8cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部弱いナデ　胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子を含む粉質の精良土
7	5面 落ち込み2	土師器皿 R種小型	口径（8.8)cm　底径（6.8）cm　器高1.5cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕　内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
8	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（13.0)cm　底径（8.4）cm　器高3.0cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ　胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
9	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（12.2)cm　底径（6.8）cm　器高3.3cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・強い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
10	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（12.2)cm　底径（7.8）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ　胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
11	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（12.0)cm　底径（7.8）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・強い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は鈍い黄橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
12	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（12.0)cm　底径（7.8）cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
13	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（12.2)cm　底径（7.0）cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒雲母・赤色粒子・海綿骨針を含む
14	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（12.6)cm　底径（7.6）cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・板状圧痕 内底部ナデ　胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針・礫を含む
15	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径（8.0)cm　底径（7.6）cm　器高2.9cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
16	5面 落ち込み2	土師器皿 R種大型	口径12.6cm　底径8.0cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　外底部回転糸切り・弱い板状圧痕 内底部ナデ　胎土は鈍い黄橙色で黒雲母・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨針を含む
17	5面 落ち込み2	不明 木製品	口径cm　底径cm　器高cm　浅い切り込みが入る　六角形になるように面取りしているか 織り関係の道具の可能性あり

表３　出土遺物計量表

				１面包含層		１面		２面		３面		４面		５面		５面下		総計	
古代以前	古代土師器			0	0.00%	4	3.81%	1	0.20%	0	0.00%	22	4.12%	10	2.26%	11	47.83%	49	2.82%
	古墳土師器			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%
	縄文土器			0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.23%	0	0.00%	2	0.12%
土器	土師器皿	T種	大	1	2.44%	2	1.90%	1	0.20%	4	5.13%	10	1.87%	16	3.62%	2	8.70%	36	2.07%
		R種	大	38	92.68%	83	79.05%	469	92.50%	59	75.64%	387	72.47%	348	78.73%	9	39.13%	1396	80.46%
			中	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%
			小	1	2.44%	10	9.52%	25	4.93%	3	3.85%	17	3.18%	36	8.14%	0	0.00%	92	5.30%
			極小	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
			転用品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%
		R種白色系	大	0	0.00%	1	0.95%	0	0.00%	2	2.56%	24	4.49%	11	2.49%	1	4.35%	39	2.25%
			小	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	1	0.23%	0	0.00%	2	0.12%
	瓦質土器	火鉢		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
土製品		羽口		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
国産陶器	常滑	壺		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		甕		0	0.00%	2	1.90%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.37%	1	0.23%	0	0.00%	5	0.29%
		片口鉢	Ⅰ類片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%
			Ⅱ類片口鉢	0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
瓦		平瓦		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
舶載陶磁器	青白磁	合子		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	白磁	不明		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	褐釉	壺		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
金属製品	銭	中国銅銭		0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	鉄	釘		1	2.44%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	銅	金具		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%
石製品	滑石	鍋		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		加工品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.19%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
木製品	漆器	不明		0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
	漆器以外木製品	箸状木製品（両口）		0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	3	0.56%	2	0.45%	0	0.00%	6	0.35%
		箸状木製品（不明）		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	7	1.31%	1	0.23%	0	0.00%	9	0.52%
		折敷		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.56%	1	0.23%	0	0.00%	4	0.23%
		板草履		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.75%	0	0.00%	0	0.00%	4	0.23%
		不明木製品		0	0.00%	2	1.90%	1	0.20%	0	0.00%	4	0.75%	2	0.45%	0	0.00%	9	0.52%
		棒状木製品		0	0.00%	0	0.00%	3	0.59%	1	1.28%	12	2.25%	3	0.68%	0	0.00%	19	1.10%
		板状木製品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	11	2.06%	3	0.68%	0	0.00%	14	0.81%
		串状木製品		0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		球状木製品		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.37%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.12%
		形代		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.23%	0	0.00%	1	0.06%
自然遺物	骨	獣骨		0	0.00%	0	0.00%	1	0.20%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
		不明		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.56%	2	0.45%	0	0.00%	5	0.29%
	種子	松かさ		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	7	1.31%	0	0.00%	0	0.00%	8	0.46%
		トチ		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	4	0.75%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.35%
		桃		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.28%	2	0.37%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.17%
		くるみ		0	0.00%	1	0.95%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.06%
合計				41	100%	105	100%	507	100%	78	100%	534	100%	442	100%	23	100%	1735	100%



第四章　まとめと考察

１．遺構の変遷と年代

１期

Ｖ面が相当する。調査区中央部で井戸（井戸１）が検出され、東側に山側へと落ちていく落込み（落込み２）が検出された。調査区東側で検出されたことや、大部分を上層遺構により削平されていることから、この落込みの性格を特定するには至らなかった。

落込み内の出土遺物の中に13世紀後半代に遡りうるものもあるが、その主体は13世紀末以降のものであることから、本期の年代は13世紀第４四半期以降14世紀第３四半期までのいずれかの時期とみるのが妥当か。

２期

Ⅳ面が相当する。調査区の大部分を落込み（落込み１）が占める。この落込みとⅣ面の比高差は10㎝～ 30㎝ほどとなっており、調査区の南側（谷尻側）より北側（谷口側）のほうが比高差が小さくなっている。この落込みは調査区外へと広がっているため、全容を明らかにすることはできなかったが、西側（谷側）と北側（谷口側）へと広がっていること、Ⅳ面の標高が西側隣地の現在の標高面とおおよそ一致することから、平場を形成する際に作られた段部を落込みとして認識した可能性が高い。

出土遺物は落込み内の東南隅からの出土が大部分を占める。Ⅳ面全体で見ると、13世紀中頃まで遡るものを含みつつも、落込み内の出土遺物が13世紀末以降のものであることから、本期の年代は13世紀第４四半期以降14世紀第３四半期のいずれかの時期とみてよいだろう。

３期

Ⅲ面が相当する。２区において溝部材を残す溝（溝１）が検出されている。この溝の軸線は、山裾の等高線と合致してくる可能性も考えられるため、区画溝あるいは境界を示す溝の可能性を指摘できる。

出土遺物が乏しいため、年代を求めるまでには至らないが、数少ない出土遺物も13世紀末以降のものであることから、上限は13世紀末といえる。

４期

Ⅱ面が相当する。遺構の検出は小穴１穴と遺物集中（遺物集中２）のみである。遺構の検出が貧弱であることから、この面を生活面と評価できるかどうかは不明である。当面で確認された遺物集中２であるが、灰茶色粘質土内に遺物の破片が大量に混入した状態で検出された。遺物集中２の性格について明言は避けるが、地行を行う過程で遺物片が混入した粘質土をなんらかの理由で充填した可能性も指摘しておきたい。

微細破片の出土が多いため、年代を特定するのは非常に困難である。遺物の最も多い遺物集中２において出土した土師器皿は概ね13世紀末～ 14世紀中葉までのものであるが、常滑Ⅱ類片口鉢は９型式のもので、15世紀前半の年代が与えられているものである。ただし、常滑Ⅱ類片口鉢には13世紀後半から14世紀前半にかけて口縁形状のバリエーションが豊富で整理しきれていない(1)、13世紀末以降編年の細分化が困難で（中野2012）、かつ編年に問題点も指摘されていることから（簗瀬2008）、ここでは常滑Ⅱ類片口鉢の年代観には積極的には従わない。

出土遺物からみて当期も上限は13世紀末と考える。ただし、15世紀前半に、13世紀末から14世紀中頃にかけての遺物片を含む土をいずれかの地から当地に運びこんだ、と解釈する余地があることは付記しておく。

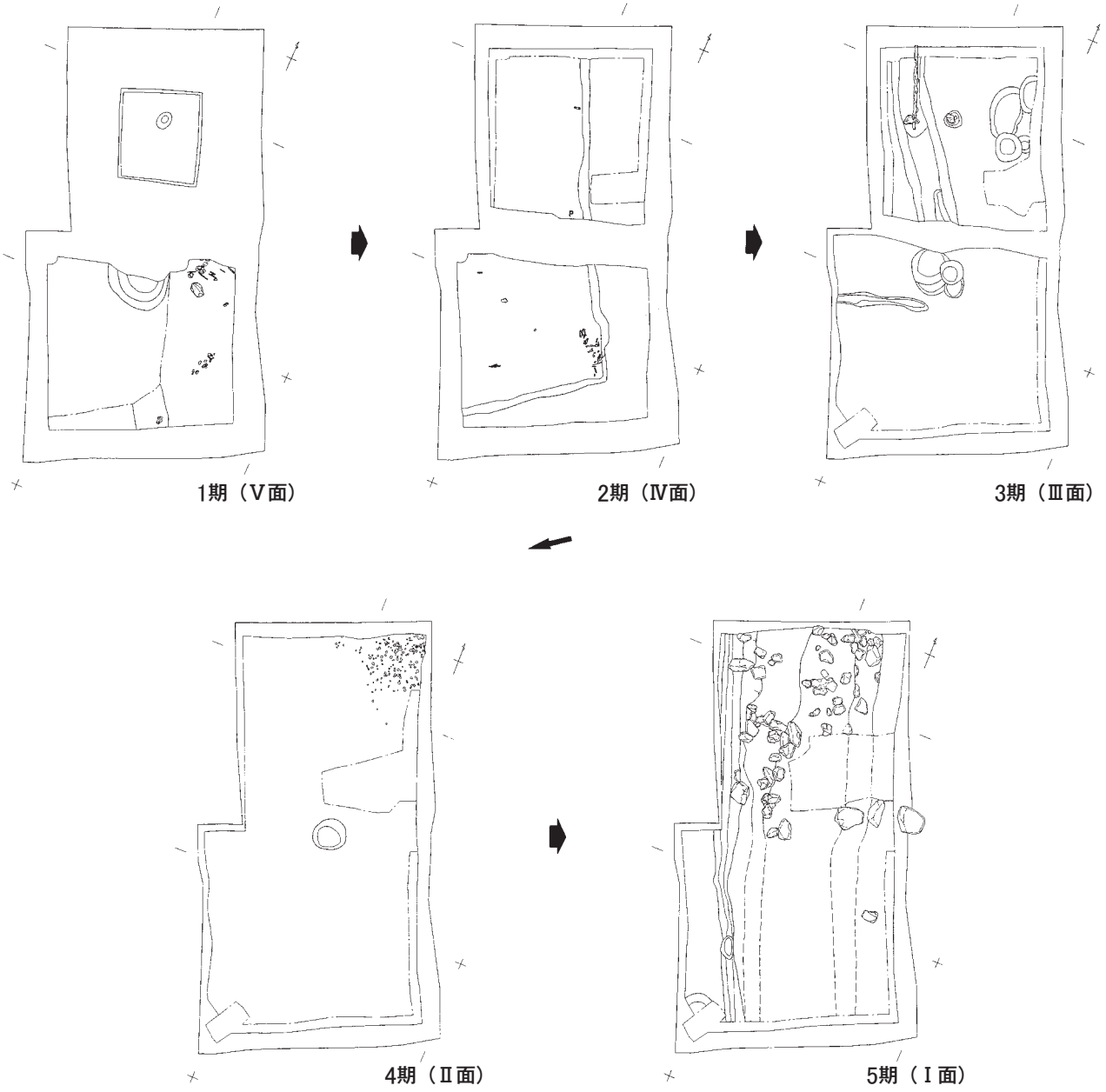


図14　遺構変遷図

５期

Ⅰ面が相当する。調査区を南北に縦断する土塁状遺構とその西側（谷側）に小溝（小溝１）を検出した。小溝１のある西側（谷側）のほうが、土塁状遺構を挟んだ東側（山側）よりも標高が低いこと、土塁状遺構と主軸方位がほぼ一致すること、流下方向は南側（谷尻側）から北側（谷口側）へとなっていることなどから、土塁状遺構に付属する排水溝の可能性を考えたい。また土塁状遺構に関しても、本来の山の等高線にほぼ平行する関係で構築されていることや、谷戸内に位置すること、山側のほうが標高が高いことから、防御を意識した施設というより、区画や境界を意識して構築されたと考えられる。

出土遺物が乏しいため、明確なことは言えないが、13世紀末以降のいずれかの時期に構築されたと考えられる。

２．調査地点周辺の土地造成について

調査地点周辺の地形は図16に示すように、階段状の平場に各々一軒ずつ住宅が建てられている。このような造成が行われる場合、一般的には図17のように盛土と切土を組み合わせて造成されるが、当地点においては、地表面下150㎝ほどのⅤ面より上層は確実に中世以降の盛土である。このことから、中世以降の土地造成の繰り返しにより、現在の階段状の地形が形成されたことは明確である。この階段状の造成がどのような過程で構築されていったのかを本項では考察していきたい。

図18は、自然災害を主要因とする時に階段状の盛土が形成されるケースを模式図として示したものである。盛土は特有の脆弱性を抱えている(2)ことから、盛土の崩落を原因として階段状の造成が行われた可能性そのものを否定することはできない。図19は人為的な造成のみで階段状の盛土が形成されるケースを模式図として示したものである。現実には人為的なものと災害によるものが複合していると考えるのが妥当であろう。

これらをふまえて調査地点周辺についてみていく。まず、谷戸中央部を南北に縦断する道路面の標高であるが、都市計画基本図によると、調査区正面の道路面の標高は11.8ｍとなっている。当調査で確認した確実な自然堆積層（地山）（図４最終深掘り坑北壁土層断面12層）の西側（谷側）の標高は12.08ｍであることから、これより上層を盛土ないし地滑り堆積とすることは、矛盾しているとは言えない。

次に、Ⅴ面の標高だが、当地点で検出されたのは地表面下150㎝ほどの13.00ｍ前後である。西側隣地（図15－２、図16－２）と当地点の標高差も、目測ではあるが140㎝～150㎝ほどとなっている。これらのことから、西側隣地はⅣ面ないしⅤ面の標高を保っている可能性がある。

図15　調査地点周辺図（1/2500）

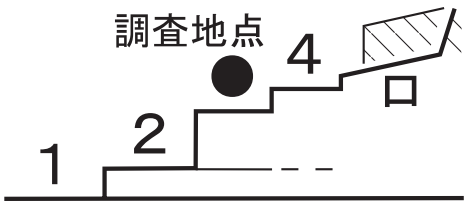


図16　調査地点周辺断面概念図

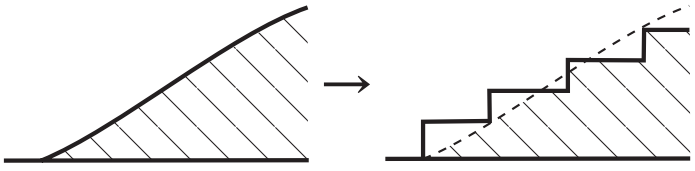


図17　階段状造成模式図（１）

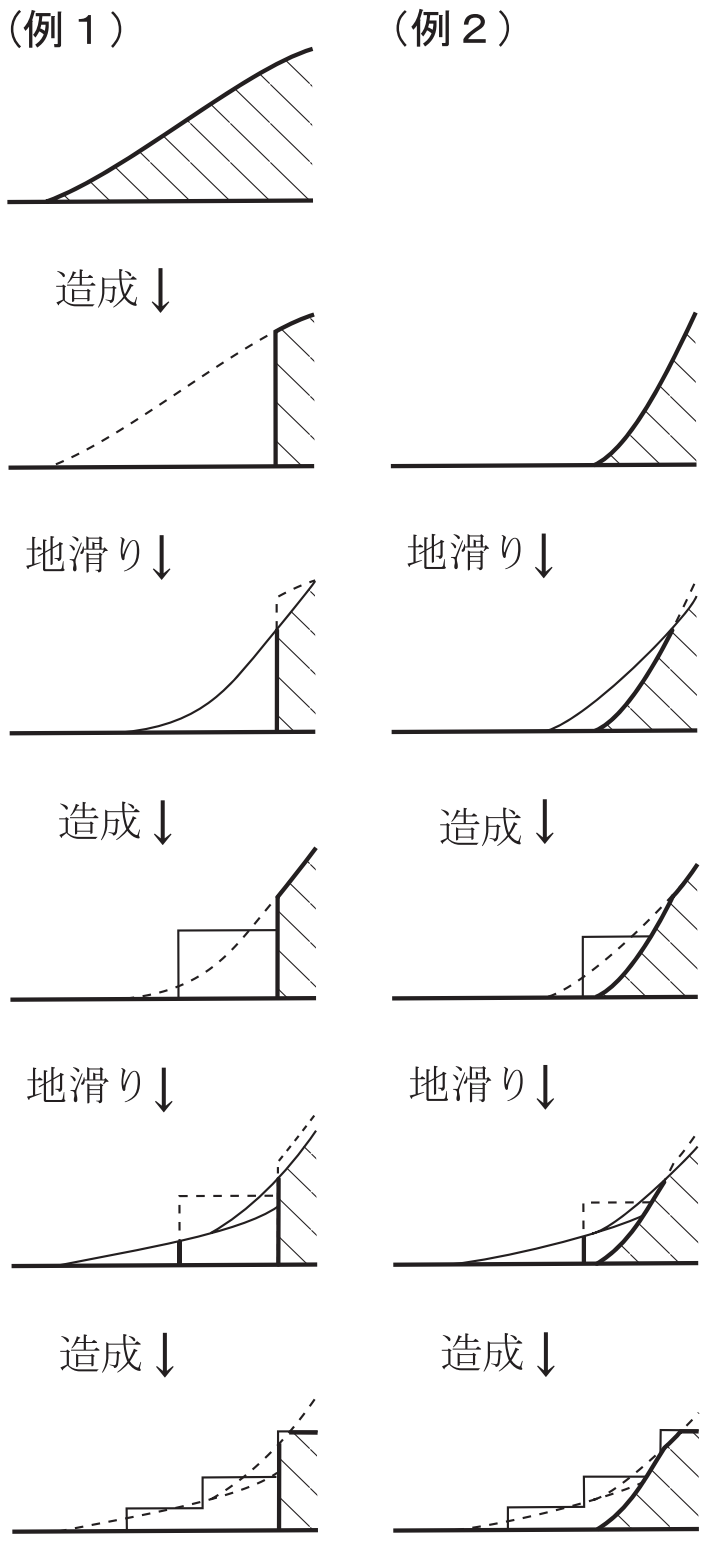


図18　階段状造成模式図（２）

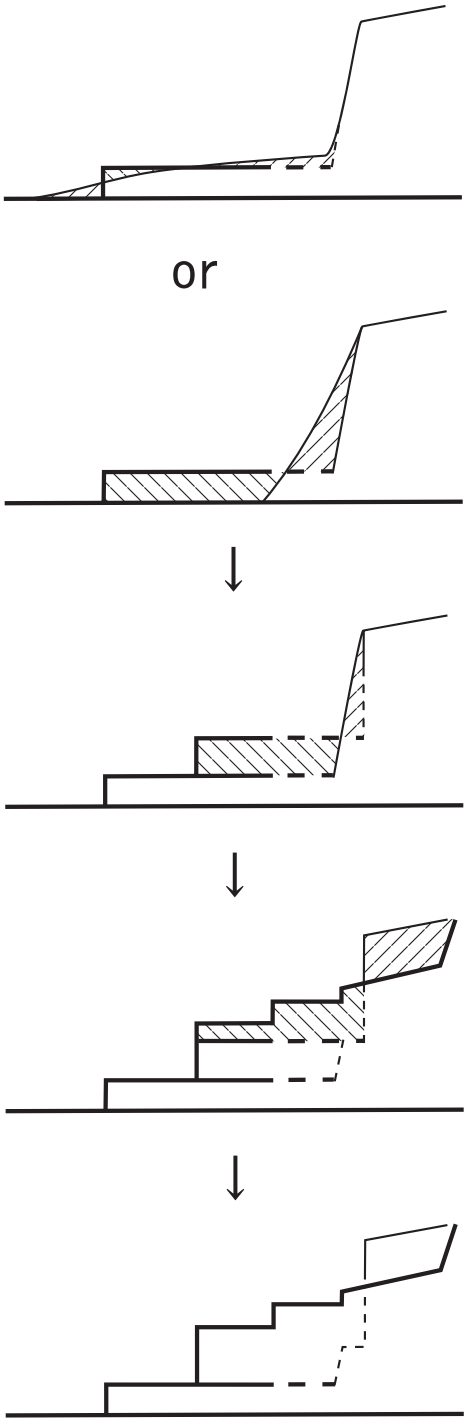


図19　階段状造成模式図（３）

図15－ロ地点は北側の岩盤が平面的にはほぼ直角に、かつ垂直に切られていることから、人為的に形成されたものであることが想像できる。現在この平場は墓所となっているが、石塔の型式からみて幕末・近代初頭まで遡ることは間違いない。さらに、５期の土塁状遺構はこの図15－ロの平場の正面に位置するため、この平場と関連する施設として構築された可能性がある（宝蓮寺跡佐助二丁目905番3

地点の調査では、奥に構築された平場を囲繞する土塁状遺構が検出されている)。もっともこの土塁状遺構自体、検出範囲内に限っては、谷戸の地形に沿った軸を示しているため、谷戸内における区画・境界を示す施設である可能性もある。ただ、図15－ロの平場の道を挟んだ西側、現在の東光寺の裏手にも同様に方形に切り開かれた平場(図15－イ、図版９－１)が形成されており、これら両者が対をなしている可能性もある。このような状況を鑑みて、図15－ロの平場を形成した際の残土によって、最終的な盛土と土塁状遺構の構築がなされた、と評価すること自体は、現時点では可能性の一つとして考えておかなければならない。また、大規模な土木工事が行われていると考えるならば、大慶寺が栄えた時期に行われた土木工事である、という推測も成り立つ。こうした状況をふまえると、図15－イ・ロの平場が形成された時期が中世まで遡る、と考える余地は十分にある。

今回の調査で明確になったことは、現在の地表面下150㎝ほどの標高13.00ｍにあるⅤ面より上層は盛土により形成されたことのみである。Ⅴ面下の堆積を人為堆積によるものか自然堆積によるものか明確にしえなかったことは残念であるが、今後、調査地点周辺の造成の歴史を知るために必要な情報がなにであるか、ということがある程度見えてきたことが成果とも言える。

まず、Ⅴ面より下層はどこからが人為堆積で、どこまでが自然堆積なのかが明確になることにより、調査地点周辺で人的営為の始まる段階で､現在の道路面とほぼ同じ標高で平坦面が形成されていたのか､あるいはⅤ面の標高で平坦面が形成されていたのか、いつから盛土が始まったのか、といったようなことが判明するであろう。

次に、図４のⅠ区南壁土層断面のⅢ面の西側に落ちる傾斜やⅠ区北壁土層断面の12層の堆積は、盛土崩落を原因として形成された可能性を指摘できることから、土層堆積の状況が明らかになることにより、人為的な盛土のみで階段状の地形が形成されたのか、自然災害による地形改変を伴いながら階段状の地形が形成されたのかが明らかになるであろう。

また、５期に構築された調査区外へと延びている土塁状遺構が、どのような経路でどこまで続いているのか、どの時期に構築されたのか、といったことや、この土塁状遺構と図15－ロの平場とに関連性があるのかないのか、といったことは今後重要な課題となる。

３．大慶寺と周辺の古道

図20は大正10年測図の２万５千分１地図(鎌倉・国土地理院謄本)に加筆したもので、図21は明治15年測図の迅速測図((財)日本地図センター発行)に記載されている道を、明治36年測図の５万分１地図(横須賀・国土地理院謄本)と大正10年測図の２万５千分１地図(鎌倉・国土地理院謄本)を元に、２千５百分１都市計画基本図(平成16年修正)に加筆したものである。

図20　大正10年(1921年)の調査地点周辺
(1/25000、国土地理院謄本に加筆)

図21　平成16（2004年）の調査地点周辺（1/5000）

現在も残る江ノ島道道標（図版９－２・３・４）を南に折れ、昭和30年代に開発された広大な住宅地に寸断されるまでは、ほぼ現在の道と重なることがわかる。これより南は住宅地により旧地形をほとんど留めていないが、旧道が富士塚（図版９－５）の西側を通っていることが窺える。富士塚の周辺の尾根筋は図20の等高線から判断すると、緩やかな傾斜が台地状に広がっていることが窺え、台地のへりを通る選択は理にかなっているといえる。また富士塚の周囲からは縄文土器や石器の出土が報告されており（赤星1959）、住居址の存在も想定されている（神奈川県県史編纂室1979）ことから、この台地状の地形は縄文中期には既に形成されていた可能性もある。

この富士塚の南、図21－１のマンションの位置で上町屋へと向かう尾根道が西に分岐している。このマンション建設の際に事前調査が行われ、この時に尾根筋に道状遺構が検出されており、これが上町屋へと向かう道に相当する。ここから尾根筋を上町屋へと向かうルートがかつての江ノ島道になる（鎌倉教育研究所1979）。江ノ島道の分岐から南は山腹を這うようにして下る坂で、かつては狐坂と呼ばれており（大正十年測図の地形図に記載あり）、この坂を下ると大慶寺の所在する谷戸に着く。

大慶寺から西方へ向かう道沿いには文和五年銘の宝篋印塔（「泣塔」）がある。この宝篋印塔は地図にある旧道のほうを向いていることから、この宝篋印塔は原位置を保っている可能性がある。

明治15年の段階で記載されている道は、経路上に近世の遺構を残す状況からしても、近世まで遡ることは確実であろう。また現況は大きく改変されており、実際に確認することが適わない場所も多いが、地図上で確認する限り、沢から尾根への取り付き方、尾根筋の巻き方など、ルートの設定としては理にかなっているといえよう。こう考えると、このルートが中世まで遡る可能性は十分にある。

大慶寺の所在する谷戸の西方の山崎・上町屋・寺分一帯にかけては、かつて洲崎と呼ばれていた地域であり、『皇国地誌』にも常盤村・梶原村・寺分村・上町屋村・山崎村が洲崎郷とある。第一章で述べたように、洲崎において新田義貞軍と赤橋守時の間で合戦が行われている。こうしたことから、大慶寺の所在する地点は、鎌倉の外縁であり、鎌倉から片瀬・江ノ島方面あるいは藤沢方面へのルート上に位置すると評価することもできよう。

（沖元）

註

（１）中野晴久氏ご教示による

（２）筆者は盛土の崩落について土木工学の視点で指摘することはできない。web上において国・自治体・土木工学・土木業界等が盛土崩落についての解説・報告書を多数公開しているので、専門家によるそちらの解説を参照されることを望む。

引用・参考文献（本報全体に共通）

赤星直忠1959 『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館

丑野毅1974 「神奈川県鎌倉市台遺跡調査報告書」『人文科学科紀要』第59輯　東京大学教養学部人文科学科

宇都洋平・原廣志2012 「宝蓮寺跡（佐助二丁目905番3）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28（第１分冊）』鎌倉市教育委員会

大河内勉1996 『台山藤源治遺跡　―第２次調査報告―』台山遺跡発掘調査団

神奈川県県史編纂室編　1979『神奈川県史　資料編20　考古資料』神奈川県県史編纂室

鎌倉教育研究所編1979 『かまくら子ども風土記（改訂九版）』鎌倉市教育委員会

川副武胤・貫達人1959 『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館

黒田基樹2005 『戦国北条一族』新人物往来社

斉木秀雄・宗臺秀明1985 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1　鎌倉市教育委員会

宗臺秀明1993 『台山藤源治遺跡　―第三次調査報告―』台山遺跡発掘調査団

玉林美男・新国哲也1988 「台山遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4　鎌倉市教育委員会

土屋浩美2002 「寺分藤塚遺跡　寺分１丁目502番１他19筆所在」『鎌倉の横穴墓　―調査報告と資料集成―』東国歴史考古学研究所

手塚直樹・及川良彦1985 『台山藤源治遺跡』台山藤源治遺跡発掘調査団

中野晴久2012 「常滑窯の展開」『中世渥美・常滑焼をおって　第25回日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部研究集会シンポジウム資料』

簗瀬裕一2008 「中世後期の常滑焼片口鉢の編年について－東国の消費地遺跡における検討から－」『芹沢長介先生追悼　考古・民族・歴史学論叢』六一書房

若松美智子ほか2001 「水道山遺跡（№20）台四丁目1169番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18　第２分冊鎌倉市教育委員会

１－１　調査地点近景（北から）

１－２　調査地点近景（南から）

１－３　調査地点遠景（南西から）

１－４　東光寺境内所在板碑

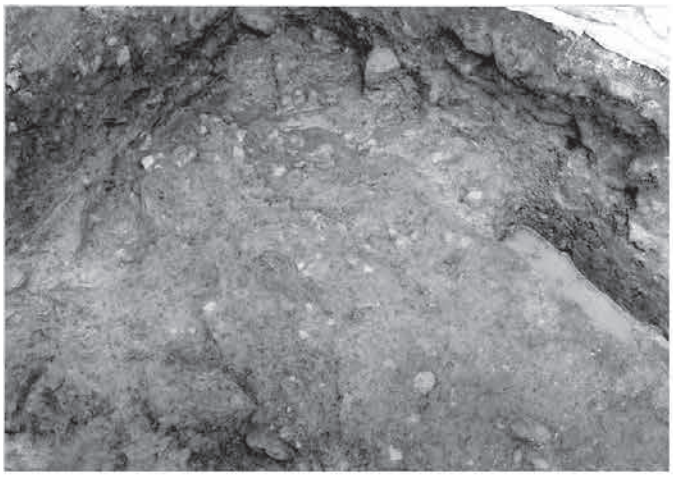
図版２

２－１　２区Ⅰ面全景（北から）

２－２　２区Ⅰ面全景（南から）

２－３　２区Ⅱ面全景（北から）

２－４　２区Ⅱ面遺物集中２（西から）



３－１　２区Ⅱ面遺物集中２（南西から）

３－２　２区Ⅲ面全景（北から）

３－３　２区Ⅲ面溝１（西から）

３－４　２区Ⅲ面溝１（北から）

図版４

４－１　１区Ⅳ面全景（北から）

４－２　２区Ⅳ面全景（北から）

４－３　１区Ⅳ面落込み１内遺物集中（西から）

５－１　１区Ｖ面全景（北から）

５－２　２区Ｖ面全景（北から）

５－３　１区Ｖ面落込み２内遺物集中（南から）

５－４　１区Ｖ面落込み２内遺物集中（西から）

図版６

６－１　１区Ｖ面落込み２内遺物（図11 － 16）出土状況

６－２　１区Ｖ面井戸１（南から）

６－３　２区最終深掘り坑（西から）

７－１　１区南壁土層

７－２　１区北壁土層

図版８

８－１　２区北壁土層

８－２　２区最終深掘り坑北壁土層

９－１　図15－イ　東光寺裏平場

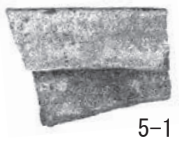
９－２　江ノ島道道標（1）（山崎）

９－５　富士塚

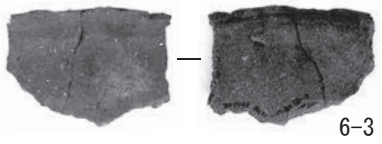
９－３　江ノ島道道標（2）（山崎・拡大）

９－４　江ノ島道道標（3）（山崎・拡大）

図版10


5-1

1面包含層


6-3

6-4

6-5

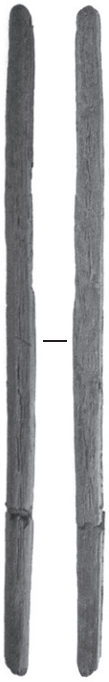
6-6

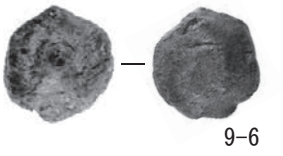
2面 遺物集中2

9-1

9-2

9-4


9-3

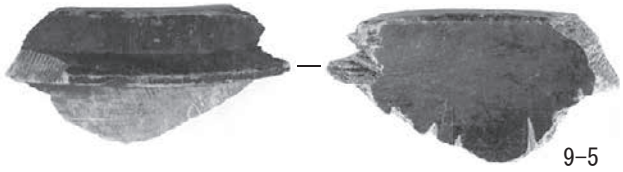

9-6

9-7

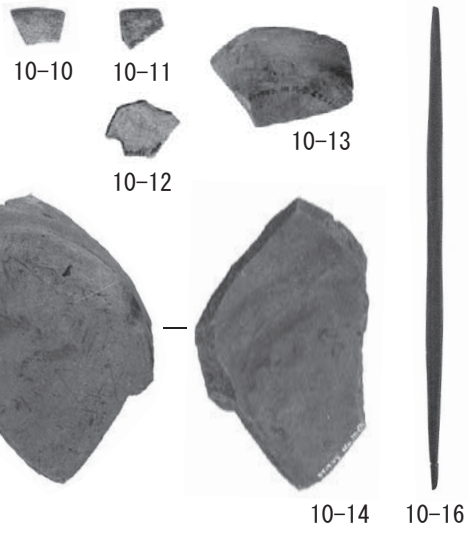
9-8

9-9

4面 面上


9-5

4面 包含層


10-10

10-11

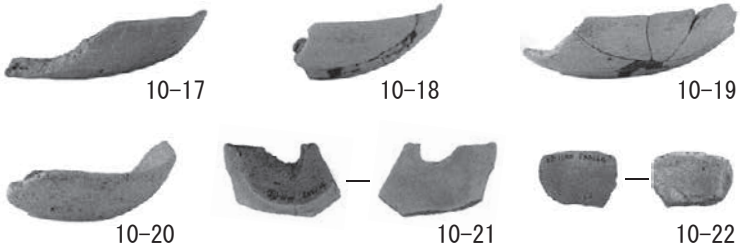
10-12

10-13

10-14

10-16

4面 落込み1


10-17

10-18

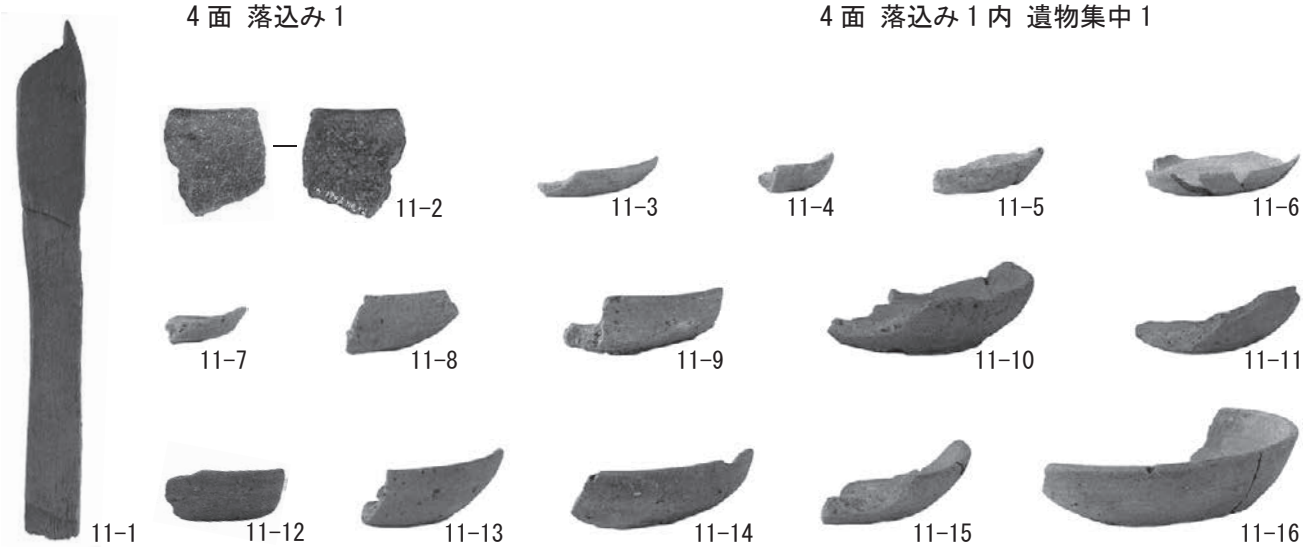
10-19

10-20

10-21

10-22

4面 落込み1内 遺物集中1


11-1

11-2

11-3

11-4

11-5

11-6

11-7

11-8

11-9

11-10

11-11

11-12

11-13

11-14

11-15

11-16

5面 落込み2
出土遺物

福泉やぐら群（No.447）

今泉三丁目 292 番他地点

例　言

1．本報は「福泉やぐら群」(№447) 内、今泉三丁目292番他地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2．調査期間：2006年11月15日～ 2007年1月5日
3．調査面積：63.9㎡
4．調査の略称は「IF3293」とした。
5．調査体制

担　当　者　馬淵和雄
調　査　員　松原康子・鍛治屋勝二・鈴木弘太・沖元道（資料整理）・栂岡渓音（同前）
補　助　員　森谷十美（資料整理）
作　業　員　安達越郎･牛嶋道夫･佐野吉男･田嶋道夫(以上社団法人鎌倉シルバー人材センター)

6．本報作成分担

遺構図整理　馬淵・沖元
遺物実測　　栂岡
同墨入れ　　栂岡
同観察表　　森谷
原稿執筆　　馬淵・沖元（担当部分末尾に記名）
編　集　　沖元

凡　例

1．方位は座標北を示す。
2．遺構全図における小穴番号は、遺物の出土あるものや切合い関係などで本文中に記述のあるものに対してのみ付した。
3．遺構番号は調査時点でⅠ区とⅡ区で個別に与えたものをそのまま継続したため、順列において層序と前後する場合がある。すなわち、例えば1面の遺構であってもⅡ区で検出されたものは、Ⅰ区の3面遺構よりも数字が大きい場合がありうる。

謝　辞

次の方々に感謝の意を表したい。
大橋康二（NPO法人アジア文化財協力協会理事長）･･･近世陶磁器に関するご教示
三瓶裕司（公益財団法人かながわ考古学財団）･･･････石割りの工具に関するご教示
柏木善治（公益財団法人かながわ考古学財団）･･･････古墳時代土師器に関するご教示

目　次

本　文　目　次

第一章　遺跡と調査地点の概観 …… 273

1．地理的環境
2．周辺の遺跡と歴史的環境

第二章　調査概要 …… 278

1．調査にいたる経緯
2．調査方法
3．調査経過

第三章　調査結果 …… 280

第1節　概　要
1．層序と面の概要
第2節　各　説
1．1面
2．2面
3．3面
4．4面
5．5面
6．表採および攪乱坑からの採集品（図14）

第四章　変遷と年代―まとめ …… 298

1．遺跡の変遷と年代
2．まとめ

挿　図　目　次

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 …… 274
図2　明治15年頃の調査地点一帯 …… 276
図3　調査区設定図 …… 279
図4　土層断面図 …… 281
図5　1面遺構全図，
　　同遺構・同上包含層出土遺物 …… 283
図6　土坑1，同出土遺物 …… 284
図7　Ⅱ区1面上・同落込み出土遺物 …… 285
図8　2面遺構全図，同上包含層出土遺物 … 286
図9　遺物集中1出土遺物 …… 287
図10　3面遺構全図，土層断面・遺構 …… 288
図11　3面上包含層・落込み1出土遺物 …… 289
図12　4面遺構全図，土坑2・4面出土遺物 … 290
図13　5面遺構全図，溝2出土遺物 …… 291
図14　表採および攪乱坑等からの採集品 …… 292
図15　遺構変遷図 …… 299

表　目　次

表1　出土遺物観察表（1）…… 293
表2　出土遺物観察表（2）…… 294
表3　出土遺物観察表（3）…… 295
表4　遺物計量表（1）…… 296
表5　遺物計量表（2）…… 297

図　版　目　次

図版１…… 300
１－１．調査地点遠景（▼の下）
１－２．調査地点北側　山腹近世墓所
１－３．近世墓銘（享保八年）
図版２…… 301
２－１．Ⅰ区１面全景（東から）
２－２．Ⅰ区１面全景（西から）
２－３．Ⅱ区１面落込み４（西から）
２－４．Ⅱ区１面全景（南から）
図版３…… 302
３－１．Ⅰ区２面全景（西から）
３－２．Ⅱ区２面全景（東から）
３－３．Ⅰ区２面　遺物集中１（南から）
３－４．Ⅰ区２面　遺物集中１・
壷（図９－８）出土状況（南から）
図版４…… 303
４－１．Ⅰ区３面全景（南から）
４－２．Ⅰ区３面全景（西から）
４－３．Ⅱ区３面全景（南から）
４－４．Ⅱ区３面全景（東から）
図版５…… 304
５－１．Ⅰ区３面　岩検出状況（南から）
５－２．Ⅰ区３面　岩検出状況拡大
（南西から）
５－３．Ⅰ区３面　遺物集中土坑（南から）
図版６…… 305
６－１．Ⅰ区４面全景（南から）
６－２．Ⅰ区４面全景（西から）
６－３．Ⅱ区４面全景（南から）
６－４．Ⅱ区４面全景（東から）
図版７…… 306
７－１．Ⅰ区５面全景（西から）
７－２．Ⅰ区５面全景（西から）
７－３．Ⅱ区５面全景（南から）
７－４．Ⅱ区５面全景（東から）
図版８…… 307
８－１．Ⅱ区最終深堀り坑（南から）
８－２．Ⅱ区東壁土層
図版９…… 308
９－１．Ⅰ区東壁土層
９－２．Ⅰ区東壁土層
図版10 …… 309
10－１．Ⅰ区西壁土層
10－２．Ⅰ区西壁土層
図版11 …… 310
図版12 …… 311
図版13 …… 312

第一章　遺跡と調査地点の概観

１．地理的環境

かつて鎌倉幕府が置かれた地「鎌倉」は、現在では市域を広げ、滑川の沖積低地である旧鎌倉を囲繞する丘陵部や、柏尾川水系の沖積低地である大船地区なども鎌倉市の行政区域内となっている。

鎌倉旧市街の北側の山稜部は、現在では宅地造成等の大規模開発により、往時の面影を残していないが、三浦丘陵から多摩丘陵へと連なる長大な丘陵部にあたり、かつては非常に懐の深い丘陵を呈していた。これらの丘陵には、境川水系最大の支流で、広大な沖積低地を抱えている柏尾川とその支流によって谷戸が開析されている。

本調査地である福泉やぐら群は、柏尾川の支流の一つである砂押川によって開析された今泉谷戸に面している。この砂押川は、調査地の東方１kmほどの谷奥の称名寺（今泉不動）近辺、および散在ヶ池を水源としており、そこから西流し、現在のJR大船駅近辺にて柏尾川に合流する。

本調査地は砂押川の右岸（北側）に位置する。調査区の北側は崖面となっており、かつて、急傾斜地崩壊対策事業の際にやぐらの事前調査が行なわれている。この崖面を擁する丘陵を北に越えると、柏尾川支流の狢（いたち）川によって開析された谷戸に、源頼朝によって建立されたとされる證菩提寺と、かつての山内庄本郷が所在する。

本調査地と砂押川を挟んだ南側は、六国見山を主峰とする丘陵となっている。この丘陵の南側の小谷戸内には円覚寺・明月院・建長寺などの寺院があり、また、鎌倉旧市街の北側の丘陵へと連なっており、鎌倉を囲繞する丘陵部の一角を担っている。

２．周辺の遺跡と歴史的環境

鎌倉旧市街はほぼ全域が遺跡といえる状況だが、今回の調査地点近辺は、鎌倉市内では遺跡の密集度が低いとされている地域である。

今泉谷戸内での調査事例も多くはなく、平面的な調査は、谷戸開口部に位置する岩瀬上耕地遺跡と西念寺境内遺跡のみで、他の調査事例は本調査地近辺における急傾斜地崩壊対策事業に伴うやぐらの調査となっている。

岩瀬上耕地遺跡では弥生時代～平安時代の竪穴住居址28軒のほかに、古墳時代末期の横穴墓19基が検出されている（継1991・2002）。西念寺境内遺跡の調査では近世が中心だが須恵器甕が出土しており、遺構は伴わないものの古代の遺物がみられる（田代ほか1995）。また、今泉小学校の西側の斜面に七久保遺跡（№339）、今泉七久保遺跡（№383）があり、土師器の散布が確認されている（1999長谷川ほか）ほかに、本調査区の北側の丘陵は福泉遺跡（№342）として遺跡指定を受けているが、鎌倉市史で前野町式土器の採集が報告されているのみ（赤星1959）で、調査事例もなく実態は全くわかっていない。

今泉谷戸内で調査事例のもっとも多いものは、本調査区周辺の斜面における急傾斜地崩壊対策事業に伴うやぐらの調査である。福泉地区のやぐら群は1990年、92年、94年、98年２回、99年の６度にわたって調査され、合計26基のやぐらが調査されている。しかし、後世の改変を受けているものが多く、遺物の出土も乏しいので築造時期など詳しいことはわかっていない（継1992、田代・小林1993、宮田・高野1995、宗臺1999、長谷川ほか1999、鈴木2000）。

このように調査事例も少ないが、今泉地区については史料的にも恵まれているとは言えない。今泉の史料上の初出は大永二年（1522）三月七日付の伊勢（北条）氏綱制札写に「相州岩瀬郷之内今泉村竹木之

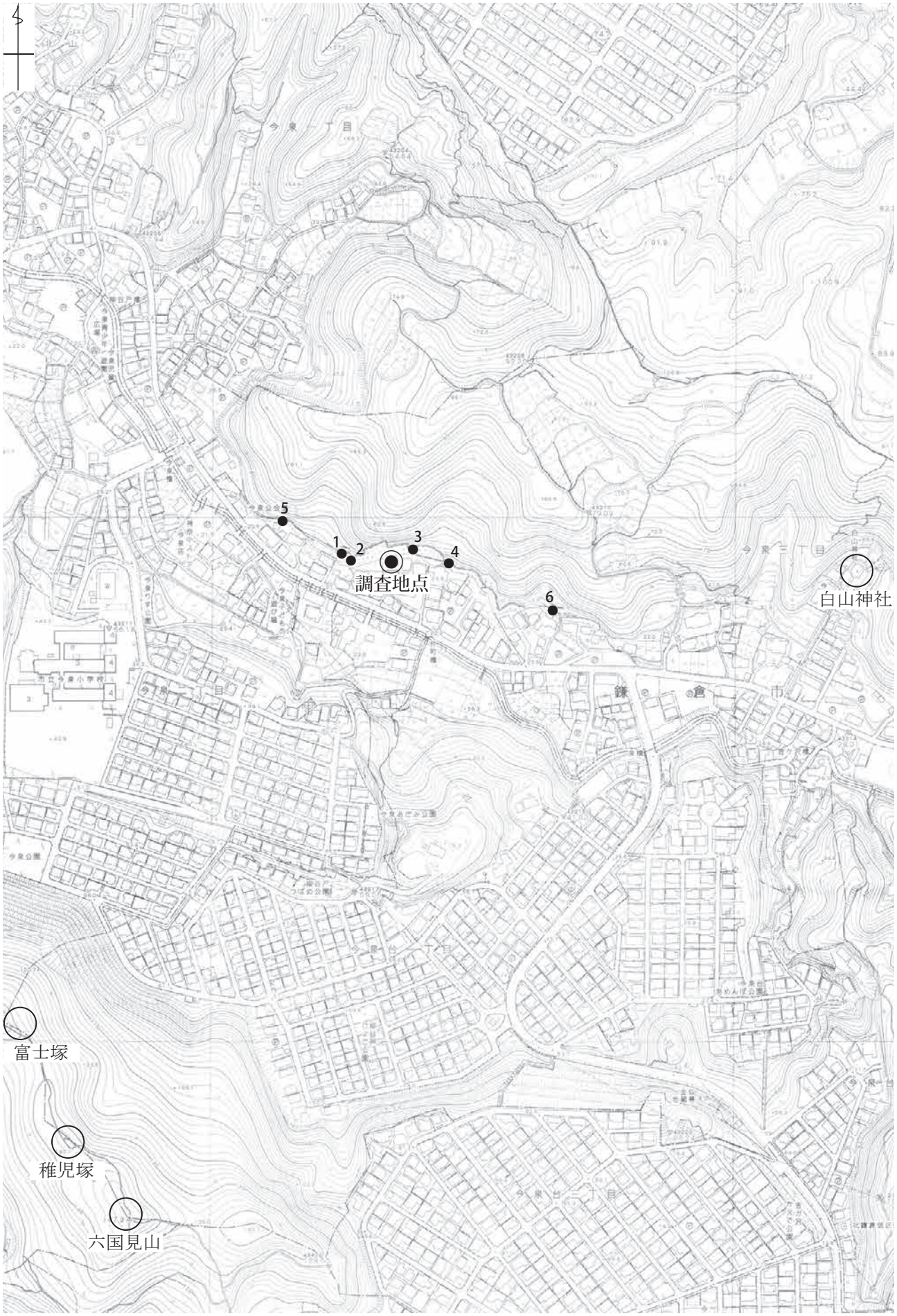


図１　調査地点と近辺の遺跡・旧跡（1/5000）

福泉やぐら群（№447）本調査地点　今泉三丁目293・294・292の一部　1.今泉三丁目267-5382（1998長谷川）長谷川他1999「福泉遺跡（№342）所在やぐら群　かながわ考古学財団調査報告70」（財）かながわ考古学財団2.今泉三丁目282（1999井関・鈴木）鈴木2000「福泉やぐら群　かながわ考古学財団調査報告91」（財）かながわ考古学財団3.今泉三丁目296-1他（1990田代）継1992「平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」瑞泉寺周辺遺跡内やぐら発掘調査団・№342遺跡内やぐら発掘調査団・極楽寺旧境内遺跡内やぐら発掘調査団4.今泉三丁目内（1993高野）高野・宮田「平成５年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」福泉やぐら群発掘調査団
福泉遺跡（№342）5.今泉三丁目内（1991田代）田代他1993「平成３年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」№342遺跡内やぐら発掘調査団6.今泉三丁目296-1（1998田代）田代他1999「中世石窟遺構の調査Ⅲ」東国歴史考古学研究所

事」とあり、今泉村が岩瀬郷内であったことがわかる。また、永禄二年（1559）の奥書をもつ小田原衆所領役帳に明月院の所領として「卅一貫九百七十文　東郡岩瀬之内今泉」とあり、天正十二年（1584）十一月十四日付の北条氏直判物にも「明月院寺領今泉村并總門之内田地」とあり、16世紀後半には岩瀬の今泉が明月院領であったことがわかる。この他にも、天保十二年（1841）に成立した『新編相模国風土記稿』（以降『風土記稿』）所収の毘沙門堂（白山神社）の亨禄五年（1532）九月再建棟札の写に「禅興寺荘園、相州山ノ内庄今泉村」とあり、16世紀前半代に既に今泉村が明月院領であった可能性も考えられる。なお、岩瀬郷内の明月院領に関しては、永徳三年（1382）十二月十一日付の上杉憲方宛、関東公方足利氏満書状に「明月庵領相模國山内庄岩瀬郷事、任寄進状、被成安堵上者、雖無子細、就眞俗不可有相違候、謹言」とあるものが初出で、続いて至徳三年（1385）三月七日付で僧道光が「相模國山内庄岩瀬郷内田地」を明月庵に寄進した寄進状がある。これらのことから、14世紀末には岩瀬郷内に明月院領が存在していたことが窺える。

『風土記稿』によると、今泉村は家数二十、『神奈川県皇国地誌　相模国鎌倉郡村誌』には、今泉村は平民二十一戸、社二戸、寺二戸、総計二十五戸、人口は平民男八十八人、七十八人、総計百六十六人、牡馬十頭とある。

今泉不動　砂押川最上流部に所在する今泉不動は、『風土記稿』には、弘仁元年（810）空海（弘法大師）が創建した霊場とあり、弘法作の不動を本尊とある。鎌倉繁栄の頃には代々将軍が参詣したという伝承も記されている。

称名寺　今泉山一心院称名寺と号す浄土宗の寺院で、もとは芝増上寺末。空海の創建で今泉不動の別当であったという。『新編鎌倉志』には、かつては八相兼学で圓宗寺と号したとある。『風土記稿』によると無住となっていたものに、貞亨元年（1684）六月に直誉蓮入が再建し、元禄六年、増上寺の末となって、今の山・寺号をうけたとある。古代に遡る伝承を持ち合わせてはいるが、足跡が確認できるのは江戸時代以降である。

白山神社（毘沙門堂）　今泉不動に向かう途中にあり、かつては毘沙門堂と称し、今泉村の鎮守であった（『風土記稿』）。祭神は菊理姫之命（くくりひめのみこと）。白山神社と呼ぶようになったのは戦後のことのようである（鎌倉市教育委員会1971）。社伝には、建久元年（1190）源頼朝の建立という。頼朝が上洛した折に、鞍馬寺の行基作の毘沙門天二体のうちの一体を請来した（『風土記稿』）、という伝承をもつ一木造兜跋毘沙門天（とばつびしゃもんてん）立像一体、前立の毘沙門天立像とその両脇侍（吉祥天女、善賦師童子）の三体などがある。『風土記稿』では、この脇侍を弁天と大黒としており、興味深い。

この兜跋毘沙門天（とばつびしゃもんてん）像は平安期の作とされているが、清水真澄氏は、現在、地天ではなく邪鬼の上に立っていることや、足の配置から兜跋（とばつ）像とするには気にかかる（清水1986）、と述べている。

平安仏の毘沙門天像が、なぜ今泉の地にあるのか、という点に関しては、史料の制約があり全くわからない状況である。こうした状況の中、橋本章彦氏の毘沙門天信仰についての研究がある（橋本2008）。

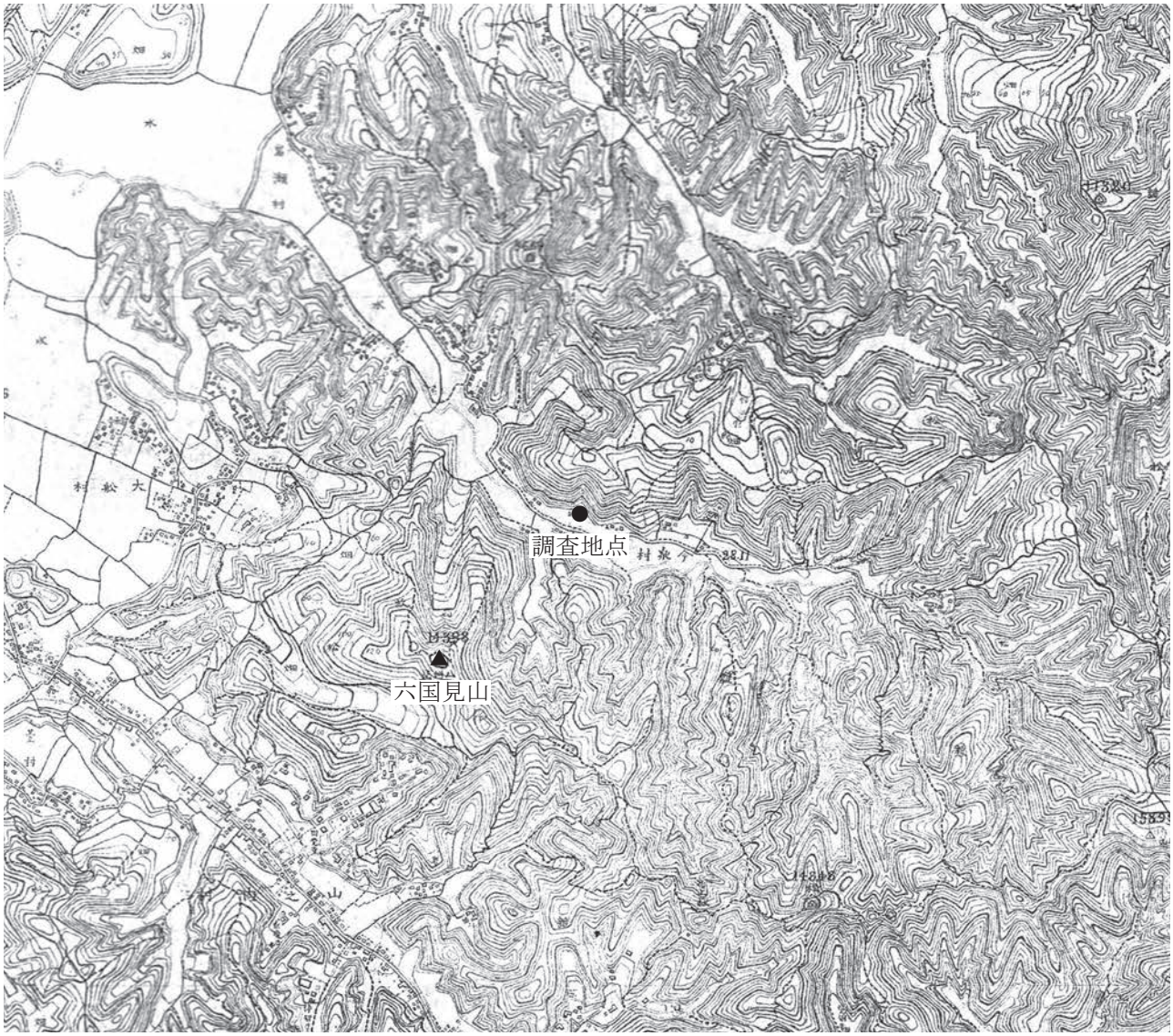


図２　明治１５年頃の調査地点一帯（迅速測図）（1/20000）

橋本氏によると、守護神として毘沙門天像を都市の城壁や寺の門などに置く行為は比較的早い段階では行われていたようだが、中国ほど広がりを見せていなかったことが示されている。また、毘沙門天説話において、中世以前の段階では毘沙門天によって救済される対象のほとんどが僧侶であり、仏法守護神として出家信者の仏道修行を完遂させるために施福している段階から、鎌倉時代以後、毘沙門天による救済が在家にも及ぶことや、遊行聖と関連する説話が見られること、融通念仏と関連する説話が見られることが示されている。そして、この融通念仏とその勧進活動によって毘沙門天が大衆化していき、室町時代以後の「七福神」の成立につながった可能性が示されている（橋本2008）。この橋本氏の論稿を鑑みると、平安仏である毘沙門天像が鎌倉の北方である今泉の地にあることから、この毘沙門天像を鎌倉の北方の守護神と結論づけることは短絡的と言えよう。

いずれにしろ、史料数や調査事例の少なさからすると白山神社所蔵の兜跋毘沙門天像（とばつびしゃもんてん）について結論づけるのは時期尚早であるが、鎌倉時代の今泉を復元する上でこの毘沙門天像は重要な意味を持つと言えるのではなかろうか。

今泉寺　『風土記稿』によると、寿福山と号し、臨済宗、建長寺塔頭廣徳院末であったという。本尊は出山釈迦（長九尺五寸、行基作）。毘沙門堂の別当であったという。『風土記稿』所収の「亨禄五年（1532）九月再建棟札写」にも寺号がみえる。廃年不明。現在の今泉寺は昭和に再興されたもの。

六国見山　円覚寺北側にあり、標高147.7ｍ。鎌倉では大平山・十王岩に次ぐ高い山。伊豆・相模・武蔵・安房・上総・下総の六カ国を眺望できるので名がつけられたという。『風土記稿』には、西は富嶽、東北は筑波山をも遠望し、群中第一の壮観なり、とある。六国見山には富士塚と稚児塚と呼ばれる二つの塚があり、実際に眺望が良いのは富士塚である。また、稚児塚には、塔身と相輪が失われた鎌倉時代後期の宝篋印塔が残されている（日本石造物辞典編集委員会2012）。

（沖元）

引用・参考文献

赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館
神奈川県県史編纂室編　1979『神奈川県史　資料編３　古代・中世（３下）』神奈川県県史編纂室
神奈川県県史編纂室編　1979『神奈川県史　資料編20　考古資料』神奈川県県史編纂室
神奈川県図書館協会編　1991『神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌　神奈川県郷土資料集成第十二集』神奈川県図書館協会
鎌倉市教育委員会編　1971『としよりのはなし　鎌倉市文化財資料第７集』鎌倉市教育委員会
鎌倉市教育研究所編　1993『かまくら子ども風土記』鎌倉市教育委員会
清水真澄　1986『かながわの平安仏　かもめ文庫24』神奈川合同出版
宗臺秀明　1999「福泉遺跡」『中世石窟遺構の調査Ⅲ　東国歴史考古学研究所調査研究報告第22集』東国歴史考古学研究所
鈴木庸一郎　2000『福泉やぐら群　かながわ考古学財団調査報告91』（財）かながわ考古学財団
田代郁夫・小林重子　1993『平成３年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』№342遺跡内やぐら発掘調査団
田代郁夫・大坪聖子　1995『西念寺境内遺跡　東国歴史考古学研究所調査研究報告第４集』東国歴史考古学研究所
田辺勝美　2006『毘沙門天像の起源』山喜房佛書林
継実　1991「岩瀬上耕地遺跡（岩瀬上耕地700番外地点）の調査」『第１回鎌倉市遺跡調査研究発表会発表要旨』
継実　1992『平成２年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』№342遺跡内やぐら発掘調査団
継実　2002「岩瀬上耕地遺跡」『鎌倉の横穴墓　東国歴史考古学研究所調査研究報告第30集』東国歴史考古学研究所
日本石造物辞典編集委員会編　2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
貫達人・川副武胤　1959『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
貫達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』有隣堂
橋本章彦　2008『毘沙門天－日本的展開の諸相－』岩田書院
長谷川厚ほか1999『福泉遺跡（№342）所在やぐら群　かながわ考古学財団調査報告70』（財）かながわ考古学財団
宮田眞・高野昌巳　1995『平成５年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』福泉やぐら群発掘調査団
蘆田伊人編　1958『大日本地誌大系（二十一）　新編鎌倉志　鎌倉攬勝考』雄山閣
蘆田伊人編　1998『大日本地誌大系22　新編相模国風土記稿第四巻』雄山閣

第二章　調査概要

１．調査にいたる経緯

「福泉やぐら群」（鎌倉市№447）の一角に位置する今泉三丁目292番他において、個人専用住宅建設の照会があり、試掘調査をおこなった結果、数枚の生活面らしき平坦面が確認された。計画によれば基礎工事に鋼管杭の打設をともなうものであり、遺構の損傷は不可避と判断されたが、建物強度を維持するために設計変更は困難であった。そこで協議を経て、記録保存のための発掘調査が国庫補助事業としておこなわれることとなった。

調査は2006年11月15日に始められた。

２．調査方法

掘削方法

掘削にあたっては残土を場内処理とし、置き場所の確保のため調査区63.9㎡を東西に二分割した。そして前半（西半部）を「Ⅰ区」、後半（東半部）を「Ⅱ区」と仮称した。両区とも表土、ないし大型攪乱坑堆積土を重機で掘削し、以下を人力で掘り下げた。なお地表面からの深度が２ｍに達した地点で、安全上の配慮から、以下の掘削は部分的な深掘りにとどめ、堆積状況の確認のみおこなった。その結果、後述するように確認坑以下は無遺物の地山層であることが確認され、調査を終了した。

測量方法

調査区はほぼ長方形を呈しているが、調査の際には長軸および短軸に直交・平行した基準軸を5mおきに設定し、のち資料整理時に世界測地系の数値を導入した。

調査区は以下の範囲内にある。

［エリア９］　X－72 540.45 ～ X－72 548.10
　　Y－25 322.60 ～ Y－25 332.55

３．調査経過

11月15日（水）　機材搬入、Ⅰ区調査開始
12月　8日（金）　調査区反転、Ⅱ区調査開始
12月22日（金）　深掘り確認坑実測・写真撮影
12月27日（水）　機材撤収、調査終了

（馬淵）

図３　調査区設定図（1/300）

第三章　調査結果

第１節　概　要

１．層序と面の概要

地表面と表土

地表面の標高は、調査区内崖際で23.7 ～ 23.8ｍ、手前で23.5 ～ 23.6ｍと、崖裾ではあるがほぼ平坦に調整されている。表土層は崖から離れるにつれ厚く、西壁では150㎝の厚みがある。

１面

表土を除くと､若干粘性のある茶褐色土とやや暗い青灰色粘質土が現れ､これを除くと最初の生活面(1面) が現れる。面の構成土は岩盤の風化した山砂を主体とする暗～明灰褐色の弱粘質土である。若干の木片･腐植土塊を含む。東半分においては崖裾(北壁)から3.5 ～ 4m付近でなだらかに落ちる(落込み3)。1区北半部中心に性格不明の小穴が20近く空いているが、性格は不明で、人為性はあまり感じ取れない。

面標高（ｍ）：高位面22.95（北西壁際）～ 22.75（南東壁際）　低位面22.45（落込み３下端部分東壁際）
～ 22.38（落込み３下部東壁際）

検出遺構：柱穴ないし性格不明の小穴17口・土坑１基（「土坑１」）・溝ないし大型土坑１基（「落込み４」）

２面

1面構成土は岩盤崩土の山砂を基盤とし、炭化物や鉄分、泥岩の小片を多く含む。全体に締まりのいい砂質土だが、腐植土小塊を多く含む部分ではいくらか柔弱な部分がある。これを除くと2面が10 ～ 20㎝下に現われる。

北西から南東にかけて斜めに浅い段状部があるが、自然の営力によるものか、人為的なものかの確証を欠く。面上には人頭大から縦横1m近い大型の凝灰岩（「鎌倉石」）が散乱していた。凝灰岩の間には遺物が集中している。

面標高（ｍ）：高位面22.93（北西壁際）～ 22.50（南東壁際）　低位面22.35（南東部段下）～ 22.05（西壁中央部）

検出遺構：溝1条・遺物集中部１ヶ所・岩塊集中部２ヶ所・性格不明小穴３口・段状部１ヶ所

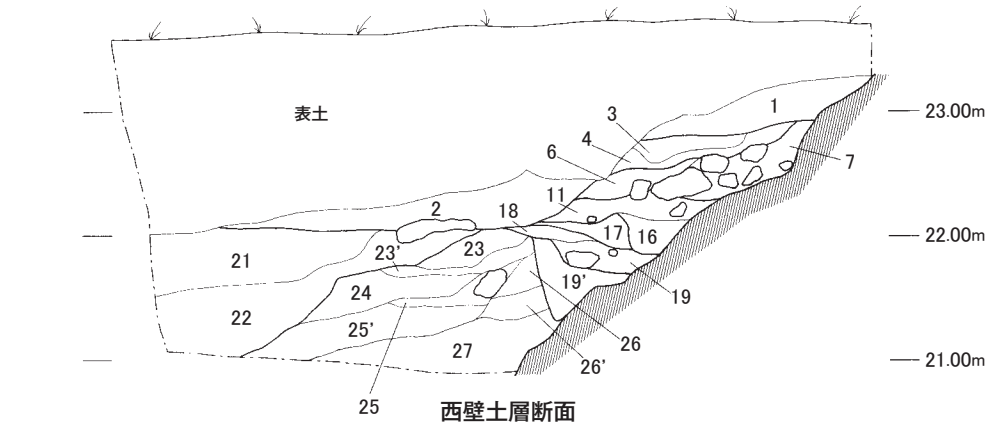
３面

2面構成土は全体に岩盤崩土の山砂を基本とし、大型凝灰岩を多量に含む。茶褐色または青灰色の砂質土を中心に、暗灰褐色の粘質土などで構成されており、締まりがある。また腐植土塊や木片を含む層もある。層厚は全体で10 ～ 40㎝あり、これを除くと3面となる。

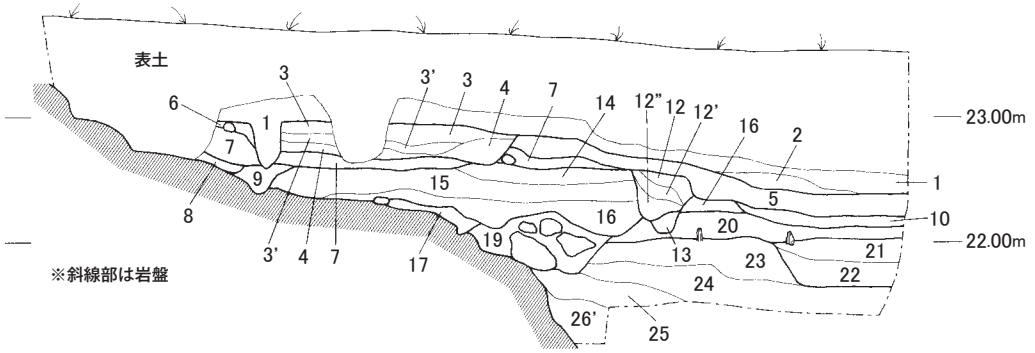
東半部の岩盤際には地滑りの痕跡とおぼしい溝状の細長い落ち込みが見られた。またその下段には段状の落ちがあるが、西半部南壁際で観察された落ちとともに、人工的なものかどうかは不明である。西半部の面上には１辺60 ～ 80㎝の大型凝灰岩がいくつもある。このうちの何点かは2面時に見つかっていたもの。

面標高（ｍ）：高位面22.32（西壁際北寄り）～ 22.75（東壁際北寄り）
低位面22.06（西壁部）～ 22.20（南東部段下東壁際）

検出遺構：溝1条・岩塊集中部１ヶ所・遺物集中土坑1口・段状部２ヶ所



西壁土層断面



東壁土層断面

0　2m

図4　土層説明

1．茶褐色弱粘質土　東壁近くではやや灰色味を帯び、鉄分多く、砂粒・拳大の砂の塊・炭化物を含む。締まり強い。岩盤崩土が土壌化したもの。
2．暗青灰色粘質土　山砂（岩盤崩土，以下「山砂」といった場合はすべて岩盤崩土の意）を基本とし、泥粒・砂粒・木片多く、炭もしくは炭化物多く含む。締まりはやや弱い。
3．明灰褐色弱粘質土　山砂を基本とし、粘性強く締まりあり。鉄分を多く含み、炭化物が多い。上面が1面
3'．灰褐色弱粘質土　３より鉄分少ない。
4．暗灰褐色弱粘質土　腐植土と砂質土の混土。微量の鉄分・炭化物・泥岩小塊を含み、湿性で柔弱、締まりは弱い。
5．灰褐色粘質土　山砂と腐植土の混土。炭化物やや多く、鉄分微量に含む。上面が1面
6．暗褐色砂質土　青灰色の山砂を基本とし、暗灰褐色の腐植土が多く混じる。全体に柔弱。
7．茶褐色砂質土　山砂を基本とし、巨大な凝灰質砂岩（「鎌倉石」）・泥の塊等が密に詰まる。やや締まりあり。上面が一部２面
8．黄灰色砂層　砂泥・凝灰質砂岩の風化した小塊多く含む。2面遺構
9．青灰色砂層　泥の小塊混じる。2面遺構
10．暗灰褐色粘質土　鉄分多く、粘性強く、締まりあり。上面が2面
11．青灰色砂質土　山砂を基本とし、腐植土が多く混じる。木片・鉄分・泥の小塊少量混入。やや締まりあり。上面が３面
12．黄灰色砂質土　鉄分と炭化物を少量含む。締まりあり。
12'．黄灰色砂質土　鉄分と炭化物を少量含む。締まりあり。
12"．青灰色弱粘質土　鉄分・炭化物・泥岩と砂岩粒子微量含む。締まりあり。
13．青灰褐色粘質土　山砂を含み、締まり弱い。２・３面遺構
14．灰褐色粘質土　少量の鉄分・腐植土・木片・凝灰岩粒子・炭化物を含む。締まり弱い。上面が2面
15．暗青灰色弱粘質土と茶褐色粘質土の混土　粒状～拳大小塊の砂岩や泥岩・木片多く、炭化物を散見する。粘性はあるが、締まりは弱い。
16．青灰色砂質土　腐植土を基本とし、砂粒と拳大砂岩小塊を多く含み、木片・炭を散見する。軟質で締まり弱い。
17．茶褐色粘質土　腐植土と青灰色砂層との混土で粒状～半拳大の泥岩・砂岩を多く含む。木片・炭を含み、軟質で締まり弱い。
18．青灰色粘質土　腐植土と青灰色砂層との混土。拳大の泥岩・砂岩を多く含み、炭化物混入する。軟質で締まり弱い。
19．青灰色粘質土　腐植土を基本とし、大型凝灰質砂岩を多く含み、粒状～半拳大泥岩・砂岩・木片を若干含む。軟質で締まり弱い。
19'．19とほぼ同土だが、大型凝灰質砂岩を含まない。
20．黒灰色粘質土　灰黒色のスコリアを散見する。鉄分をやや多く含み、締まりがある。上面が3面
21．暗青灰色粘質土　砂質土・鉄分・木片・炭・泥岩粒子を少量含み、締まりあり。上面が4面
22．青灰色粘土　含有物のほとんどない粘土。柔らかいが粘性強い。
23．暗青灰色粘質土　青灰色の粘土を基本とし、腐植土・砂質土小塊を含む。上面が5面
23'．暗青灰色粘質土　砂質土小塊が23よりも多い。粒状～半拳大の泥岩や凝灰質砂岩・木片・炭多く含む。
24．暗青灰色粘土　柔らかいが粘性強い。若干の木片・炭化物含む。
25．暗青灰色砂質土　泥岩と凝灰質砂岩の粒・同小塊・炭化物・木片多く含む。少量の腐植土混じる。
25'．暗青灰色砂質土　含有物少ない。
26．青灰色弱粘質土　粘性土ときめの細かい砂粒の混土。ごく少量の木片・炭化物・泥岩や砂岩の粒子を含む。
26'．青灰色砂質土　26より挟雑物若干多い。
27．黒灰色粘質土　腐植土・木片・砂粒と小礫かなり多く含む。

図4　土層断面図

4面

3面は西半部では青灰色砂質土、東半部では黒灰色の粘質土で構成される。前者は岩盤崩土を主体とし、腐植土が多く混じる。木片・鉄分・泥の小塊などが少量混入する。後者は鉄分をやや多く含み、黒色スコリアを散見する。地山層を素材とした土で、締まりがある。3面構成土の層厚は10～20cm程度あり、4面はこれを掘り下げると現われる。おおむね平坦な面である。

面標高（m）：22.00（東壁際）～22.05（西壁際）

検出遺構：溝1条・土坑1基

5面

4面を構成するのは暗青灰色の粘質土で、南に向かって厚みを増し、西壁の南端では50cmもある。これを剝がすと5面が現れる。南に向かって落ちるが、人為によるものかどうかは確認できない。崖際の岩盤と土との間が溝状に窪み（溝2）、周辺にはいくつもの不整形の浅い穴があるが、これも遺構と認定する根拠に乏しい。

面標高（m）：高位面22.00（東壁際）～22.05（西壁際）

低位面21.65（西壁南西角）～21.00（南東部段下東壁際）

検出遺構：溝1条

5面下

5面でほぼ遺物の出土がなくなり、以下は自然堆積層との認識を得たが、最終確認の深掘り坑を東西の壁際に設定した。深掘り坑の深度は西壁で2.75m、東壁で2.47mである。平坦面はなく、地滑りらしき断層が見られたものの（26・27上面）、全体に無遺物であり、崖際に堆積した地山層と判断して調査を終了した。

第2節　各　説

1．1面

土坑1（図6）

概要：山際の平坦部に開けられた長円形の浅い穴　**位置**：X－72 542.35～－72 543.38　Y（－25 329.20）～（－25 330.18）　**規模**：長さ（132）cm×幅103cm×深さ24cm　**底面標高**：23.17m　**平面形**：長円形または楕円　**断面形**：皿形　**主軸方位**：（N－90°－W）　**充填土**：図5に記載　**重複関係**：P.4・10・16を切る　**出土遺物**：瀬戸美濃陶器輪禿皿（1）・肥前系陶器皿（2）・瀬戸美濃陶器袋物か（3）・瀬戸美濃陶器小碗（4）・備前か船徳利（5）・肥前系磁器碗（6・8）肥前系磁器くらわんか碗（7・9・11）肥前系磁器小広東碗（10）・肥前系磁器小杯（12）　**遺物年代**：肥前系磁器は18世紀前半や中葉のものを含みつつも18世紀後半のものが主体、1の瀬戸美濃陶器皿は18世紀後半頃のものか。　**特記事項**：江戸時代後期の穴、性格不明だが、遺物は多く、ゴミ捨て穴か。落込み4につながる可能性あり。

落込み3（図5・7）

概要：平坦面から緩傾斜面に移行する段差　**位置（南北のみ）**：上端X－72 543.02（西北部）～X－72 544.67（東南部）　下端X－72 543.50（西北部）～X－72 545.93　**規模**：段部幅135cm（西北部）～45cm（東南壁際），段差高45cm（東壁）～65cm（西壁）　**最低位点標高**：21.11m　**平面形**：ほぼ直線（西北→東南）　**主軸方位**：N－80°－E　**堆積土**：図4参照　**出土遺物（図7）**：肥前系磁器折縁皿（5・6）　**遺物年代**：5･6は17世紀後半の波佐見の製品　**特記事項**：山裾の堆積層の自然傾斜か

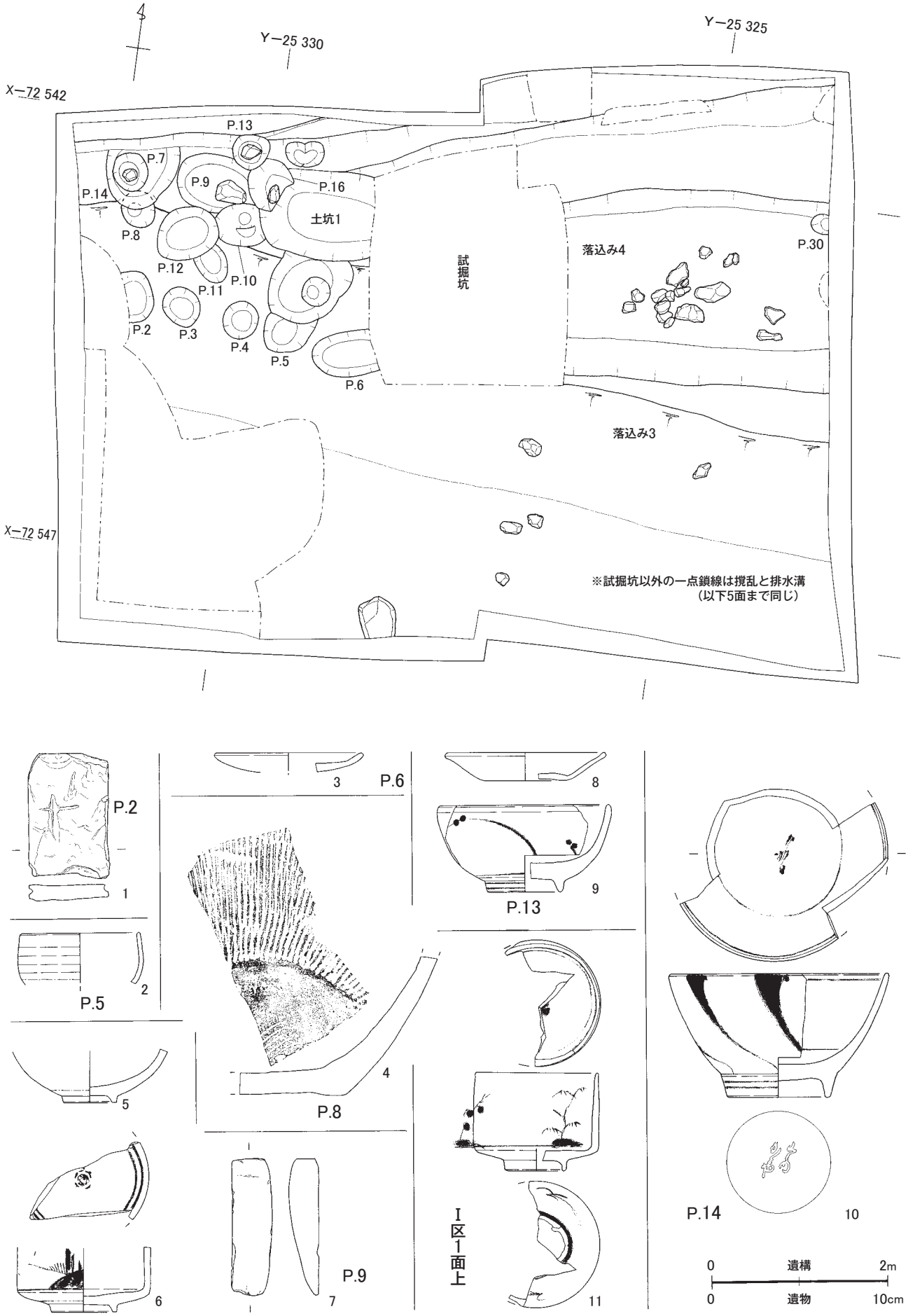


図５　１面遺構全図，同遺構・同上包含層出土遺物

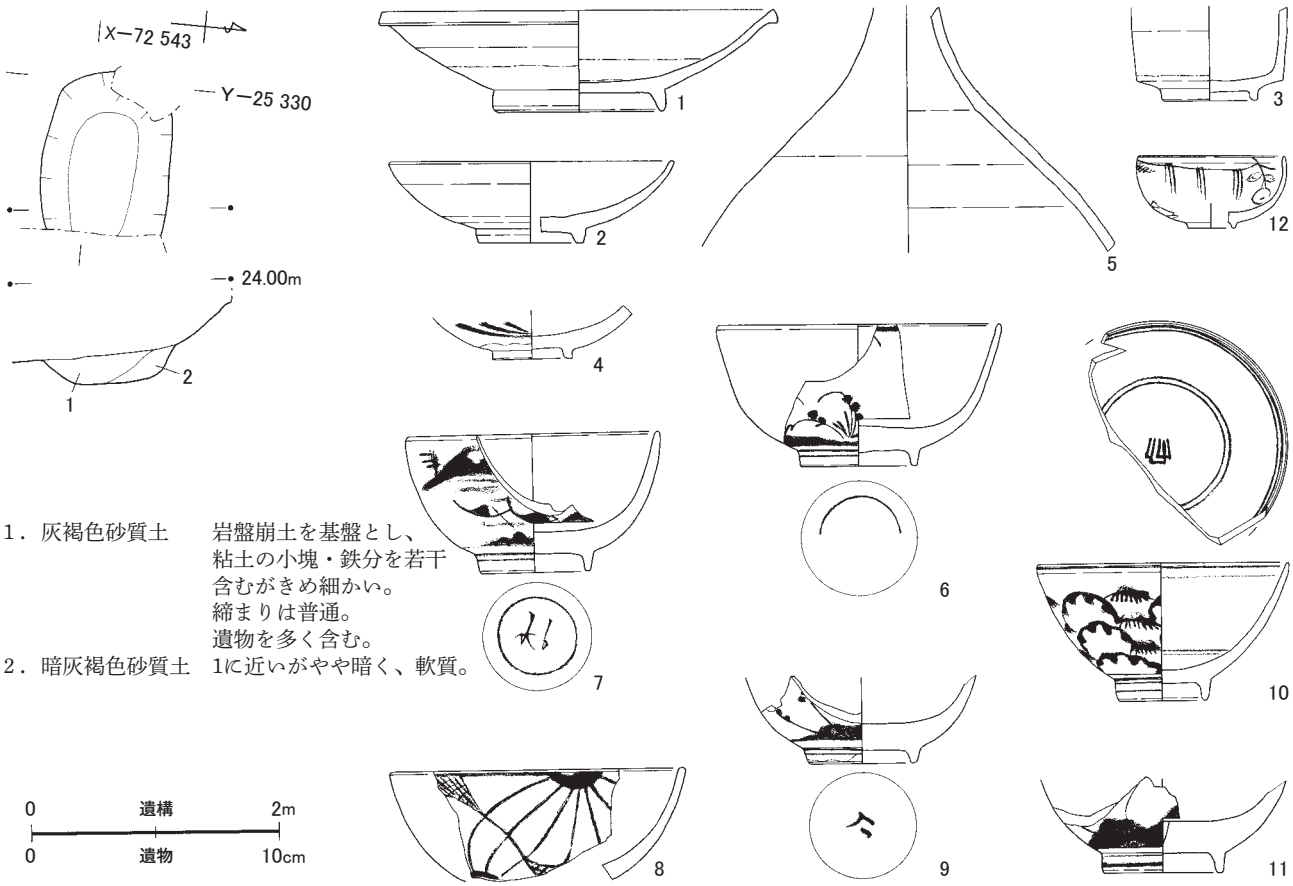


図６　土坑１，同出土遺物

落込み４（図５・７）

概要：山裾の平坦部に開けられた細長い大型の穴　**位置**：X－72 541.96 ～－72 543.80　Y（－25 323.39）～（－25 326.68）　**規模**：長さ（304）cm×幅225cm×深さ30cm　**底面標高**：226. 2cm　**平面形**：長方形か　**断面形**：浅い逆台形　**主軸方位**：（N－84°－E）　**充填土**：図4に記載　**重複関係**：P.30に切られる　**出土遺物（図7）**：瀬戸美濃か碗（７）・瀬戸美濃大窯擂鉢（8）・肥前系磁器小杯（9）・肥前系磁器碗（10・11）　**遺物年代**：８の擂鉢のように大窯期のものも含むが、主体は18世紀前半。　**特記事項**：半人頭大～人頭大凝灰岩と遺物を多く含むが、性格は不明。土坑1と一連である可能性もある。

１面出土遺物（図５・７）

P.2出土遺物：砥石（5－1）　**P.5出土遺物**：関西系陶器小碗（2）　**P.6出土遺物**：瀬戸美濃陶器灯明皿（3）　**P.8出土遺物**：堺擂鉢（4）　**P.9出土遺物**：瀬戸美濃陶器碗（5）・肥前系磁器茶呑碗（6）・砥石中砥（7）　**P.13出土遺物**：土師器皿ロクロ種小型（8）・肥前系磁器くらわんか碗（9）　**P.14出土遺物**：肥前系磁器広東碗（10）　**Ⅰ区１面上出土遺物**：肥前系磁器茶呑碗（11）　**遺物年代**：肥前系磁器は18世紀後半～ 19世紀初頭が主体。瀬戸美濃灯明皿は18世紀後半～ 19世紀前半。

Ⅱ区１面上出土遺物（図７）：瓦器筒形製品（1）・瀬戸美濃灯明皿（2）・瀬戸美濃腰錆碗（3）・瀬戸美濃灯明受皿（3）　**遺物年代**：２と４の灯明皿は18世紀後半～ 19世紀前半、３の腰錆碗は18世紀後半のもの　**特記事項**：全体として江戸後期の様相を呈する。

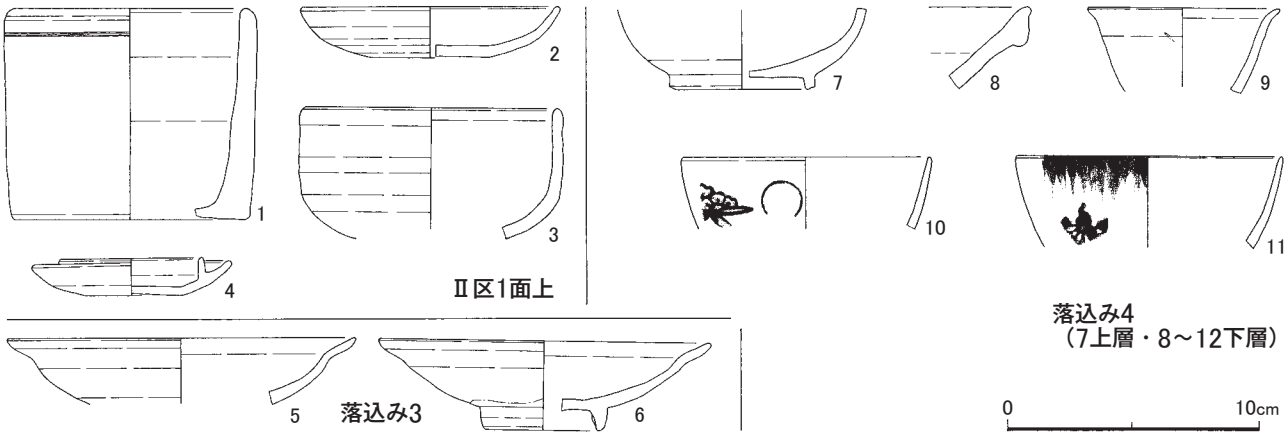


図７　Ⅱ区１面上・同落込み出土遺物

２．２面

溝３（図８）

概要:山裾の岩盤その表面の土との境目に検出された断面Ｖ字形の溝状の窪み。Ⅱ区のみで検出された。**位置：** Ｘ－72 541.60 ～－72 542.60　Ｙ（－25 323.62）～（－25 326.68）　**規模：**長さ（3.08）m×幅55cm×深さ24cm　**底面標高：**22.4m　**平面形：**直線　**断面形：**Ｖ字形　**主軸方位：**（Ｎ－102°－Ｗ）　充填土：図4に記載　特記事項：Ⅱ区のみで検出され、試掘坑中で消滅してⅠ区では確認できなかった。岩盤から土が剥がれた際にできた地割れの一種である可能性もある。

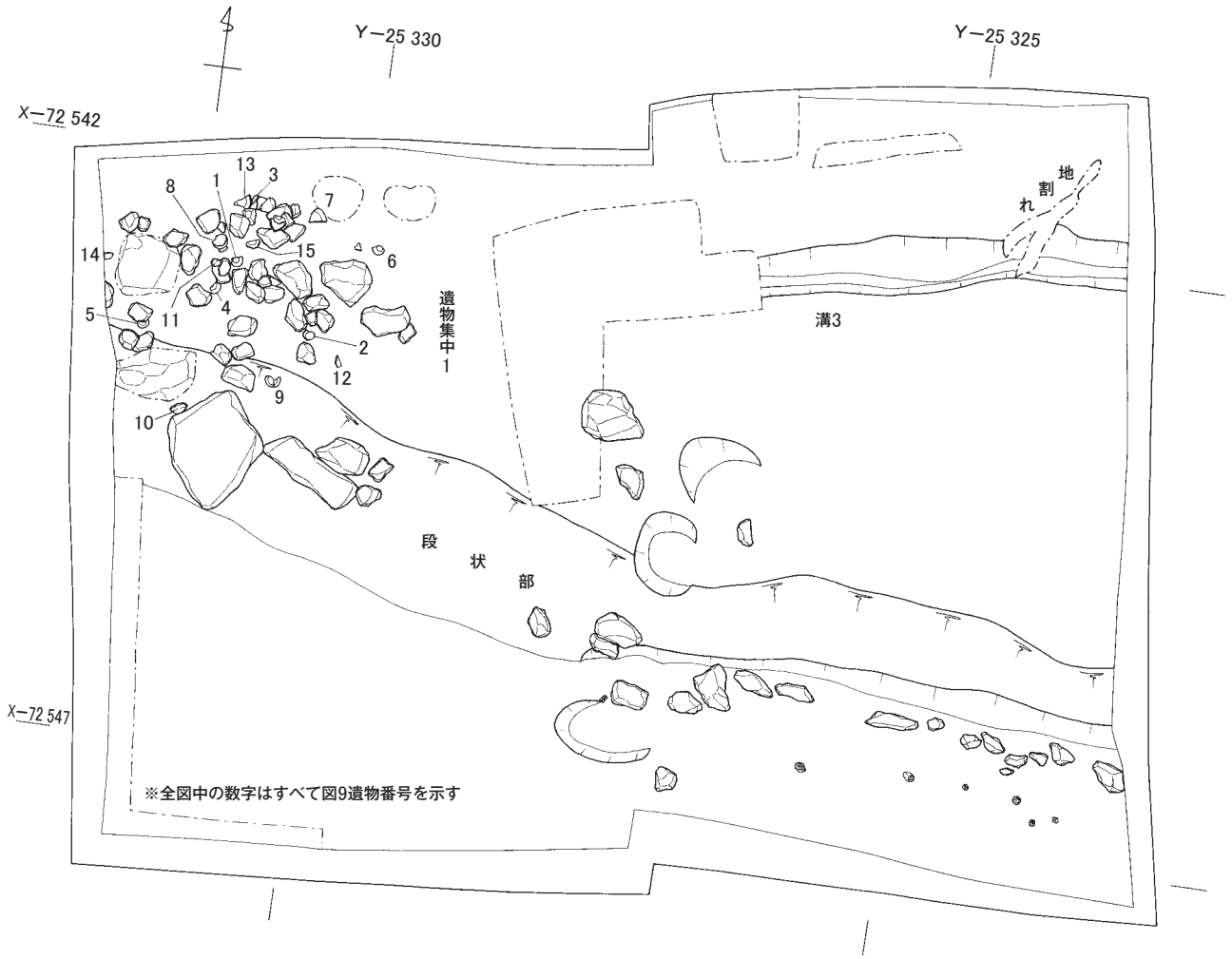
遺物集中１（図８・９）

概要：北西部の高位面に凝灰岩群中に陶磁器が混入　**位置：** Ｘ－72 542.35 ～－72 544.30　Ｙ－25 329.47（集石東端）～（－25 332.18）　**規模：**東西（220）cm×南北195cm　**底面標高：**22.7m（北端）～22.35ｍ（南端）　**出土遺物（図９）：**瀬戸美濃陶器灯明皿（1）・瀬戸美濃陶器鎧湯呑（2）・産地不明陶器蓋（3）・瀬戸美濃陶器灯明受皿（4）・瀬戸美濃陶器香炉（5）・瀬戸美濃陶器蓋（6）・瀬戸美濃陶器擂鉢（7）・肥前系陶器小型壺（8）・瀬戸美濃陶器袋物（9・10）・肥前系磁器くらわんか碗（11・12）・肥前系磁器碗（13・15）・肥前系磁器広東碗（14）　**遺物年代：** 8の肥前系陶器は17世紀後半のものだが、肥前系磁器は18世紀中葉～19世紀初頭のものが主体。瀬戸美濃陶器に19世紀前半代のものが含まれる。　**特記事項:** 1面とさほど変わらない時期に、東南部段下の凝灰岩群とともに何らかの崩落があり、その時に陶磁器が混入していたという状況を示す。ただし混入した原因については、測りがたい。

２面上出土遺物（図８）

Ⅰ区１面下～２面上出土遺物：肥前系磁器小碗（1）・瀬戸美濃陶器広東碗（2）・片刃ビシャン（3）　**遺物年代：** 1の肥前系磁器は18世紀後半、2の瀬戸美濃陶器は19世紀前半　**特記事項：**3は粗く割った石の表面を細かく整える鉄製の工具で、この地区で石の切り出しがおこなわれていた可能性を示す。

Ⅰ区北西部１面下～２面上出土遺物：瀬戸美濃陶器碗（4）・肥前系陶器皿（5）・瀬戸美濃輪禿皿（6）　**遺物年代：**瀬戸美濃陶器のうち4の碗は18世紀後半～19世紀前半、6の皿は18世紀後半、5の肥前系陶器は18世紀前半。



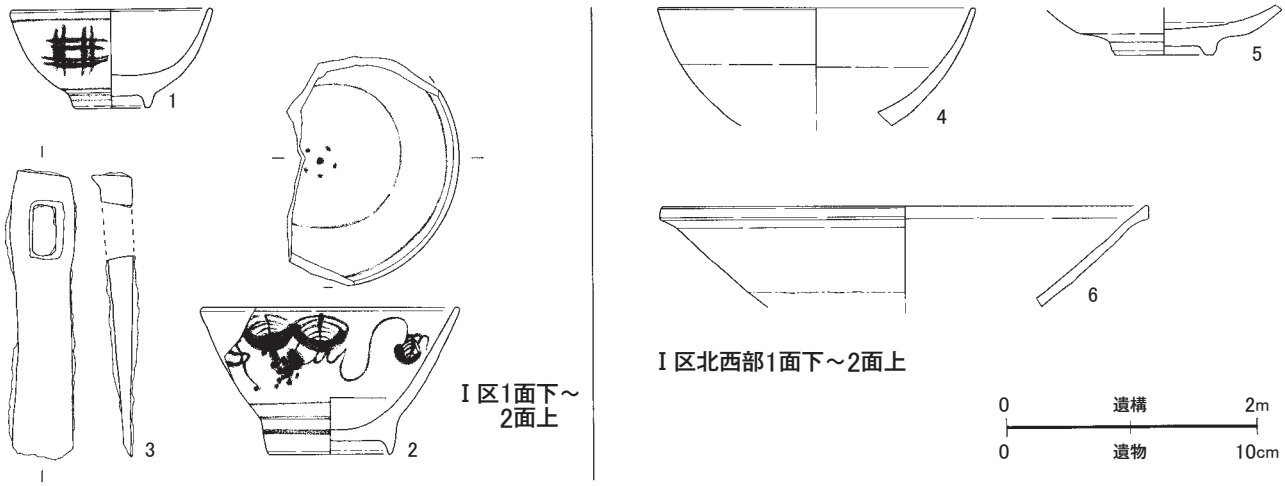


図８　２面遺構全図，同上包含層出土遺物

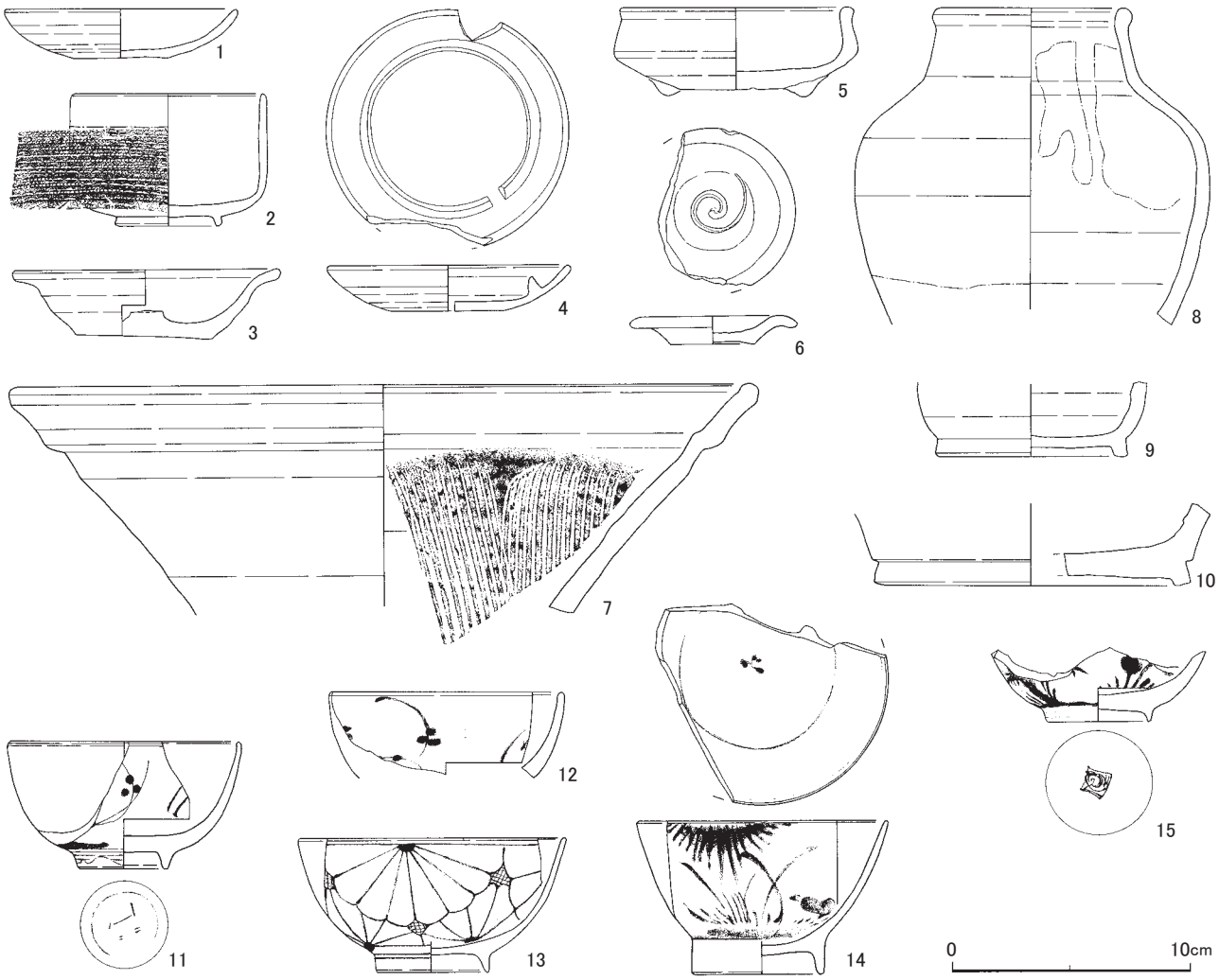


図９　遺物集中１出土遺物

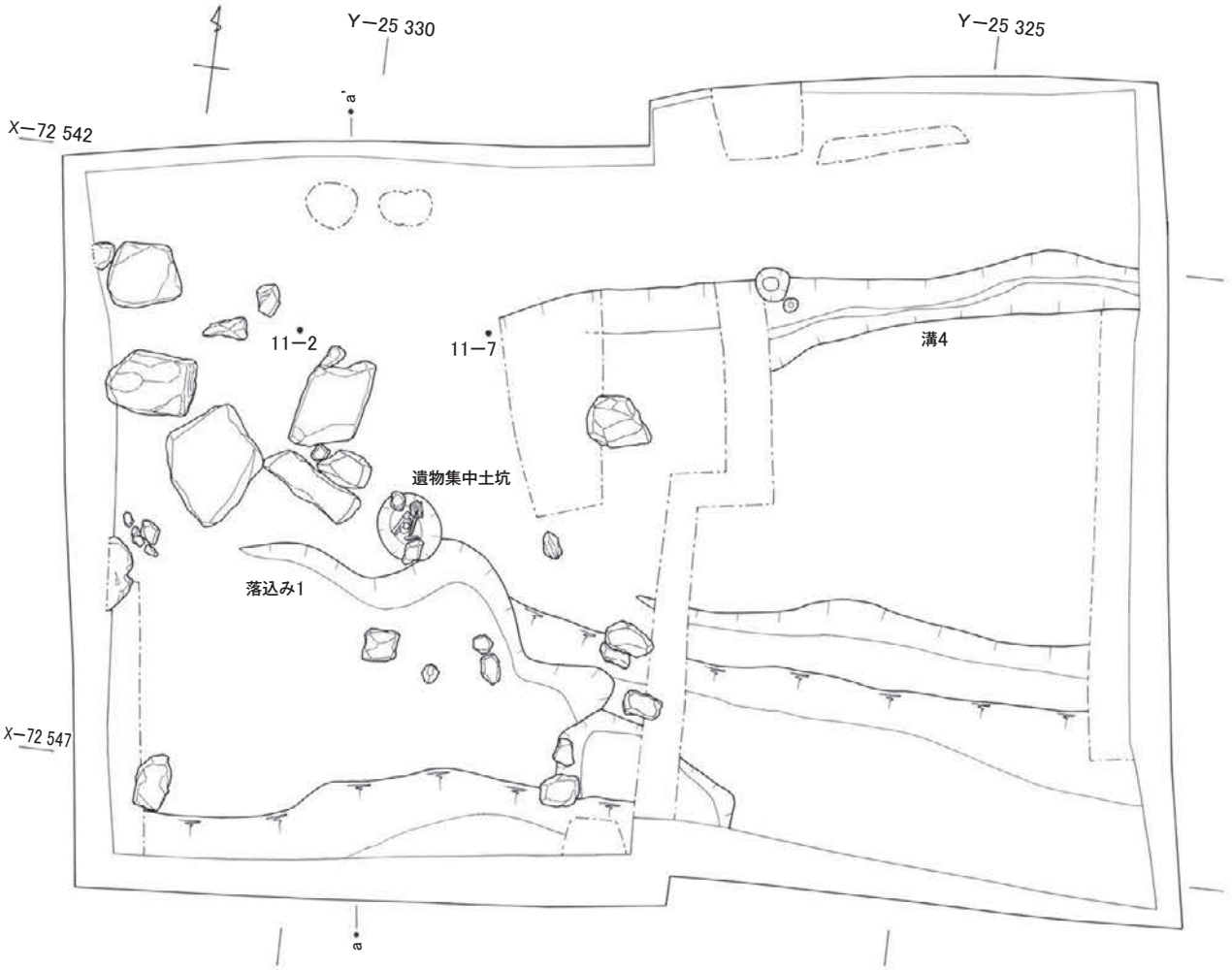
３．３面

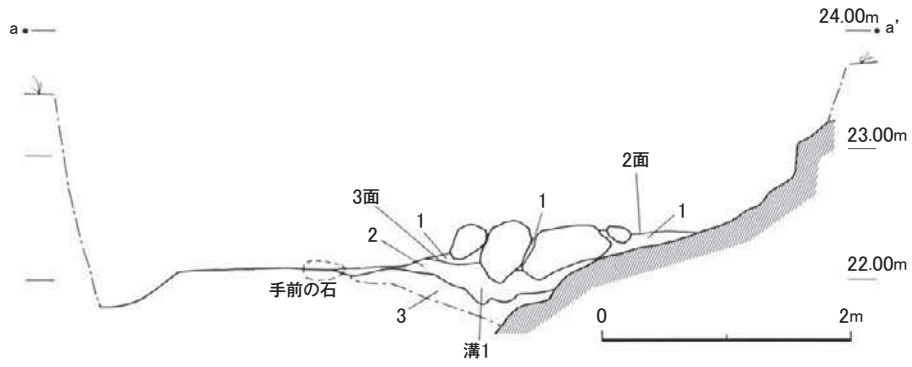
溝４（図10）

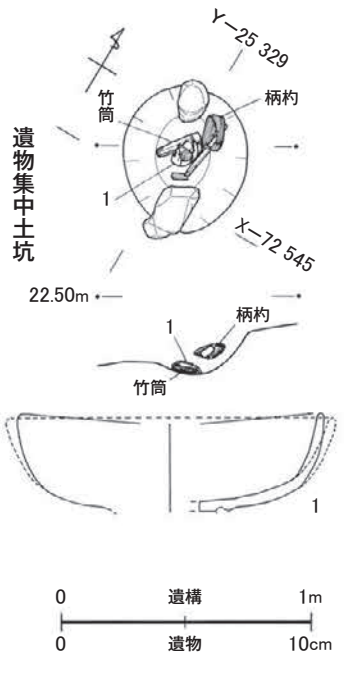
概要：山裾の岩盤とその表面に堆積した土との境目に形成された断面Ｖ字形の溝状の窪み　**位置：**Ｘ－72 541.92 ～－72 540.80　Ｙ（－25 323.70）～（－25 328.80）　**規模：**長さ（525）cm ×幅75cm ×深さ24cm　**底面標高：**22.38m　**平面形：**直線，西に向かって幅が広がる　**断面形：**Ｖ字形　**主軸方位：**（Ｎ－103°－Ｗ）　**充填土：**図４に記載　**特記事項：**Ⅱ区のみで検出され、これも試掘坑中で消滅する。山裾の岩盤から土が剥がれた際にできた地割れの一種である可能性がある。

大型凝灰岩集中部（図10）

概要：大型凝灰岩が数点北西平坦部を中心に集まっている　**位置：**Ｘ－72 542.74 ～－72 545.80　Ｙ－25 327.45 ～（－25 332.20）　**規模：**東西（4.9）m ×南北3.05cm　**底面標高：**22.25m（高位面）～ 21.95 m（低位面）　**特記事項：**集中部分周辺にも大型凝灰岩が散見される。崩落によるものか、切り出されたものか不明だが、２面上出土遺物中に石切りに関係する工具（図８－３「片刃ビシャン」）が出土していることから、後者の可能性がある。







1．暗灰褐色砂質土　岩盤崩土を基本とし、青灰色泥岩細片を含む。木片散見。
2．灰褐色粘質土　　少量の炭化物を含む。締まりやや弱い（溝1）。
3．灰黄褐色粘質土　青灰色の砂（岩盤崩土）を大量に含む（4面構成土）。

図10　3面遺構全図，土層断面・遺構

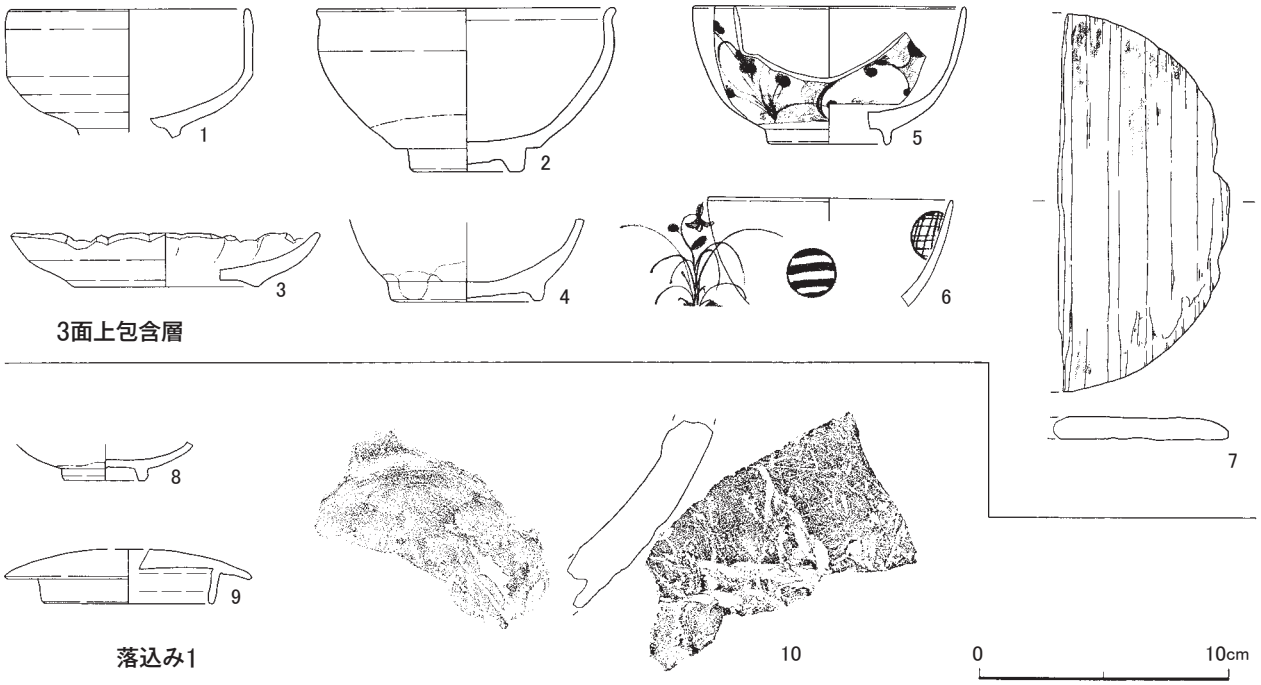


図11　3面上包含層・落込み1出土遺物

遺物集中土坑（図10）

概要：曲物の柄杓・漆器椀・竹筒等の入った円形土坑　**位置**：X－72 544.37～－72 545.13　Y－25 28.77～－25 329.23　**規模**：長さ56cm×幅50cm　深さ17cm　**底面標高**：63cm　**平面形**：円形　**断面形**：皿形　**主軸方位**：(N－26°－W)　**充填土**：灰褐色弱粘質土　**出土遺物**：漆器椀(1)・曲物柄杓(復元不可のため図化不能)・竹筒(復元不可のため図化不能)　**特記事項**：柄杓や竹筒については材質が脆弱なため復元できなかったが、碗とともに一つの穴に一緒に埋められているので、液体とその補給に関連した道具が集められているといえるかもしれない。

落込み1（図10・11）

概要：Ⅰ区中央やや西域から東南角に向かって落ちる段差　**出土遺物（図11）**：関西系陶器碗(8)・関西系陶器土瓶蓋(9)・産地不明陶器(10)　**遺物年代**：8は18世紀後半か、9は19世紀代　**特記事項**：人為的なものではなく、山裾に形成された自然の傾斜が部分的にやや急になったものと判断した。

3面上包含層出土遺物（図11）

瀬戸美濃陶器せんじ(1)・瀬戸美濃陶器天目碗(2)・瀬戸美濃陶器稜花皿(3)・瀬戸美濃陶器袋物(4)・肥前系磁器くらわんか碗(5)・肥前系磁器丸碗(6)・曲物底(7)　**遺物年代**：瀬戸美濃陶器は17世紀初頭から18世紀後半～19世紀初頭のものが出土。肥前系磁器は17世紀末～18世紀中葉のものが出土。

4．4面

溝1（図12）

概要：山裾の岩盤とその表面に堆積した土との境目に形成された断面V字形の溝状の窪み　**位置**：X－72 541.90～－72 545.40　Y（－25 323.45）～（－25 332.03）　**規模**：長さ（8.25）m×幅3.5m×深さ37cm　**底面標高**：21. 68m　**平面形**：不定形，東に向かって幅が広がる　**断面形**：不定逆台形～V字形　**主軸方位**：(N－(92)°－W)　**充填土**：図4に記載　**出土遺物**：曲物底(1)　**特記事項**：山裾の排水溝の可能性はあるが、平面形・断面形とも不安定で、岩盤から土が剥がれた際にできた地割れの一種である

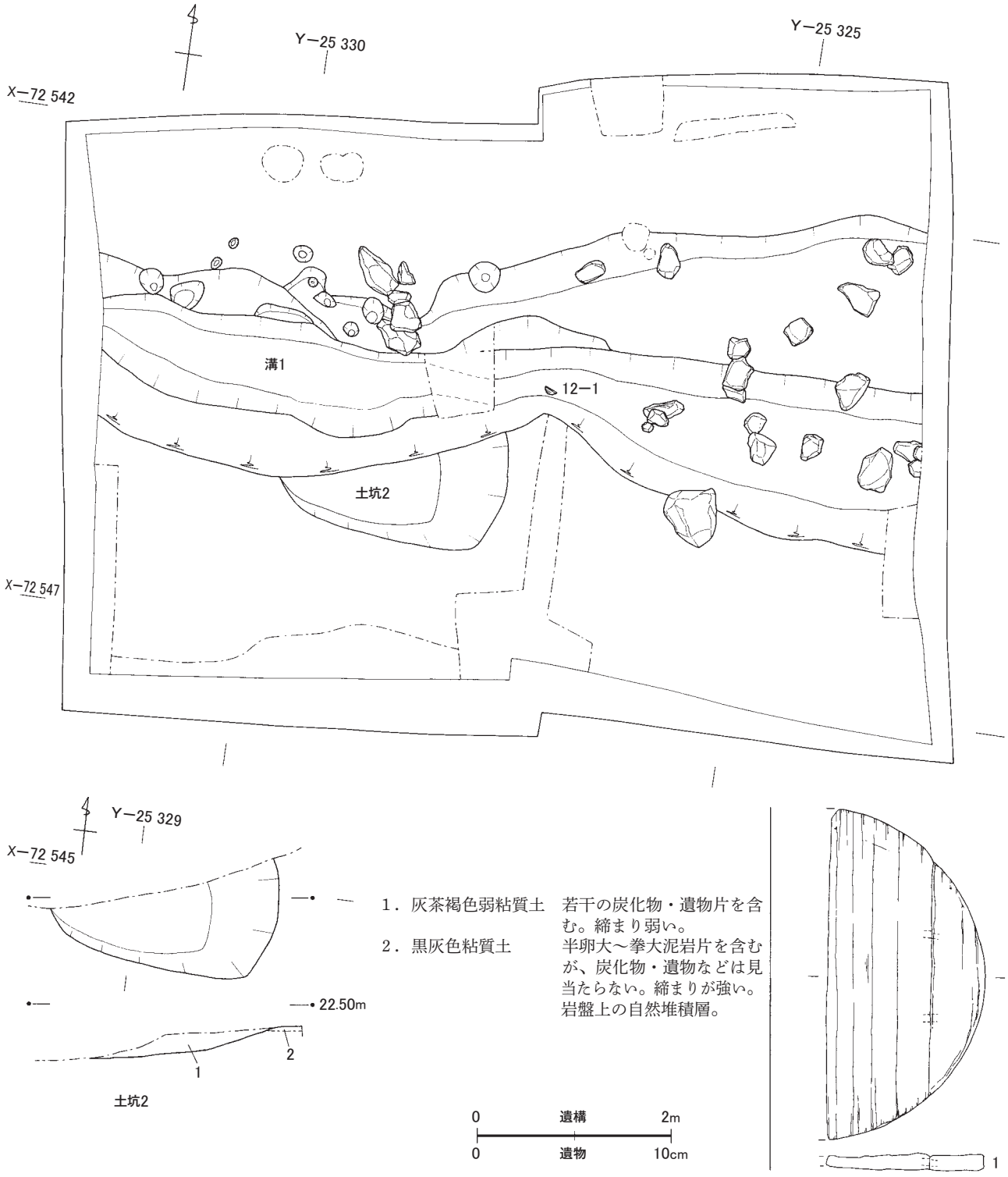


図12　4面遺構全図，土坑2・4面出土遺物

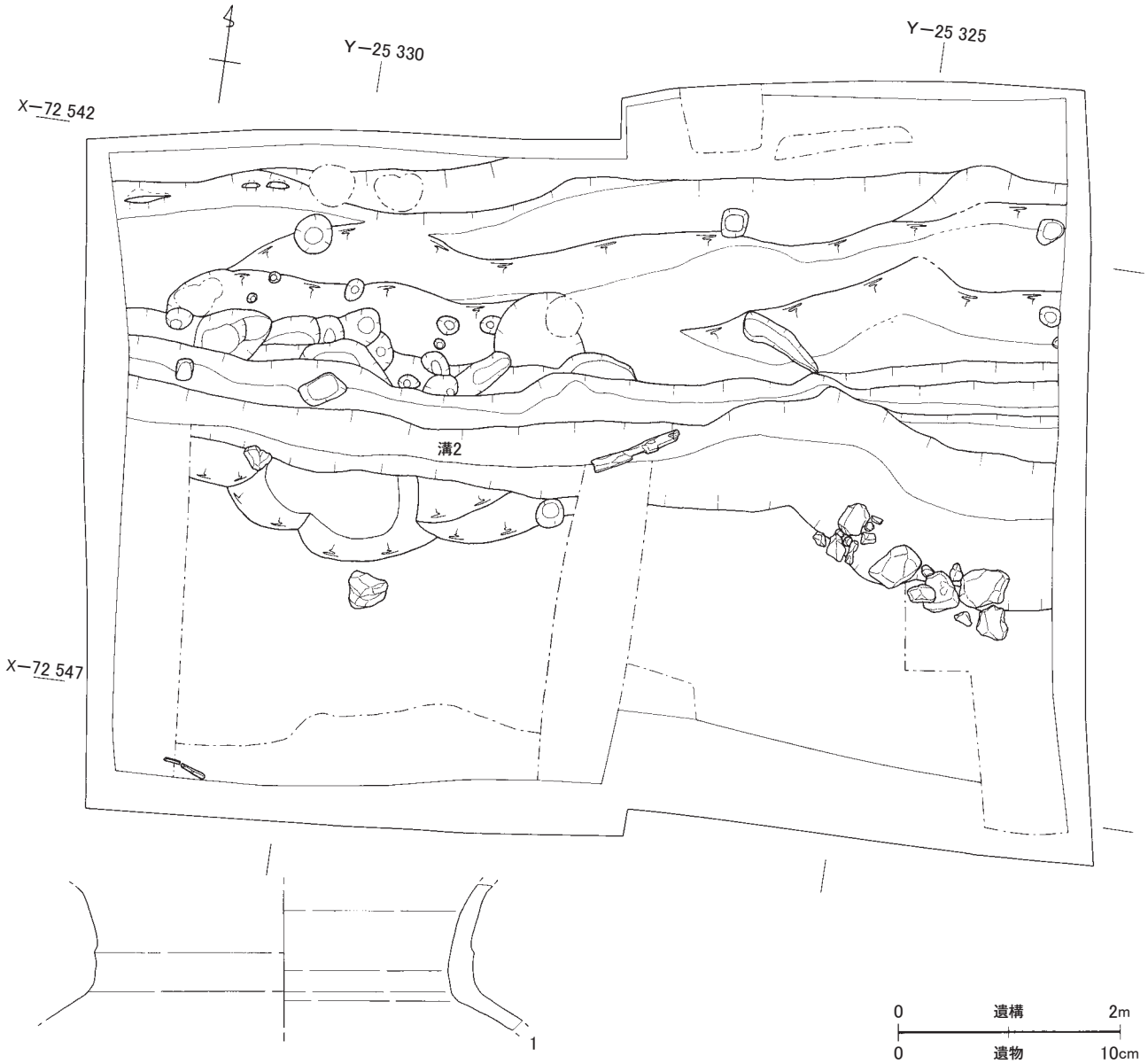


図13　5面遺構全図，溝2出土遺物

可能性もある。

土坑2（図12）

概要：岩盤際の溝に接した浅い土坑　**位置：**X－72 544.67 ～（－72 545.95）　Y（－25 327.54）～（－25 339.85）　**規模：**長さ（225）㎝×（80）㎝×深さ30㎝　**底面標高：**21.95m　**平面形：**隅丸長方形　**断面形：**皿形　**主軸方位：**（N－88°－W）　**充填土：**図12参照　**重複関係：**溝1と接するが、切合いは確認できず　**出土遺物：**図化可能なものなし　**特記事項：**落込み角度がきわめて浅く、人為によるものかどうか不明

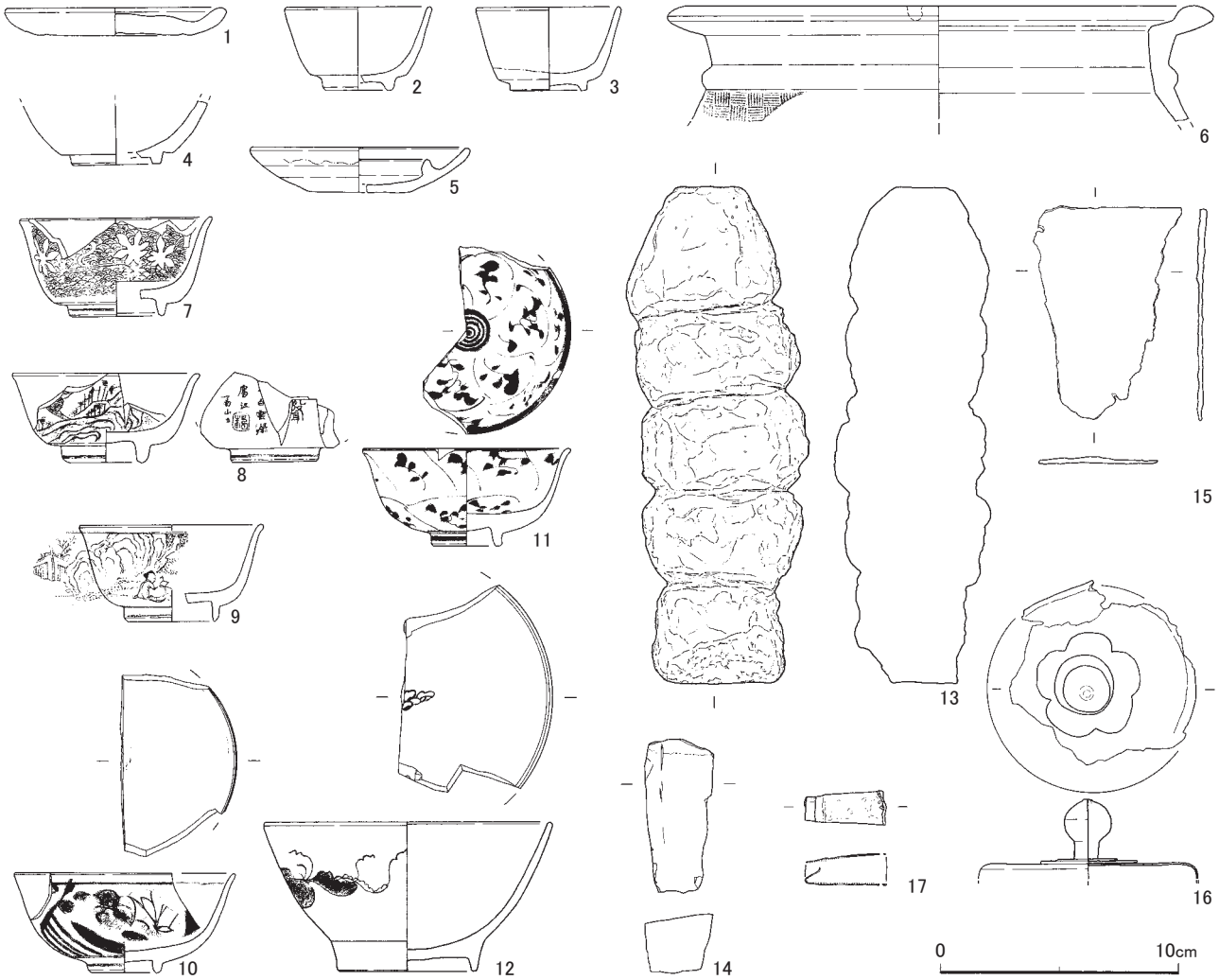


図14　表採および攪乱坑等からの採集品

5．5面

溝2（図13）

概要：山裾の岩盤とその表面に堆積した土との境目に形成された断面V字形の溝状の窪み　**位置**：X－72 543.82 ～－72 545.30　Y（－25 323.30）～（－25 332.25）　**規模**：長さ（8.22）m×幅141cm×深さ73cm　**底面標高**：21. 32m　**平面形**：不定形，東に向かって幅が広がる　**断面形**：V字形　**主軸方位**：N－91°－W（西側3分の2）／N－70°－W（東側3分の1）　**充填土**：図4に記載　**出土遺物**：図化可能なものなし　**特記事項**：山裾の排水溝の可能性はあるが、平面形・断面形とも不安定で、岩盤から土が剥がれた際にできたものである可能性もある。

5面出土遺物（図13）：土師器甕（1）

6．表採および攪乱坑からの採集品（図14）

土師器皿ロクロ種小型（1）・関西系陶器小碗（2・4）・関西系陶器小杯（3）・瀬戸美濃陶器灯明受皿（5）・瓦器火鉢(6)・瀬戸美濃磁器湯呑碗(7 ～ 11)・肥前系磁器広東碗(12)・石製一石五輪塔(13)・砥石中砥(14)・鉄鍋（15）・金銅製仏具蓋（16）・金銅製筒形製品（17）

（馬淵）

表１　出土遺物観察表（１）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	P.2	砥石	遺存長（7.2)cm　幅4.55cm　残存厚（0.9)cm　黄灰白色　側面に切出し痕　砥面１面 上野産砥沢砥　仕上砥になると思われるが砥面が剥離しているため不明
2	P.5	関西系陶器 小碗	口径（6.7)cm　回転ロクロ成形　胎土は黄灰色で良土 釉薬は内面～外面中部まで茶褐色の鉄釉　18cか？
3	P.6	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径（8.3)cm　回転ロクロ成形　胎土は灰白色で良土 釉薬は茶褐色の鉄釉が薄く施釉　18c後～ 19c前
4	P.8	堺 擂鉢	底部片　輪積成形　胎土は赤橙色で長石・礫・白色粒子を含む　緻密　ヨコナデ 外面は二次焼成で煤付着　底部に離れ砂　内面に６条の櫛目　内面は使用により磨耗　18c頃
5	P.9	瀬戸美濃陶器 碗	底径（3.05）cm　右回転ロクロ成形　胎土は灰白色で良土　削り出し高台、露胎 釉薬は淡水青色で透明、気泡　施釉やや厚い　外面下部も一部露胎　18c
6	P.9	肥前系磁器 茶呑碗	底径（3.7）cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻　削り出し高台　染付　手描き 外面に竹、下部に圏線　内底部に二重圏線、五弁花　高台に圏線　18c後半
7	P.9	砥石 中砥	長7.9cm　幅2.35cm　厚1.7cm　黄灰白色　砥面４面　上野砥（小日向）
8	P.13	土師器皿 R種小型	口径（8.95)cm　底径（4.6）cm　器高1.6cm　回転ロクロ　外底部回転糸切り 口縁部シメナデ　胎土は淡橙色で雲母・白色粒子・赤色粒子を含む　近世
9	P.13	肥前系磁器 くらわんか碗	口径（9.6)cm　底径（4.2）cm　器高5.0cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は白色で精良堅緻 染付　外面草花　高台外側二重圏線、中央に大明年製　波佐見系　18c後半
10	P.14	肥前系磁器 広東碗	口径（12.25)cm　底径（5.55）cm　器高7.1cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は精良堅緻 染付　内面上下部に圏線、底面に寿　外面に捩子花　高台上部に釉切れ　焼接ぎあり 高台外側二重圏線、内面に上絵文字「山ノ内かくや」とあり、焼接ぎ職人による署名か？ 有田か　1780 ～ 1810年
11	Ⅰ区 1面上	肥前系磁器 茶呑碗	口径（7.0)cm　底径（3.2）cm　器高5.65cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　染付　コンニャク印判 外面に竹、外底面に折松葉・雨龍　内面口縁下三重圏線、底面圏線、中央に五弁花　18c後半
図6-1	土坑1	瀬戸美濃陶器 輪禿皿	口径（15.6)cm　底径6.5cm　器高4.05cm　右回転ロクロ成形　体部口縁下より回転ヘラ削り 付高台　胎土は灰白色で白色粒子を含む良土　　釉薬は透明で薄い灰緑色、貫入 外面中央～高台露胎　内底面は蛇の目釉剥ぎ　連房式登窯編年第８小期のものに器形似　18c後半か
2	土坑1	肥前系陶器 皿	口径（11.3)cm　底径（4.2）cm　器高3.3cm　回転ロクロ成形　外面下位回転ヘラ削り　削り出し高台 胎土は淡橙灰白色の良土　内面は半透明で黄灰色の銅緑釉、外面中は透明釉で施釉 内面一部青灰色　内底面蛇の目釉剥ぎ　嬉野市内野山　18c前半
3	土坑1	瀬戸美濃陶器 袋物か	底径（3.5）cm　右回転ロクロ成形　付高台か　胎土は橙白色で良土 釉薬は透明で薄緑灰色、外面の施釉　18c代か
4	土坑1	瀬戸美濃陶器 小碗	底径（3.2）cm　回転ロクロ成形　付高台　胎土は橙白色でやや粗土 釉薬は薄黄灰色、貫入　外面に朱・薄緑の上絵、一部剥れている　高台露胎　18c代
5	土坑1	備前か 船徳利	胴部片　回転ロクロ成形　胎土は赤橙色で良土　胴部ハケナデ　内外面に鉄泥がかかる 外面は暗茶褐色の鉄系釉薬、ほぼ剥れている　17c後半～ 18cか？
6	土坑1	肥前系磁器 碗	口径（11.2)cm　底径（4.6）cm　器高5.7cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　染付　外面草花文　高台外側に二重圏線、内面に圏線　18c前半
7	土坑1	肥前系磁器 くらわんか碗	口径（9.9)cm　底径（4.4）cm　器高5.58cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　染付　外面に船・山水画 高台外側二重圏線、内面に圏線・大明年製の崩れたもの　波佐見系　18c第２～３
8	土坑1	肥前系磁器 碗	口径（11.6)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 染付　外面は菊花重ねの間に格子　18c第４　上質
9	土坑1	肥前系磁器 くらわんか碗	底径（4.2）cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は灰白色で精良堅緻 染付　外面に雪の輪　高台側面に圏線、中央に大明年製 高台端部に重焼きの際の砂付着　波佐見系　18c後半
10	土坑1	肥前系磁器 小広東碗	口径（9.9)cm　底径（3.45）cm　器高5.6cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　染付　外面は雪の輪・雪持ち笹　内面口縁下に二重圏線 内底面に二重圏線・源氏香　高台側面に二重圏線　波佐見ではない　1770年代
11	土坑1	肥前系磁器 くらわんか碗	底径（4.65）cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は白色で精良堅緻 染付　高台中央に大明年製、側面に二重圏線　波佐見系　18c後半
12	土坑1	肥前系磁器 小杯	口径（6.55)cm　底径（1.8）cm　器高2.9cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　色絵　外面に赤上絵、しめ縄・羽子板　18c
図7-1	Ⅱ区 1面上	瓦器 筒形製品	口径（9.2)cm　底径（9.3）cm　器高8.5cm　輪積成形　ヨコナデ　黒色処理 胎土は雲母・白色粒子・赤色粒子を含む　在地産
2	Ⅱ区 1面上	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径（10.2)cm　底径（4.8）cm　器高2.05cm　回転ロクロ成形　外底部回転ヘラ削り 胎土は灰色で良土　茶褐色の鉄釉がかかる　内外底部に重焼き痕　18c後～ 19c前
3	Ⅱ区 1面上	瀬戸美濃陶器 腰錆碗	口径（10.0)cm　回転ロクロ成形　胎土は灰白色で良土 釉薬は内面～外面口縁下まで透明で薄灰緑色の灰釉、内面に貫入　外面下部は茶褐色の鉄釉　18c後
4	Ⅱ区 1面上	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径7.8cm　底径4.0cm　器高1.5cm　右回転ロクロ成形　外底部・外面下部回転ヘラ削り 胎土は灰色で良土　釉薬は茶褐色の鉄釉　釉を指で広げた痕跡あり　内外底部に重焼き痕 18c後～ 19c前
5	落込み3	肥前系磁器 折縁皿	口径（13.9)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 釉薬は不透明で淡緑乳白色の青磁釉　17c後半　安価製品　波佐見
6	落込み3	肥前系磁器 折縁皿	口径（13.2)cm　底径（4.7）cm　器高3.6cm　左回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　釉薬は不透明で淡緑乳白色の白磁釉、青磁の可能性もあり 内底面は蛇の目釉剥ぎ　高台内面に重焼きの際の砂付着　安価製品　波佐見　17c後半
7	落込み4	瀬戸美濃か 陶器碗	底径（5.3）cm　回転ロクロ成形　削り出し高台、露胎　胎土は黄灰色で良土 釉薬は透明で黄灰白色、貫入あり　外面に模様は見当たらないがく呉須絵があるか 京焼風陶器　17c後半～ 18c初
8	落込み4	瀬戸美濃大窯 擂鉢	口縁部片　輪積成形　ヨコナデ　胎土は橙灰白色 器表は暗褐色の鉄釉でザラついている　大窯第２段階あたりか
9	落込み4	肥前系磁器 小杯	口径（7.5)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 染付　外面は蘭のような植物文　17c後半

表２　出土遺物観察表（２）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
10	落込み4	肥前系磁器 碗	口径（9.8)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 染付　釉薬に気泡多い　コンニャク印判　外面に花・丸文　18c前
11	落込み4	肥前系磁器 碗	口径（10.5)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 染付　外面にコンニャク印判で植物文、手描きで雨降文　有田　18c前半～享保くらいまで
図8-1	Ⅰ区　1面下～ 2面上	肥前系磁器 小碗	口径（7.9)cm　底径（2.95）cm　器高4.0cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 削り出し高台　染付　高台側面に二重圏線　外面上下に圏線、間に文　18c後半
2	Ⅰ区　1面下～ 2面上	瀬戸美濃陶器 広東碗	口径（10.15)cm　底径（4.8）cm　器高5.9cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は灰白色で良土 呉須絵　内面上下に圏線、底面に五弁花　高台側面に圏線　19c前
3	Ⅰ区　1面下～ 2面上	片刃ビシャン	長11.65cm　幅2.9cm　厚1.2高cm　切り出した石を整形する道具　カタハとも
4	Ⅰ区北西部 1面下～２面上	瀬戸美濃陶器 碗	口径（12.6)cm　左回転ロクロ成形　体部外面下半回転ヘラ削りか　胎土は灰白色で良土 釉薬は透明で薄淡緑灰色の灰釉、貫入あり、施釉薄い　18c後～ 19c前か
5	Ⅰ区北西部 1面下～２面上	肥前系陶器 皿	底径（3.9）cm　回転ロクロ成形　体部下半回転ヘラ削り　削り出し高台　胎土は灰白色で精良土 釉薬は半透明で緑灰色の銅緑釉、一部青乳白色　内底面は蛇の目釉剥ぎ 高台露胎、重焼きの際の砂付着　嬉野市内野山　18c前半
6	Ⅰ区北西部 1面下～２面上	瀬戸美濃陶器 輪禿皿	口径（19.3)cm　回転ロクロ成形　胎土は灰白色で良土 釉薬は透明で淡薄水青灰白色、貫入あり、内部中～外部中まで施釉　18c後半か
図9-1	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径（9.7)cm　底径（4.0）cm　器高2.1cm　回転ロクロ成形　外底部回転ヘラ削り 胎土は灰色で良土　釉薬は茶褐色の鉄釉　内底部に重焼き痕　18c後～ 19c前
2	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 鎧湯呑碗	口径（8.0)cm　底径（4.2）cm　器高5.7cm　回転ロクロ成形　付高台　胎土は灰白色で良土 内面～外面口縁下部まで黒釉、鉄泥塗る　回転施文具により施文　茶のみ用　19c前～中葉
3	遺物集中1	産地不明陶器 蓋	口径（11.1)cm　底径（5.7）cm　器高2.8cm　左回転ロクロ　外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で白色粒子を含む　内底面が隆起　鉄泥塗る 志戸呂から関東にかけての窯業地の製品　19c
4	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 灯明受皿	口径10.0cm　底径4.9cm　器高1.9cm　回転ロクロ成形　外底部・体部外面下位回転ヘラ削り 胎土は灰白色で良土　釉薬は茶褐色の鉄釉　18c後～ 19c前
5	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 香炉	口径（9.7)cm　底径（5.9）cm　器高3.5cm　回転ロクロ成形　胎土は黄灰白色で良土 黒褐釉　内面下部～底部露胎　三脚　キセル灰落としに転用か　17 ～ 18c
6	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 蓋	口径（6.0)cm　底径3.6cm　器高1.2cm　右回転ロクロ成形　外底部回転糸切り、露胎 胎土は橙灰白色で黒色粒子・赤色粒子を含む　上面は鉄釉、渦巻き文 肩衝小壺の蓋　17c中葉～ 18c代
7	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 擂鉢	口径（31.0)cm　輪積成形　胎土は黄灰白色で白色粒子・赤色粒子・長石を含む 内面に13条の櫛目　茶褐色の鉄釉　連房式登窯の第6小期　18c前半
8	遺物集中1	肥前系陶器 小型壺	口径（7.7)cm　回転ロクロ整形　胎土は淡橙色で白色粒子を含む良土　内外面に鉄泥 外面上部に化粧土・下部に鉄泥をハケ塗り後、上部に不透明で淡青緑の緑釉（銅）・下部に透明釉を施釉 内面は灰釉、上部は灰釉と鉄泥が重なり褐色になっている 唐津焼　17c後半
9	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 袋物	底径（7.8）cm　回転ロクロ成形　外底部回転ヘラ削りのち回転ナデ　付高台、露胎 胎土は黄灰白色で白色粒子を含む良土　釉は暗茶褐色の鉄釉　内底面に自然降灰 17c後～ 18c代
10	遺物集中1	瀬戸美濃陶器 袋物	底径（12.3）cm　輪積成形のち回転ロクロ整形　外底部回転ナデ　付高台、露胎 胎土は橙灰白色で長石・白色粒子・礫を含む　内面に茶褐色の鉄釉　18c代か
11	遺物集中1	肥前系磁器 くらわんか碗	口径（9.7)cm　底径（3.7）cm　器高5.6cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は白色で精良堅緻 染付　外面に雪の輪　高台内に文か　側面に二重圏線　18c第２～３　　波佐見系
12	遺物集中1	肥前系磁器 くらわんか碗	口径（9.6)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻 染付　外面に蚊屋吊草か・花卉か　波佐見系18c中～末
13	遺物集中1	肥前系磁器 碗	口径11.2cm　底径4.7cm　器高5.7cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は白色で精良堅緻 内底面に目痕3ヶ所（脚付ハマ溶着痕）　染付　外面は菊詰　高台側面二重圏線　1780 ～ 90年頃
14	遺物集中1	肥前系磁器 広東碗	口径（10.4)cm　底径（5.0）cm　器高6.5cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　染付 外面に竹・鳥か　内面上下部圏線　内底面小花　1820が下限か
15	遺物集中1	肥前系磁器 碗	底径（4.1）cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　素地は白色で精良堅緻　嬉野辺りの可能性もある 染付　器表に気泡多い　外面に竹・草花文・雪持ち笹　高台側面に二重圏線、中央に渦福　18c前
図10-1	遺物集中 土坑	漆器 椀	口径（11.9)cm　底径（4.3）cm　器高4.0cm
図11-1	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 せんじ	口径（9.4)cm　回転ロクロ成形　削り出し高台　胎土は灰白色で良土 茶褐色の褐釉と薄緑灰色の灰釉の掛け分け　18c中頃～後半
2	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 天目碗	口径10.8cm　底径4.0cm　器高6.55cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 胎土は黄灰白色で良土　内面～外面中部まで施釉　17c後半～ 18c初頭か
3	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 稜花皿	口径（12.1)cm　底径（7.3）cm　器高2.2cm　胎土は橙灰白色 釉薬は半透明で灰白色の長石釉、気泡・貫入あり、施釉厚い 大窯第４末～登窯第１小期くらいのものか　17c初頭
4	3面 包含層	瀬戸美濃陶器 袋物	底径（5.4）cm　回転ロクロ成形　付高台、露胎　胎土は黄灰白色 釉は暗茶褐色の鉄釉　一部高台まで釉垂れ　18c後～ 19c初か
5	3面 包含層	肥前系磁器 くらわんか碗	口径（10.8)cm　底径（4.7）cm　器高5.5cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　染付　外面に梅・雪の輪　高台側面に二重圏線　波佐見系　18c第２～３
6	3面 包含層	肥前系磁器 丸碗	口径（9.8)cm　回転ロクロ成形　素地は白色で精良堅緻　口錆 染付　外面に丸文・蘭か　1680 ～ 18c初頭　１面落込み4と接合
7	3面 包含層	曲物底	径（17.2)cm　厚0.9cm
8	落ち込み1	関西系陶器 碗	底径3.25cm　回転ロクロ成形　削り出し高台、露胎　胎土は黄灰白色で良土 釉薬は透明で黄灰色、貫入あり　18c後か
9	落ち込み1	関西系陶器 土瓶蓋	最大径（9.9)cm　底径（6.7）cm　回転ロクロ成形　胎土は橙灰白色　内面は露胎 釉薬は不透明で淡青緑の銅緑釉、一部白くなっている　19c
10	落ち込み1	産地不明 陶器	胴部片　胎土は灰色で長石・白色粒子を含む　大型の袋物のような器形になるか

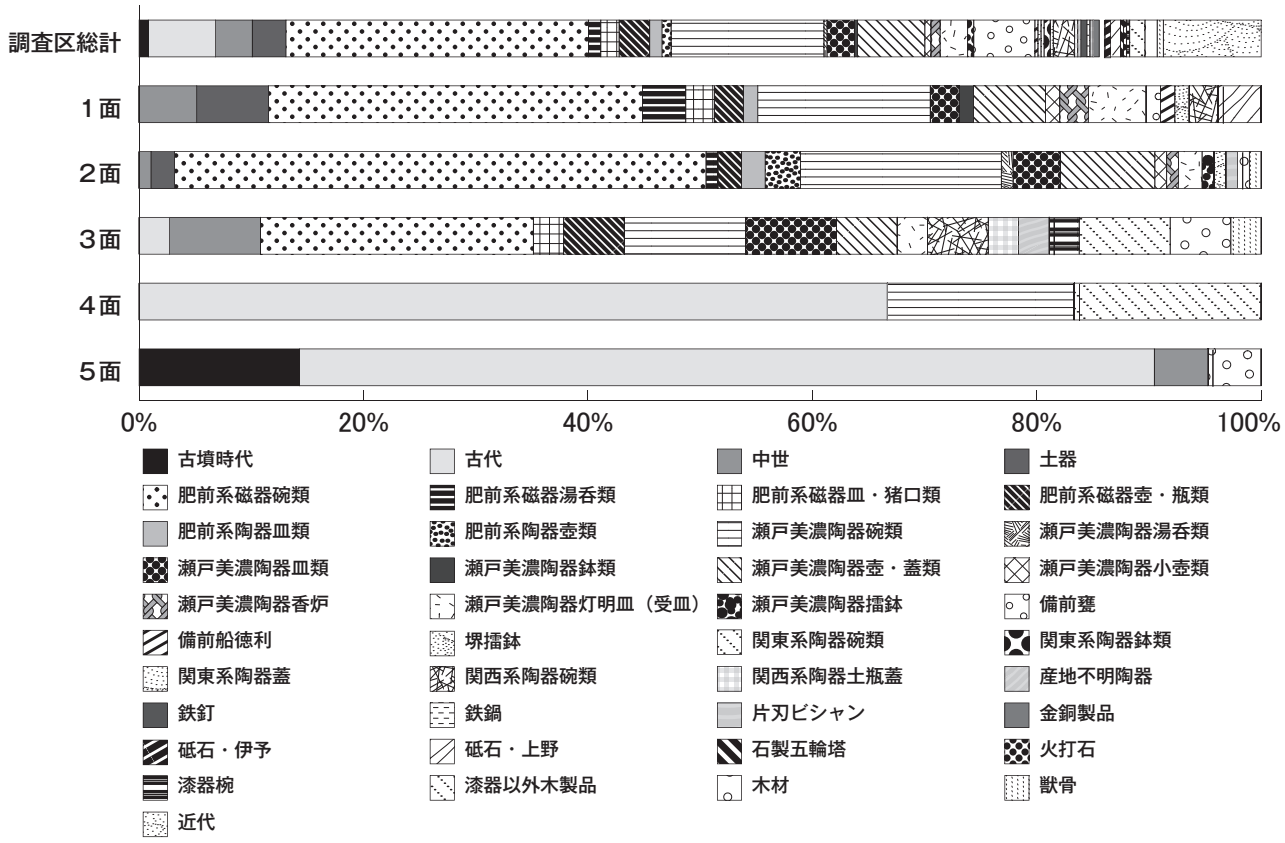
表３　出土遺物観察表（３）

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図12-1	溝1	曲物底	径（15.2)cm　厚0.9cm 竹ないし木製釘により板と板をつないだ痕跡、修理痕の可能性も、蓋の可能性もある
図13-1	溝2	土師器 甕	肩部片　輪積成形　内面ヨコナデ　外面調整明瞭に見えず 胎土は淡橙色で雲母・長石・赤色粒子・礫・白色粒子を含む　古墳時代中期
図14-1	表採	土師器皿 R種小型	口径（9.0)cm　底径（5.0）cm　器高1.2cm　回転ロクロ 胎土は淡橙色で雲母・礫・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	撹乱	関西系陶器 小碗	口径（6.1)cm　底径（2.8）cm　器高3.55cm　回転ロクロ成形　削り出し高台、露胎 胎土は橙灰白色で精良土　釉薬は透明で淡黄灰色、貫入あり　18c代
3	撹乱	関西系陶器 小杯	口径6.0cm　底径2.25cm　器高3.55cm　右回転ロクロ成形　削り出し高台、露胎 胎土は橙灰白色で精良土　釉薬は透明で淡黄灰色、貫入あり　18c代
4	撹乱	関西系陶器 小碗	器高（3.6)cm　回転ロクロ成形　削り出し高台、露胎　胎土は黄白色で精良土 釉薬は透明で乳白色、貫入あり　18c後半
5	撹乱	瀬戸美濃陶器 灯明皿	口径（9.15)cm　底径（4.2）cm　器高1.9cm　回転ロクロ成形　外底部回転ヘラ削り 胎土は灰色で精良土　釉薬は茶褐色の鉄釉　外面に重焼き痕　18c後～19c前
6	撹乱	瓦器 火鉢	口径（21.6)cm　輪積成形のち回転ロクロ整形　胎土は灰色で白色粒子を含む良土 黒色処理　外面胴部に押印　在地
7	撹乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径（8.05)cm　底径（3.8）cm　器高4.2cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　外面に葉・青海波　高台内外に圏線　銅版転写　明治末～大正
8	撹乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径（7.75)cm　底径（3.0）cm　器高3.8cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　高台内外に圏線　銅版転写　明治
9	撹乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径（7.7)cm　底径（3.7）cm　器高4.1cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 高台内外に圏線　銅版転写　明治末～大正
10	撹乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径（9.35)cm　底径（2.75）cm　器高4.25cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 銅版転写　外面に花草か　内面口縁下部に圏線　高台側面に圏線　明治
11	撹乱	瀬戸美濃磁器 湯呑碗	口径（6.8)cm　底径（2.8）cm　器高4.15cm　回転ロクロ成形　削り出し高台、圏線 銅版転写　内外面に唐草　内底面に円圏　口縁下部に圏線　外底面に二重圏線　明治
12	撹乱	肥前系磁器 広東碗	口径（12.0)cm　底径（5.6）cm　器高6.4cm　回転ロクロ成形　削り出し高台 素地は白色で精良堅緻　染付　外面に瓢箪・蔓草　内底面に雲 広東碗では古手（高台広く、高い）　長崎県内の窯の可能性あり　1780 ～ 1810
13	撹乱	石製 一石五輪塔	長21.1cm　最大幅7.4cm　最大厚6.7cm
14	撹乱	砥石 中砥	遺存長（6.5)cm　遺存幅（2.9）cm　厚2.5cm　黄灰色　砥面2面　上野砥（小日向）
15	撹乱	鉄鍋	遺存長（9.0)cm　遺存幅（4.9）cm　厚0.3cm
16	撹乱	金銅製 仏具蓋	口径（9.3)cm　ツマミ最大径2.1c m　ツマミ高2.45cm
17	撹乱	金銅製 筒形製品	遺存長（3.5)cm　最大径1.6cm

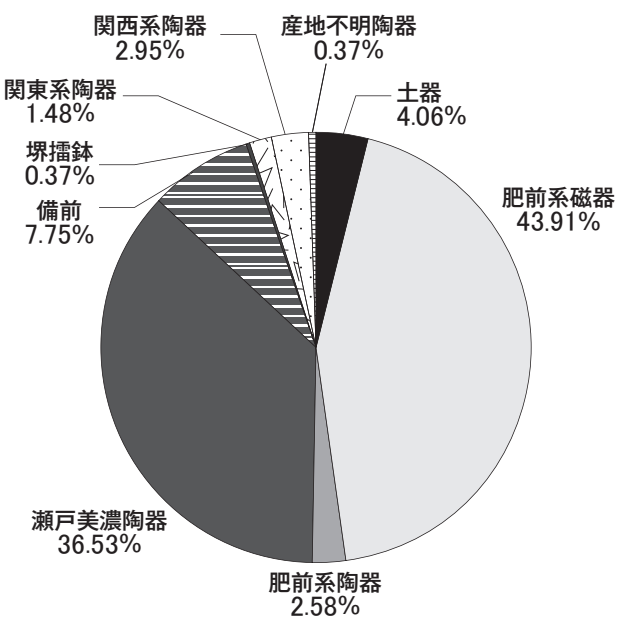
表４　遺物計量表（１）

				1面		2面		3面		4面		5面		総計	
古代以前		古墳土師器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	14.29%	3	0.82%
		古代土師器		0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	4	66.67%	15	71.43%	21	5.72%
		須恵器		0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	4.76%	1	0.27%
中世	土器	土師器皿	R種	1	1.28%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
	国産陶器	渥美・湖西	壺	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			磨耗陶片（甕）	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		常滑	甕	0	0.00%	0	0.00%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%
		瀬戸大窯	擂鉢	1	1.28%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
		備前	擂鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	4.76%	1	0.27%
近世	土器	土師器皿	R種	4	5.13%	2	2.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	9	2.45%
		瓦質土器	火鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	肥前系	磁器	碗類	24	30.77%	39	41.05%	9	24.32%	0	0.00%	0	0.00%	88	23.98%
			小杯類	2	2.56%	6	6.32%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	11	3.00%
			湯呑類	3	3.85%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
			皿類	2	2.56%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	5	1.36%
			壺類	1	1.28%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	1.63%
			猪口	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			瓶類	1	1.28%	1	1.05%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
		陶器	皿類	1	1.28%	2	2.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
			壺類	0	0.00%	3	3.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%
	瀬戸美濃陶器		碗類	12	15.38%	17	17.89%	4	10.81%	1	16.67%	0	0.00%	50	13.62%
			湯呑類	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			皿類	2	2.56%	4	4.21%	3	8.11%	0	0.00%	0	0.00%	9	2.45%
			鉢類	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			壺類	4	5.13%	6	6.32%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	19	5.18%
			小壺類	1	1.28%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
			蓋	1	1.28%	2	2.11%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%
			香炉	2	2.56%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%
			灯明皿（受皿）	4	5.13%	2	2.11%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	9	2.45%
			擂鉢	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
	備前		甕	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	20	5.45%
			船徳利	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	堺		擂鉢	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	関東系陶器		碗類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			鉢類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
			蓋	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	関西系陶器		碗類	1	1.28%	0	0.00%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.82%
			小碗類	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
			土瓶蓋	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	産地不明	陶器	器種不明	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	金属製品	鉄	釘	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
			鍋	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			片刃ビシャン	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		銅	金銅製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
	石製品	砥石	伊予（仕上げ砥）	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			伊予（中砥）	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			上野	3	3.85%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	1.36%
		その他	石製五輪塔	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			チャート（火打石）	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	木製品	漆器	椀	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		漆器以外木製品	曲物	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	1	16.67%	0	0.00%	2	0.54%
			柄杓	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			竹筒	0	0.00%	0	0.00%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	木材		板材	0	0.00%	0	0.00%	2	5.41%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
			竹材	0	0.00%	1	1.05%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			角柱	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	4.76%	1	0.27%
	自然遺物	骨	獣骨	0	0.00%	1	1.05%	1	2.70%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
近代	土器	土器質	焜炉	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			植木鉢	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
		瓦質土器	筒形製品	1	1.28%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
	土製品		人形	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	瓦		平瓦	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	瀬戸美濃	型紙	碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	4	1.09%
			皿	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			小杯	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			瓶類	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			急須・土瓶	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			水滴	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
		銅版転写	碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	1.36%
		手描き	碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
			小杯	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.27%
	産地不明	磁器	器種不明	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.54%
	益子		土瓶	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	7	1.91%
合計				78	100%	95	100%	37	100%	6	100%	21	100%	367	100%

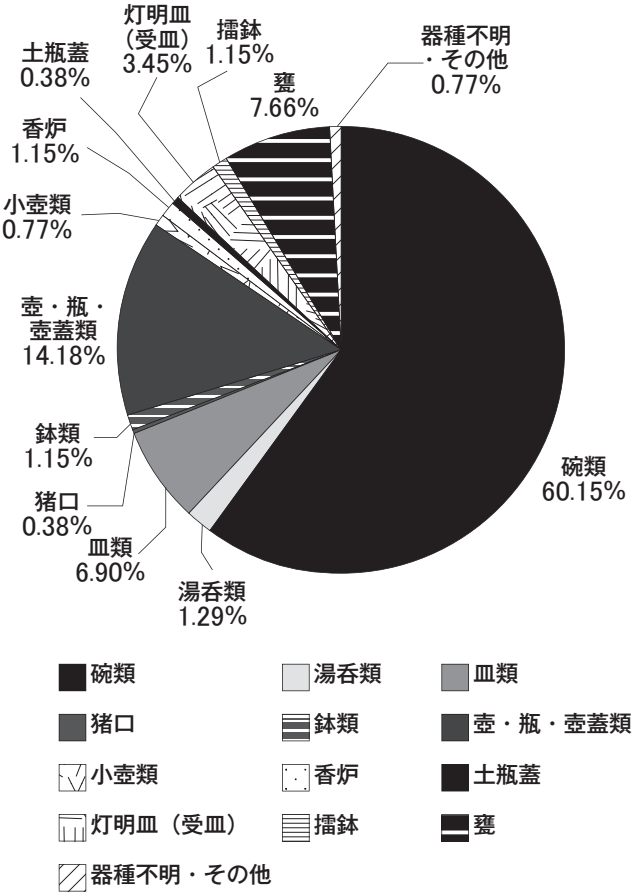
表５　遺物計量表（２）



出土遺物種別構成比



近世土器・陶磁器産地別構成比



近世土器・陶磁器器種別構成比

第四章　変遷と年代―まとめ

安全面への配慮から調査は5面以下に及んでいないが、以下には平坦面がなく、また遺物や炭化物も含まれていなかったので遺構はないものと判断した。

１．遺跡の変遷と年代

１期

第5面がこの地点の人的活動の面として最も早い時期となる。生活面らしい平坦面の形成はみられるものの、明瞭な遺構は観察できなかった。出土遺物は古墳時代の土師器1点のみで、詳細な年代は不明だが、以後の面の人的営為との連続性から、江戸中期以降のいずれかの時期と考えたい。

２期

第4面が相当するが、明確に遺構と認められるものを欠き、また出土遺物も木製曲物底のみなので、年代的決め手を得られない。ただし、後続の面との連続性から、これも江戸中期以降とみられる。

３期

平坦面上に大型の凝灰岩が散乱している。人為によるものか、自然の崩落によるものかは不明であるが、次代２面出土遺物中に石割りに使う工具が出土しているが、本調査地点の西側におけるやぐらの調査の際に石切跡が検出されており（鈴木ほか2000)、この石切跡と関連する可能性も考えられる。岩塊の脇には柄杓と竹筒、漆椀などがまとまって穴の中に入っており、水分補給に関係する何らの意味合いを受け取れる。包含層からの出土遺物には17世紀代まで遡りうるものもあるが、19世紀代のものも含まれており、18世紀中葉以降19世紀初頭と考えられる。

４期

2面が相当する。この面の時期になると多くの遺物に恵まれるようになる。面上には前代と同じように凝灰岩が散乱しており、連続性がうかがえる。またこの岩塊群中には多くの遺物が含まれており、近くに生活の場があることがうかがえる。年代は19世紀前半頃であろう。

５期

1面の時期が相当するが、遺構として明確に認められるものはそれほど多くない。年代は19世紀前半～中頃、すなわち江戸後期であろう。

２．まとめ

この地点での人的営為は決して濃密ではない。生活が始まるのは江戸中期以降、18世紀中葉以降とみていい。これは背後の山の中腹にある事業主Ｔ家の歴代墓地の墓碑年代と、ほぼ符合している。ということは、この地点での人の居住はＴ家によって始まったとみていいのではないか。ただ、本調査区において建物跡は明瞭に確認できなかった。

中世以前に関しては、少数ながら遺物が確認されたが、遺構は深掘りの確認坑においても確認できなかった。古墳中期の土師器や中世遺物の出土については、周辺の福泉遺跡や、福泉やぐらとの関わりが考えられるが調査事例が少ないため詳細は不明である。

（馬淵・沖元）

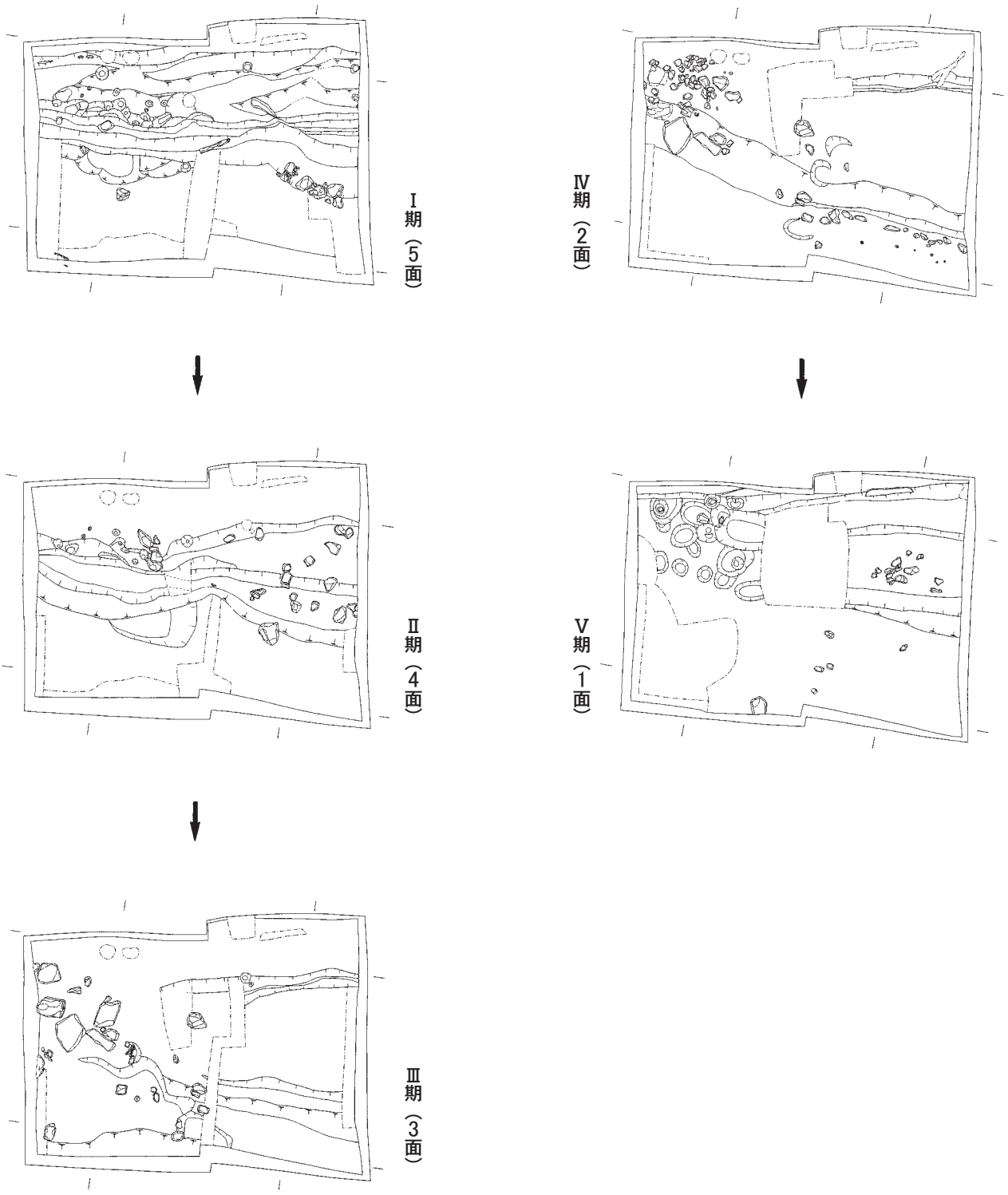


図15　遺構変遷図

図版１

１－１．調査地点遠景（▼の下）

１－２．調査地点北側　山腹近世墓所

１－３．近世墓銘（享保八年）

２－１．Ⅰ区１面全景（東から）

２－２．Ⅰ区１面全景（西から）

２－３．Ⅱ区１面落込み４（西から）

２－４．Ⅱ区１面全景（南から）

図版３

３－１．Ⅰ区２面全景（西から）

３－２．Ⅱ区２面全景（東から）

３－３．Ⅰ区２面　遺物集中１（南から）

３－４．Ⅰ区２面　遺物集中１・壷（図９－８）出土状況（南から）

４－１．Ⅰ区３面全景（南から）

４－２．Ⅰ区３面全景（西から）

４－３．Ⅱ区３面全景（南から）

４－４．Ⅱ区３面全景（東から）

図版５

５－１．Ⅰ区３面　岩検出状況（南から）

５－２．Ⅰ区３面　岩検出状況拡大（南西から）

５－３．Ⅰ区３面　遺物集中土坑（南から）

６－１．Ⅰ区４面全景（南から）

６－２．Ⅰ区４面全景（西から）

６－３．Ⅱ区４面全景（南から）

６－４．Ⅱ区４面全景（東から）

図版７

７－１．Ⅰ区５面全景（西から）

７－２．Ⅰ区５面全景（西から）

７－３．Ⅱ区５面全景（南から）

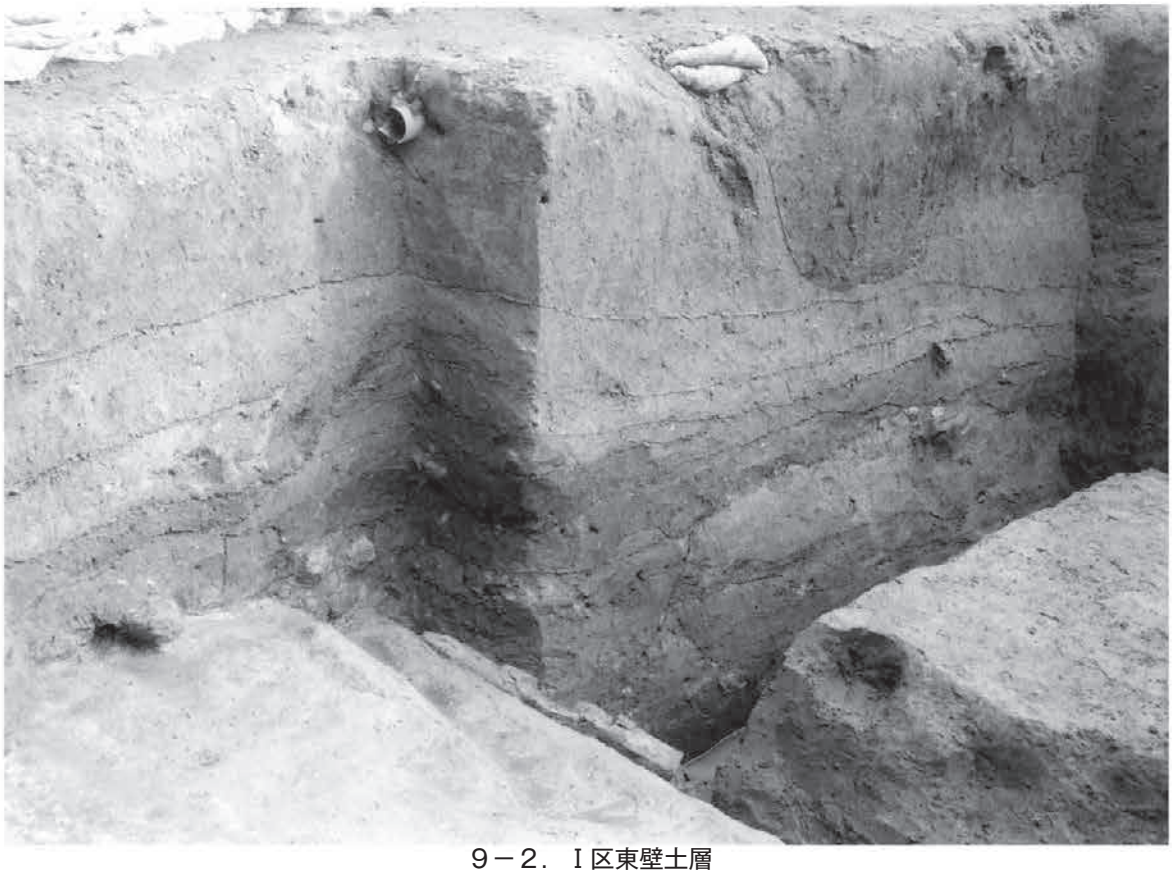
７－４．Ⅱ区５面全景（東から）

８－１．Ⅱ区最終深堀り坑（南から）

８－２．Ⅱ区東壁土層

図版９

９－１．Ⅰ区東壁土層



９－２．Ⅰ区東壁土層

10－1．Ⅰ区西壁土層

10－2．Ⅰ区西壁土層

図版11

5-1

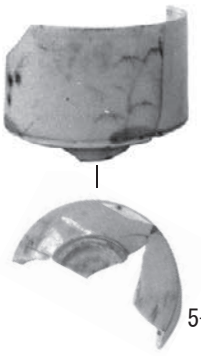
P. 2

5-5

P. 9

5-9

P. 13


5-11

Ⅰ区 1面上

5-10

P. 14

6-1

6-2

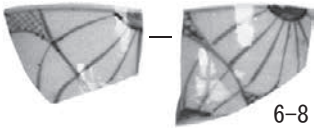
6-5

6-3

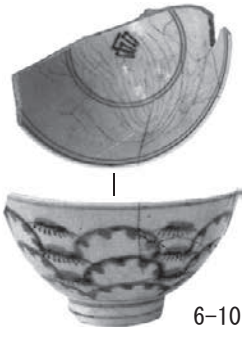
6-4

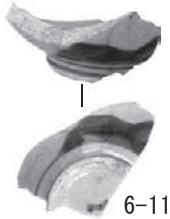
6-7

6-6


6-8

6-9


6-10


6-11

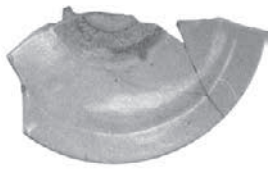
6-12

土坑1

7-1

7-3

Ⅱ区 1面上



7-6

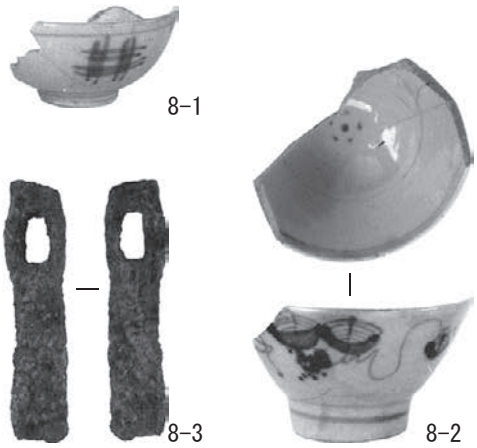
7-7

7-8

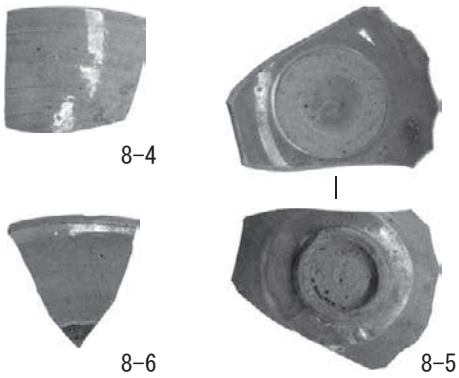
7-10

7-11

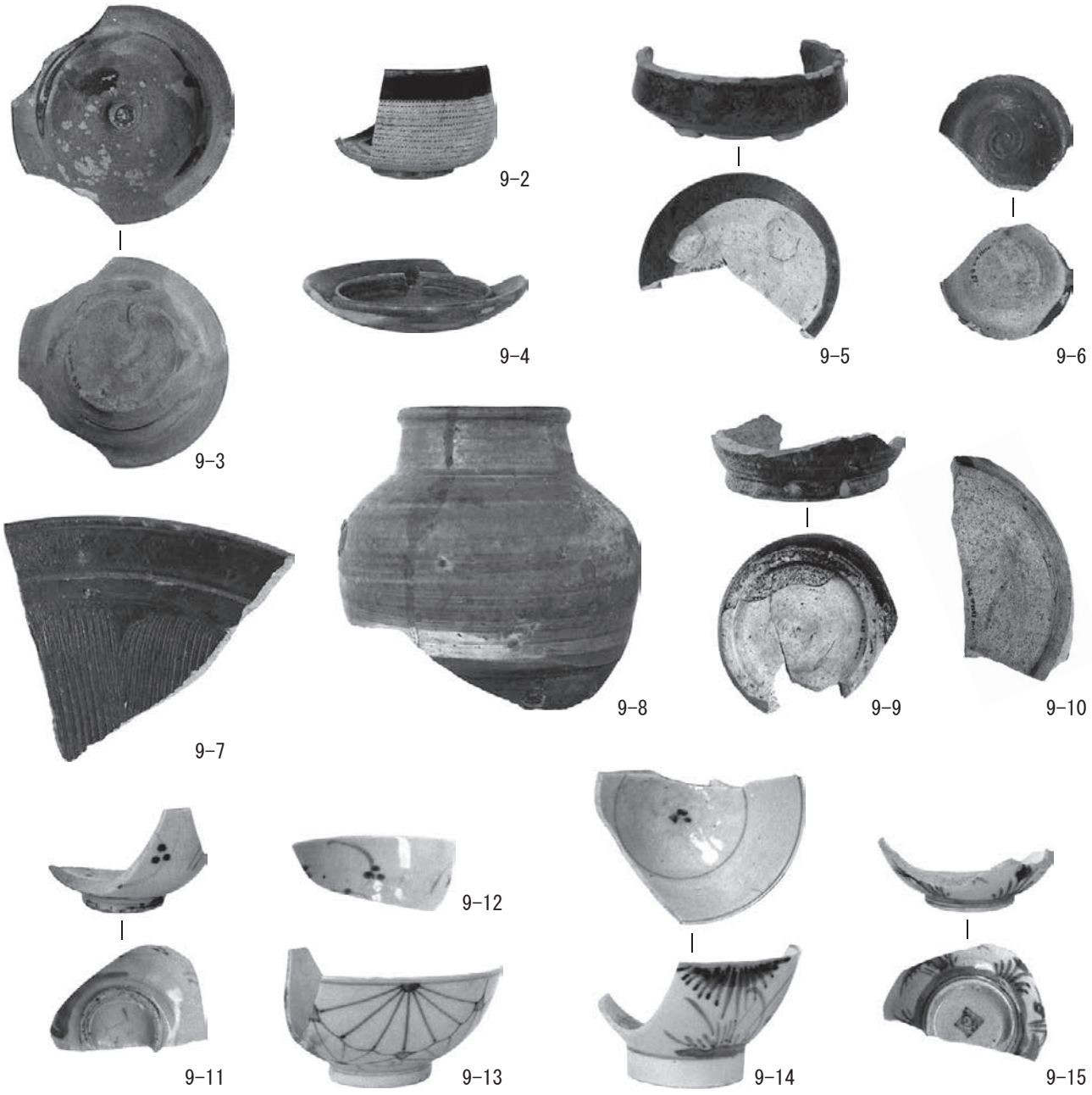
落込み3



Ⅰ区１面下～２面上

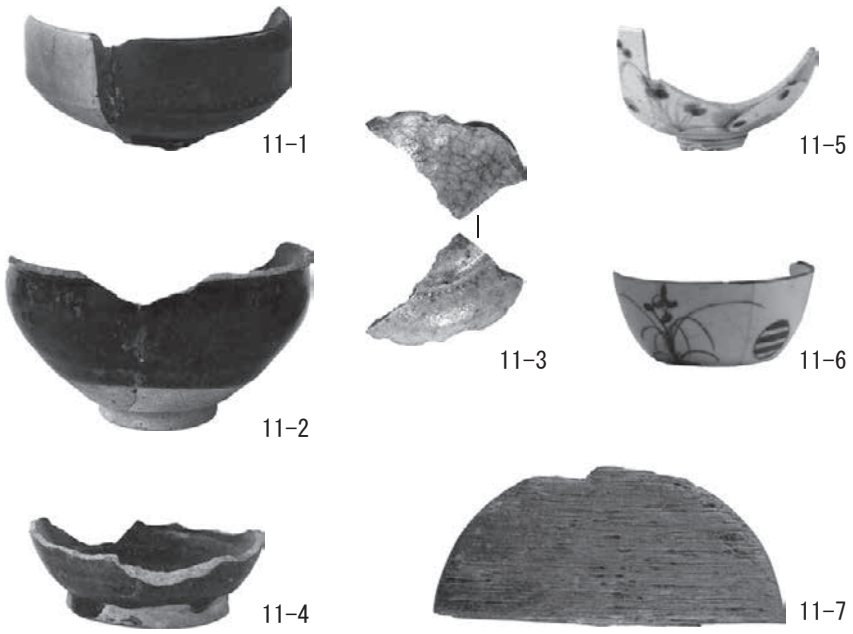


Ⅰ区 北西部１面下～２面上



遺物集中１

図版13

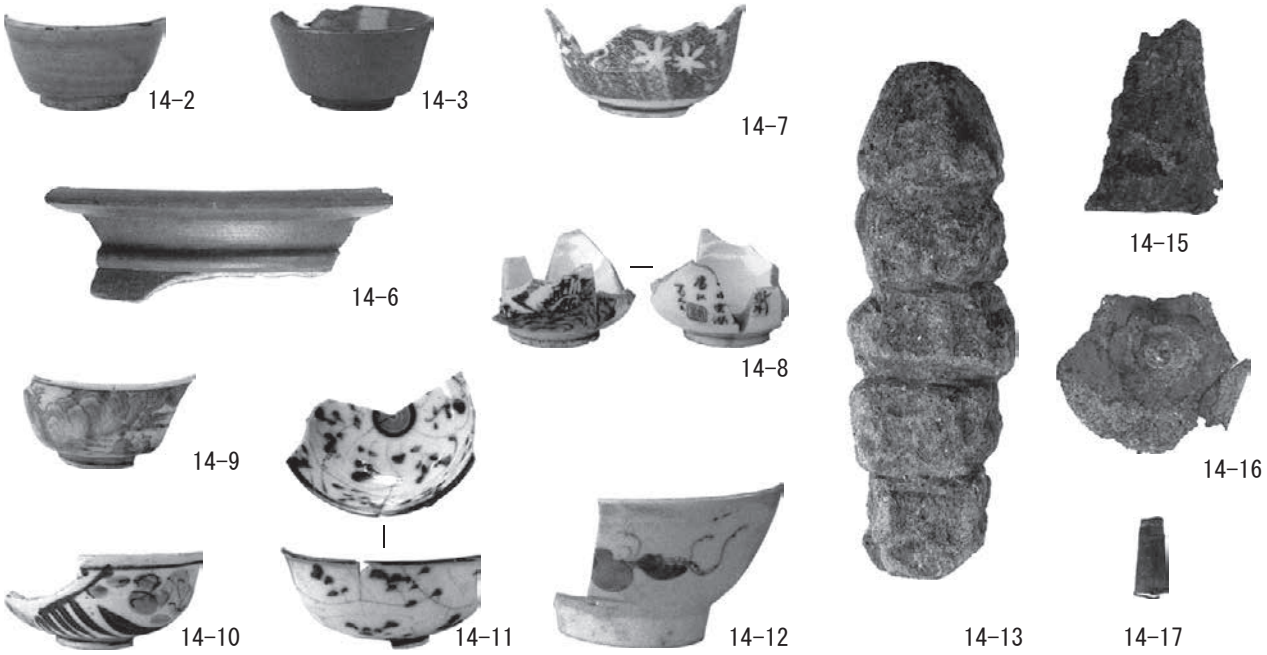


3 面包含層

落込み 1

溝 1

溝 2



撹乱

坂ノ下遺跡（No.217）

坂ノ下 50 番 3 外地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市坂の下50番3外地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は2008年8月13日から9月19日、調査対象面積は48.00㎡である。出土遺物・図面・写真等、調査に係る資料は鎌倉市教育委員会が保管している。
3. 調査団の編成は以下のとおりである。

調査の主体	鎌倉市教育委員会
調査担当	森孝子
現地調査参加者	渡辺美佐子・倉方尚子、安達越郎・片山直文・倉澤六郎・沼上三代治 （社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
資料整理参加者	松吉里永子・赤堀祐子

4. 本報の遺構・遺物の縮尺は次の通りである。

遺構図	1/60・1/40
遺物実測図	1/3

5. 整理作業は以下の分担で行なった。

遺構図版	森・赤堀
遺物図版	中世：松吉、古代：赤堀
観察表作成	中世：松吉、古代：赤堀
写真撮影	遺構：森、遺物：赤堀

6. 本書の執筆・編集は以下の分担で行なった。

第1章、第2章 第1節	森・赤堀
第4章 第1節	松吉
上記以外	赤堀
編集	松吉・赤堀

7. 現地調査・資料整理において以下の方々からご助言・ご協力を賜った。お名前を記して感謝致します。(敬称略・順不同)
樋泉岳二・萬年一剛・上本進二・松島義章・原廣志・馬淵和雄・福田誠・伊丹まどか・汐見一夫・押木弘巳・山口正紀・田畑衣理・沖元道

目　次

本　文　目　次

第一章　本調査地点の位置と歴史的環境 …… 317

第1節　遺跡の位置と歴史の概要
第2節　周辺の調査（図1、表1）

第二章　調査の概要 …… 321

第1節　調査の経過
第2節　グリッド設定・国土座標との合成（図2）
第3節　調査地の堆積土層（図3）

第三章　発見された遺構 …… 325

第1節　中世第1面（図4）
第2節　中世第2面（図5 ～ 6、表2）
第3節　中世第3面（図7 ～ 11、表3 ～ 5）
第4節　古代の遺構確認調査（図12）

第四章　発見された遺物 …… 334

第1節　中世の遺物（図13 ～ 18、表7）
第2節　自然遺物
第3節　古代の遺物（図19、表9）

第五章　まとめ …… 351

第1節　中世
第2節　古代

挿　図　目　次

図1　本調査地点と周辺の遺跡 …… 318
図2　グリッド設定図 …… 322
図3　調査地の堆積土層 …… 324
図4　第1面遺構配置図 …… 325
図5　第2面遺構配置図 …… 326
図6　土坑1、P1 ～ 3 …… 327
図7　第3面遺構配置図 …… 328
図8　建物1 …… 329
図9　柱穴列1 …… 330
図10 溝1 …… 331
図11 第3面ピット …… 331
図12 古代遺構配置図 …… 333
図13 第1面出土遺物 …… 334
図14 第2面出土遺物 …… 335
図15 土坑1出土遺物 …… 337
図16 第3面出土遺物 …… 338
図17 第3面構成土出土遺物 …… 339
図18 表土・撹乱出土遺物、調査区内採集遺物 … 340
図19 古代の遺物 …… 342

表　目　次

表１　周辺の調査 …… 319
表２　第２面ピット表 …… 327
表３　建物１柱穴表 …… 331
表４　柱穴列１柱穴表 …… 331
表５　第３面ピット表 …… 332
表６　軽石計測表 …… 341
表７　中世遺物観察表 …… 344
表８　古代遺物観察表 …… 348
表９　中世遺物集計表 …… 352

図　版　目　次

図版１ …… 353
A.　調査前状況（北東から）
B.　表土掘削終了後（北西から）
図版２ …… 354
A.　中世第１面（南東から）
B.　２面土坑１（東から）
C.　中世第２面（北東から）
図版３ …… 355
A.　中世第３面（北から）
B.　３面溝１（西から）
C.　３面上出土獣骨
図版４ …… 356
A.　３面建物１（南から）
B.　建物１　Ｐ６（東から）
C.　建物１　Ｐ８（東から）
図版５ …… 357
A.　古代遺構確認面（北から）
B.　調査区南壁土層（北から）
図版６ …… 358
中世の遺物
図版７ …… 359
中近世の遺物、古代の遺物
図版８ …… 360
出土木製品・軽石・骨・果核
図版９ …… 361
出土骨
図版10 …… 362
出土骨

第一章　本調査地点の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置と歴史の概要

本調査地は鎌倉市坂ノ下50番3外に位置し、坂ノ下遺跡内に包括されている。遺跡周辺には著名な寺社仏閣が多く所在する。調査地北方約150mにある長谷寺は草創年次不詳であるが、文永元年（1264）七月十五日と銘文にある梵鐘が資料として最古であり、少なくとも鎌倉時代中期には成立していたと考えられている。調査地西方110mには鎌倉権五郎景政の廟社であるという御霊神社がある。遺跡北西の甘縄神明社は吾妻鏡に伊勢別宮とあるほか、源頼朝、政子、実朝が参詣したとの条、頼朝社殿修復の条があり、頼朝のころすでに在ったことが明らかである。鎌倉市史総説編では、鎌倉権五郎景政が大庭御厨の寄進主であることや、甘縄神明社の存在などから、周辺が大庭御厨の内であった可能性を指摘し、『吾妻鏡』治承四年十月十一日の記事を引いて、「北条政子が伊豆国の阿岐戸郷から鎌倉に入る前日、日和がよろしくないというので稲瀬川辺の民屋に止宿した」とあるのは、稲瀬川付近が鎌倉のうちでないことを記しており、この地が大庭御厨のうちであったことを物語っているとしている。

遺跡西方は切通を経て極楽寺に達する。極楽寺は忍性により開山された正元元年（1259）創建の真言律宗の古刹である。「坂ノ下」の地名は極楽寺坂の下に在るので、その名がおこったとされている。極楽寺の切通は忍性により開鑿されたといわれているが、確実な資料はない。『吾妻鏡』建長四年（1252）の記事で宗尊親王（鎌倉幕府第6代将軍）が稲村ケ崎経由で鎌倉入りしていることから、切通の開鑿はそれ以後と考えられる。極楽寺の切通に関する史料の初見は貞和五年・正平四年（1349）頃刊行された『梅松論』の元弘三年（1333）の記事で、「（前略）其手引退て霊山の頂に陣を取。同十八日より廿二日に至るまで。山内小袋坂極楽寺の切通以下鎌倉中の口々。合戦のときのこえ矢さけび人馬の足音暫も止時なし。」である。

切通について直接語ったものではないが、極楽寺寺僧澄名が忍性没後七年後の延慶三年（1310）に記した『忍性菩薩行状略領』には永仁六年（1298）に「建立坂下馬病屋」とあり、元徳元年（1329）作という『極楽寺縁起』にも「構厩於前浜坂ノ下村之前也、而飼養老病之牛馬、凡其数一千有余疋也」とあることから、この頃には極楽寺坂の切通があり、「坂ノ下」の地名があったと考えられる。極楽寺に残る古絵図はその図柄から室町末期ないし江戸初期のものであろうといわれるものだが、往時、塔頭四十九院を擁した七堂伽藍の寺容を伝えるもので、伽藍の周囲には忍性の慈善救済活動を示す、病宿・癩宿・療病院・施薬悲田院が描かれ、切通を経た西側には坂下馬病屋も見える。

中世の極楽寺坂切通は今日のように深く掘削されておらず、成就院の門前あたりを通っていたという。中世後期から近世にかけて切通に係わる工事等の記録はなく、切り下げ工事についての確実な記録は、大正十年に国の事業として行われたもの以降であるが、切通が姿を変えて現在に至っていることがわかる。『としよりのはなし』（鎌倉市教育委員会　1990年）の「坂ノ下」の項には時期は不明だが、「極楽寺坂がひろげられるについて、元のお堂（虚空蔵堂）がこわされちまって、大安斉の山を少しけずって、いまのお堂を建てた。」との記述がみえる。また、関東大震災のおりには崖面が崩落し交通が遮断されたことや、第二次世界大戦時には切通両側崖面に壕が掘られたことなどの記録がある。

近世以降の坂ノ下は16世紀末に徳川領となってからは天領、幕末になって大名に預けられて明治に及んでいる。万治二年（1659）の『金兼藁』には「坂下　山海村里之商賈、成市地也日極楽寺市、以有易無皆利奔、山王海産市声喧、若教孟母居斯処、樵叟漁翁豈耐厚煩」とあり、坂ノ下の繁栄ぶりが伺われる。また、鎌倉の村々の年貢を江戸に運送する際には坂下村から船で送るのが例であったという。（宝暦十年

図１　本調査地点と周辺の遺跡

（1760）五月「相模国鎌倉分村柄書上帳」）

調査地東100mには四条山収玄寺がある。寺地は日蓮に深く帰依した四条金吾頼基の邸跡と伝えられ、『風土記候』には「今田畝トナル」とある。寺史は未詳だが、頼基の邸跡に妙詣尼のたてた収玄庵というお堂があったとされ、江戸後期には「相州鎌倉長谷村　収玄庵」として版本の四条金吾夫妻像が作成されるなど、相応に信仰されていたことが伺われる。ここに本堂を建立し寺に改めたのは大正12年で、施主は光則寺の三十一世日慈である。

表１　周辺の調査

	遺跡名（県遺跡 No.）	地点	文献
1	坂ノ下遺跡（No.217）	坂ノ下 50 番 3 外地点	本報収録
2		坂ノ下 53 番 3 の一部地点	汐見一夫・田畑衣理 2005『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21』
3		坂ノ下 184 番 11 地点	熊谷満・降矢順子 2011『坂ノ下遺跡発掘調査報告書』
4	長谷観音堂周辺遺跡	長谷三丁目 7 番 5 地点	長澤保崇・田畑衣理 2008『長谷観音堂周辺遺跡 (No.296) 発掘調査報告書』
5	（No.296）	長谷三丁目 41 番イ地点	瀬田哲夫 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10』
6		長谷三丁目 39 番 4 外地点	宗臺秀明・宗臺富貴子 1995『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 11』
7		長谷三丁目 658 番 1 地点	服部清道・玉林美男 1985『海光山慈照院長谷寺観音堂新築に関わる埋蔵文化財の調査』
8		長谷三丁目 81 番（1 次・2 次）	1995 年調査　未報告
9			
10	由比ガ浜南遺跡（No.315）	長谷二丁目 85 番 1 地点	櫻井真貴ほか 2004『かながわ考古学財団調査報告 164　由比ガ浜南遺跡』
11		長谷二丁目 122 番 9・10 地点	1989 年調査　未報告
12	長谷小路周辺遺跡	長谷三丁目 633-－2 の一部	瀬田哲夫 2007『長谷小路周辺遺跡 (NO.236) 発掘調査報告書』
	（No.236）	他 7 筆番地点	
13		長谷三丁目 641 番地点	2004 年調査　未報告
14		長谷一丁目 284 番 1 地点	玉林美男 1988『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4』
15		長谷一丁目 33 番 3 外地点	伊丹まどか 1998『長谷小路周辺遺跡 13』 伊丹まどか 1999『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15』
16		長谷二丁目 252 番 1 地点	菊川英政 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
17	甘縄神社遺跡群（No.177）	長谷一丁目 271－1 他 4 筆地点	長澤保崇・田畑衣理 2008『甘縄神社遺跡群 (NO.177) 発掘調査報告書』
18		長谷一丁目 271 番 10 地点	木村美代治・佐藤仁彦 1995『甘縄神社遺跡群発掘調査報告書』
19		長谷一丁目 236 番 1 地点	1991 年調査　未報告
20		長谷一丁目 227 番地点	鎌倉市教育委員会 1983「伝安達泰盛邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』
21		長谷一丁目 227 番 25 地点	馬淵和雄 2007『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23』
22		長谷一丁目 227 番 24 地点	福田誠 2013『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29』
23		長谷一丁目 262 番 14・15 地点	2010 年調査調査　未報告
24	桑ヶ谷療病院跡（No.294）	長谷一丁目 630 番 17 地点	木村美代治・田代郁夫 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
25		長谷一丁目 630 番 1 地点	田代郁夫・原廣志 1991『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7』
26		長谷三丁目 629 番 20 外地点	継実 1991「桑ヶ谷療病院遺跡の調査」『鎌倉考古 NO.20』
27	高徳院周辺遺跡（No.327）	長谷一丁目 290 番 1 地点	齋木秀雄・宗臺秀明 1989『長谷一丁目 290－1 地点遺跡』

第２節　周辺の調査（図１、表１）

坂ノ下遺跡内での発掘調査の事例は少なく、中世以前のこの地の様子を伺えるまとまった成果は報告されていない。これまでに行なわれた調査は、本格的な発掘調査が２箇所（図１－地点２・3）、確認調査が3箇所（図１－▲印）である。

地点２では現地表下約2m、最深部で海抜3.5mまで調査されたが、明確な中世遺構面あるいは遺構は発見されていない。出土した遺物は貝・骨といった自然遺物が半数以上を占め、土器・陶磁器類は、ほとんどが小破片で、年代は近世を中心として15世紀後半から19世紀前半までのものとされている。

地点３では15世紀以降の中世期の痕跡は、江戸時代以降の耕作による削平のため存在はわからないとされている。耕作土下の調査では14世紀中葉から後半頃の遺物包含層下、海抜4.2m付近で13世紀末から14世紀前半頃の生活面が確認され、２基の土坑と、かわらけ溜まりが検出されている。それより下層は中世基盤層と考えられる砂層まで、中世の生活面と同様の時期の遺物を含む砂質土が70㎝の厚さで堆積しており、土木工事による埋め立て土の可能性があるとされている。また、古代については、中世基盤層から７世紀後半から８世紀代にかけての土師器・須恵器が出土しており、遺構の検出はなかったも

のの海浜部における該期の活動を示す資料となっている。
確認調査では、地点Aで地表下約50㎝前後から170㎝前後の中世基盤層まで2 〜 3時期の遺構面を確認、14世紀代を中心とした遺物が出土しているとされるが、他の2地点では近現代の攪乱層が深くまで及んでおり、遺物もほとんど出土していないとされている。(文献：地点2発掘調査報告書)

近隣遺跡の調査では本遺跡東側、海寄り地域の由比ガ浜南遺跡内の地点10で、木枠を伴う井戸址、集石状遺構、土坑などが、海抜3m 〜 2mあたりに海側に傾斜して堆積する遺物包含層下層で確認されている。包含層中の遺物の年代は13世紀中葉から14世紀にかけてを主体とするとされており、発見された遺構群の年代も概ね一致するとされている。

北側の長谷観音堂周辺遺跡では、6箇所で調査が行なわれている。
地点4では13世紀後葉から14世紀前半頃を中心と考えられる遺構が発見されている。確認された中世生活面は中世地山上面のみであるが、より上位の中世面は中世以降の削平により消失している可能性が考えられるとされている。
地点6では、関東大震災のあとかたずけが行なわれたゴミ穴、震災以前の幕末から明治にかけての建物跡、江戸前期から幕末までの水田跡など近世から近代にかけての遺構・遺物が多く発見されている。中世では稲瀬川の支流であった可能性のある河川跡が発見され、西隣の地点5の調査成果を合わせ、この時期の長谷寺前が西から東の川に向かい傾斜しており、そこに建てられた建物などの遺構は河川の流路と地勢に従ったものであったようだとし、現在の長谷寺参道との軸方向の違いを図示している。古代以前では地点5で竪穴住居址の可能性を持つものなど、比較的規模の大きい遺構の発見や、弥生式土器（宮ノ台式期以降）や、古墳時代前期・後期、奈良・平安時代の遺物の出土が報告されている。
地点7は長谷寺境内の調査で、銅製観音菩薩像の出土や、納骨壺の発見など中世期の長谷寺における埋葬・信仰に関する資料が得られている。
地点8・9は1995年に調査が行われ、大型の掘柱建物址など中世期の遺構・遺物が多く検出されたほか、古代では水場の祭祀遺構等が発見されている。

【引用・参考文献】

高柳光寿　　1959『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
高柳光寿・貫達人　　1959『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
平凡社　1984「神奈川県の地名」『日本歴史地名体系14』平凡社
鎌倉市教育委員会編　　1990『としよりのはなし』
三浦勝男　　1968『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第十五集　鎌倉国宝館

第二章　調査の概要

第１節　調査の経過

本調査は個人住宅建設に伴う事前調査として、2008年4月23日～24日の確認調査の結果に基づいて実施された。表土掘削は重機を使用して2008年8月8日・11日に行ない、廃土は場外に搬出した。発掘調査は8月13日に開始した。調査地は地下水位が高く、掘削調査に際しては湧水の対策が必要になったため、調査区壁下に排水溝を設置、釜場を設けて電動ポンプにより湧水を排出した。調査が進み調査区が深くなるに従い量を増す湧水には、排水溝、釜場を繰り返し掘り下げることで対処した。発掘調査中に掘り上げられる土の置き場は、調査地西側の一角を土嚢で囲い確保した。

調査では第1面から第3面まで3時期の中世面で遺構調査を行なった。検出された遺構は溝1条、土坑1基、建物1棟及び建物の一部と思われる柱穴列1列の他、ピット106口である。中世面の調査後は黒色粘質土層まで掘り下げ、古代の遺構確認調査を行なった。古代の調査では小円形のプランを20箇所で確認したが、調査対象となる深度に達していたため平面プランの記録作業のみを行なうにとどめた。その後、調査区壁の土層の記録作業を行ない発掘調査を終了。測量杭、土嚢の撤去、器材の搬出等を行ない9月19日に全ての作業を終了した。

遺物は、かわらけなどの土器・土製品、常滑・瀬戸などの陶器類、舶載磁器、石製品、木製品など中世期の遺物、及び土師器、須恵器、灰釉陶器などの古墳時代、奈良・平安時代の遺物のほか、軽石、獣骨が出土しており、総量はテン箱にして約5箱である。

以下に経過を記す。

2008年8月08日～11日	バックホーによる表土掘削。現地表（海抜5.3m）下60㎝を目安として一気に掘り下げる。以下人力による発掘調査を実施する。
8月13日	器材搬入。
8月18日	中世第1面の調査開始。湧水対策のため排水溝を設置。
8月20日	中世第1面の写真撮影、測量作業。
8月21日	中世第2面へ面下げ開始。
8月26日	中世第2面西半の土丹地形ならびに遺構を確認。
8月28日	中世第2面の写真撮影、測量作業。鎌倉市3級基準点をトラバース。
8月29日	中世第3面へ面下げ開始。
9月02日	礎板を伴う柱穴検出。
9月05日	中世第3面の写真撮影、測量作業。
9月09日	古代遺構確認面へ面下げ開始。
9月11日	古代遺構確認面の写真撮影、測量作業。掘削深度（現地表下160㎝）に達したため掘削作業終了。
9月12日	調査区南壁、西壁、北壁の土層図作成。
9月19日	調査終了。器材撤収。

第２節　グリッド設定・国土座標との合成（図２）

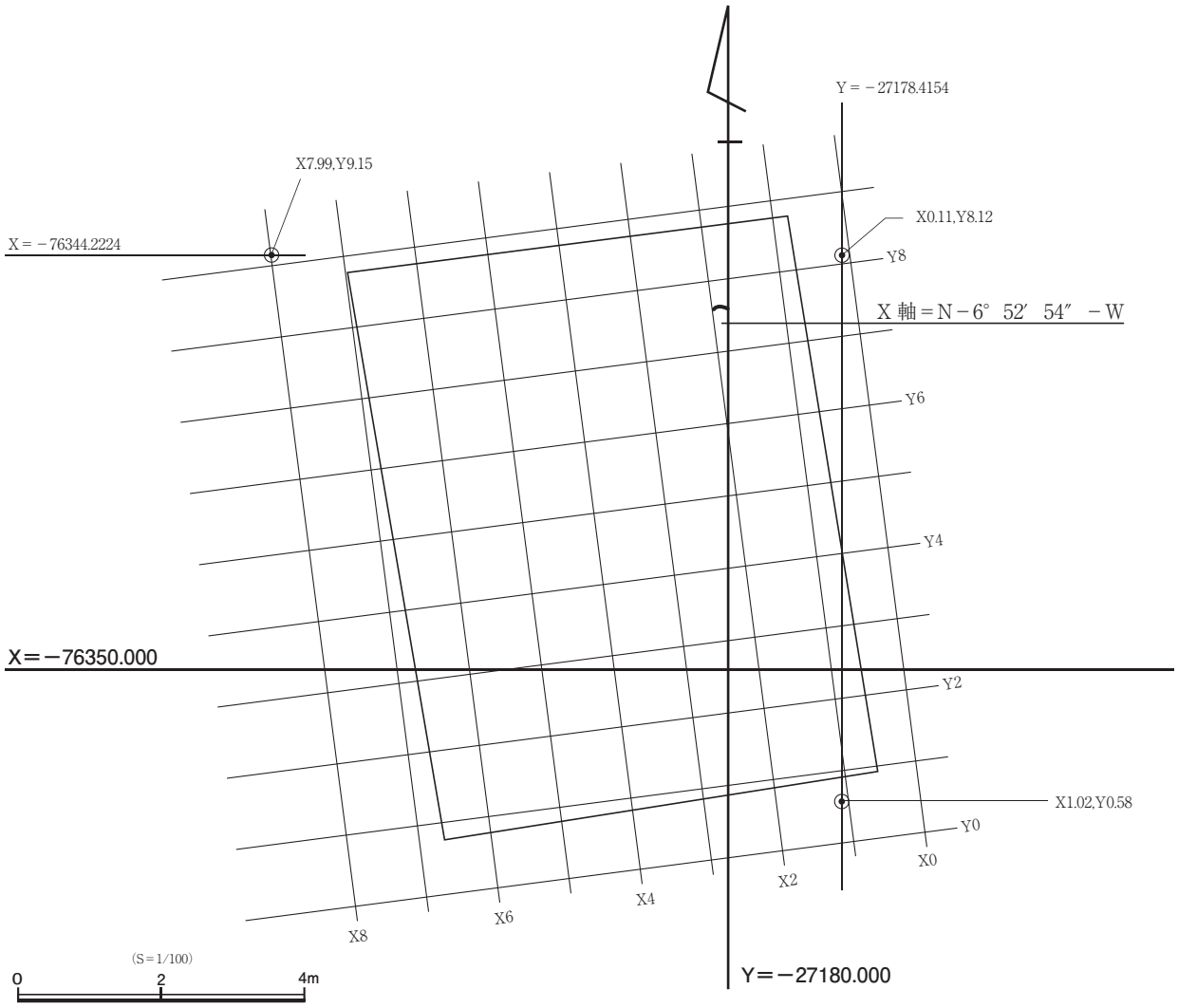


図２　グリッド設定図

測量は任意の調査グリッドを設定して行った。調査地内の南東隅に基準点（X0,Y0）を設置、南北方向をX軸、東西方向をY軸として、それぞれ北側・西側に向かい数値を増すグリッドを設定、測量の基準とした。国土座標値の移動は、トータルステーションを使用して調査員が行なった。測量作業には旧測地系（＝日本測地系）の座標値を使用し、後日、測量成果を新測地系（＝世界測地系）の座標数値に変換した。作業は鎌倉市４級基準点F083・F084の２点を使い以下の手順で行なった。トータルステーションをF083設置し、F084を既知点として、調査グリッドの国土座標値を測量した。調査地内で国土座標（旧測地系）のX＝－76701上とY＝－26885上にある点をそれぞれ求め、合成点として調査グリッドの数値を記録した。合成点の新測地系（世界測地系）へ変換後の数値はXが－76344.2224、Yが－27178.4154である。

図2に調査グリッドと国土座標（新測地系）との関係を提示した。X7.99,Y9.15が国土座標のX＝－76344.2224上ににあり、X1.02,Y0.58とX0.11,Y8.12が国土座標のY＝－27178.4154上にある。調査グリッドのX軸は真北より6° 52′ 54″西へ振れている。

第３節　調査地の堆積土層（図３）

遺跡の堆積土層は調査区の北壁・西壁・南壁で採取した。湧水処理のため調査区の壁下に排水溝を設けたため、図示した調査区壁の堆積土層は平面調査の検出状況とは合致していない。平面図には土層採集位置と中世1面（2面ほぼ重なる）・3面（4面ほぼ重なる）で平面的な調査が行なわれた範囲を図示した。1層は近現代の堆積土層である。2層は細かい土丹粒子を含む粘質土層で中世の遺物を包含している。3層は土丹粒子を混ぜ合わせた粘質土による地形層で、中世第1面を構成する。4層・4’層は灰茶色の砂質を帯びた土に土丹粒子を混ぜ合わせた層で、上面が中世の第2生活面となる。調査区南西側は土丹粒子を主体とする4層を基盤とする土丹地形面となるが、調査区の北側・東側は土丹粒子の量が少なく（4’層）比較的軟弱である。6層・7層は土壌化の進んだ砂質土層で、中世期の遺物を包含している。6層上面が中世の第3生活面である。5層は6層と同質の茶色砂質土を基調とし、土丹粒子などの含有物は4層のものに類似している。現地調査では遺構覆土として扱ったが、人為的な掘り込みというより、6層上面に4層の影響が及んだ自然的要因による浅い起伏の可能性が高いものと思われる。8層・9層は土壌化した粘質土層で古代の遺物を包含している。北壁土層(A－A’)の8’層･8”層は8層と同質であるが、粘性やしまりなどに多少変化が見られ､少量の土丹粒子を含んでいる。8層から9層への変化は漸移的で、下位の9層ほど粘性・しまりが強い。調査では9層上面で、古代の遺構確認を行なった。9層下は排水処理の為に深堀した調査区北東隅と南西隅で、砂層が検出されている。北西隅は現地表下約1.8m（海抜約3.4m）で白色砂と青灰色砂が混在する層、南西隅は現地表下、約1.7mで青灰色砂層（海抜約3.5m）に達する。

土層説明

1層	表土層	現代の盛り土。上位は土丹版築、下位は黄茶色砂質土。
2層	灰茶色粘質土層	中世の遺物包含層。細かい土丹粒子を10％含む。
3層	灰茶色粘質土層	中世第1面構成土。細かい土丹粒子を30％含む。
4層	土丹地形層	中世第2面構成土。灰茶色弱砂質土に土丹粒子を70％含む。
5層	茶色砂質土層	6層を基調に土丹粒子・遺物片を多めに含む。
6層	茶色砂質土層	中世第3面構成土。土丹・炭をまばらに含む。粘性ややあり。しまりあり。
7層	灰茶色砂質土層	中世第3面構成土。土丹粒子・玉石を少量含む。6層より粘性が強く、しまりに欠ける。
8層	黒褐色粘質土層	暗灰青色砂をブロック状に含む。粘性・しまり強い。
9層	黒褐色粘質土層	古代遺構確認面。8層より粘性・しまりが強い。

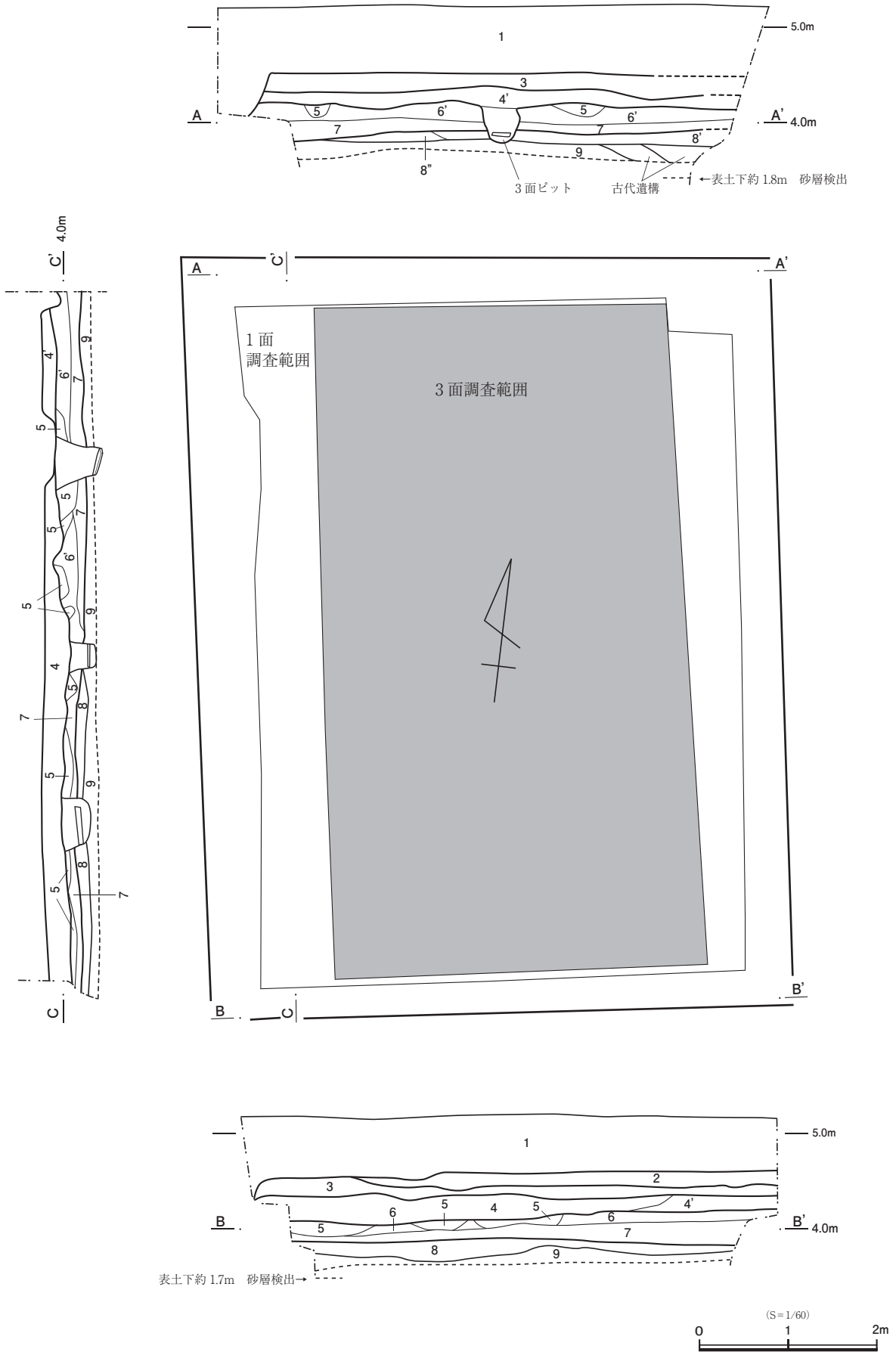

5.0m
A
A'
4.0m
3面ピット
古代遺構
←表土下約 1.8m　砂層検出
C'
4.0m
C
1面
調査範囲
3面調査範囲
B
B'
表土下約 1.7m　砂層検出→
(S=1/60)
0
1
2m

図３　調査地の堆積土層

第三章　発見された遺構

第１節　中世第１面（図４）

中世の遺物包含層（図3　B－B’2層）下で検出された細かい土丹をつき固めた地形面である。海抜4.5～4.6mに位置し、良くしまっている。この面で確認された掘り込みはいずれも近現代のもので、中世の遺構は検出されていない。調査区壁の堆積土層（図3）を見る通り、調査区南壁付近には本面上に遺物包含層（図3－2層）が存在しているが、調査区北壁付近では遺物包含層の堆積はなく、本面は近現代層直下での検出となる。遺物包含層が存在しない部分では、生活面が近現代の造成により削平されている可能性もあり、中世期の遺構も失われているかもしれない。

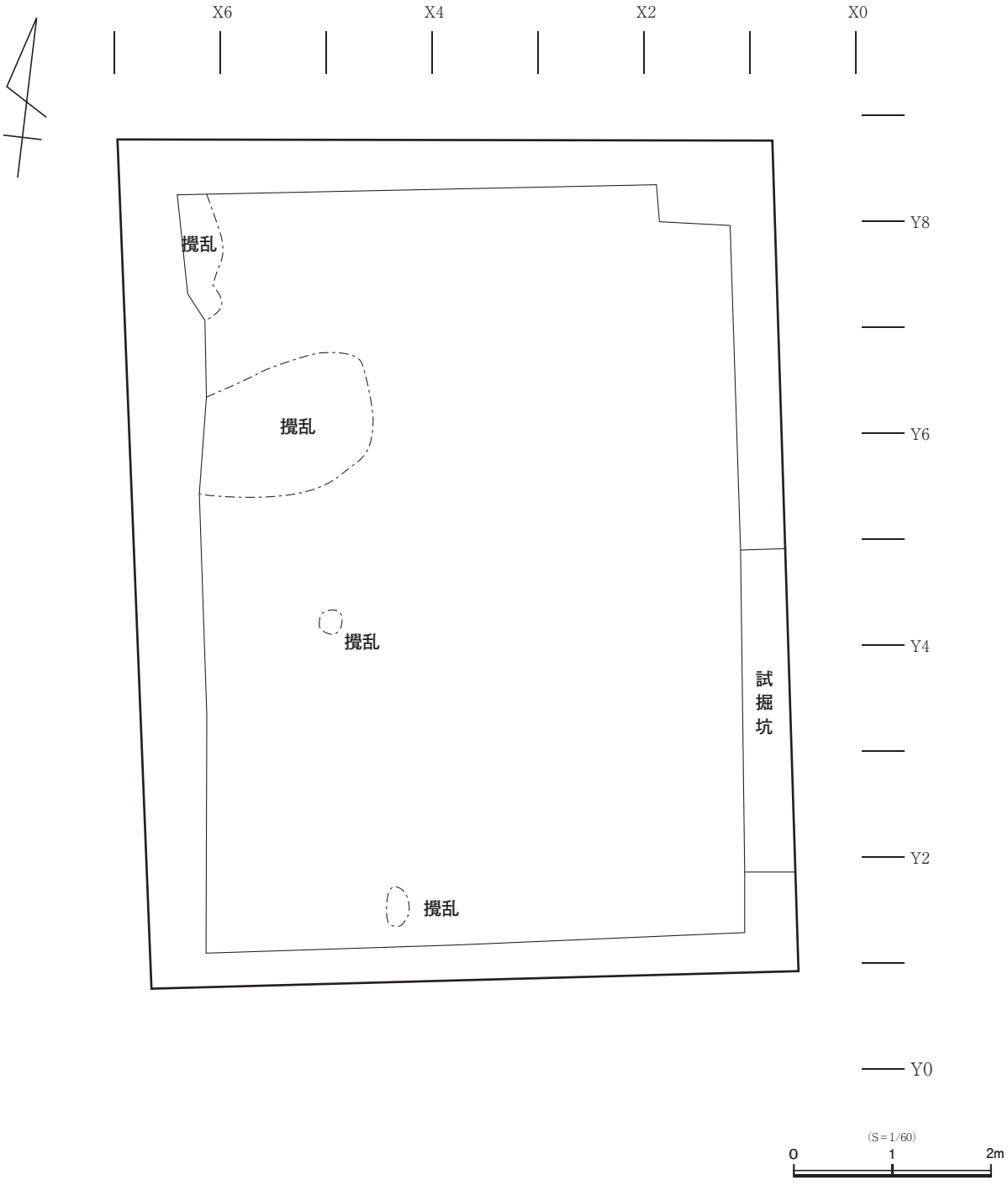


図４　第１面遺構配置図

第２節　中世第２面（図５～６、表２）

海抜4.3～4.4mに位置する。調査区の南西側は細かい土丹をつき固めた層（図3－4層）により構成される土丹地形面（図中トーン部分）となるが、調査区の北側・東側は整地層（図3－4’層）の土丹の量がまばらで、砂質土を主体とするやや軟弱な面となる。土坑1基、ピットが18口検出されている。

土坑１（図７）

調査区北東側で検出、東側は調査区外に延びる。規模は長軸が129cmまで、短軸は100cmで、深さは35cmである。下端は整った方形を呈し、底面は平坦で標高3.98mを測る。

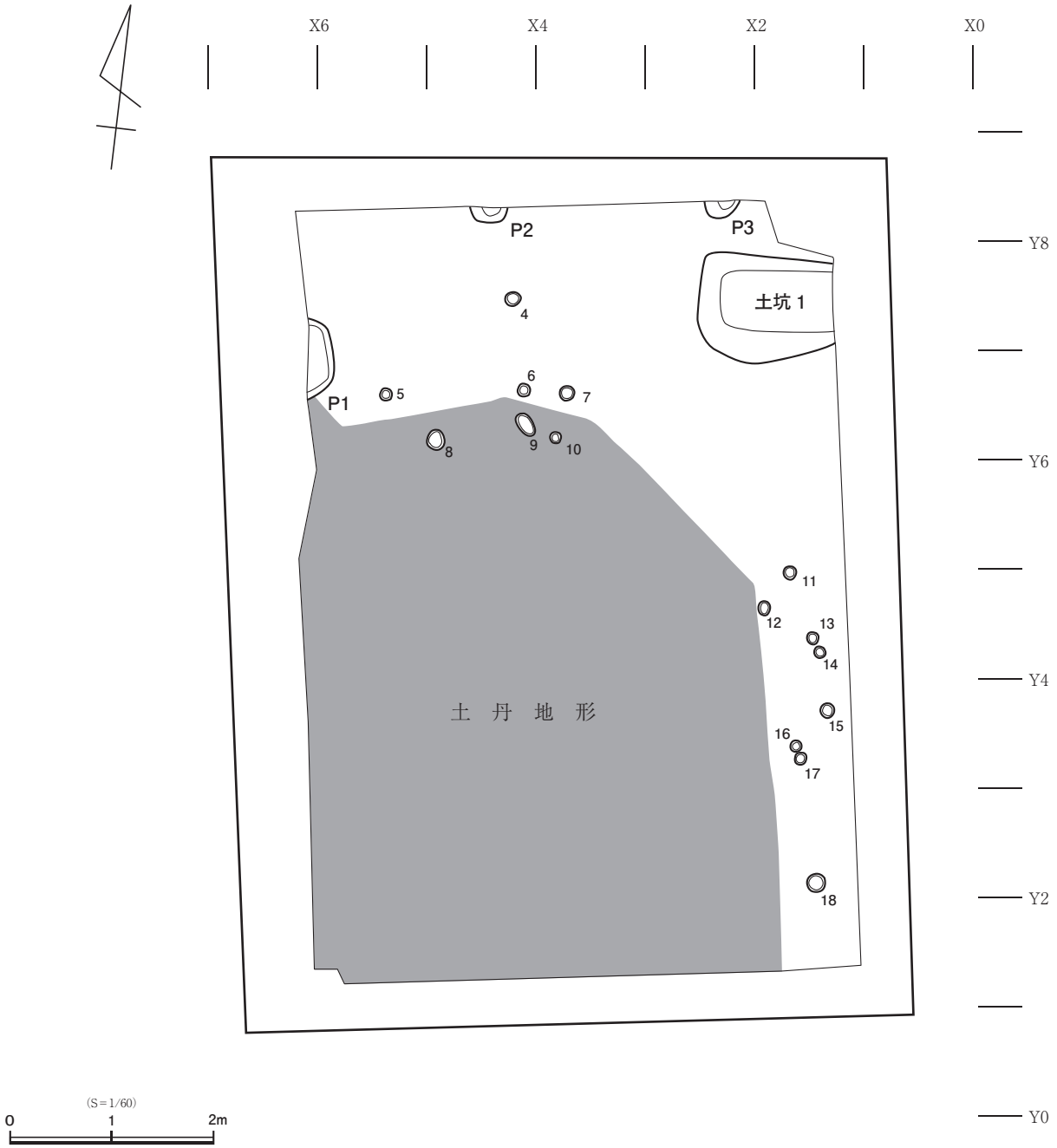


図５　第２面遺構配置図

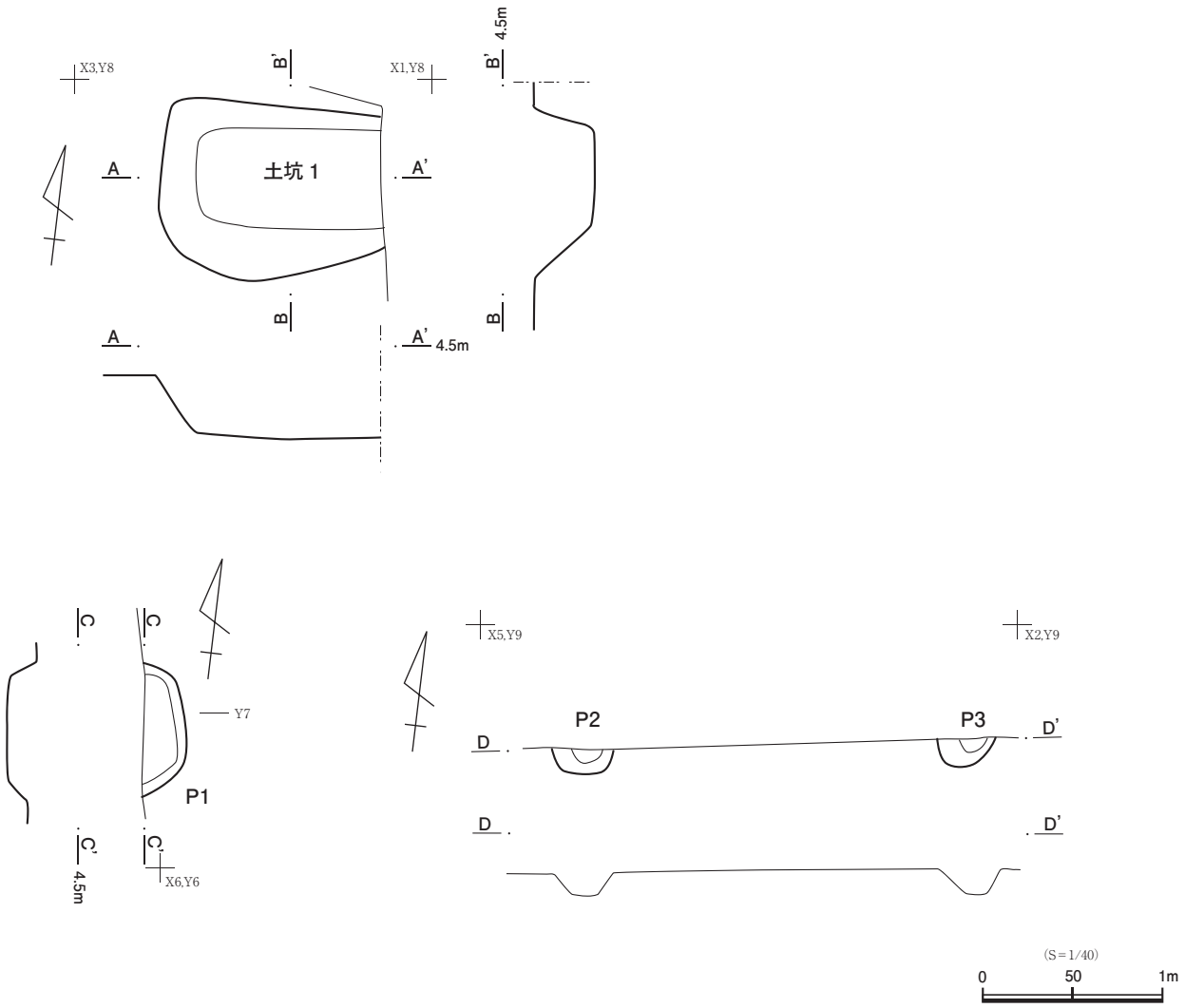


図6　土坑1、P1～3

表2　第2面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）
P 1	73～×25～×15	4.11	P 10	9 × 8 × 5	4.27
P 2	34～×14～×13	4.16	P 11	12 ×12 × 3	4.28
P 3	32～×15～×14	4.18	P 12	13 × 9 × 4	4.28
P 4	13 ×12 × 4	4.27	P 13	10 ×10 × 5	4.26
P 5	8 × 8 × 2	4.21	P 14	9 × 9 × 3	4.27
P 6	10 ×10 × 3	4.29	P 15	12 ×12 × 3	4.24
P 7	12 ×12 × 3	4.29	P 16	10 × 9 × 3	4.27
P 8	18 ×16 ×11	4.16	P 17	10 ×10 × 4	4.27
P 9	22 ×13 × 3	4.29	P 18	16 ×15 × 3	4.27

ピット（図8・表2）

ピットは18口検出された。P1は規模が大きく、土坑の可能性もある。P2・P3は柱穴となり得る規模を持っている。調査区際で2口のみの検出のため、セット関係が成り立つものかどうかはわからないが、P2・P3間は掘り込みの中心での距離が220cm、並びの方向はN－83°－Eと3面検出の遺構に近い軸方向を示している。P2・P3については建物の一部である可能性を提示しておく。その他のピットは深さ5cm以下で、径20cmに満たない規模のものが多く、人為的な掘り込みと言えるかどうかわからない。個々ピットの詳細は2面ピット表を参照されたい。

第３節　中世第３面（図７～11、表３～５）

海抜4.0～4.2mに位置する。土壌化の進んだ茶色砂質土（図3－6・7層）を基盤とする生活面である。溝1条、建物1棟、柱穴列1列、ピット87口が検出された。その他、調査区南東側X3,Y3付近で馬の右上肢骨がまとまった状態で検出されている。(写真図版3－C)

建物１（図８　表３）

9口のピットにより構成される南北3間、東西2間以上の建物である。北東側の2口、北西側の1口は調査区外のため検出されていない。P5は下の面（古代遺構確認面）で確認されたプラン（109）であるが、本址ピットの掘り込みを見逃したものと思われる。P7は柱穴といえる規模を持たず本址に含めるには

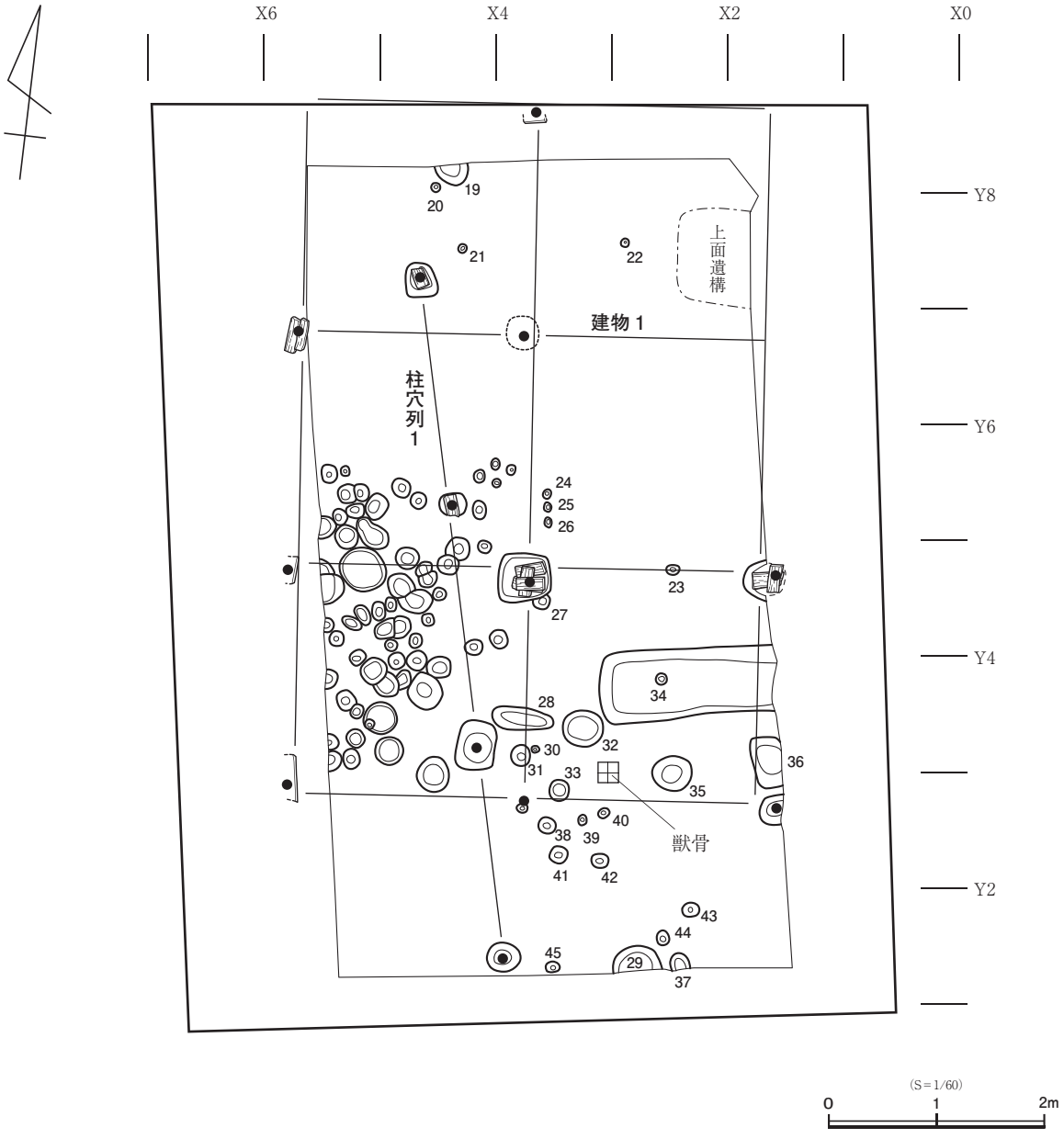


図７　第３面遺構配置図

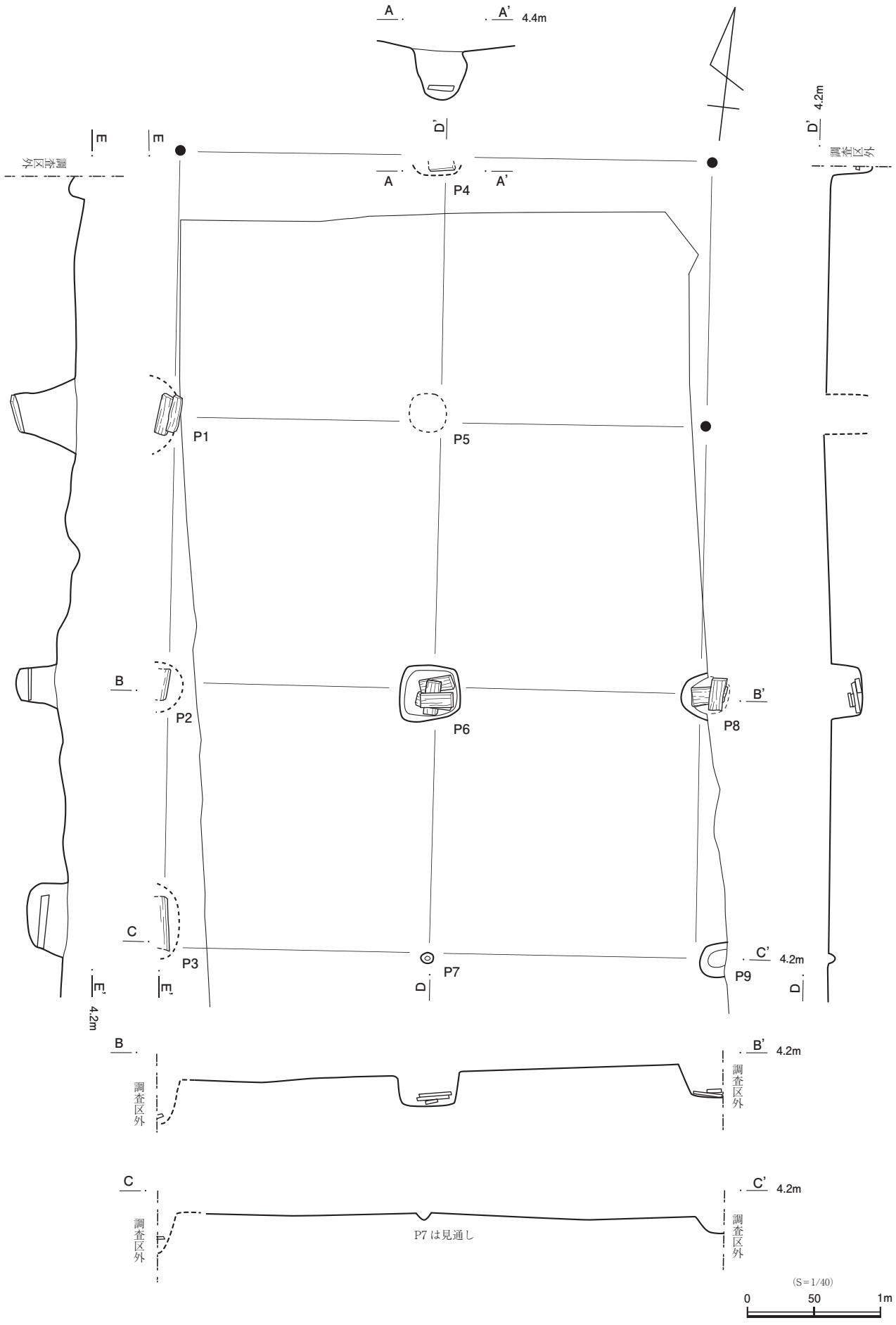

A
A'
4.4m
D
D'
4.2m
E
E'
調査区外
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
B
B'
C
C'
4.2m
P7は見通し
(S=1/40)
0
50
1m

図8　建物1

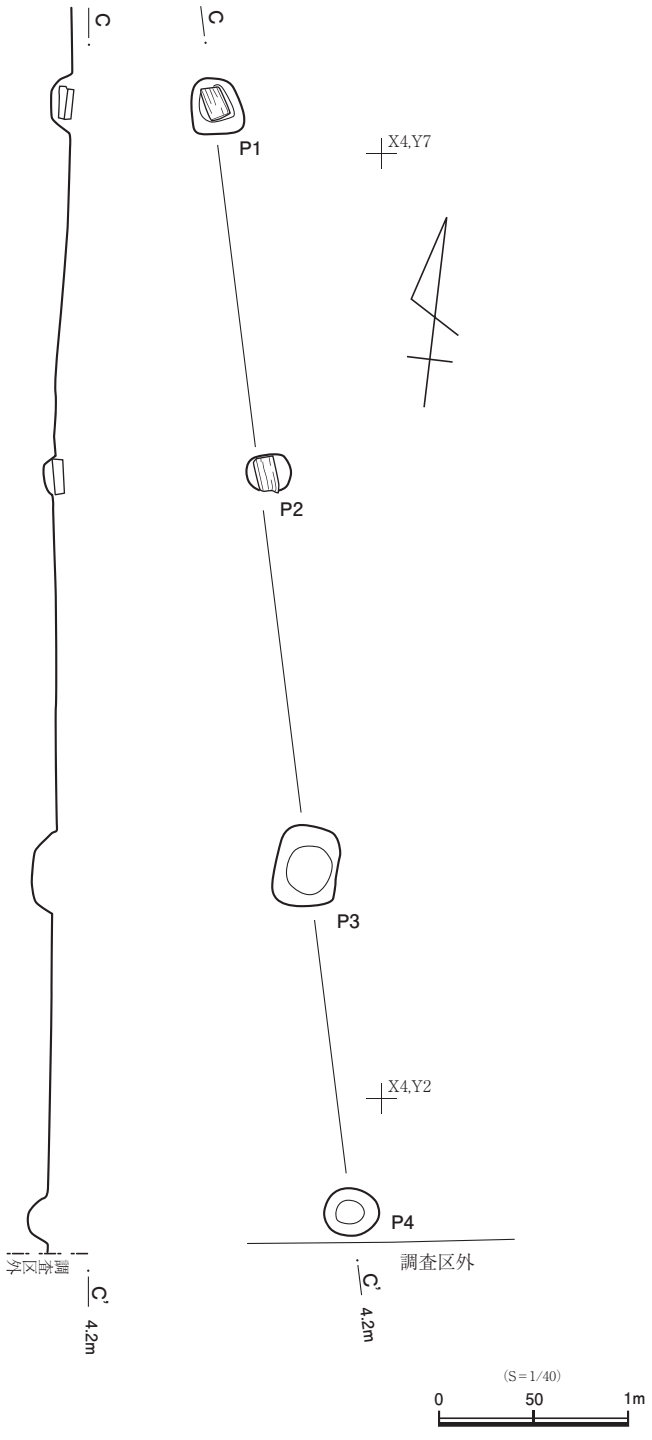


図９　柱穴列１

不安が残るが、周辺で他に該当するピットが見当たらない。建物の軸方向はＮ－6°－Ｗで、柱間距離はややばらつきがあるものの200㎝を規格としていると思われる。礎板は西列P1～P3のものが揃って長軸を南北方向に向けて設置されており、建物の構造を知る手がかりになるかもしれない。覆土はいずれのピットも、粘性のある灰茶色から暗茶色土を基調とする単層で、柱痕は検出されていない。柱材を抜き取ったのち、一気に埋め戻されたものと思われる。礎板が検出され土層断面の記録の残るP1～P4については、礎板下に掘り方埋め土が遺存しているものと思われるが、抜き取り痕覆土との変化が乏しく分層がかなわなかった。柱穴の規模、礎板の寸法など個々のピットの詳細は建物１柱穴表を参照されたい。

柱穴列１（図９・表４）

４口のピットにより構成される。列の東側では本址に含められる配置を持つピットは見出せないが、北側・南側・西側は調査区外にセット関係の成り立つピットが存在している可能性がある。本址は南北3間以上の規模を持つ建物の東列部分と思われる。列の軸方向はＮ－14°－Ｗを指し、柱間はP2～P3間が広く、P3～P4間が狭いものの、P1からP4までのおよそ600㎝を3等分した200㎝を規格にしていると思われる。柱穴の規模、礎板の寸法など個々のピットの詳細は柱穴列１柱穴表に記した。

溝１（図10）

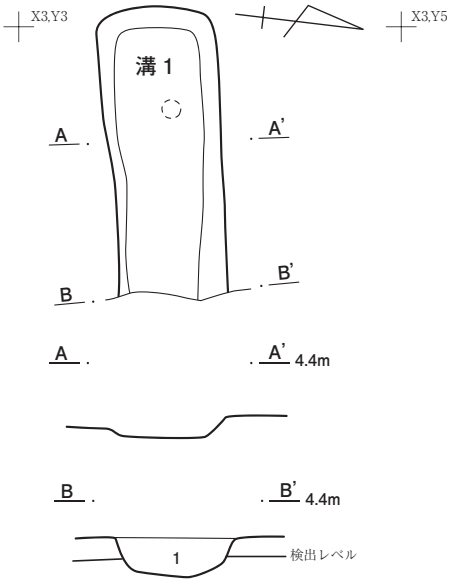
調査区東壁際で検出、東側は調査区外に延びる。軸方向はＮ－81°－Ｅで、長さは158㎝まで、幅は上端で59～63㎝である。確認面からの深さは10㎝だが、調査区壁の土層では21㎝の掘り込みを確認できる。底面高は4.00m前後で一定している。

表３　建物１柱穴表

No.	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）
	備考	
P1	58～× ？～×52	3.57（礎板上 3.70）
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。礎板２枚並ぶ。	
P2	34～× ？～×31	3.66（礎板上 3.74）
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。	
P3	58～× ？～×32	3.72（礎板上 3.87）
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。	
P4	34～× ？～×40	3.80（礎板上 3.93）
	排水溝中で検出。掘り方は土層断面より復元。	
P5	（30） ×（29）×32～	3.76 以下
	調査４面で確認。４面 P109 と同一。	
P6	46　×33　×24 礎板４枚重なる。 礎板実測値（上から①～④）	3.81（礎板上 3.94） ①26.0×11.0× 厚さ 1.7 ㎝ ②28.0×10.5× 厚さ 3.6 ㎝ ③25.0×11.0× 厚さ 3.5 ㎝ ④25.0×10.5× 厚さ 2.3 ㎝
P7	8　×　7　×　3	3.97
P8	35～×35～×26	3.88
	礎板２枚重なる。礎板実測値：上 25.0×9.0× 厚さ 3.0 ㎝ 下 25.0×11.5× 厚さ 2.5 ㎝	
P9	25～×20～×12	3.89

表４　柱穴列１柱穴表

No.	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）
	備考	
P1	40　×37　×10	4.01（礎板上 4.10）
	礎板２枚重なる。礎板実測値：上 16.0×9.0× 厚さ 3.0 ㎝ 下 18.0×10.0× 厚さ 3.0 ㎝	
P2	24　×20　×　5	3.97（礎板上 4.06）
	礎板実測値：19.5×9.5× 厚さ 6.0 ㎝	
P3	43　×32　×12	3.90
P4	29　×24　×　9	3.89



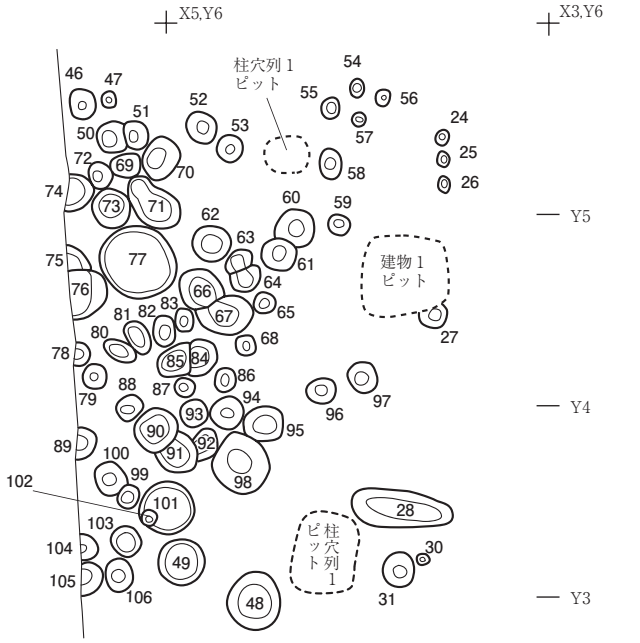
溝１　土層説明

１層　暗茶褐色粘質土　1～5 ㎝大の土丹粒子、かわらけ片・炭化物を含む。しまりあり。

(S=1/40)

0　50　1m

図10　溝１



(S=1/40)

0　50　1m

図11　第３面ピット

ピット（図８・11、表５）

建物を構成するもの以外に、87口のピットが検出されている。ピットが集中して検出された調査区西側、X3 ～ 5、Y4 ～ 5付近については、中世第３面遺構配置図（図８）の他にスケールを換えた別図（図11）を設けて示した。検出されたピットは深さが10㎝以下や5㎝に満たないものなどもあり、人為的な

掘り込みかわからないものも含まれている。意図的に掘り込まれた穴と捉えるより、建物の占有地内のある部分に検出される凹みの集合として考えるべきものかもしれない。個々のピットの詳細は3面ピット表を参照されたい。

表5　第3面ピット表

遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）	遺構名	長径 × 短径 × 深さ（cm）	底面標高（m）
P 19	30～×18～×19	3.91	P 63	16 ×10～× 6	3.95
P 20	8 × 8 × 8	4.02	P 64	17 ×12～× 3	3.98
P 21	8 × 7 × 7	4.04	P 65	12 ×12 × 4	3.98
P 22	7 × 7 × 4	4.09	P 66	23～×21～× 8	3.92
P 23	12 × 8 × 6	4.05	P 67	30 ×22 × 8	3.92
P 24	8 × 7 × 3	4.03	P 68	11 ×11 × 6	3.94
P 25	8 × 6 × 3	4.03	P 69	16 ×13 × ?	−
P 26	8 × 6 × 3	4.03	P 70	23 ×19 × 5	3.95
P 27	14 ×13～× 6	3.97	P 71	33 ×20 × 7	3.93
P 28	54 ×19 × 9	3.94	P 72	14 ×12 × 6	3.93
P 29	42～×22～×12	3.90	P 73	21 ×20 × 8	3.91
P 30	6 × 6 × 4	3.98	P 74	20～×14～× 6	3.93
P 31	18 ×16 × 5	3.97	P 75	14～×12～× 6	3.93
P 32	34 ×30 ×17	3.87	P 76	26～×20～× 6	3.93
P 33	17 ×17 × 5	3.97	P 77	41 ×37 × 4	3.95
P 34	10 ×10 ×(15)	3.93	P 78	12～× 8～× 6	3.94
P 35	35 ×30 ×13	3.85	P 79	14 ×12 × 5	3.95
P 36	45 ×26～×21	3.83	P 80	18 ×10 × 5	3.95
P 37	17～×14～× 4	3.96	P 81	18 ×12 × 8	3.92
P 38	14 ×14 × 4	3.97	P 82	17 ×13 × 6	3.94
P 39	9 × 7 × 5	3.97	P 83	13 ×10 × ?	−
P 40	9 × 7 ×10	3.92	P 84	20 ×14～× 3	3.97
P 41	15 ×14 × 3	3.98	P 85	17～×17～× 3	3.97
P 42	15 ×13 × 8	3.92	P 86	14 ×12 × 3	3.98
P 43	12 ×12 × 3	4.29	P 87	11 ×11 × 3	3.98
P 44	13 ×10 × 4	3.95	P 88	14 ×12 × 4	3.96
P 45	12 × 9 × 8	3.91	P 89	17～×10～× 7	3.93
P 46	16 ×14 × 4	3.93	P 90	22 ×21 × 8	3.92
P 47	9 × 8 × 3	3.94	P 91	20～×20 × 3	3.97
P 48	30 ×27 × 4	3.96	P 92	14～×15 × 3	3.97
P 49	24 ×22 × 3	3.97	P 93	14 ×14 × 4	3.96
P 50	18 ×17～× 4	3.90	P 94	17 ×16 × 4	3.96
P 51	16 ×12～× 5	3.89	P 95	21 ×18 × 7	3.94
P 52	18 ×16 × 2	3.97	P 96	15 ×14 × 2	4.00
P 53	14 ×14 × 5	3.96	P 97	16 ×14 × 7	3.95
P 54	10 × 7 × 3	4.02	P 98	32 ×28 ×11	3.89
P 55	12 ×10 × 5	3.99	P 99	12 ×11 × 3	3.97
P 56	8 × 7 × 3	4.01	P100	17～×16 × 8	3.92
P 57	7 × 7 × 3	4.01	P101	30 ×28 × 3	3.97
P 58	16 ×12 × 7	3.95	P102	8 × 8 × 8	3.92
P 59	11 ×10 × 5	3.96	P103	16 ×15 × ?	−
P 60	20～×20 × 7	3.94	P104	13～×10～× 5	3.95
P 61	18～×18 × 4	3.99	P105	18～×12～× 3	3.97
P 62	20 ×19 × 6	3.95	P106	17 ×14 × 4	3.96

第4節　古代の遺構確認調査（図12）

古代の遺構確認調査は黒褐色粘質土（図3－9層）上で行なった。20箇所でピット状の痕跡を検出したが調査対象深度に達したため掘削調査は行なわず、平面プランを記録するに留めた。プラン109は中世面で見逃された掘り込みと考えられるもので、建物1の柱穴・P5として中世第3面で報告している。その他プランにも中世面からの掘り込みが含まれているかもしれない。古代の遺構である可能性が高いものとしては、調査区北壁土層で比較的規模の大きい落ち込み（図3･12－10･11層）が確認されている。覆土はいずれもしまりに欠ける黒灰色粘質土で、10層は多くの古代遺物と玉石を含み、11層は径10cmの土丹を含んでいる。

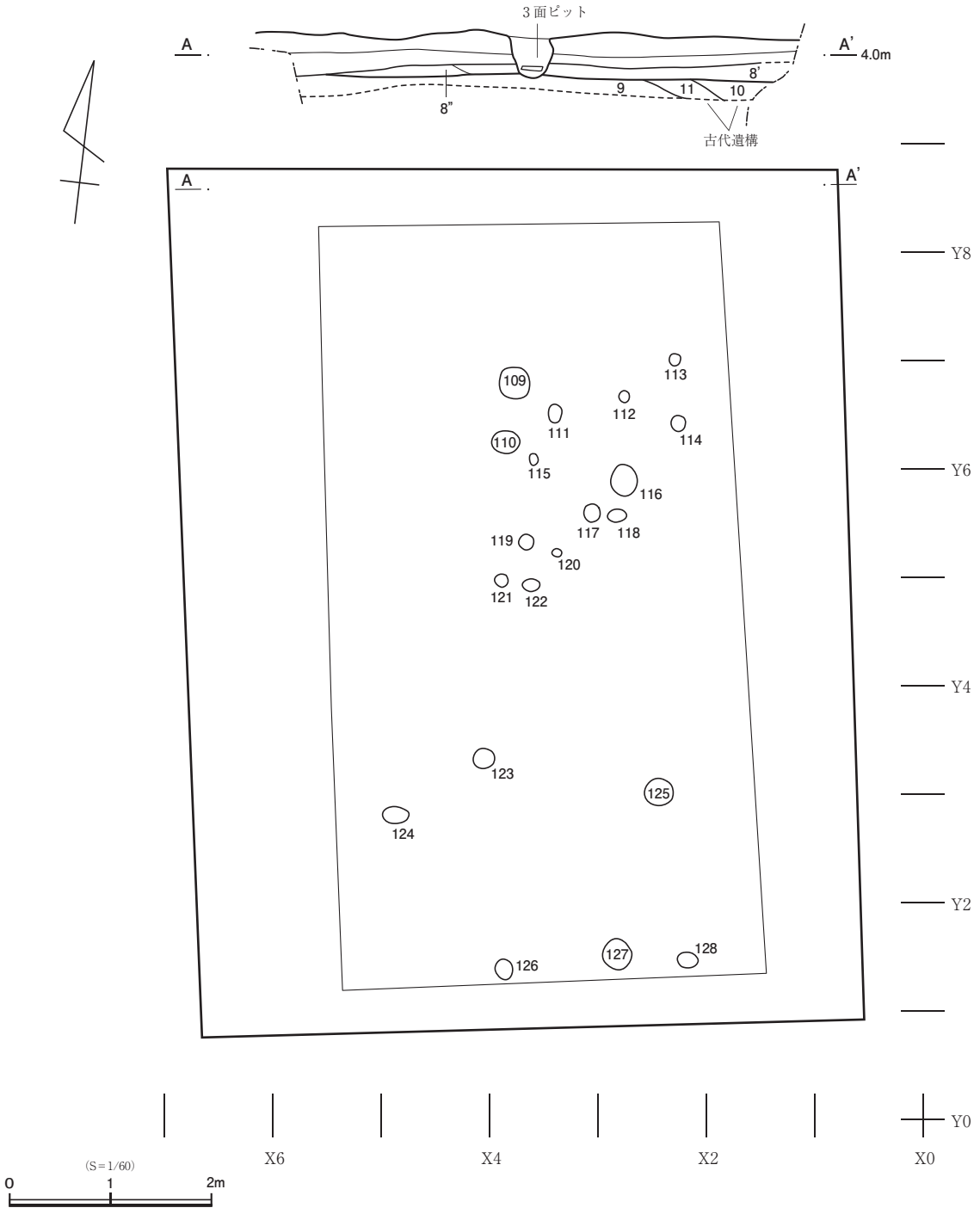


図12　古代遺構配置図

第四章　発見された遺物

第１節　中世の遺物（図 13 ～ 18、表 7）

第１面出土遺物（図 13）

図13は、1面上包含層（図3 － 2層）から出土した遺物である。1は瓦質製品の高台部片である。器表面の摩耗が激しいが、内外面とも磨かれた痕跡がある。小片のため産地の検討は難しいが、胎土がやや粗く、軟質であることから在地で生産された可能性も考えられる。2は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類の口縁部の小片である。3は尾張山茶碗系片口鉢の口縁部の小片である。器壁に粘土紐痕・指頭圧痕がみられる。口唇部は外側端に、粘土紐を玉縁状に貼りつけた後、上端をナデて平坦面を作り出しており、中央が沈線状に凹んでいる。13世紀後葉～ 14世紀初頭頃の瀬戸窯産の可能性が考えられるが、産地の特定はできない。4は尾張山茶碗系片口鉢の体部の破片である。内面は使用により磨滅している。体部上位は横ナデ、下位は縦位のヘラケズリ調整が行われている。瀬戸窯産で、14世紀以降のものであろう。5は瀬戸窯産の縁釉小皿の口縁部の小片である。ロクロ成形で、口縁部の内面から外面上部に黒黄色不透明の鉄釉が漬け掛けされている。6は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の口縁部の小片である。釉は灰青緑色半透明でやや厚めに施釉されている。

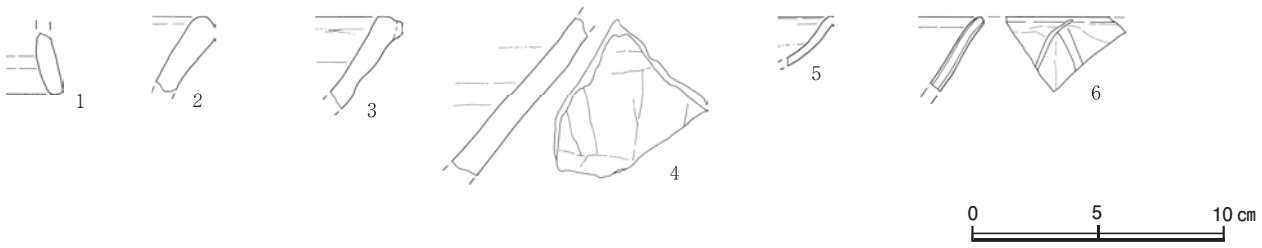


図13　第１面出土遺物

第２面出土遺物（図 14）

図14は、2面覆土から出土した遺物である。1はかわらけの小皿である。体部に丸味があり口縁が浅く開いている。2はかわらけの小皿の小片である。口縁は外反気味で、器高が低く、体部が厚手なため底浅である。3はかわらけの小皿の小片である。口縁部に向かい直線的に開いている。体部に比べ、底部の厚みは薄くなる。器高が高い。4はかわらけの小皿の小片である。口唇部に向かって真直ぐ開くも、やや丸味を持つ。器高が高い。5は瀬戸内系瓦器皿で、口縁部と底部の小片である。ロクロ成形で外底回転ヘラ切りである。焼成不良のため内面全体と外面体部上半は炭素吸着が不完全で白桃色を呈する。6は土錘である。丸棒にかわらけと同質の粘土を巻き付け、手で握るなどして成形したと考えられる。棒を抜く際に入ったか、上下端部に沈線が入っている。7は瓦器質火鉢の口縁部の小片である。器表面の破損が激しく、成形・整形について不明である。器表面の一部に灰黒色が残る。8は瓦器質火鉢の脚部である。図14 － 7と同一個体であろう。内面は、横・斜めのナデが施されている。外面は、タテヘラ磨きが施されている。接地面が磨滅している。9は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。縁帯は2.4cmと狭く、口縁から縁体部に降灰している。10は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。縁帯は3.7cmと広目である。11は常滑窯産の甕の肩部の破片である。外面には方形区画の中に「＊」形を配した文様が押印されている。12は常滑窯産の甕の胴部の破片である。内面には平織の布の端切れが付着している。13は研磨痕のある常滑片である。外面は厚く降灰した自然釉が剥離している。全面に擦痕があり、角を使用した痕跡がある。14は常滑窯産の甕の破片である。内外面を敲打されたか、表面がはじけたよ

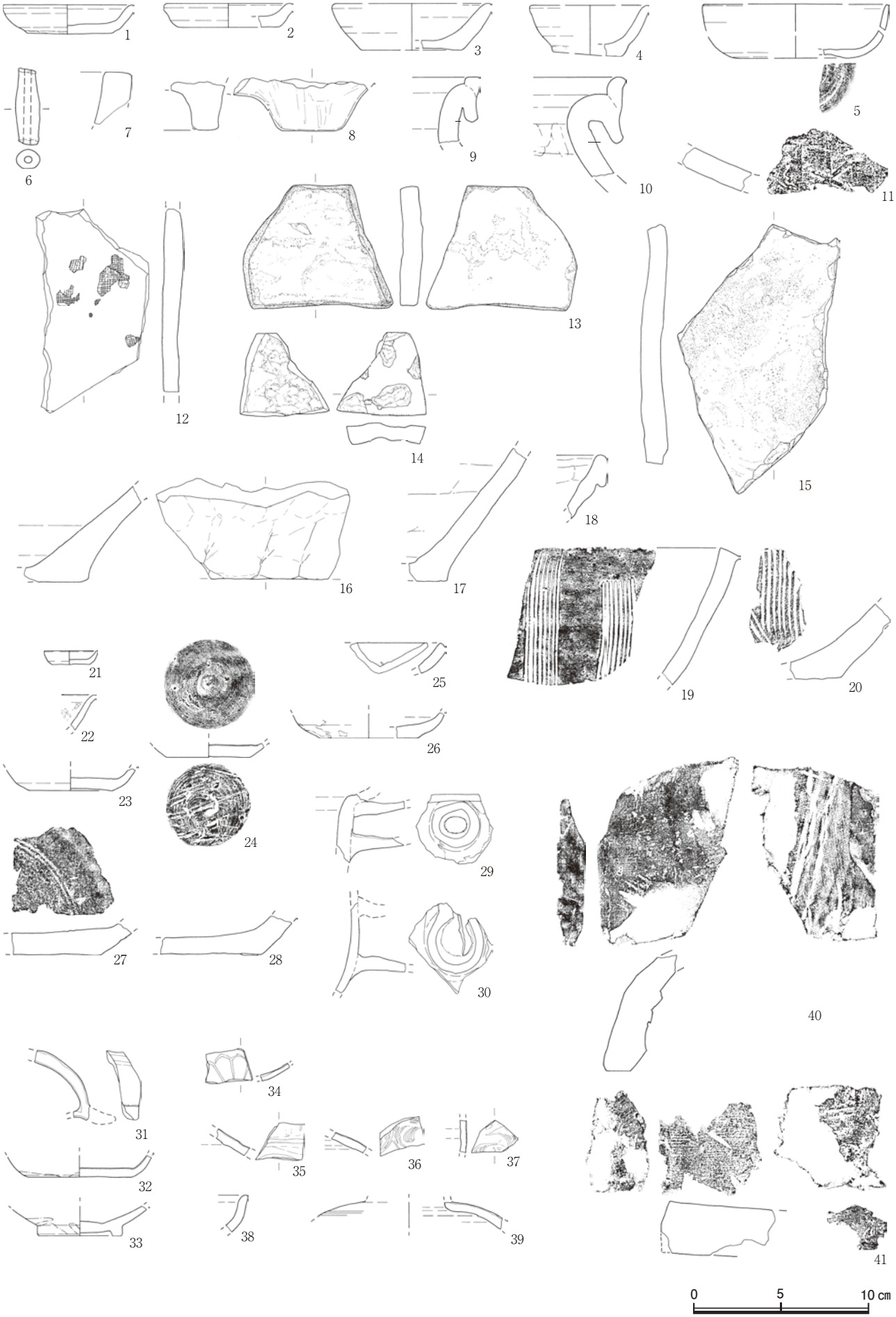

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
5
10 cm

図14　第２面出土遺物

うな痕跡が残っている。15は研磨痕のある常滑片である。内外面に擦痕が認められるが、外面側の方がよく使用されている。外面周縁角に敲打したような痕がみられる。16は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類の底部である。外面底部脇から胴部にかけて強いヘラナデが施されている。底部外面は砂底である。17は常滑窯産の片口鉢Ⅱ類の底部片である。体部外面ヘラナデ、内面は、ヘラでヨコナデが施されている。内底部に厚く降灰しいている。使用により、内面が磨滅している。18は東播系鉢の口縁部の小片である。輪積成形、ロクロ回転仕上げが施され、口縁部には縁帯が付けられている。重ね焼きの影響により、縁帯部は灰黒色を呈している。19は備前窯擂鉢の口縁部の小片である。輪積成形で、横方向の回転ナデで形を整えている。内面に8本単位の条線が刻まれている。20は備前窯擂鉢の底部の小片である。輪積成形で、回転ナデで形を整えている。内面に8本以上を単位とする条線が刻まれている。外面底部脇は、指ナデ調整が施されている。条線の凹部は暗灰茶色の自然釉を被っている。21は瀬戸窯産の小型の入子である。ロクロ成形で、外底部はヘラケズリされている。底部を除き灰緑色半透明の自然釉を被っている。22は瀬戸窯産の入子の口縁部の小片である。ロクロ成形である。内面に緑色の自然釉が付着している。釉薬の付着状況から現状よりも広範囲に降灰していたと考えられる。23は瀬戸窯産の入子の底部である。ロクロ成形で、外底に糸切り痕がみられる。内底には軽いナデが施されている。外面に僅かに降灰している。24は瀬戸窯産の入子の底部である。ロクロ成形で、外底部に糸切り痕と板状圧痕がみられる。内底部はナデが施されている。内底に薄く降灰している。25は瀬戸窯産の卸皿の口縁部の小片である。ロクロ成形である。見込みに卸目を1本確認できる。口縁から内面に緑色透明の灰釉が施釉されている。26は瀬戸窯産の縁釉小皿の底部の小片である。ロクロ成形で、外底に糸切り痕がみられる。残存する体部の上端に茶緑色の灰釉が施釉されている。一部、垂れた釉を拭おうとしたような痕跡もみられる。内底面には、窯クソが付着している。27は瀬戸窯産の折縁深皿の底部片である。残存する体部は回転ヘラケズリされている。底部に不定方向のヘラナデの痕跡がみられる。内面は櫛歯状工具による回転を利用した沈線を3条まで確認できる。外面底部脇と内底に淡緑色の灰釉が薄くハケ塗りされている。底部は露胎である。28は瀬戸窯産の折縁深皿の底部片である。外面底部から体部は、回転ヘラケズリ後に回転ヘラナデ調整が行われたようで、器表面が平滑に仕上がっている。29は瀬戸窯産の柄付片口の取手（柄）の破片である。体部ロクロ成形後に、取手を貼り付けている。緑色透明の灰釉が施釉されているが、取手の一部は剥落している。残存する口縁部基部の形態から14世紀前半から中葉頃に生産されたと考えれるが、小片のため断定できない。30は瀬戸窯産の柄付片口の取手（柄）の破片である。体部ロクロ成形後に、取手を貼り付けている。淡茶緑色透明の灰釉が施釉されている。31は龍泉窯青磁で、酒会壺ないし香炉の蓋の破片である。全体に釉が厚く施されている。蓋の鍔の部分が破損しているため、全体像の把握が困難である。32は白磁の口兀皿の底部である。白色半透明の釉が薄く施釉されている。33は白磁の口兀碗で内底周縁は沈線が巡っている。白青色で半透明の釉が内面から外面高台脇まで薄く施釉されている。34は景徳鎮窯青白磁の皿の破片である。内面に花文が型押しされている。釉調は、白青色を呈している。外面下半は露胎である。35は景徳鎮窯青白磁梅瓶の部位不明の破片である。文様は不明である。釉調は水青色を呈している。36は景徳鎮窯青白磁梅瓶の胴部の破片である。文様は渦巻文である。釉調は、土中で色素沈着ししたか、淡茶色味かかった水青色を呈し、やや光沢がある。37は景徳鎮窯青白磁梅瓶の胴部の破片である。文様は渦巻文である。二次焼成を受け失透している。38は建州窯天目茶碗の口縁部の小片である。暗灰色で精良な胎土に茶黒色系の不透明な鉄釉が施釉されている。39は高麗青磁で瓶子の頸部片である。外面に沈線が2条刻まれている。釉調は、灰青色を呈している。40は男瓦の破片である。胎土は灰色を呈し、砂粒・雲母・赤色粒などを含む。凸面に、

縄目叩き痕、ヨコナデの痕跡がある。凹面は、布目痕が明瞭に残る。一部、布目に縮みがみられる。側面側の縁は、ヘラケズリである。鶴岡八幡宮中世最下層出土の瓦と同類の資料である。41は女瓦の破片である。胎土は黒～灰白色を呈し、砂粒・白色粒・小石粒を含む。凹面は、離れ砂と弱い布目の圧痕がある。凸面は、平行状の叩き目が僅かに残る。側面は2段に面取りされている。表面は燻べ焼きにより黒色を呈する。永福寺Ⅱ期所用瓦（1235 ～ 1280年頃）の女瓦D類と同類の小片である。

図15　土坑１出土遺物

第２面遺構出土遺物（図15）

図15は、土坑1出土遺物である。1はかわらけの小皿の小片である。器壁は、ゆっくり開きながら立ち上がり、口唇は尖る。外面体部はロクロ目が強く残る。

第３面出土遺物（図16）

図16は、3面覆土から出土した遺物である。1はかわらけの大皿の底部で、体部は打ち欠かれているようにみえる。高台状の厚い底部を持ち、底部の回転糸切り痕は比較的幅が広く、内底面は2本の指を使った１回ナデに見える。微砂・金雲母を含む良土で、焼成はやや良好、灰褐色を呈する。形態や調整技法に鎌倉の古手とされる一群と近い特徴がみられるもので、12世紀末まで遡るものかもしれない。2はかわらけの大皿の底部である。全体の器形は不明である。外底の糸切り痕は糸目が細かい。内底に2回以上、横方向のナデが施されている。3はかわらけの小皿の小片である。内底幅広く、器壁はゆっくり開きながらたちあがり、口唇が尖っている。4はかわらけの小皿の小片である。内底幅広く、器壁はゆっくり開きながら立ち上がり体部中位に稜を持つ。口縁部は、やや外反して、丸く収まる。5はかわらけの小皿の小片である。内底幅広く、体部下位に稜を持ち、器壁は丸味をもって、ゆっくり開きながら立ち上がる。6はかわらけの小皿の底部である。底部が小さい薄手のもので、碗状に均整のとれた器形になると思われる。微砂および赤色粒を多く含み、焼成は良好、明橙褐色を呈する。7はかわらけの底部の小片である。底部の約1/4のみの残存であるが、大皿と考えられる。内底面にはナデが施されておらず、ロクロ目痕が残っている。8は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。自然釉が剥げて、素地がみえている。9は常滑窯産の甕の口縁部の小片である。縁帯は幅1.8cmと狭い。口縁部に降灰している。10は研磨痕のある常滑窯甕片である。内面の縁辺角に擦痕が認められる。11は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類の口縁部の小片である。12は常滑窯産の片口鉢Ⅰ類の底部の小片である。体部下半は、ヘラケズリで、高台周辺部は高台貼付後ナデ調整が施されている。表面が磨耗している。13は壺の底部の小片である。内面のロクロ目が強いく、外面には回転ヘラナデまたはヘラケズリの痕跡がみられる。高台は、付け高台である。内底部のみ僅かに降灰している。小片であるため、産地の特定は難しいが、胎土の特徴などから東遠系の可能性も考えられる。14は東播系鉢の口縁部の小片である。輪積成形で、ロクロ回転仕上げが施されている。口縁部には縁帯が付けられている。重ね焼きの影響により、縁帯部が灰黒黄色を呈している。15は東濃型山茶碗の口縁部の小片である。口縁部は外反し、肥厚している。内面に薄く降灰している。白土原ないし明和窯式の可能性が考えられる。16は東濃型山茶碗の口縁部の小片である。器壁は3mmと薄い。口縁部は締めナデにより外反している。内外面に薄く降灰している。白土原ないし明和窯式の可能性が考えられる。17は瀬戸窯産の入子の口縁部の小片である。ロクロ成形である。口縁部にのみ降灰している。18は瀬戸窯産の輪花型入子の口縁部の小片である。ロクロ成形で、口縁をヘラで押え輪花型にしている。外面のヘラで押された切れ目に、灰緑色透明の自然釉が溜まっている。

19は瀬戸窯産の柄付片口の注口の破片である。注ぎ口を手づくね成形している。黄緑色透明の灰釉が施釉されている。20は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部の小片である。淡青緑色の透明な釉が施釉され、畳付のみ露胎である。割れ口が打ち欠かれたようになっている。21は滑石鍋転用品である。左右端部、表裏面に小刀状痕がみられる。22は鳴滝(奥殿)産の仕上げ砥の断片である。全体、青灰色を呈している。砥面は片面下側のみに残存しており表裏面とも剥離が著しい。上下面、左右側面は成形面で、上面は折りとり痕が残る。下面は2次成形がなされたか、斜めに切り落とされている。23は鳴滝産の仕上砥の断片である。全体、淡褐色を呈している。表面は使用により擦り減って凹んでいる。裏面の一部は、剥離している。左右側面は、成形面と思われる。24は加工痕のある軽石である。人為的な擦痕が認められる。表面、淡灰黄色で、芯は白色である。25は牛または馬の骨の加工骨残片である。刃物痕が複数入っている。26は鹿の角の加工骨残片である。上下端部を刃物で切られている。27は獣種不明の加工骨残片である。表面に刃物痕が多数みられる。

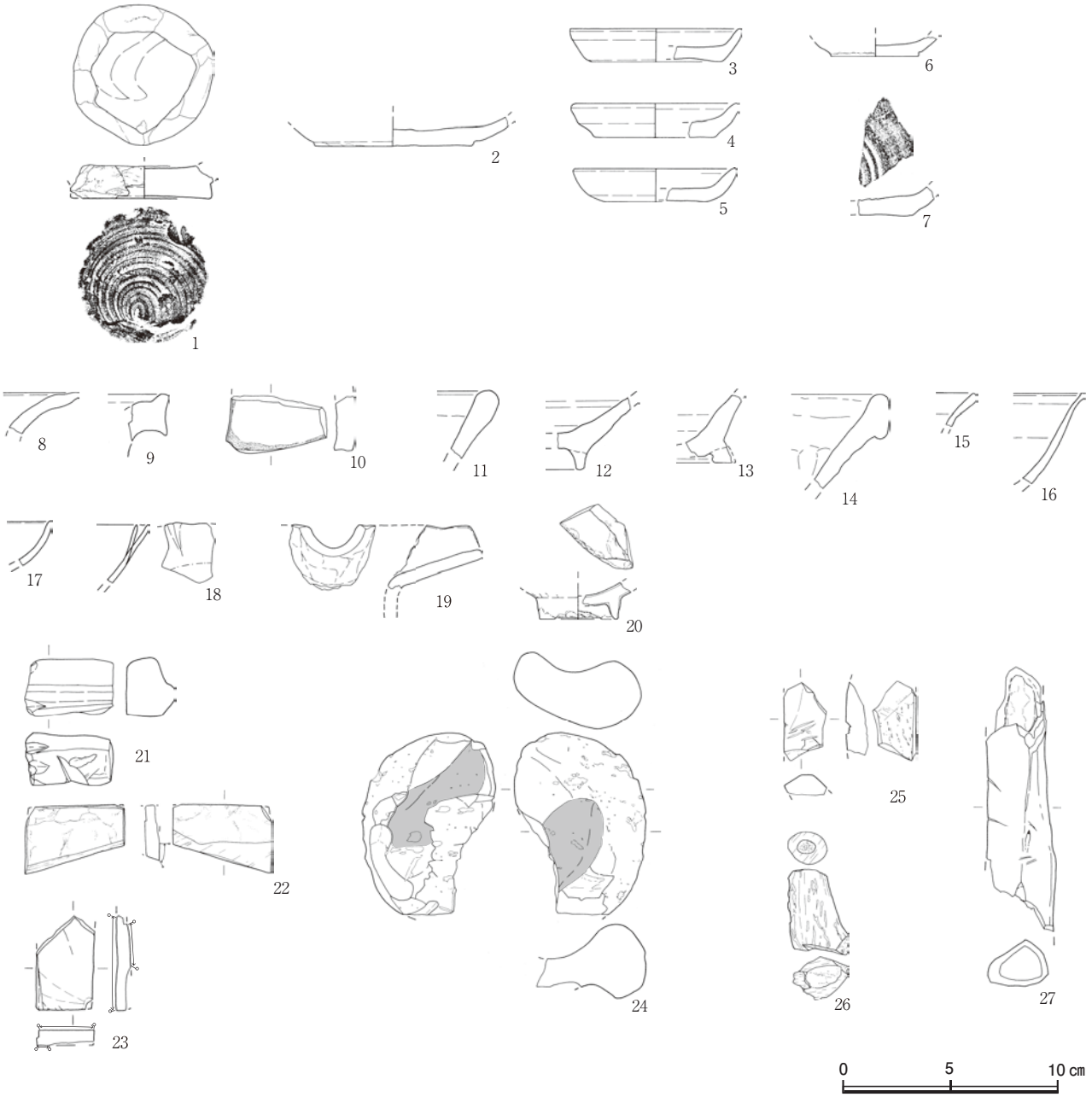


図16　第3面出土遺物

第３面構成土出土遺物（図１７）

図17は古代の遺構確認面検出までに出土したもので3面構成土中の遺物である。1はかわらけの大皿の小片である。器高が高く、体部に稜を持たず、器壁はやや内湾気味に立ち上がっている。2は木製品で蓋の断片であると考えられる。3は木製品で曲物の蓋。一箇所に幅3mmの桜皮紐が貫通している。4は円板状木製品である。円板の中心に、径1.0cmの穿穴がある。5は部材で用途不明品。下部の片側は欠損するも長い板状を呈するもので、表面は外周に4mm程の縁を残して、浅い凹みが作り出されている。背面は両端の左右対になる位置に、枘穴状の切り込みが入れられている。6は部材である。上下端部は切断痕が有る。7は鹿の角の加工骨残片である。上端部に刃物痕がみられる。全体に摩耗が激しい。

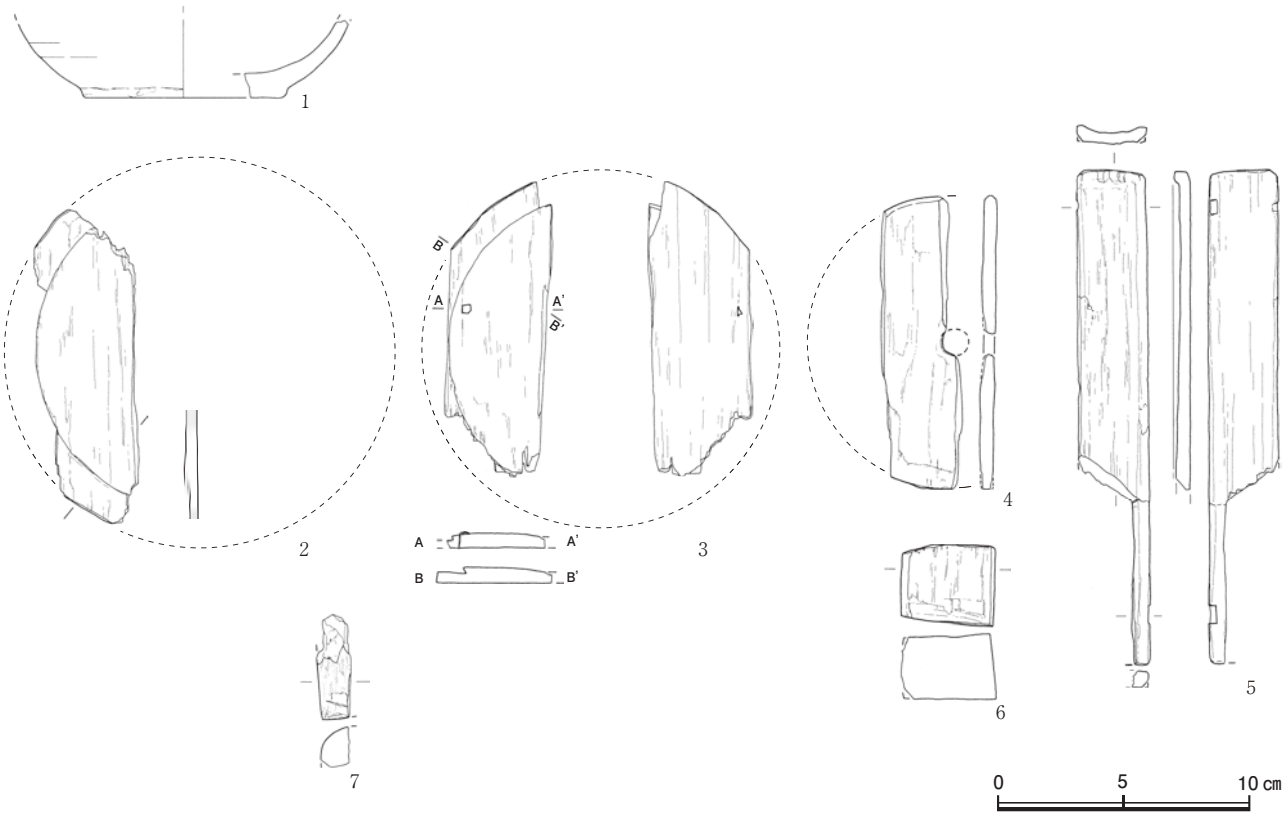


図１７　第３面構成土出土遺物

表土・撹乱出土遺物、調査区内採集遺物（図１８）

図18は、表土・撹乱および排水用の側溝・釜場から出土した遺物である。1はかわらけの大皿の底部の小片である。外底部に線状の圧痕がみられる。2はかわらけの小皿の完形品である。体部中位に弱い稜を持ち、口縁部は外反する。3は常滑窯産の甕の肩部の破片である。内面は、指頭による接合痕がみられる。外面には入れ子状の長方形区画の角を対角線で結び、区画内に縦線を充塡した文様が押印されている。押印文は灰緑色の自然釉を被っているため凹凸が不明瞭である。写真図版（図版6）を参照されたい。4は瀬戸窯産の縁釉小皿の口縁部の小片である。ロクロ成形である。内面から外面上部は、灰緑色不透明の灰釉が厚く漬け掛けされている。釉が剥離している。5は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部片である。内底に蓮華文が印刻されている。青緑色半透明の鈍い光沢のある釉が、薄く施釉されている。高台畳付から高台内は露胎である。6は龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗の底部の小片である。釉調は暗灰緑色透明を呈し、薄く施釉されている。高台畳付から高台内は露胎である。内底には、敲打したような痕があ

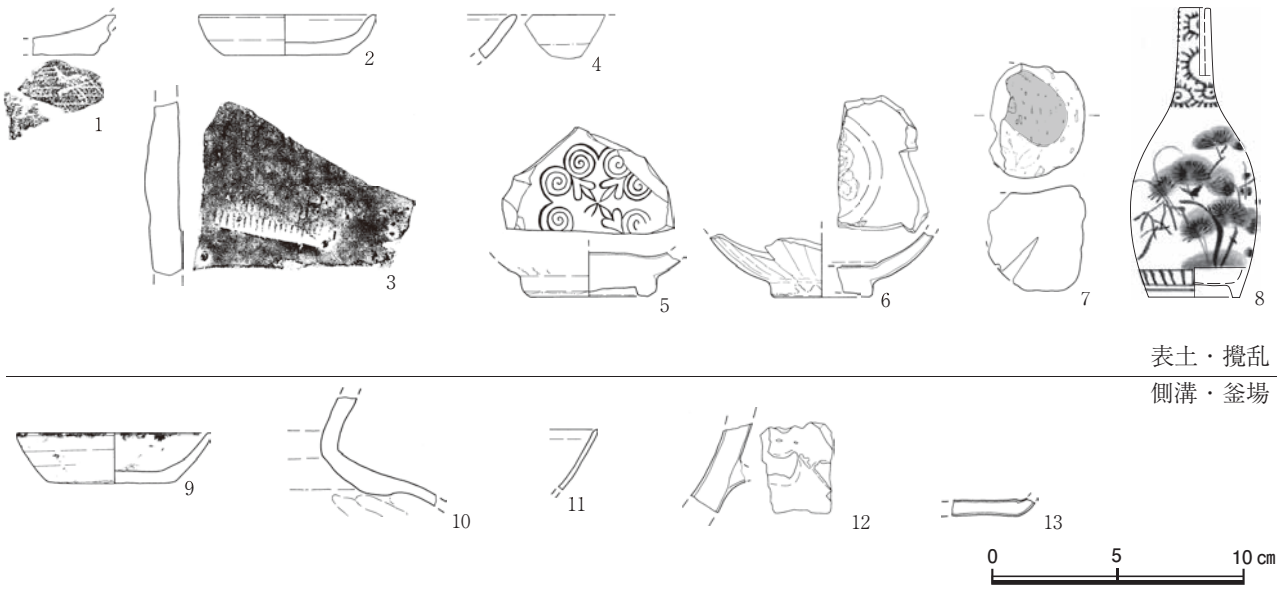


図18　表土・撹乱出土遺物、調査区内採集遺物

る。7は軽石である。表面は、薄灰黄色で、芯は白色である。縦2.2cm、横2.2cmの幅の凹面に、人為的な擦痕が認められる。8は、染付徳利である。伊万里窯のもので頸部にタコ唐草を配し、表面に松竹梅、裏面には長剣状の草文が描かれている。9はかわらけの小皿の完形品である。器高が高く、体部中位に稜を持ち、下位がやや凹む傾向にある。薄手で、均整のとれた器形をしている。口唇部に煤が付着していることから､灯明皿として使用されたと考えられる。10は常滑窯産の壺の頸部から肩部の破片である。内側に粘土を継ぎ足した部分を指で押さえて調整した痕跡がみられる｡外面肩の自然釉が剥離している。11は瀬戸窯産の入子の口縁部の小片である。ロクロ成形である。口縁部に薄く降灰している。12は龍泉窯青磁で器種は不明。体部外面に耳ないし取手を貼付けていた痕跡が残る。釉調は緑青色半透明で細かい貫入が入る。外面上半は焼成時に釉が流れたか施釉薄めで、色調は褐色味を帯びている。13は白磁の口兀皿の底部の小片である。全体に薄く灰白色の釉が施釉されている。

第2節　自然遺物

軽石（表6、写真図版8）

調査で発見された軽石についての情報として、比重を測定できなかったため、表6におおよその大きさと重さを示した。ほとんどの個体に欠損が見られるため、計測値は全て残存値である。備考欄に黒色と記した4点を除いた46点は、色調白色を呈するもので、繊維状に発砲して軽く、水に浮く性質を持ち、微細な石英を少量含んでいる。欠損部を除き全面が摩擦しているが、そのうち摩擦面が不自然に凹んでいる個体（1・18）は人為的に加工されている可能性があるものとして実測図を掲載した（図16－24、図18－7)。黒色を呈するものは白色のものに比べて、発砲の度合いが甘く密度があり重いが、33・35・36の3点は水に浮く性質を持っている。34だけが水に沈むもので、石英の粒子が大きく径3㎜を超えるものも含まれるほか、かんらん石かと思われる琥珀色の透明粒子が含まれている。

50点の軽石は大半が中世の第1生活面より下の包含層（図3－3～7層）から出土したものである。おそらく中世第3面下の砂質土層（図3－6・7層）が堆積する時期に調査地に到達したもので、2面・3面上の包含層出土のものについては中世期の地形の際に混入したものと思われる。

表６　軽石計測表（寸法：cm　重さ：g）

個体 No.	出土位置	長 × 幅 × 厚	重さ	備考	個体 No.	出土位置	長 × 幅 × 厚	重さ	備考
S－ 1	排水溝	4.2×3.8×4.3	19.1	擦痕あり（図 18－7）	S－26	3 面	6.7×4.8×2.7	11.8	
S－ 2	2 面	1.9×1.9×1.2	1.8		S－27	3 面	3.4×3.3×1.7	5.6	
S－ 3	2 面	1.9×1.8×1.0	1.4		S－28	3 面	5.0×4.2×3.1	11.6	
S－ 4	2 面	6.6×4.5×4.4	18.6		S－29	3 面	6.7×4.5×3.7	17.8	
S－ 5	2 面	5.9×5.0×3.4	24.3		S－30	排水溝	3.4×2.7×1.0	1.0	
S－ 6	2 面	5.4×4.3×2.9	13.1		S－31	排水溝	7.3×4.0×3.5	24.6	
S－ 7	2 面	3.9×3.6×2.6	6.8		S－32	4 面	2.7×2.7×1.5	3.7	
S－ 8	2 面	2.8×2.3×1.5	1.7		S－33	4 面	4.7×3.1×2.4	10.1	黒色
S－ 9	2 面	3.0×2.4×1.3	1.0		S－34	4 面	7.7×7.1×5.4	141.7	黒色　水に沈む
S－10	2 面土坑 1	3.7×2.2×1.5	2.2		S－35	4 面	5.0×4.6×3.6	20.9	黒色
S－11	2 面構成土	8.9×7.4×6.2	74.8		S－36	4 面	8.3×7.6×6.9	114.7	黒色
S－12	2 面構成土	8.5×6.2×3.9	31.8		S－37	4 面	4.2×3.7×2.7	6.1	
S－13	2 面構成土	6.2×2.9×2.9	8.7		S－38	4 面	2.8×2.4×1.7	4.4	
S－14	2 面構成土	5.3×5.0×2.4	12.6		S－39	4 面	4.2×3.0×2.4	8.2	
S－15	2 面構成土	5.9×3.1×1.8	5.9		S－40	4 面	3.7×2.9×2.8	7.7	
S－16	2 面構成土	2.9×2.8×1.4	1.3		S－41	4 面	3.6×3.5×2.6	4.0	
S－17	2 面構成土	2.6×2.3×0.8	0.7		S－42	4 面	6.2×4.5×3.8	17.7	
S－18	3 面	5.8×8.3×3.0	31.0	擦痕あり（図 16－24）	S－43	4 面	3.8×2.8×1.6	3.2	
S－19	3 面	4.9×4.4×2.1	6.1		S－44	4 面	2.6×2.3×2.2	5.0	
S－20	3 面	2.7×2.3×1.3	3.2		S－45	4 面	4.9×4.1×3.2	9.1	
S－21	3 面	2.5×1.9×1.4	2.5		S－46	4 面	4.7×4.1×2.9	8.2	
S－22	3 面	2.7×2.0×1.9	2.6		S－47	4 面	5.6×4.9×3.5	11.6	
S－23	3 面	1.9×1.5×0.8	0.3		S－48	4 面	7.4×5.8×4.1	21.1	
S－24	3 面	4.2×2.8×2.3	4.6		S－49	4 面	7.2×5.8×3.7	20.1	
S－25	3 面	4.9×3.9×3.0	12.5		S－50	4 面	6.7×5.3×4.0	25.3	

骨（写真図版８～ 10）

中世第3面、X3,Y3付近から馬の右上肢骨がまとまって出土したのを始め、65点以上の骨が出土している。取り上げの際に破損してしまったものも多く出土数を明確にできない上、種別・部位を特定できないものが含まれるため、残りの良い65点について、おおよそ1/2倍大の写真を掲載した。(写真図版8～ 10) 全体に馬の四肢骨が多く、鹿・犬・猪などの陸生哺乳類が含まれるほか、人骨かと思われる小片も１点出土している。

大半が中世期の包含層中（図4－2～4層）から出土しており、遺構（2面土坑1：小型陸生哺乳類四肢骨3片､3面溝1:馬基節骨1点）から出土したものも包含層中のものが覆土中に混入された可能性が高い。3面、X3,Y3付近から出土した馬骨については、周囲に掘り込みなど確認されておらず、第3生活面が廃棄される頃に、そこに置かれたか捨てられたかしたものと思われる。右上肢のみがまとまった理由については不明である。

第３節　古代の遺物（図 19、表 9）

調査で出土した古代の遺物をまとめた。大半が古代の遺構確認面上（図3－9層上面）及び8層中から検出されたものであるが、中世期の造成土・遺構に混入されたものや、表土・排水溝・釜場など平面的な調査が行なわれていない範囲から出土したものも合わせて報告する。

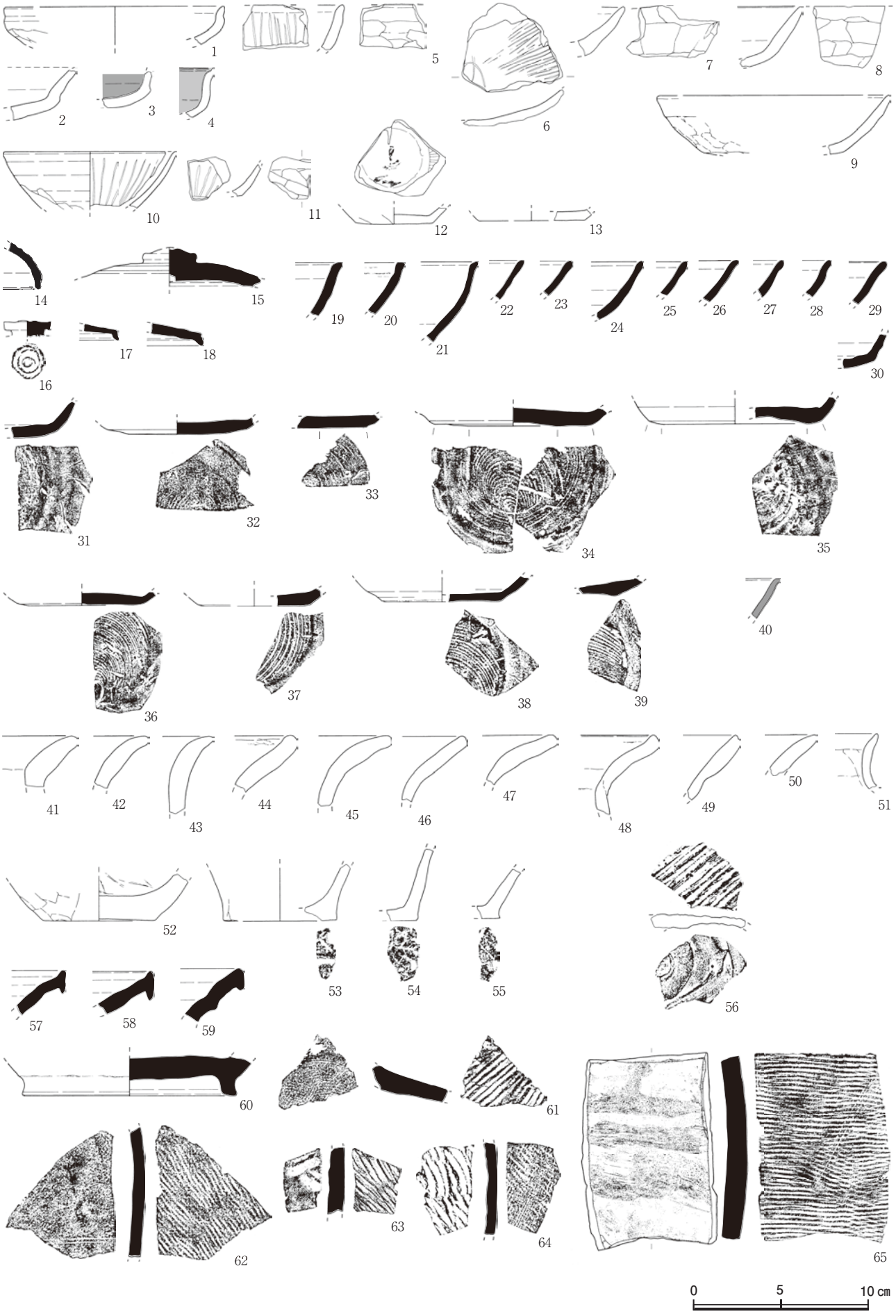

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
0
5
10 cm

図19　古代の遺物

1 ～ 13 は土師器の坏で、1 ～ 6 は 7 世紀代の所産である。3 は内外面に黒彩を施すもの、4 は内外面赤彩された比企型坏。5・6 は内面に暗文を有するもので、5 は北武蔵地方に系譜を持つ半球形を呈するもの。6 は内面に放射状暗文、中央に螺旋状暗文を配し、キメ細かく層状に剥がれ易い胎土などから畿内産の可能性がある。7・8 は相模型、9 は南武蔵型でいずれも 8 世紀後半代の所産と思われる。10 ～ 12 は甲斐型坏である。12 の内底は周縁に溝が巡り、中央付近に「山○」と読める墨書が残る。外面体部下位は斜め方向、底部は一定方向のヘラケズリが施されている。13 はロクロ成形で、胎土が精良であることなどから甲斐型の可能性が高い。外面底部周縁は回転糸切り痕が消されているが、小片のため調整技法がはっきりしない。14 ～ 18 は須恵器の蓋で、14 が比較的古手のもの。16 は摘み部分のみの残欠で内面割れ口には、糸切り痕の上に接着のための細い粘土紐が螺旋状に付着している。19 ～ 39 は須恵器坏で、19 ～ 21 の口唇部は内傾する平坦面が作りだされている。30 は 7 世紀末から 8 世紀初頭頃の高台付坏の体部が屈曲して立ち上がる部分と思われる。31 ～ 39 の底部片には法量の他、底部の切り離し技法やその後の調整技法に時期差が見られる。31 は残存する底部から体部下位 1㎝あたりまで、回転ヘラケズリ調整が施されたものと思われるが、その後にナデ調整が加えられたためケズリがはっきりしない。32 の底部は回転ヘラケズリの上に、周縁から体部にかけて回転軸がずれたか、手持ちによる別のケズリ調整が加わっている。33 は復元がかなわなかったが、底径 8 ～ 9㎝程度になるものと思われる。35 の回転ヘラケズリは体部下位のみに痕跡が残る。底部は歪んで上げ底気味のためケズリの工具が当たらなかったものと思われる。内底立ち上がり部分の体部との境は鋭く凹んで沈線状となっている。36 ～ 39 は底部回転糸切り後、調整が施されないもの。38・39 は焼成が不良のもので、還元がうまくかからず、橙～褐色系の色調を呈する。40 は灰釉陶器で、内面に灰釉がハケ塗りされており黒笹 90 号窯式の製品と思われる。41 ～ 55 は土師器甕で、41 ～ 43 は古墳時代後期のもの、44 ～ 49 は相模型である。44 は厚手で古手のものに見え、球胴甕になるかもしれない。46 は口唇部を面取りするもの。50 は通常見受けられる相模型の甕より、胎土が精良で、丁寧な作りに見える。51 は武蔵型で「コの字」状の口縁部が退化しているもの。52 は古墳時代後期の球胴甕の底部片、53 ～ 55 は相模型の長胴甕で底部に木葉痕が残る。56 は須恵器と思われるが断定はできない。器種は不明。外面は細かいハケ調整の後、叩き目のような平行条線で埋まっている。内面は強い指頭ナデが重なり、左端は何らの部分が剥がれたと見え、その周囲は接着のために薄く溶いた粘土を貼ったとみえる痕が残る。57 ～ 65 は須恵器で 57 ～ 59 は甕の口縁部片。60 は高台付きの壺で、外底面には回転ヘラケズリ調整が施されていたようだが、その後のロクロナデのため痕跡がはっきりしない。61 ～ 65 は甕の胴部片で、65 は硯に転用されている。65 の内面は甕成形時の当て具痕をわずかに残し、良く摩滅している。内面周縁角の一部には使用が及んだとみえる擦痕が残っている。

表７　中世遺物観察表（１）　復元値＝()、既存値＝～　※単位/（cm）

挿図番号	出土位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
				長さ	幅	厚さ	
13-1	1面	瓦質製品	高台部片				a.磨き b.灰白色 砂粒・黒色粒・白色粒多量 やや粗い c.器表面 灰黒色 e.やや甘い 軟質 f.産地不明
13-2	1面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.明灰色 砂粒・白色粒・小石粒多量 粗土 e.軟質
13-3	1面	尾張山茶碗系 片口鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.灰色　砂粒・黒色粒・小石粒微量、白色粒多量 e.良好
13-4	1面	尾張山茶碗系 片口鉢	体部片				a.輪積成形 回転ナデ→外面 縦位ヘラ削り　b.淡灰色 白色粒多量 小石微量 やや粗土 e.良好 硬質
13-5	1面	瀬戸窯 緑釉小皿	口縁部片				a.ロクロ成形 b.黄灰色 砂粒 やや粗土 d.内面～外面上部黒黄色不透明鉄釉漬け掛け e.良好
13-6	1面	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片				a.ロクロ成形　外面　鎬蓮弁文片切彫り b.灰白色 精良 堅緻 気孔有り d.灰青緑色半透明光沢有り　施釉厚い
14-1	2面	かわらけ	口縁～ 底部2/3	7.3	4.8	1.7	a.ロクロ成形 外底糸切り痕･板状圧痕 内底2～3回ナデ b.微砂多量､赤色粒･白針・土丹粒 やや粗土 c.黄橙色　e.やや良好
14-2	2面	かわらけ	口縁～ 底部1/3	(7.0)	(5.7)	1.4	a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底ナデ b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・黒色粒多量 良土 c.淡褐色 e.やや甘い
14-3	2面	かわらけ	口縁～ 底部1/6	(8.8)	(5.6)	2.7	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底ナデ b.赤色粒・白針 弱粉質 良土 c.橙色 e.良好
14-4	2面	かわらけ	口縁～ 底部1/6				a.ロクロ成形 内底ナデ b.赤色粒・白針 弱粉質 良土 c.橙色 e.良好
14-5	2面	瀬戸内系 瓦器皿	口縁部片 底部1/5				a.ロクロ成形 外底回転ヘラ切り b.胎芯 暗灰色 微砂・雲母・白色粒微量 良土 c.器表面 白桃色～桃色黒色 f.器表面摩耗
14-6	2面	土錘	完形	1.3	4.2	0.4	a.丸棒に粘土を巻き付け、手で握り成形か？ b.微砂・雲母・金雲母・白針 良土 c.褐橙色 e.良好
14-7	2面	瓦器質火鉢	口縁部片				b.胎芯 灰橙色 砂粒・雲母・赤色粒・白色粒・黒色粒多量　粗土 c.器表面 灰黒色 e.不良 軟質 f.器表面破損調整不明
14-8	2面	瓦器質火鉢	脚部片				a.外面ナデ 縦ヘラ磨き、内面 横・斜めナデ b.胎芯 灰色～灰白色 粗砂多量 砂質 粗土 c器表面 .暗灰色 e.軟質 f.設置面磨滅
14-9	2面	常滑窯 甕	口縁部片	縁帯幅2.4			a.輪積成形 b.灰褐色 砂粒・白色粒・黒色粒多量 やや良土 c. 器表面 暗茶色 d.口縁部 灰緑色自然釉 e.良好
14-10	2面	常滑窯 甕	口縁部片	縁帯幅3.7			a.輪積成形 b.灰色～暗灰色　砂粒・黒色粒微量、白色粒多量 やや粗土 c.器表面 青灰色　内面灰茶色～赤褐色 d.縁帯部 灰緑色不透明自然釉 e.良好
14-11	2面	常滑窯 甕	肩部片				a.輪積成形 押印文 b.橙色 砂粒・白色粒・黒色粒・微砂多量 粗土 c.器表面 暗褐色 内面 褐色 e.良好
14-12	2面	常滑窯 甕	胴部片	10.4 ～	5.7 ～	1.1 ～ 0.9	a.輪積成形 b.灰黒色 砂粒・白色粒・黒色粒・赤色粒多量 やや粗土 c.器表面　淡橙黄色　内面　暗褐色 e.良好・硬質 f.内面布付着
14-13	2面	研磨痕のある 常滑窯産甕片					b.淡灰色 砂粒・白色粒 良土 c.内面 淡褐色 d.外面 自然釉剥離 e.良好 f.内面～側縁擦痕 外面縁辺擦痕・一部敲打気味
14-14	2面	常滑窯 甕	胴部片	4.6	4.5	1.0 ～ 0.7	b.淡褐色 砂粒・白色粒・赤色粒・小石粒 良土 c.器表面 明茶色 内面 褐色 e.良好 硬質 f.内外面敲打痕？内外面爆ぜている
14-15	2面	研磨痕のある 常滑窯産甕片					b.暗灰色 白色粒多量、黒色粒・砂粒適量 良土 c.器表面 褐色 e.良好 f.内外面擦痕・縁辺敲打気味
14-16	2面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底部片				a.輪積成形 ヘラナデ 砂目平底 b.灰色 砂粒・白色粒多量、黒色粒・小石粒少量 粗土 c.器表面 褐色～暗褐色 e.軟質
14-17	2面	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	底～ 体部片				a.輪積成形 ヘラナデ b.灰色 砂粒・白色粒・黒色粒多量 やや良土 c.器表面 暗赤褐色 内面 灰色 d.内底灰緑色自然釉厚い e良好
14-18	2面	東播系 鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.青灰色 砂粒・白色粒・黒色粒多量 良土 c.器表面 青灰色 口縁部 暗黒色 e.軟質 良好

中世遺物観察表（2）

挿図番号	出土位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
				長さ	幅	厚さ	
14-19	2面	備前窯 擂鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ 条線8本単位 b.青灰色～暗褐紫色 微砂・白色粒・赤色粒 良土 c.器表面 暗褐紫色 e.堅緻
14-20	2面	備前窯 擂鉢	底部片				a.輪積成形 回転ナデ 外面 底部脇指ナデ 内面 条線8本以上単位 b.暗灰赤色 白色粒少量 緻密 c.器表面 暗茶褐色 d条線凹部暗灰茶色自然釉 e.良好 堅緻 f.内面使用による磨滅
14-21	2面	瀬戸窯 入子	口縁～ 底部1/4	(4.0)	(3.0)	0.75	a.ロクロ成形 外底ヘラ削り b.黄灰色 砂粒 良土 d.底部以外灰緑色半透明自然釉e.良好　硬質
14-22	2面	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 b.淡灰色 白色粒 良土 d.内面 一部自然釉 e.良好 堅緻
14-23	2面	瀬戸窯 入子	底部1/3		(4.6)		a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底軽いナデ b.淡灰色 微砂 良土 d.外面僅かに自然釉 e.良好 堅緻
14-24	2面	瀬戸窯 入子	底部完形		4.7		a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底ナデ b.灰色 砂粒微量　精良土 d.内面に僅かに灰白色～灰緑色自然釉 e.良好 硬質
14-25	2面	瀬戸窯 卸皿	口縁部片	(15.0 ～)			a.ロクロ成形b.灰黄色 微砂 良土 d.口縁～内面緑色透明灰釉 e.良好 硬質
14-26	2面	瀬戸窯 縁釉小皿	底部片				a.ロクロ成形 回転糸切り　b.淡灰色 微砂 気泡有り 良土 d.内底 茶緑色自然釉厚い e.良好 f.内底窯クソ付着
14-27	2面	瀬戸窯 折縁深皿	底部片				a.底部不定方向のヘラナデか 体部回転ヘラケズリ 内底面沈線3条まで確認 b.淡灰色 微砂 良土 d.淡緑色灰釉 ハケ塗り e.良好
14-28	2面	瀬戸窯 折縁深皿	底部片				a.底部回転ヘラケズリ後回転ヘラナデ？ 内底トチン痕　b.淡黄色 微砂・白色粒 良土 d.内面淡茶緑色灰釉ハケ塗り e.良好
14-29	2面	瀬戸窯 柄付片口	柄手片				a.ロクロ成形 取っ手貼付 b.灰色 良土d.緑色透明灰釉 光沢有り 貫入 漬け掛けか？ e.良好
14-30	2面	瀬戸窯 柄付片口	柄手片				a.ロクロ成形、取っ手貼付 b.灰色 良土 d.淡茶緑色透明灰釉 光沢有り 貫入 漬け掛けか？ e.良好
14-31	2面	龍泉窯 青磁蓋	体部片				a.ロクロ成形　外面中ほどに沈線 b.灰白色 精良堅緻 d.青緑色透明光沢有り 厚い施釉 f.酒会壺ないし香炉
14-32	2面	白磁 口兀皿	底部1/6		(5.8)		a.ロクロ成形 b.白色 精良堅緻 気孔あり d.灰白色透明 薄い施釉 外底部露胎
14-33	2面	白磁 口兀碗	底部1/4		(4.8)		a.ロクロ成形　b.白色 精良 気孔あり d.青白色透明 薄い施釉 高台～高台内露胎
14-34	2面	景徳鎮窯 青白磁皿	体部小片				a.ロクロ成形　内面 花文型押 b.白色 砂粒 精良堅緻 d.白青白色透明光沢有り 外面下半露胎
14-35	2面	景徳鎮窯 青白磁梅瓶	肩部片				a.ロクロ成形 外面文様不明片切彫り b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色透明光沢有り 施釉薄い
14-36	2面	景徳鎮窯 青白磁梅瓶	肩部片				a.ロクロ成形 外面 渦巻文櫛描き b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色半透明光沢有り 外面施釉 内面にも薄くかかる
14-37	2面	景徳鎮窯 青白磁梅瓶	胴部片				a.ロクロ成形 外面 渦巻文櫛描き b.灰白色 砂粒 精良堅緻 d.青白色透明鈍い光沢有り 外面施釉 内面薄くかかる f.二次焼成受け失透
14-38	2面	建州窯 天目茶碗	口縁部片				a.ロクロ成形b.暗灰色 砂粒 精良土 d.茶黒色不透明鉄釉 光沢有り e.硬質
14-39	2面	高麗青磁 瓶子	頸部1/6				a.ロクロ成形 外面 沈線2条 b.灰白色 砂粒 精良堅緻 c.内面 黄灰色 d.灰青色半透明鈍い光沢有り 薄く施釉
14-40	2面	男瓦				2.3 ～ 1.3	a.凸面縄目叩き 横位ナデ､凹面布目痕 側端 面取り b.胎芯 黒色～灰色 砂粒・雲母・赤色粒 やや粗土 c.器表面 灰色～灰白色 e.良好
14-41	2面	女瓦				2.8 ～ 1.4	a.凹面 離れ砂、弱い布目痕、凸面 平行状叩目微かに残る 側端2段面取り b.胎芯 灰白色 砂粒・白色粒・小石粒 やや粗土 c.器表面 黒～灰白色 e.良好

中世遺物観察表（3）

挿図番号	出土位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
				長さ	幅	厚さ	
15-1	2面 土坑1	かわらけ	口縁～ 底部1/6	(7.6)	(4.0)	(2.1)	a.ロクロ成形 内底ナデ b.白針・黒色粒 良土 c.にぶい淡橙色 e.やや甘い f.外面ロクロ目強い
16-1	3面	かわらけ	底部全		6.3	1.2～	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底ナデ b.微砂多量、金雲母・白針適量 砂質良土 c.灰褐色 e.やや良好 f.体部打ち欠きか？円板状に遺存
16-2	3面	かわらけ	底部全		7.5		a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底に2回以上ナデ b.微砂･雲母･赤色粒･白針･土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
16-3	3面	かわらけ	口縁～ 底部1/4	(8.0)	(6.0)	1.5	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底ナデ b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-4	3面	かわらけ	口縁～ 底部1/4	(7.5)	(5.5)	2.6	a.ロクロ成形 内底ナデ b.黒色粒多量、白針少量、土丹粒 弱砂質 やや粗土 c.橙色 e.良好
16-5	3面	かわらけ	口縁～ 底部1/5	(7.6)	(4.6)	1.5	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底2～3回ナデ b.微砂・雲母・赤色粒・白針 やや良土 c.黄橙色 e.良好 硬質
16-6	3面	かわらけ	底部全		4.0		a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底2～3回ナデ b.微砂・金雲母・白針、土丹粒少量 やや粗土 c.明橙褐色 e.良好 硬質
16-7	3面	かわらけ	底部片				a.ロクロ成形 内底未調整 b.赤色粒多量、白針少量 弱粉質 良土 c.橙色 e.良好 f.底径8cm程度かそれ以上
16-8	3面	常滑窯 甕	口縁部片				a.輪積成形 b.白灰色 砂質 長石細粒含む やや粗土 c.器表面 暗茶色 d.口縁部 自然釉 剥げて白色部分のみ残存 e.良好 堅緻
16-9	3面	常滑窯 甕	口縁部片	縁帯幅1.8			a.輪積成形 b.灰色砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒　粗土 c.器表面 褐色 d.口縁部濃緑色自然釉 e.硬質
16-10	3面	研磨痕のある 常滑窯産甕片					b.灰色 微砂・白色粒 良土 c.内面 暗茶色 d.外面灰黒緑色自然釉剥離 e.良好 f.内面縁辺の一部擦痕
16-11	3面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.暗灰青色 砂粒・白色粒・黒色粒 やや粗土 e.軟質
16-12	3面	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ 高台周辺回転ヘラ削り 付け高台 b.暗灰色 砂粒・白色粒・黒色粒・小石粒 粗土 d.内面 灰茶緑色自然釉 e.軟質
16-13	3面	産地不明 壺	底部片				a.内面ロクロ目強く残る 回転ヘラナデ 付高台 b.灰色 透明粒僅かに含む 緻密砂質土 c.器表面 灰茶色 d.内面灰白色自然釉 e.良好 硬質 f.東遠系か？
16-14	3面	東播系 鉢	口縁部片				a.輪積成形 回転ナデ b.胎土 青灰色 微砂・白色粒・小石粒・黒色粒 良土 c.器表面 青灰色 口縁部 灰黒黄色 e.良好 軟質
16-15	3面	東濃型 山茶碗	口縁部片				a.ロクロ成形 b.淡灰色 微砂 良土 d.口縁～内面淡黄緑色半透明の自然釉が僅か e.良好 硬質
16-16	3面	東濃型 山茶碗	口縁部片				a.ロクロ成形b.灰白色 微砂・白色粒　精良土 d.内面～外面に茶緑色不透明の自然釉 e.良好 硬質
16-17	3面	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 b.灰黄色 微砂 良土 d.口縁部灰緑色半透明自然釉 e.良好 硬質
16-18	3面	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 口縁部ヘラ押え b.灰褐色 微砂 精良土 d.外面 灰緑色透明自然釉 e.硬質 f.輪花型
16-19	3面	瀬戸窯 柄付片口	注口				a.手づくね成形 b.淡灰色 良土 d.黄緑色透明 光沢有り 貫入僅か 漬け掛けか？ e.良好
16-20	3面	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	底部1/3		(3.6)		a.ロクロ成形 b.淡灰色 精良堅緻 気孔あり d淡青緑色透明光沢あり 厚い施釉、高台内薄い施釉　畳付露胎 f.割れ口周辺打痕あり
16-21	3面	滑石鍋 転用製品		2.7	2.2	1.4～2.2	a.切断痕・刃物痕 b.明灰色
16-22	3面	砥石		2.5～	4.6～		c.青灰色　鳴滝（奥殿）仕上砥
16-23	3面	砥石	不明	4.4～	2.6～	0.7～0.5	c.淡褐色　鳴滝産　仕上砥
16-24	3面	軽石		5.8～	8.3～	3.0～2.5	c.白色 表面 淡灰黄色 f.表裏凹面擦痕あり

中世遺物観察表（4）

挿図番号	出土位置	種別	残存値	寸法			観察項目
				口径	底径	器高	a.成形・整形 b.胎土・素地・材質 c.色調 d.釉調 e.焼成 f.備考
				長さ	幅	厚さ	
16-25	3面	加工骨	残片	3.4 ～	1.95 ～	0.9 ～	a.刃物痕複数　b.部位不明 牛または馬の骨可能性
16-26	3面	加工骨	残片	3.7 ～	2.2 ～	0.3 ～ 0.5	a.上下端部切断痕 b.鹿の角
16-27	3面	加工骨	残片	10.0 ～	2.9 ～	0.25～0.6	a.表面 刃物痕多数 b.部位及び動物不明
17-1	4面	かわらけ	体部～底部1/4		(7.8)	(3.1)	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・土丹粒・黒色粒 やや粗土 c.淡褐色 e.やや甘い
17-2	4面	木製品 蓋	内径1/3	外径 (15.5)	内径 (13.0)	0.5	
17-3	4面	木製品 曲物蓋	内径1/3	外径 (14.2)	内径 (12.2)	0.6	a.桜皮紐貫通
17-4	4面	木製品 円板	両端部欠損	外径 (11.6)		0.5	a.中心に径1.0cmの穿穴
17-5	4面	木製品 用途不明	一部欠損	20.6	2.8	0.7	a.片面凹みあり　背面上部・下部に枘穴状の切り込み
17-6	4面	木製品 部材	全	3.2	3.7	2.6	a.上下端部切断痕
17-7	4面	加工骨	残片	3.7 ～	1.4 ～	1.4 ～	a.上端部切断痕・表面刃物痕 b.鹿の角 f.摩耗著しい
18-1	表土	かわらけ	底部		7.0 ～		a.ロクロ成形 外底糸切り痕・線状圧痕 内底ナデ b.赤色粒・白針 粉質 良土 c.にぶい淡橙色 e.やや甘い 軟質
18-2	表土	かわらけ	完形	7.1	4.8	1.6	a.ロクロ成形 外底糸切り痕 内底に2～3回ナデ b.微砂･雲母･赤色粒･白針･土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
18-3	表土	常滑窯 甕	肩部片	6.5 ～	3.2 ～	0.8 ～ 1.3	a.輪積成形 押印文 b.黄灰色 砂粒・白色粒・褐色粒多量 小石少量 やや粗土 c.内面灰褐色 d.外面灰緑色 降灰
18-4	表土	瀬戸窯 緑釉小皿	口縁部1/5	(9.0)			a.ロクロ成形 b.黄灰色 砂粒 良土 d.内面～外面上部灰緑色不透明灰釉 漬け掛け f.内外面釉剥離
18-5	表土	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	底部2/3		5.2		a.ロクロ成形 外面 鎬蓮弁文片切彫り 内底 蓮華文印刻 b.灰色 精良堅緻 d.青緑色半透明鈍い光沢有り 薄い施釉 高台畳付～高台内露胎
18-6	表土	龍泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	底部1/4		4.0		a.ロクロ成形　外面 鎬蓮弁文片切彫り b.灰色 緻密 d.暗灰緑色透明光沢有り 薄い施釉　高台畳付～高台内露胎 f.内面割れ口周辺打痕あり
18-7	表土	軽石	一部欠損	4.2	3.8 ～	4.3	b.白色　c.表面 暗灰黒色 f.凹面擦痕
18-8	攪乱	伊万里窯 染付徳利	完形	1.3	3.6	11.5	a.ロクロ成形 b.白色 精良 d.染付 e.良好
18-9	側溝	かわらけ	略完形	7.8	5.0	2.0	a.ロクロ成形 外底糸切り痕・板状圧痕 内底2～3回ナデ b.微砂・金雲母・赤色粒・白針・土丹粒 やや粗土 c.灰褐色 e.やや甘い f.口唇部タール付着 灯明皿
18-10	側溝	常滑窯 壺	頸部～肩部片				a.輪積成形 b.灰色 白色粒・黒色粒・砂粒、良土 d.内面頸部～外面 灰緑色自然釉 e.硬質
18-11	側溝	瀬戸窯 入子	口縁部片				a.ロクロ成形 b.黄白色 微砂・白色粒 良土 d.口縁部灰緑色自然釉 e.良好 硬質
18-12	側溝	龍泉窯 青磁	体部片				a.ロクロ成形 外面 耳ないし取手貼付　b.灰白色 精良 気孔有り d.緑青色半透明 厚い施釉 貫入あり f.器種不明
18-13	釜場	白磁 口兀皿	底部片				a.ロクロ成形　b.白色 精良堅緻 気孔有り d.灰白色透明 薄く施釉

表８　古代遺物観察表（１）

図 No	種　別	出土位置	観察内容　法量：単位＝cm　(000)＝推定値　000～＝残存値
19－ 1	土師器坏	4 面	**残存値**：口縁部 1/7　**法量**：口径（12.6）稜径（12.6）器高 2.2～　**色調**：暗い橙色　**胎土**：細砂・微細雲母少量含む良土　**焼成**：硬質　**せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面底部 - ヘラケズリ　**備考**：
19－ 2	土師器坏	4 面	**残存値**：口～底部片　**法量**：－　**色調**：淡褐色　**胎土**：粗砂少量含む粉質良土　**焼成**：良好 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面底部 - ヘラケズリ　**備考**：
19－ 3	土師器坏	排水溝	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：暗褐色　**胎土**：細砂多い粗土、白針少量　**焼成**：軟質 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面底部 - ヘラケズリ　**備考**：内外面 - 黒彩
19－ 4	土師器坏	3 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：長石粒子多め、小礫少量　**焼成**：普通 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面底部 - ヘラケズリ　内面口唇部 - 沈線一条　**備考**：内外面 - 赤彩
19－ 5	土師器坏	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：橙色　**胎土**：黒砂多い弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面底部 - ヘラケズリ　**備考**：内面 - 放射状暗文
19－ 6	土師器坏	4 面	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：淡褐色　**胎土**：細砂・白針少量含む緻密良土　**焼成**：硬質 **せいけい**：内面 - ナデ　**備考**：内面 - 放射状・螺旋状暗文
19－ 7	土師器坏	3 面	**残存値**：口～体部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：砂粒多い　**焼成**：良好 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面体部 - ヘラケズリ　**備考**：
19－ 8	土師器坏	排水溝	**残存値**：口～底部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：細砂少量　**焼成**：良好 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面体～底部 - ヘラケズリ　**備考**：
19－ 9	土師器坏	4 面	**残存値**：口 1 部～底部 1/4　**法量**：口径（13.4）底径（8.0）器高 3.3～　**色調**：淡橙色　**胎土**：細砂含む　**焼成**：良好 **せいけい**：内面～外面口縁部 - ナデ　外面体部 - 指頭圧痕　外面底部 - ヘラケズリ　**備考**：
19－10	土師器坏	排水溝	**残存値**：口縁部 1/6　**法量**：口径（9.9）器高 3.2～　**色調**：にぶい淡橙色　**胎土**：橙色粒多い緻密良土　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　外面体部下半 - ヘラケズリ　**備考**：内面 - 山形暗文
19－11	土師器坏	4 面	**残存値**：体部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：橙色粒含む緻密良土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　外面体部下半 - ヘラケズリ　**備考**：内面 - 放射状暗文
19－12	土師器坏	排水溝	**残存値**：底部 1/4　**法量**：底径（4.2）　**色調**：淡橙色　**胎土**：橙色粒多い緻密良土　**焼成**：良好　**せいけい**：ロクロ成形　外面体部下半～底部 - ヘラケズリ　**備考**：内面体部 - 放射状暗文　内底周縁 - 溝状　内底 - 墨書あり
19－13	土師器坏	4 面	**残存値**：底部 1/6　**法量**：底径（6.0）　**色調**：淡橙色　**胎土**：緻密良土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り→周縁ヘラケズリ？　**備考**：
19－14	須恵器蓋	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰色　**胎土**：白色微粒子極少量含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－15	須恵器蓋	4 面	**残存値**：体部 1/4　**法量**：－　**色調**：灰白色（胎芯 - 黒灰色）　**胎土**：白色微粒子極少量含む弱粉質土　**焼成**：軟質 **せいけい**：ロクロ成形　天井部 - 回転ヘラケズリ→摘み貼り付け後回転ナデ　**備考**：
19－16	須恵器蓋	4 面	**残存値**：摘み全　**法量**：摘み径 2.7　**色調**：灰色　**胎土**：白色粒子・白針含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　接着部 - 静止糸切り→接着用粘土紐貼付　**備考**：
19－17	須恵器蓋	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：青灰色（胎芯 - 灰赤色）　**胎土**：白色微粒子極少量含む緻密砂質土　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：外面口縁部 - 黒変（重ね焼きの痕跡か）
19－18	須恵器蓋	3 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：明灰色　**胎土**：弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－19	須恵器坏	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：暗灰色　**胎土**：白色粒子多い砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－20	須恵器坏	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：暗青灰色　**胎土**：白色粒子含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：外面 - 黒変（火表側か）
19－21	須恵器坏	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：褐灰色　**胎土**：白針多く含む弱粘質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－22	須恵器坏	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰色　**胎土**：白色粒子少量含む緻密良土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－23	須恵器坏	排水溝	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰色　**胎土**：白色粒子少量含む緻密良土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：外面口縁部 - 黒変（重ね焼きの痕跡か）
19－24	須恵器坏	2 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰褐色　**胎土**：白針多く含む弱粘質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：

古代遺物観察表（2）

図 No	種　別	出土位置	観察内容　法量：単位＝cm　(000)＝推定値　000～＝残存値
19－25	須恵器坏	3面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：明灰色　**胎土**：白色粒子含む弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－26	須恵器坏	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：明灰色　**胎土**：白色粒子多く、白針少量含む弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－27	須恵器坏	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：暗灰色　**胎土**：白色粒子含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－28	須恵器坏	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰色　**胎土**：白色粒子・白針含む弱粘質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－29	須恵器坏	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰褐色　**胎土**：白色粒子多い弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－30	須恵器 高台付坏	排水溝	**残存値**：体部片　**法量**：－　**色調**：明灰色　**胎土**：白色粒子少量含む弱砂土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－31	須恵器坏	4面	**残存値**：体～底部片　**法量**：－　**色調**：明灰色　**胎土**：細砂少量含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部(～体部下位）回転ヘラケズリ？→ナデ　**備考**：底部調整詳細不明
19－32	須恵器坏	4面	**残存値**：底部 1/4　**法量**：底径（8.0）　**色調**：灰色　**胎土**：白針少量含む砂質良土　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 糸切り→回転ヘラケズリ→周縁～体部下位ヘラケズリ　**備考**：
19－33	須恵器坏	排水溝	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：褐灰色　**胎土**：白針多く、小礫少量含む弱粘質良土　　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り→周縁回転ヘラケズリ　**備考**：
19－34	須恵器坏	4面	**残存値**：底部 3/5　**法量**：底径 8.9　**色調**：白灰色　**胎土**：砂粒・白針少量含む含む弱粉質粗土　**焼成**：軟質 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り→周縁回転ヘラケズリ　**備考**：
19－35	須恵器坏	4面	**残存値**：底部 1/4　**法量**：底径（8.3）　**色調**：白灰色　**胎土**：砂粒・小礫少量含む弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り　体部下位 - 回転ヘラケズリ　**備考**：
19－36	須恵器坏	排水溝	**残存値**：底部 1/3　**法量**：底径（6.0）　**色調**：灰色　**胎土**：砂粒・白針含む含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り無調整　**備考**：
19－37	須恵器坏	排水溝	**残存値**：底部 1/4　**法量**：底径（6.4）　**色調**：灰白色　**胎土**：砂粒含む含む弱粉質土　**焼成**：軟質 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り無調整　**備考**：
19－38	須恵器坏	4面	**残存値**：体～底部 1/4　**法量**：底径（6.5）　**色調**：にぶい橙色　**胎土**：白色粒子、白針極少量含む弱砂質土 **焼成**：硬質　**せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り無調整　**備考**：酸化焔焼成（焼成不良）
19－39	須恵器坏	4面	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：にぶい淡褐色　**胎土**：砂粒多く、白針極少量含む砂質粗土　**焼成**：軟質 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転糸切り無調整　**備考**：酸化焔焼成（焼成不良）
19－40	灰釉陶器 碗	4面	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：にぶい淡褐色　**胎土**：砂質緻密土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：内面 - 淡緑色灰釉ハケ塗り
19－41	土師器甕	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：にぶい淡橙色　**胎土**：黒色輝石・白針多め弱粘質土　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：外面口縁部 - 黒変（重ね焼きの痕跡か）
19－42	土師器甕	3面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰白色　**胎土**：細砂含む弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－43	土師器甕	3面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：暗褐色　**胎土**：砂粒含み、白針多い弱粘質土　**焼成**：堅緻 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－44	土師器甕	排水溝	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡褐色　**胎土**：金雲母少量含む砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－45	土師器甕	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡褐色　**胎土**：砂粒含む弱粉質土　**焼成**：普通 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－46	土師器甕	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：橙色粒子多く、白針含む砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：内外面 - ナデ　口唇部 - 面取り　**備考**：
19－47	土師器甕	4面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰褐色　**胎土**：金雲母少量含む砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－48	土師器甕	釜場	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色（胎芯 - 暗灰色）　**胎土**：粒子多め、白針少量含む弱粘質土　**焼成**：良好 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：

古代遺物観察表（3）

図 No	種　別	出土位置	観察内容　法量：単位＝cm　(000)＝推定値　000～＝残存値
19－49	土師器甕	排水溝	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡褐色　**胎土**：細砂少量、金雲母極少量含む弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－50	土師器甕	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：細砂極少量含む緻密良土　**焼成**：硬質 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－51	土師器甕	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：暗灰褐色　**胎土**：微細雲母含む弱砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：内外面 - ナデ　**備考**：
19－52	土師器甕	排水溝	**残存値**：底部 3/7　**法量**：底径（6.4）　**色調**：橙色（胎芯 - 黒灰色）　**胎土**：粗砂・小礫含み、白針少量含む弱粘質土 **焼成**：良好　**せいけい**：内外面 - ヘラナデ　**備考**：
19－53	土師器甕	4 面	**残存値**：底部 1/6　**法量**：底径（6.4）**色調**：白橙色　**胎土**：細砂含み、金雲母少量含む砂質土　**焼成**：軟質 **せいけい**：内外面 - ナデ　外底部 - 木葉痕　**備考**：
19－54	土師器甕	4 面	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：淡橙色　**胎土**：細砂多い砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：内外面 - ナデ　外底部 - 木葉痕　**備考**：
19－55	土師器甕	4 面	**残存値**：底部片　**法量**：－　**色調**：淡褐～淡橙色　**胎土**：黒砂・橙色粒子多め弱砂質土　**焼成**：普通 **せいけい**：内外面 - ナデ　外底部 - 木葉痕　**備考**：
19－56	不明	釜場	**残存値**：小片　**法量**：－　**色調**：灰白色　**胎土**：砂粒少量含む砂質土、軽質　**焼成**：軟質 **せせいけい**：外面 - ハケメ→平行線状の叩き？　内面 - 指頭ナデ　**備考**：
19－57	須恵器甕	3 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：灰色　**胎土**：砂粒・白針極少量含む砂質良土　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：内面 - 降灰
19－58	須恵器甕	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：明灰色　**胎土**：砂粒少量、白針極少量含む砂質土　**焼成**：硬質 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：内面 - 降灰
19－59	須恵器甕	4 面	**残存値**：口縁部片　**法量**：－　**色調**：白灰色　**胎土**：細砂極少量含む弱粘質土　**焼成**：普通 **せいけい**：ロクロ成形　**備考**：
19－60	須恵器壺	4 面	**残存値**：底部 1/3　**法量**：底径（12.2）　**色調**：灰色　**胎土**：白色粒子多く、白針極少量含む砂質土　**焼成**：良好 **せいけい**：ロクロ成形　外面底部 - 回転ヘラケズリ？→高台貼付け→ロクロナデ　**備考**：
19－61	須恵器甕	4 面	**残存値**：胴部片　**法量**：－　**色調**：灰白色　**胎土**：砂粒少ない弱粘質土　**焼成**：普通 **せいけい**：外面 - 平行叩き目　内面 - 同心円状の当て具痕　**備考**：
19－62	須恵器甕	釜場	**残存値**：胴部片　**法量**：－　**色調**：明灰褐色　**胎土**：砂粒少ない弱粘質土　**焼成**：良好 **せいけい**：外面 - 平行叩き目　内面 - ナデ　**備考**：
19－63	須恵器甕	4 面	**残存値**：胴部片　**法量**：－　**色調**：褐白色　**胎土**：小礫極少量含む弱粘質粗土　**焼成**：普通 **せいけい**：外面 - 平行叩き目　内面 - 同心円状の当て具痕→ナデ　**備考**：
19－64	須恵器甕	4 面	**残存値**：胴部片　**法量**：－　**色調**：暗青灰～黒灰色　**胎土**：白色粒子多い粘質緻密土　**焼成**：硬質 **せいけい**：外面 - 平行叩き目→ハケメ　内面 - 同心円状の当て具痕　**備考**：
19－65	須恵器甕 転用硯	排水溝	**残存値**：完形　**法量**：縦 10.7　横 7.7　厚 1.0～1.2　**色調**：明灰色　**胎土**：白針極少量含む弱砂質良土　**焼成**：硬質 **せいけい**：外面 - 平行叩き目→ナデ　内面 - 同心円状の当て具痕→擦痕　**備考**：胴部片転用、内面使用

第五章　まとめ

第１節　中世

調査では3時期の中世面が調査されている。出土した遺物は少なく、詳細な年代を検討するには至らない。全体的には13世紀後半から14世紀代の資料が中心である。その他、第2面・第3面の覆土に混入して、13世紀初頭から前半、あるいは12世紀末までさかのぼる遺物が少量出土しているが、概期の遺構は検出されておらず、量的にもこの地に積極的な人的活動があったことを示すものとは思われない。図化がかなわなかった小片ではあるが、第3面構成土から出土した糸切りかわらけには、粉質気味で薄手の個体も含まれており、13世紀半ばまで遡れる要素は見当たらない。調査地の開発年代は13世紀後葉以降と思われ、各面の年代は中世第3面が13世紀後葉から14世紀前半、中世第2面が14世紀代で中葉以降か、中世第1面は14世紀後半以降と想定される。

中世第2面・中世第3面では明確な生活面と、それに伴う遺構が発見されている。第3面の建物1・溝1は、第2面で検出されている土坑1や、2口のピット（P1・P2）の並びと近しい軸方向を示している。第3面の建物1と柱穴列1は直接の切り合いを持たず、新旧関係は不明といえるが、柱穴列1をより旧い時期の所産と捉え、続く建物1・溝1の時期に変更された地割りが、第2面の時期まで継続されるという時間の流れを想定できるかもしれない。

今回調査で出土した遺物うち、不自然と思える痕跡が認められた常滑1点（図14－14）、舶載磁器2点（図16－20、図18－6）について補足を加えておく。図14－14は内外の器表面がはじけたように剥がれているもので、先が細く硬いもので、数度にわたり器表に正対する方向から打撃されたものと見える。器表面にこういった破損を持つ陶片は、市内遺跡で時に見かけるようでもあり、今回調査で出土した他の常滑片にも見受けられたが、その度合いは偶然と見える程度に収まっている。図14－14についてはその痕跡が著しく、やや不自然なものと見えるため実測図・写真（写真図版6）を掲載した。2点の磁器は共に青磁碗の残片で、割れ口に沿って小さな打撃痕が連続するものである。打撃痕はガラス質の石器に見られるような、打痕、放射状の波紋を残す剥離部分が連続するもので、通常目にする磁器片の割れ口とは異なっている。3点の痕跡とも加工痕とするには、その目的もわからず、根拠に乏しいものだが、遺物整理の段階で気になった点として上げておく。

坂ノ下遺跡は、中世には「前浜」と呼ばれた鎌倉丘陵部に囲まれる海浜地域の西端に位置する。本遺跡東側に広がる長谷小路周辺遺跡、由比ガ浜南遺跡では、砂丘上に竪穴建物が連なる様子や、葬送の地としての利用、職能民の存在を伺わせる遺構・遺物の発見など、土地の社会的な性格が明らかになってきているが、坂ノ下寄りの西側での調査事例は少なく、稲瀬川西岸から本遺跡にかけて一帯の地理には不明な点が多いと言える。今回の調査結果は、確実な広がりを持つ中世期の生活面の検出や建物址の発見など、この地の性格を伺う手がかりになる内容と思われる。

第２節　古代

古代の確実な遺構は調査区北東端の壁面で確認された落ち込みのみで、全容がわからず時期・性格は不明である。

遺物は7世紀から9世紀代にかけてのものがテン箱にして約1箱、523点出土している。内訳は土師器坏145点、土師器甕278点、須恵器蓋9点、須恵器坏50点、須恵器壺甕類が38点、須恵器甕転用硯1点、灰釉陶器1点、須恵器かと思われる不明品1点である。その他、古墳時代中期頃の所産と思われる赤彩

を施された小壺の小片が1点出土している。土師器坏は相模型成立期寸前の扁平な丸底形態をとるものが79点と最も多く、相模型坏は40点で胎土や形態から8世紀代に収まるものに見える。土師器甕はナデ調整のもの255点、ケズリ調整のもの19点でその内武蔵型が1点、ハケ調整のもの4点で、大半が相模型である。須恵器は坏の底部調整が明らかなものが20点あり、ヘラケズリ調整が施されていると考えられるものが13点､回転糸切り無調整のものが7点である。須恵器壺甕類のうち､実測のかなわなかったものには長頸瓶の頸部片、フラスコ型瓶の胴部片が含まれている。須恵器は南比企産を始めとする北武蔵地方の製品が主体的に出土している。多くが御殿山操業以前のもので、坏の形態を見る限りでは、降ってもG37ないしG59窯式併行期あたりに収まるものである。調査地の中心的な年代は、7世紀末から8世紀代となり、前後の資料が少数加わる結果である。また、9世紀代は前半の資料に乏しく、後半は甲斐型坏、灰釉陶器といった移入品による組成となる点に注意を払っておきたい。

表9　中世遺物集計表

		1面	2面	2面遺構	3面	3面構成土	表土・攪乱、調査区内採集	計
かわらけ（灯明皿）	糸切り	18	228（1）	20	113	4	83（1）	466
	手づくね					1	3	4
土製品	瓦		2					2
	瓦質製品	高台部片1	瓦器皿1					2
	火鉢	1	4		1		1	7
	土錘		1					1
国産陶器	常滑	甕・壺類19	甕・壺類103	甕・壺類9	甕・壺類22		甕・壺類20	173
		片口鉢Ⅰ類1	片口鉢Ⅰ類4		片口鉢Ⅰ類3		片口鉢Ⅰ類1	9
		片口鉢Ⅱ類1	片口鉢Ⅱ類5		片口鉢Ⅱ類1		片口鉢Ⅱ類1	8
	尾張産	片口鉢2						2
	渥美		甕・壺類2		甕・壺類4		甕・壺類1	7
	備前		擂鉢2					2
	東播系		鉢1		鉢1			2
	山茶碗				東濃系2			2
	瀬戸	碗・皿類2	椀・皿類3 鉢類6 壺・瓶類4 入子5	壺・瓶類1	鉢類1 壺類1 入子2		皿類1 壺・瓶類4 入子1	31
舶載陶磁器	青磁（龍泉窯）	蓮弁文碗1	連弁文碗3 劃花文碗1 折縁鉢1 蓋1		蓮弁文碗1		蓮弁文碗3 双魚文鉢1 酒会壺1 不明1	14
	白磁	四耳壺1	口冗碗3 口冗皿2 四耳壺2		合子 or 紅皿1		口冗皿1	8
	青白磁		合子1 皿1 盤1 梅瓶5		梅瓶1 不明1		皿1 小壺1	12
	その他中国産		天目茶碗1 緑彩 or 二彩1					2
	高麗青磁		瓶子1					1
土器・土製品・陶磁器 計		47	393	30	155	5	125	755
石製品	砥石				2			2
	滑石製品				鍋転用品1			1
	使用痕のある軽石				1		1	2
木製品						5		5
骨製品					3	1		4
総計		47	393	30	162	11	126	769

▲ A. 調査前状況（北東から）

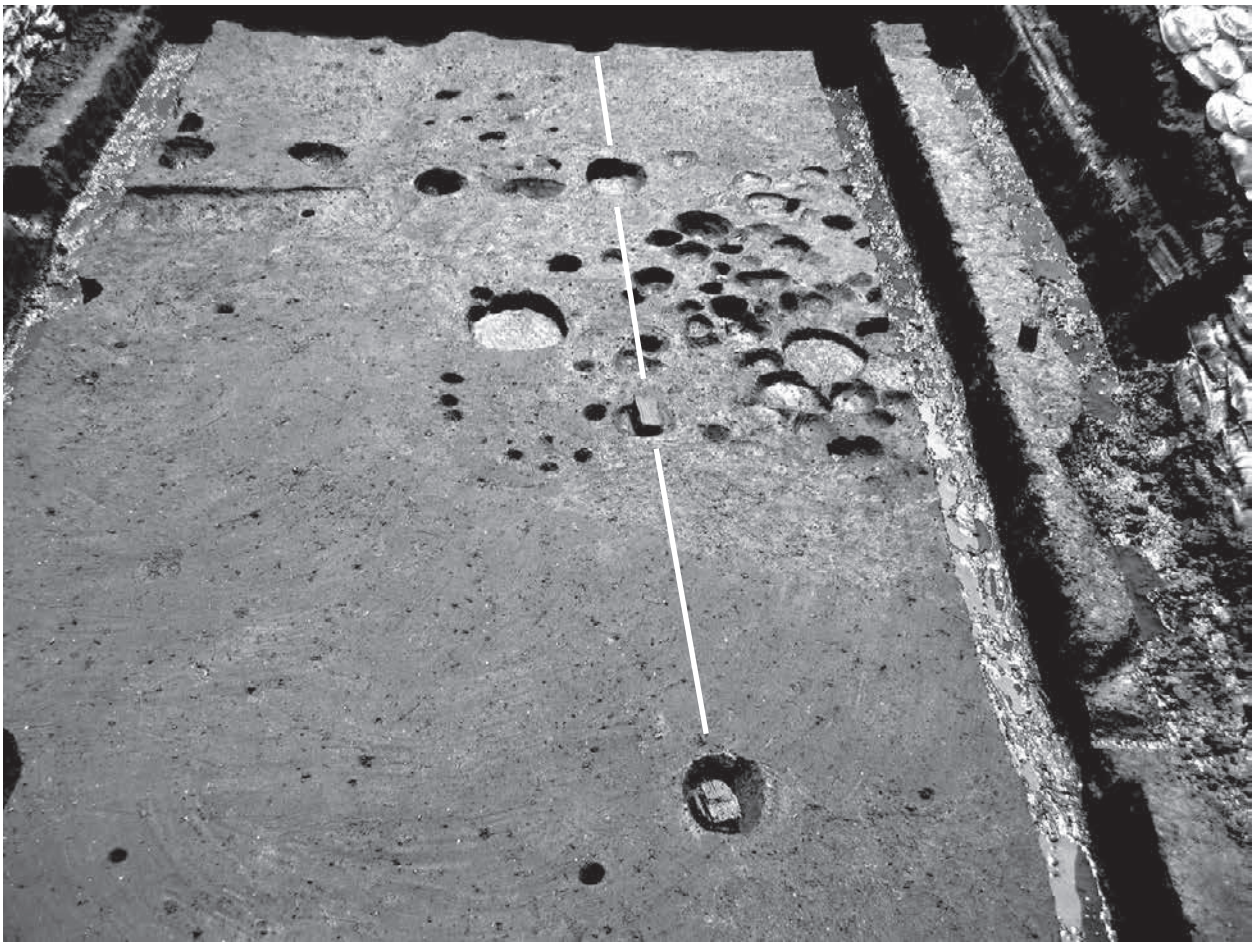
▲ B. 表土掘削終了後（北西から）

図版２

中世第１面（南東から）A. ▶

▼ B. ２面土坑１（東から）

▼ C. 中世第２面（北東から）



▲ A. 中世第３面（北から）

▲ B. ３面溝１（西から）

▲ C. ３面上出土獣骨

図版４

▲ A. 3 面建物 1（南から）

▲ B. 建物 1 P6（東から）

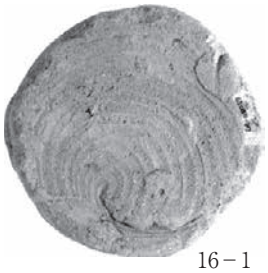
▲ C. 建物 1 P8（東から）

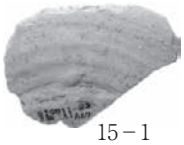
▲ A. 古代遺構確認面（北から）

▲ B. 調査区南壁土層（北から）

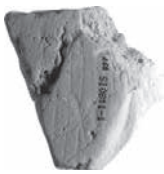
図版6

16－1

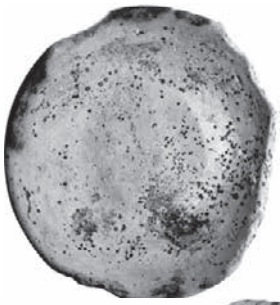



15－1

16－7


17－1

18－2

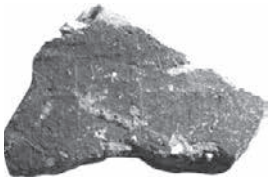


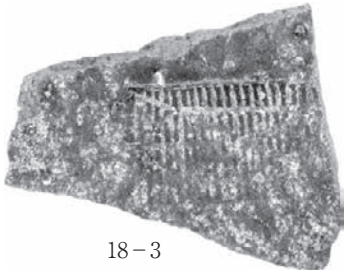
18－9

14－5

14－6

14－14


14－11

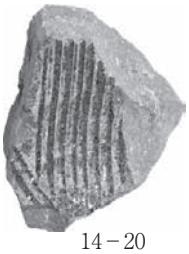

18－3

14－13

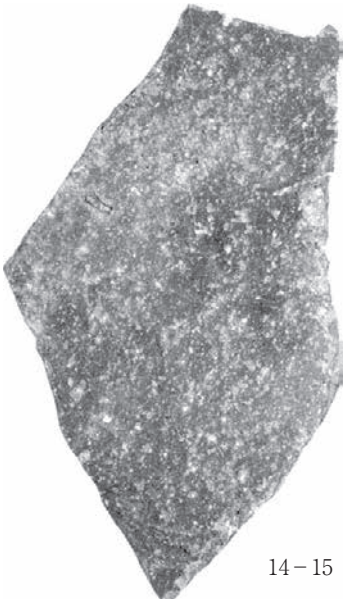
13－4

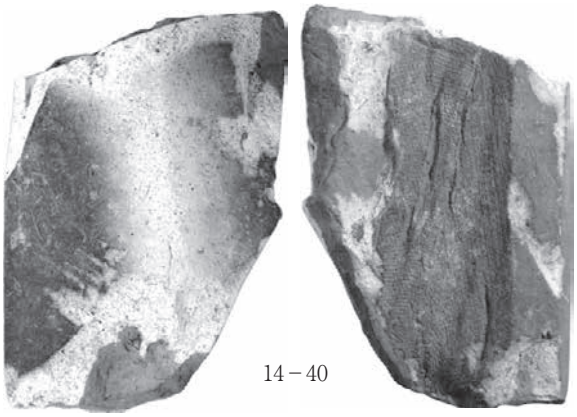
16－12

14－16


14－20

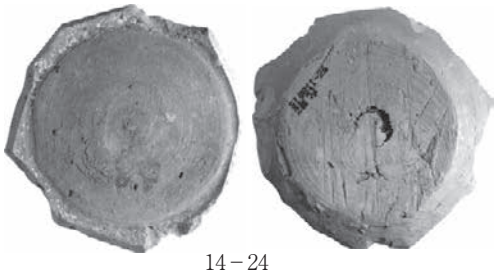
14－12

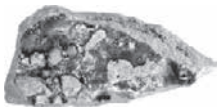

14－15


14－40

14－21

16－16


14－24


14－26

14－30

18－6

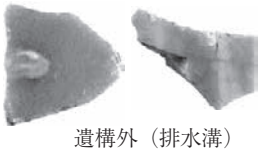
18－5

18－6

14－39

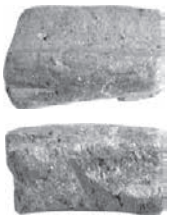
14－34

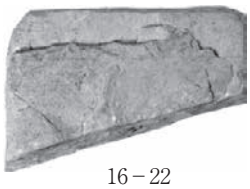
18－12


遺構外（排水溝）

16－20

14－38


16－21


16－22

18－7

16－24

16－25

16－26

17－7

19－6

19－10

19－60

19－12

19－16

19－32

19－56

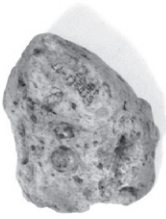
19－65

図版８

17－3

17－4

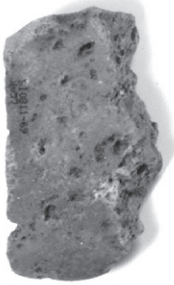
17－5



S－45

S－49

S－29



S－31

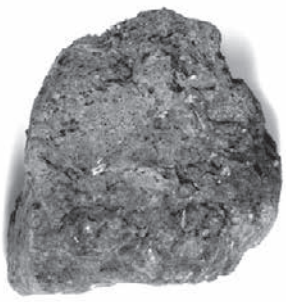
S－48

S－26

S－12

S－11

S－34



S－36

1 面

2 面

2 面土丹地形

3 面

3 面溝１　馬

遺構外（排水溝）

3 面 X3,Y3 付近出土獣骨

図版10

遺構外（排水溝）出土獣骨

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成２５年度調査報告
巻次	３０（第１分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	松吉大樹・原　廣志／伊丹まどか・松吉大樹／伊丹まどか・松吉大樹／馬淵和雄／ 沖元　道・馬淵和雄／沖元　道・馬淵和雄／森　孝子・赤堀祐子・松吉里永子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒２４８－８６８６　鎌倉市御成町１８番１０号
発行年月日	西暦２０１４年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
ずいせんじしゅうへんいせき 瑞泉寺周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字紅葉ヶ谷 ６７４番１	14204	338	３５° １９′ ２８″	１３９° ３４′ ２９″	20051108 ～ 20060118	56.00	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 二階堂字荏柄 ７６番８	14204	49	３５° １９′ ３１″	１３９° ３３′ ５１″	20060217 ～ 20060424	35.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町四丁目 １８５８番４	14204	231	３５° １８′ ５２″	１３９° ３３′ ３５″	20060501 ～ 20060607	10.50	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 雪ノ下四丁目 ５７０番１	14204	49	３５° １９′ ２４″	１３９° ３３′ ４４″	20060712 ～ 20060824	32.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）
だいけいじきゅうけいだいいせき 大慶寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 寺分一丁目 ９４３番２外	14204	361	３５° １９′ ５６″	１３９° ３１′ ２２″	20060919 ～ 20061102	56.10	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
ふくせんやぐらぐん 福泉やぐら群	神奈川県鎌倉市 今泉三丁目 ２９２番外	14204	447	３５° ２０′ ４５″	１３９° ３３′ １７″	20061115 ～ 20070105	63.90	個人専用 住宅 （杭基礎構造）
さかのしたいせき 坂ノ下遺跡	神奈川県鎌倉市 坂ノ下 ５０番３外	14204	217	３５° １８′ ４１″	１３９° ３２′ ０４″	20080813 ～ 20080919	48.00	個人専用 住宅 （地盤の柱状改良）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ずいせんじしゅうへんいせき 瑞泉寺周辺遺跡	遺物散布地	中世	礎石建物、掘立柱建物、土坑、溝、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、瓦、石製品、金属製品、骨製品等	
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	都市	中世	土坑、溝、柱穴列、柱穴、基壇状遺構	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、瓦、石製品、木製品、金属製品、土製品、古代遺物等	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	都市	中世	土坑、柱穴	かわらけ、舶載陶磁器、国産陶器、石製品、金属製品、土製品等	据え甕遺構が検出された。
おおくらばくふしゅうへんいせきぐん 大倉幕府周辺遺跡群	都市	中世	滑川旧河道	かわらけ、舶載磁器、国産陶器、瓦、石製品、金属製品、木製品等	
だいけいじきゅうけいだいいせき 大慶寺旧境内遺跡	社寺	中世	井戸、土塁状遺構、溝	かわらけ、国産陶器	
ふくせんやぐらぐん 福泉やぐら群	やぐら	中世	土坑、柱穴、溝	土師器皿、近世国産陶磁器、石製品	
さかのしたいせき 坂ノ下遺跡	都市	中世	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	かわらけ、舶載磁器、国産土器・陶器、土師器・須恵器・獣骨・軽石	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　30
平成 25 年度発掘調査報告
（第 1 分冊）

発行日　平成 26 年 3 月 31 日

編集・発行　　鎌倉市教育委員会
印　　刷　　芝浦エンジニアリング株式会社